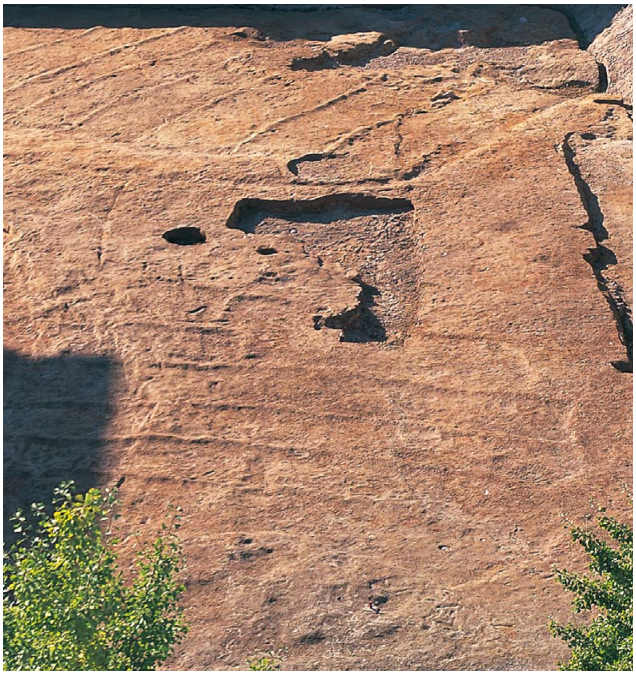
ISSN 1348-400

京都大学構内遺跡調査研究年報

2000年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

巻首図版



京都大学北部構内ＢＣ28区　弥生時代前期の水田遺構

序

京都大学の構内では，吉田キャンパスや各地の研究施設の敷地内に，すでに登録されている周知の遺跡があるが，桂地区の構内においても新たな整備が計画されており，該当する地域の遺跡の範囲や内容を把握する作業を進めている。

本年報は，2000年度における遺跡調査の報告と，それらの資料にもとづいた研究成果をまとめた紀要からなっている。第Ⅰ部で報告する２件の調査では，いずれも先史時代から近世にいたる間の，長い歴史を刻んだ豊富な資料を収集し，京都大学を中心とした北白川の地域史に新たな情報を加えている。

また，発掘と出土資料の調査を進めるとともに，学内，学外の多数の分野から協力を得て，歴史的環境を復元するための具体的な蓄積をはかっており，その一端は本年報にも反映されている。第Ⅱ部の紀要は，吉田キャンパスの遺跡の形成と深く関係している，弥生時代の土石流堆積物に関する考察で，従来の調査の成果に新たな分析を加えて復元したものである。その一つとして，遺跡の堆積物に関するご指導をいただいている理学研究科地質鉱物学教室の増田富士夫教授，および産業技術総合研究所の田村享氏から，土石流の形成と堆積過程の地質学的な分析の成果をまとめていただいた。また第３章のプラント・オパール分析については皇學館大学の外山秀一教授から，花粉分析では上中央子氏から詳細な知見をいただいた。ご高評をお願いしたい。

おわりに，これらの調査を進める上でご指導ご助言をいただいた，学内学外の関係者および調査機関，とりわけ，発掘にあたって多くのご協力を賜った，施設部，理学部，学術情報メディアセンターの関係各位には，ここに厚くお礼申し上げる次第である。

2005年３月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

鎌 田 元 一

例　　言

1　本年報は，京都大学構内で2000年４月１日から2001年３月31日までに発掘，整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告，および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。

2　国土座標にしたがって一辺50ｍの方形の地区割りをして，遺跡の位置を表示した。

3　層位と遺構の位置については，国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系，ｘ＝－108,000　ｙ＝－20,000）が（Ｘ＝2,000　Ｙ＝2,000）となる京都大学構内座標により表示した。

4　遺構の略号は，奈良文化財研究所の方式にしたがって，井戸：ＳＥ，土坑：ＳＫのように表示し，各調査ごとに通し番号を１から付した。

5　遺物には，遺跡の調査名を示すローマ数字と，調査ごとの通し番号を１から付した。この遺物番号は，本文，実測図，写真を通じて表示を統一した。

Ⅰ：京都大学吉田南構内ＡＮ22区の発掘調査

Ⅱ：京都大学北部構内ＢＣ28区の発掘調査

（例　Ⅰ１：京都大学吉田南構内ＡＮ22区出土遺物１番）

6　原則として，遺物の実測図は縮尺1/4，遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは，それぞれに縮尺を明記した。

7　参考文献は，本文中に〔著者名　発表年〕の形式で表わし，巻末に一括した。

8　古代・中世土師器の型式分類は，とくにことわりがない場合，『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。

9　本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また，遺物の撮影はそれぞれ報告者が担当した。

10　編集は，千葉豊が担当し，清水芳裕，伊藤淳史，冨井眞，吉江崇，阪口英毅，磯谷敦子，北尾敬子，柴垣理恵子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度

目　　次

第Ⅰ部　2000年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　2000年度京都大学構内遺跡調査の概要……1

1　調査の経過……1

2　調査の成果……1

第２章　京都大学吉田南構内ＡＮ22区の発掘調査……3

1　調査の概要……3

2　層　　位……6

3　縄文時代～弥生前期の遺跡……7

4　弥生中期の遺跡……22

5　古墳時代の遺物……36

6　古代の遺跡……39

7　中世の遺跡……40

8　古代～中世の瓦塼類……98

9　近世・近代の遺跡……112

10　小　　結……120

第３章　京都大学北部構内ＢＣ28区の発掘調査……133

1　調査の概要……133

2　層　　位……134

3　弥生前期以前の遺跡……139

4　弥生前期水田のプラント・オパール分析……173

5　弥生中期～近世の遺跡……175

6　ＳＸ５の原位置論的検討……194

7　中近世層の花粉分析……203
8　小　　結……205

参　考　文　献……209

京都大学構内遺跡調査要項……214

報 告 書 抄 録……222

第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要ⅩⅥ

京都白川の弥生前期末の土石流

1　はじめに……225
2　土石流堆積の特徴……226
3　白川土石流の時期と規模……230
4　供給地の様相……238
5　類似の土砂移動現象……244
6　白川土石流の直接的原因……246
7　隣接水系や下流の状況：予察……248
8　土石流以後の白川：予察……251
9　おわりに……253

砂質土石流堆積物の粒度特性

－京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）－

1　はじめに……263
2　既往調査の概略……264
3　砂質土石流堆積物……264
4　試料採取と粒度解析法……268
5　粒度解析の結果と解釈……268
6　級化構造と堆積過程……272

7　おわりに……274
図　　版……巻末

図　版　目　次

巻首図版　京都大学北部構内ＢＣ28区　弥生時代前期の水田遺構
図版１　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
図版２　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
1　表土除去後の調査区全景（北西から）
2　中世遺構完掘後の調査区全景（北西から）
図版３　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
1　扇状地末端の崖面（南から）　2　８層上面の溝状遺構（西から）
3　溝ＳＤ24土器出土状況（西から）　4　溝ＳＤ24土器出土状況（東から）
5　溝ＳＤ23土器出土状況（北から）　6　溝ＳＤ31土器出土状況（南から）
図版４　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
1　調査区西半中世遺構（南から）　2　中世東西溝群（西から）
3　石敷ＳＸ101（北から）　4　瓦溜ＳＸ24（北から）
5　埋甕ＳＸ38（西から）　6　井戸ＳＥ24（西から）
図版５　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
1　廃棄土坑ＳＸ28（東から）　2　廃棄土坑ＳＸ25（北から）
3　配石ＳＸ61（南から）　4　配石ＳＸ61（東から）
5　集石土坑ＳＸ33（北から）　6　集石ＳＸ14（北から）
図版６　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
1　石室ＳＸ26上面（南から）　2　石室ＳＸ26（東から）
3　石室ＳＸ60（北から）　4　石室ＳＸ60（東から）
5　石室ＳＸ17（東から）　6　石室ＳＸ29（南から）
図版７　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
1　石室ＳＸ35（北から）　2　石室ＳＸ35細部（北から）
3　石室ＳＸ35細部（北東から）　4　道路ＳＦ１（東から）

図版８　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
１　縄文早期の土器　　２　縄文早期の土器
図版９　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
１　縄文早期の土器　　２　縄文早期の土器
図版10　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
１　縄文中期の土器　　２　縄文後期・晩期の土器
図版11　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
弥生中期の土器
図版12　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
弥生中期の土器
図版13　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
弥生中期の土器
図版14　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
弥生中期の土器
図版15　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
弥生中期の土器
図版16　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
弥生土器細部
図版17　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
埴　　輪
図版18　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＤ12出土遺物，ＳＤ５出土遺物，ＳＤ６出土遺物
図版19　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＤ９出土遺物，ＳＸ27出土遺物，ＳＸ102出土遺物
図版20　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＤ14出土遺物，ＳＸ32出土遺物，ＳＤ11出土遺物，
ＳＸ17出土遺物，ＳＸ63出土遺物
図版21　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＸ25出土遺物，ＳＸ66出土遺物，ＳＸ32出土遺物，
ＳＸ34出土遺物，ＳＸ35出土遺物

図版22　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＤ11出土遺物
図版23　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＤ11出土遺物
図版24　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＸ100出土遺物，ＳＸ63出土遺物，ＳＤ６上面出土遺物，
ＳＸ15出土遺物，茶褐色土出土遺物
図版25　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
鉄製品
図版26　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
軒丸瓦，軒平瓦
図版27　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
軒平瓦，塼
図版28　京都大学吉田南構内ＡＮ22区
ＳＸ６出土遺物，近代土坑出土遺物
図版29　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　表土・攪乱除去後全景（東から）　2　中世の遺構全景（東から）
図版30　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　古代の遺構全景（東から）　2　黄色砂上面完掘全景（東から）
図版31　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　調査区西半近世遺構（南から）　2　ＳＥ11遺物出土状況（東から）
3　集石ＳＸ３（南から）　4　流路ＳＲ１断面（西から）
5　流路ＳＲ１検出状況（西から）　6　流路ＳＲ１完掘状況（西から）
図版32　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　調査区西半黄色砂上面（北から）　2　集石ＳＸ４（北西から）
3　東西畔段差付近の層位（南から）　4　土器溜ＳＸ６（西から）
5　土器溜ＳＸ５（南から）　6　石庖丁出土状況（西から）
図版33　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　水田全景（東から）　2　東水田全景（南から）
3　西水田全景（北から）

図版34　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　水田遺構検出作業（北から）　2　砂脈検出状況（西から）
3　西水田土堤（北から）　4　土器溜ＳＸ７（東から）
5　土器溜ＳＸ９（南から）　6　水田畦畔断面（東から）
図版35　京都大学北部構内ＢＣ28区
縄文後期の土器，縄文晩期の土器（１）
図版36　京都大学北部構内ＢＣ28区
縄文晩期の土器（２）
図版37　京都大学北部構内ＢＣ28区
縄文晩期の土器（３）
図版38　京都大学北部構内ＢＣ28区
縄文晩期の土器（４）
図版39　京都大学北部構内ＢＣ28区
弥生前期の土器
図版40　京都大学北部構内ＢＣ28区
浮線文土器，環状土製品，
縄文晩期・弥生前期土器の底部（１）
図版41　京都大学北部構内ＢＣ28区
縄文晩期・弥生前期土器の底部（２）
図版42　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　剝片石器　2　剝片石器（同上裏面）
図版43　京都大学北部構内ＢＣ28区
1　剝片石器と礫石器　2　石器細部
図版44　京都大学北部構内ＢＣ28区
水田域及びその周辺検出のプラント・オパール
図版45　京都大学北部構内ＢＣ28区
石庖丁とその細部　弥生中期～古墳時代の遺物
図版46　京都大学北部構内ＢＣ28区
古代の遺物
図版47　京都大学北部構内ＢＣ28区

中世の遺物
図版48　京都大学北部構内ＢＣ28区
近世の遺物
図版49　京都大学北部構内ＢＣ28区
ＳＸ５の原位置論的検討
図版50　京都大学北部構内ＢＣ28区
中近世層検出の花粉

挿 図 目 次

吉田南構内ＡＮ22区の発掘調査

図１　調査区東西畔の層位……4
図２　調査区南北畔と調査区西壁の層位……5
図３　弥生前期の地形……8
図４　縄文時代の地形と調査区の地区割り……9
図５　縄文早期の土器⑴……10
図６　縄文早期の土器⑵……11
図７　縄文早期の土器⑶……12
図８　縄文早期の土器⑷……13
図９　縄文中期の土器⑴……15
図10　縄文中期の土器⑵……16
図11　縄文後期の土器⑴……17
図12　縄文後期の土器……18
図13　弥生中期～古代の遺構……23
図14　弥生中期の土器⑴……25
図15　弥生中期の土器⑵……27
図16　弥生中期の土器⑶……29
図17　弥生中期の土器⑷……30
図18　弥生中期の土器⑸……31
図19　弥生中期の土器⑹……32
図20　弥生中期の土器⑺……33
図21　弥生中期の土器⑻……34
図22　家形埴輪……37
図23　円筒埴輪……38
図24　古代の遺物……39
図25　中世の遺構……41
図26　配石ＳＸ61……43
図27　石室ＳＸ35……45
図28　ＳＸ60・ＳＸ26・ＳＸ14……46
図29　ＳＸ101・ＳＸ24・ＳＸ38・ＳＸ41・44・ＳＸ43……47
図30　石室ＳＸ17……49
図31　石室ＳＸ29……50
図32　ＳＤ12出土遺物……52
図33　ＳＥ24・ＳＫ３・ＳＫ４出土遺物……54
図34　ＳＤ８・ＳＤ13出土遺物……55
図35　ＳＤ５・ＳＤ６出土遺物……57
図36　ＳＸ24・ＳＤ６上面・ＳＸ61・ＳＸ23出土遺物……59
図37　ＳＤ９出土遺物……60
図38　ＳＤ９出土遺物……61
図39　ＳＸ46・ＳＸ43・ＳＸ27・ＳＸ52・ＳＸ102出土遺物……62
図40　ＳＤ14出土遺物⑴……63
図41　ＳＤ14出土遺物⑵……64
図42　ＳＸ38出土遺物……65
図43　ＳＸ12・ＳＫ５・ＳＸ13・ＳＸ18・ＳＸ19出土遺物……67
図44　ＳＸ20・ＳＸ25・ＳＸ28出土遺物……68

図45　ＳＸ40・ＳＸ42・ＳＸ44・
ＳＸ60・ＳＸ66・ＳＸ71
出土遺物……69
図46　ＳＸ26出土遺物……71
図47　ＳＸ26・ＳＸ32・ＳＸ34・ＳＸ37
出土遺物……73
図48　ＳＸ35・ＳＤ11－12間の
落ち込み出土遺物……74
図49　ＳＤ15・ＳＸ101関連遺物…… 75
図50　ＳＤ11出土遺物⑴……77
図51　ＳＤ11出土遺物⑵……78
図52　ＳＤ11出土遺物⑶……79
図53　ＳＤ11出土遺物⑷……80
図54　ＳＤ11出土遺物⑸……81
図55　ＳＤ11出土遺物⑹……83
図56　ＳＸ100出土遺物⑴…… 84
図57　ＳＸ100出土遺物⑵…… 85
図58　ＳＸ21・ＳＸ30出土遺物……86
図59　ＳＸ59・ＳＫ８出土遺物……87
図60　ＳＸ９・ＳＸ17出土遺物……88
図61　ＳＸ29・ＳＸ33・ＳＸ36・ＳＸ39
出土遺物……89
図62　ＳＸ63出土遺物……91
図63　ＳＤ４・ＳＤ６上面・ＳＸ15・
ＳＸ22出土遺物……92
図64　ＳＤ16出土遺物……94
図65　包含層，柱穴出土遺物……95
図66　鉄製品……96
図67　軒丸瓦⑴……99
図68　軒丸瓦⑵…… 100
図69　軒平瓦⑴…… 102
図70　軒平瓦⑵…… 103
図71　軒平瓦⑶…… 105
図72　軒平瓦⑷…… 106
図73　ＳＸ24出土丸瓦…… 107
図74　ＳＸ24出土平瓦…… 108
図75　塼…… 111
図76　近世・近代の遺構…… 113
図77　ＳＦ１・ＳＤ１・ＳＥ11・
ＳＥ８・ＳＥ３・ＳＥ10・
ＳＥ６出土遺物…… 115
図78　ＳＸ６出土遺物⑴…… 117
図79　ＳＸ６出土遺物⑵…… 118
図80　1940年ごろの吉田南構内…… 119
図81　近代土坑出土遺物…… 120
図82　７地点における東西断面層位
…… 121
図83　遺構出土別弥生土器…… 125
図84　ＡＯ22・23区出土家形埴輪… 126
図85　丸塚古墳出土家形埴輪復元図
…… 127

北部構内ＢＣ28区の発掘調査

図86　調査区の位置…… 133
図87　調査区東壁南半の層位…… 135
図88　東西畔南壁の層位…… 136
図89　調査区西壁の層位…… 138
図90　黄色砂除去後の地形と遺構… 140
図91　東西畔南壁黄色砂以下の層位
…… 141

図92　南北畔東壁黄色砂以下の層位 …… 142
図93　西水田北東－南西方向
黄色砂以下の層位…… 143
図94　調査区南壁西半黄色砂以下の層位 …… 143
図95　水田面の平均標高…… 145
図96　遺物包含層完掘後の地形…… 146
図97　遺物の出土傾向…… 147
図98　縄文後期の土器…… 148
図99　縄文晩期の土器⑴…… 149
図100 縄文晩期の土器⑵…… 150
図101 縄文晩期の土器⑶…… 151
図102 縄文晩期の土器⑷…… 152
図103 縄文晩期の土器⑸…… 153
図104 弥生前期・浮線文土器…… 155
図105 縄文晩期・弥生前期土器の底部 …… 157
図106 環状土製品…… 157
図107 剝片石器…… 163
図108 剝片石器と礫石器 ……167
図109 礫石器…… 170
図110 黄色砂下層の出土石器等の分布 …… 171
図111 プラント・オパール検出状況 …… 174
図112 黄色砂上面の地形と
弥生中期～古代の遺構…… 175
図113 中世の遺構…… 177
図114 近世の遺構…… 178
図115 ＳＲ１北肩黄色シルト・
ＳＲ１砂礫・ＳＸ５・
ＳＸ６・ＳＲ２・ＳＲ３・
灰色砂質土出土遺物…… 183
図116 ＳＲ１・ＳＤ140・ＳＤ153・
ＳＤ141・明灰色土･表土出土遺物 …… 184
図117 灰茶褐色土・暗茶褐色土・
明灰色土・暗灰色土出土遺物 …… 186
図118 茶褐色土･礫混灰色土･黄灰色土･
ＳＥ２・ＳＤ134出土遺物……187
図119 加工円盤，石鍋，温石，硯，
砥石，五輪塔，青銅製刀栗形 …… 188
図120 土製円盤の大きさと重さ…… 190
図121 灰赤褐色土Ⅰ・Ⅱ・灰褐色土Ⅰ
赤褐色土出土遺物…… 191
図122 近世桟瓦…… 192
図123 ＳＸ５出土土器片の分布…… 195
図124 ＳＸ５出土土器片の接合のしかた …… 202
図125 花粉ダイアグラム…… 204

京都白川の弥生前期末の土石流

図126 京都盆地の位置と周辺の地形 …… 225
図127 京都大学構内遺跡の位置と
その周辺…… 227
図128 構内遺跡の土層推積例…… 228

図129 石礫型土石流の断面模式図… 230
図130 京都大学北部構内の
黄色砂の層厚と巨礫の分布… 231
図131 京都大学本部構内の
黄色砂の層厚と巨礫の分布… 232
図132 京都大学吉田南構内の
黄色砂の層厚…… 233
図133 黄色砂の分布と等層線…… 234
図134 黄色砂推積前後の等高線…… 237
図135 比叡山地南部の地質と地形… 239
図136 比叡山地南部の起伏量…… 240
図137 比叡山地南部の谷密度…… 241
図138 比叡山南麓の弥生時代
前中期の遺跡ほか…… 242
砂質土石流堆積物の粒度特性
図139 調査地点の位置…… 263
図140 調査地点東壁面の「黄色砂」
…… 265
図141 各試料の粒度分布曲線と
正規化曲線…… 266
図142 「黄色砂」の粒度特性の垂直変動
…… 269
図143 正規確率紙上に表した粒度分布
…… 270
図144 主な試料の曲線パターン…… 271
図145 「黄色砂」の下部ユニットの
逆級化構造…… 273

表 目 次

表１ 縄文～弥生前期土器の
出土地区と層位……20
表２ 弥生中期土器の
出土地区と層位・遺構……35
表３ 埴輪の出土地区と出土層位……38
表４ 古代～中世の出土銭貨一覧……97
表５ 古代～中世瓦磚一覧…… 110
表６ ＡＯ22・23区出土家形埴輪… 127
表７ 石室一覧…… 130
表８ 各水田区画の田面平均標高と面積
…… 145
表９ 型式別出土点数…… 158
表10 原位置取り上げ石器等一覧… 160
表11 楔形石器一覧…… 164
表12 石鏃一覧…… 164
表13 礫石器一覧…… 164
表14 ＳＸ５出土土器片観察表…… 196
表15 京都大学構内のおもな調査… 215
表16 花崗岩類地盤の大規模土砂移動例
…… 244

第Ⅰ部　2000年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章　2000年度京都大学構内遺跡調査の概要
第2章　京都大学吉田南構内AN22区の発掘調査
第3章　京都大学北部構内BC28区の発掘調査

第１章　2000年度京都大学構内遺跡調査の概要

鎌田元一　清水芳裕　千葉　豊

１　調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターは，吉田キャンパス及び附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して，予定地の埋蔵文化財の調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果より，発掘，試掘，立合にわけて実施している。2000年度には，以下の発掘調査３件，試掘調査３件，立合調査７件，資料整理１件を実施した。

発掘調査	理学部校舎６号館新営予定地（北部構内ＢＣ28区）	（第３章，図版１－276）
	共通管理棟新営予定地（本部構内ＡＴ21区）	（整理中，図版１－277）
	(医病)基幹・環境整備（駐車場等）工事（病院構内ＡＥ19区）	（発掘中，図版１－278）
試掘調査	(医病)基幹・環境整備（駐車場等）工事予定地（病院構内ＡＥ18区）	（図版１－279）
	(南部)総合研究実験棟新営予定地（病院構内ＡＦ13区）	（図版１－280）
	薬学部校舎新営予定地（病院構内ＡＪ15区）	（図版１－281）
立合調査	南部総合研究実験棟設備工事（医学部構内ＡＱ18区）	（図版１－282）
	工学部物理系校舎（第Ⅶ期）新営予定地（本部構内ＡＵ27区）	（図版１－283）
	総合研究棟新営電気設備工事（本部構内ＡＹ25区）	（図版１－284）
	総合人間学部耐震改修その他工事（吉田南構内ＡＮ24区）	（図版１－285）
	農学研究科植物順化室新営工事（北部構内ＢＩ33区）	（図版１－286）
	アジア・アフリカ地域研究科実験排水管埋設工事（病院構内ＡＦ15区）	（図版１－287）
資料整理	総合情報メディアセンター新営予定地（吉田南構内ＡＮ22区）	（第２章，図版１－261）

２　調査の成果

前節で掲げた調査のうち，2000年度に整理を終えたものについて，その成果を略述する。なお，吉田南構内（旧，総合人間学部構内）ＡＮ22区，北部構内ＢＣ28区の発掘調査の成果については，第２章，第３章でそれぞれ詳述している。

縄文時代の遺跡　吉田南構内ＡＮ22区で扇状地の末端が検出され，崖面から遺物が多数出土した。こうした崖面は構内各所でみつかっており，低地を臨む扇状地末端で人間の活動が広範に展開していたことを物語る。遺物の中では，早期の押型文土器が注目される。黄島式が主体を占めており，この時期の様相を知る重要な資料となろう。

一方，北部構内ＢＣ28区では，縄文晩期から弥生前期にかけての土器・石器が5000点前後出土した。出土土器の多くは突帯文土器で，それに晩期中葉の篠原式と弥生前期遠賀川

式が少量出土している。つぎに記す弥生前期の水田遺構とあわせて，縄文晩期の終末ごろから，調査地一帯で活発な活動が開始されたことを示している。

弥生時代の遺跡　ＢＣ28区で弥生前期の水田遺構が確認された。当該期の水田遺構は220地点についで２例目となり，貴重な事例を加えることとなった。微高地をはさんで，東側と西側に２箇所みられ，微起伏を巧みに取り込んで小規模な水田単位が複数設定されている状況がとらえられた。プラントオパール分析では，長期の耕作は想定できない，という結果が得られており，具体的な利用状況の検討が今後の課題となる。

ＡＮ22区では，中期後葉の方形周溝墓とそれに供献された土器がみつかった。封土や主体部は削平により失われていたが，溝の状況から少なくとも４基，蓋然性は低いがさらに２基の周溝墓が２列で並存する状況を復元した。溝中から，中期後葉の供献土器が多数みつかっており，この時期の編年と地域性を明らかにするうえで基準資料となろう。

古墳時代の遺跡　遺構はみつかっていないが，ＡＮ22区で家形埴輪片が出土した。出土例のきわめて少ない５世紀前半の装飾性の高い大型品であることが判明した。

中世の遺跡　ＡＮ22区では，12世紀後半から16世紀前半にかけて，溝・井戸・石室・土坑・集石などの多数の遺構とともに多量の遺物が出土し，活発な活動のおこなわれた地点であることが判明した。遺構・遺物の分布状況から，東西２つの空間に分離され，東側の空間は吉田社，西側の空間は藤原北家吉田殿の邸宅に関連する，と解釈された。

ＢＣ28区では，15世紀以降，調査地一帯がひろく耕作地となっていたことが鋤溝のありかたから，判明した。花粉分析ではアブラナ科の卓越が示唆され，栽培作物を同定するうえで興味深い結果を得た。

近世の遺跡　ＢＣ28区は中世に引き続き，江戸時代にも耕作地として利用されたが，低地部では水田となったことが堆積物の観察から想定された。その後，調査区周辺は幕末には，土佐藩邸の敷地となったことが絵図や周辺地区の調査から判明している。幕末の井戸からは，土佐藩邸の南限を画する堀跡から出土したのと同じ刻印瓦が出土しているので，本調査区も藩邸敷地内に属することが明らかとなった。

一方，ＡＮ22区でも耕作に伴なう無数の柱穴群や野壺，道路状遺構などを検出した。構内のほかの多くの地点同様，戦国時代から江戸前期の荒廃した時期をへて，調査地一帯が都市近郊農村の耕作地へと変転したことが明らかとなった。

病院構内ＡＥ18区の試掘調査では，近世の遺物包含層が良好に残存していることが確認された。この成果をうけて，工事予定地全域に関して，発掘調査を実施した。

第２章　京都大学吉田南構内ＡＮ22区の発掘調査

千葉　豊　　阪口英毅

１　調査の概要

本調査区は吉田山の西南麓，吉田南構内（旧，総合人間学部構内）の南西部にあたり，吉田二本松町遺跡に含まれる（図版１－261）。ここに総合メディアセンターの新営が予定されたため，周辺地区での調査成果を勘案し，予定地全域の発掘調査を実施した。調査は1998年12月16日に開始し，1999年５月31日に終了した。調査面積は1800㎡である。

本調査区の周辺では，これまでの調査によって，縄文時代から江戸時代にいたる各時代各時期の遺構・遺物が発見されている（図版１）。とりわけ，弥生時代前期の水田跡（220地点），古墳時代中期の方墳（111・220地点），古代末の梵鐘鋳造遺構（111・220地点），中世の溝群（220・228地点）の発見は，特筆すべき成果であり，今回の調査でも，こうした時代の遺構・遺物に特に留意しつつ，縄文時代から現在にいたる遺跡の広がりと土地利用の変遷に関する資料を得ることを目的とした。

本調査区の北を東西にはしる道路をほぼ境に，総合人間学部構内の南半はもと京都医科大学の敷地であり，のち旧制第三高等学校の敷地が南に拡大するに及んで，本調査区付近には三高のグラウンドが設置された。その後，現在にいたるまで校舎などの建設がなされなかったため，遺構の保存状況が全般によく，旧制三高のグラウンド跡，江戸時代の道・野壺・柵列，中世の建物跡・石室状施設・溝・井戸，弥生中期の方形周溝墓，縄文時代の旧流路など各時代にわたる遺構を検出した。出土遺物は，縄文時代から近代にいたり，整理箱で194箱を数えた。遺構・遺物の主体は中世であり，その時期的変遷と遺構・遺物の密度から判断して，藤原北家吉田殿あるいは吉田社社家の邸宅の一部であった可能性が高い，という知見を得た。また，縄文早期の押型文土器，弥生中期の方形周溝墓とそれに供献された弥生土器，古墳中期の家形埴輪の出土なども，この地における土地利用の変遷や当該時期の編年を考えるうえで，特筆すべき成果となった。

発掘調査は，千葉豊・古賀秀策・阪口英毅，資料整理は千葉・阪口が担当した。発掘と整理を通じて，曽根茂・長尾玲・下坂澄子・磯谷敦子・村上昇・佐々木奈月・川本紀子・本吉恵理子・菊井佳弥・大谷礼子が補助した。本章は，第５節・第７節⑼・第10節⑶を阪口が分担し，それ以外を千葉が分担して，執筆した。

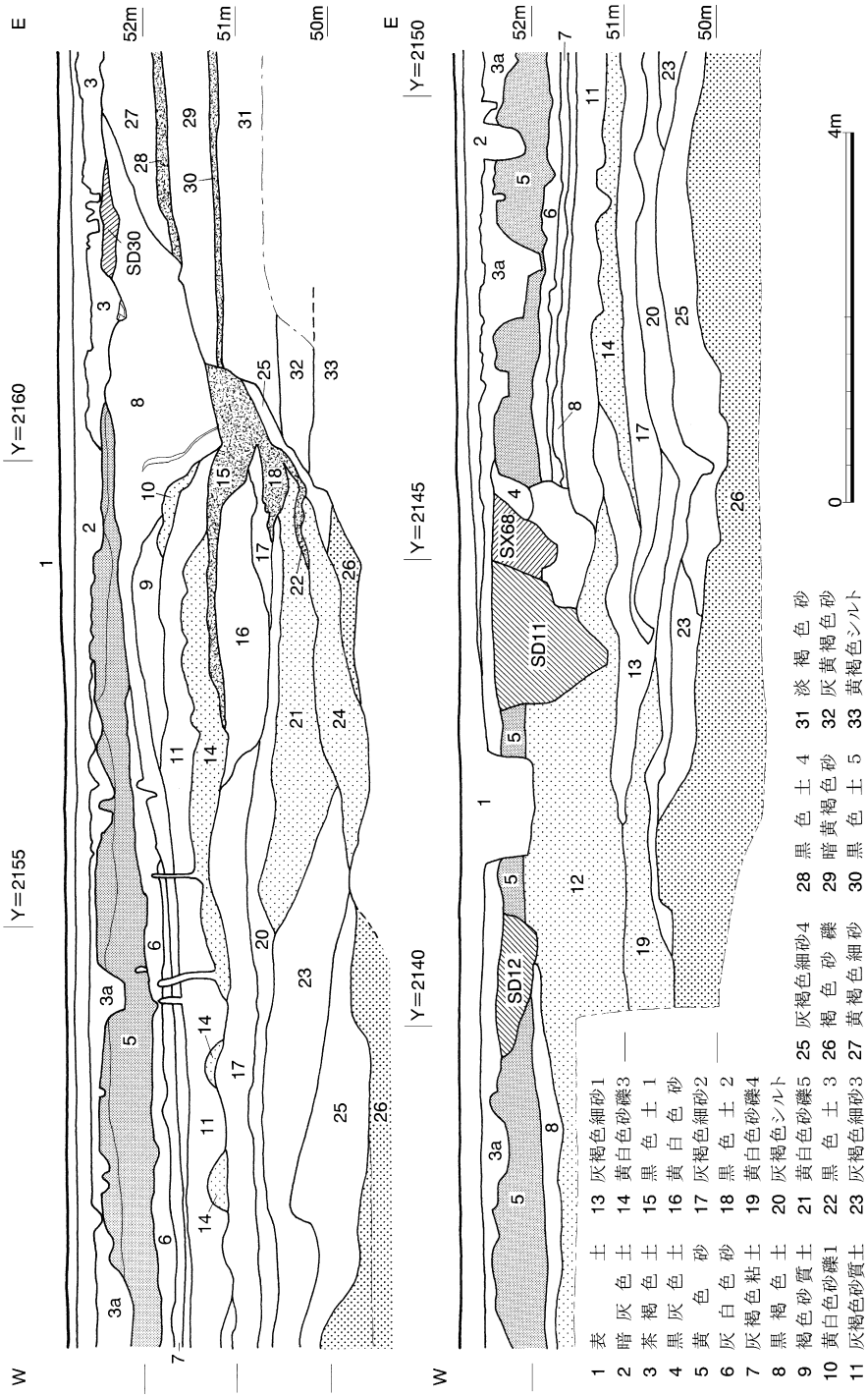


図1　調査区東西畔の層位　縮尺1/80

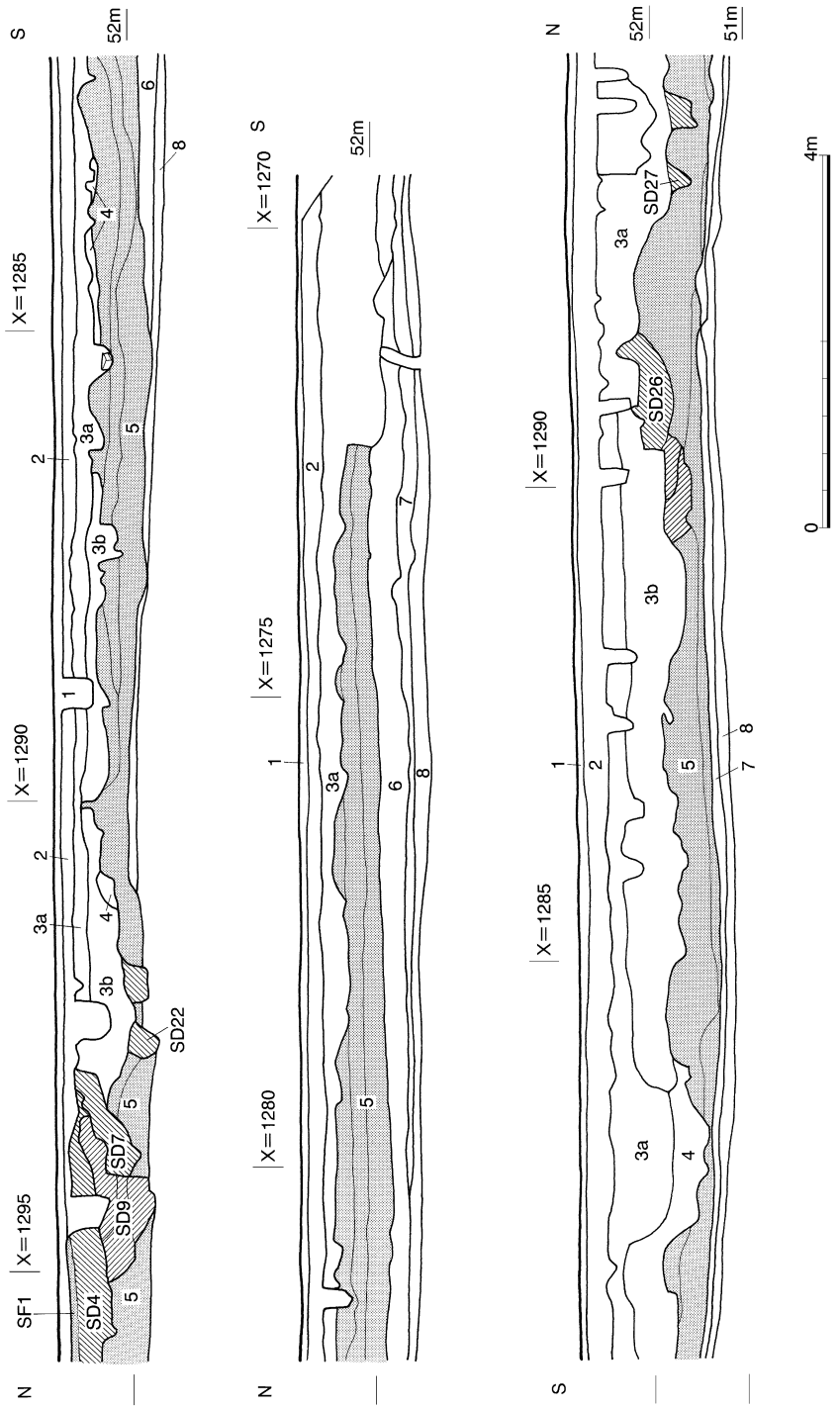


図２　調査区南北畔（上・中）と調査区西壁（下）の層位　縮尺1/80

２　層　　位

調査区のほぼ中央に，調査区を四分するように設けた土層観察用の畔と調査区西壁の層位を図示して，堆積状況の説明をしよう（図１・２）。

調査開始前の現況はテニスコートであり，現地表面の標高は52.9m前後でほぼ平坦であった。土層は，黄色砂（第５層）より上位の堆積で，ほぼ水平で水の影響をほとんど受けていない堆積（上層群と仮に呼ぶ）と，黄色砂以下，水の影響を受けて堆積した土層（下層群と呼ぶ）に大別でき，上下で堆積環境が大きく異なる。

上層群の堆積は，上から順に表土（第１層），暗灰色土（第２層），茶褐色土（第３層），黒灰色土（第４層）となる。第１層の表土は，テニスコートの造成土。第２層の暗灰色土は近世，第３層の茶褐色土は中世の遺物包含層である。第２層上面で，第三高等学校のグラウンド跡，第３層上面で，近世の道路や野壺・溝・耕作用と思われる無数の小穴を検出した。第３層の茶褐色土は，調査区北西部分で，下層の黄色砂との漸移的な様相をみせる茶褐色砂質土が本来の茶褐色土の下位に堆積していた。出土遺物は中世であり，茶褐色土を第３ａ層，茶褐色砂質土を第３ｂ層に区分した（図２）。Ｙ＝2160付近を境に，東側では第27層上面，西側では第５層の上面で，中世の遺構を検出した。

第４層の黒灰色土は，本来調査区全面に堆積していたと考えるが，中世以降の削平により，溝など遺構として深く掘り込まれた部分を第27層および第５層上面で検出したにとどまった。出土遺物から見て，弥生中期以降，古代までに形成された土層である。

つぎに下層群の説明に移る。下層群の堆積物は，ほぼＹ＝2155付近で西へ向かって下がる斜面，およびその前面に広がる低地に堆積した土層（第５層～第26層）と，それらよりも古く縄文時代に微高地を形成していた土層（第27層～第33層）に細分できる。前者のうち，もっとも新しい堆積物である第５層の黄色砂は，吉田キャンパス一帯で広く見られる弥生前期末の洪水性堆積である。上部が粗砂，下部が細砂からなる。第８層の黒褐色土は腐植土壌で，縄文晩期から弥生前期の遺物が出土しており，当時の旧地表とみられる。上部は，第５層が直接覆っている部分と，第６層の灰白色粗砂および第７層の灰褐色粘土が介在する部分がある。

なお，第８層に貫入し，第７層～第５層内で消失する砂脈を観察した。Ｙ＝2155および2160付近で，下層から上位へ細長く立ち上がる堆積物である。第８層上面で検出した砂脈については，図３に，その平面的位置を示した。地震にともなう液状化の痕跡と考える。

検出層準からすれば，北部構内ＢＡ28区の調査で検出した砂脈と同時期であろうか〔浜崎ほか1995　pp.106－113〕。

第９層から第26層の土層の大部分は，砂・砂礫といった水成堆積物であるが，これらにはさまるような形で，微高地上から供給されたと想定しうる黒色の腐植土が斜面部に堆積していた。この黒色の腐植土は，調査区中央畔付近では３枚（第15・18・22層）認められ，調査区南壁寄りでは，黒色土３の下位に砂層を介在してもう１層黒色土を確認し，合計４枚の腐植土を確認することができた。これら斜面部に形成された黒色土および砂層・砂礫層中から，早期・中期～晩期の縄文土器が出土している。

第33層の堆積状況から判断して，西へ下る段差は地下深部へと続くものではないと理解している。第26層は褐色の砂礫であることから白川系流路ではなく，高野川系流路の攻撃によって，この南北にのびる崖面が形成された可能性が考えられる。第26層以下を掘りきっていないため，この段差がいつ形成されたのかは不明であるけれども，後期以前には形成され，後期以降に埋積が進み，弥生前期末の洪水堆積（第５層）で最終的に覆われて平坦化した，ということはできよう。

微高地を形成する第27層以下は，ほぼ水平に堆積している。砂・シルトといった水成堆積のあいだに，黒色の腐植土の堆積（第28・30層）を２枚確認したが，砂・シルトを含めて，微高地を形成している堆積物からは，遺物はまったく出土しなかった。

３　縄文時代～弥生前期の遺跡

⑴ 弥生前期の地形（図版３，図３）

弥生前期末の洪水層である第５層およびその下位に水成堆積していた第６・７層を取り除くと，黒褐色の腐植まじりの土壌（第８層）があらわれた。その上面は弥生前期の旧地表であり，図３に10㎝間隔の等高線で，当時の地形を復元した。全体的には，東が高く西へ向かって下がる地形であるが，調査区北西部で検出した溝状遺構の方向からみると，北東から南西へ傾斜する傾向が読みとれる。Ｙ＝2155の南北ライン付近で，西へやや急激に下がるのは，縄文時代の地形の影響である。

調査区北西隅，第８層上面で溝状遺構を検出した。埋土は第５層黄色砂。北側は調査区外へと続き，南側はＸ＝1288付近で終わる。幅10～50㎝前後で一定せず，人工の溝か，自然地形のくぼみか，判断しがたい。人工のものであれば，北に隣接する220地点で発見された弥生前期の水田跡〔伊藤1999a〕に関連する可能性もあるが，水田跡本体は，本調査区に

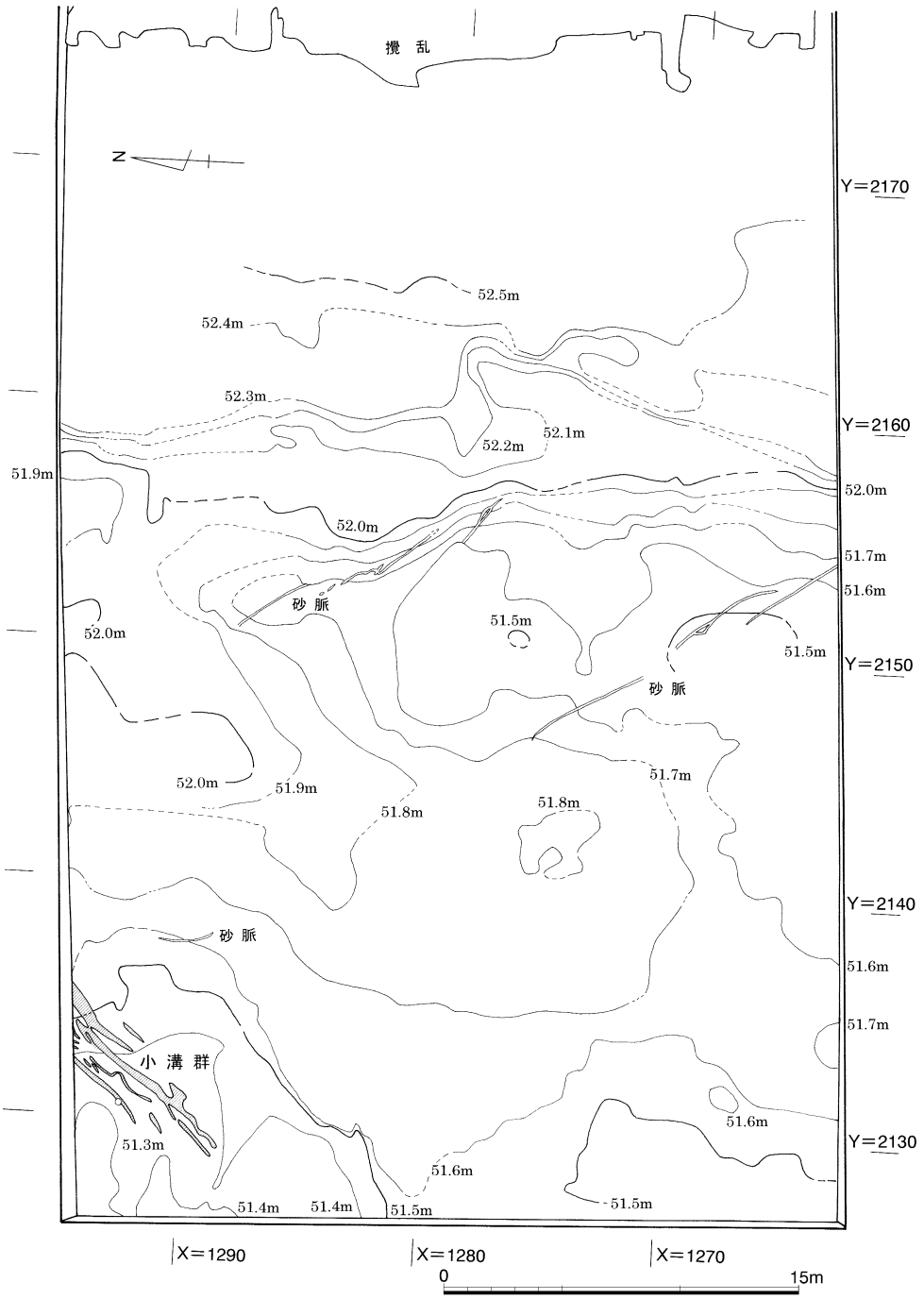


図３　弥生前期の地形　縮尺1/300

は及んでいないことが判明した。

⑵ 縄文時代の地形（図版３，図４）

第２節で説明したように，第８層以下は，基本的に水成の堆積物からなるが，Ｙ＝2155～2160付近を境に，東側は微高地からなり，西側には低地がひろがっていた。遺物は，この微高地から低地へ下る斜面から多く出土した。磨滅しているものは少ないので，遺跡は本来，この微高地上に展開し，遺物はそこから流入したものと考えられる。

⑶ 縄文～弥生前期の遺物（図版８～10，図５～12，表１）

第８層から縄文晩期・弥生前期の遺物が出土したほか，縄文晩期以前の遺物が９層以下の斜面堆積層を中心に，整理箱３箱出土した。出土遺物の地区と層位を表１に掲げる。

縄文早期の土器は，第22層の黒色土３およびその下位に形成された黒色土を中心に，調査区南辺よりまとまって出土した。中期・後期の土器は，黒色土１・２を中心にその上下の砂層・砂礫層より主体的に出土し，晩期の土器は黒色土１～黒褐色土，弥生前期の土器は黒褐色土から出土している。ただし，黒色土３よりも下位の土層である第24層および第26層から，後期ないしは晩期に比定できる土器が出土しており，中期～晩期の土器も同一層準から混在して出土しているので，斜面堆積出土遺物はプライマリーな状態を保っているとは理解しがたい。したがってここでは，時期別・型式別に遺物を図示・分類し，解説を加えていきたい。

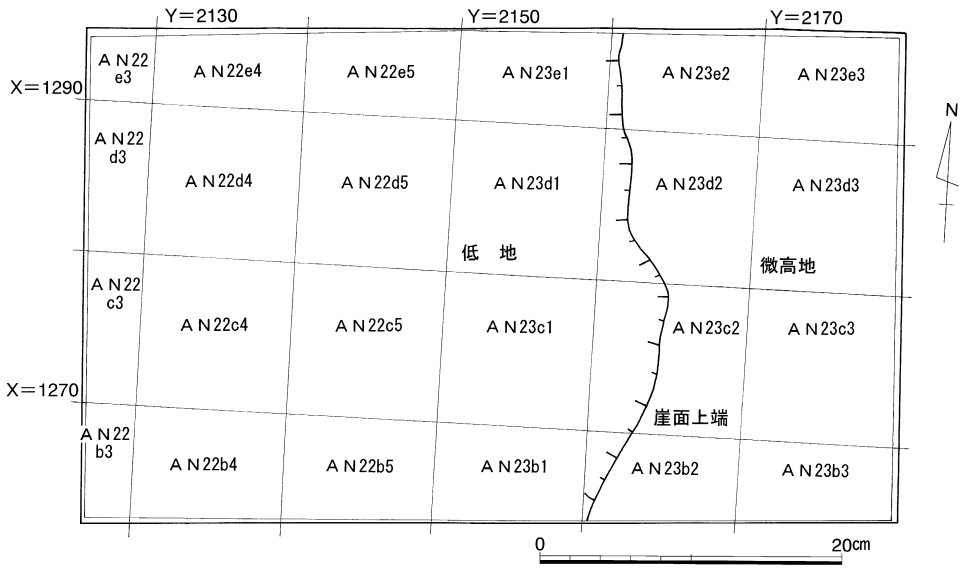


図４　縄文時代の地形と調査区の地区割り　縮尺1/500

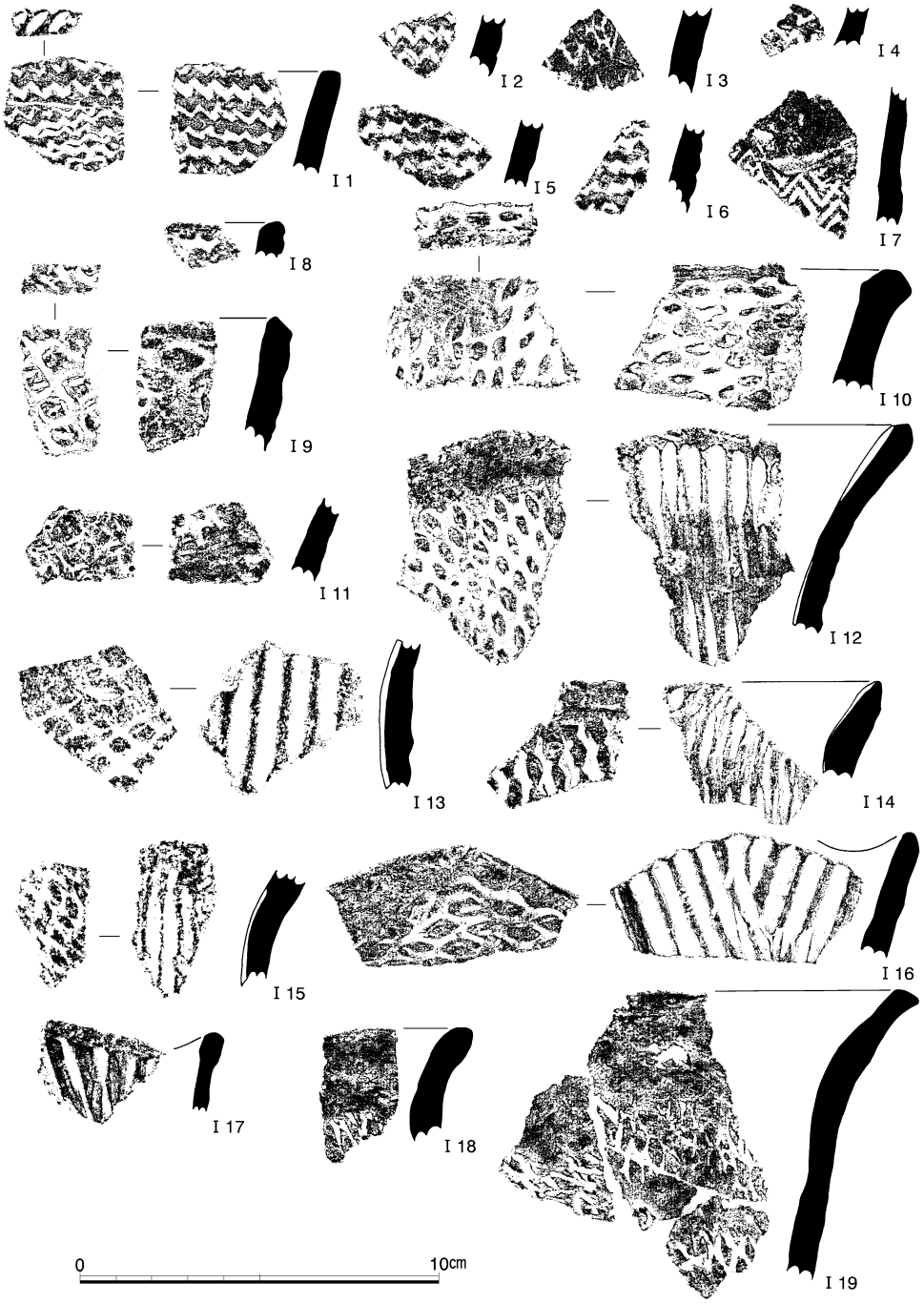


図５　縄文早期の土器(1)（Ⅰ１～Ⅰ７黄島式直前段階，Ⅰ８～Ⅰ19黄島式）　縮尺1/2

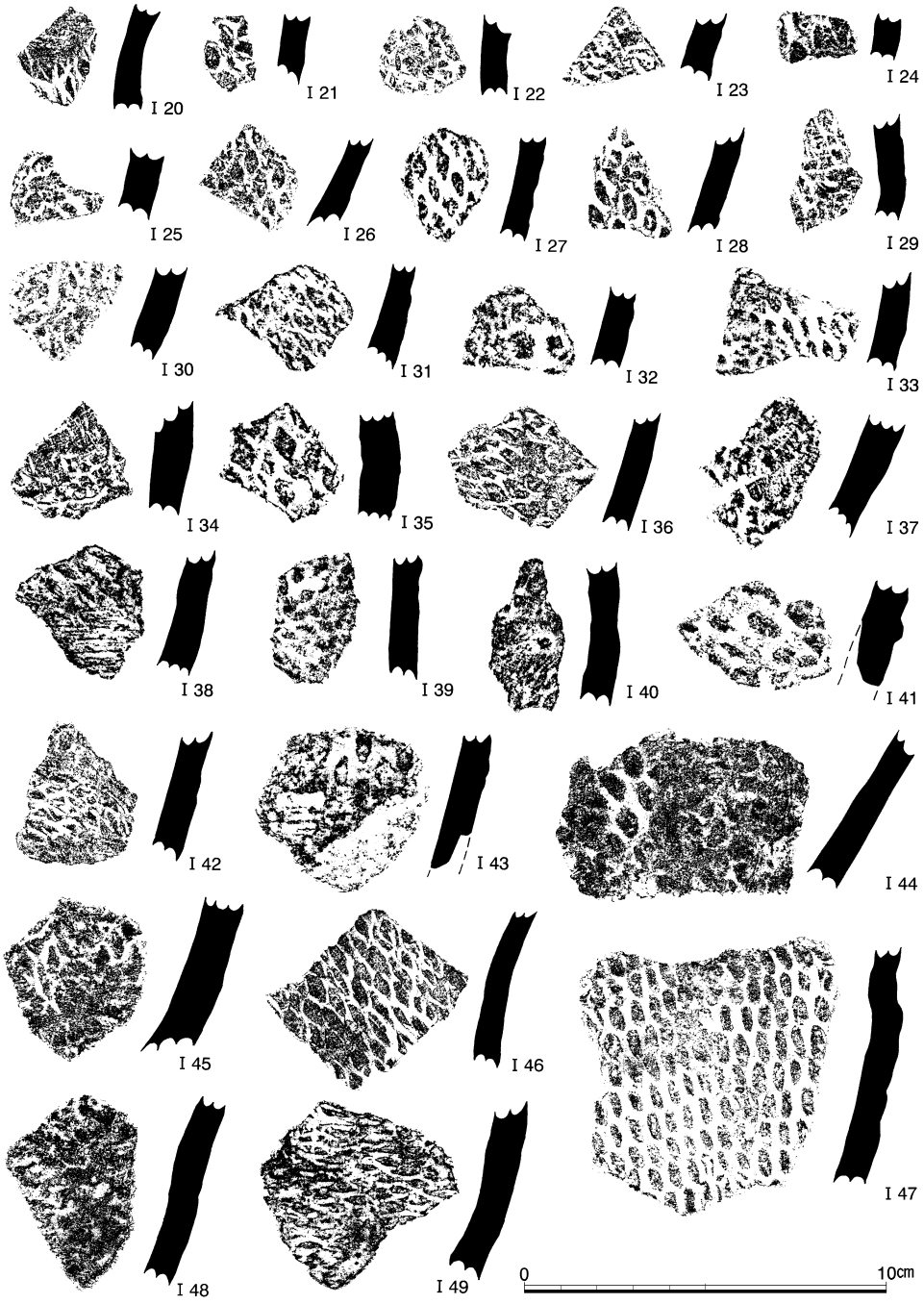


図６　縄文早期の土器⑵（Ⅰ20～Ⅰ49黄島式）　縮尺1/2

縄文早期の土器（Ｉ１～Ｉ92）　Ｉ１～Ｉ56は押型文土器。Ｉ１～Ｉ７は，山形文を横位に施す。器壁の厚さは６～７㎜。Ｉ１は口縁部内面にも，山形文を施文し，口縁端部には左下がりの刻みを加える。山形の単位は，3単位･周長18㎜に復元できる。山形文をもつ土器は，本調査区から，北東1.5㎞に所在する北白川廃寺下層遺跡の住居跡からみつかった押型文土器と同一の特徴をもつ〔網1994〕。山形文の多用される時期であり，黄島式直前段階に編年できる。

Ｉ８～Ｉ56は楕円押型文を施文する土器。器壁の厚さは７～10㎜で，山形文をもつ押型文土器より厚く，次に記述する無文土器に類似する。胎土に，繊維の混入が明確にわかる例はない。器形は，口縁部が外反し胴部がややふくらみ，尖底となる。水平口縁（Ｉ９・Ｉ10・Ｉ19）とゆるやかな波状口縁（Ｉ12・Ｉ16）がある。

楕円文は，その形状と上下の並びで，米粒状の楕円文が上下で互い違いにならずに横並

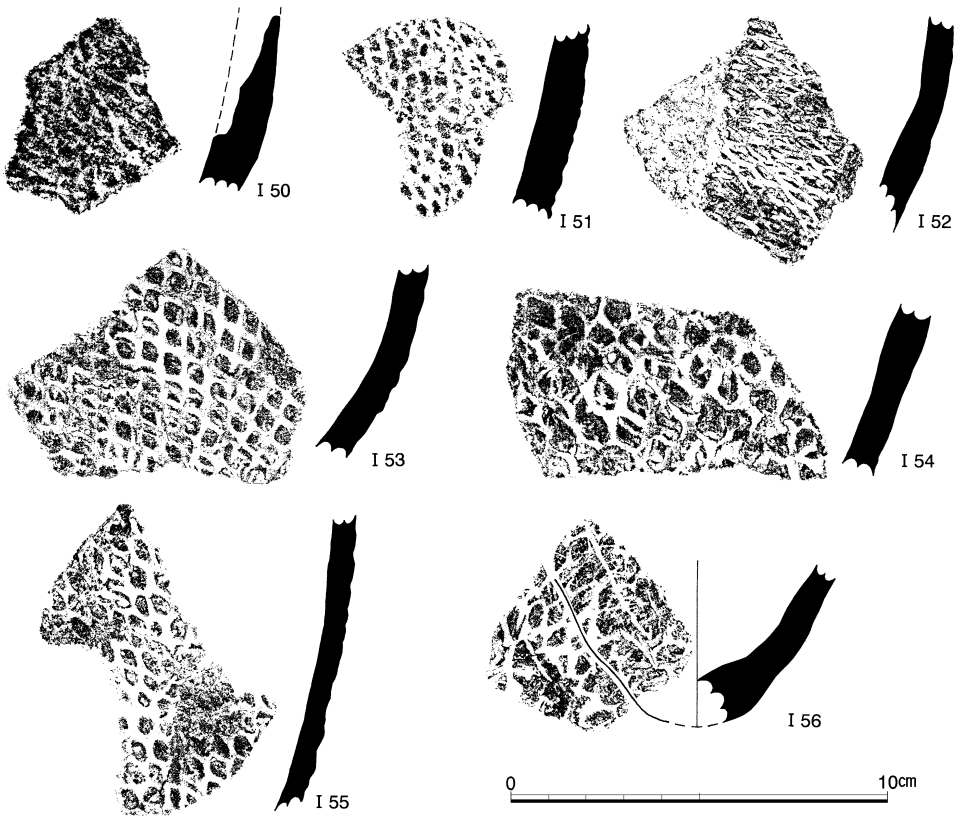


図７　縄文早期の土器⑶（Ｉ50～Ｉ56黄島式）　縮尺1/2

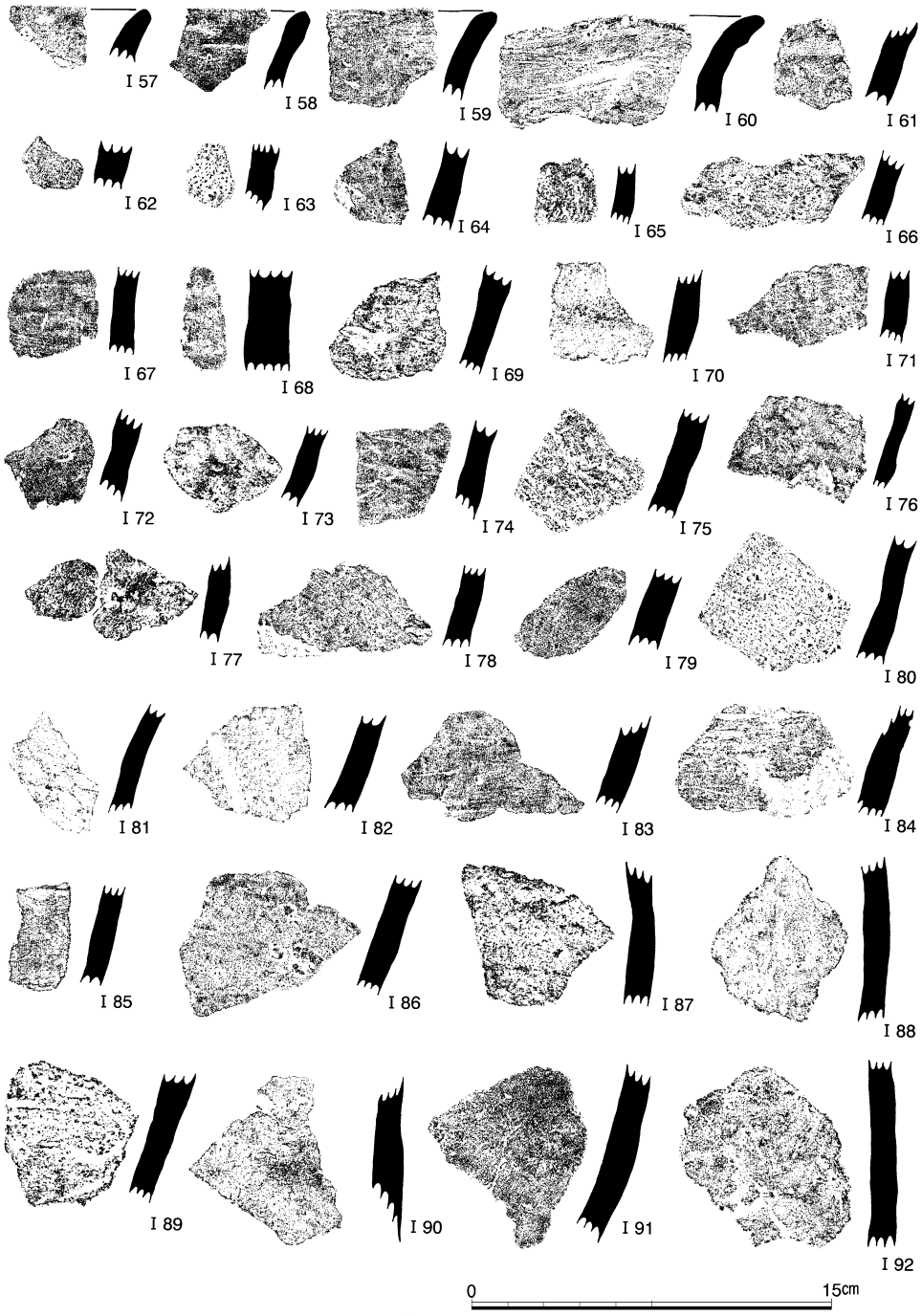


図８　縄文早期の土器(4)（Ｉ57～Ｉ92無文土器）　縮尺1/3

びになるもの（Ⅰ10・Ⅰ14・Ⅰ47など），同様の楕円文が上下で互い違いに並ぶもの（Ⅰ26・Ⅰ27・Ⅰ46など），菱形状の楕円文が上下で互い違いに並ぶもの（Ⅰ９・Ⅰ13）に，細分できる。繰り返しの単位を明確に観察できる例は少ないが，Ⅰ12は２単位･周長20㎜，Ⅰ47も２単位・周長16㎜に復元できる。

楕円文は縦位に密接施文するものが多いが，Ⅰ16・Ⅰ49・Ⅰ52のように，横位，斜位に施文しているものも少量ある。口縁部内面は，楕円文を横位にめぐらすもの（Ⅰ９～Ⅰ11），押型文とみられる平行沈線文を横位に施文するもの（Ⅰ12～Ⅰ17），無文のもの（Ⅰ18・Ⅰ19）に分類できる。内面に楕円文をめぐらすものは，口縁端部にも刻み（Ⅰ９）や楕円文（Ⅰ10）で，加飾する。

Ⅰ８～Ⅰ56は，瀬戸内地方の黄島式に比定できるが，内面文様に平行沈線文と楕円文を組み合わせた文様が見られないなど，違いも見られる。また縦位密接施文が多いことなどから，黄島式の新しい段階が主体を占めると理解する。

Ⅰ57～Ⅰ92は無文土器。黒色土３・４から押型文土器に伴出したものを中心に，器壁の厚さや仕上げ方から，後晩期の無文土器ではないと判断した土器をここに一括している。器壁が10㎜前後と，厚いのが特徴的である。内外面ともに，撫でて仕上げるものが多いが，Ⅰ75は外面に，Ⅰ66･Ⅰ89は内面に，斜めないし横方向の砂粒の動きがみられることから，削り調整を施していると理解できる。Ⅰ80のように，胎土に繊維を混ぜ合わせている可能性を指摘できるものもあるが，それ以外で，繊維の混入を確実に指摘できるものは観察できない。器形は，胴部がややふくらみ，口縁部がやや外反する深鉢である。口縁端部は，丸くないしは尖り気味に作る。これらは，Ⅰ８～Ⅰ56の黄島式の押型文土器にともなうものであろう。

縄文中期の土器（Ⅰ93～Ⅰ160）　Ⅰ93は２段左撚縄文を縦走させる。船元Ⅲ式。Ⅰ94は縄文の条が交互に深浅となる縄巻縄文を施す。船元Ⅳ式。Ⅰ95は半截竹管による平行沈線で弧状文を描く。地文はみとめられない。船元Ⅳ式～里木Ⅱ式。

Ⅰ96～Ⅰ160は末葉の北白川Ｃ式に比定できる土器。Ⅰ96～Ⅰ108は有文深鉢の口縁部。口縁端部に，Ⅰ96は刺突，Ⅰ97・Ⅰ98・Ⅰ101・Ⅰ102は縄文を施す。Ⅰ97の沈線は結節状である。Ⅰ105は矢羽根状沈線文を施す。Ⅰ109～Ⅰ134は有文深鉢の頸胴部。Ⅰ110～Ⅰ114は多重沈線による連弧文を頸部に横位にめぐらしている。Ⅰ115～Ⅰ133は，胴部に３条以上の沈線束を垂下させ，Ⅰ115～Ⅰ124はそのあいだに２段左撚縄文を縦に転がして施文している。曲線的な沈線による磨消縄文（縄文は２段左撚）をもつⅠ134は後期初頭・

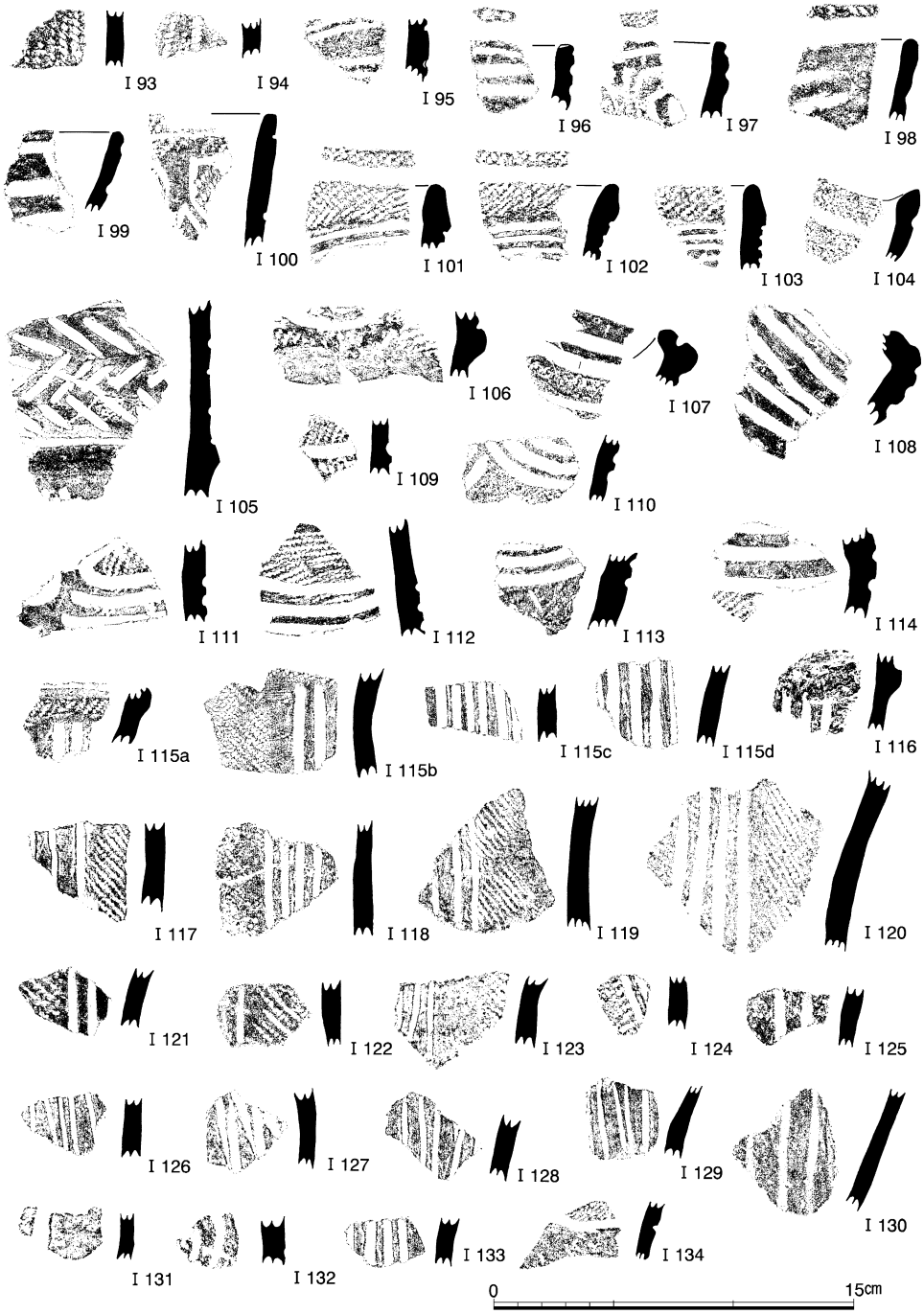


図９　縄文中期の土器(1)（Ｉ93船元Ⅲ式，Ｉ94船元Ⅳ式，Ｉ95船元Ⅳ式～里木Ⅱ式，Ｉ96～Ｉ134北白川Ｃ式）　縮尺1/3

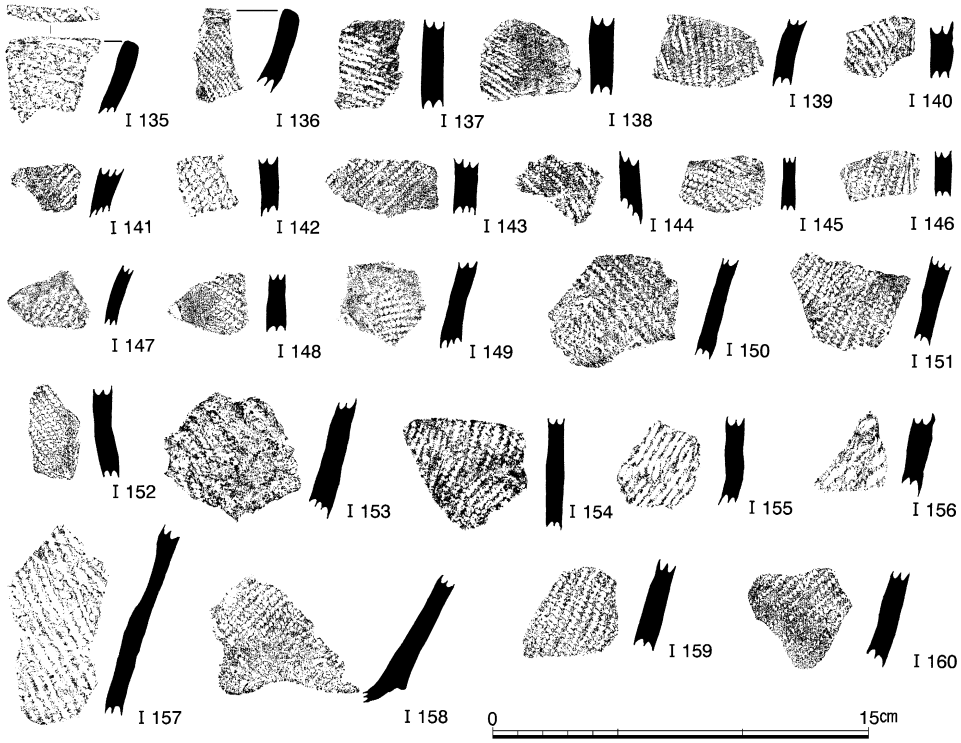


図10　縄文中期の土器⑵（Ⅰ135～Ⅰ160北白川Ｃ式）　縮尺1/3

中津式とすべきかもしれない。

Ⅰ135～Ⅰ160は縄文施文の土器。一部は，後期に下る可能性もある。Ⅰ135・Ⅰ136は口縁部で，横位に施文。Ⅰ135は口縁端部にも施文する。Ⅰ137～Ⅰ160は胴部資料で，横位回転施文と縦位回転施文の両者がみられる。縄文の原体は，2段左撚の単節縄文が多くを占める。Ⅰ142は3段右撚の複節縄文，Ⅰ156は1段左撚の無節縄文である。

縄文後期の土器（Ⅰ161～Ⅰ205）　Ⅰ161～Ⅰ163は初頭の土器。Ⅰ161は沈線内部に竹管による円形刺突を2個配し，沈線下に1段右撚の縄文を施す。中津式。Ⅰ162・Ⅰ163は口縁端部が内側へ肥厚する。沈線間に，Ⅰ162は2段左撚？，Ⅰ163は2段右撚の縄文を充填する。福田Ｋ2式。

Ⅰ164～Ⅰ166・Ⅰ168～Ⅰ197は，前葉～中葉の北白川上層式。このうち，Ⅰ165・Ⅰ177・Ⅰ178は上層式1期，Ⅰ169・Ⅰ170は上層式2期，Ⅰ166・Ⅰ168・Ⅰ174・Ⅰ180・Ⅰ181は上層式3期に比定できるだろう。

Ⅰ164～Ⅰ166・Ⅰ168・Ⅰ169は口縁部資料。Ⅰ164は口縁内外面に沈線を2条横走させ，

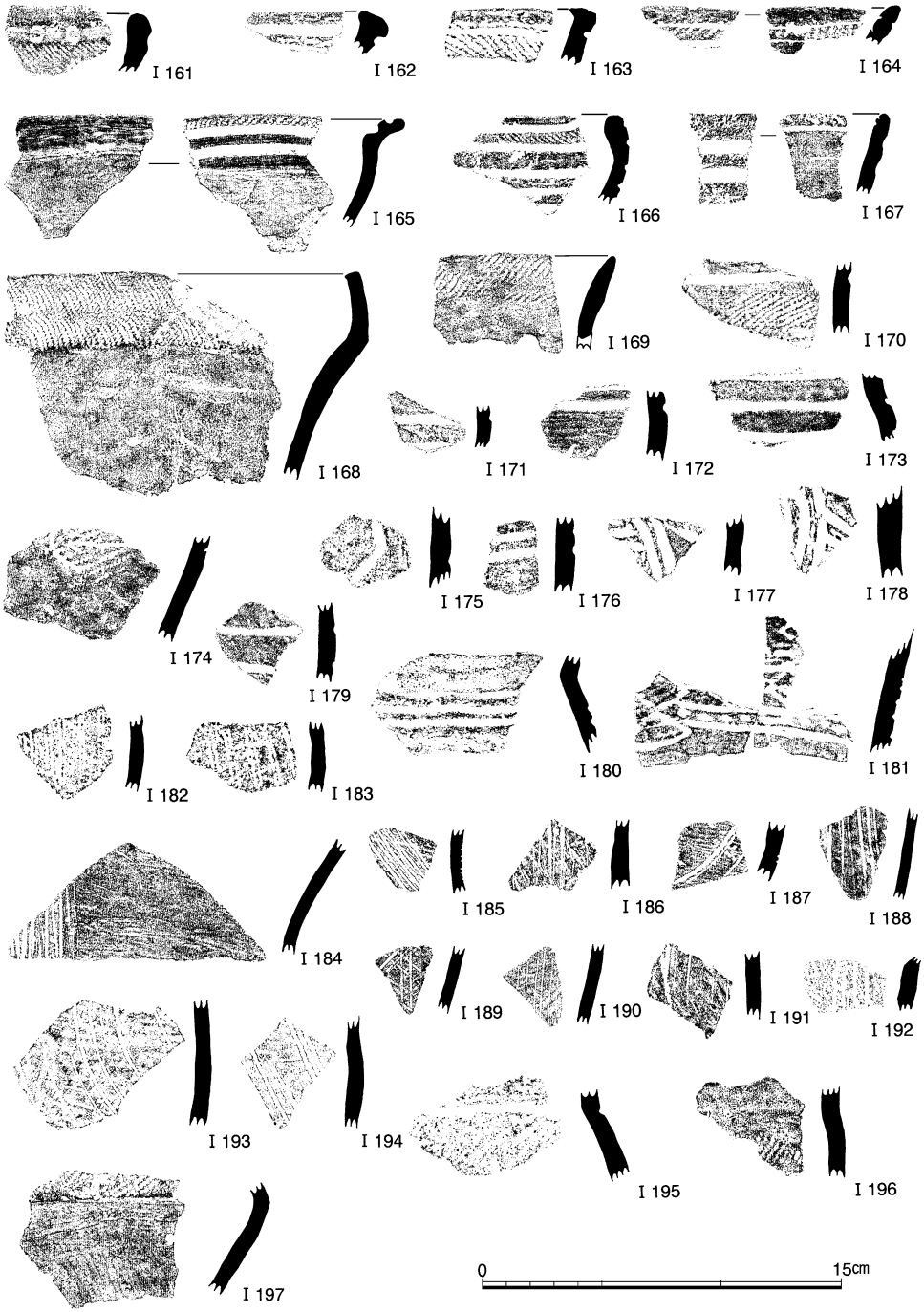


図11　縄文後期の土器(1)（Ⅰ161中津式，Ⅰ162・Ⅰ163福田Ｋ２式，Ⅰ164～Ⅰ166・Ⅰ168～Ⅰ197北白川上層式，Ⅰ167元住吉山Ⅱ式）　縮尺1/3

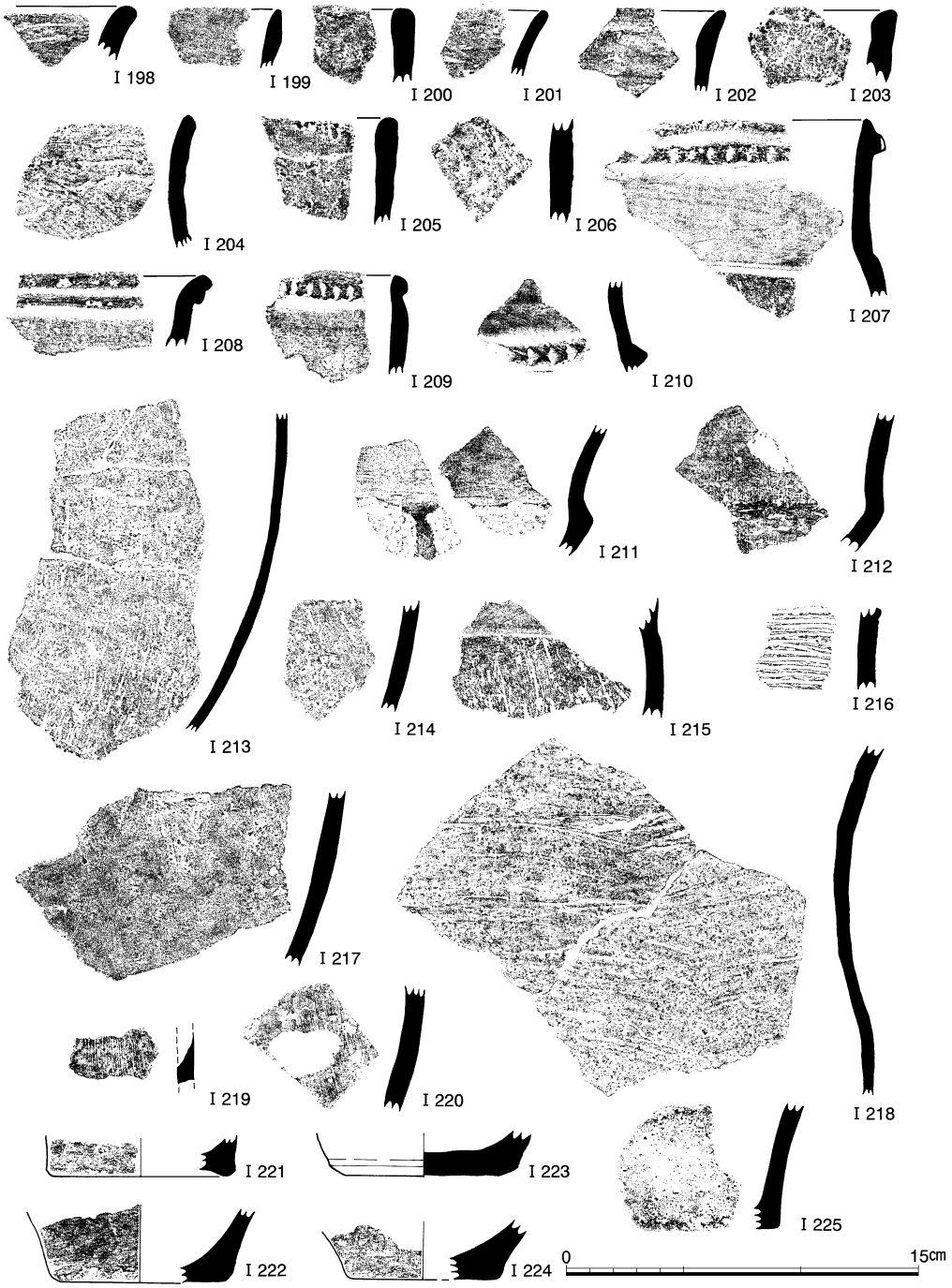


図12　縄文後期の土器⑵（Ⅰ198～Ⅰ205無文土器），縄文後～晩期の土器（Ⅰ206・Ⅰ217・Ⅰ218無文胴部），縄文晩期の土器（Ⅰ207～Ⅰ216滋賀里Ⅳ～船橋式），弥生前期の土器（Ⅰ219・Ⅰ220），縄文土器底部（Ⅰ221～Ⅰ225）　縮尺1/3

2段左撚縄文を充填する。Ⅰ165は口縁部内面を肥厚させ，2段左撚縄文を施して沈線を2条めぐらす。内外面磨いて仕上げており，縄文部に赤色顔料が付着する。浅鉢であるが，類例の少ない器形である。Ⅰ166は内湾する口縁部に，多条沈線をめぐらし，2段右撚縄文を充填している。Ⅰ168・Ⅰ169は縄文地深鉢で，Ⅰ168は2段右撚，Ⅰ169は2段左撚の縄文を施文する。Ⅰ169は胎土に角閃石を多量に含む。

Ⅰ170～Ⅰ197は胴部資料。Ⅰ170は2条沈線間に，2段左撚縄文を施す。Ⅰ171～Ⅰ181は沈線文をめぐらした胴部資料。Ⅰ177・Ⅰ178は，2～3条の沈線束で，曲線的な文様を描いている。Ⅰ181はバケツ形の器形で，列点をもつ沈線文を横位にめぐらし，蛇行沈線を垂下させている。Ⅰ182～Ⅰ194は，櫛状施文具による条線文を施す。Ⅰ193は胎土に角閃石を多量に含む。Ⅰ195・Ⅰ196は縄文地の胴部で，2段左撚縄文。Ⅰ197は「く」字形に屈曲する浅鉢。口頸部に2段左撚縄文を施文する。体部外面は磨いて仕上げる。内面は撫で仕上げ。

Ⅰ167は後葉の元住吉山Ⅱ式。外面に凹線文を2条以上施し，口縁内面には1条の沈線を横走させ，口縁端部との間に，右下がりの刻みを加えている。

Ⅰ198～Ⅰ205は無文土器の口縁部。口縁に向かって外反しつつ立ち上がるものと直立するものがある。口縁端部は尖り気味ないし丸く収めている。

縄文後～晩期の土器（Ⅰ206・Ⅰ217・Ⅰ218）　後～晩期以上に，時期を細分できない資料。Ⅰ206は，第26層褐色砂礫出土の胴部片。層位的にはもっとも下層から出土した土器である。内面は撫で仕上げ。外面はやや劣化しているが，削って仕上げている。Ⅰ217は胴部，Ⅰ218は頸胴部資料。

縄文晩期の土器（Ⅰ207～Ⅰ216）　Ⅰ207～Ⅰ210は突帯文土器。Ⅰ208は刻みのない突帯，それ以外は篦状施文具でD字刻みを施す。Ⅰ207は肩部に段をもつ。Ⅰ211･Ⅰ212は口頸部が「く」字形に屈曲する浅鉢。Ⅰ213～Ⅰ215は深鉢の胴部。内面は撫で，外面は削り調整。Ⅰ212は深鉢の頸部。内面は撫で，外面は横方向の粗い条痕を施す。これらは，滋賀里Ⅳ式～船橋式に比定できる。

弥生前期の土器（Ⅰ219・Ⅰ220）　ともに小破片で，縦方向の刷毛目をもつ甕。

縄文土器底部（Ⅰ221～Ⅰ225）　底面はいずれも撫でて仕上げる。Ⅰ221～Ⅰ224のように，いったん立ち上がってから外へ開くものが多い。Ⅰ225は底面から外反しながら立ち上がる。

表１　縄文～弥生前期土器の出土地区と層位

番号	時	期	出土地区	出土層位
Ⅰ 1	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ 2	早	期	AN23c1･c2	黒色土1
Ⅰ 3	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ 4	早	期	AN23c1･c2	黒色土1
Ⅰ 5	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ 6	早	期	AN23b1･b2	黒色土1･2
Ⅰ 7	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ 8	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ 9	早	期	調査区南壁	黒色土3？
Ⅰ10	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ11	早	期	AN23c1	褐色砂質土
Ⅰ12	早	期	AN23b1･c1	黒色土1･2
Ⅰ13	早	期	南西調査区	黒褐色土
Ⅰ14	早	期	AN23c2	黒褐色土
Ⅰ15	早	期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ16	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ17	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ18	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ19	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ20	早	期	AN23b1	黒色土4
Ⅰ21	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ22	早	期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ23	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ24	早	期	AN23b1	黒色土4
Ⅰ25	早	期	AN23b1	黒色土4
Ⅰ26	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ27	早	期	AN23c1	黒灰色土
Ⅰ28	早	期	AN23c2	黒褐色土
Ⅰ29	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ30	早	期	AN23c1	黒灰色土
Ⅰ31	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ32	早	期	AN23b1･c1	黒色土1･2
Ⅰ33	早	期	AN23b1	黒色土1･2
Ⅰ34	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ35	早	期	AN23b1	黒色土1･2
Ⅰ36	早	期	AN23b1	黒色土2
Ⅰ37	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ38	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ39	早	期	AN23c2	黒色土1
Ⅰ40	早	期	AN23c2	黒色土1
Ⅰ41	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ42	早	期	調査区南壁	黒色土3？
Ⅰ43	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ44	早	期	AN23b1	黄白砂礫5
Ⅰ45	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ46	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ47	早	期	AN23c1	黒褐色土
Ⅰ48	早	期	調査区南壁	黒色土3？
Ⅰ49	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ50	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ51	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ52	早	期	AN23b1	黒色土1･2
Ⅰ53	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ54	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ55	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ56	早	期	AN23b1	黒色土2
Ⅰ57	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ58	早	期	AN23b1	黒色土1･2
Ⅰ59	早	期	AN23c2	黒褐色土
Ⅰ60	早	期	調査区南壁	黒色土3？
Ⅰ61	早	期	AN23b1	黒色土2
Ⅰ62	早	期	AN23b1	黒色土4
Ⅰ63	早	期	AN23b1･c1	黒色土1･2
Ⅰ64	早	期	AN23b1	黒色土4
Ⅰ65	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ66	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ67	早	期	調査区南壁	灰褐細砂4
Ⅰ68	早	期	調査区南壁	黒色土3？
Ⅰ69	早	期	AN23b1	黒色土4
Ⅰ70	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ71	早	期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ72	早	期	東西畦	不明
Ⅰ73	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ74	早	期	AN23c2	黒褐色土
Ⅰ75	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ76	早	期	AN23c1	褐色砂質土
Ⅰ77	早	期	AN23b1･c1	黒色土1･2
Ⅰ78	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ79	早	期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ80	早	期	AN23b1	黒色土1･2
Ⅰ81	早	期	AN23b1	黒色土1･2
Ⅰ82	早	期	AN23b1	黒色土3
Ⅰ83	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ84	早	期	調査区南壁	黒色土3？
Ⅰ85	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ86	早	期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ87	早	期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ88	早	期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ89	早	期	AN23b1	黒色土4？
Ⅰ90	早	期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ91	早	期	AN23c1	黒褐色土
Ⅰ92	早	期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ93	中	期	AN23b1･c1	黒色土1･2
Ⅰ94	中	期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ95	中	期	北東調査区	黒褐色土
Ⅰ96	中	期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ97	中	期	AN23c2	黒色土1上半
Ⅰ98	中	期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ99	中	期	AN22b3･b4	黒褐色土
Ⅰ100	中	期	AN23e2	黒色土1下半
Ⅰ101	中	期	AN23d2	黒褐～黒2の間
Ⅰ102	中	期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ103	中	期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ104	中	期	AN23c1	黄白色砂礫3
Ⅰ105	中	期	AN23c1	黒色土1
Ⅰ106	中	期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ107	中	期	AN23d2	黒褐～黒1の間
Ⅰ108	中	期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ109	中	期	北東調査区	黒褐色土
Ⅰ110	中	期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ111	中	期	AN23d2	黒褐～黒1の間
Ⅰ112	中	期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ113	中	期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ114	中	期	北東調査区	黒褐色土

表1　つづき

番号	時期	出土地区	出土層位
Ⅰ115a	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ115b	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ115c	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ115d	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ116	中期	AN23d2	黒色土1上半
Ⅰ117	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ118	中期	AN23e2	黒色土1下半
Ⅰ119	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ120	中期	AN23d2	黒色土1上半
Ⅰ121	中期	AN23d2	黒色土1上半
Ⅰ122	中期	AN23e2	黒色土1下半
Ⅰ123	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ124	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ125	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ126	中期	北東調査区	黒褐色土
Ⅰ127	中期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ128	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ129	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ130	中期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ131	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ132	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ133	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ134	中期	AN23b1	灰褐色シルト
Ⅰ135	中期	AN23e1	黒灰色土
Ⅰ136	中期	AN23d2	黒褐～黒1の間
Ⅰ137	中期	AN23e2	黒色土1上半
Ⅰ138	中期	AN23e1	黒灰色土
Ⅰ139	中期	AN23e2	黒色土1下半
Ⅰ140	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ141	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ142	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ143	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ144	中期	AN23c1	褐色砂質土
Ⅰ145	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ146	中期	AN23b1･c1	黄白色砂
Ⅰ147	中期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ148	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ149	中期	AN23c1	黒褐色土
Ⅰ150	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ151	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ152	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ153	中期	AN23d2	黒色土1上半
Ⅰ154	中期	北東調査区	黒褐色土
Ⅰ155	中期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ156	中期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ157	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ158	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ159	中期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ160	中期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ161	後期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ162	後期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ163	後期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ164	後期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ165	後期	AN23c2	黒色土2
Ⅰ166	後期	AN23c1	黄白色砂
Ⅰ167	後期	AN23d1	不明
Ⅰ168	後期	AN23d2	黄色砂上面
Ⅰ169	後期	AN23b1･c1	黒色土2下
Ⅰ170	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ171	後期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ172	後期	AN23b1･c1	黄白色砂
Ⅰ173	後期	AN23c1	黄白色砂
Ⅰ174	後期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ175	後期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ176	後期	東西畦	不明
Ⅰ177	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ178	後期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ179	後期	AN23d2	黒色土2
Ⅰ180	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ181	後期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ182	後期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ183	後期	AN23c1	黒色土2
Ⅰ184	後期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ185	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ186	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ187	後期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ188	後期	AN23c1	黄白色砂
Ⅰ189	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ190	後期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ191	後期	AN23d2	黒色土1上半
Ⅰ192	後期	AN23c2	黒色土1･2
Ⅰ193	後期	AN23d2	黒色土1下半
Ⅰ194	後期	AN23c2	黒色土1
Ⅰ195	後期	AN23e2	黒色土2
Ⅰ196	後期	AN22b5	下層流路
Ⅰ197	後期	AN23b1･c1	下層流路
Ⅰ198	後期	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ199	後期	AN23b1･c1	黄白色砂
Ⅰ200	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ201	後期	AN23e1	黄白色砂
Ⅰ202	後期	不明	不明
Ⅰ203	後期	AN23d2	黒褐～黒1の間
Ⅰ204	後期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ205	後期	AN23b1･c1	黄白色砂
Ⅰ206	後～晩期	AN23b1	褐色砂礫
Ⅰ207	晩期	AN23c1	黒褐色土
Ⅰ208	晩期	AN23e1	黒灰色土
Ⅰ209	晩期	北西調査区	黒褐色土上面
Ⅰ210	晩期	AN23c1	黒褐色土
Ⅰ211	晩期	北西調査区	灰褐色砂質土
Ⅰ212	晩期	AN23d2	茶褐色土
Ⅰ213	晩期	AN22e3	灰褐色砂質土
Ⅰ214	晩期	北西調査区	灰褐色砂質土
Ⅰ215	晩期	AN22c3･c4	黒褐色土
Ⅰ216	晩期	AN23b1･b2	黒色土1
Ⅰ217	晩期	北東調査区	黒褐色土
Ⅰ218	晩期	AN23b1･c1	黒色土1上面
Ⅰ219	弥生前期	AN22d3･d4	黒褐色土上面
Ⅰ220	弥生前期	AN23c1	黒褐色土
Ⅰ221	縄文底部	AN23b1･c1	黄白色砂礫5
Ⅰ222	縄文底部	AN23c2	黒色土2
Ⅰ223	縄文底部	AN23d3	SD7
Ⅰ224	縄文底部	AN22e3･e4	SD19
Ⅰ225	縄文底部	AN23e1	黄白色砂

4　弥生中期の遺跡

⑴ 遺　　構（図版３，図13）

弥生中期から古代の遺構は，中世の遺構と同様に，Ｙ＝2160付近を境に東側では第27層の上面，西側では第５層上面で検出された。埋土が黒灰色土であることから，中世の遺構とは明瞭に区別できた。ただし,弥生中期から古代の遺構を埋土で区分することはできず，出土遺物や遺構の切り合いなどから，年代を決定した。埋土である黒灰色土は，本来調査区全面に堆積していたと考えるが，中世以降の削平により，溝など深く掘り込まれた部分がかろうじて残存しており，遺構も部分的な確認にとどまったものが多い。

弥生中期の遺構として，土坑および方形周溝墓を構成すると想定できる溝を検出した。

土　　坑　　ＳＫ13とＳＫ14がある。調査区西端北寄りでみつかったＳＫ13は，長径1.5m，短径0.7mの不整楕円形で，深さ0.25mをはかる。甕（Ｉ253）が出土した。調査区北端西寄りでみつかったＳＫ14は，古代の溝ＳＤ21に切られる。長径1.0m，短径0.7mの楕円形を呈し，深さ0.1m前後。南東隅より壺（Ｉ242）が倒立した状態で出土している。

方形周溝墓　　溝を確認したのみであり，封土や主体部はまったく残っていなかった。溝も後世の開発により部分的に確認できたにすぎない。したがって，これらの溝が方形周溝墓の区画溝であると断定することはできないけれども，直角に曲がるコーナーをもつ溝があること，底部穿孔などから墓に供献されたと理解しうる土器が複数の溝からみつかっていることから，方形周溝墓としての復元案を示し（梨地の部分），説明を加える。

方形周溝墓Ⅰは，調査区の北東に位置し，ＳＤ31が北辺，ＳＤ24が南辺を区画すると想定して復元した。１辺８ｍ前後。ＳＤ24は幅1.0m，深さ0.3m，ＳＤ31は削平が著しく，幅0.5m，深さ0.1m前後。ＳＤ24からは，壺（Ｉ227・Ｉ229・Ｉ234）と甕（Ｉ252・Ｉ245）が横倒しで溝底から若干浮いた状態で出土している。ＳＤ31からは，甕（Ｉ255）と横倒しになった完形の高杯（Ｉ276）が溝底から若干浮いた状態で出土している。中世柱穴出土の甕（Ｉ248）および穿孔のある底部（Ｉ266）も，その位置がＳＤ24と重なるため，本来はこの溝に所属していたものと理解する。

方形周溝墓Ⅱは，調査区中央に位置する。ＳＤ25が北辺と東辺，ＳＤ32が西辺を区画すると想定して復元した。１辺８ｍ前後。ＳＤ25は幅0.6m，深さ0.2m，ＳＤ32は幅0.5m，深さ0.15mをはかる。ＳＤ24と25は接しているが，切り合いはつかめなかった。ＳＤ32より，壺（Ｉ240）が出土している。

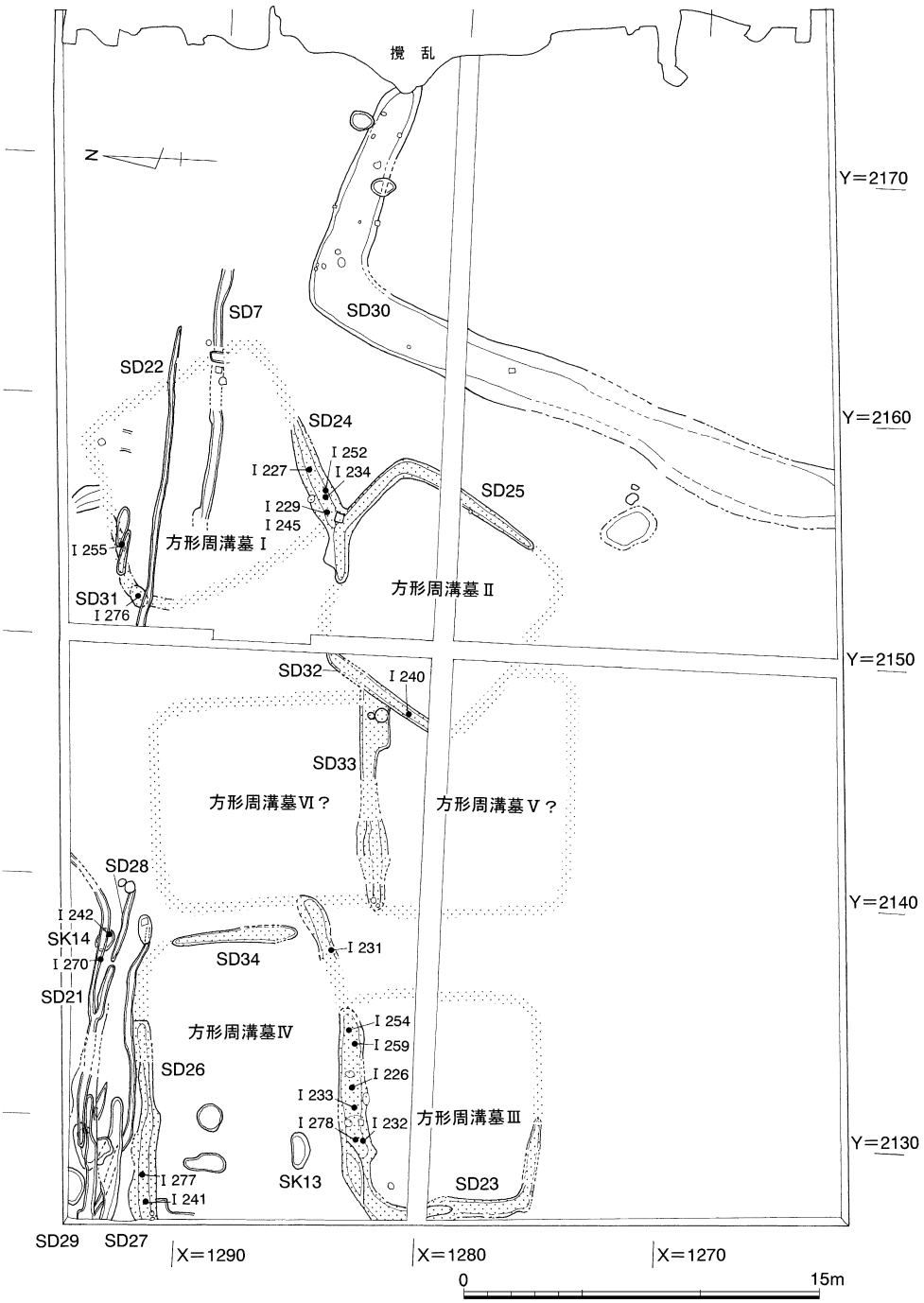


図13　弥生中期～古代の遺構　縮尺1/300

方形周溝墓Ⅲは，調査区西辺に位置し，ＳＤ23が北辺，西辺，南辺を区画する。１辺７～８ｍ前後。ＳＤ23は幅0.7～1.2ｍ，深さ0.2ｍ前後。ＳＤ23の北側を画する溝中から，壺（Ｉ226・Ｉ231～Ｉ233），甕（Ｉ254・Ｉ259），コップ形の小型土器（Ｉ278）が横倒しの状況で出土している。Ｉ254が溝底に貼り付くような形で出土したほかは，溝底から10㎝以上浮いて出土している。中世柱穴出土の壺（Ｉ239）も，その位置がＳＤ23と重なるので，本来この溝に属していたものであろう。

方形周溝墓Ⅲの北側に推定復元できるものを方形周溝墓Ⅳとする。北側をＳＤ26，東側をＳＤ34が画し，南側はＳＤ23を方形周溝墓Ⅲと共有する。西側は調査区外へと続く。南北は８ｍ前後，東西の長さは不明。ＳＤ26から，鉢（Ｉ277）が倒立した状態で溝底から若干浮いて出土したほか，壺（Ｉ241）が出土している。

以上のような復元が正しいとすると，方形周溝墓ⅠとⅡ，ⅢとⅣは１組となって，東西方向に並列するようにみえる。そうすると，Ⅰ・ⅡとⅢ・Ⅳのあいだの空閑地にＳＤ33を区画溝とする方形周溝墓の存在を想定できるかもしれない。ただし，ＳＤ33はＳＤ32によって切られており，切り合いの位置関係から判断して，方形周溝墓Ⅱは封土を一部壊して墳墓を形成したと想定しなくてはならなくなる。出土土器に大きな年代差を考慮しがたいから，これはいささか不自然である。あるいはＳＤ33は方形周溝墓をつなぐ連結溝としての機能をもっていたのかもしれない。よって，方形周溝墓４基を想定復元し，蓋然性は低いがさらに２基存在した可能性もあると指摘するにとどめておく。

⑵ 遺　　物（図版11～16，図14～21，表２）

弥生中期後葉の土器が土坑や溝，第５層上面あるいは中世遺構などから出土した。個々の遺物の出土地点は表２に掲げ，器種別に解説を加える。

細頸壺（Ｉ226～Ｉ228）　Ｉ226は頸部の径5.9㎝前後，胴部最大径19.6㎝，残存する高さ19.4㎝をはかる。口縁部は欠失するが，頸部に波状文を２帯，頸胴部の境に直線文を櫛描きで描いている。胴上半は丁寧な撫で調整ののち，上から直線文－波状文－直線文－波状文－波状文を櫛描きで表現する。櫛描文の原体は，幅約1.4㎝の割り板である。さらに櫛描文帯をはさんで４個１組の円形浮文で５箇所（３箇所残存）飾る。胴部下半は，左上がりの刷毛目調整ののち縦方向の篦磨き。胴部内面は，刷毛目調整を施し，胴部最大部よりやや上の部分に，指押さえの痕跡が顕著に残る。指押さえは，刷毛目ののちにおこなわれており，胴の上部と下部を別々に作って接合した可能性が考えられる。外面と内面の刷毛目原体は別物である。底部中央に，径２㎝の焼成後穿孔がある。

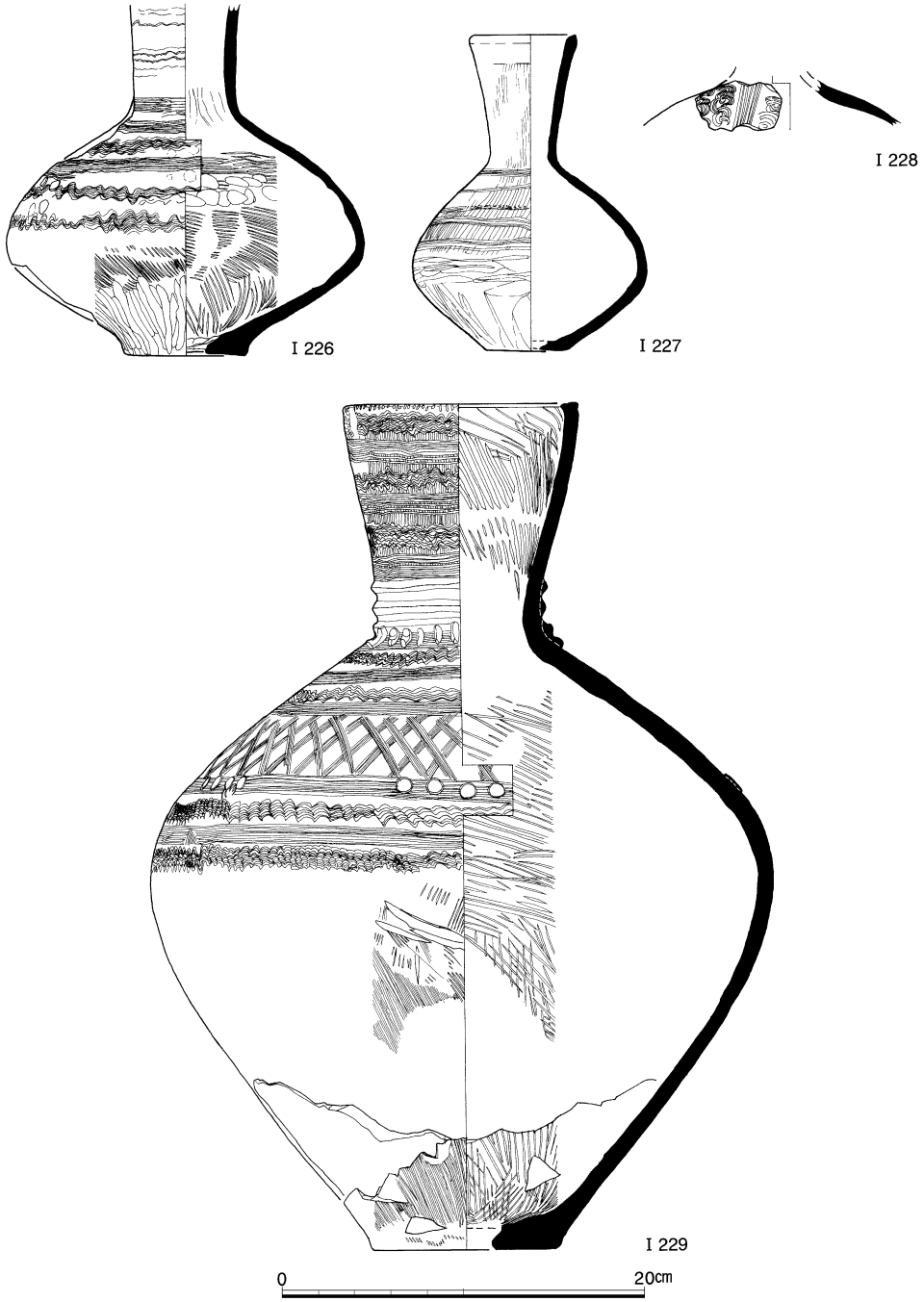


図14　弥生中期の土器(1)（Ⅰ226～Ⅰ228細頸壺，Ⅰ229直口壺）

Ⅰ227は底部の穿孔を除いて，完全な形で遺存していた。口径5.6㎝，胴部最大径12.8㎝，高さ17.4㎝。口頸部は縦方向の刷毛目，胴上半は右上がりの刷毛目，胴下半は縦方向の粗い篦磨き，胴最大径部分には横方向の篦磨きを施している。胴上半を５帯の櫛描直線文で飾る。櫛描文は右回りで，描き継ぎはない。櫛描文の原体は，幅６㎜の割り板である。口頸部内面は撫で調整。胴下半は刷毛目，上半は刷毛目ののち，横撫でを加えているようである。底部に，長径1.4㎝・短径1.1㎝の楕円形の穿孔を施している。

Ⅰ228は胴上部の破片。櫛描直線文で縦方向に分割し，そのあいだを櫛描波状文で埋めている。櫛描文の原体は幅10㎜の割り板。内外面，撫で調整。

直口壺（Ⅰ229）　Ⅰ229は，口径13.0㎝，胴部最大径34.2㎝，高さ45.0㎝をはかる大型の直口壺。底部から口縁部まで残存するが，外面の剝落が著しい。口頸部は，縦方向の刷毛目，胴部上半は丁寧な撫で，下半は刷毛目調整。内面は，外面よりも目の粗い原体による刷毛目調整。口縁部に面取りを施し，外端部を刻む。櫛描文を主体とした文様構成は以下のとおり。口頸部には，上から波状文と直線文を交互に３帯施し，その下部に，断面三角形の突帯を３条めぐらせる。胴部上半には，上から直線文－波状文－直線文－波状文－直線文で飾り，その下位に斜格子文を施し，さらに直線文と波状文を交互に２帯施している。最上位の直線文には，棒状浮文を32個前後貼り付け，斜格子文直下の直線文には，４個１組の円形浮文で６箇所飾る。底部に焼成後の穿孔をもつ。

短頸壺（Ⅰ230～Ⅰ239）　高さ27～29㎝前後で，口頸部がほぼ直立，胴部の張りが弱く細長い形態を呈する壺。口縁部の凹線文，刻み目文を除くと，目立った装飾を施さない。内面は刷毛目調整。外面は，口頸部は縦方向の刷毛目調整，胴部は叩き調整ののち，刷毛目調整で仕上げるものが多い。叩きは，痕跡を顕著に残すもの（Ⅰ231・Ⅰ234）と刷毛目で消され，かすかに残るもの（Ⅰ230・Ⅰ232・Ⅰ233・Ⅰ237）があり，叩きの有無が確認できないもの（Ⅰ239）もある。

いずれも，丁寧な横撫でによって口縁端部に面取りを施すことは共通するが，口縁部外面は，1条の凹線をめぐらせるもの（Ⅰ231・Ⅰ232・Ⅰ236・Ⅰ237・Ⅰ239），横撫でするもの（Ⅰ230・Ⅰ238），口縁外端部に刻みを加えるもの（Ⅰ233・Ⅰ234）の違いがある。Ⅰ234は口縁部の一部を弧状に抉っている。この点を除くと，Ⅰ233に酷似する。水差とすべきかもしれないが，抉りのある側および抉りに対応する反対側のいずれにも把手はつかないので，ここに分類しておく。

Ⅰ233には胴部下半に被熱痕跡がみられ，煮炊きに用いたと想定しうる。Ⅰ232には底部

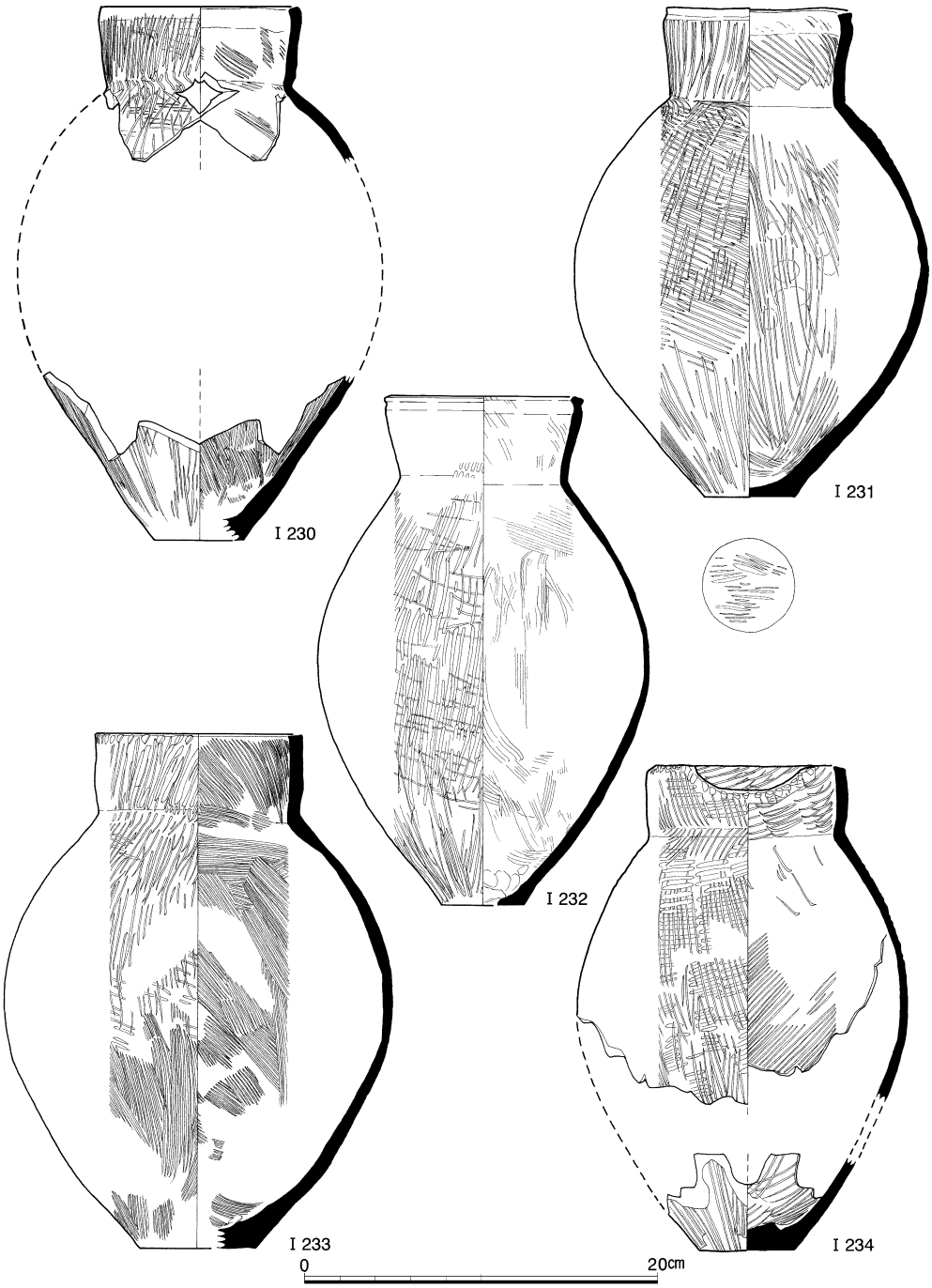


図15　弥生中期の土器⑵（Ⅰ230～Ⅰ234短頸壺）

中央に径２㎝の焼成後穿孔がある。Ⅰ230の口縁部内面や胴下部外面には，幅６㎜前後でやや弧状になる傷跡が無数に見られる。同様の傷跡は，Ⅰ241（内面）・Ⅰ253（外面）・Ⅰ269（底面）・Ⅰ276（内外面）にもみられる（図版16－８）。齧歯類による噛み痕の可能性を考えている。

広口壺（Ⅰ240～Ⅰ243）　口縁部が外へ開く短頸壺。Ⅰ242によれば，文様で飾らない土器である。Ⅰ240・Ⅰ242の口縁端部は，上方へわずかに拡張し，横撫でを施す。頸胴部の内外面とも，刷毛目調整で，叩きの痕跡はみられない。

水　差（Ⅰ244）　口縁部が直立し，胴部が算盤珠形を呈する水差。底面は剝落しており，脚台がついた可能性がある。胴部下半は磨いて仕上げ，胴部上半から口頸部にかけては，丁寧な撫で調整。内面は撫でて仕上げる。口縁端部は面取りする。半環状の把手のつく側の口縁部に弧状の抉りをいれる。口縁直下に凹線を１条めぐらし，櫛描直線文を２帯，頸部に施す。頸胴部の境を簾状文で画し，胴部上半を櫛描流水文で飾っている。口縁の抉りにそって浅くなりつつも凹線文はめぐるが，櫛描直線文と簾状文は抉りのある位置には施さない。櫛描文・簾状文の原体は同一で，幅13㎜の割り板である。

甕（Ⅰ245～Ⅰ258）　甕は，「く」字状に口縁部が外反する形態で，口縁端部の刻み目文の有無で，2種類に大別できる。

Ⅰ245～Ⅰ251は口縁端部に刻みを施している類。高さ20～30㎝のものが多いが，Ⅰ245は高さ14.5㎝前後の小型品である。胴部外面は，刷毛目仕上げするもの（Ⅰ245・Ⅰ247・Ⅰ251），叩きによる調整ののち，胴部下半のみ刷毛目仕上げをするもの（Ⅰ249・Ⅰ250），叩きのち上半まで刷毛目を施すもの（Ⅰ248）がある。胴部内面は刷毛目調整を基本とし，Ⅰ248～Ⅰ251には下半を削りにより仕上げている。

口縁端部の刻みは，Ⅰ245を例外として，刷毛目原体を用いる。Ⅰ245は６個１組の刻みが４箇所（２箇所残存）に加えられており，口縁部内面に，刻みに対応するように爪形がみられることから，左手の親指と人差し指を用いて刻みを施したと理解できる。

Ⅰ252～Ⅰ257は，口縁端部に刻みを施さない類。Ⅰ252～Ⅰ254は高さが35㎝前後になる大型の甕。胴部外面は刷毛目調整，内面の上半は刷毛目調整，下半は削りによって仕上げている。口縁端部は，上方ないしは上下にやや拡張し横撫でする。Ⅰ252･Ⅰ254は底面も，刷毛目仕上げとしている。Ⅰ252は胴下部に，長径19㎜，短径14㎜をはかる楕円形の穿孔をもつ。

Ⅰ255は高さ24㎝をはかる中型品。Ⅰ256～Ⅰ258は底部まで復元できないため高さは不

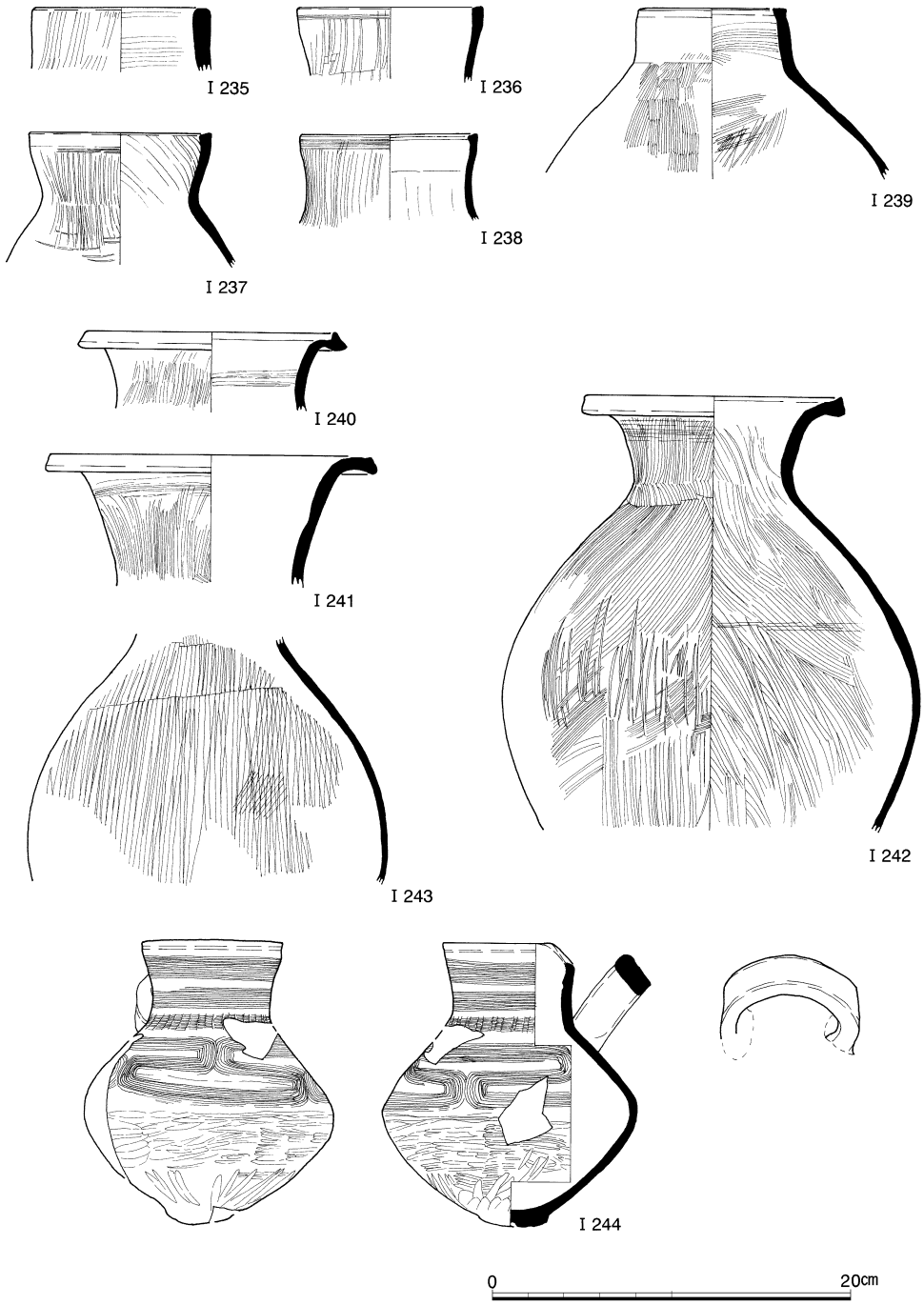


図16　弥生中期の土器⑶（Ⅰ235～Ⅰ239短頸壺，Ⅰ240～Ⅰ243広口壺，Ⅰ244水差）

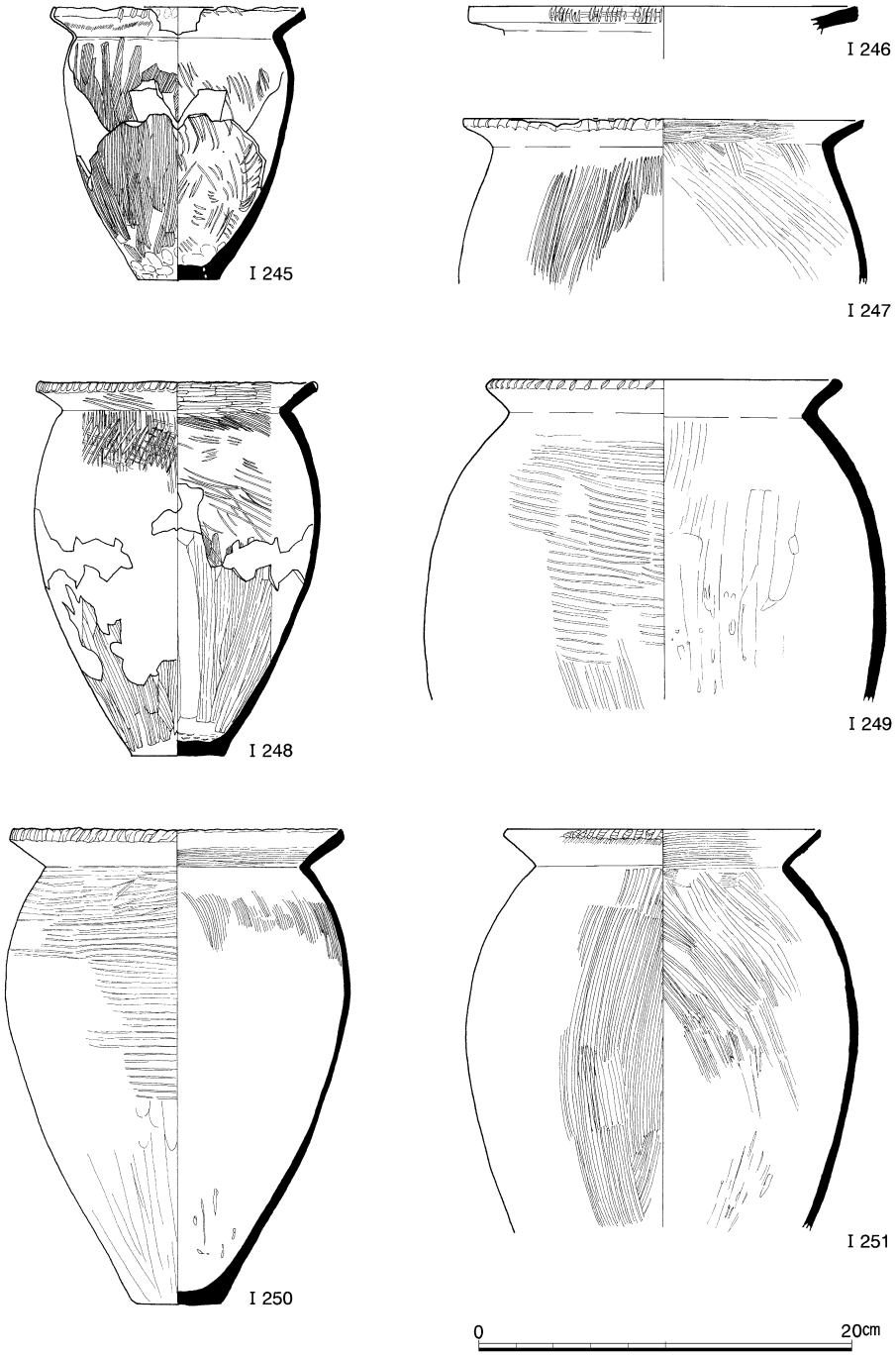


図17　弥生中期の土器(4)（Ⅰ245～Ⅰ251甕）

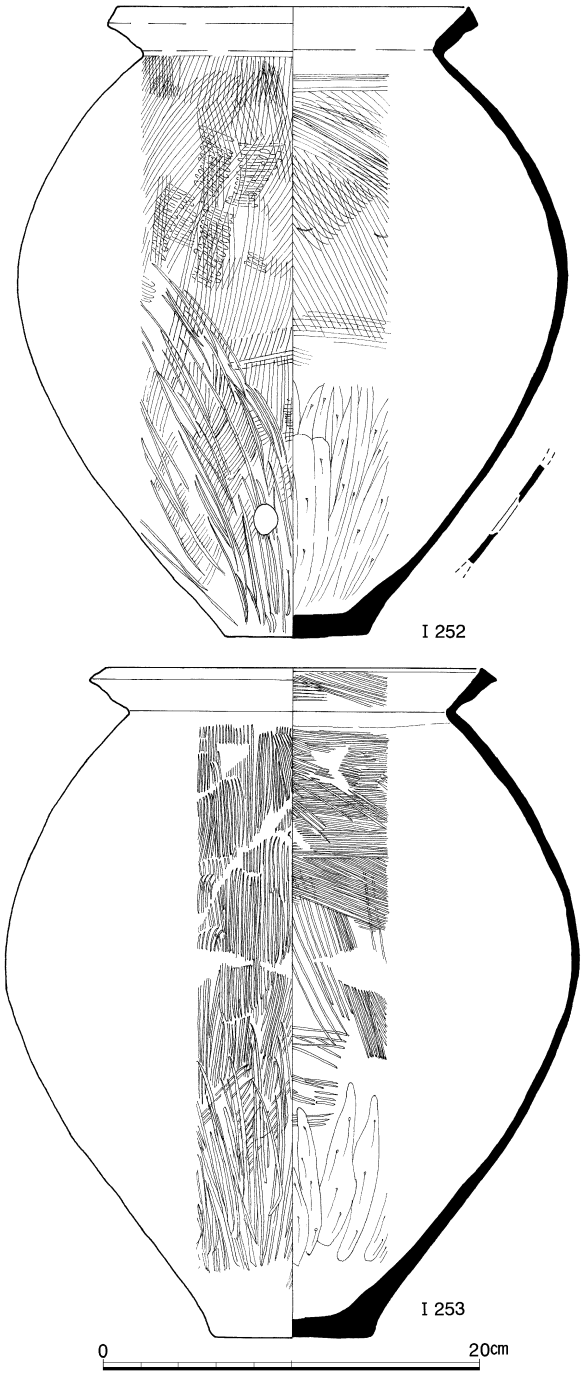


図18　弥生中期の土器(5)（Ⅰ252・Ⅰ253甕）

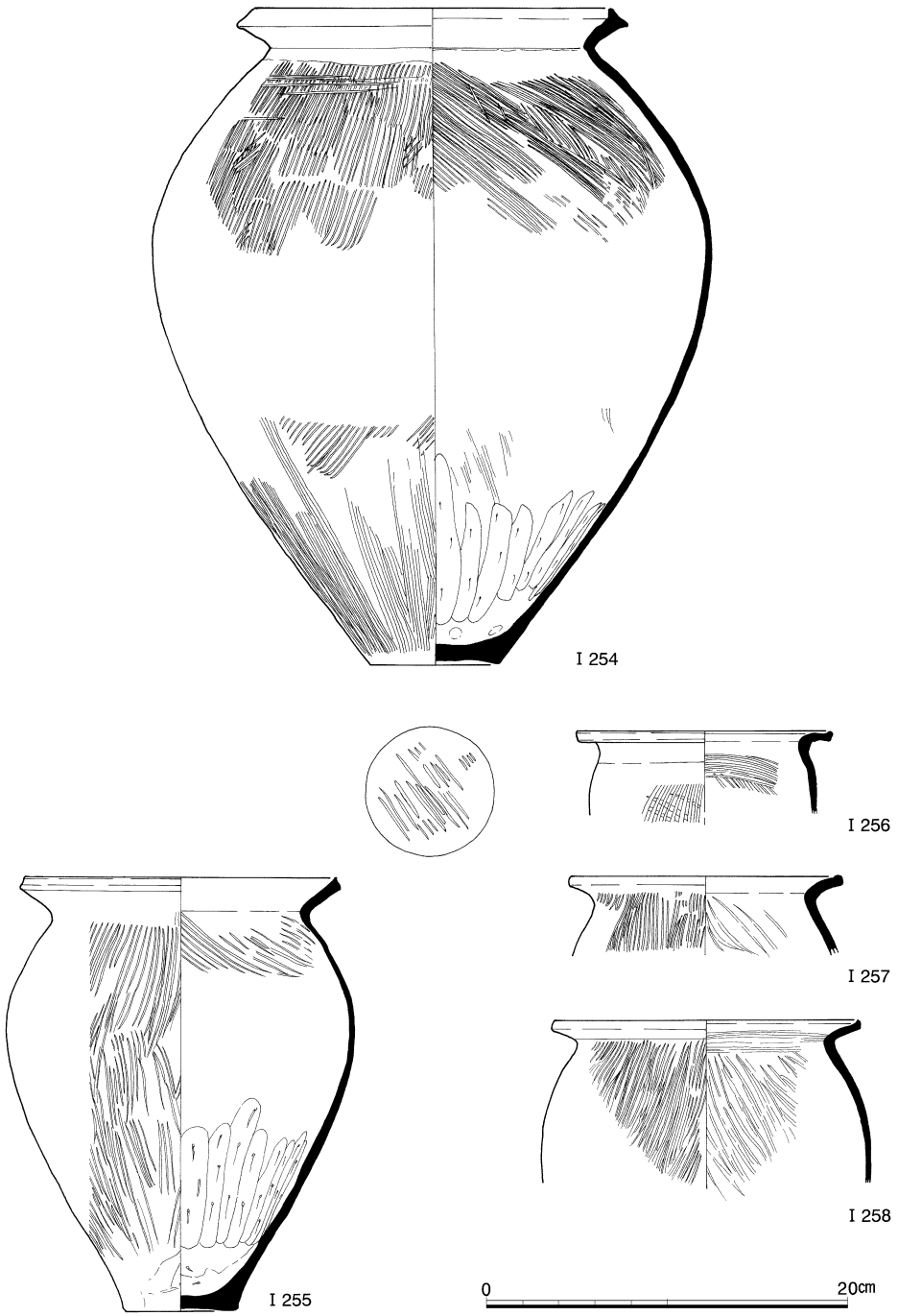


図19　弥生中期の土器⑹（Ⅰ254～Ⅰ258甕）

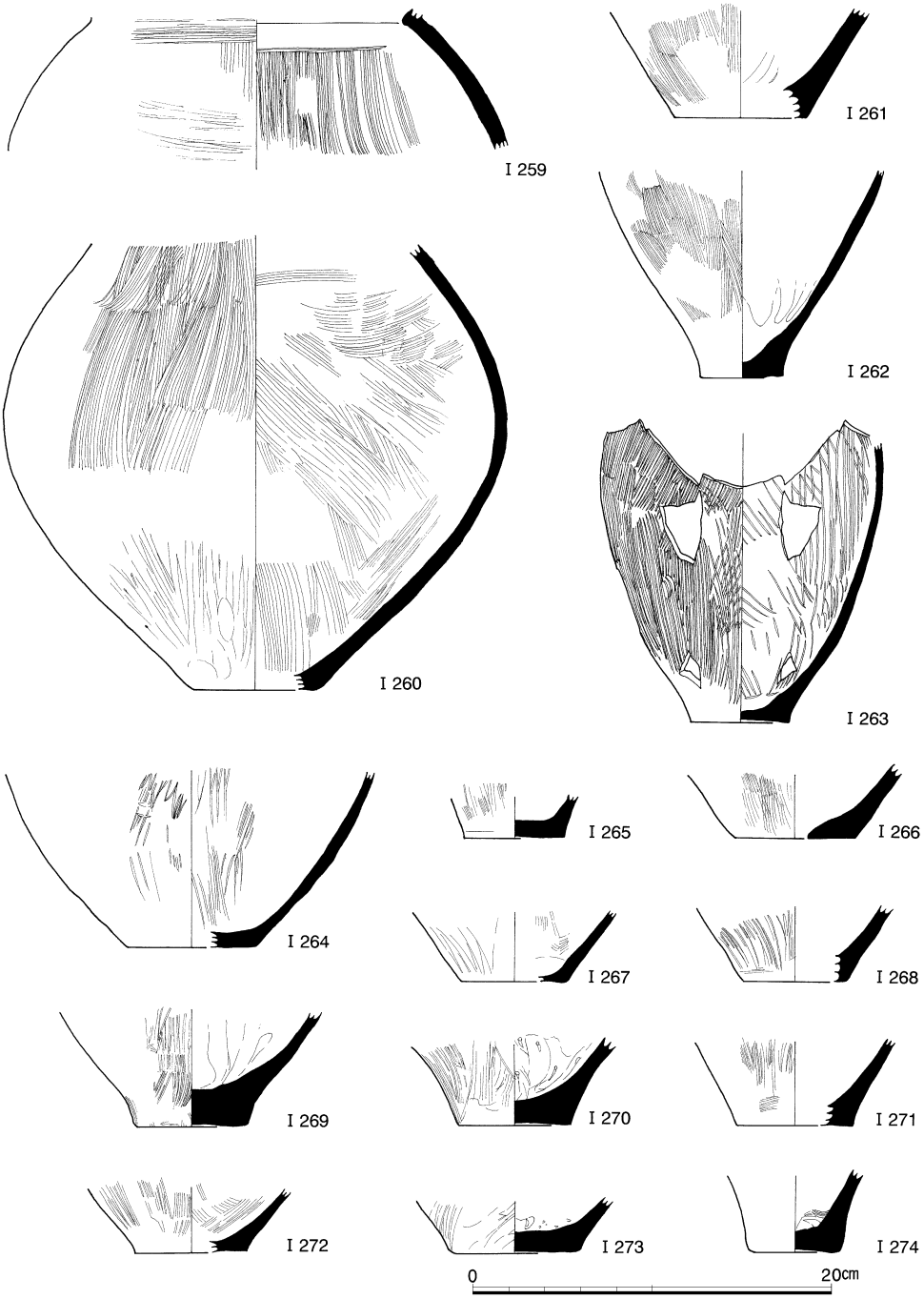


図20　弥生中期の土器(7)（Ⅰ259～Ⅰ274壺・甕の胴部・底部）

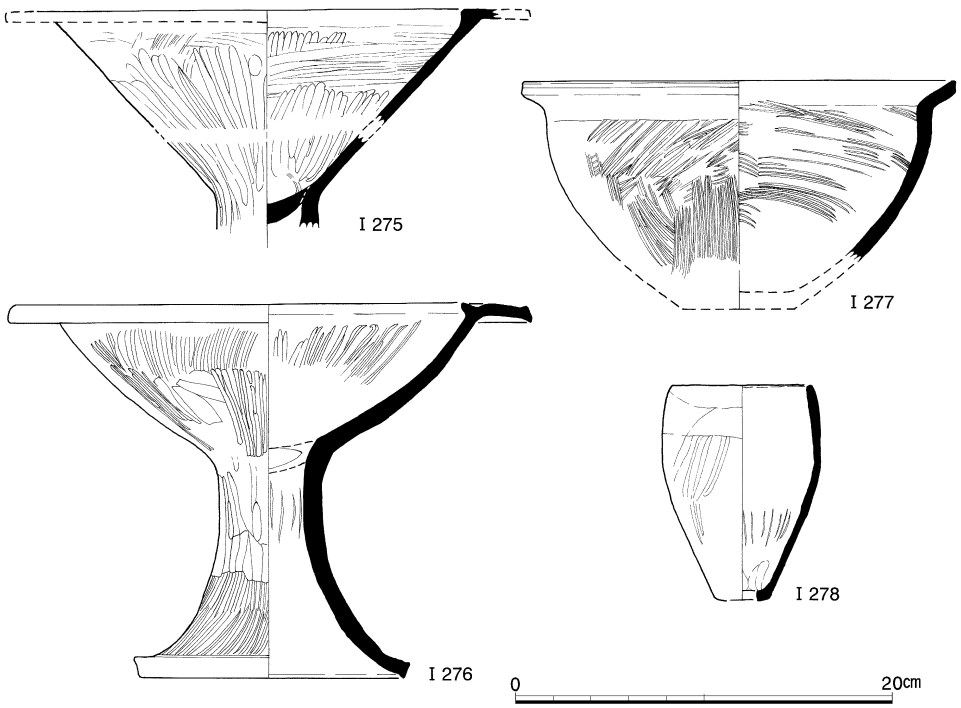


図21　弥生中期の土器⑻（Ⅰ275・Ⅰ276高杯，Ⅰ277鉢，Ⅰ278コップ形）

明であるものの，口径から判断して，中・小型品となろう。胴部外面，内面上半は刷毛目仕上げ，内面下半は篦削りで仕上げている。

壺・甕の胴部・底部（Ⅰ259～Ⅰ274）　壺・甕の胴部から底部資料を一括した。胴部外面は，刷毛目で調整する。Ⅰ260･Ⅰ264は，胴下部にさらに磨きを施して仕上げ，Ⅰ267は底部直上を削りで仕上げている。内面の調整も刷毛目が多いが，Ⅰ269・Ⅰ270・Ⅰ273は削りを施している。Ⅰ265・Ⅰ270は，底面を刷毛目調整している。Ⅰ266は底部中央に，焼成後の穿孔をもつ。

高　　杯（Ⅰ275・Ⅰ276）　水平に口縁部がのびる高杯。杯底部は，円盤充填法で作る。Ⅰ275は脚部と口縁端部を欠失する。杯部が直線的に立ち上がり，口縁部内端が三角形状に肥厚する。杯部の外面・内面とも，篦磨き。Ⅰ276は，杯部がやや内湾し，口縁部内端が斜め上方へ突出する。口縁端部は，横撫でにより面をなし，上下にわずかに肥厚する。杯部・脚部ともに刷毛目調整ののち篦磨きするが，脚部下半，杯部上半には磨きは及んでいない。脚部内面は横撫で調整で，しぼりの痕跡を残す。杯部内面は篦磨き。

鉢（Ⅰ277）　ボウル形の胴部に，外傾する口頸部がつく鉢。口縁端部に１条の凹線が

めぐる。胴部は内外面とも刷毛目調整。胴部上半には目の粗い刷毛目（６条／２㎝），胴部下半には目の細かい刷毛目（16条／２㎝），内面には中間の刷毛目（12条／２㎝）が観察でき，刷毛目原体を使い分けているようである。

コップ形（Ⅰ278）　口径8.7㎝，高さ11.4㎝をはかる小型の土器。最大径が胴部中程にあり，口縁部がやや内傾する。胴部は縦方向，口辺部は横方向に，撫でて仕上げる。底部に焼成後の穿孔をもつ。

表２　弥生中期土器の出土地区と出土遺構・層位

番号	地　区	層位･遺構	器　種	備　考
Ⅰ226	AN22d4	SD23	細頸壺	底部穿孔
Ⅰ227	AN23d1	SD24	細頸壺	底部穿孔
Ⅰ228	AN22c5	茶褐色土	細頸壺	
Ⅰ229	AN23d1	SD24	直口壺	底部穿孔
Ⅰ230	AN22d4	黄砂上面	短頸壺	
Ⅰ231	AN22d4	SD23	短頸壺	
Ⅰ232	AN22d3	SD23	短頸壺	底部穿孔
Ⅰ233	AN22d4	SD23	短頸壺	
Ⅰ234	AN23d1	SD24	短頸壺	
Ⅰ235	AN22d3･d4	茶褐色土	短頸壺	
Ⅰ236	AN22d3	中世柱穴	短頸壺	
Ⅰ237	立合調査区		短頸壺	
Ⅰ238	AN22e3	茶褐色土	短頸壺	
Ⅰ239	AN22d4	中世柱穴	短頸壺	
Ⅰ240	AN22d5	SD32	広口壺	
Ⅰ241	AN22e3	SD26	広口壺	
Ⅰ242	AN22e4	SK14	広口壺	
Ⅰ243	AN22e3	黄砂上面	広口壺	
Ⅰ244	AN22c4	黄砂上面	水差	
Ⅰ245	AN23d1	SD24	甕	
Ⅰ246	AN22d4	SD23？	甕	
Ⅰ247	AN22e4	SD26？	甕	
Ⅰ248	AN23d1	中世柱穴	甕	
Ⅰ249	AN23c1	中世柱穴	甕	
Ⅰ250	AN23e1	SD31	甕	
Ⅰ251	AN22d4	SD23？	甕	
Ⅰ252	AN23d1	SD24	甕	側面穿孔
Ⅰ253	AN22d3	SK13	甕	
Ⅰ254	AN22d4	SD23	甕	
Ⅰ255	AN23e1	SD31	甕	
Ⅰ256	AN22d3	黒灰色土	甕	
Ⅰ257	AN23d1	茶褐色土	甕	
Ⅰ258	AN22d5	SX61	甕	
Ⅰ259	AN22d4	SD23	胴部	
Ⅰ260	AN22d3	茶褐色土	胴部	
Ⅰ261	AN22d4	茶褐色土	胴～底部	
Ⅰ262	AN23d1	黄砂上面	胴～底部	
Ⅰ263	AN23d1･e1	茶褐色土	胴～底部	
Ⅰ264	AN22e3･e4	SD26	胴～底部	
Ⅰ265	AN22e3･e4	SD26	底部	
Ⅰ266	AN22d5	中世柱穴	底部	底部穿孔
Ⅰ267	AN22e4	SD26？	底部	
Ⅰ268	AN22e4	SD26？	底部	
Ⅰ269	AN22d3	SD23	底部	
Ⅰ270	AN22e4	SD21	底部	
Ⅰ271	AN22d3	中世柱穴	底部	
Ⅰ272	AN22d4	黄砂上面	底部	
Ⅰ273	AN22d4	黄砂上面	底部	
Ⅰ274	AN22d4	中世柱穴	底部	
Ⅰ275	AN22e4	茶褐色土	高杯	
Ⅰ276	AN23e1	SD31	高杯	
Ⅰ277	AN22e3	SD26	鉢	
Ⅰ278	AN22d3	SD23	コップ形	底部穿孔

地区割りは，図４（９頁）参照。

5　古墳時代の遺物

本調査では，古墳時代の遺構は認められなかった。しかしながら，中近世の包含層や攪乱など，さまざまな層位および地点から，家形埴輪片12点および円筒埴輪と推定される破片２点が出土した（図版17，図22・23，表３）。

家形埴輪　家形埴輪片は一括資料ではないものの，胎土や製作技法からみて同一個体に由来する可能性が高く，特徴的な破片から入母屋造に復元できる。ここではこれらの破片のうち，部位を推定できる９点を図示する。

Ⅰ279は下屋根部の隅棟の破片である。軒先に粘土を貼りつけて帯状に一段高く成形し，そこに梯子状の文様を線刻する。横線の後に縦線が刻まれていること，Ａ面の線刻がＢ面の線刻よりも先行することが，切り合い関係から判断できる。また，隅角部では，Ａ面の文様とＢ面の文様に，上下方向の食い違いを生じている。軒先端部には赤色顔料が鮮明に遺存する。下屋根部上面にもうっすらと遺存している箇所が認められることから，本来は外面の全面に塗布されていたものが，樹立後に風雨にさらされて流失してしまったものと考えられる。内面には，粘土紐接合部に薄く粘土を補充し，撫でつけた痕跡が明瞭に残る。また，内面の上部には壁体部の剝離痕が観察される。

Ⅰ280は上屋根部の大棟に据えられていたと推定される鰭飾りの破片である。外形のほとんどを欠損しているが，上端の遺存部分がＳ字状のカーブを描くことから，逆Ｓ字系の鰭飾り〔清野1996，p.204〕が左右対称に配置された形状であった可能性が高い。Ａ・Ｂ両面ともに線刻が施される。上半には，外形の相似形を志向したと思われる線刻内に，鰭飾りの傾き方向と同じ方向に傾斜する斜線を刻む。下半には，軒先と同様の梯子状文様を線刻する。ただし，Ｂ面の方は２条の横線の中央にもう１条の横線を刻んでいる。Ａ・Ｂ両面とも，Ⅰ279と同様に，横線が縦線に先行する。また，Ａ・Ｂ両面とも，線刻の中軸線と外形の中軸線にずれが生じているが，Ａ面のずれの方がより顕著である。Ｂ面には，わずかに赤色顔料が遺存する。

Ⅰ281は上屋根部の破片で，網代を線刻している。縦線と横線を単位ごとに交互に刻んでいったことが，線刻の切り合い関係から窺える。粘土を貼りつけることによって，立体的に押縁を表現する。

Ⅰ282も上屋根部の破片で，網代を線刻している。本来の天地はわからない。

Ⅰ283は壁体部に開けられた窓の上縁部分の破片と推定する。下縁には粘土を貼りつけ

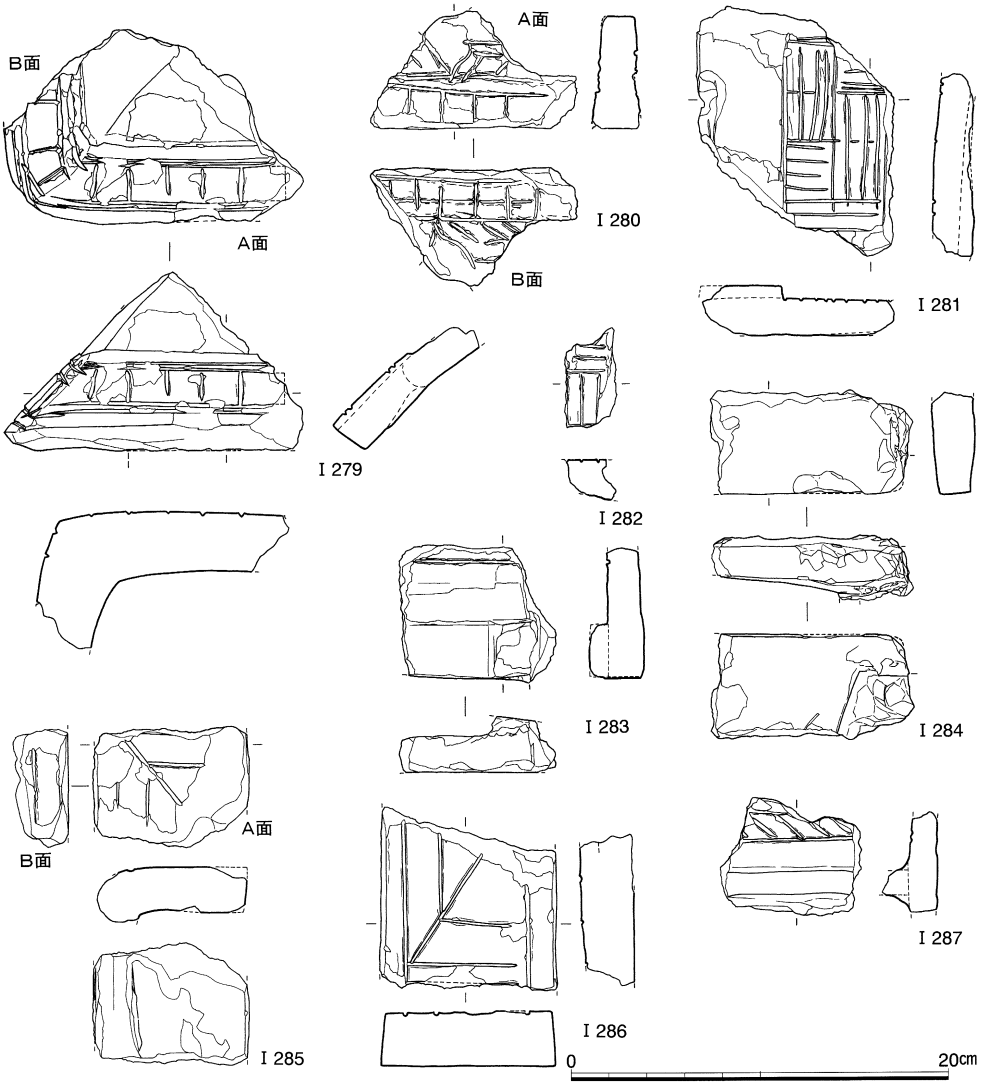


図22　家形埴輪（Ⅰ279～Ⅰ287）

て帯状に一段高く成形するが，大部分が剝離してしまっている。その上方には１条の横線を刻む。外面には赤色顔料が良好に遺存する。

Ⅰ284は入口の庇の破片と推定する。突出が大きいため，楣（のき）というよりは庇と表現した方が適切と考える。下面には入口の柱表現の剝離痕が残る。庇端部と下面には，赤色顔料が遺存する。本来は上面にも塗布されていたものと考えられる。

Ⅰ285は軸部の隅柱の破片である。Ａ面には鍵手文が線刻され，Ｂ面にも鍵手文を構成

すると思われる線刻がみとめられる。Ａ面の鍵手文は斜線を先に刻み，その後に横線を刻んだことが，線刻の切り合い関係からうかがえる。内外面ともに赤色顔料が遺存する。

Ⅰ286は軸部の柱の破片である。Ⅰ285と同様の鍵手文を線刻するが，斜線の傾きがⅠ285とは逆になっている。まず外側の縦線とそれと直交する横線を刻んだ後，その交点に交わるように斜線を刻み，最後に内側の縦線および横線を刻んだことが，線刻の切り合い関係から窺える。内外面ともに赤色顔料が良好に遺存する。

Ⅰ287は軸部の壁体部と基部，および裾廻突帯の破片と考えられる。裾廻突帯の上方に２条の横線を刻み，その間に右下がりの斜線を刻む。胎土はほかの８点の破片とよく似るが，やや薄手であることから，この破片のみ別個体である可能性も考えられる。

円筒埴輪　円筒埴輪片２点はいずれも小片であるが，突帯を含む。

Ⅰ288は，器壁の厚さ1.2㎝をはかり，高さ３㎜程度の低平な突帯をもつ。外面にタテハケ目を観察できるが，器表の風化が著しいため，突帯貼りつけとの先後関係は判然としない。色調は，内外面ともに橙色を呈する。

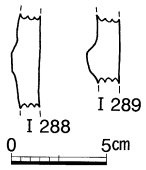


図23　円筒埴輪

Ⅰ289は，器壁の厚さ1.1㎝をはかり，高さ６㎜程度の突帯をもつ。風化が著しく，内外面ともに調整痕を観察できない。色調は，外面は明黄褐色，内面は橙色を呈する。

これらの円筒埴輪は，古墳時代後期のものであろう。

表３　埴輪の出土地区と出土層位

番号	品　目	部　位	赤彩	線刻	備　考	出土地区	出土層位・遺構
Ⅰ279	家形埴輪	下屋根(隅棟)	○	○		AN22e3	黒灰色土上面
Ⅰ280	家形埴輪	上屋根(鰭飾)		○		AN22e4	黒灰色土？
Ⅰ281	家形埴輪	上屋根		○	網代表現	AN23e1	溝群上層清掃
Ⅰ282	家形埴輪	上屋根		○	網代表現	AN23e1	茶褐色土
Ⅰ283	家形埴輪	壁体部	○	○	突帯	AN23d3･e3	中世溝群清掃
Ⅰ284	家形埴輪	入口庇	○	○		AN23d3	黒灰色土
Ⅰ285	家形埴輪	隅柱	○	○	鍵手文	AN22e5	SD２埋土
Ⅰ286	家形埴輪	柱	○	○	鍵手文	AN23d2	黄砂直上
Ⅰ287	家形埴輪	壁体部･基部･裾廻突帯		○	やや薄手	AN22e4	黒灰色土or茶褐色砂質土
－	家形埴輪	不明		○		AN22d4	黄砂上面清掃
－	家形埴輪	不明			突帯剝離痕？	AN23d3	中世溝群上層
－	家形埴輪	不明				AN22e5	SX６
Ⅰ288	円筒埴輪	突帯を含む			タテハケ調整	－	SD19
Ⅰ289	円筒埴輪	突帯を含む			摩滅が著しい	AN22d5･e5	攪乱坑

6　古代の遺跡

⑴ 遺　　構（図13）

この時期に属する遺構は，調査区南東でみつかった大型の溝，調査区北辺でみつかった東西方向の小溝群であり，遺構密度は低い。中世の遺構に混入した古代の遺物からみて，中世の開発でこの時期の遺構が破壊されている可能性も高いが，北に隣接する220地点で，多種多様の遺構・遺物がみつかっているのとは対照的なありかたである。

ＳＤ30は大型の溝で，幅1.6～2.6m，検出面からの深さ0.2～0.3mをはかる。西南西から北北西の方向へ22m以上延び，Ｘ＝1285，Ｙ＝2165付近で東側へ直角に折れ曲がる。南端は調査区外へ続き，東端は攪乱で失われており，全体の規模は不明である。埋土からは，土師器小片が少量出土したのみで，時期を特定できない。古代の区画溝とともに，調査区内から埴輪が出土していること，北に隣接する111・220地点から方墳がみつかっていることから〔五十川･飛野1984，伊藤1999a〕，古墳の周濠の可能性も捨てきれない。ここでは，可能性の指摘にとどめて，周辺地区の調査成果を待ちたい。

調査区北辺のＳＤ７・21・22・27～29は，幅0.2～0.5m，検出面からの深さ0.2m前後をはかる東西方向に延びる小規模な溝群。時期の特定できる溝は少ないが，ＳＤ28からは10世紀，ＳＤ７からは10～11世紀の遺物が出土している。中世にも，ほぼ同様の位置に溝が掘削されるので，東西方向の区画が古代に遡って形成されたことを示唆するものとして重要である。

⑵ 遺　　物（図24）

Ⅰ290は弥生時代の溝ＳＤ26上面から出土した須恵器杯蓋。内面のかえりは短かい。つまみを欠失する。岩倉Ⅱ段階（７世紀後半）に比定できる〔宮本1992〕。Ⅰ291はＳＤ28出土。黒色土器Ａ類の椀。外面の篦磨きはみられない。10世紀前半頃。Ⅰ292～Ⅰ294はＳＤ７出土。Ⅰ292は土師器皿。「て」字状口縁手法Ｂ$_4$類。Ⅰ293は須恵器の底部。Ⅰ294は灰釉

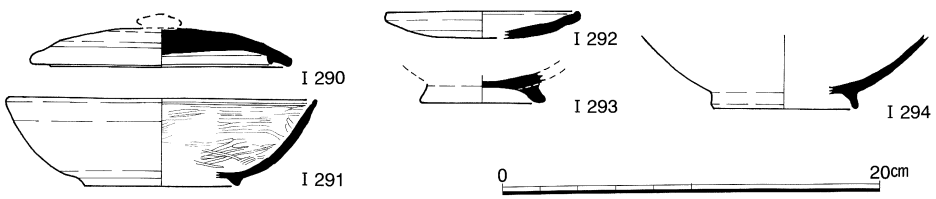


図24　古代の遺物

陶器椀。高台は外側へ踏ん張り，釉は漬け掛けされる。これらは10～11世紀中頃のものである。

なお，中世の遺構に混在した古代の遺物は第７節で，古代の瓦は中世の瓦塼類とともに一括して，第８節で報告する。

７　中世の遺跡

⑴ 時期の設定と遺物の分類

今回の出土遺物の中で，主体を占めるものである。記述の便宜と，遺構の変遷が把握できるように，在地産の土師器椀・皿類の編年を基準にして，3時期に大別し，各時期を古段階，新段階に細分して示すことにした。

中世１期は，１段撫で手法Ｄ類が主体を占める時期であり，遺構によっては２段撫で手法のＣ類や１段撫で手法のＥ類がともなうもの。12世紀末～13世紀ごろ。古段階は，12世紀末から13世紀前半，新段階は13世紀後半。

中世２期は，１段撫で手法Ｅ類が主体を占める時期であり，おおむね14世紀代。14世紀中頃を境に，前半の古段階と後半の新段階にわける。

中世３期は，Ｅ類とともに１段撫で手法Ｆ類が出現している時期で，15世紀を中心とし，新段階の一部は16世紀前葉に下る可能性がある。15世紀中頃を境に，前半の古段階と後半の新段階に分ける。

在地産土師器の分類は，『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』にしたがい，その暦年代観については，小森俊寛・上村憲章の成果〔小森・上村1996〕を参考にした。そのほか，貿易陶磁器は，山本信夫〔山本2000〕，森田勉〔森田1982〕，上田秀夫〔上田1982〕，東播系須恵器は森田稔〔森田1995〕，常滑は中野晴久〔中野1995〕，古瀬戸は藤澤良祐〔藤澤1991･1993･1995ａ・ｂ・1996〕，備前は間壁忠彦〔間壁1991〕，信楽は木戸雅寿〔木戸1995〕の分類に対比した結果を記した。

なお，金属製品のうち鉄製品は第９項，銭貨は第10項，瓦塼類については第８節で記述した。

⑵ １期の遺構

１期の遺構には，溝・井戸・配石・廃棄土坑・集石土坑・埋甕などがある（図25）。

溝　　南北方向にのびるＳＤ12～14と東西方向にのびるＳＤ５・６・８・９がある。

ＳＤ12は幅１～1.5m，深さ0.4m前後をはかる断面Ｕ字形の溝。真北より約３°東へ振

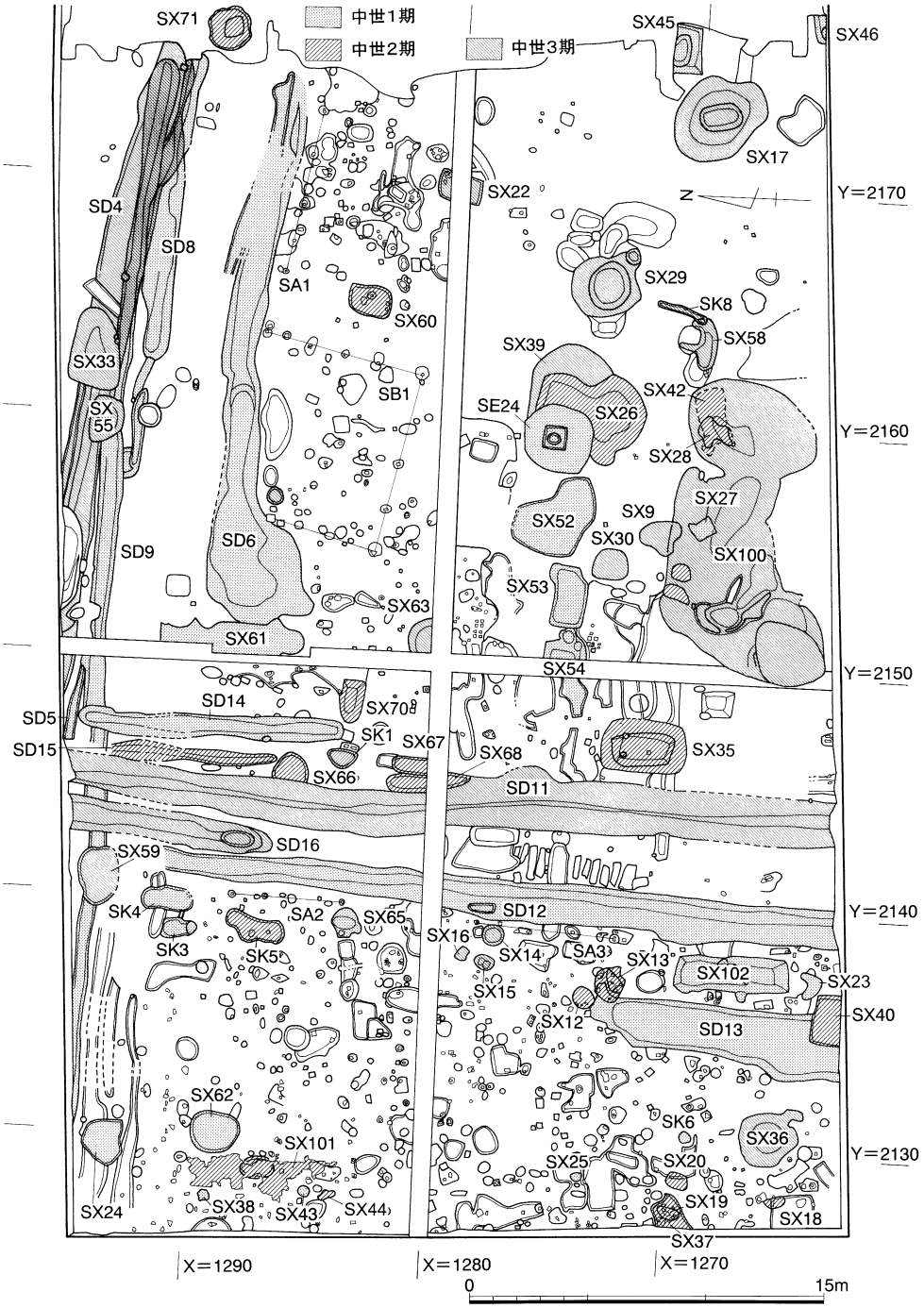


図25　中世の遺構　縮尺1/300

る。南端は調査区外へと続く。北端はＸ＝1292付近で浅くなり続きがはっきりしなくなるが，東西溝ＳＤ９の手前で収束していたようである。ＳＤ12の西側を並行してはしるＳＤ13は，幅２～2.8m，深さ0.4mをはかる。南端は調査区外へとのび，北端はＸ＝1273付近で収束している。ＳＤ14はＳＤ12の５m東をはしる溝で，幅１m，深さ0.5mをはかる。南端はＸ＝1284付近から始まり，北端はＸ＝1295付近で収束しており，東西溝ＳＤ９をきっている。

東西方向の溝のうち，ＳＤ５・８・９は，調査区北辺を東西方向にのび，幅0.5～１m前後，深さ0.4mをはかる。検出状況の良好なＳＤ９でみると，真北より約３°東へ振れており，南北溝とほぼ直交している。調査区の北側の地点における立合調査でも，東西方向にのびる12～13世紀の溝が確認されていることから，これらの東西溝は道路の側溝としての役割を想定することができる。

一方，幅1.5m前後をはかるＳＤ６は，上に述べた東西溝の約２m南を東西にのびるが，Ｙ＝2152付近で，幅４mほどの袋状になって収束しており，その西側には配石ＳＸ61が構築されていた。これらが一連のものであれば，州浜とみることもでき，東側から導水した園池状の施設と想定することもできる。ただし，ＳＤ６は砂地に掘り込まれており，滞水を示すような埋土は確認されなかった。

配　石　東西溝ＳＤ６の西側で検出されたＳＸ61は，南北６m，東西1.5mの範囲に，拳大から人頭大の礫が敷き詰めてあった（図版５－３・４，図26）。地山を削平し，東西の比高差0.4mの斜面を作りだし，礫を敷き詰めている。上に述べたように，ＳＤ６と一連の遺構で，州浜状施設の可能性を指摘しておく。

井　戸　ＳＥ24は本調査区でみつかった唯一の井戸である（図版４－６）。石室ＳＸ26によって上部を破壊されていたが，方形縦板組の井戸側と曲物を設置した水溜が残存していた。井戸底の標高は，48.37mである。

廃棄土坑　不用になった器物類を廃棄した土坑として，ＳＸ24，ＳＫ6，ＳＤ６上面がある。調査区北西隅で検出したＳＸ24は瓦を廃棄した土坑。調査区南西辺に位置するＳＫ６は食用後の貝を廃棄した小土坑。整理箱１杯分の巻貝が出土した。種類は，オオタニシ（*Cipangopaludina japonica*）とマルタニシ（*Cipangopaludina chinensis malleata*）で，前者が多かった(1)。いずれも水田などに棲息し食用となる。ＳＤ６上面は，ＳＤ６西辺の袋状の部分の上面でとらえられた土器溜。廃絶後の窪地を利用したものであろう。

集石土坑　遺物よりも礫をおもに廃棄している土坑を集石土坑として区別した。ＳＸ

23・43・62・65はＳＤ12より西側，ＳＸ27は調査区南東部でみつかっている。

土　　坑　性格を異にする各種土坑を一括した。

調査区西北部でみつかったＳＫ３・４は東西に並んで検出された隅丸長方形の土坑。ＳＸ102は，ＳＤ12と13の間で検出された土坑で，幅1.5m，長さ５ｍをはかる大規模な土坑である。

一方，調査区中央南寄りでみつかったＳＸ52～54や東南隅でみつかったＳＸ45は砂層を深く掘り抜いて構築されており，砂取り穴の可能性がある。

埋　　甕　Ｘ＝1289，Ｙ＝2127.4の地点でみつかったＳＸ38は，常滑焼大甕を正位の位置で埋置していた。口頸部の破片は，内側に落ち込んだ状態で検出された。

⑶ ２期の遺構

溝・石室・石敷・廃棄土坑・集石・集石土坑・土坑などがある（図25)。

溝　この時期に属する確実な溝は，南北方向の溝ＳＤ15のみ。幅0.6～0.9ｍ，深さ0.4ｍ。南端は，Ｘ＝1287付近から始まり，Ｘ＝1294付近で止まる。

石　　室　地面を掘りくぼめ，四周に礫を壁状に配置した遺構を石室として報告する。１期に属するものはなく，2期から３期にかけて構築された。

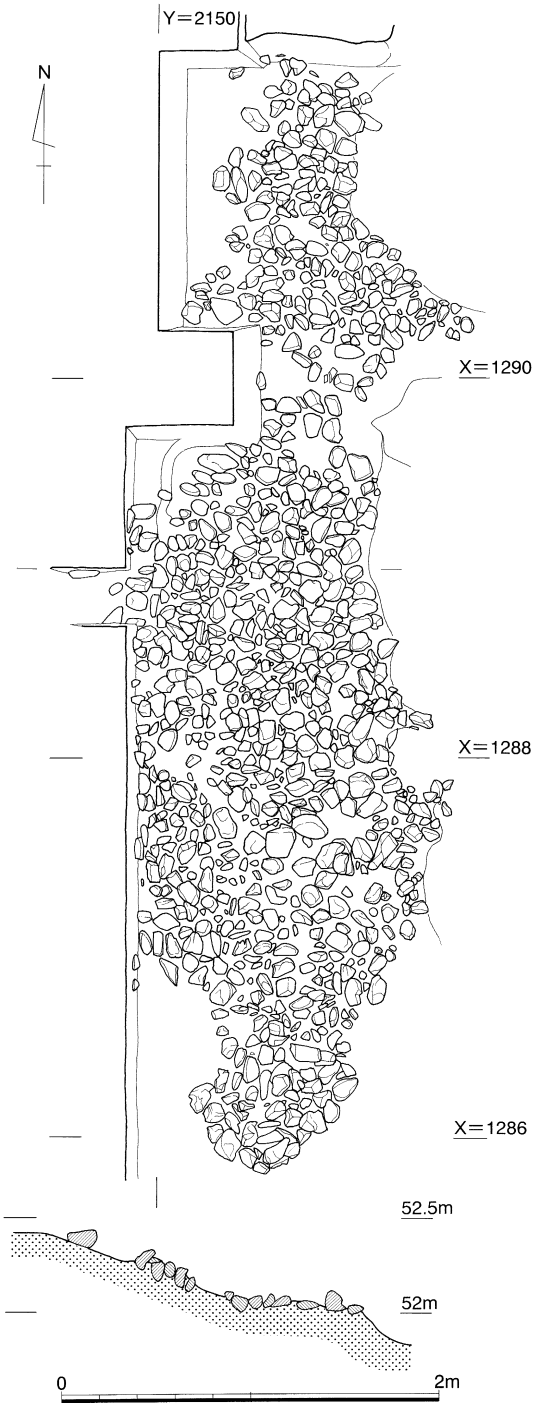


図26　配石ＳＸ61　縮尺１/40

調査区中央をはしる南北の溝群よりも，東側に分布する。四周の壁の残りのよいものは少ないが，これは上部を後世に攪乱されたという要因とともに，石組井戸と比較してみたときの，石積みの乱雑さにもその一因があると想定している。

調査区中央，南辺でみつかったＳＸ35は，石室の規模がもっとも大きく，また残りもよいものであった（図版７－１～３，図27）。掘り方は平面隅丸長方形で，規模は南北3.6m，東西2.4m，検出面からの深さ１m前後。この掘り方の内部に，10～40㎝前後の川原石を長方形に積み上げている。下部に大型，上部に小型の礫を用いる傾向にある。内法の規模は，長軸が下部で2.4m前後，上部で2.5m，短軸が下部で１m，上部で1.2m前後である。埋土に礫が多数落ち込んでおり，本来はもう少し高さがあったものと思われる。底面は，中央に向かってわずかにくぼむすり鉢状を呈し，北側と中央の西寄り付近で土坑が検出された。北側の土坑は，短辺20㎝，長辺30㎝の長方形で，深さ25㎝，中央の土坑は，短辺30㎝，長辺55㎝の長方形の土坑で，深さ25㎝をはかる。

調査区南東部でみつかったＳＸ26は，検出時は集石土坑状を呈し，発掘の結果上部の破壊された石室であることが判明した（図版６－１・２，図28）。掘り方は２段掘り状で，直径３mをこえる不整円形の掘り方の中に１辺1.4m前後の隅丸方形の掘り方が築かれ，その中に石室が構築されている。３段程度残存する西壁の石積は残りが良かったが，それ以外の石積は本来の位置をたもっていないと思われる。内法の規模は，80㎝前後。

ＳＸ60は調査区北東部に位置する（図版６－３・４，図28）。掘り方は隅丸長方形で，規模は長辺1.9m，短辺1.2～1.3m，深さ0.4m前後をはかる。東側になる長辺の石積は残存していなかったが，それ以外の３辺については，川原石による石積が２～３段前後残存しており，短辺の石組はとくにしっかりとしていた。石室の内法の規模は，長軸が1.4m前後，短軸は0.6～0.7m前後であろう。底面上には，10～25㎝の厚さで，黒色の有機質泥土が堆積していた。この堆積物の一部を松井章氏に水洗選別していただいたが，遺構の性格を特定できるような動植物遺体は含まれていないとのことであった。中央部に直径35㎝，深さ10㎝の土坑が存在し，なかに礫が１個落ち込んでいたが，この小土坑は床面上に堆積した黒色有機質土を切って構築されており，ＳＸ60に伴なうものか不明である。

石　敷　調査区北西部でみつかったＳＸ101は，10～40㎝の偏平な川原石を敷き詰めた遺構（図版４－３，図29）。後世の遺構や石の抜き取りなどによって残存状況はよくなかったが，幅1.3mで南北方向に5.6m前後，検出した。西端は，長辺を西側に向けて直線になるように配石しており，東端も直線状をなす部分があるため，幅については本来の長

図27　石室ＳＸ35　縮尺１/40

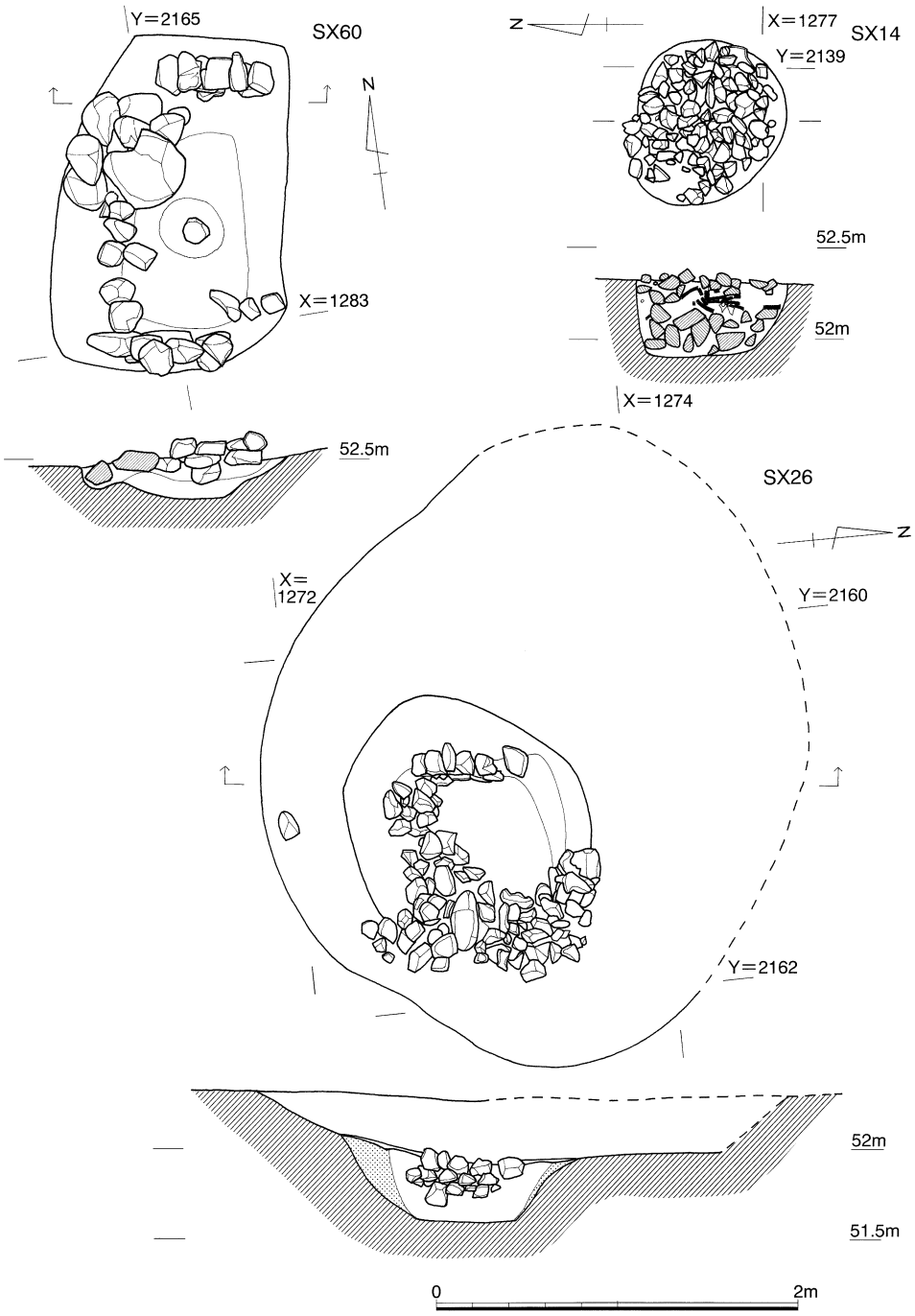


図28　石室ＳＸ60・ＳＸ26，集石土坑ＳＸ14　縮尺１/40

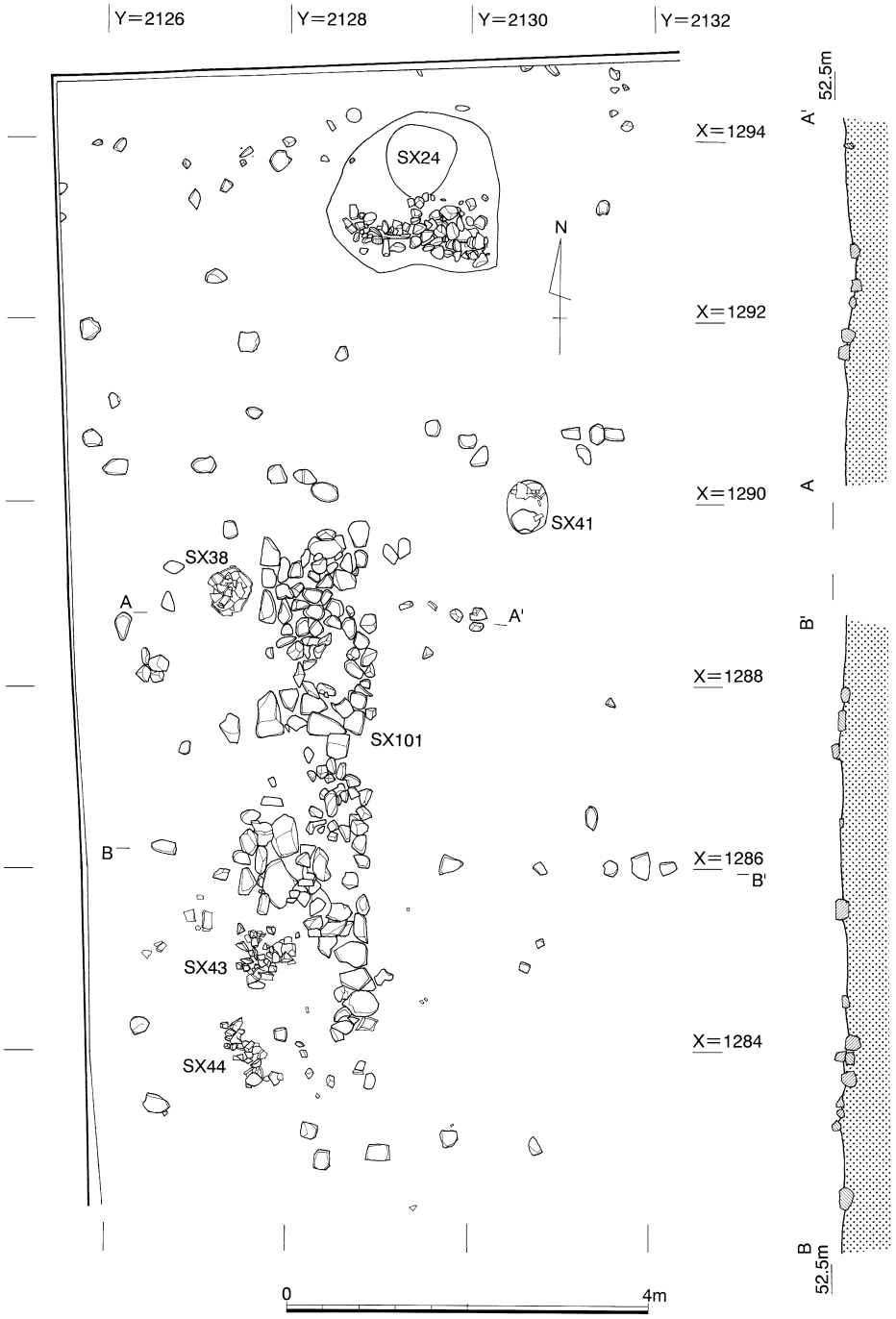


図29　石敷ＳＸ101，瓦溜ＳＸ24，埋甕ＳＸ38，集石ＳＸ41・44，集石土坑ＳＸ43　縮尺１/80

さが保たれているとみなせる。建物に付属する雨落ち施設の可能性が考えられる。

廃棄土坑　ＳＸ25は調査区西辺，ＳＸ28・ＳＸ32・ＳＸ34は調査区南東部でみつかっている。ＳＸ25は，掘り方がはっきりしなかったが，南北0.5m，東西0.35mの楕円形の範囲内から多量の土師器皿が出土した（図版５－２）。

調査区南東部に位置するＳＸ28・32・34はいずれも小土坑で，これらの廃棄土坑のある地点は，長期にわたって廃棄場所として利用されており，3期にはこれらの遺構を覆うような形で，大規模な遺物溜ＳＸ100が形成されている。

集石・集石土坑　明瞭な掘り方がなく礫を集めている遺構と，掘り方がみられ礫を集積した土坑を一括した。いずれも不用になった礫を破棄した遺構が主体を占めると理解しているが，大規模な集石土坑は石室が崩壊した遺構の可能性もある。

ＳＸ12・ＳＸ13・ＳＸ18～ＳＸ20は，集石で，いずれも調査区南西部でみつかっている。ＳＸ44は石敷ＳＸ101の南西辺でみつかった小規模な集石（図29）。

調査区西壁際で検出されたＳＸ37は集石土坑で，上部にＳＸ19が構築されており，一連の遺構かもしれない。調査区南東部のＳＸ42は東西３ｍ，南北１ｍの大規模な土坑のなかに礫が集積していた。もとは石室であった可能性もあり，その場合この上部に構築された廃棄土坑ＳＸ28は，廃絶した石室の跡を利用したゴミ捨て穴と理解できる。

土　　坑　調査区北西部でみつかったＳＫ５は，長さ2.6m，幅１ｍ前後をはかる不整形な土坑。調査区西寄り，南壁際でみつかったＳＸ40は，方形の竪穴状で調査区外へと続く。深さ0.3mをはかる。ＳＤ11に一部切られてみつかったＳＸ66と調査区北東辺でみつかったＳＸ71は，直径1.5～２ｍをはかる平面円形の落ち込みである。並列して検出されたＳＸ67・68は，ＳＸ68の西肩がＳＤ11によってきられる。南北に長い隅丸長方形の落ち込み。

⑷　３期の遺構

３期の遺構には，溝・石室・廃棄土坑・集石・集石土坑・土坑などがある（図25）。

溝　南北方向にのびるＳＤ11･16と東西方向にのびるＳＤ４がある。南北溝ＳＤ11は，Ｙ＝2144付近を南北にはしり，両端とも調査区外へと続いている。幅1.7～2.2m，深さ1.2ｍ前後をはかる断面Ｖ字形の大溝。埋土より多量の遺物が出土した。ＳＤ16は，ＳＤ11の西側をはしる南北溝。南端はＸ＝1287付近より始まり，北側は調査区外へとのびる。幅1.4m，深さ0.9mをはかる。

東西溝ＳＤ４は東端を攪乱で破壊され，西端は調査区外へと続く。幅1.5～２ｍ前後。

主軸を真北より９°東へ振っており，１期の東西溝より６°前後，東への振れが大きく，近世の道路の主軸方向にほぼ一致する。

石　　室　　２基確認した。調査区南西隅に位置するＳＸ17は掘り方不整形で，規模は南北4.3m，東西４ｍ前後，深さは0.8ｍをはかる（図版６－５，図30）。10～50㎝大の川原石を用いて，長軸を南北にとる長方形の石室が構築される。北壁と西壁はよく残っていたが，東壁と南壁は崩落が著しい。内法の規模は，長軸2.3m，短軸２ｍに復元できる。

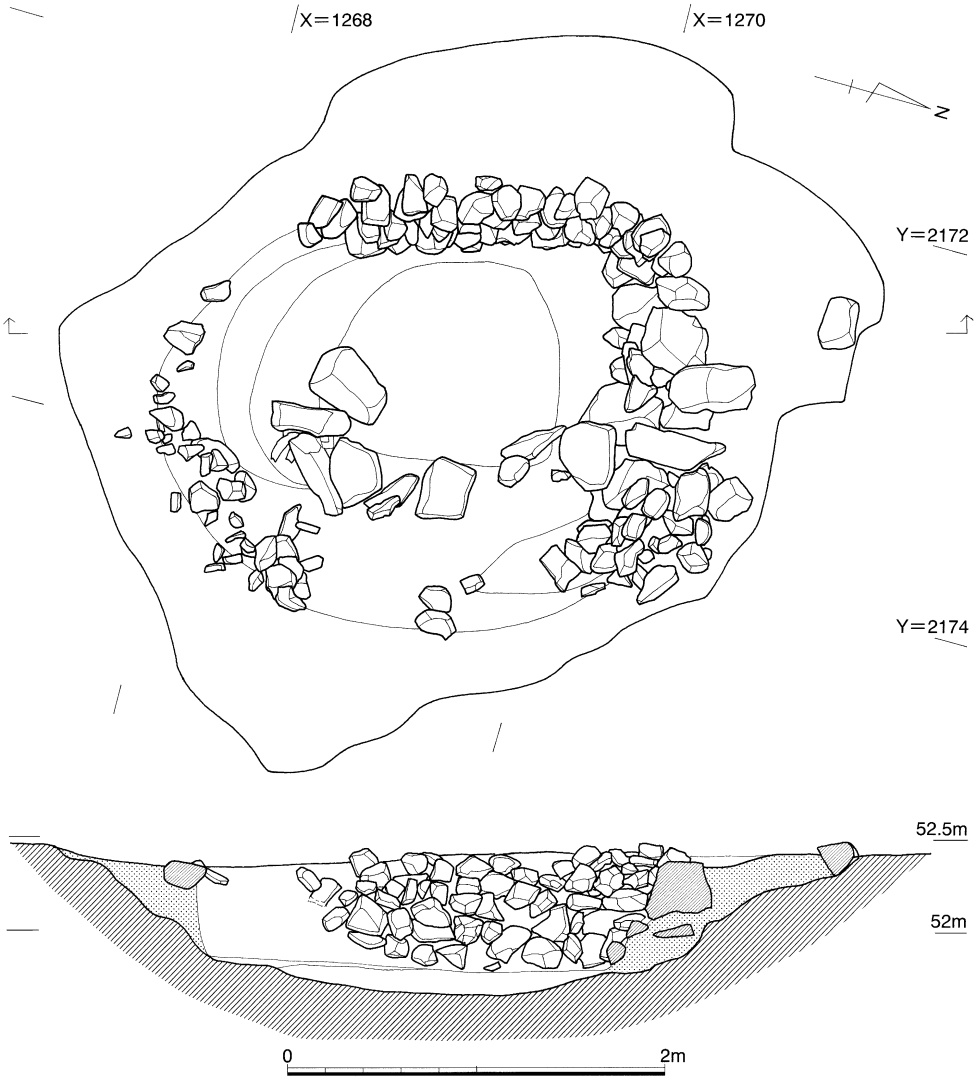


図30　石室ＳＸ17　縮尺１/40

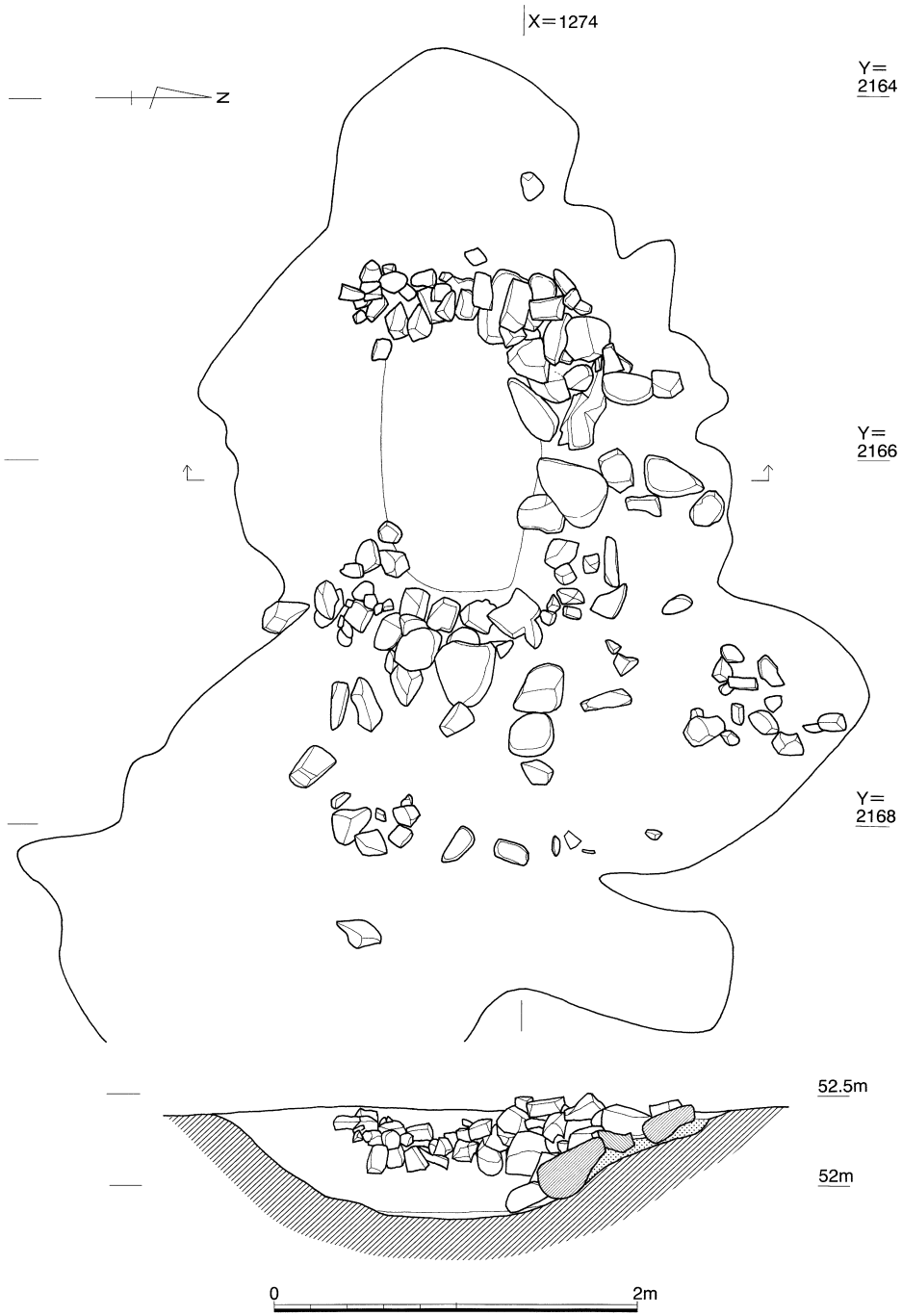


図31　石室ＳＸ29　縮尺１/40

ＳＸ29は，ＳＸ17の北西８ｍ前後の地点に位置する（図版６－６，図31）。掘り方が不整形で，ほかの遺構と切り合っている可能性があり，南北３ｍ，東西2.8ｍ前後の規模が本来の大きさであろう。検出面からの深さは0.6ｍである。10～40㎝大の川原石を用いて，長軸を東西にとる長方形の石室が構築されるが，南壁は礫がほとんど残存せず，北壁も崩壊が著しかった。内法の規模は，長軸1.6ｍ，短軸１ｍ前後に復元できる。

廃棄土坑　ＳＸ100は，調査区中央南辺にひろがる大規模な遺物溜。明瞭な掘り方をもたず，窪地状の範囲に遺物を廃棄している。土師器皿を中心にして，多量の遺物が出土した。ＳＸ30はＳＸ100の北２ｍに位置する1.5ｍ前後の方形隅丸の廃棄土坑。ＳＸ63は調査区中央に位置する円形の土坑で，礫とともに土師器・瓦器などが出土した。

集石・集石土坑　明瞭な掘り方をもたないものに，ＳＸ15，ＳＸ16，ＳＸ21があり，掘り方をもつものに，ＳＸ9，ＳＸ14，ＳＸ22，ＳＸ33，ＳＸ39，ＳＸ55，ＳＸ58，ＳＸ59がある。掘り方をもつものには，調査区南西部に位置するＳＸ14のように（図28），1ｍ前後の規模で，埋土に多量の礫や遺物が含まれる例と，調査区北東部に位置するＳＸ33・ＳＸ55，北西部に位置するＳＸ59のように，4～５ｍの大型の掘り方をもち，埋土に人頭大の礫を多量に含む例がある。後者は，石室が完全に崩壊した状況を示す可能性もある。なお，ＳＸ33・ＳＸ55は溝ＳＤ４を切って構築されている。

土　　坑　ＳＫ８は，調査区南東部，ＳＸ58の東側に位置する溝状の土坑。ＳＸ36は調査区南西部に位置する不定形土坑。

⑸ 時期の特定できない建物・柵列遺構（図25）

溝ＳＤ12より西側一帯およびＸ＝1280以北，Ｙ＝2150以東でＳＤ６より南の空間では，無数の柱穴や礎石になりうる平石がみつかった。柱穴には根石をもつものが多かった。これらが建物や柵などを構成する一部であることはほぼ間違いなく，その並びの検討から建物配置などの復元を試みたが，十分な結果を示すことはできなかった。可能性の高い建物と柵列の復元を以下に示す。

建　　物　ＳＢ１は調査区北東部に位置する。東西南北４間程度の建物。主軸は真北より11°前後，東へ振っており，この主軸方向は３期のＳＤ４の主軸に近い。

柵　ＳＡ１は調査区北東部でＳＤ６の南側を東西にのびる柵。主軸は，ＳＢ１と同じである。ＳＡ２・ＳＡ３はＳＤ12の西側を南北にのびる柵。

⑹ １期の遺物（図版18～20，図32～42）

ＳＤ12出土遺物（Ｉ295～Ｉ333）　Ｉ295～Ｉ315は橙褐色の土師器皿。Ｄ類のうち，口

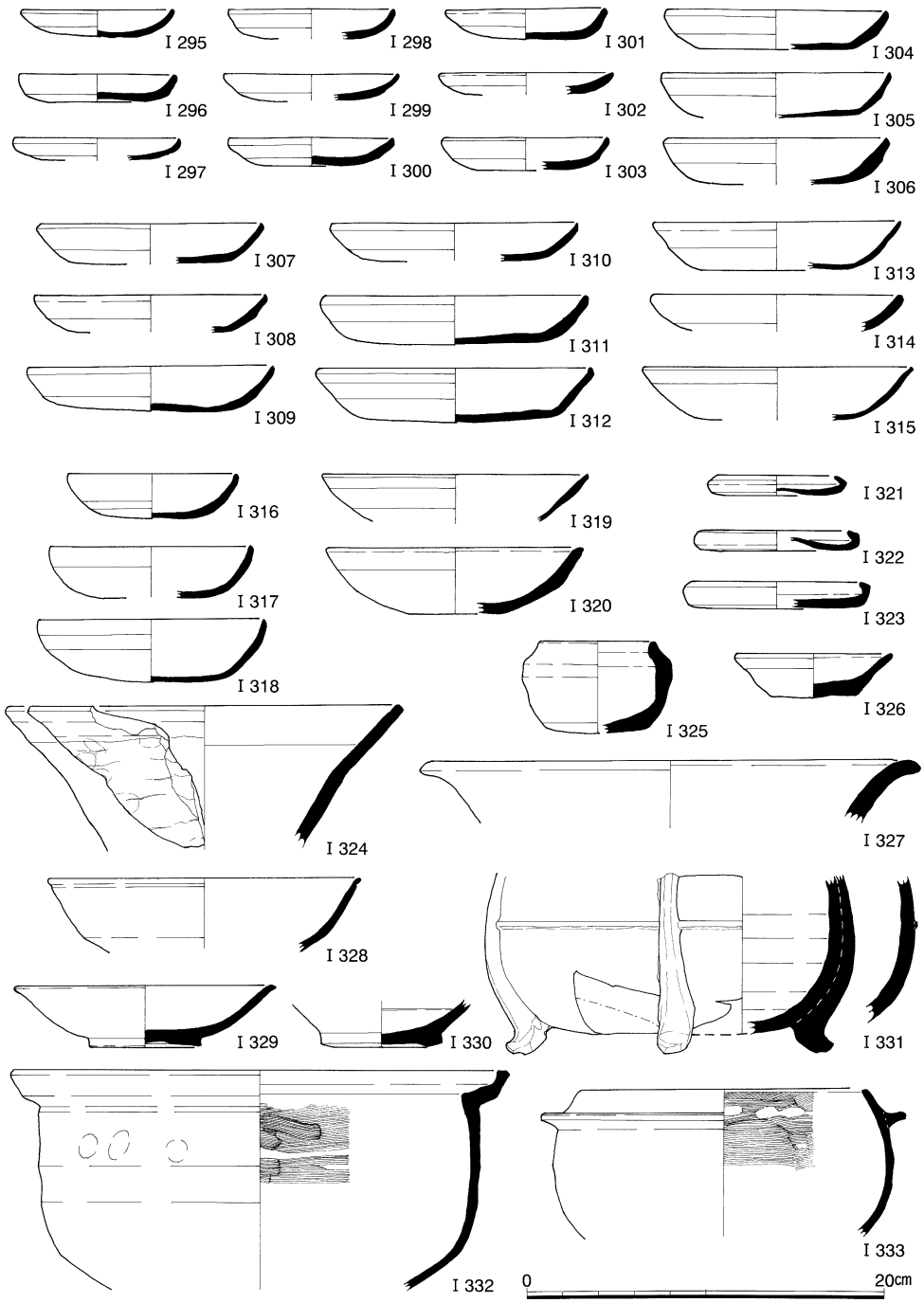


図32　ＳＤ12出土遺物（Ⅰ295～Ⅰ325土師器，Ⅰ327須恵器，Ⅰ326・Ⅰ328・Ⅰ329，Ⅰ331陶器，Ⅰ330白磁，Ⅰ332・Ⅰ333瓦器）

縁端部に面取りを施すD$_4$類･D$_5$類が主体を占める。小は口径8.5～９㎝台，大は12.5～15㎝である。Ⅰ316～Ⅰ318は灰白色の土師器椀。Ⅰ319は土師器椀で，体部外面に横方向の削りの痕跡がみられる。Ⅰ320は赤褐色を呈する土師器椀。内面から口縁部外面にかけて撫で調整で平滑に仕上げているが，体部には亀裂が無数に生じている。型作りの可能性があろう。Ⅰ321～Ⅰ323は土師器受皿。Ⅰ321･Ⅰ322は灰白色，Ⅰ323は橙褐色を呈する。これらの土師器椀・皿類は，1期古段階。

Ⅰ324は土師器鉢。内面から口縁部外面は，撫で調整。体部外面は粘土紐を積んだ痕跡を残す。Ⅰ325は土師器で，口径6.4㎝，高さ5.1㎝をはかり，口縁部がすぼまる形態をとる。口縁部から底部にかけて煤が付着する。Ⅰ326は灰釉系陶器皿。Ⅰ327は須恵器甕の口縁部。Ⅰ328・Ⅰ329は緑釉陶器で，Ⅰ328は体部中位に稜をもつ椀。Ⅰ329は全面施釉する皿で，口縁端部がわずかに外反し，底部は蛇の目高台となる。Ⅰ328は硬質焼成，Ⅰ329は軟質焼成である。Ⅰ330は白磁椀。高台は幅広で，削り出しが浅く，内面には沈線がめぐる。椀Ⅳ類の底部であろう。

Ⅰ331は灰釉陶器四足壺。外面は丁寧な磨きを施す。上半を欠失する。同様の形態で緑釉の四足壺が本部構内ＡＵ30区の調査で出土している〔千葉ほか1997〕。Ⅰ332は瓦器鍋。Ⅰ333は瓦器羽釜。口縁部が内傾し体部が丸みを帯びている。

在地産土師器は１期古段階であり，遺構の帰属年代はこの時期に求められるが，緑釉陶器，灰釉陶器あるいは土師器椀（Ⅰ319）など，一部に９～10世紀ごろに帰属する遺物が含まれている。

ＳＥ24出土遺物（Ⅰ334～Ⅰ356）　Ⅰ334～Ⅰ346は橙褐色の土師器皿。Ｄ類が主体を占め，2段撫で手法Ｃ$_3$類（Ⅰ343・Ⅰ344）をともなっている。小は口径９～10.5㎝，大は12.5～14㎝。Ⅰ347は橙褐色の土師器受皿。底部外周がわずかにくぼんでいる。これらの土師器は，１期古段階。

Ⅰ348・Ⅰ349は瓦器椀。Ⅰ348は小型品で，見込みにジグザグ状暗文を施す。Ⅰ349は内外面に篦磨きを施すが，磨きは疎らである。Ⅰ350･Ⅰ351は白磁皿。Ⅰ350は体部中位に沈線がめぐり，見込みの釉をかきとっている。Ⅰ351は体部中位に段をもつ。Ⅰ352～Ⅰ356は白磁椀。Ⅰ352～Ⅰ354は口縁部が玉縁となり，体部外面の中位以下を露胎とする。Ⅰ355・Ⅰ356は口縁端部が短く外側へ折れ，平坦面を作っている。

ＳＫ３出土遺物（Ⅰ357～Ⅰ360）　呈示資料は，橙褐色を呈する土師器皿で，Ⅰ357・Ⅰ358がＤ$_3$類，Ⅰ359がＤ$_4$類，Ⅰ360がＤ$_5$類である。口径は９㎝前後にまとまる。これら

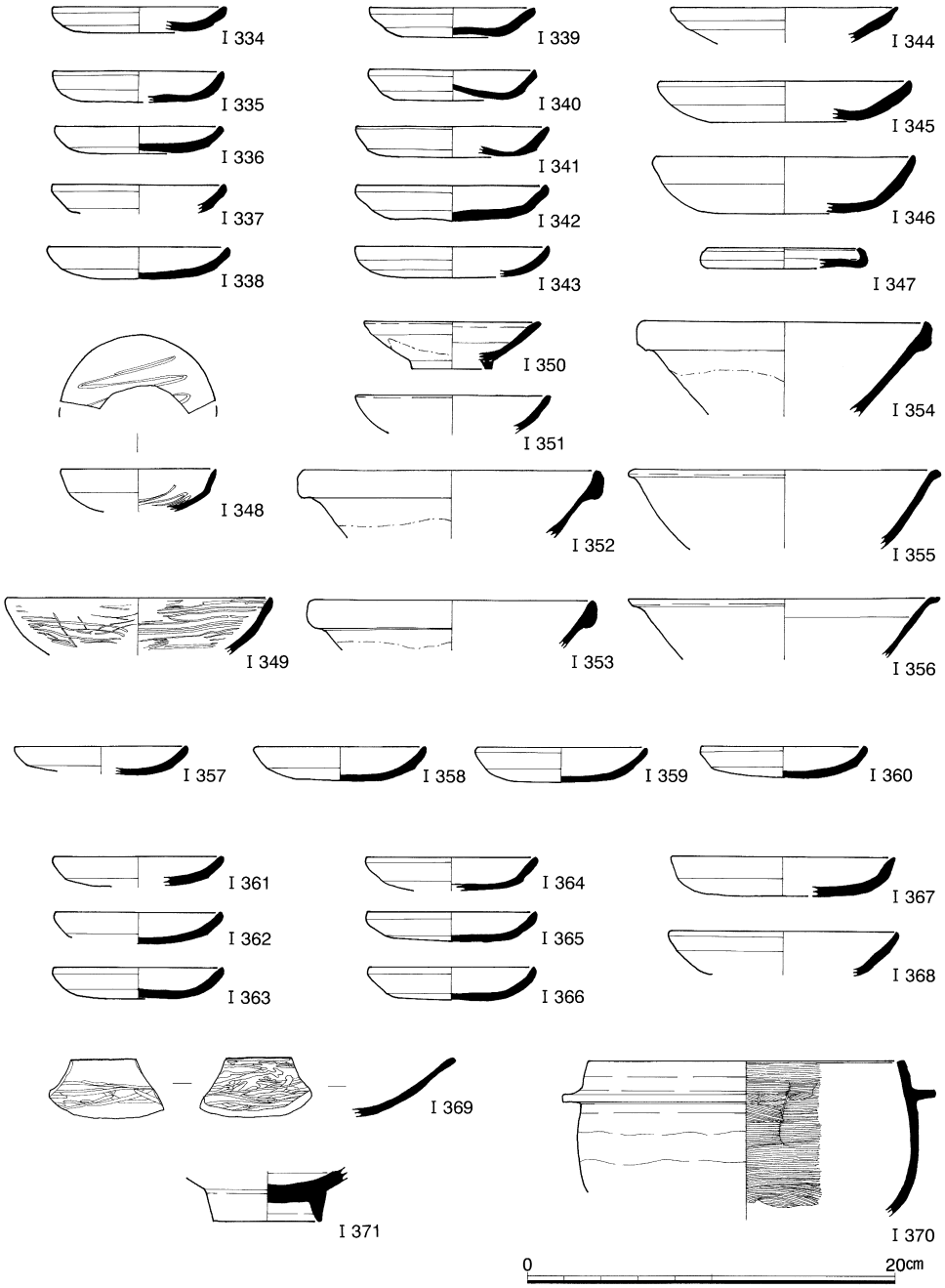


図33　ＳＥ24出土遺物（Ⅰ334～Ⅰ347土師器，Ⅰ348･Ⅰ349瓦器，Ⅰ350～Ⅰ356白磁），ＳＫ３出土遺物（Ⅰ357～Ⅰ360土師器），ＳＫ４出土遺物（Ⅰ361～Ⅰ368土師器，Ⅰ369・Ⅰ370瓦器，Ⅰ371白磁）

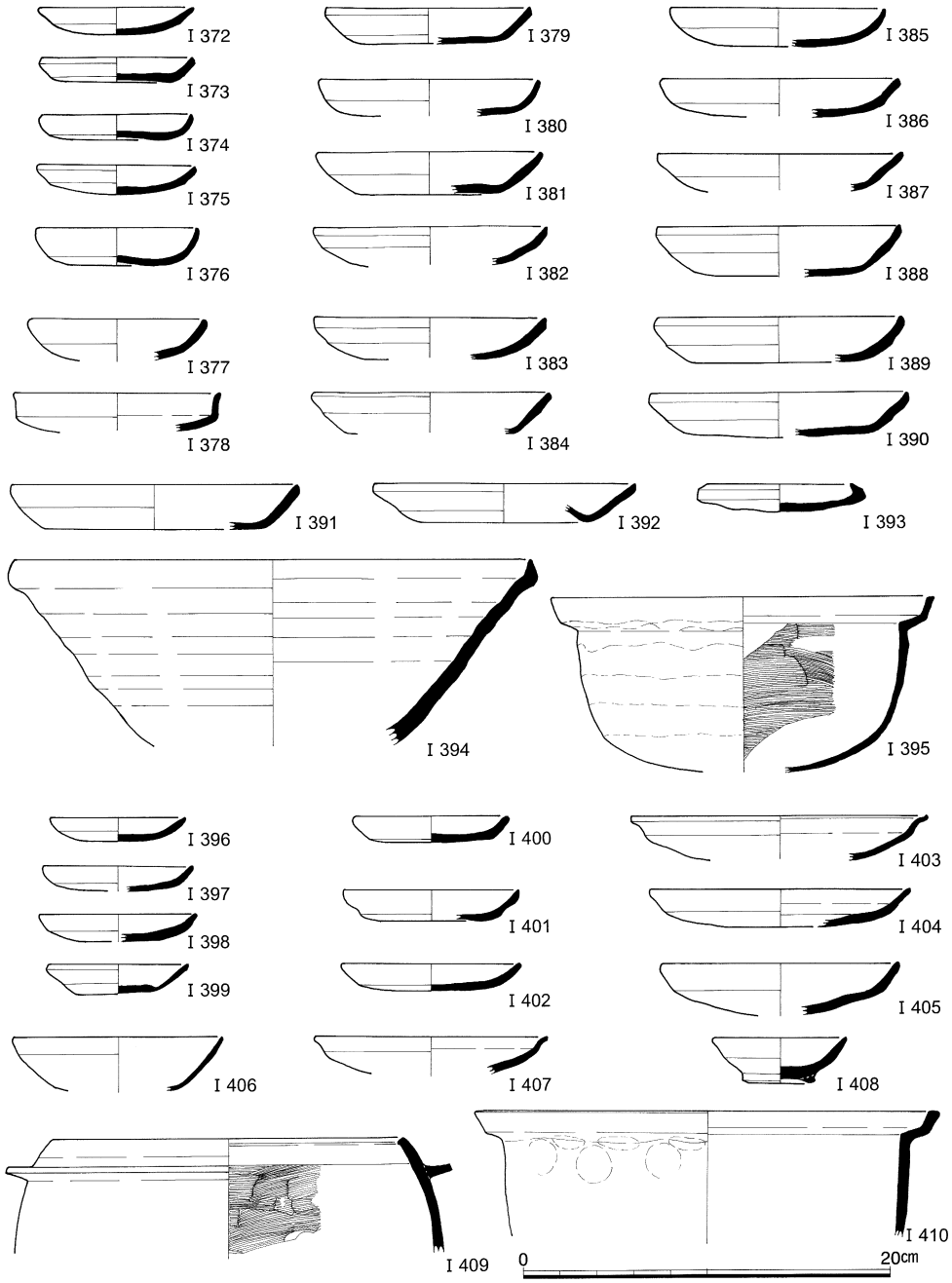


図34　ＳＤ８出土遺物（Ⅰ372～Ⅰ393土師器，Ⅰ394須恵器，Ⅰ395瓦器），ＳＤ13出土遺物（Ⅰ396～Ⅰ406土師器，Ⅰ407・Ⅰ408陶器，Ⅰ409・Ⅰ410瓦器）

は，1期古段階。

ＳＫ４出土遺物（Ⅰ361～Ⅰ371）　Ⅰ361～Ⅰ368は橙褐色の土師器皿。いずれもＤ類で，面取り手法と素縁手法ともにみられる。小は口径９㎝前後，大は12～12.5㎝。１期新段階。

Ⅰ369は瓦器椀。和泉型で口縁部を強く横撫でする。内面と体部外面の中位に篦磨きを施す。Ⅰ370は瓦器羽釜。底部から丸みをもって立ち上がる。Ⅰ371は白磁椀の底部。高台は高く直立し，残存する体部は露胎である。内面に段をもつ。椀Ⅴ類の底部。

ＳＤ８出土遺物（Ⅰ372～Ⅰ395）　Ⅰ372～Ⅰ392は橙褐色の土師器皿。Ｄ類で口縁部を面取りするものと素縁のものが半ばする。口径は８～９㎝のものと12～13㎝台のものが多い。Ⅰ378は口縁部が強く外反しており，在地産ではないかもしれない。Ⅰ374は口縁部に煤が付着する。Ⅰ393は土師器受皿で，橙褐色を呈する。底部外周がくぼんでいる。１期古段階。

Ⅰ394は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が上方へ拡張する。第Ⅲ期第１段階に比定される。Ⅰ395は瓦器鍋。口縁部は２段にするどく屈曲し，体部は丸みを帯びて底部にいたる。

ＳＤ13出土遺物（Ⅰ396～Ⅰ410）　Ⅰ396～Ⅰ405は橙褐色の土師器皿。Ⅰ403を除いて，すべてＤ類で，素縁手法のＤ$_2$類，Ｄ$_3$類が多い。小は口径7.5～9.5㎝，大は13～14㎝である。Ⅰ403はての字手法Ｂ$_2$類で，緑釉陶器の椀・皿であるⅠ407・Ⅰ408とともに，10世紀代の遺物の混入であろう。Ⅰ406は灰白色を呈する土師器椀。口径11.4㎝，高さ約３㎝である。１期新段階。

Ⅰ409は瓦器羽釜で，口縁部が内傾し，球胴となる。Ⅰ410は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲する。

ＳＤ５出土遺物（Ⅰ411～Ⅰ417）　Ⅰ411～Ⅰ416は橙褐色を呈する土師器皿。２段撫で手法Ｃ$_3$類のⅠ411を除いてＤ類で，Ⅰ415のみ口縁端部に面取りを施す。Ⅰ412は口縁部に煤が付着する。１期新段階。Ⅰ417は瓦器壺。口径6.1㎝をはかる短頸壺で，口縁端部を面取りし，肩部に螺旋状暗文がめぐる。

ＳＤ６出土遺物（Ⅰ418～Ⅰ445）　Ⅰ418～Ⅰ438は橙褐色の土師器皿。すべてＤ類であり，口縁部に面取りを施すＤ$_4$類・Ｄ$_5$類が主体を占める。口径９㎝前後のものと14～16㎝のものが多い。１期古段階。

Ⅰ439は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が内側へ拡張する。第Ⅱ期第２段階に比定できるか。Ⅰ440は瓦器鍋。口縁部が２段に屈曲する。Ⅰ441は瓦器壺。口径6.0㎝，胴部最大

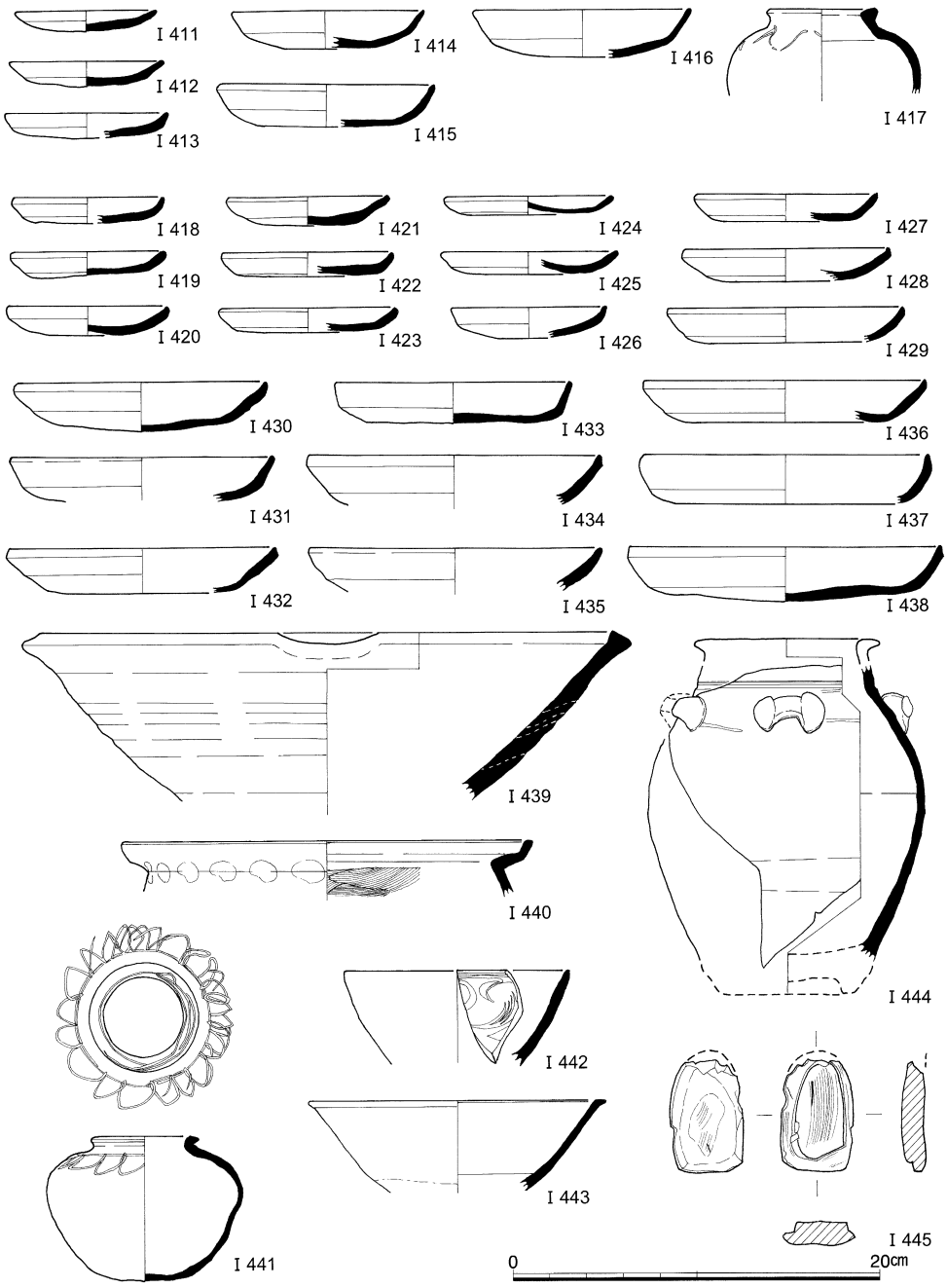


図35　ＳＤ５出土遺物（Ⅰ411～Ⅰ416土師器，Ⅰ417瓦器），ＳＤ６出土遺物（Ⅰ418～Ⅰ438土師器，Ⅰ439須恵器，Ⅰ440・Ⅰ441瓦器，Ⅰ442青磁，Ⅰ443白磁，Ⅰ444陶器，Ⅰ445石製品）

径10.7㎝，高さ7.9㎝をはかり，口縁端部に面取りを施す。肩部に，水平にめぐる暗文と螺旋状暗文を施す。Ⅰ442～Ⅰ444は貿易陶磁器。Ⅰ442は青磁椀。外面無文，内面に片切彫りによる劃花文を施す。龍泉窯系椀Ⅰ－２類。Ⅰ443は白磁椀。体部は斜め上方へ直線的に開き，口縁端部が外側へ折れる。釉表面に気泡が目立ち，胎土には小さな空洞が目立つ。椀Ⅴ類ないしはⅧ類。Ⅰ444は褐釉四耳壺。褐色の釉を全面に施釉し，把手付近に，黒褐色の釉を掛け流している。胎土は灰色で，黒色斑点がはいる。胴部上位に，沈線が横走する。耳壺Ⅵ類に対比できる。Ⅰ445は，用途不明の石製品。滑石製で，長さ6.0㎝，幅3.8㎝，重量49.9ｇをはかる。片面は一回り小さい範囲が突出しており，「凸」字形の断面形となる。

ＳＸ24出土遺物（Ⅰ446～Ⅰ451）　Ⅰ448が灰白色を呈するほかは橙褐色の土師器皿。素縁手法のＤ$_{2}$・Ｄ$_{3}$類である。小は口径９～9.5㎝，大は14～14.5㎝である。１期古段階。

ＳＤ６上面出土遺物（Ⅰ452～Ⅰ465）　Ⅰ452～Ⅰ457は橙褐色の土師器皿。いずれもＤ$_{5}$類で，口径は12～13㎝。１期新段階。

Ⅰ458～Ⅰ460は白磁椀で，Ⅰ458･Ⅰ459は口縁部が玉縁となる椀Ⅳ類。Ⅰ458は釉表面に気泡が目立ち，胎土に褐色の斑点がはいる。Ⅰ460は口縁端部を外側へ折り，水平な端面を作りだし，内面に櫛描文を施す。外面は口縁直下まで篦削りする。椀Ⅴ－４類。Ⅰ461は白磁四耳壺。頸部が直立し，口縁部は外側へ丸く折り曲げている。胴部内面上半まで施釉している。四耳壺Ⅲ類。Ⅰ462は青磁皿。全面施釉後，底部の釉を掻き取る。龍泉窯系青磁皿Ⅰ類。Ⅰ463は青磁皿，Ⅰ464は青磁椀であるが，胎土が精良で，黄緑色に発色した釉を薄く施釉している点で共通する。いずれも体部下半には施釉しない。Ⅰ465は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲し，端部は丁寧に面取りを施す。

ＳＸ61出土遺物（Ⅰ466～Ⅰ480）　Ⅰ466～Ⅰ479は土師器皿。橙褐色を呈するが，Ⅰ469･Ⅰ470は白みが強い。小は口径８～9.5㎝，大は14㎝前後にまとまる。１期古段階。Ⅰ478は，胎土に砂粒を多く含み，椀状となる。在地産でない可能性がある。Ⅰ472は口縁部の数カ所に煤が厚く付着する。Ⅰ480は白磁椀の口縁部で，端部が外側へ折れて平坦面をつくる。椀Ⅴ－４類ないしⅧ－１・３類。

ＳＸ23出土遺物（Ⅰ481～Ⅰ487）　Ⅰ481～Ⅰ486は橙褐色の土師器皿。素縁手法のＤ$_{3}$類に，素縁手法Ｅ$_{1}$類（Ⅰ482・Ⅰ485）をともなう。小は，口径9.5～10㎝，大は，12.5～14㎝。１期新段階。Ⅰ487は白磁の小皿。底部にも施釉し，口縁端部は口禿げとする。ⅢⅨ－１類。

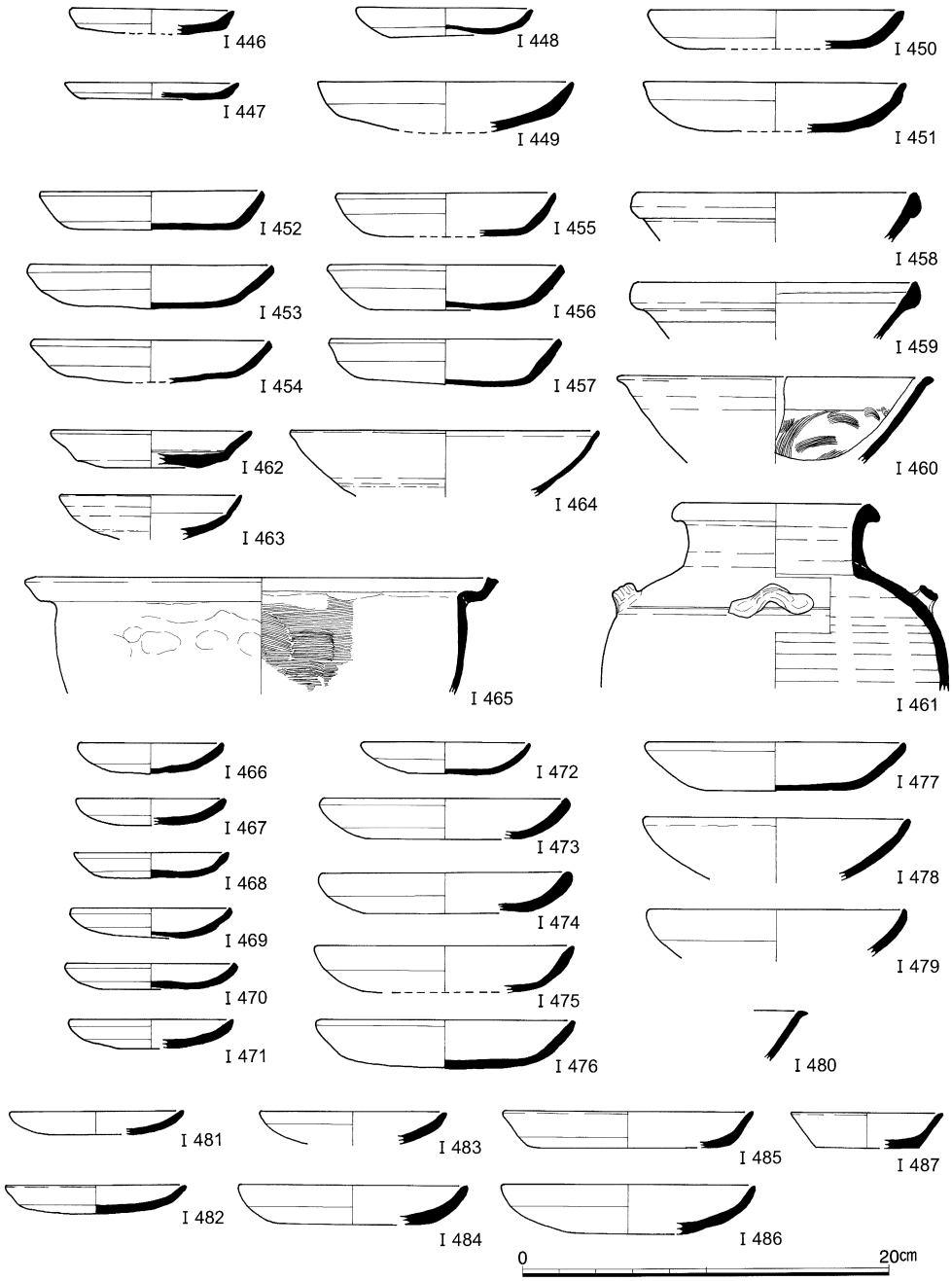


図36　ＳＸ24出土遺物（Ⅰ446～Ⅰ451土師器），ＳＤ６上面出土遺物（Ⅰ452～Ⅰ457土師器，Ⅰ458～Ⅰ461白磁，Ⅰ462～Ⅰ464青磁，Ⅰ465瓦器），ＳＸ61出土遺物（Ⅰ466～Ⅰ479土師器，Ⅰ480白磁），ＳＸ23出土遺物（Ⅰ481～Ⅰ486土師器，Ⅰ487白磁）

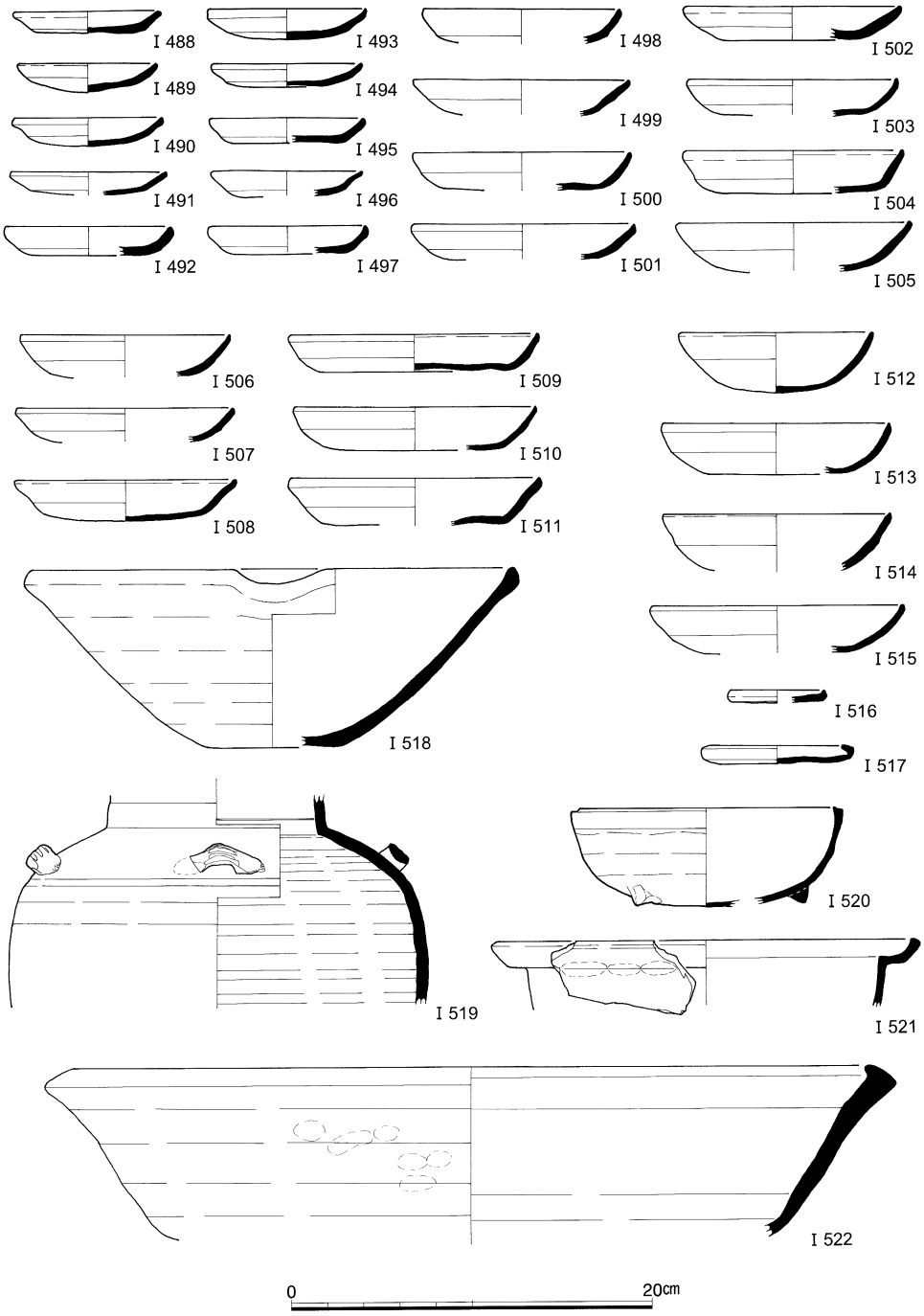


図37　ＳＤ９出土遺物(1)（Ｉ488～Ｉ517土師器，Ｉ518須恵器，Ｉ519白磁，Ｉ520～Ｉ522瓦器）

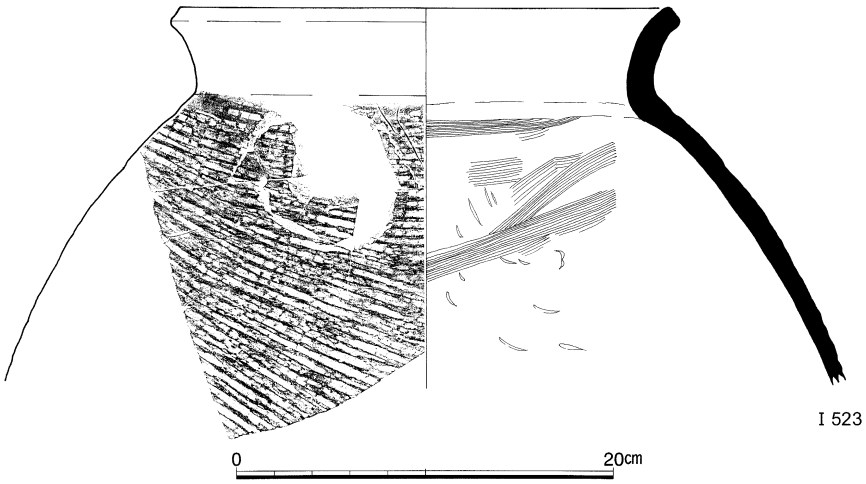


図38　ＳＤ９出土遺物⑵（Ⅰ523瓦器）

ＳＤ９出土遺物（Ⅰ488～Ⅰ523）　Ⅰ488～Ⅰ511は橙褐色の土師器皿。Ｄ類が主体を占め，１段撫で素縁手法Ｅ類（Ⅰ496・Ⅰ502・Ⅰ504・Ⅰ508）をともなう。小は口径８～９㎝，大は12㎝台のものが多く，14㎝前後のものもみられる。Ⅰ512～Ⅰ515は灰白色の土師器椀。Ⅰ516・Ⅰ517は土師器受皿。Ⅰ516は灰白色の椀と同じ色調を呈し，Ⅰ517は椀と皿の中間的な色調である。１期新段階。

Ⅰ518は須恵器すり鉢。Ⅰ519は白磁四耳壺。Ⅰ520･Ⅰ522は瓦器盤。Ⅰ520は小型で，口径14.5㎝前後，高さ5.5㎝前後。脚が１個残存しており，３足になると思われる。口縁端部は強い撫でにより，くぼんでいる。内面から口縁部外面にかけては撫で調整を施し，体部外面は指押さえ痕が残っている。Ⅰ522は口縁端部が内側へ突出する。Ⅰ521は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲するが，上段の屈曲はやや丸みを帯びる。Ⅰ523は瓦質の甕。胴部外面に格子状叩き目を残し，内面に刷毛目と当て具の痕跡かとみられるキズがみえる。

ＳＸ46出土遺物（Ⅰ524～Ⅰ531）　Ⅰ524・Ⅰ525は橙褐色の土師器皿。Ⅰ524はD_2類で，口径11.6㎝。Ⅰ525はD_5類で，口径12.6㎝。Ⅰ526～Ⅰ528は灰白色の土師器椀。Ⅰ529は灰白色の土師器受皿。１期新段階。

Ⅰ530は瓦器羽釜。口径15㎝前後と小型である。Ⅰ531は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲し，端部は横撫でで，中央部がくぼむ。

ＳＸ43出土遺物（Ⅰ532～Ⅰ534）　Ⅰ532は灰白色の土師器椀。口径11.1㎝，器高3.0

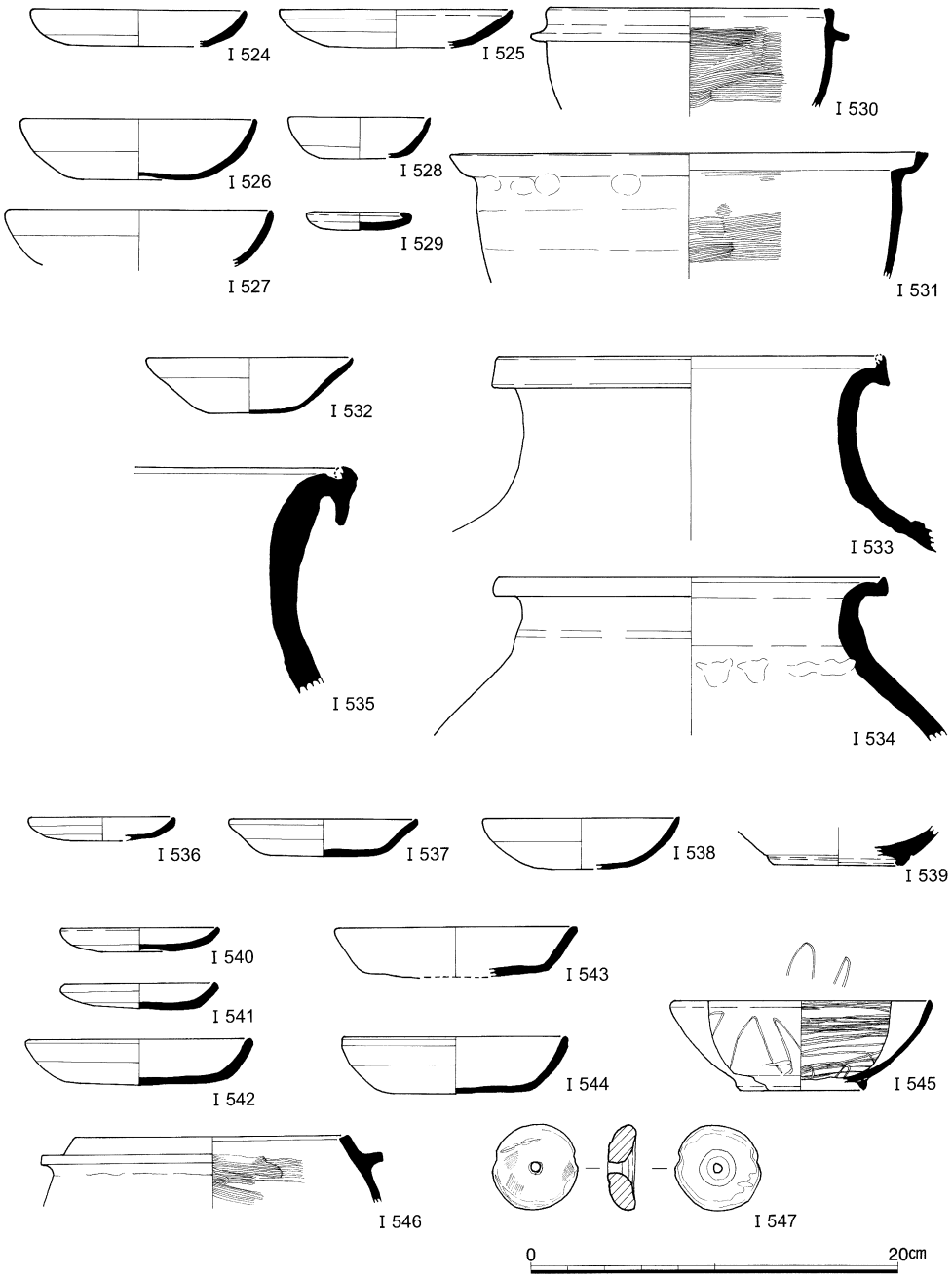


図39　ＳＸ46出土遺物（Ⅰ524～Ⅰ529土師器，Ⅰ530・Ⅰ531瓦器），ＳＸ43出土遺物（Ⅰ532土師器，Ⅰ533・Ⅰ534陶器），ＳＸ27出土遺物（Ⅰ535陶器），ＳＸ52出土遺物（Ⅰ536～Ⅰ538土師器，Ⅰ539青磁），ＳＸ102出土遺物（Ⅰ540～Ⅰ544土師器，Ⅰ545･Ⅰ546瓦器，Ⅰ547滑石製紡錘車）

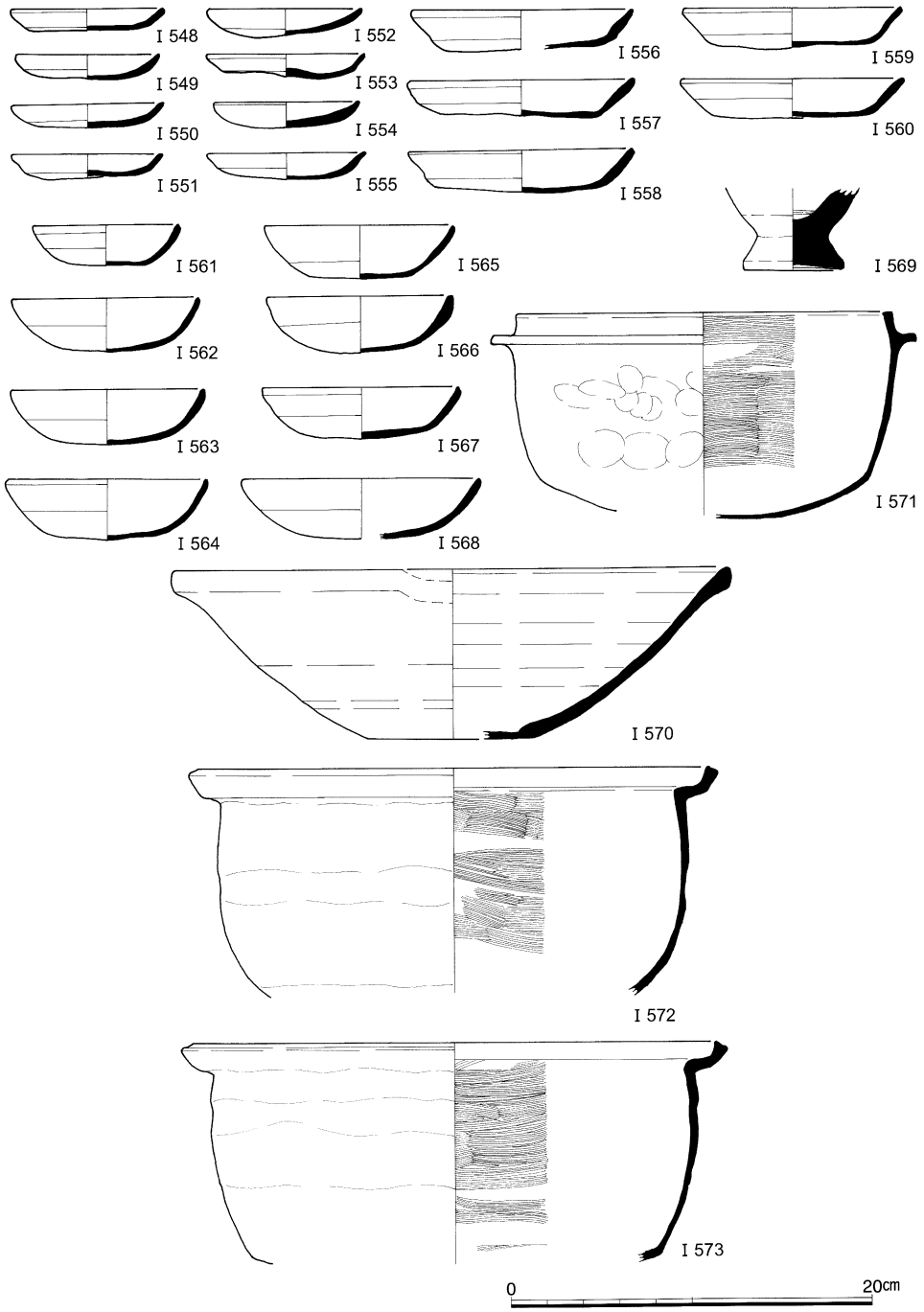


図40　ＳＤ14出土遺物(1)（Ⅰ548～Ⅰ568土師器，Ⅰ569灰釉系陶器，Ⅰ570須恵器，Ⅰ571～Ⅰ573瓦器）

㎝。１期新段階。Ⅰ533・Ⅰ534は陶器甕。Ｌ字状の口縁部形態を示し，常滑焼５型式とみられる。

ＳＸ27出土遺物（Ⅰ535）　Ⅰ535は陶器甕。口縁部がＮ字状に拡張する常滑焼６ｂ型式に比定できる。

ＳＸ52出土遺物（Ⅰ536～Ⅰ539）　Ⅰ536・Ⅰ537は橙褐色の土師器皿。Ⅰ536はD_5類，Ⅰ537はD_6類。Ⅰ538は灰白色の土師器椀。Ⅰ536は口縁端部に煤が付着。１期新段階。

Ⅰ539は青磁底部。高台は削り出しで，外側は体部との境に圏線がめぐる。釉は薄く，全面に施釉したのち，畳付けの釉をかきとっている。越州窯系青磁とみられ，平安前中期の混入品であろう。

ＳＸ102出土遺物（Ⅰ540～Ⅰ547）　Ⅰ540～Ⅰ543は橙褐色を呈する土師器皿。D_5類が主体。小は口径8.5㎝，大は12～13㎝をはかる。Ⅰ544は灰白色の土師器椀。口径12.0㎝，器高3.1㎝。１期新段階。

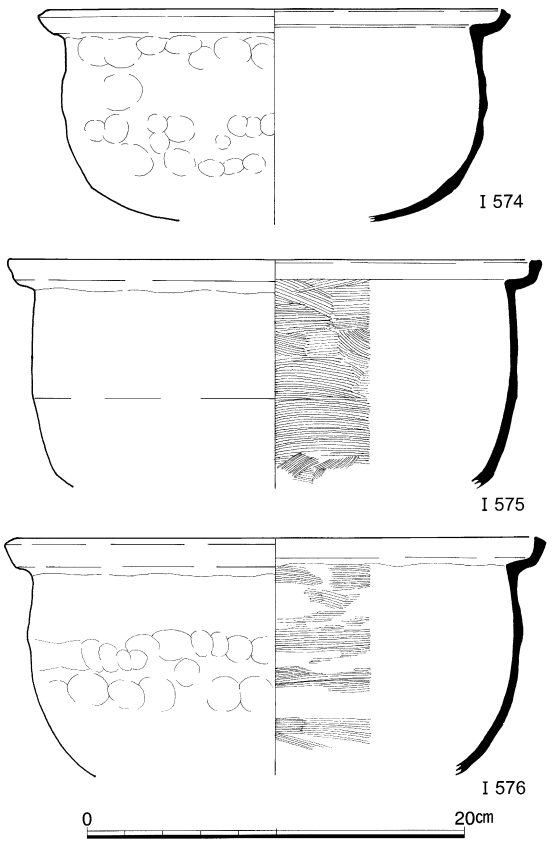


図41　ＳＤ14出土遺物⑵（Ⅰ574～Ⅰ576瓦器）

Ⅰ545は瓦器椀。体部内面は横位に篦磨き，体部外面と見込みには，ジグザグ状の暗文を施し，しっかりとした高台がつく。胎土精良。Ⅰ546は瓦器羽釜。Ⅰ547は滑石製紡錘車。直径4.5㎝の円形で，側縁の２箇所にえぐりをもち，中央に径６㎜の孔があく。片側が凸面，逆側が凹面となる。重さ46.6ｇ。

ＳＤ14出土遺物（Ⅰ548～Ⅰ576）　Ⅰ548～Ⅰ560は橙褐色の土師器皿。小は口径８～8.5㎝，大は12～12.5㎝で，大はすべて口縁部面取りをするD_5類，小は面取りをするD_5・D_6類と素縁のD_1・D_2類がなかばする。Ⅰ555・Ⅰ556は口縁部に煤が付着する。

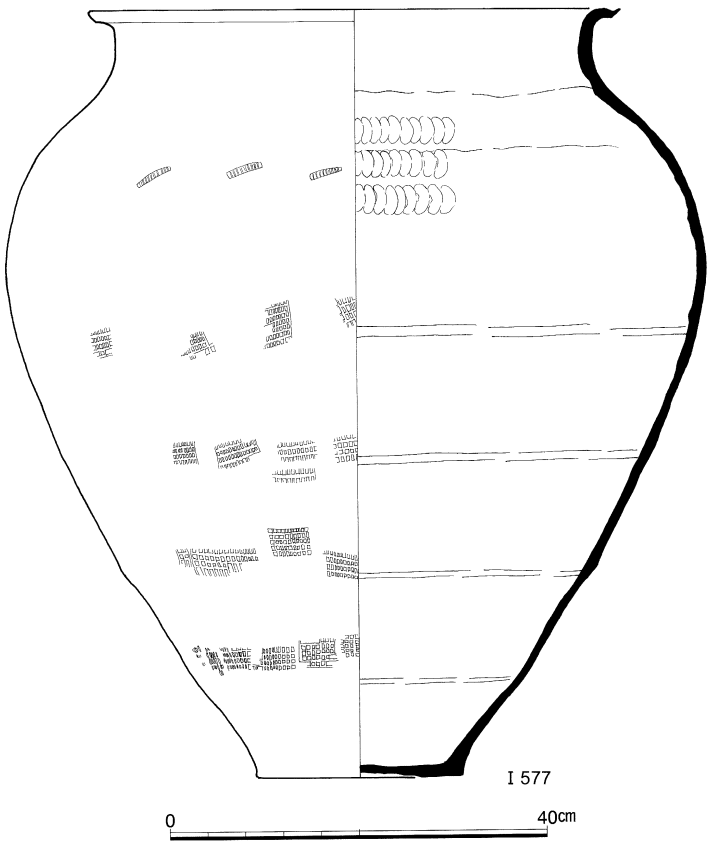


図42　ＳＸ38出土遺物（Ｉ577陶器）　縮尺1/8

Ｉ561～Ｉ568は灰白色の土師器椀。口径は8.0㎝のＩ561，10㎝台のＩ562～Ｉ567，13.0㎝のＩ568に分かれる。１期新段階。

Ｉ569は灰釉系陶器の花瓶。底部は回転篦削り調整。Ｉ570は須恵器すり鉢。口縁部が玉縁状に肥厚する。Ｉ571は瓦器羽釜。底部と体部の境が屈曲し，口縁部はわずかに内傾する。Ｉ572～Ｉ576は瓦器鍋。いずれも，口縁部は２段に屈曲し，口縁端部は面取りで中央部がわずかにくぼむ。体部は丸みをもちつつ底部にいたるＩ572・Ｉ574・Ｉ576と体部と底部の境が屈曲するＩ573とＩ575がある。

ＳＸ38出土遺物（Ｉ577）　Ｉ577は常滑焼の大甕である。口径56㎝，器高81㎝をはかる。口縁部は，外へ向かって幅狭く立ち上がる。体部外面には，成形工程に対応して，帯状の押印文が施される。胴部上半には，指おさえの痕跡が明瞭に残っている。４型式に比定できる。

⑺ 中世２期の遺物（図版21，図43～49）

ＳＸ12出土遺物（Ⅰ578～Ⅰ585）　Ⅰ578～Ⅰ581は橙褐色の土師器皿。Ⅰ581が口縁部を面取るＤ$_5$類で，ほかは素縁手法のＤ類とＥ類である。口径８～10㎝。Ⅰ582は灰白色の土師器椀。口径11.5㎝。２期古段階。Ⅰ583は白磁の底部。内面に段をもつ。Ⅰ584は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲するが，上部の屈曲は甘く，外側は直線的となる。Ⅰ585は瓦器羽釜。体部は直線的で，底部との境は屈曲する。

ＳＫ５出土遺物（Ⅰ586～Ⅰ593）　Ⅰ586～Ⅰ591は橙褐色の土師器皿。Ｄ$_5$類であるⅠ590をのぞいて，Ｅ$_3$類。小は口径８㎝前後，大は10.5～12㎝まで，ややばらつきがある。Ⅰ592・Ⅰ593は灰白色の椀。Ⅰ592は口径11.9㎝，Ⅰ593は13.8㎝。２期古段階。

ＳＸ13出土遺物（Ⅰ594～Ⅰ598）　Ⅰ594・Ⅰ595は橙褐色の土師器皿。口径は，Ⅰ594が6.9㎝，Ⅰ595が10㎝。Ⅰ596･Ⅰ597は灰白色の土師器椀。Ⅰ596はくぼみ底となる。２期古段階。Ⅰ598は青磁椀。箆描きによる蓮弁文を施す。

ＳＸ18出土遺物（Ⅰ599～Ⅰ609）　Ⅰ599～Ⅰ608は橙褐色の土師器皿。Ｅ類（Ⅰ602～Ⅰ607）主体に，Ｄ$_2$類（Ⅰ599～Ⅰ601・Ⅰ608）がともなう。小は８～９㎝，大は10.5～13㎝。Ⅰ609は灰白色の土師器椀。口径10.8㎝。２期新段階。

ＳＸ19出土遺物（Ⅰ610～Ⅰ621）　Ⅰ610～Ⅰ614は橙褐色の土師器皿。Ｅ$_1$類が主体。小は８㎝。大は10～11㎝。Ⅰ615～Ⅰ621は灰白色の土師器椀。口径は11～11.5㎝が多く，Ⅰ621は13.1㎝をはかる。２期新段階。

ＳＸ20出土遺物（Ⅰ622～Ⅰ636）　Ⅰ622～Ⅰ627は橙褐色の土師器皿。小は８㎝，大は11.5～12.5㎝。Ⅰ623は口縁端部，Ⅰ624は内面に，煤が付着する。Ⅰ628～Ⅰ635は灰白色の土師器椀。２期新段階。Ⅰ636は瓦器鍋。２段目の屈曲があまくなり，口縁部が外方へ突出している。

ＳＸ25出土遺物（Ⅰ637～Ⅰ658）　Ⅰ637～Ⅰ654は橙褐色の土師器皿。Ⅰ637は口径6.5㎝，器高２㎝をはかる。底部中央が突出し，通常の土師器皿と形態を異にする。これを除いた皿は，Ｅ$_1$･Ｅ$_3$類からなり，法量は小が８㎝前後，大が10.5～11㎝である。Ⅰ655～Ⅰ657は灰白色の土師器椀。口径11.5～12㎝。２期新段階。Ⅰ658は瓦器羽釜。胴中位以下を欠失する。

ＳＸ28出土遺物（Ⅰ659～Ⅰ672）　Ⅰ659～Ⅰ662は橙褐色の土師器皿。Ｅ$_1$類からなり，Ⅰ659・Ⅰ651は口径10.5㎝，Ⅰ660は11.2㎝，Ⅰ662は11.8㎝。Ⅰ663～Ⅰ671は灰白色の土師器椀。Ⅰ663～Ⅰ667は口径6.5㎝前後の小椀で，Ⅰ665～Ⅰ667はくぼみ底となる。

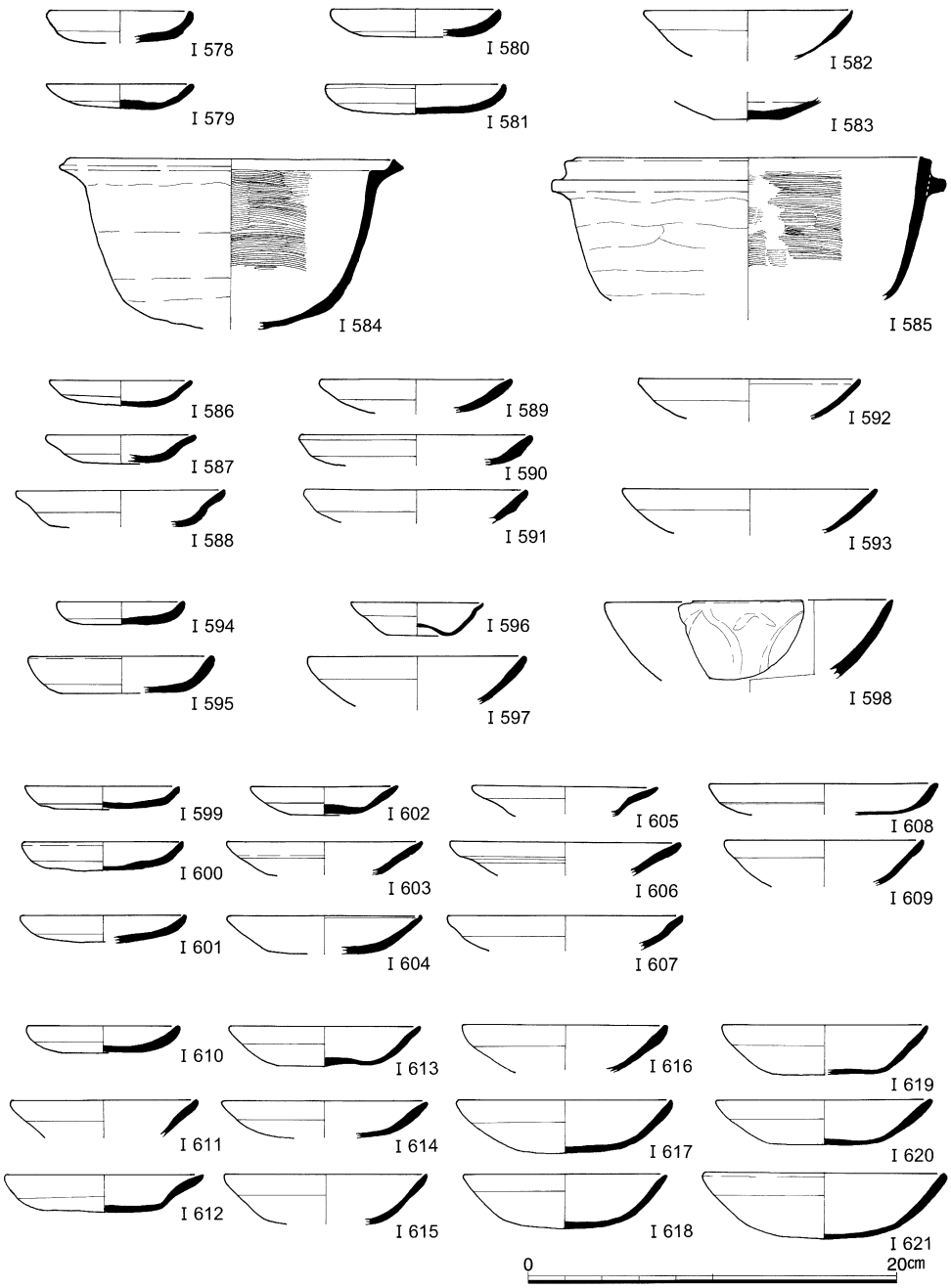


図43　ＳＸ12（Ⅰ578～Ⅰ582土師器，Ⅰ583白磁，Ⅰ584・Ⅰ585瓦器），ＳＫ５（Ⅰ586～Ⅰ593土師器），ＳＸ13出土遺物（Ⅰ594～Ⅰ597土師器，Ⅰ598青磁），ＳＸ18出土遺物（Ⅰ599～Ⅰ609土師器），ＳＸ19出土遺物（Ⅰ610～Ⅰ621土師器）

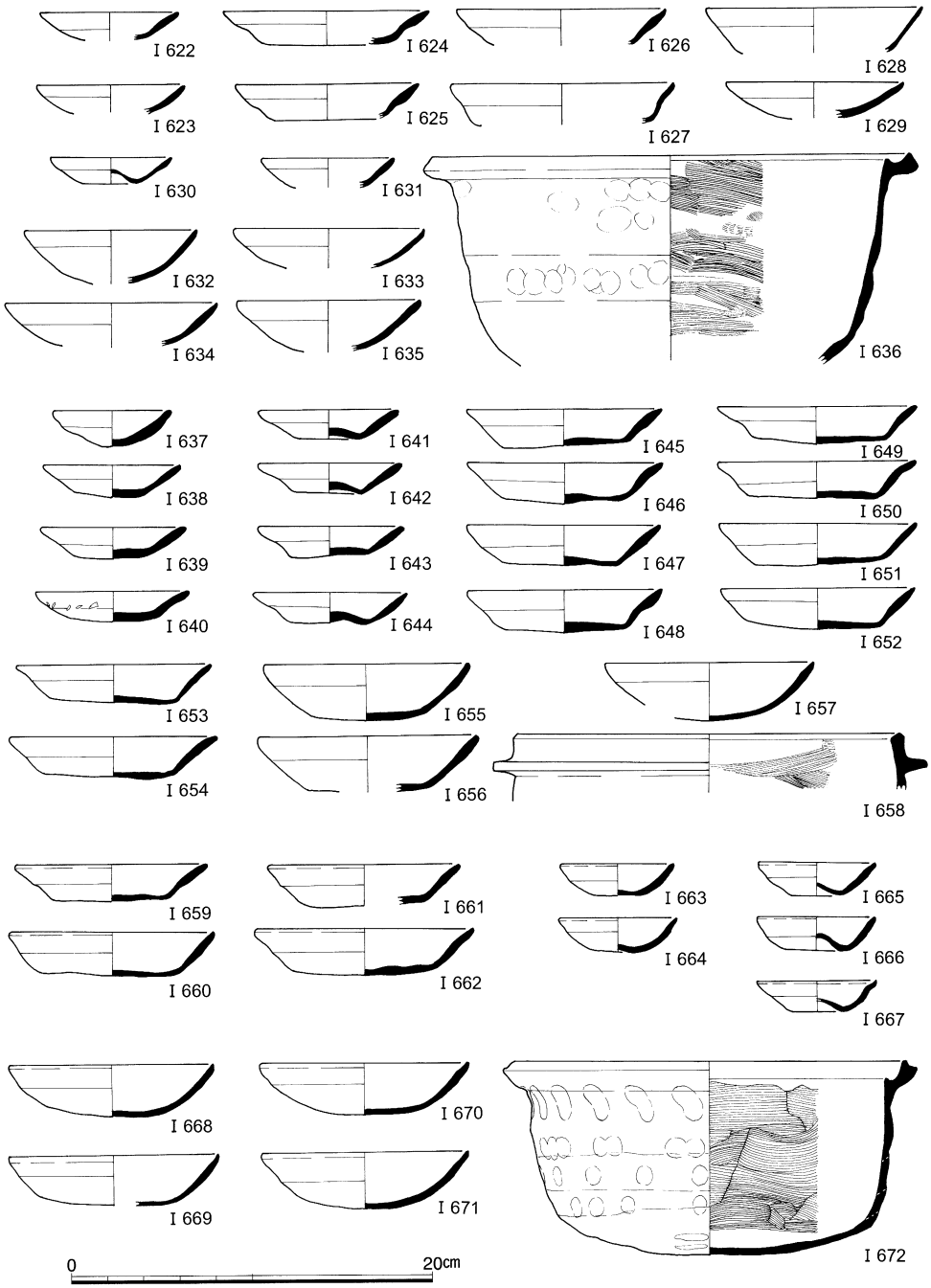


図44　ＳＸ20出土遺物（Ｉ622～Ｉ635土師器，Ｉ636瓦器），ＳＸ25出土遺物（Ｉ637～Ｉ657土師器，Ｉ658瓦器），ＳＸ28出土遺物（Ｉ659～Ｉ671土師器，Ｉ672瓦器）

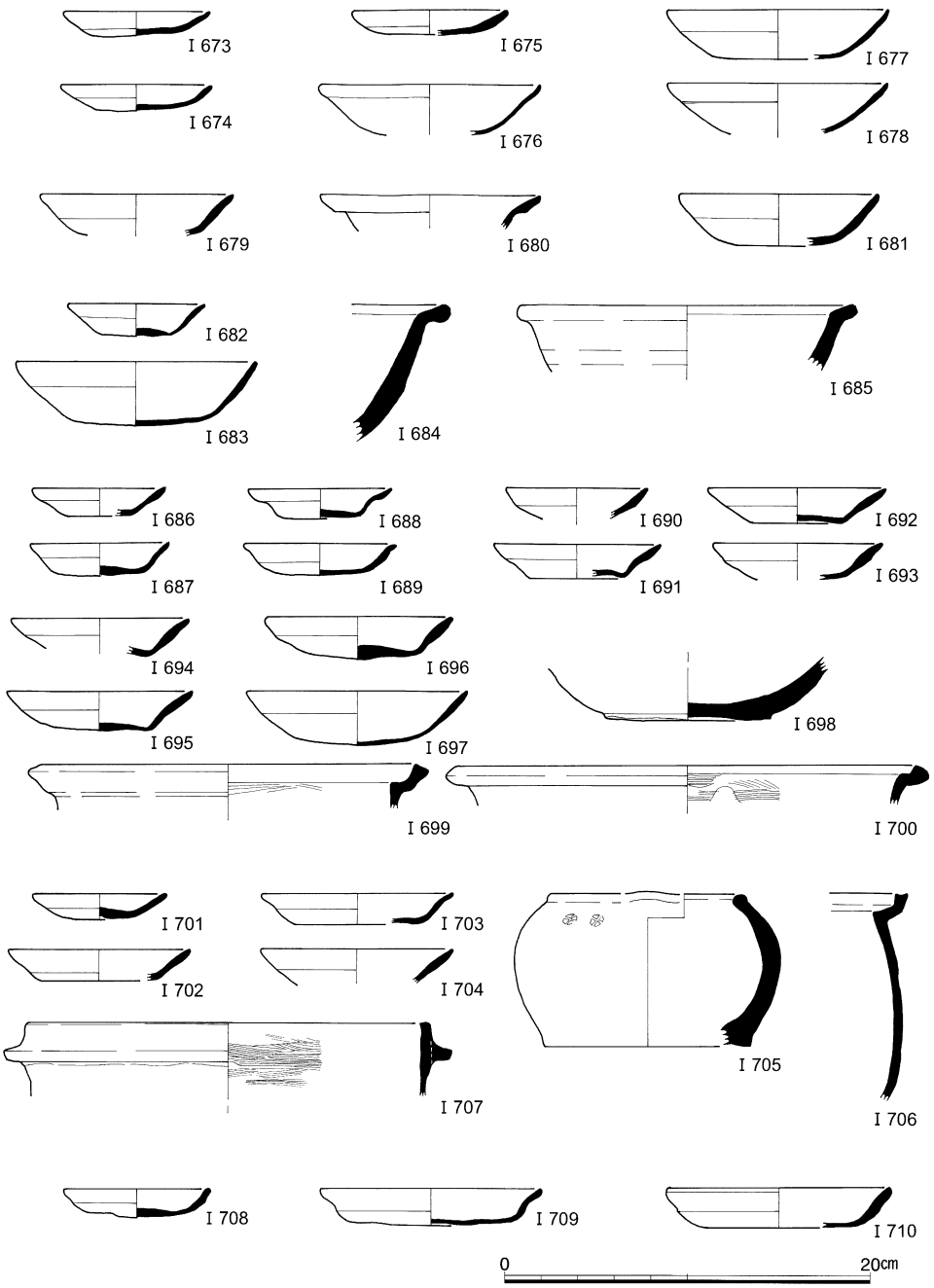


図45　ＳＸ40出土遺物（Ⅰ673～Ⅰ678土師器），ＳＸ42出土遺物（Ⅰ679～Ⅰ681土師器），ＳＸ44出土遺物（Ⅰ682・Ⅰ683土師器，Ⅰ684・Ⅰ685古瀬戸），ＳＸ60出土遺物（Ⅰ686～Ⅰ697土師器，Ⅰ698須恵器，Ⅰ699･Ⅰ700瓦器），ＳＸ66出土遺物（Ⅰ701～Ⅰ704土師器，Ⅰ705備前，Ⅰ706・Ⅰ707瓦器），ＳＸ71出土遺物（Ⅰ708～Ⅰ710土師器）

Ⅰ668～Ⅰ671は口径11.5㎝前後。２期新段階。Ⅰ672は瓦器鍋。受け部の幅が狭くなり，口縁端部は内傾する。

ＳＸ40出土遺物（Ⅰ673～Ⅰ678）　Ⅰ673～Ⅰ675は，橙褐色の土師器皿。口径は８～8.5㎝前後。Ⅰ676～Ⅰ678は，灰白色の土師器椀。いずれも口径12㎝前後である。２期古段階。

ＳＸ42出土遺物（Ⅰ679～Ⅰ681）　Ⅰ679・Ⅰ680は橙褐色の土師器皿。Ⅰ679はＥ$_1$類で，口径10.5㎝，Ⅰ680はＥ$_4$類で，口径12㎝。Ⅰ681は灰白色の土師器椀。口径10.8㎝。２期新段階。

ＳＸ44出土遺物（Ⅰ682～Ⅰ685）　Ⅰ682は橙褐色の土師器皿。Ｅ$_3$類で，口径7.5㎝。Ⅰ683は灰白色の土師器椀。口径13㎝前後。２期新段階。Ⅰ684･Ⅰ685は古瀬戸中期の折縁深皿。Ⅰ685は復元口径18㎝。

ＳＸ60出土遺物（Ⅰ686～Ⅰ700）　Ⅰ686～Ⅰ696は橙褐色の土師器皿。Ｅ$_4$類が主体を占める。小は口径７～８㎝。大は10㎝前後。Ⅰ697は灰白色の土師器椀。口径11.8㎝。２期新段階。Ⅰ698は須恵器鉢の底部。Ⅰ699・Ⅰ700は瓦器鍋。

ＳＸ66出土遺物（Ⅰ701～Ⅰ707）　Ⅰ701～Ⅰ704は橙褐色の土師器皿。Ｅ$_1$類（Ⅰ701･Ⅰ704）とＥ$_3$類（Ⅰ702・Ⅰ703）。２期新段階。

Ⅰ705は備前焼壺。口縁部がわずかに肥厚し，片口となる。肩部に「＋」印のスタンプ文を施している。Ⅰ706は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲し，端部は水平で凹面をなす。Ⅰ707は瓦器羽釜。短い口縁部が直立する。

ＳＸ71出土遺物（Ⅰ708～Ⅰ710）　Ⅰ708～Ⅰ710は橙褐色の土師器皿。口径は，Ⅰ708が８㎝，残りは11㎝前後である。Ⅰ708はＥ$_1$類で，著しく歪む。Ⅰ709はＥ$_3$類で，Ⅰ710は口縁部を面取るＤ$_5$類で，ともに口径12㎝前後。２期古段階。

ＳＸ26出土遺物（Ⅰ711～Ⅰ746）　Ⅰ711～Ⅰ730は橙褐色の土師器皿。Ｆ$_2$類（Ⅰ728）を含むが，主体はＥ類でＥ$_1$・Ｅ$_3$・Ｅ$_4$類がある。小は口径7.5～８㎝，大は10～11㎝が主体を占める。Ⅰ729は口径15㎝，Ⅰ730は19.5㎝をはかり，器壁が厚い。通常の皿と同様，内面から口縁部外面は横撫で，体部外面は不調整である。Ⅰ729は上げ底となり，口縁部と体部の境が１㎝帯状に突出している。口縁部の横撫ではこの部分までは及んでいないため，横撫で調整するさいに，型状のものに固定した痕跡とみられる。Ⅰ731～Ⅰ740は灰白色の土師器椀。Ⅰ731～Ⅰ733は口径７㎝前後のくぼみ底小椀。Ⅰ734～Ⅰ740は口径10～13.5㎝で，ややばらつきがある。２期新段階。

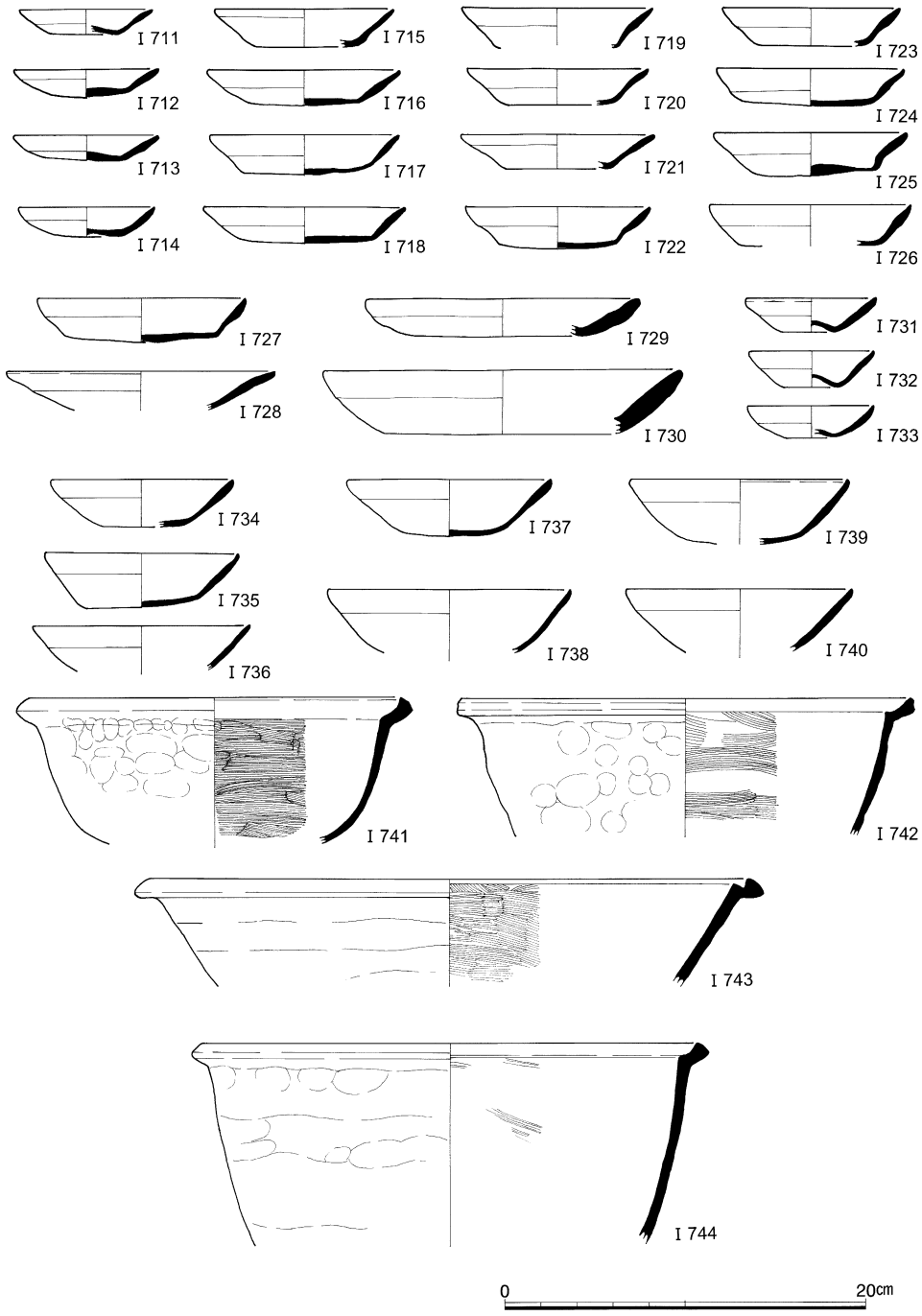


図46　ＳＸ26出土遺物(1)（Ⅰ711～Ⅰ740土師器，Ⅰ741～Ⅰ744瓦器）

Ⅰ741～Ⅰ744は瓦器鍋。Ⅰ741･Ⅰ742は口縁部が内湾しながら立ち上がる。Ⅰ743は体部が外へ向かって斜めに立ち上がり，器高が低くなると思われる。受け部は断面「Ｖ」字形になる。Ⅰ744は深い器形で，短い口縁部が斜め外方へ立ち上がる。Ⅰ745･Ⅰ746は東播系須恵器すり鉢。Ⅰ745は口縁部が上下に拡張し，Ⅰ746は上下に肥厚している。第Ⅲ期第２～第３段階。

ＳＸ32出土遺物（Ⅰ747～Ⅰ760）　Ⅰ747～Ⅰ751は橙褐色の土師器皿。小は口径８～９㎝，大は10～11㎝前後である。Ⅰ749は底部がややくぼんでいる。Ⅰ752～Ⅰ756は灰白色の土師器椀。小は口径７㎝前後で，Ⅰ755はくぼみ底となる。大は11.5～12㎝。２期新段階。

Ⅰ757は青磁椀。蓮弁文を施す。Ⅰ758は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が上方へ拡張する。第Ⅲ期第１段階。Ⅰ759は瓦器羽釜。口縁部は短く直立する。Ⅰ760は瓦器焜炉。上半を欠失する。３足になるとおもわれる脚が１個残存する。内面にはさなをのせる鍔がめぐる。外面は縦位の篦磨きののち，沈線を横位にめぐらして，菊花のスタンプ文を施している。胴下部に，円形の通風口をもつ。

ＳＸ34出土遺物（Ⅰ761～Ⅰ771）　Ⅰ761～Ⅰ765は橙褐色の土師器皿。Ｄ類とＥ類が混じる。Ⅰ763は，面取りをするＤ$_4$類。Ⅰ761～Ⅰ763は，口径７～7.5㎝，Ⅰ764は９㎝，Ⅰ765は11.8㎝。Ⅰ766～Ⅰ770は，灰白色の土師器椀。小は6.5～７㎝前後，大は，Ⅰ770で11.8㎝。２期古段階。

Ⅰ771は白磁皿。平底，薄手・精巧な作りで，全面に施釉する。見込みには，型押しによる花文を施す。皿Ｘ－ｂ類。

ＳＸ37出土遺物（Ⅰ772～Ⅰ778）　Ⅰ772～Ⅰ774は橙褐色の土師器皿。すべてＥ$_1$類。Ⅰ775～Ⅰ778は灰白色の土師器椀。２期古段階。

ＳＸ35出土遺物（Ⅰ779～Ⅰ797）　Ⅰ779～Ⅰ782は橙褐色の土師器皿。Ⅰ779は口縁端部に煤が付着する。Ⅰ783は橙褐色の土師器小椀。口径6.9㎝。Ⅰ784～Ⅰ786は灰白色の土師器椀。Ⅰ784はくぼみ底で，口径8.5㎝。Ⅰ785･Ⅰ786は口径11㎝前後。Ⅰ787は特大の皿で，口径不明。口縁外側が肥厚する。２期新段階。

Ⅰ788は陶器甕。口縁部が短く上方へ直立する。Ⅰ789は古瀬戸中期の折縁深皿。復元口径19.2㎝で，体部は丸みを帯びる。Ⅰ790は白磁皿。平底の底部は無釉。見込みに，篦描きで花文を施している。皿Ⅷ類か。Ⅰ791は瓦器壺。口径5.4㎝，胴部最大径11㎝。口縁部は肥厚し，面取りする。肩部に螺旋状暗文を施す。Ⅰ792～Ⅰ797は瓦器鍋。口縁部は内湾あ

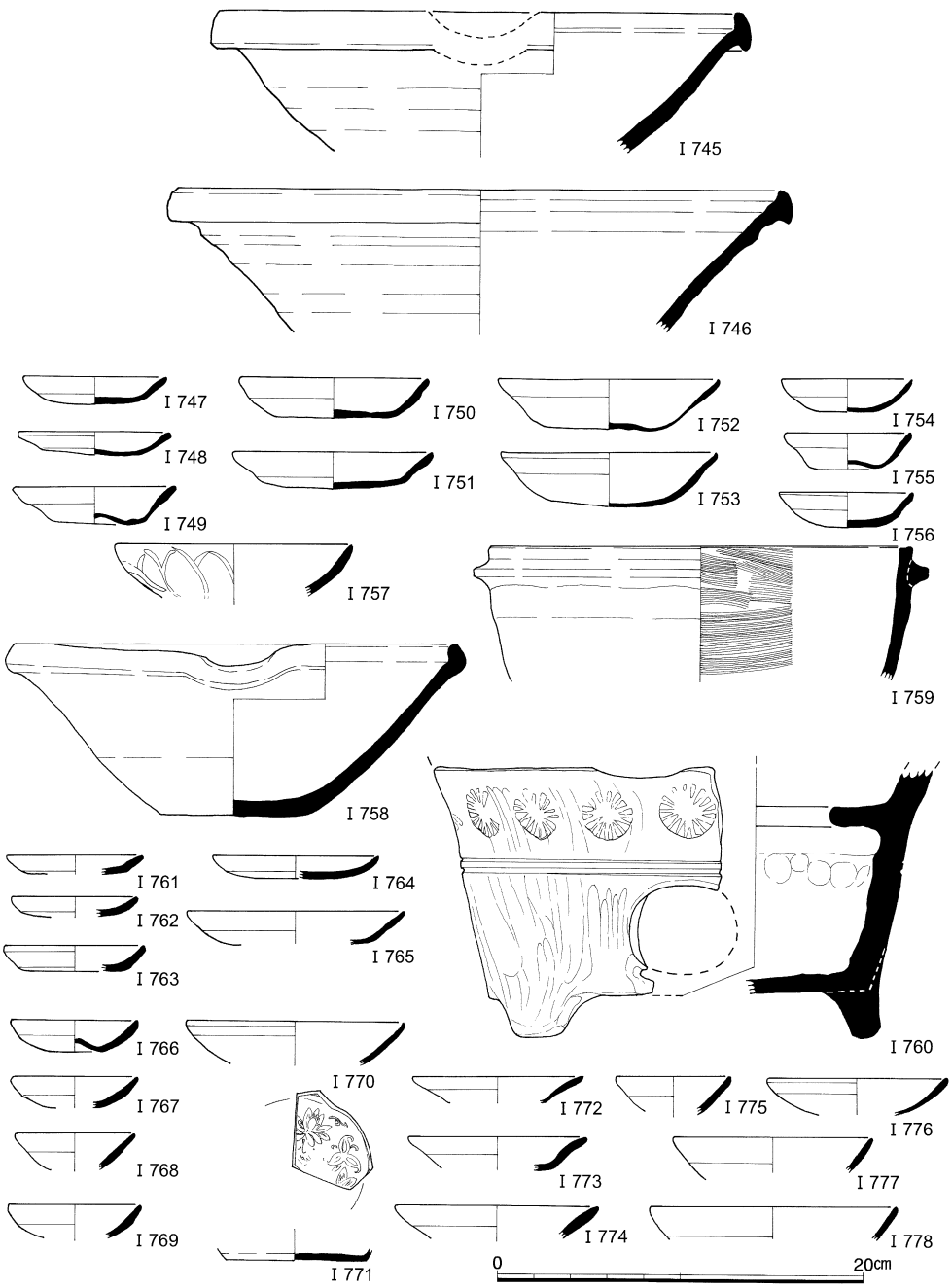


図47　ＳＸ26出土遺物⑵（Ⅰ745・Ⅰ746須恵器），ＳＸ32出土遺物（Ⅰ747～Ⅰ756土師器，Ⅰ757青磁，Ⅰ758須恵器，Ⅰ759・Ⅰ760瓦器），ＳＸ34出土遺物（Ⅰ761～Ⅰ770土師器，Ⅰ771白磁），ＳＸ37出土遺物（Ⅰ772～Ⅰ778土師器）

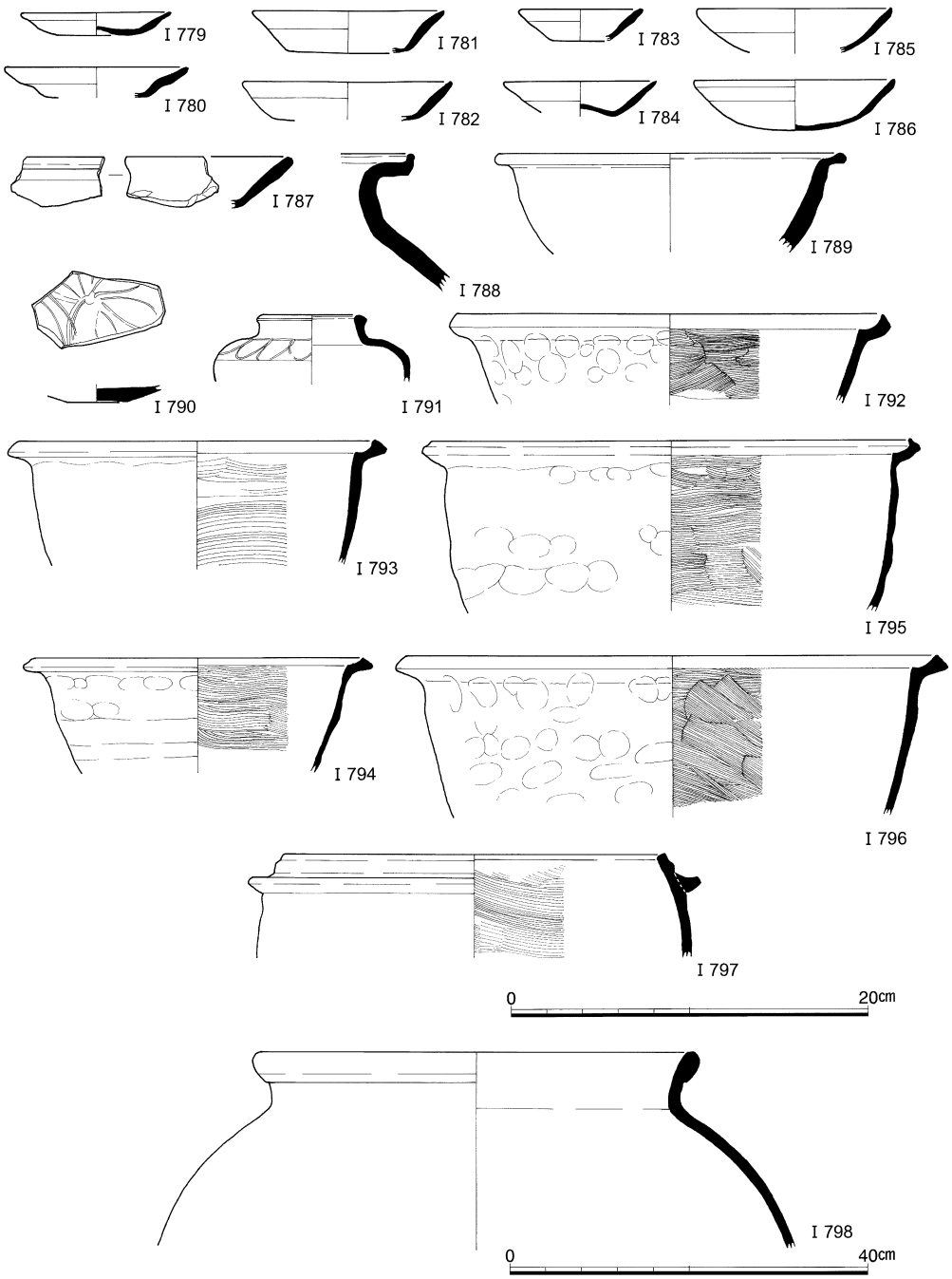


図48　ＳＸ35出土遺物（Ｉ779～Ｉ787土師器，Ｉ788陶器，Ｉ789古瀬戸，Ｉ790白磁，Ｉ791～Ｉ797瓦器），ＳＤ11－12間の落ち込み（Ｉ798備前）　Ｉ798は1/8

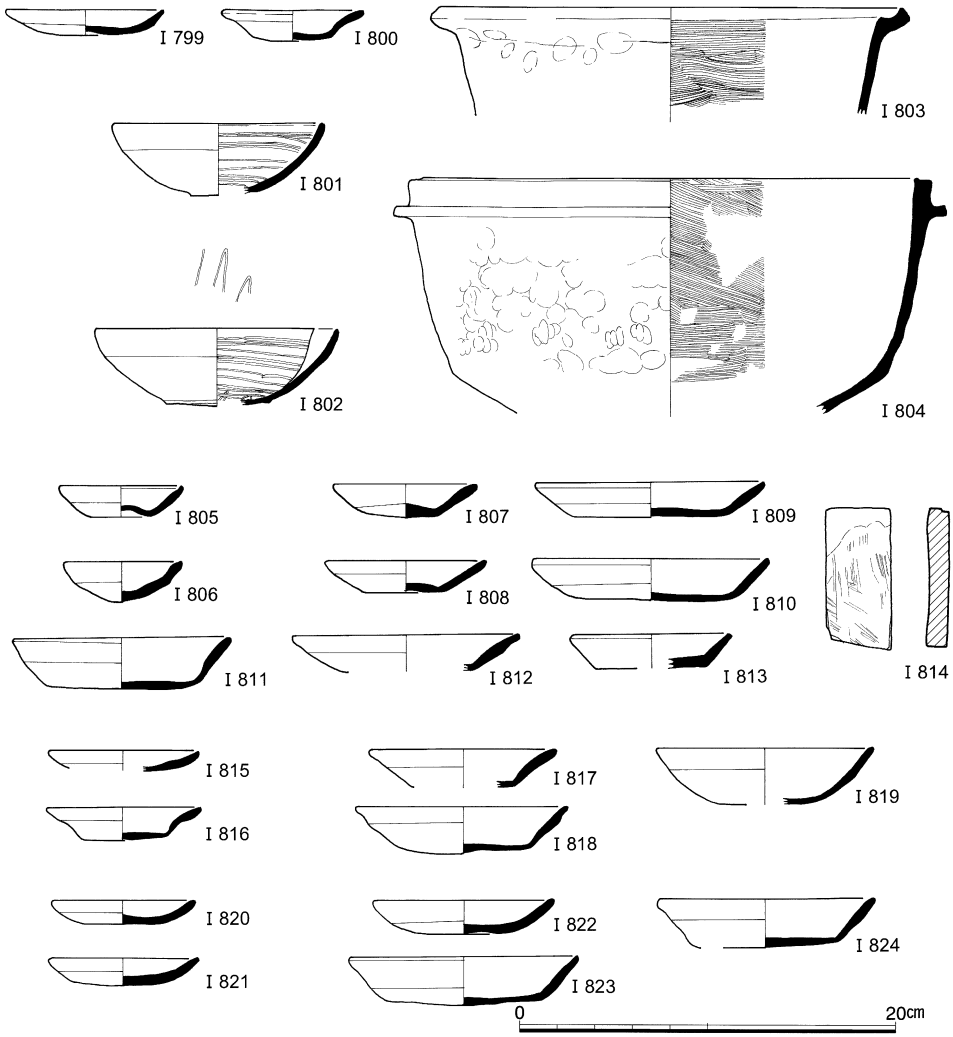


図49　ＳＤ15出土遺物（Ⅰ799・Ⅰ800土師器，Ⅰ801～Ⅰ804瓦器），ＳＸ101関連遺物（Ⅰ805～Ⅰ813・Ⅰ815～Ⅰ824土師器，Ⅰ814砥石）

るいは外折する。口径にばらつきあり，小はⅠ794の18.5㎝，大はⅠ796の30㎝である。Ⅰ797は瓦器羽釜。口縁部は内傾し，端部と鍔の間に浮線が１条めぐる。

ＳＤ11－12間の落ち込み（Ⅰ798）　Ⅰ798は復元口径48㎝をはかる備前焼大甕。口縁部を外側へ折り返し肥厚させている。備前焼Ⅲ～Ⅳ期。

ＳＤ15出土遺物（Ⅰ799～Ⅰ804）　Ⅰ799・Ⅰ800は土師器皿。Ⅰ799は口径8.5㎝，Ⅰ800は7.5㎝。２期新段階。

Ⅰ801・Ⅰ802は瓦器椀。篦磨きは内面のみで疎らである。Ⅰ801は口径11.2㎝，高さ3.8㎝，Ⅰ802は口径12.8㎝，高さ4.1㎝。ともに断面三角形の形骸化した高台がつく。楠葉型Ⅲ－３期～Ⅳ－１期。Ⅰ803は瓦器鍋。Ⅰ804は瓦器羽釜。

ＳＸ101石敷面以下出土遺物（Ⅰ805～Ⅰ814）　Ⅰ805は灰白色のくぼみ底小椀。口径6.5㎝。Ⅰ806は橙褐色を呈する土師器小椀。口径6.5㎝。底部が突出し通常の土師器椀･皿とは形態を異にする。Ⅰ807～Ⅰ812は橙褐色の土師器皿。面取りするＤ$_5$類と素縁手法のＥ$_1$類。小は口径7.5～８㎝。大は12㎝前後。２期古段階。

Ⅰ813は白磁の小皿。口禿で，底部は平底で施釉する。皿Ⅸ－１類。Ⅰ814は砥石。幅3.4㎝，長さ7.4㎝，厚さ９㎜をはかる。実測図下側の面は折損しているので，本来は，もう少し長かったとみられる。現重量55.1ｇ。

ＳＸ101石敷直下出土遺物（Ⅰ815～Ⅰ819）　Ⅰ815～Ⅰ818は橙褐色の土師器皿。小は口径８㎝，大は10～11㎝。Ⅰ819は灰白色の土師器椀。口径11.5㎝。２期新段階。

ＳＸ101周辺出土遺物（Ⅰ820～Ⅰ824）　Ⅰ820～Ⅰ824は橙褐色の土師器皿。小は口径８㎝（Ⅰ820・Ⅰ821）と9.5㎝（Ⅰ822）があり，大はＤ$_6$類のⅠ823が12㎝，Ｅ$_2$類のⅠ824が11.5㎝である。時期のばらつきがあるが，2期新段階を下限とみる。

⑻ 中世３期の遺物（図版22～24，図50～64）

ＳＤ11出土遺物（Ⅰ825～Ⅰ917）　Ⅰ825～Ⅰ879は土師器椀皿類。Ｅ類が主体を占めるが，Ｆ類が一定量組成する。Ⅰ825～Ⅰ861は橙褐色の土師器皿。口径は，8～10㎝，11～12㎝，13㎝前後のものが多い。Ⅰ862は回転台成形の土師器皿。Ⅰ863～Ⅰ865は特大の土師器皿。いずれもくぼみ底となる。Ⅰ866～Ⅰ871は灰白色を呈する土師器小椀で，くぼみ底となるものが多い。口径は，6～7.5㎝。Ⅰ874～Ⅰ879は灰白色の椀。口径11～13㎝。３期古段階。

Ⅰ880・Ⅰ881は須恵器すり鉢。口縁部が上下に肥厚する。Ⅰ882～Ⅰ890は古瀬戸。Ⅰ882・Ⅰ887が無釉のほかは，灰釉を施釉している。Ⅰ882は無釉陶器椀。灰白色を呈する。底部は回転糸切りし，断面三角形の小さな高台を貼り付ける。古瀬戸中Ⅱ期。Ⅰ883～Ⅰ885は折縁深皿。Ⅰ883は底部のみ残存。Ⅰ884は口径17.5㎝，器高７㎝。見込みには櫛描きで，Ⅰ883は同心円文，Ⅰ884は同心円文と波状文を施す。底部は，Ⅰ883は回転糸切り痕を残し，Ⅰ884は回転篦削り調整を加えている。底部外面を除いて，灰釉を刷毛塗りする。ともに古瀬戸中Ⅱ期。Ⅰ885は口縁径に比して器高が低く，口縁部が外側へ折れ曲がる。外面の施釉は，体部中位までである。古瀬戸後Ⅰ期。Ⅰ886は卸し皿。底部から体部へ丸

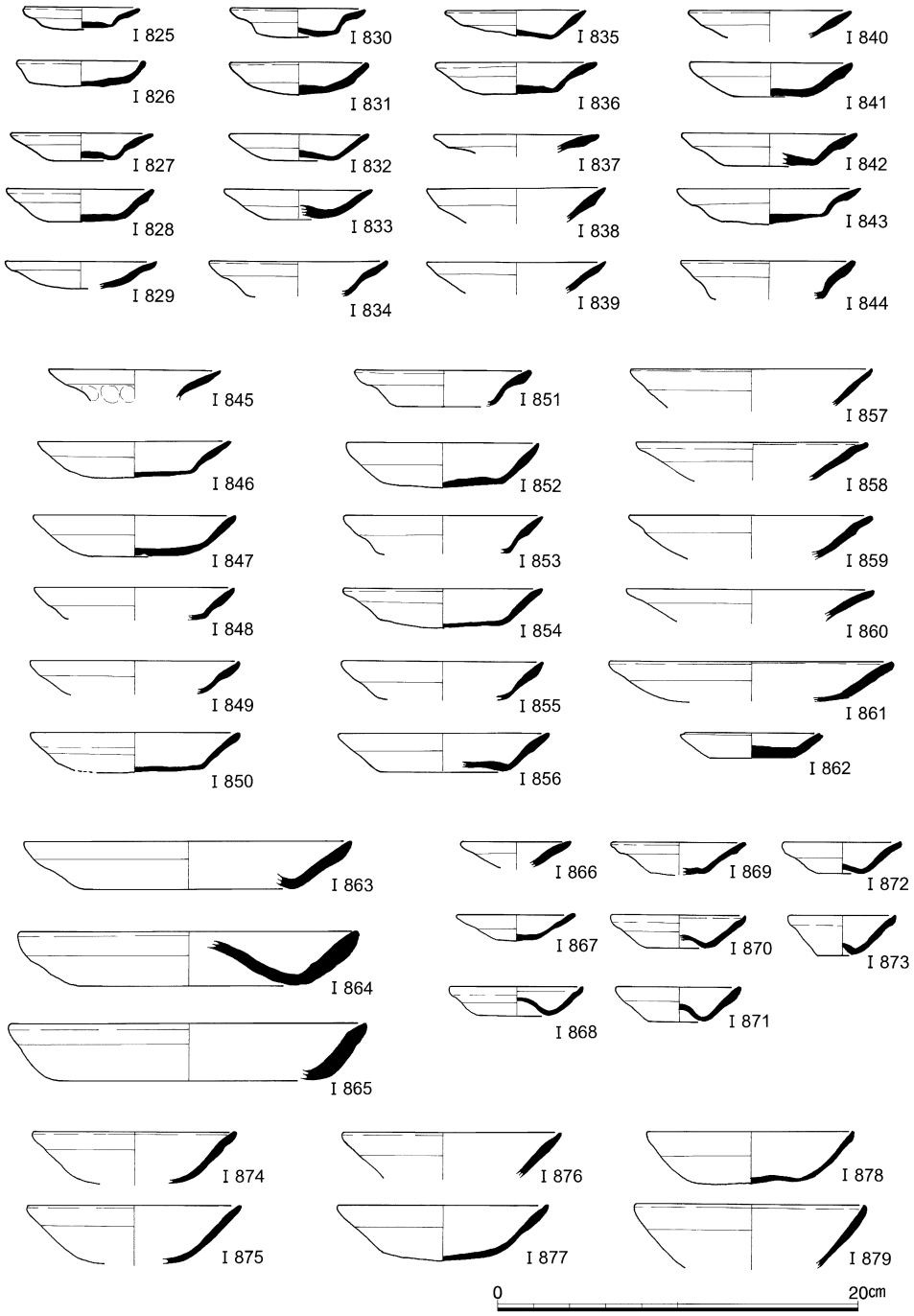


図50　ＳＤ11出土遺物(1)（Ⅰ825～Ⅰ879土師器）

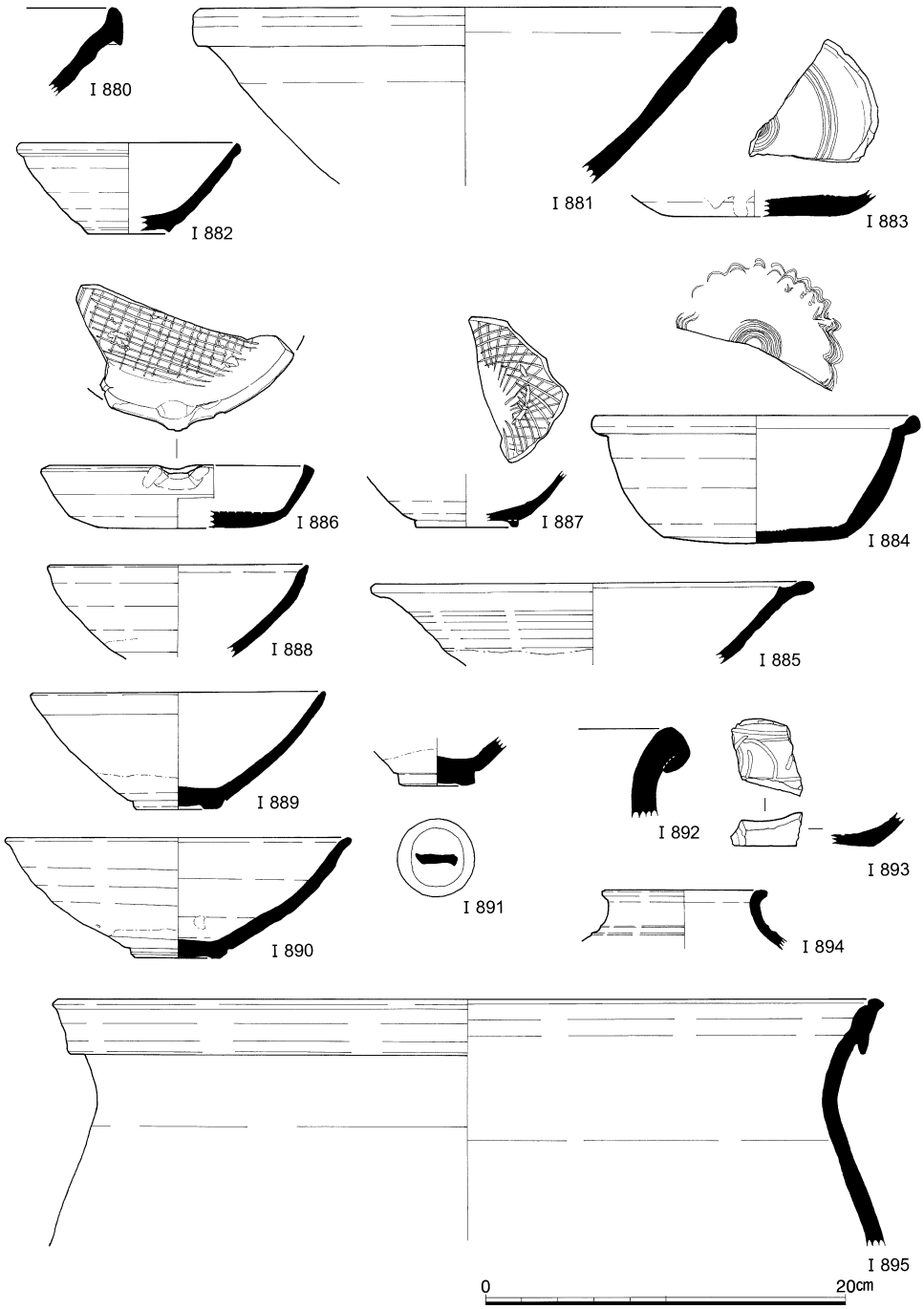


図51　ＳＤ11出土遺物⑵（Ⅰ880・Ⅰ881須恵器，Ⅰ882～Ⅰ890古瀬戸，Ⅰ891・Ⅰ893・Ⅰ894貿易陶器，Ⅰ892備前，Ⅰ895信楽）

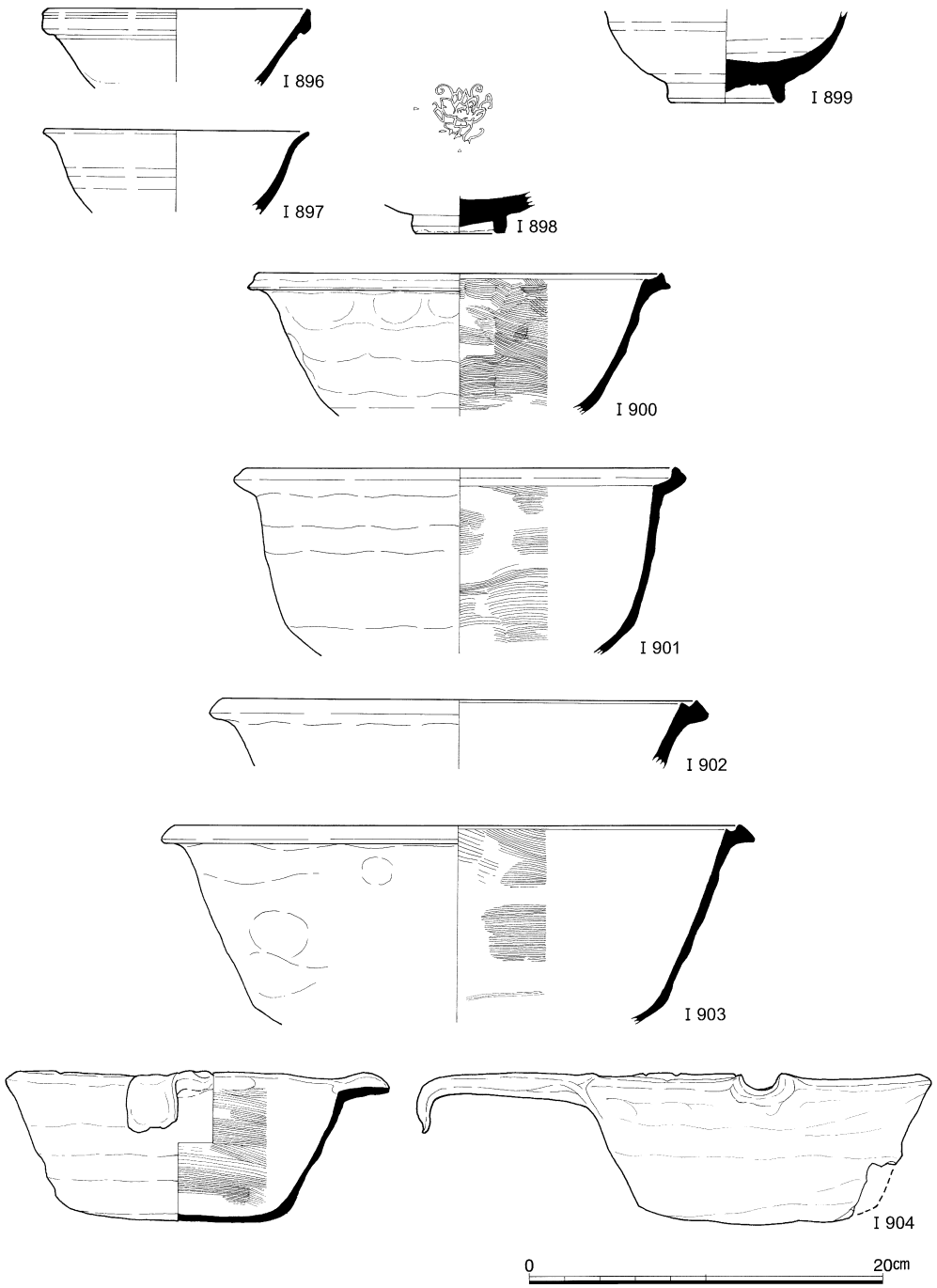


図52　ＳＤ11出土遺物⑶（Ⅰ896・Ⅰ897白磁，Ⅰ898・Ⅰ899青磁，Ⅰ900～Ⅰ904瓦器）

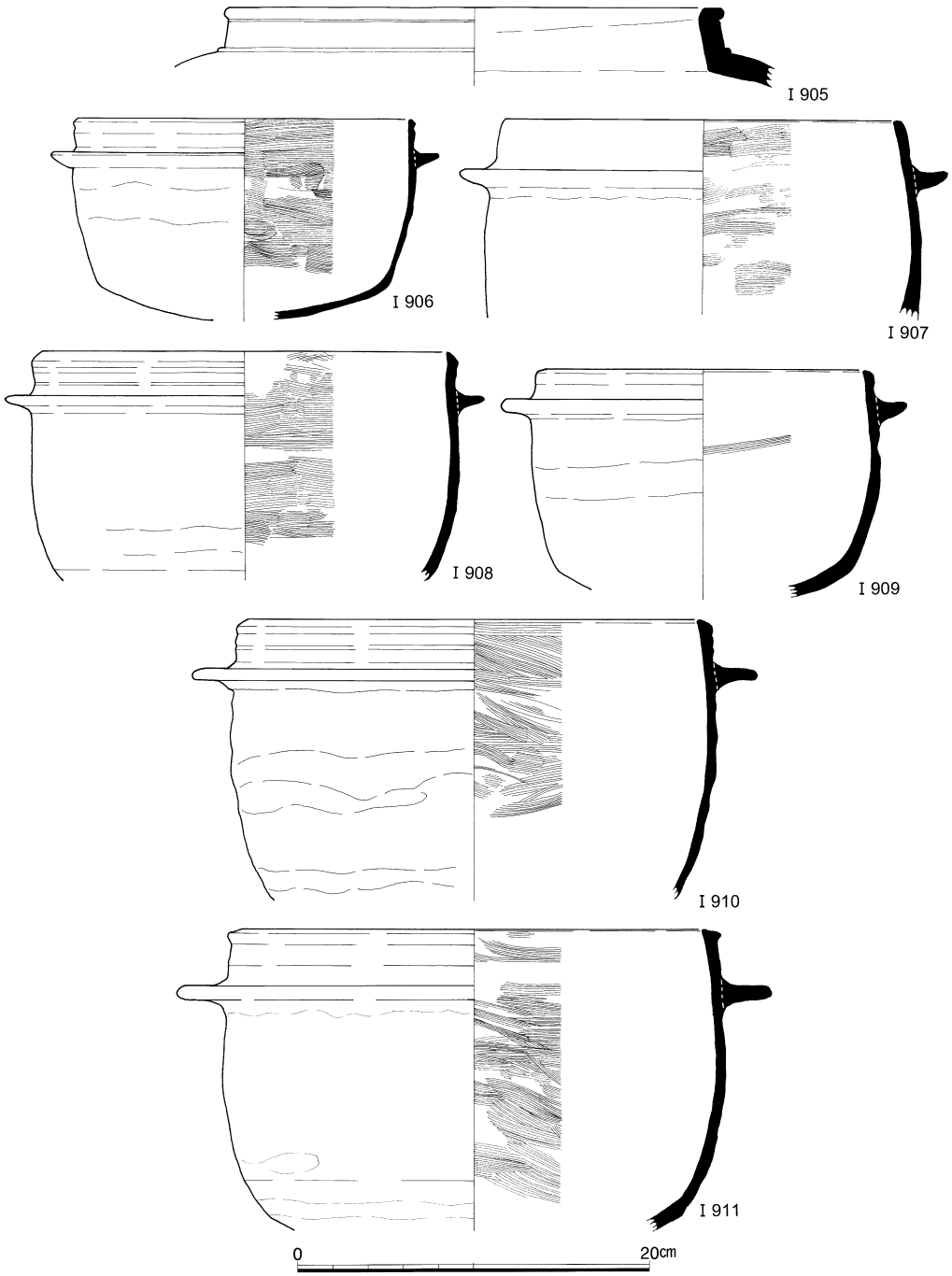


図53　ＳＤ11出土遺物⑷（Ⅰ905～Ⅰ911瓦器）

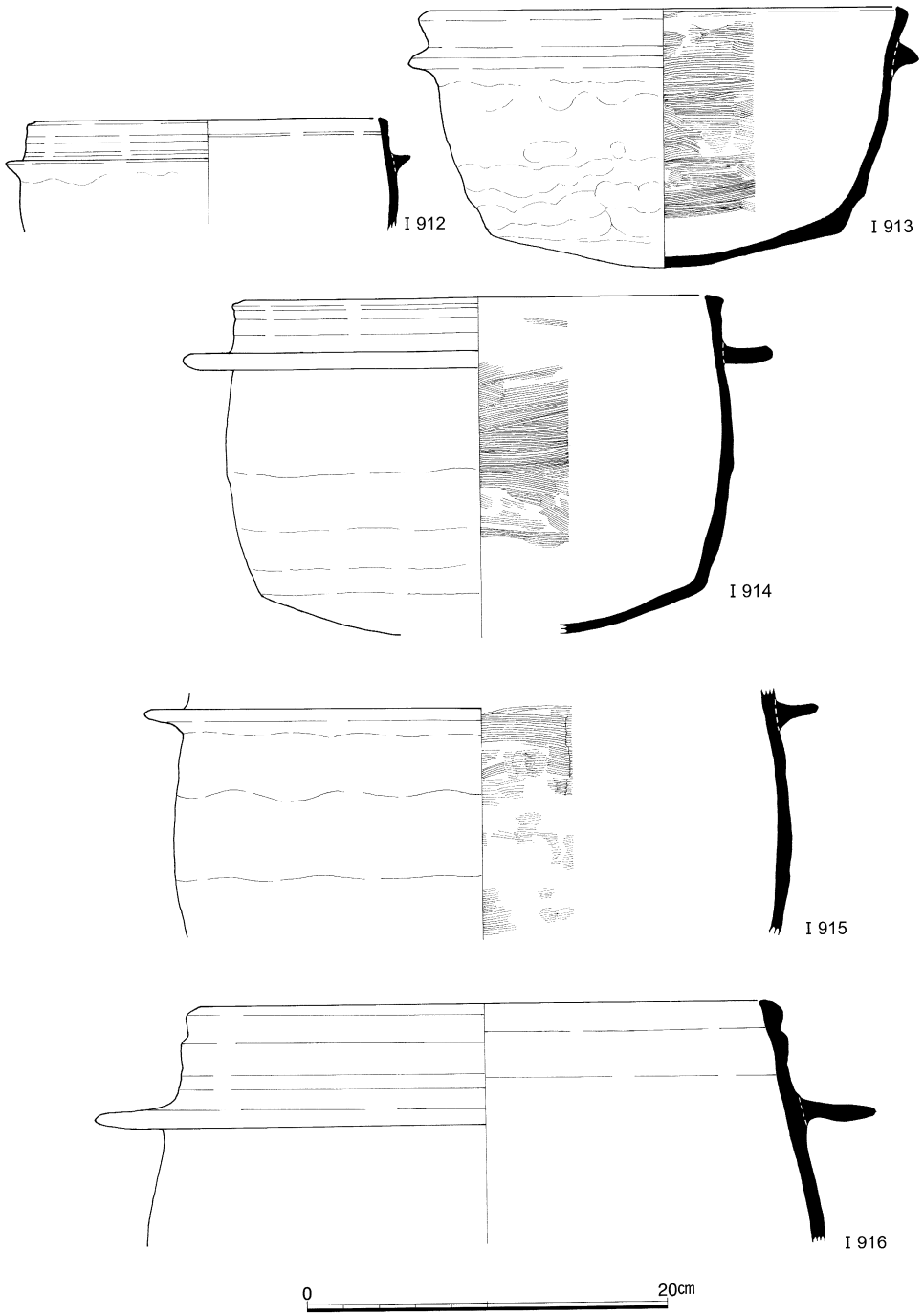


図54　ＳＤ11出土遺物⑸（Ｉ912～Ｉ916瓦器）

みをもって立ち上がり，口縁部は平坦で端部が角張る。底部回転糸切り。古瀬戸前Ⅲ期。Ⅰ887は，いわゆる山茶碗。内面に卸し目をもつ東濃型で，重ね焼きの跡が残る。底部は回転糸切りし，貼り付け高台の端部には籾殻痕跡をもつ。Ⅰ888～Ⅰ890は，平椀。Ⅰ889の口縁部が直線的に立ち上がるのにたいして，Ⅰ888・Ⅰ890はわずかに外反する。底部は，Ⅰ889・Ⅰ890ともに，底平な削り出し高台である。Ⅰ890は底部畳付けに回転糸切り痕を残し，見込みには５箇所に目跡をもつ。Ⅰ888･Ⅰ890は古瀬戸後Ⅲ期。Ⅰ889は後Ⅱ期に編年される。

Ⅰ891は貿易陶器。鉄釉を施す天目椀の底部。底部外面に,「一」の墨書がある。Ⅰ892は備前焼甕の口縁部。Ⅰ893は河南三彩盤。緑釉地で内面に篦描きによる文様をもつ。Ⅰ894は褐釉陶器の壺。Ⅰ895は信楽焼甕。ＫＢ３類。Ⅰ896・Ⅰ897は白磁椀。Ⅰ896は口縁部が玉縁となる椀Ⅳ類。Ⅰ897は端反となり，青みがかった釉調を呈する。森田分類のＢ類であろうか。Ⅰ898・Ⅰ899は青磁椀。Ⅰ898は，見込みに花文のスタンプを押捺し，高台外面まで施釉している。Ⅰ899は高台外面まで施釉し，内外面とも無文である。

Ⅰ900～Ⅰ916は瓦器。Ⅰ900～Ⅰ903は鍋。口縁部の２段の屈曲をかろうじて残すものもあるが（Ⅰ901），断面形が「Ｖ」字形に退化したものが多い。Ⅰ904は柄付き鍋。端部を下方へ折り曲げた柄と，それに直交する位置に注ぎ口がつく。口縁端部は内側へ肥厚させて，平坦面をつくる。Ⅰ905は，いわゆる奈良火鉢の一種で，風炉。直立する口縁部に雷文のスタンプを押捺する。Ⅰ906～Ⅰ916は羽釜。大小各種あり，小は口径19㎝前後，口径25㎝前後のものが多く，Ⅰ916は口径30㎝をこえる大型品である。体部はわずかに湾曲し，口縁部が長く延び，端部が面をなして外傾するものが多い。

Ⅰ917は青白磁の置物。上半部を欠損し，現存最大幅5.6㎝，現存長5.8㎝。最下部での奥行き2.9㎝をはかる。中空で，正面は全面施釉し，裏面は下半を露胎としている。最下部には，波頭文を表現し，向かって左端に鳥の表現かと思われる突起がつく。対応する右端にも欠損しているが，同様の突起がついた可能性が高い。左端の突起の横には，足の指が表現されており，これに対応すると考えられる膝頭が右寄りに突起状に表現されている。これは結跏した右足に相当するものと思われる。さらに細長い粘土を貼り付けて衣服の襞を，小玉をつらねてビーズの連珠を表現している。上半部の状況が欠損により不明ではあるけれども，水を表現していると思われる波頭文の上に，裳状の衣服をまとい，ビーズ状の装身具を身につけて，鳥を従えている表現から判断して，いわゆる渡海観音と呼ばれる置物の一種であろうと思われる。

図55　ＳＤ11出土遺物⑹（Ⅰ917青白磁）　縮尺1/2

このような青白磁あるいは白磁の観音像は，元代以降，景徳鎮や福建省徳化などで製作されている。またビーズ玉を連ねた連珠文は，白磁の壺や瓶などにも取り入れられて元代に流行している〔佐藤1981〕。共伴した在地土師器が３期古段階であることから，本例は14世紀～15世紀初の所産と推定しておきたい。

ＳＸ100出土遺物（Ⅰ918～Ⅰ962）　Ⅰ919～Ⅰ921・Ⅰ924・Ⅰ925は，褐色系の土師器小皿。口径８㎝前後。Ⅰ918・Ⅰ922・Ⅰ923・Ⅰ926～Ⅰ935は，白色系の土師器小椀。Ⅰ918・Ⅰ922・Ⅰ923は，口径6.5～７㎝前後で，くぼみ底になると思われる。Ⅰ926～Ⅰ935は，口径７～８㎝で，底部がわずかにくぼむものが多い。Ⅰ936は，褐色系の土師器椀で，口径９㎝前後。Ⅰ937～Ⅰ940・Ⅰ947・Ⅰ948は，褐色系の土師器皿。Ⅰ937～Ⅰ940はＥ類手法で，口径は9.5～12㎝までみとめられる。Ⅰ947･Ⅰ948はＦ$_2$類で，口径14㎝をはかる。Ⅰ944～Ⅰ946は白色系の土師器椀。口径は12㎝前後のものが多い。３期古段階。

Ⅰ949・Ⅰ950は回転台利用の土師器皿と椀。灰白色を呈し，底部を回転糸切りする。Ⅰ949は口径7.5㎝，器高1.5㎝，Ⅰ950は口径７㎝，器高2.5㎝。Ⅰ951･Ⅰ952は土師器鉢。体部がやや外傾しながら立ち上がり，口縁部が外反する。砂粒を多く含む粗放な胎土で，内外面を撫でて仕上げている。Ⅰ951は口径13㎝，推定器高８㎝，Ⅰ952は口径15.5㎝，器高９㎝。Ⅰ953は土師器羽釜のミニチュア。

Ⅰ954は灰釉系陶器小椀。底部は平底で，篦切りしている。Ⅰ955・Ⅰ956は須恵器すり鉢。口縁部が玉縁状に肥厚する。Ⅰ957は白磁皿。全面施釉し，口縁端部のみ口禿とする。見込みと体部内面に，花文を型押しで陽出する。皿Ⅸ－１類。Ⅰ958は陶器盤。いわゆる河南三彩とみられ，白化粧を施し全面緑釉地に，褐釉で内面に文様を描いている。口縁部は外側へ折り返して肥厚させる。Ⅰ959･Ⅰ960は青磁椀。Ⅰ959は内面に片切彫りで文様を

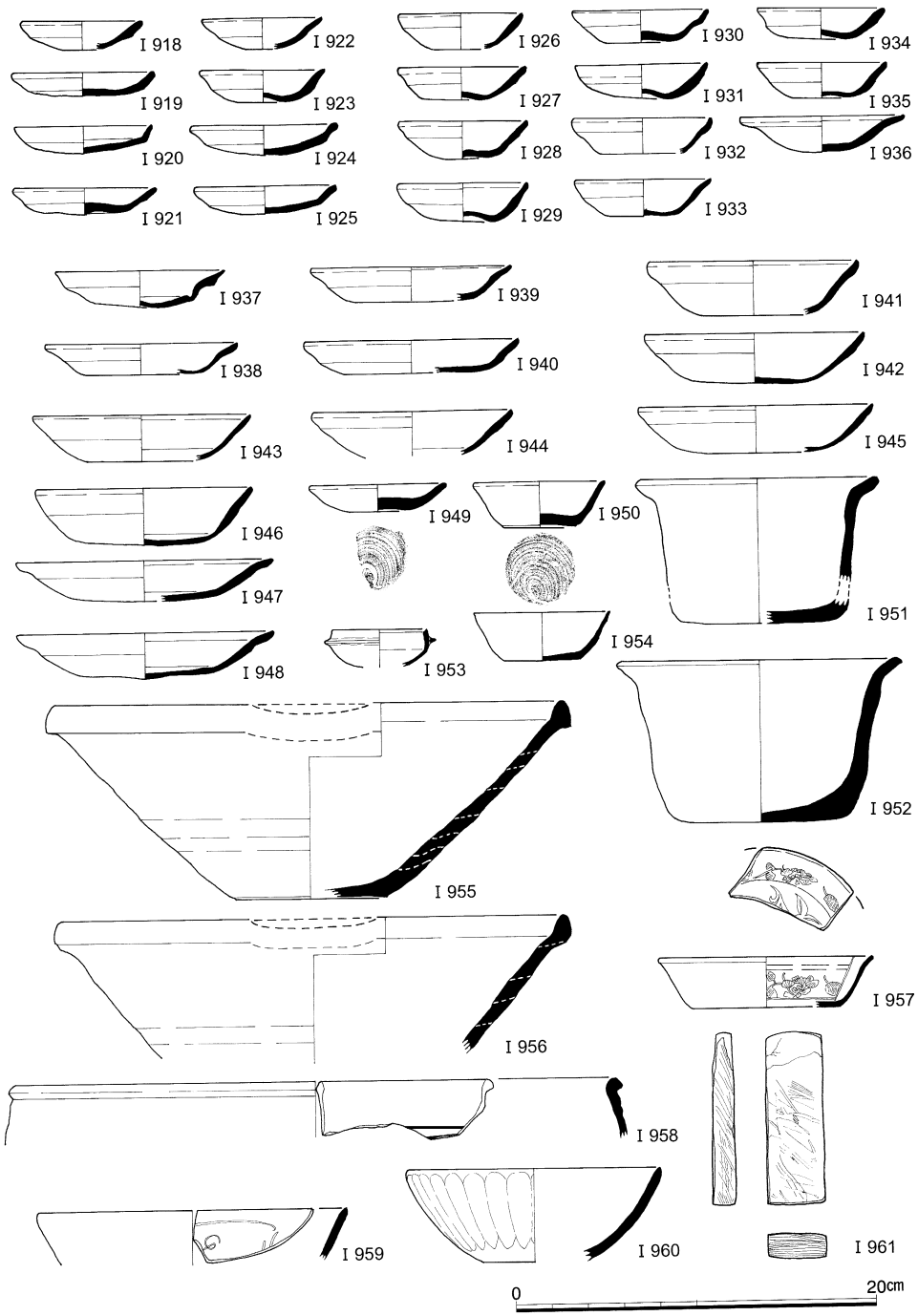


図56　ＳＸ100出土遺物(1)（Ⅰ918～Ⅰ953土師器，Ⅰ954灰釉系陶器，Ⅰ955･Ⅰ956須恵器，Ⅰ957白磁，Ⅰ958貿易陶器，Ⅰ959・Ⅰ960青磁，Ⅰ961砥石）

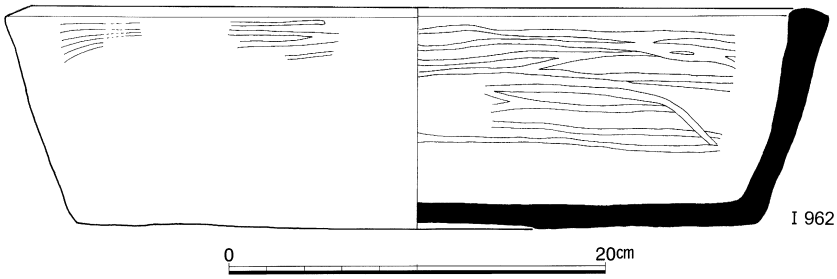


図57　ＳＸ100出土遺物⑵（Ⅰ962瓦器）

描く。同安窯系青磁椀Ⅰ類。Ⅰ960は外面に簡略化した蓮弁文が表現される。龍泉窯系青磁椀。Ⅰ961は砥石。直方体で，幅3.1㎝，長さ9.3㎝，厚さ1.1㎝。重量79.6ｇ。Ⅰ962は瓦器盤。体部が直線的に立ち上がる形態で，口径40㎝前後。体部内外面は横位に磨き，見込みには，斜格子状の暗文を施している。1/5ほど残存する底部には脚はつかない。奈良火鉢の浅鉢Ⅱ類〔立石1995〕とされるものである。

ＳＸ21出土遺物（Ⅰ963～Ⅰ966）　Ⅰ963はE_1類，Ⅰ964はF_2類土師器皿。Ⅰ965は特大の土師器皿。口径24.5㎝前後で，くぼみ底となる。３期新段階。Ⅰ966は黄釉陶器の盤。口縁端部が外側へ水平に張りだしている。

ＳＸ30出土遺物（Ⅰ967～Ⅰ984）　Ⅰ967～Ⅰ976は土師器皿。白色系といえるのはⅠ968のみであり，他は赤褐色系あるいは橙褐色系である。小は口径７～９㎝，大は12㎝前後のⅠ974・Ⅰ975，16.5㎝のⅠ976がある。３期新段階。

Ⅰ977は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が受口状に肥厚し，体部外面は整形時の挽き目の凹凸が顕著に残る。第３期第３段階。Ⅰ978は信楽焼こね鉢。内外面とも横撫で調整し，口縁部はわずかに外反させつつそのまま収めている。Ａ－ｃ類。Ⅰ979～Ⅰ981は古瀬戸。Ⅰ979は平椀。古瀬戸後Ⅲ期。Ⅰ980は天目釉を施す。脚台のつく仏供だろう。Ⅰ981は卸し皿。底部に回転糸切り痕を残す。古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期。Ⅰ982は青磁椀。線描きによる蓮弁文を施す。Ⅰ983は瓦器鍋。口縁部は外へ張り出し，浅い器形となる。Ⅰ984は瓦器羽釜。体部が直線的で，口縁部は比較的長い。

ＳＸ59出土遺物（Ⅰ985･Ⅰ986）　Ⅰ985はF_2類，Ⅰ986はF_3類の土師器皿。ともに口縁端部に煤が付着する。３期新段階。

ＳＫ８出土遺物（Ⅰ987～Ⅰ990）　Ⅰ987･Ⅰ988はF_2類土師器皿。３期新段階。Ⅰ989は備前焼すり鉢。口縁部が上下に拡張し，内面に７条１単位のすり目が施される。体部下半から底面にかけて，使用による摩耗が著しい。備前焼Ⅳ期。Ⅰ990は瓦器羽釜。胴部が

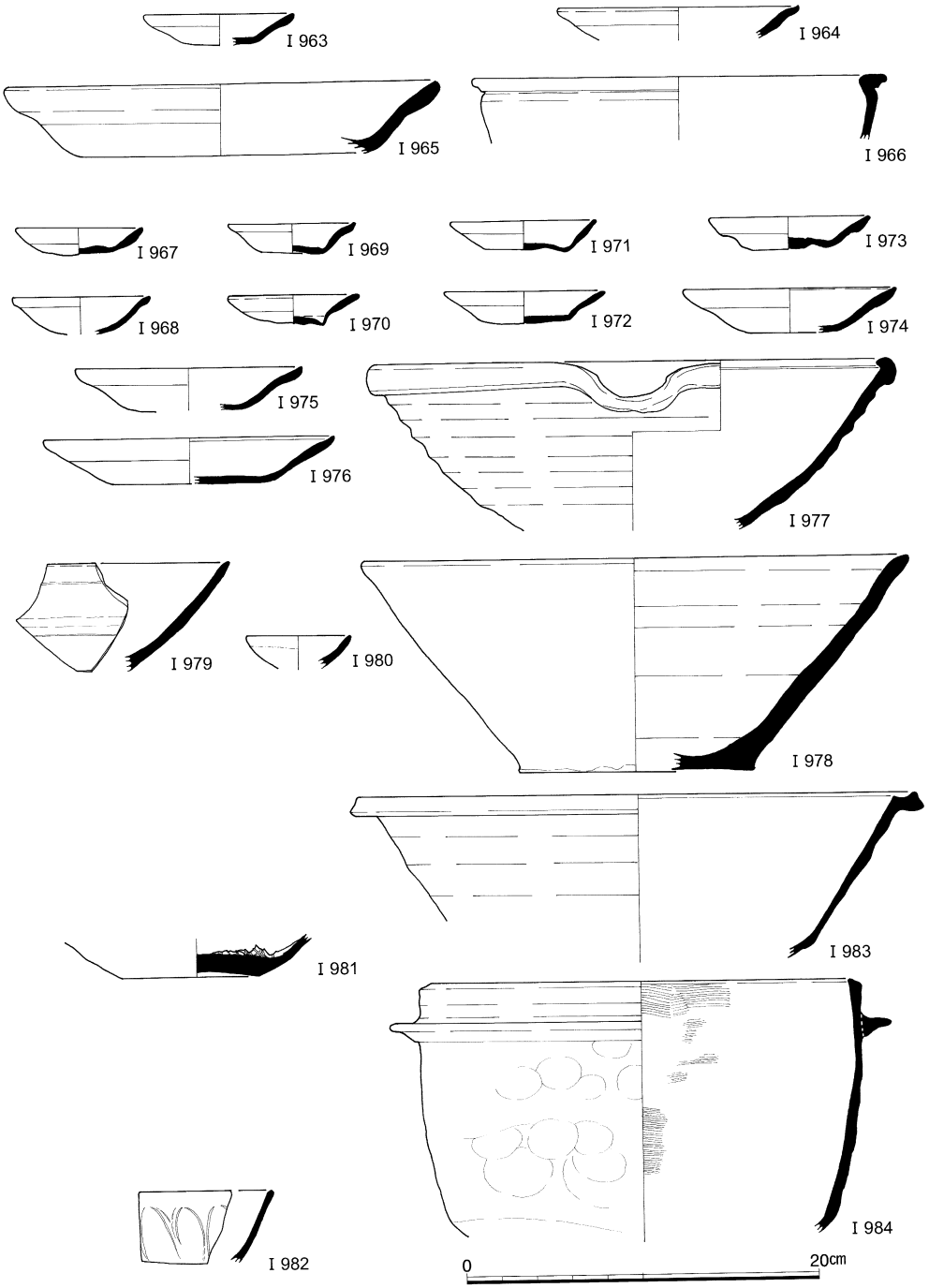


図58　ＳＸ21出土遺物（Ⅰ963～Ⅰ965土師器，Ⅰ966貿易陶器），ＳＸ30出土遺物（Ⅰ967～Ⅰ976土師器，Ⅰ977須恵器，Ⅰ978信楽，Ⅰ979～Ⅰ981古瀬戸，Ⅰ982青磁，Ⅰ983・Ⅰ984瓦器）

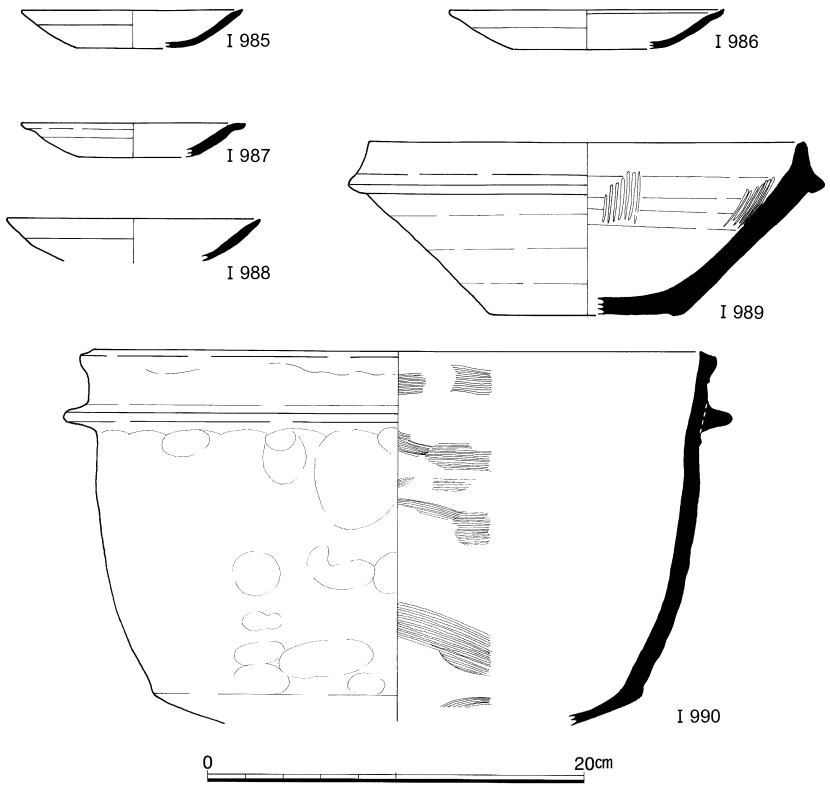


図59　ＳＸ59出土遺物（Ⅰ985・Ⅰ986土師器），ＳＫ８出土遺物（Ⅰ978・Ⅰ988土師器，Ⅰ989備前，Ⅰ990瓦器）

ふくらみ気味となり，口縁部がやや長く直立する。

ＳＸ９出土遺物（Ⅰ991～Ⅰ1000）　Ⅰ991～Ⅰ999は土師器皿。小は口径７～8.5㎝でE_4類，大は口径13～14㎝でF_2類。３期新段階。Ⅰ1000は回転台成形の土師器皿。底部を静止糸切りしている。

ＳＸ17出土遺物（Ⅰ1001～Ⅰ1023）　Ⅰ1001～Ⅰ1010は土師器皿。小は口径６～９㎝，大は12～17㎝まであり，法量にばらつきがある。Ⅰ1011～Ⅰ1013は特大の土師器皿。Ⅰ1013は口縁部下端が突出する。３期新段階。

Ⅰ1014は土師器。口径15㎝，器高8.8㎝をはかる。Ⅰ1015･Ⅰ1016は古瀬戸。Ⅰ1015は折縁深皿，Ⅰ1016は花瓶の脚部とみられる。脚部内面に「浄蓮智受分」と解読できる墨書がある。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期。Ⅰ1017は青磁壺。口縁端部が外側へ折れ，端部が平坦面をなす。Ⅰ1018～Ⅰ1020は白磁で，Ⅰ1018・Ⅰ1019は皿，Ⅰ1020は端反になる椀。Ⅰ1021～Ⅰ1023は瓦器。Ⅰ1021・Ⅰ1022は羽釜。Ⅰ1022は口径30㎝をこえる大型品で，口縁部が長く

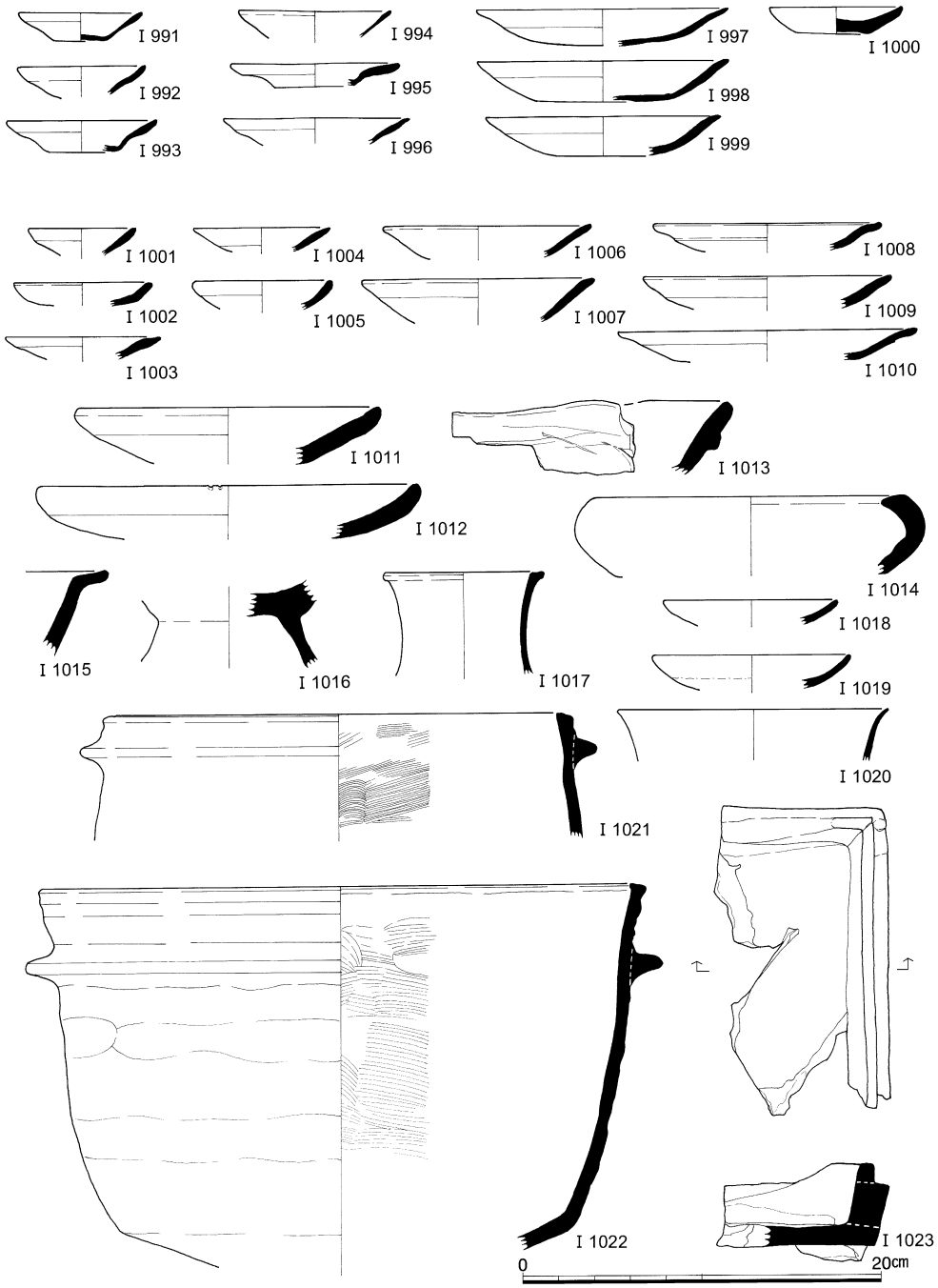


図60　ＳＸ９出土遺物（Ⅰ991～Ⅰ1000土師器），ＳＸ17出土遺物（Ⅰ1001～Ⅰ1014土師器，Ⅰ1015・Ⅰ1016古瀬戸，Ⅰ1017青磁，Ⅰ1018～Ⅰ1020白磁，Ⅰ1021～Ⅰ1023瓦器）

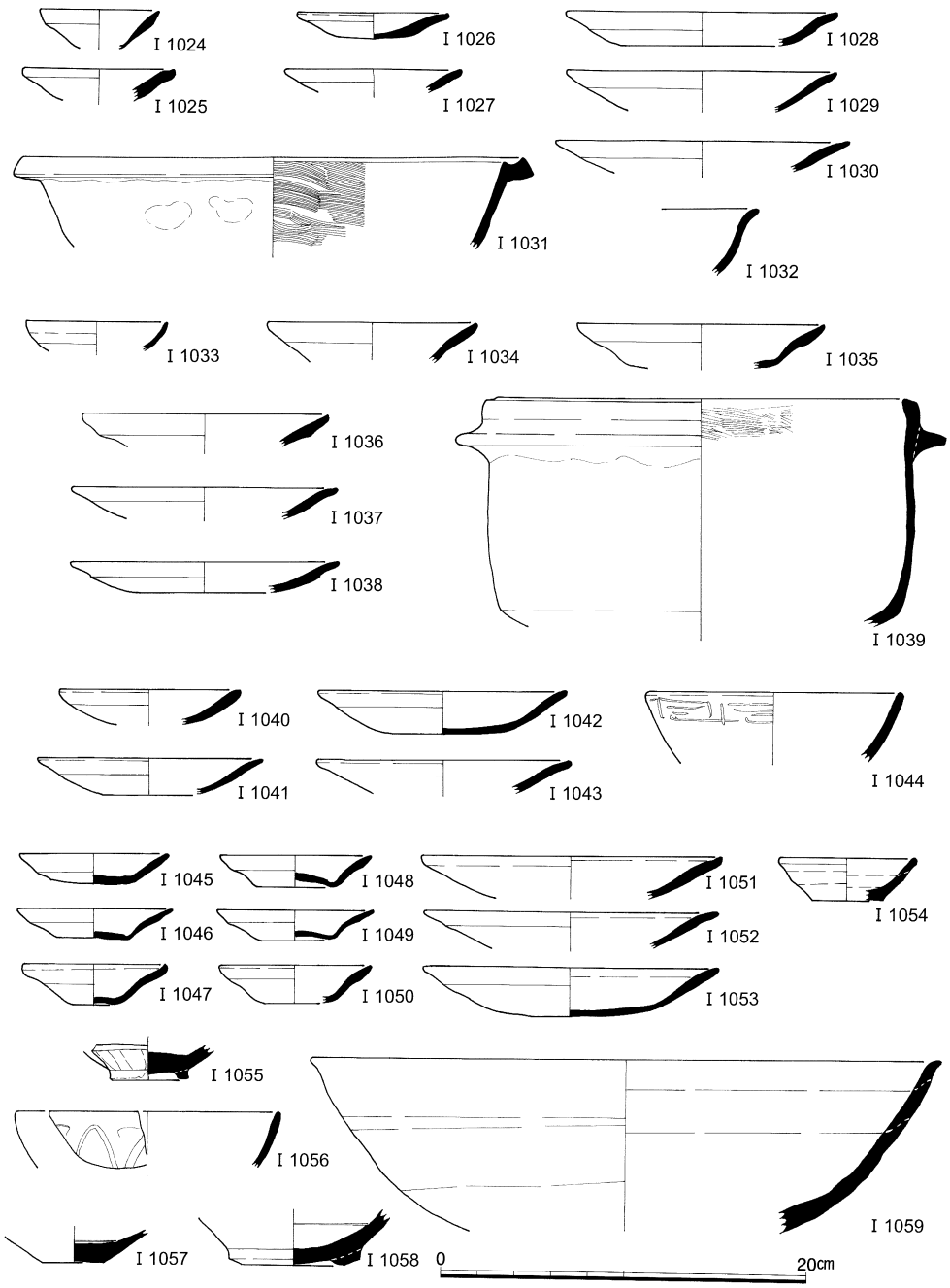


図61　ＳＸ29出土遺物（Ⅰ1024～Ⅰ1030土師器，Ⅰ1031瓦器，Ⅰ1032青磁），ＳＸ33出土遺物（Ⅰ1033～Ⅰ1038土師器，Ⅰ1039瓦器），ＳＸ36出土遺物（Ⅰ1040～Ⅰ1043土師器，Ⅰ1044青磁），ＳＸ39出土遺物（Ⅰ1045～Ⅰ1053土師器，Ⅰ1054灰釉系陶器，Ⅰ1055・Ⅰ1056青磁，Ⅰ1057・Ⅰ1058白磁，Ⅰ1059須恵器）

直立する。Ⅰ1023は平面長方形で，浅い広口状を呈する。隅に脚がつき，口縁部が受け口状となる。側面は磨いて仕上げているが，底部は側面との接合部を撫でるほかは粗面を呈している。線香立て，といった用途が想定される。

ＳＸ29出土遺物（Ⅰ1024～Ⅰ1032）　Ⅰ1024～Ⅰ1030は土師器皿。小は口径5.5～9.5㎝のあいだにあり，大は口径15～16㎝。Ⅰ1030は口縁端部から外面が煤で黒化している。３期新段階。

Ⅰ1031は瓦器鍋。Ⅰ1032は青磁椀。口縁部が端反となる。

ＳＸ33出土遺物（Ⅰ1033～Ⅰ1039）　Ⅰ1033は白色系の土師器小椀。口径7.5㎝。Ⅰ1034～Ⅰ1038は土師器皿。Ⅰ1034～Ⅰ1036はE_4類で，口径11.5～13.5㎝。Ⅰ1037･Ⅰ1038はF_2類で，口径14.5㎝前後。３期新段階。Ⅰ1039は瓦器羽釜。体部が直立する。

ＳＸ36出土遺物（Ⅰ1040～Ⅰ1044）　Ⅰ1040～Ⅰ1043は土師器皿。Ⅰ1040はF_1類で，口径10㎝。他はF_2類で，口径12.5㎝と13.5㎝。３期新段階。Ⅰ1044は青磁椀。口縁部に雷文を施す。

ＳＸ39出土遺物（Ⅰ1045～Ⅰ1059）　Ⅰ1045～Ⅰ1053は土師器皿。Ⅰ1050が白色系のほかは，橙褐色系。小はＥ類各種からなり，口径８～8.5㎝。大はF_2類・F_3類で，口径16～16.5㎝。３期新段階。

Ⅰ1054は灰釉系陶器小杯。無釉で，底部は回転糸切り。Ⅰ1055・Ⅰ1056は青磁椀。Ⅰ1055は底部で，高台外面まで施釉する。Ⅰ1056は蓮弁文を施す。Ⅰ1057・Ⅰ1058は白磁の椀。ともに底部で，Ⅰ1057は底部外面のみ露胎，見込みに段をもつ。Ⅰ1058は見込みに圏線がめぐる。Ⅰ1059は須恵器鉢。古代の遺物の混入品だろう。

ＳＸ63出土遺物（Ⅰ1060～Ⅰ1067）　Ⅰ1060～Ⅰ1062は橙褐色系の土師器皿。Ⅰ1060はE_4類で，口径8.5㎝。Ⅰ1061・Ⅰ1062はF_2類で，口径13.5㎝と14.5㎝をはかる。３期新段階。

Ⅰ1063は古瀬戸の卸皿。口縁部を内側へ肥厚させ，口縁端部が凹面となる。底部は回転糸切り。後期Ⅳ古期。Ⅰ1064～Ⅰ1067は瓦器羽釜。このうち，Ⅰ1064・Ⅰ1066・Ⅰ1067は直立する体部に鍔のつく通例のタイプの羽釜で，いずれも口縁部が長く延びる。Ⅰ1067は口径40㎝，推定器高28.5㎝をはかる大型品である。Ⅰ1065は内湾する胴上部に耳がつき胴部中位に鍔のつく，いわゆる茶釜形である。外面は磨き，口縁部内面は横撫で，体部内面は刷毛目調整で仕上げている。

ＳＤ４出土遺物（Ⅰ1068～Ⅰ1093）　Ⅰ1068～Ⅰ1083は褐色系の土師器皿。小はＤ類

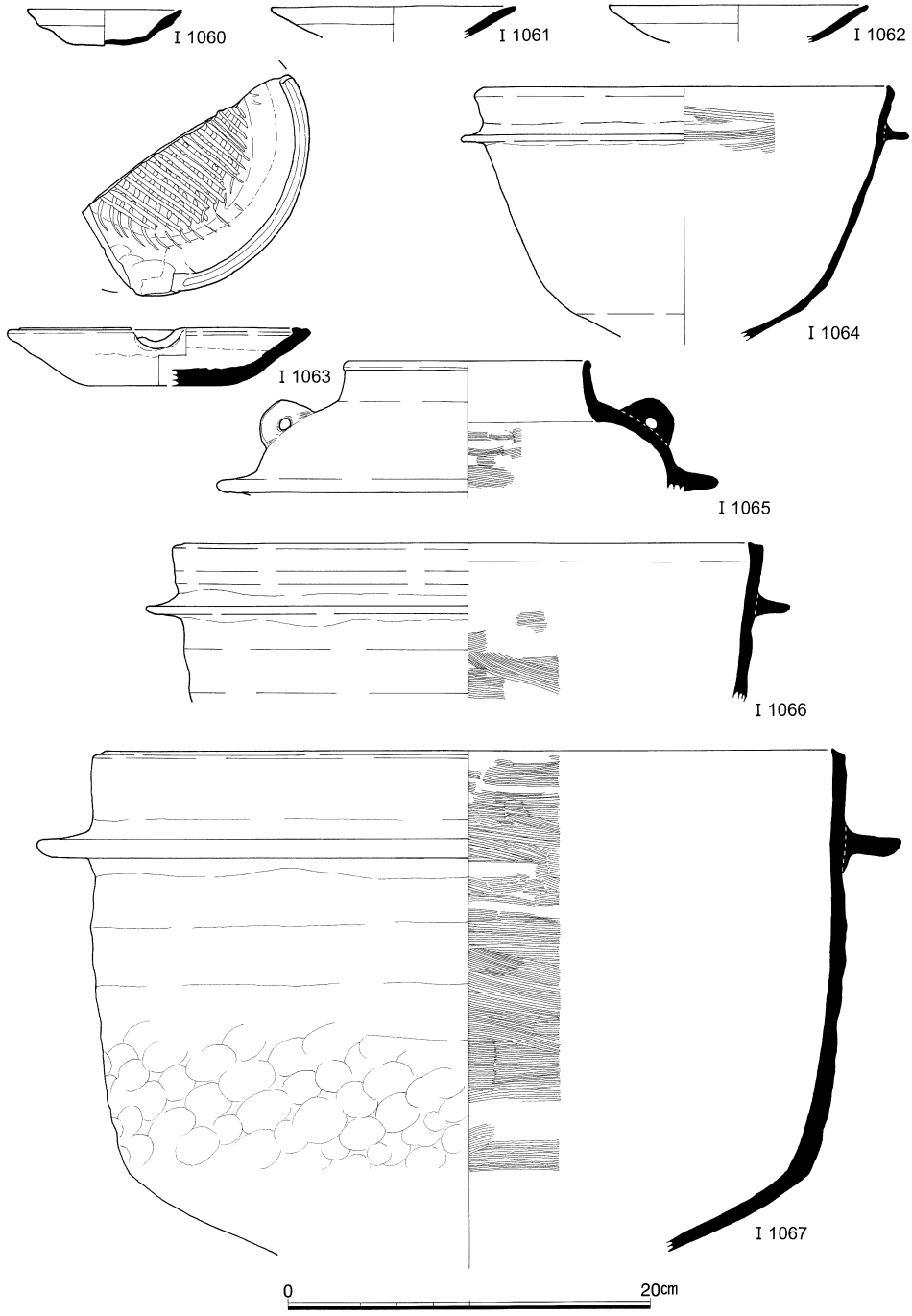


図62　ＳＸ63出土遺物（Ⅰ1060～Ⅰ1062土師器，Ⅰ1063古瀬戸，Ⅰ1064～Ⅰ1067瓦器）

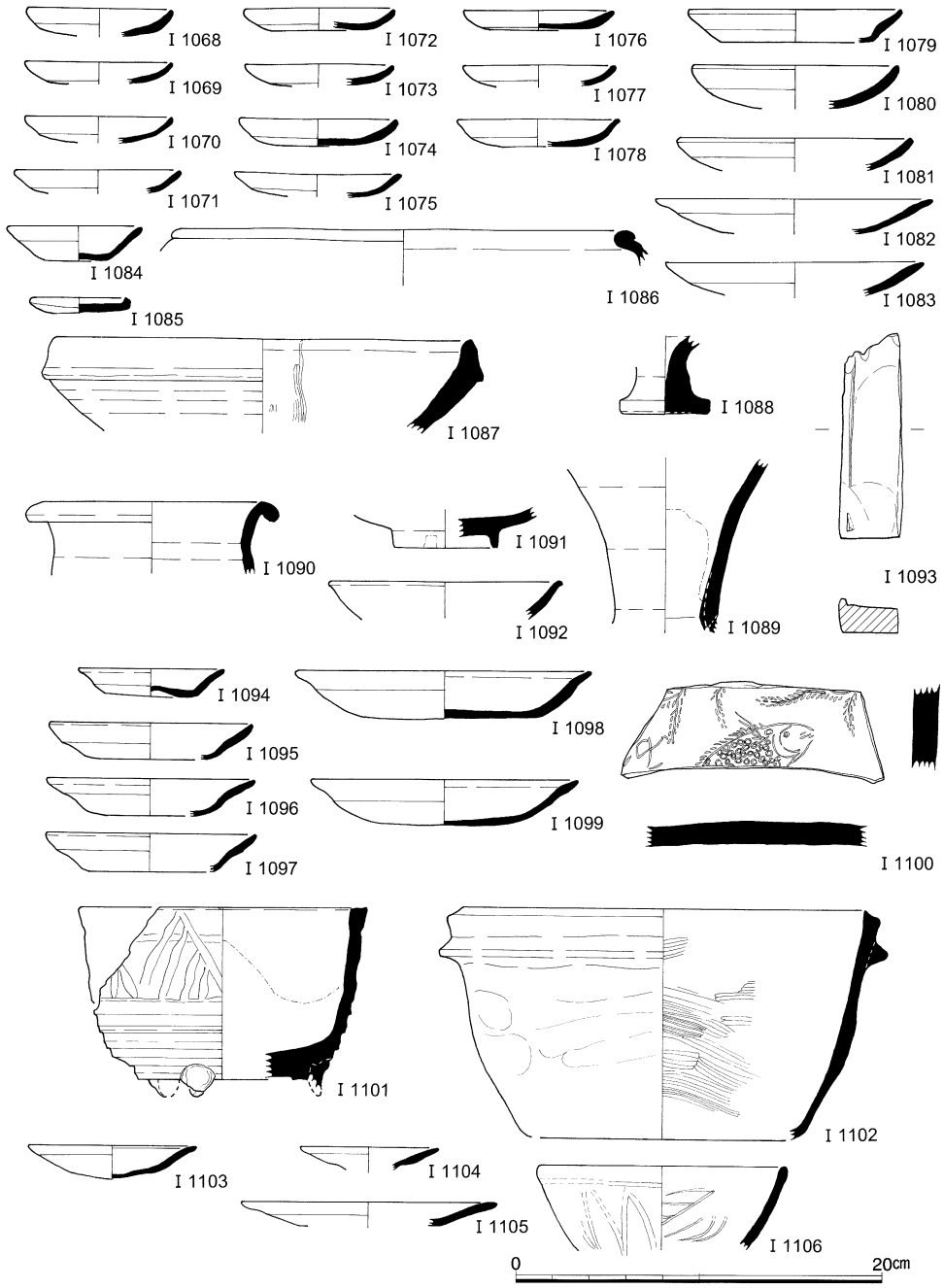


図63　ＳＤ４出土遺物（Ⅰ1068～Ⅰ1086土師器，Ⅰ1087備前，Ⅰ1088･Ⅰ1089古瀬戸，Ⅰ1090～Ⅰ1092白磁，Ⅰ1093硯），ＳＤ６上面出土遺物（Ⅰ1094～Ⅰ1099土師器，Ⅰ1100陶器），ＳＸ15出土遺物（Ⅰ1101古瀬戸，Ⅰ1102瓦器），ＳＸ16出土遺物（Ⅰ1103土師器），ＳＸ22出土遺物（Ⅰ1104・Ⅰ1105土師器，Ⅰ1106青磁）

が多く，大はD類とF類が出土している。前者を混入と見なすと，遺構はF$_2$類のⅠ1082，F$_1$類のⅠ1083の時期ということになろう。Ⅰ1084は白色系の土師器小椀。Ⅰ1085は白色系の土師器受皿。3期新段階。

Ⅰ1086は土師質の土釜。Ⅰ1087は備前焼すり鉢。口縁部が縁帯状に肥厚する。備前焼Ⅳ期。Ⅰ1088・Ⅰ1089は古瀬戸。Ⅰ1088は仏花瓶の脚部。底部は回転糸切り。古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期。Ⅰ1089は尊式花瓶の頸部。下端は胴部との接合部で割れている。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期。Ⅰ1090は白磁壺の口縁部。Ⅰ1091は青磁椀。高台外面まで施釉する。見込みに文様をもつ。Ⅰ1092は白磁椀。Ⅰ1093は硯。

ＳＤ６上面出土遺物（Ⅰ1094～Ⅰ1100）　Ⅰ1094～Ⅰ1099は褐色系の土師器皿。口径は，Ⅰ1094が８㎝，Ⅰ1095～Ⅰ1097が11～11.5㎝，Ⅰ1098が16㎝，Ⅰ1099が14.5㎝。3期新段階。

Ⅰ1100は無釉陶器の底部。焼成は堅緻で，灰色を呈する。底部外面は，時計回りの回転台上で削り調整をおこなっている。見込みには，魚と水草からなる魚藻文を篦刻みで描く。盤の類であり，東海諸窯の製品と思われる。

ＳＸ15出土遺物（Ⅰ1101･Ⅰ1102）　Ⅰ1101は古瀬戸の香炉。筒型の体部に，底部を削り出しで成形し，3脚をもつ。胴下部に４条の圏線をめぐらし，口縁部と圏線の間を三角文で埋めている。体部外面から内面中位まで鉄釉を施している。古瀬戸後Ⅳ期新。Ⅰ1102は瓦器羽釜。体部が直線的に斜め上方へ立ち上がる。

ＳＸ16出土遺物（Ⅰ1103）　Ⅰ1103は底部が丸底となる土師器皿。口径９㎝。3期新段階。

ＳＸ22出土遺物（Ⅰ1104～Ⅰ1106）　Ⅰ1104は，E$_4$類土師器皿。口径7.5㎝。Ⅰ1105は，F$_2$類土師器皿。口径14㎝。Ⅰ1106は青磁椀。外面に蓮弁文，内面にも文様を施す。3期新段階。

ＳＤ16出土遺物（Ⅰ1107～Ⅰ1115）　Ⅰ1107～Ⅰ1110は土師器皿。型式にばらつきがみられ，古い時期の遺物の混入と理解する。Ⅰ1107･Ⅰ1108はE$_4$類で，口径８㎝。Ⅰ1109はD$_6$類で，口径8.5㎝。Ⅰ1110はF$_1$類で，口径13.5㎝。Ⅰ1108･Ⅰ1109は褐色系。Ⅰ1107･Ⅰ1110は白色系。3期新段階。

Ⅰ1111は古瀬戸。灰釉は刷毛塗りで，外面体部下半は無釉。内面に卸し目をもつ大皿である。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期。Ⅰ1112は蓮弁文をもつ青磁椀。Ⅰ1113～Ⅰ1115は瓦器羽釜。いずれも口縁部は短く，体部は直線的で，底部との境が屈曲する。

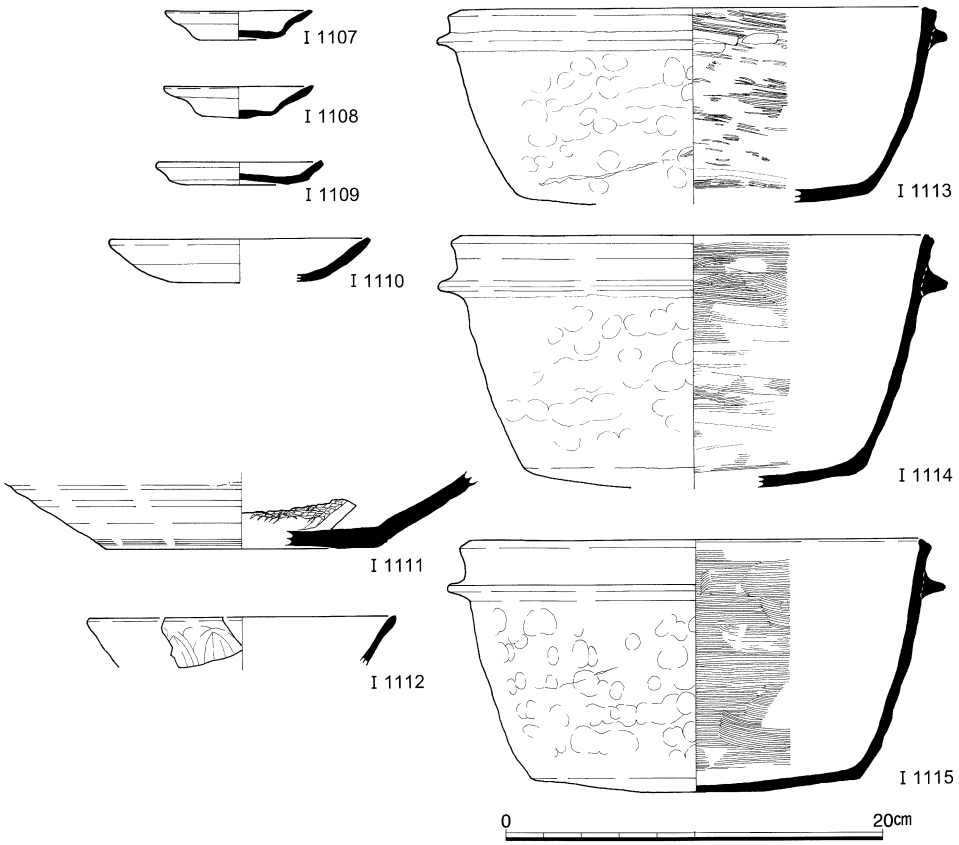


図64　ＳＤ16出土遺物（Ⅰ1107～Ⅰ1110土師器，Ⅰ1111古瀬戸，Ⅰ1112青磁，Ⅰ1113～Ⅰ1115瓦器）

茶褐色土・柱穴出土石製品（Ⅰ1116～Ⅰ1120）　中世の遺物包含層である茶褐色土からも多量の遺物が出土しているが，ここでは石製品のみを報告しておく（図65）。Ⅰ1119が中世の柱穴埋土から出土したほかは，茶褐色土出土である。

Ⅰ1116は石製帯飾り具。黒色の石を用い，長方形をなす巡方である。隅の一部が欠損し，裏面も一部が剝落する。短辺3.65㎝，長辺3.95㎝，厚さ0.6㎝をはかる。表面は丁寧に磨き光沢をだす。裏面は平らに仕上げているが，擦痕を残し光沢をもたない。裏面の４箇所に潜り穴をもつ。現重量25.0ｇ。Ⅰ1117～Ⅰ1120は硯。平面は長方形を呈する。Ⅰ1117は海の部分が半円形をなし，背面には左右に硯足がつく。Ⅰ1118は全体の形状がわかり，長さ11.2㎝，海側の幅6.5㎝，墨堂側の幅７㎝をはかり，わずかに台形となる。背面に径８㎜の盲孔が穿たれている。Ⅰ1119は幅9.8㎝をはかる。背面は大きく剝落している。縦横にはしる筋が硯面上にあり，砥石としての転用が考えられる。

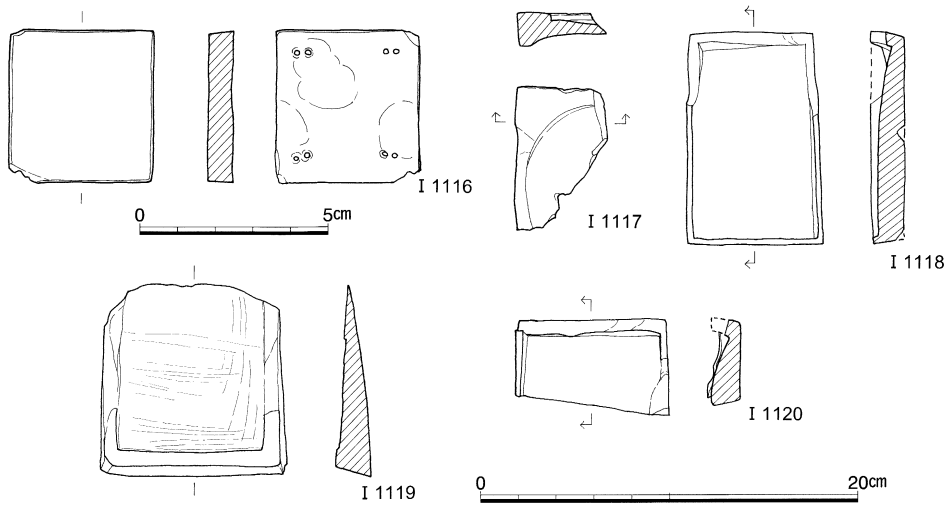


図65　茶褐色土，柱穴出土遺物（Ⅰ1116石帯，Ⅰ1117～Ⅰ1120硯）Ⅰ1116 縮尺1/2　ほか縮尺1/4

⑼ 鉄　製　品（図版25，図66）

出土した中世の鉄製品のうち，品目を推測できる代表的なもの20点を図示する。以下の記述で出土遺構を記載しないものは，包含層出土遺物である。

鎌　　Ⅰ1121・Ⅰ1122は鎌である。Ⅰ1122はＳＸ17から出土した。Ⅰ1121は，一方の短辺を長辺に対して直角に折り返すことによって着柄部を形成する。着柄部の下端をわずかに抉り込む。Ⅰ1122は目釘孔をもち，目釘も遺存する。また，柄の上端にはめ込む鉄環を備える。いずれも，柄の木質は全く遺存していない。

釘　　Ⅰ1123～Ⅰ1137は釘である。Ⅰ1123・Ⅰ1124はＳＸ40，Ⅰ1126・Ⅰ1127は中世柱穴，Ⅰ1129～Ⅰ1134はＳＸ17，Ⅰ1135～Ⅰ1137はＳＸ35から出土した。完形品のうち，最も長いもの（Ⅰ1123）で全長8.4㎝をはかる。軸部の太さや断面形はさまざまである。頭を扁平に打ち広げたもの（Ⅰ1123～Ⅰ1128・Ⅰ1130）や，わずかに潰したもの（Ⅰ1129・Ⅰ1131・Ⅰ1132・Ⅰ1137）など，頭に何らかの加工を施したものが多数を占めるが，とくに加工を施さずに棒状を呈するもの（Ⅰ1133～Ⅰ1136）もある。頭の形態は，出土地点ごとにある程度のまとまりをみせるようである。使用の結果として，屈曲してしまったもの（Ⅰ1126・Ⅰ1129～Ⅰ1131・Ⅰ1133・Ⅰ1135・Ⅰ1137）や，木質が遺存するもの（Ⅰ1135・Ⅰ1136）が認められる。

楔　　Ⅰ1138は楔である。ＳＸ40から出土した。全長15.0㎝，最大幅3.3㎝をはかる。

庖　丁　　Ⅰ1139は，切先と茎尻を欠損しているため全形が不明であるが，庖丁と推

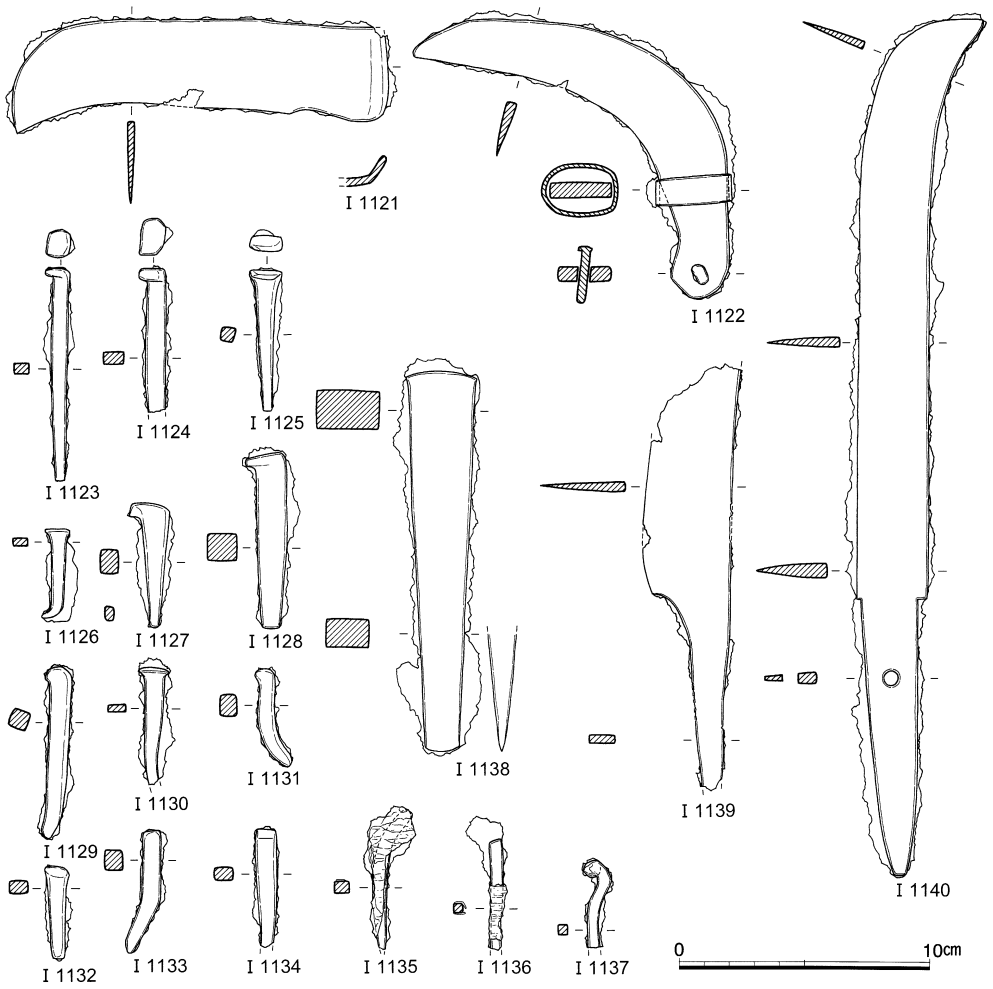


図66　鉄製品（Ｉ1121・Ｉ1122鎌，Ｉ1123～Ｉ1137釘，Ｉ1138楔，Ｉ1139庖丁，Ｉ1140薙刀）　縮尺1/3

測する。ＳＸ30から出土した。刃部最大幅3.5㎝をはかる。茎に目釘孔は認められず，柄の木質も遺存しない。

薙　　刀　　Ｉ1140は，切先が大きく屈曲する形状から，薙刀と推測する。全長33.8㎝，刃部長22.9㎝，刃部最大幅2.8㎝，茎長10.9㎝をはかる。関をもつ。茎には直径0.6㎝の目釘孔を備える。柄の木質は遺存しない。

⑽ 銭　　貨

古代～中世の銭貨が28点出土した。その内訳と出土地点を表４に示す。包含層出土が主体を占め，遺構出土のものはＳＸ17から２点（６・15）出土したほかは，1点ずつの出土

表4　古代～中世の出土銭貨一覧

番号	地　区	層位・遺構	銭　種	初鋳	書	A(㎜)	B(㎜)	C(㎜)	D(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	備　考
1	AN22d4	中世柱穴	開元通寶	621		23.15	23.15	19.85	20.20	1.30-1.50	2.8	
2	AN22d4	中世柱穴	富壽神寶	818		23.75	23.60	19.55	19.65	1.75-2.10	(2.7)	周縁欠
3	AN22c3	茶褐色土	景德元寶	1004		25.10	25.00	20.20	19.95	1.40-1.55	3.2	
4	AN22d4	茶褐色土	景德元寶	1004		25.40	25.25	20.60	20.45	1.55-1.70	3.5	
5	AN22e4	茶褐色土	景德元寶	1004		25.75	25.60	20.40	20.40	1.50-1.65	3.3	
6	AN23b3	SX17	天聖元寶	1023	真	25.20	25.20	20.70	20.50	1.25-1.40	3.0	
7	AN22d4	茶褐色土	天聖元寶	1023	真	24.80	25.00	21.55	21.75	1.60-1.85	4.3	
8	AN22d4	黄色砂上面	景祐元寶	1034	篆	25.60	25.70	21.05	20.85	1.30-1.50	3.2	
9	AN22b4	中世柱穴	皇宋通寶	1038	篆	25.15	25.05	19.95	19.60	1.20-1.35	(2.4)	周縁欠
10	AN22d3	ＳＸ101周辺	皇宋通寶	1038	篆	24.90	25.20	20.30	19.60	1.35-1.50	2.9	
11	AN23d1	黄砂上面清掃	皇宋通寶	1038	篆	24.80	24.95	19.60	19.60	1.20-1.35	2.9	
12	AN23d2	SX60	至和元寶	1054	篆	24.80	25.00	19.35	19.60	1.20-1.55	2.6	
13	AN22c3	茶褐色土	嘉祐元寶	1056	真	23.85	23.85	18.70	18.75	1.50-1.70	3.4	
14	AN23c1	SX30	熙寧元寶	1068	真	23.35	23.50	19.40	19.60	1.10-1.20	2.5	
15	An23b3	SX17	熙寧元寶	1068	真	24.10	24.35	20.35	20.30	1.50-1.80	(3.1)	周縁欠
16	AN22b4	茶褐色土	熙寧元寶	1068	篆	24.50	24.10	19.35	19.30	1.60-1.80	3.3	
17	AN23c2	SX22東西畔	元豊通寶	1078	行	24.20	24.30	17.75	17.80	1.40-1.55	3.2	
18	AN22d4	茶褐色土	元豊通寶	1078	行	24.05	24.15	18.45	18.30	1.45-1.65	4.0	
19	AN22c4	茶褐色土	元祐通寶	1086	篆	24.25	24.30	18.95	19.55	1.30-1.40	3.1	
20	AN23b3	茶褐色土	聖宋元寶	1101	篆	24.40	24.55	18.65	18.90	1.40-1.60	3.3	
21	AN23c1	茶褐色土	政和通寶	1111	篆	25.20	25.10	21.50	21.30	1.60-1.75	(3.3)	周縁欠
22	AN23d1	茶褐色土	永樂通寶	1408		25.05	25.30	21.00	21.05	1.25-1.55	2.3	
23	AN22e4	茶褐色土	□□元寶			23.10	23.05	17.80	17.55	1.55-1.75	2.8	
24	AN22e5	溝上層	□永通□							1.00-1.15	(1.1)	1/2欠
25	AN23d3	中世柱穴	無文銭か							1.15-1.45	(1.5)	周縁欠
26	AN22d4	SX38付近	(判読不能)							1.75-1.90	3.1	
27	AN22c5	SX35	(判読不能)							1.30-1.60	2.9	
28	AN23c1	茶褐色土	(判読不能)								(2.7)	1/2欠

(1) 地区割りは,図4(9頁)を参照。
(2) 書:使用書体,「真」は真書体,「行」は行書体,「篆」は篆書体,無記入は,真書体ないしは楷書体をあらわす。
(3) 計測は,兵庫県埋蔵銭調査会の方式[永井編 1994,第10図]にしたがった。
A・Bは外縁外径,C・Dは外縁内径である。
厚さは,4箇所計測し,最大値と最小値を表示した。
重さは,電子天秤を用いて計測した。

である。判明した銭種は，15種類（無文銭？を含む）である。皇朝十二銭である富壽神寶（初鋳818年）１点をのぞくと，判読できる銭貨は，いずれも中国からの渡来銭である。初鋳年でみると７世紀前葉の開元通宝から15世紀前葉の永楽通宝にわたるが，量的には11～12世紀前葉の北宋の銭貨（３～21）が主体を占める。

8　古代～中世の瓦塼類

古代～中世の瓦塼類をここでまとめて報告する。出土遺構・層位は，表５（110頁）に掲げる。なお，同文ないしは同笵として掲げるＫＣＭ・ＫＣＨは，総合人間学部構内ＡＲ25区出土瓦における分類記号〔伊藤2000〕である。年代・系統などは，上原真人の成果〔上原1978・1995・1997〕，平安博物館編『平安京古瓦図録』(1977年)をおもに参考にした。

⑴ 軒　丸　瓦（図版26，図67・68）

複弁８葉蓮華文（Ⅰ1141）　奈良時代の複弁８葉蓮華文。弁間に，中房より延びる撥形の弁間文をもつ。２条の圏線内の珠文は，弁に対応して施されている。外縁が斜縁で鋸歯文をめぐらすと思われるが，欠損で失われている。複弁Ａ系統の平城宮式6308ないしは6311に近い〔奈文研1991〕。

単弁推定18葉蓮華文（Ⅰ1142）　笵の打ち込みが浅く，文様は不鮮明。中房は無文，単弁の推定18葉蓮華文。外区に圏線を１条もつ。ＫＣＭ18。12世紀代の中央官衙系製品。

単弁推定10葉蓮華文（Ⅰ1143･Ⅰ1144）　中房は無文で，外区の上半部のみに珠文をもつ。瓦当裏面には，指頭圧痕が顕著に残る。ＫＣＭ16。12世紀中葉の中央官衙系製品。

単弁６葉蓮華文（Ⅰ1145～Ⅰ1149）　楕円形瓦当面をもつ。弁間には，陰刻の三角文を配する。中房の中心に，蓮子を１個配する。笵に木目痕をもつ。瓦当裏面には指頭圧痕を残す。丸瓦凸面は縄叩きのち篦撫で，凹面は撫で調整。栗栖野瓦窯に同文品〔京都市埋文研1986，図版11－２〕があり，12世紀代の中央官衙系製品。

単弁９葉蓮華文（Ⅰ1150～Ⅰ1154）　瓦当面に対して中房の占める割合が大きい。中房には，蓮子１＋８をおき，その周囲には，雄蕊を表現したとみられる細い突線が放射状に配される。同様の突線は外区にもみられる。弁中央がふくらみをもち，子葉を突線で表現する。瓦当裏面には指頭圧痕が残り，丸瓦凸面は縄叩きのち篦撫でし，凹面は布目痕が残る。尊勝寺96Ａ型式〔奈文研1961〕と同笵であろう。

単弁８葉蓮華文（Ⅰ1155）　中房に１＋４の蓮子をおく。瓦当面に対して中房の占める割合が大きい。瓦当裏面には，指頭圧痕が残る。胎土に雲母を多量に含み，表面灰黒色を呈する。胎土・色調・焼成ともに，単弁９葉蓮華文（Ⅰ1150～Ⅰ1154）に類似する。

複弁８葉蓮華文（Ⅰ1156・Ⅰ1157）　中房を１段突出させ，陽刻の「卍」文を配している。外区には圏線を施し，珠文が12個めぐる。Ⅰ1157は，瓦当面の傷みが激しいが，Ⅰ1156と同文とみられる。ＫＣＭ20。13世紀前半に流行した型式である。

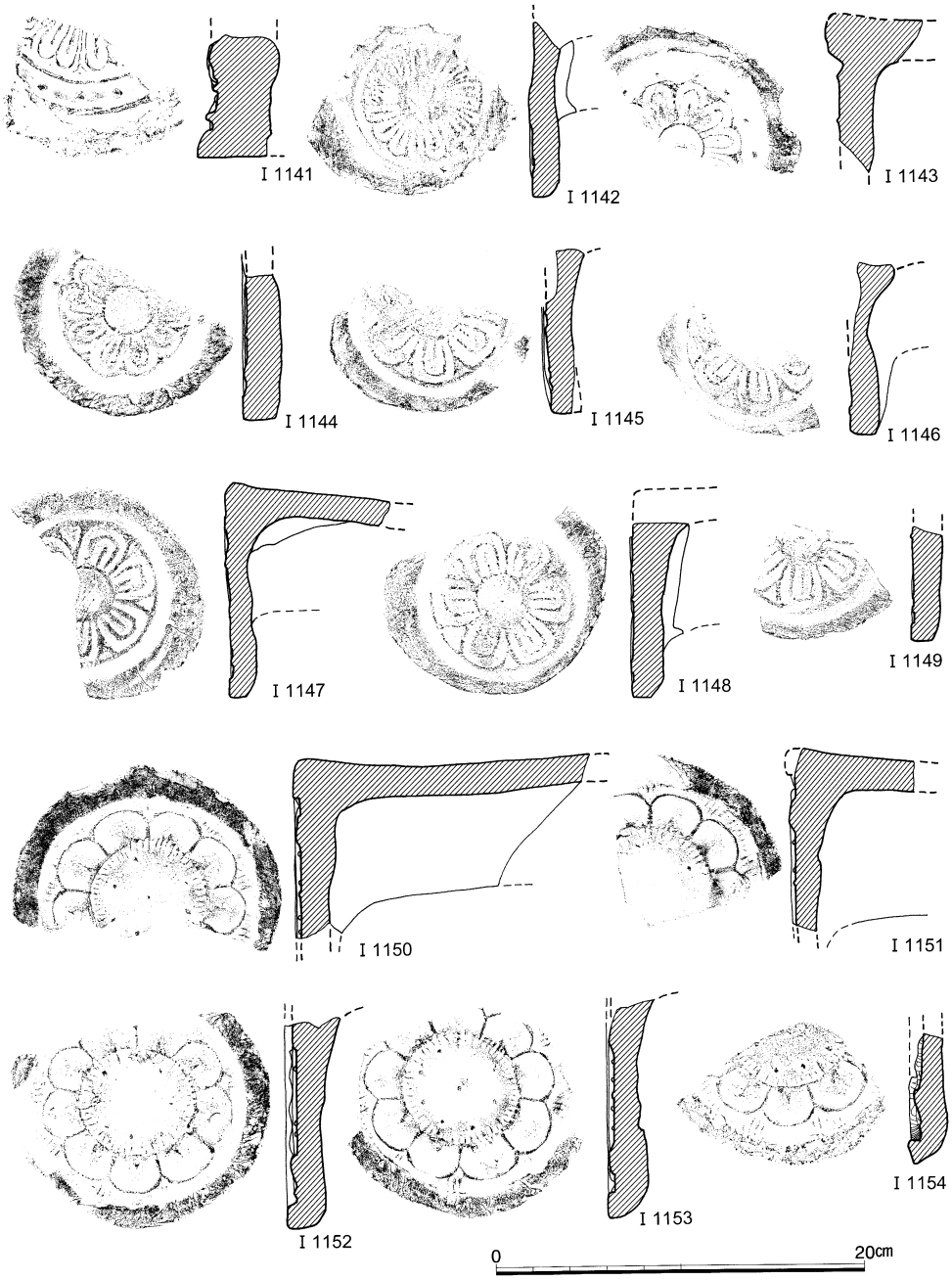


図67　軒丸瓦(1)（Ⅰ1141～Ⅰ1154）

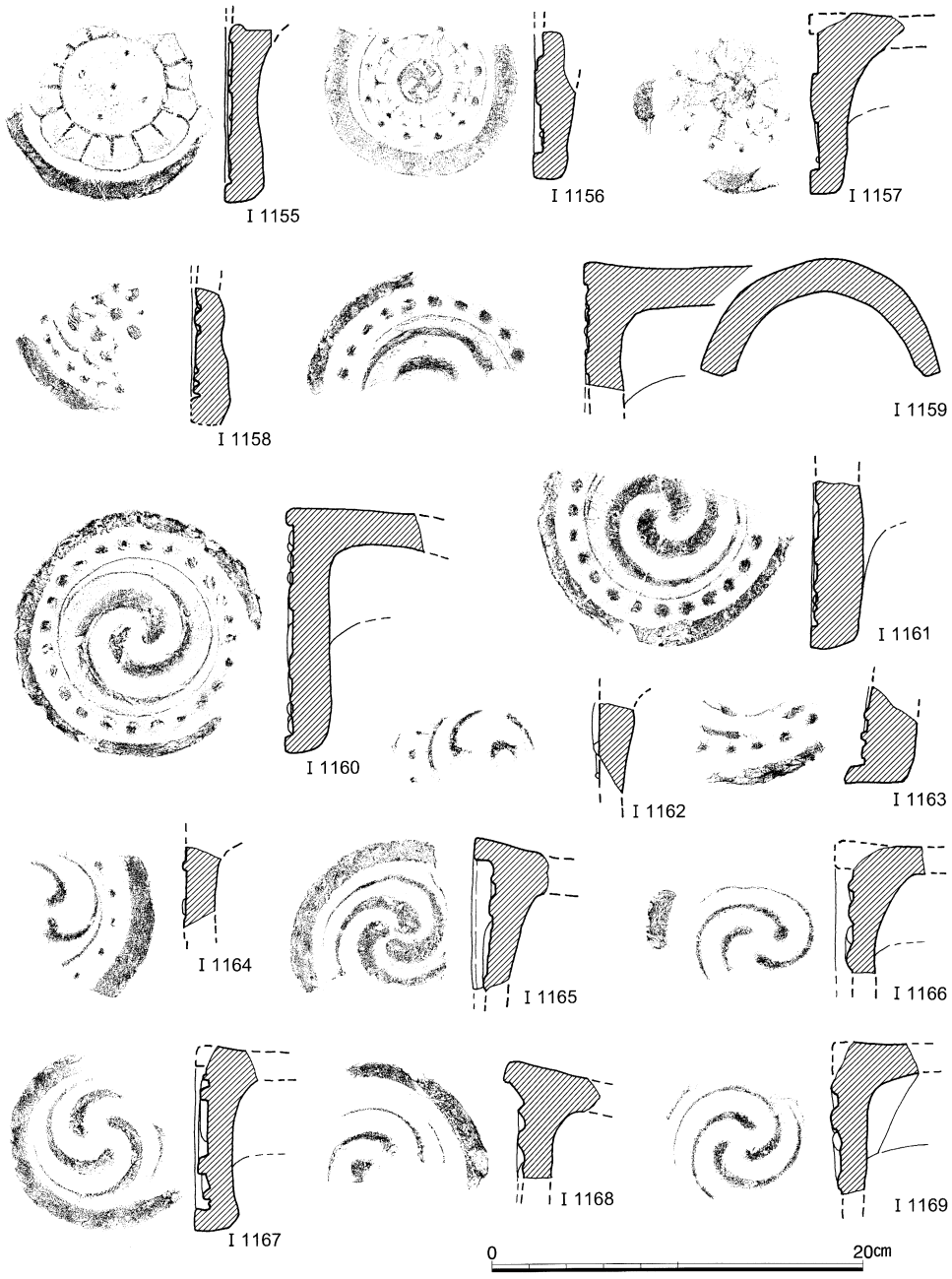


図68　軒丸瓦⑵（Ⅰ1155～Ⅰ1169）

宝相華文（Ⅰ1158）　内区に便化した宝相華文をおき，外区に珠文を密に施す。ＫＣＭ19と同文。

右巻二巴文（Ⅰ1159～Ⅰ1161）　外区に珠文をもつ右巻の二巴文。珠文は，Ⅰ1160で24個を数える。丸瓦凸面は縄叩きのち箆撫で，凹面は布目痕が残る。

左巻三巴文（Ⅰ1162）　外区に珠文をもつ左巻三巴文。

右巻巴文（Ⅰ1163）　珠文をもつ外区との境に圏線を有する。右巻の巴文であるが，巴の数は不明。

右巻三巴文（Ⅰ1164）　外区に珠文をもつ，右巻三巴文。

三 巴 文（Ⅰ1165～Ⅰ1169）　珠文をもたない三巴文。Ⅰ1167は左巻，残りは右巻。

巴文軒丸瓦は，直径13.5㎝前後で瓦当裏面に指の圧痕を残すⅠ1159～Ⅰ1161と，直径11㎝前後で瓦当裏面を撫で調整するⅠ1162～Ⅰ1169に分けられる。前者は中央官衙系Ⅴ期（12世紀後半），後者は大覚寺御所第Ⅱ期瓦群（13世紀後半～14世紀初頭）に対比することができよう。

⑵ 軒　平　瓦（図版27，図69～72）

推定唐草文（Ⅰ1170）　中心飾りにおかれた四つ葉の花文様と外区におかれた小粒の珠文が残る。凸面は剝落して欠損する。凹面には布目痕が残り，瓦当上縁付近は，箆で幅２㎝にわたって面取りしている。内裏内郭回廊跡出土例と同文とみられ，11世紀前後のものであろう。

推定均整唐草文（Ⅰ1171･Ⅰ1173）　Ⅰ1171は中心飾り付近しか残らないが，均整唐草文になるとみられる。「Ｃ」字背向の中心飾りを結ぶ上下の山形文のうち，上のみ残存しており，曲線化している。唐草の主葉と枝葉は分離し，外区には小粒の珠文が密に施される。瓦当周縁は２段になっている。瓦当裏面には横方向，凸面には縦方向の縄叩きがあり，丹波系の特徴を示す。胎土は精良。12世紀前葉。このⅠ1171に近いと思われるものにⅠ1173がある。外区には珠文は施されず，瓦当裏面の一部に斜め方向の縄叩きが残る。

均整唐草文（Ⅰ1172）　瓦当折り曲げ式。先端の尖った繊細な唐草文を配する。ＫＣＨ13をはじめとして同笵・同文例多い。12世紀中葉の中央官衙系製品。

雁 形 文（Ⅰ1174）　雁形の文様を連ねる。凹面には細かい布目の圧痕が残り，凸面は撫で調整する。法住寺殿跡出土例〔寺島・片岡編1984，第63図－26〕に同文品がある。

偏行唐草文（Ⅰ1175）　向かって右から左に流れる偏行唐草文。瓦当折り曲げ式で，文様部にも布目痕が残るが，瓦当周縁は布目を磨り消している。瓦当下端から凸面は撫で

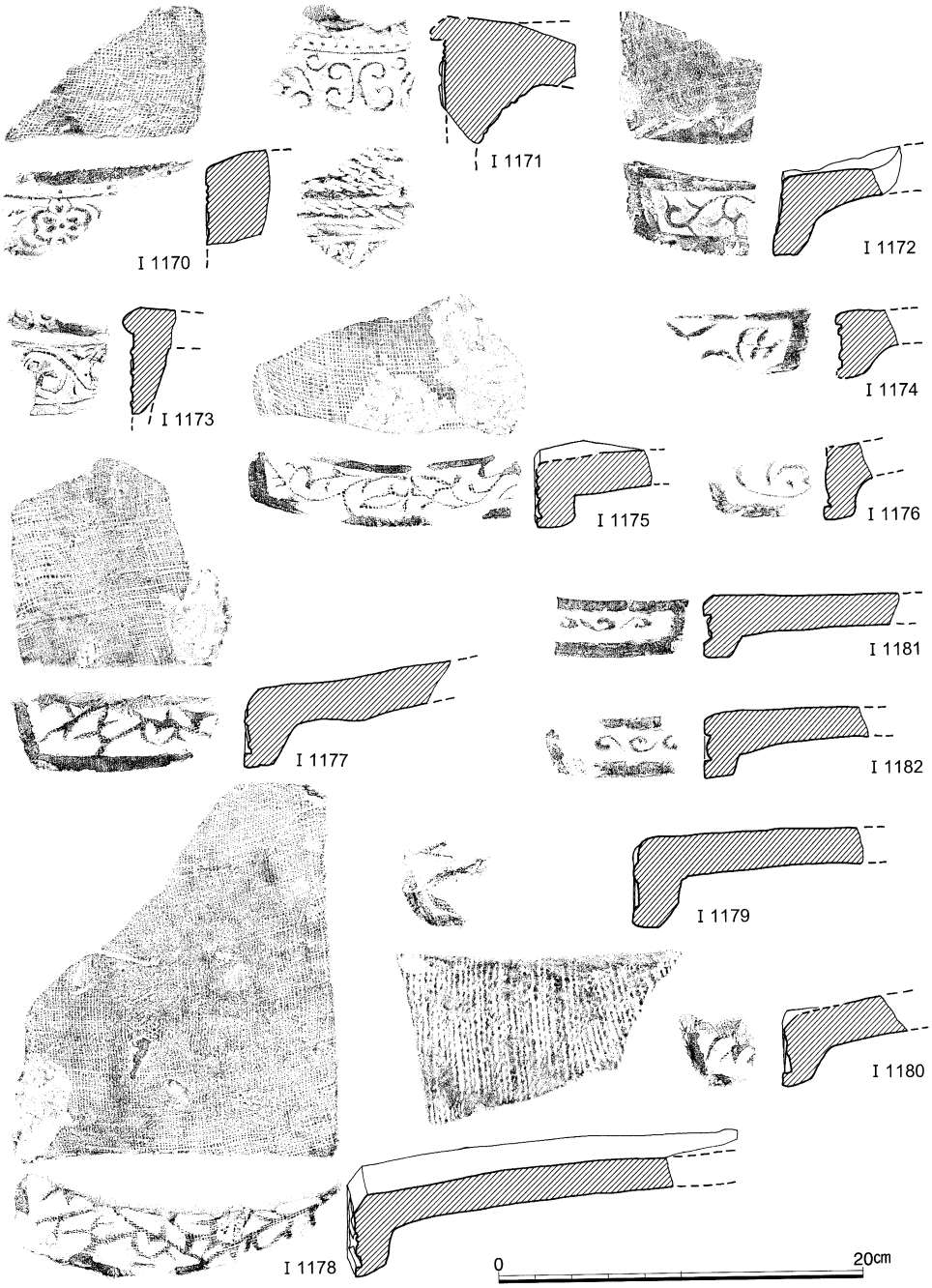


図69　軒平瓦(1)（Ⅰ1170～Ⅰ1182）

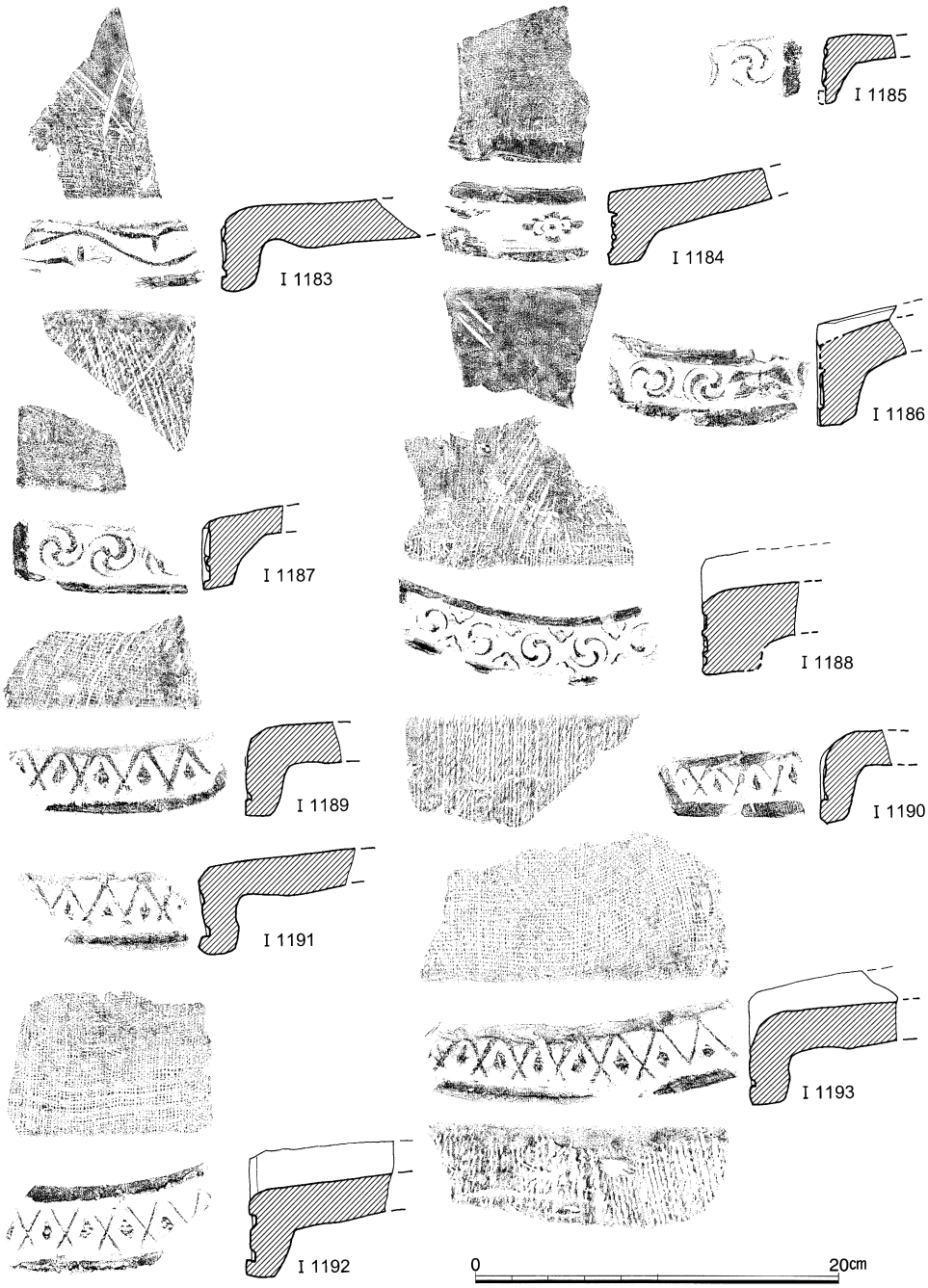


図70　軒平瓦⑵（Ⅰ1183～Ⅰ1193）

整形している。

唐 草 文（Ⅰ1176）　左端の小片で，唐草文を配するが，詳細は不明である。凹面は細かい布目痕が残る。瓦当下端面には斜め方向，凸面には縦方向の縄叩きが施される。

唐 草 文（Ⅰ1177・Ⅰ1178）　硬化した唐草文を配する。瓦当折り曲げ式で，瓦当面に布目痕が残る。幅17.8㎝，長さ21.5㎝。瓦当周辺は布目磨り消し，瓦当下端部から凸面にかけて撫で調整を施しており，黒灰色，堅緻な焼成も含めて，Ⅰ1175に類似する。

唐 草 文（Ⅰ1179・Ⅰ1180）　両例とも左端の小片。唐草文を配する。Ⅰ1180は，Ⅰ1178の文様に類似するが，詳細は不明。ともに，瓦当折り曲げ式とみられ，瓦当周縁の上部に凹面から連続する布目痕が残る。凸面は，Ⅰ1179は縄叩き，Ⅰ1180は縦方向の篦撫でを施している。

均整唐草文（Ⅰ1181・Ⅰ1182）　類例から，中心飾りに退化した花文をおき，3反転する蕨手文を左右におく均整唐草文に復元できる。凹面は布目痕を撫で消し，凸面は縦位撫で整形。焼成は堅緻。ＫＣＨ25に相当。14世紀。

唐 草 文（Ⅰ1183）　枝葉が水滴状になった唐草文。瓦当折り曲げ式。凸面は縄叩き。

宝相華文（Ⅰ1184）　左端部の破片で，宝相華文と半截花文を配する。凹面は布目痕跡が残り，凸面は撫で整形。凸面に2本平行沈線の篦記号をもつ。同笵で同様の篦記号をもつものがもう1点，ＳＸ39より出土している。ＫＣＨ14。

連 巴 文（Ⅰ1185・Ⅰ1187）　Ⅰ1185は右端部，Ⅰ1187は左端部で，右巻三巴文を並列させる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り，凸面は撫で整形である。12世紀中葉の中央官衙系製品。

連 巴 文（Ⅰ1186）　トンボ形の中心飾りの左右に，右巻三巴文をおく。瓦当面が平瓦に対して鈍角をなす。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り，凸面は撫で整形。ＫＣＨ27。12世紀中葉の中央官衙系製品か。

連 巴 文（Ⅰ1188）　巴文を並列させ，その間に，上下から半截花文を配する。巴文は，中心部のみ，左巻三巴で，ほかは左巻二巴と思われる。凹面は糸切り痕と布目圧痕を残し，凸面は縦方向の縄叩きを施す。

幾何学文（Ⅰ1189～Ⅰ1201）　斜格子文のなかに菱形文を配する。すべて同笵と判定する。瓦当折り曲げ式で，瓦当面に布目痕が残るものがある。瓦当外周の上側がしっかりと打ち出されず，凹面へなだらかにつながるものが多い。瓦当外周は布目痕の磨り消し，瓦当下端，瓦当裏面は，撫で調整。凸面は，縦方向の縄叩き（Ⅰ1189・Ⅰ1193～Ⅰ1196・

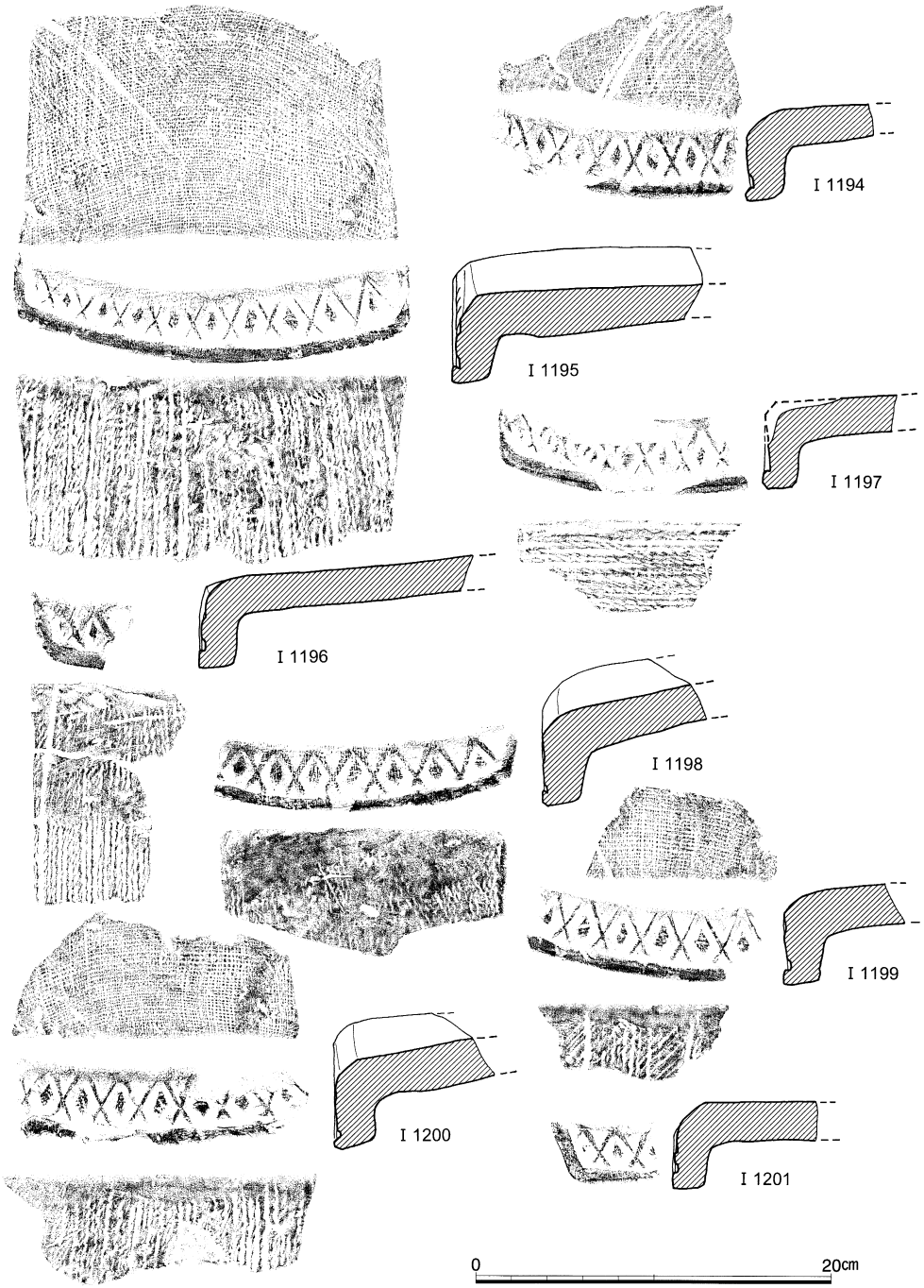


図71　軒平瓦⑶（Ⅰ1194～Ⅰ1201）

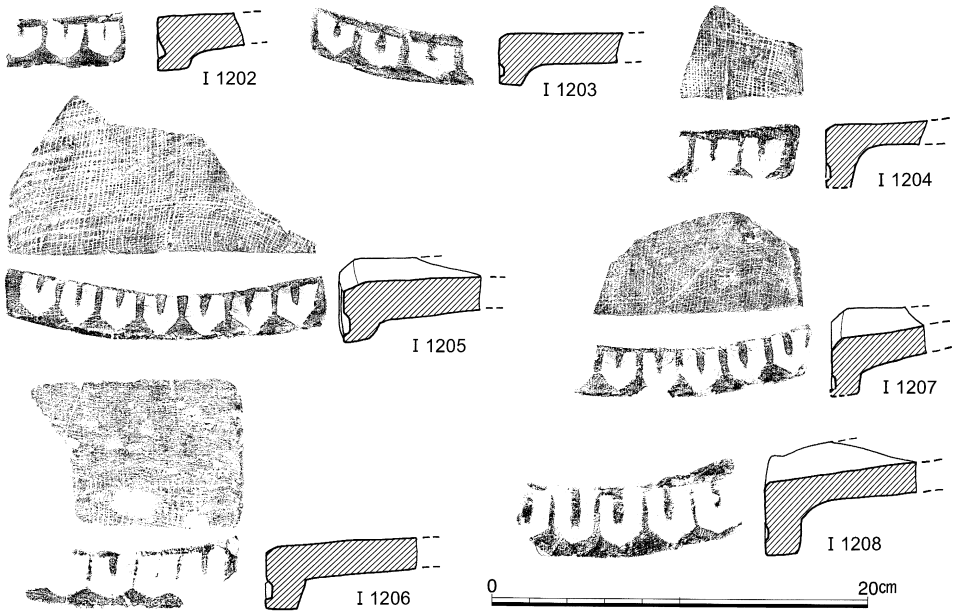


図72　軒平瓦⑷（Ⅰ1202～Ⅰ1208）

Ⅰ1199～Ⅰ1201）が多いが，横方向の縄叩き（Ⅰ1197），縦方向の縄叩きのち軽い撫で（Ⅰ1191・Ⅰ1198），糸切り（Ⅰ1190），縦方向の撫で（Ⅰ1192）もみられる。凸面に「×」印の篦記号をもつものがある（Ⅰ1193～Ⅰ1195・Ⅰ1197・Ⅰ1198・Ⅰ1200）。尊勝寺285型式〔奈文研1961〕と同文で，法勝寺出土例〔京文観・京都市埋文研1987，図版18－48〕と同笵の可能性がある。

剣頭文（Ⅰ1202～Ⅰ1208）　瓦当折り曲げ式で，Ⅰ1205･Ⅰ1206は瓦当面の一部に布目痕が残る。Ⅰ1204～Ⅰ1207は瓦当外周上部を横方向の篦削りで面取りしている。凸面には指頭圧痕を残す。Ⅰ1203～Ⅰ1205の顎部には，凹型台の端があたった痕跡が残る。Ⅰ1203の凹面は，布目痕を一部撫で消しており，Ⅰ1208の凹面は，糸切り痕跡を残す。Ⅰ1206の凹面には,「×」印の篦記号がある。Ⅰ1208がやや古くなる可能性を残すが，この一群は，大覚寺御所第Ⅱ期瓦群（13世紀後半～14世紀初頭）に対比できよう。

⑶ 丸瓦・平瓦（図73・74）

瓦溜ＳＸ24出土瓦について報告する。丸瓦・平瓦ともに完形品はなく，軒瓦の丸瓦部，平瓦部を含んでいる可能性をことわっておく。

丸　　瓦（Ⅰ1209～Ⅰ1212）　玉縁のつく丸瓦。黒灰色で凹面に布目の痕跡を残し，

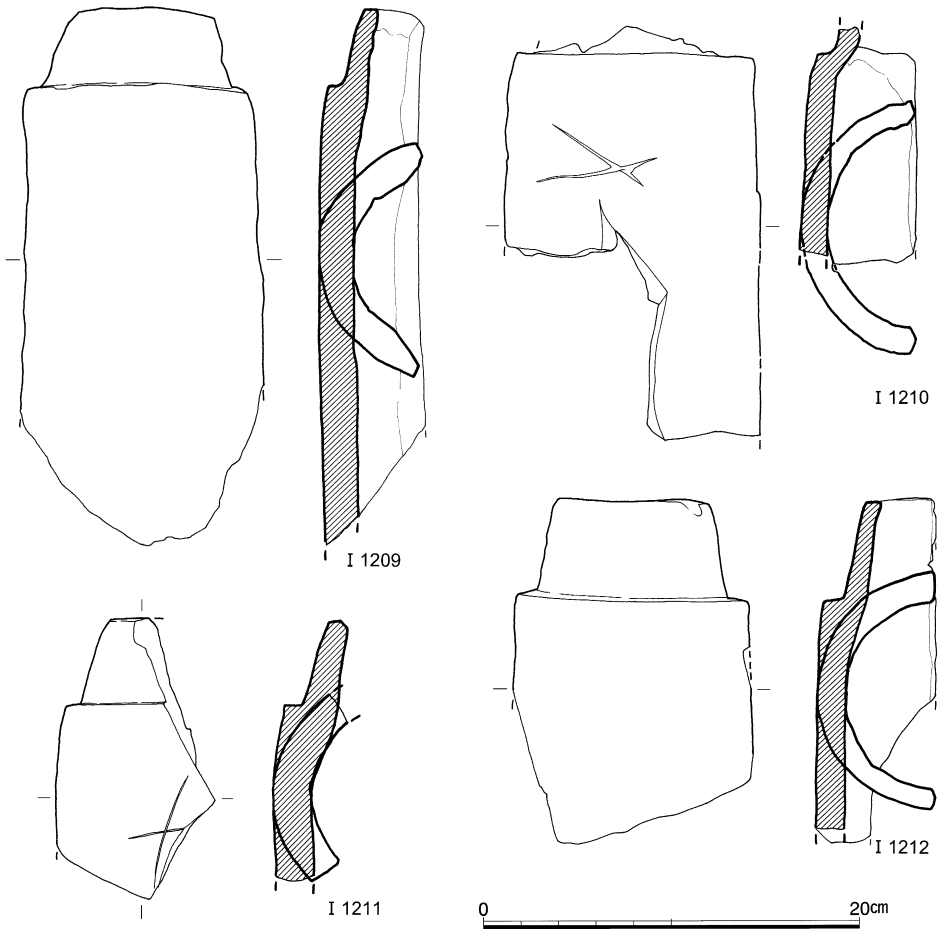


図73　ＳＸ24出土丸瓦（Ⅰ1209～Ⅰ1212）

凸面を縄叩きし，側面を篦削りする点で共通するが，Ⅰ1209・Ⅰ1211は凹面に糸切り痕跡をあわせもち，Ⅰ1209は凸面の縄叩きをほとんど撫で消し，Ⅰ1211・Ⅰ1212は玉縁側の凸面縄叩きを幅４～５㎝，横方向に撫で消している。Ⅰ1210・Ⅰ1211は凸面の玉縁側，中央やや左寄りの位置に,「×」印の篦記号をもつ。丸瓦凸面の「×」印篦記号は，合計８点出土。丸瓦に残された篦記号としては，これ以外に，玉縁部凸面に刻まれた斜め１本線が１点出土している。丸瓦は破片総数100点で，うち玉縁の左隅10点，右隅12点を数える。

平　　瓦（Ⅰ1213～Ⅰ1218）　Ⅰ1213は厚さ2.2㎝をはかり，凹面に糸切りと布目の痕跡を残し凸面は縄叩きする。Ⅰ1214は厚さ1.8㎝，凹面は縦位の撫で調整，凸面には糸切り痕跡を残し，縄叩きする。凸面には離れ砂が付着し，凸面周縁に成型台端部の圧痕を残す。

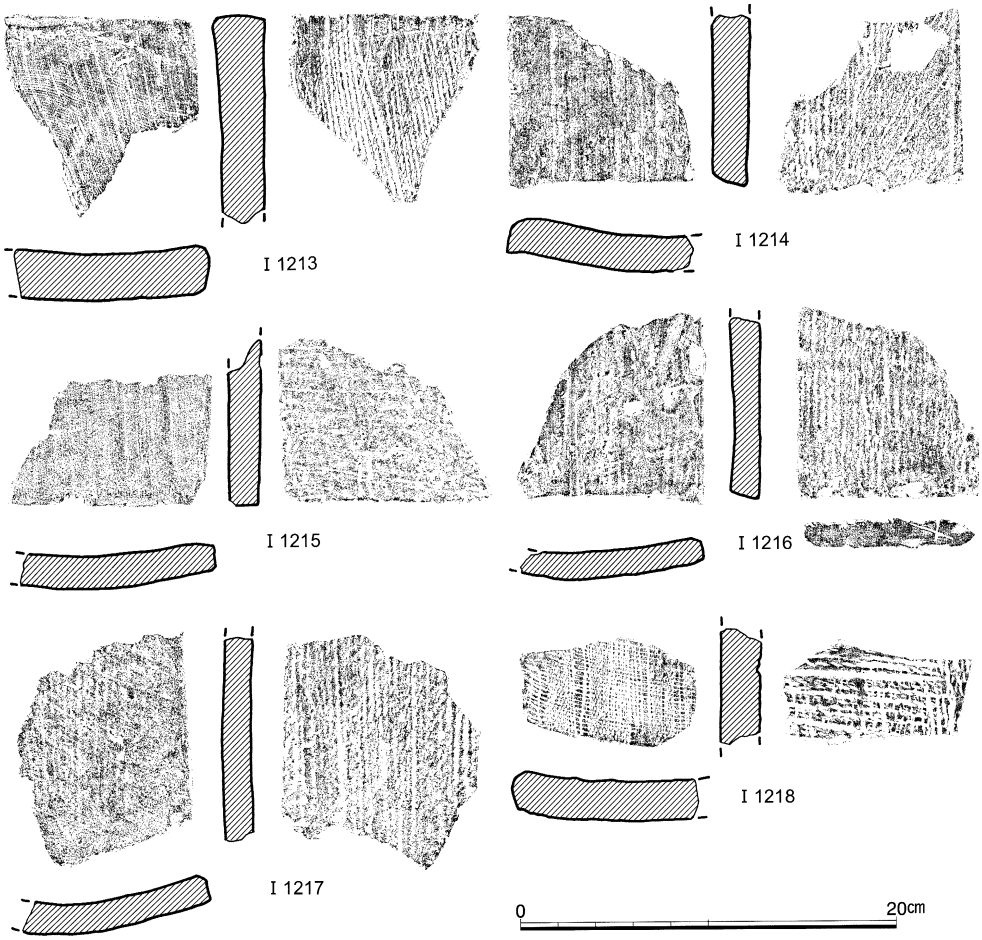


図74　ＳＸ24出土平瓦（Ⅰ1213～Ⅰ1218）

Ⅰ1215は厚さ1.6㎝，凹凸面ともに離れ砂が付着し，凹面は縦位の撫で調整，凸面は横位の糸切り痕を残す。凸面周縁に成型台端部の圧痕が観察される。Ⅰ1216は厚さ1.5㎝，凹面は縦位の撫で，凸面は縄叩き。凹凸面ともに，離れ砂が付着する。端面に「×」印の箆記号をもつ。端面「×」印の箆記号は合計３点出土している。平瓦の箆記号は，そのほかに凸面に残された「×」印が１点出土している。

Ⅰ1217は厚さ1.5㎝，凹面に糸切り痕を残し，凸面は縄叩きする。凹凸面ともに離れ砂が付着する。Ⅰ1218は厚さ2.2㎝，凹面は布目痕跡を残し，凸面は縦方向の縄叩きののち，横方向の縄叩きを施す。灰白色で胎土は精良である。平瓦は破片総数133点で，うち隅部をもつものは26点を数える。

⑷ 出土瓦の特色

以上，本調査区出土の瓦について説明を加えてきた。年代的にみると，奈良時代の瓦（Ⅰ1141），11世紀の瓦（Ⅰ1170）が各１点あるものの，量的に多いのは12世紀中葉～後葉の中央官衙系Ⅳ期・Ⅴ期の軒瓦と13世紀後葉～14世紀初頭とされている大覚寺御所Ⅱ期に比定されるものである。この２時期について，瓦葺きの建物の存在を考えることができるかもしれない。

これらの瓦類のうち，遺構からまとまって出土しているのはＳＸ24出土瓦のみである。最後にＳＸ24出土の瓦類について，まとめておく。ＳＸ24出土の軒瓦を列挙すると，以下のようになる（出土点数は，未掲載を含む）。

軒　丸	単弁９葉蓮華文（Ⅰ1150～Ⅰ1154）	14点
	単弁８葉蓮華文（Ⅰ1155）	１点
	珠文有・二巴文（Ⅰ1159～Ⅰ1161）	５点
軒　平	唐草文ａ（Ⅰ1177・Ⅰ1178）	２点
	唐草文ｂ（Ⅰ1179）	１点
	唐草文ｃ（Ⅰ1180）	１点
	唐草文ｄ（Ⅰ1183）	１点
	連巴文　（Ⅰ1187）	１点
	幾何学文（Ⅰ1189・Ⅰ1191・Ⅰ1193～Ⅰ1201）	11点

軒丸が３種，軒平が６種確認されるから，型式数としては軒平が２倍存在することになるが，出土点数をみると，軒平の唐草文ｂ～ｄおよび連巴文，軒丸の単弁８葉蓮華文は１点を数えるのみである。主体を占めるのは14点を数える単弁９葉蓮華文軒丸と11点を数える幾何学文軒平であり，5点を数える珠文有･二巴文軒丸と２点を数える唐草文ａがそれに続くということになる。

これらの軒瓦はいずれも中央官衙系の製品である。軒平瓦は，半折り曲げ技法でⅣ期に遡る可能性がある連巴文（Ⅰ1187）を除いて，すべて完成した段階の折り曲げ技法によっており，中央官衙系Ⅴ期（12世紀後葉）に比定できる。軒丸瓦も，完成した折り曲げ式にともなうⅤ期に比定して大過ないと考えられる。出土量から判断して，単弁９葉蓮華文軒丸と幾何学文軒平，二巴文軒丸と唐草文ａ軒平がセットになる可能性が高い。先述したように，前者の軒丸・軒平瓦は尊勝寺や法勝寺からの出土例はあるが，出土状況からセット関係を指摘できる点で，意義があるものと理解する。

ＳＸ24出土の丸瓦・平瓦については，すでに記述した。丸瓦の玉縁点数（左隅10点，右隅12点），平瓦の隅部片26点と比較すれば，軒瓦の比率の高さは明瞭である。年代的に一括

表５　古代～中世瓦塼一覧

番号	遺構･層位	種　別	文　様
Ⅰ1141	SD14	軒丸瓦	(推)複弁8葉蓮華文
Ⅰ1142	茶褐色土	軒丸瓦	単弁18葉蓮華文
Ⅰ1143	SD12周辺	軒丸瓦	(推)単弁10葉蓮華文
Ⅰ1144	SE16	軒丸瓦	(推)単弁10葉蓮華文
Ⅰ1145	黄色砂	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文
Ⅰ1146	茶褐色土	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文
Ⅰ1147	SD12	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文
Ⅰ1148	SX39	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文
Ⅰ1149	茶褐色土	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文
Ⅰ1150	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文
Ⅰ1151	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文
Ⅰ1152	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文
Ⅰ1153	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文
Ⅰ1154	SD12	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文
Ⅰ1155	SX24	軒丸瓦	単弁8葉蓮華文
Ⅰ1156	黄褐色土	軒丸瓦	複弁8葉蓮華文
Ⅰ1157	茶褐色土	軒丸瓦	複弁8葉蓮華文
Ⅰ1158	茶褐色土	軒丸瓦	宝相華文
Ⅰ1159	SX24	軒丸瓦	珠文有･右巻二巴文
Ⅰ1160	SX24	軒丸瓦	珠文有･右巻二巴文
Ⅰ1161	SX24	軒丸瓦	珠文有･右巻二巴文
Ⅰ1162	表土	軒丸瓦	珠文有･右巻二巴文
Ⅰ1163	茶褐色土	軒丸瓦	珠文有･右巻二巴文
Ⅰ1164	SD4	軒丸瓦	珠文有･右巻二巴文
Ⅰ1165	SD11	軒丸瓦	珠文無･右巻三巴文
Ⅰ1166	茶褐色土	軒丸瓦	珠文無･右巻三巴文
Ⅰ1167	SD11	軒丸瓦	珠文無･左巻三巴文
Ⅰ1168	SD11	軒丸瓦	珠文無･右巻三巴文
Ⅰ1169	溝上層	軒丸瓦	珠文無･右巻三巴文
Ⅰ1170	SE16	軒平瓦	宝相華文
Ⅰ1171	SD7	軒平瓦	均整唐草文
Ⅰ1172	SE24	軒平瓦	均整唐草文
Ⅰ1173	茶褐色土	軒平瓦	均整唐草文
Ⅰ1174	茶褐色土	軒平瓦	雁形文
Ⅰ1175	茶褐色土	軒平瓦	偏行唐草文
Ⅰ1176	茶褐色土	軒平瓦	唐草文
Ⅰ1177	SX24	軒平瓦	硬化した唐草文
Ⅰ1178	SX24	軒平瓦	硬化した唐草文
Ⅰ1179	SX24	軒平瓦	唐草文
Ⅰ1180	SX24	軒平瓦	唐草文
Ⅰ1181	茶褐色土	軒平瓦	均整唐草文
Ⅰ1182	SX36	軒平瓦	均整唐草文
Ⅰ1183	SX24	軒平瓦	唐草文
Ⅰ1184	SX26	軒平瓦	宝相華文＋半截花文
Ⅰ1185	中世柱穴	軒平瓦	連巴文(右巻三巴)
Ⅰ1186	SD11上層	軒平瓦	連巴文(右巻三巴)
Ⅰ1187	SX24	軒平瓦	連巴文(右巻三巴)
Ⅰ1188	SX42	軒平瓦	連巴文＋半截花文
Ⅰ1189	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1190	茶褐色土	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1191	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1192	SD11	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1193	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1194	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1195	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1196	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1197	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1198	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1199	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1200	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1201	SX24	軒平瓦	斜格子文＋菱形文
Ⅰ1202	SX29	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1203	茶褐色土	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1204	SF1断割	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1205	SF1断割	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1206	SF1断割	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1207	茶褐落ち込み	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1208	SD11上層	軒平瓦	剣頭文
Ⅰ1209	SX24	丸　瓦	
Ⅰ1210	SX24	丸　瓦	篦記号あり
Ⅰ1211	SX24	丸　瓦	篦記号あり
Ⅰ1212	SX24	丸　瓦	
Ⅰ1213	SX24	平　瓦	
Ⅰ1214	SX24	平　瓦	
Ⅰ1215	SX24	平　瓦	
Ⅰ1216	SX24	平　瓦	篦記号あり
Ⅰ1217	SX24	平　瓦	
Ⅰ1218	SX24	平　瓦	
Ⅰ1219	SD11	有孔磚	
Ⅰ1220	SD11	有孔磚	
Ⅰ1221	SX21	有孔磚	
Ⅰ1222	SX60	有孔磚	
Ⅰ1223	SD11	有孔磚	篦記号あり
Ⅰ1224	SD11	有孔磚	

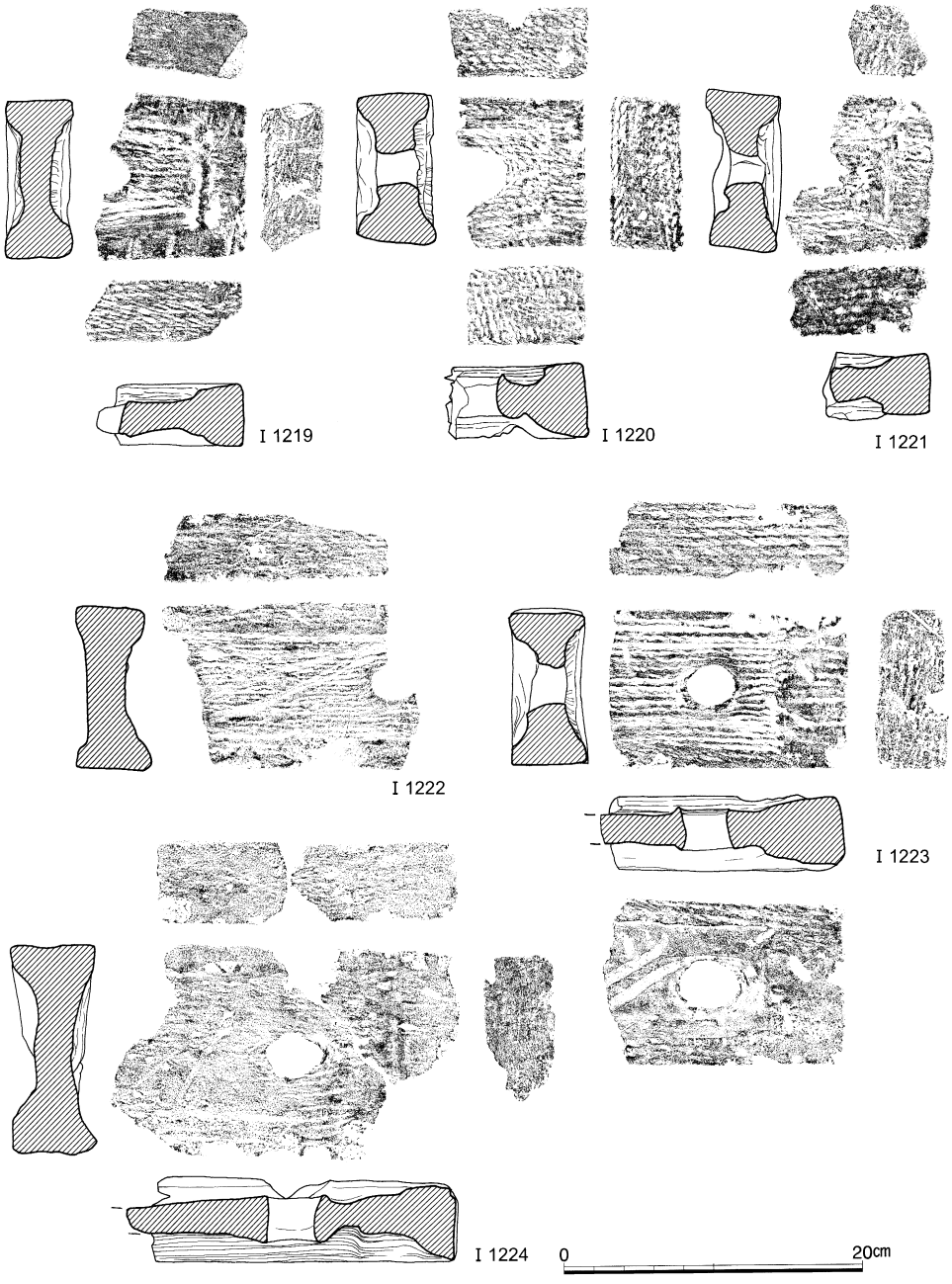


図75　塼（Ⅰ1219～Ⅰ1224）　縮尺1/5

性の高い廃棄状況から，これが屋根の葺き方を反映していると仮定すれば，総瓦葺きの建物の可能性はほとんどないということになろう。

⑸ 塼（図版27，図75）

直方体を呈する塼。砂粒の割合の多い粗放な胎土で，暗灰色を呈する。Ⅰ1224は焼成がやや軟質だが，これを含めて内部にいわゆる黒化層を形成しているものはみられない。表面に，離れ砂とみられる雲母片が付着しており，型作りと考える。短辺が10㎝前後となるⅠ1219～Ⅰ1223と，13.7㎝をはかるⅠ1224がある。中央部が長方形にくぼみ，断面形が「Ⅰ」字形になる。凹部に円孔をもつ。Ⅰ1222は孔が２つ残存する。孔の位置，ほかの遺跡の類例から判断して，孔は２つあけられたものと推定できる。孔が対称にあけられたと仮定すれば，短辺10㎝前後のもので，長辺は30数㎝に復元できる。孔は，長辺方向に径の大きい楕円形で，Ⅰ1223・Ⅰ1224で長径４㎝，短径３㎝前後である。６面いずれにも，縄叩きを施すものが多い。Ⅰ1223は，下面の凹部には縄叩きがなされず，2条の平行凹線による篦記号をもつ。Ⅰ1222の縄叩きの上に施された浅い１条の沈線も篦記号かもしれない。Ⅰ1224は，側面の縄叩きはきわめて浅く，端面にはみられない。

共伴遺物から判断して，これらは14世紀後半から15世紀ごろのものであろう。同様の有孔塼は，医学部構内ＡＰ19区〔清水・吉野1981，p.17〕，同構内ＡＯ18区〔梶原2003，図77－53・54），本部構内ＡＴ21区（2000年度調査，整理中）などから出土している。

9　近世・近代の遺跡

⑴ 近世の遺構（図版７，図76）

道路，側溝，野壺，耕作用の小穴などがある。調査区北辺でみつかった道路ＳＦ１は，幅3.7～4.3ｍで，東西方向に延びる。上面を削平されていたが，路面は礫混じり土からなる。両側に溝ＳＤ１・ＳＤ２をともなう。路面上，あるいはＳＤ２を切るかたちで検出されたＳＸ１～ＳＸ６・ＳＤ３は，小礫や近世陶磁器で充填されており，路面に形成された轍やくぼみを補修した痕跡であろう。ＳＸ６からは，19世紀前半の土器・陶磁器がまとまって出土した。

出土遺物や遺構の切り合いからからみて，少なくとも18世紀代にはＳＦ１は道路として機能しており，この段階ではＳＤ１・２は側溝として機能した。ＳＤ１・２は18世紀代には埋まってしまうが，19世紀前半の路面の補修や，明治時代に下る野壺の位置などから，京都医科大学の用地となる明治29年まで，この道路は存続した。現在，吉田二本松町と吉

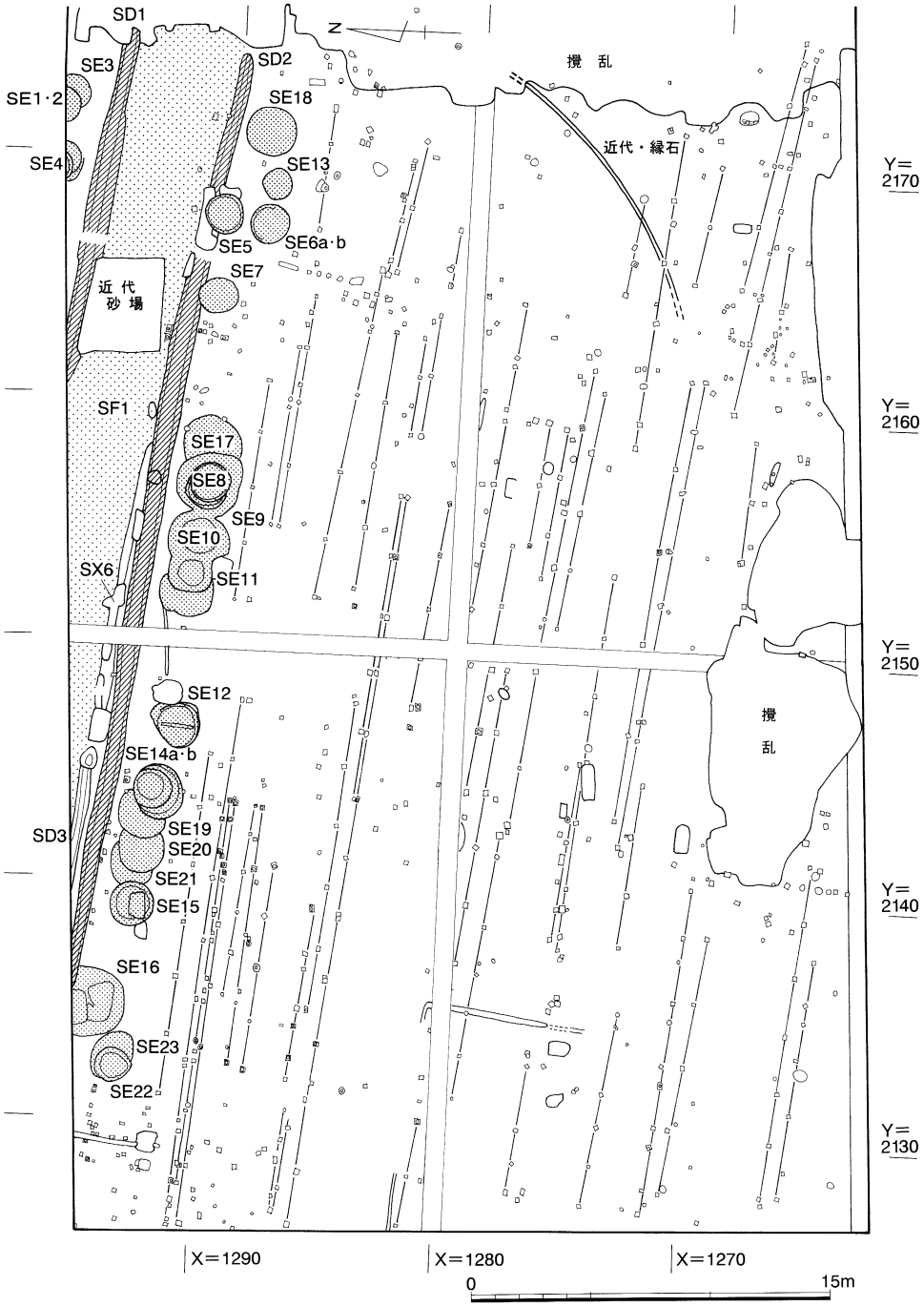


図76　近世・近代の遺構　縮尺1/300

田近衛町の字境がこの付近を東西にはしっており，この道路が字境界としての役割を果たしていた。吉田南構内は，この道路を挟んで，北側の吉田二本松町を第三高等中学校，南側の吉田近衛町を京都医科大学の敷地として出発したのであった。

ＳＦ１の両側には，野壺が並ぶ。野壺は，漆喰製のもの（ＳＥ１～５・６ａ・７～10）と，漆喰が認められず木桶を設置したと思われるもの（ＳＥ11～23）に分けられる。切り合い関係と埋土出土遺物からみて，木桶が古く18世紀の中頃を境に，漆喰製に変化したようである。漆喰製野壺には，出土遺物からみて明治時代に下るものもある（ＳＥ５）。検出状況のよい道路南側の野壺群の分布をみると，漆喰製の野壺は，Ｙ＝2150以東に分布する。また野壺は密集の仕方から，3～４群に群別できる。野壺の分布しない空閑地は，耕作地へ向かう畦道がはしり，あるいはまた土地境界となっていたのであろう。

調査区全面で数多く見出された小穴は，20～25㎝前後の方形の掘り方をもつものが多く，その中に一回り小さい円形の柱あたりが検出されたものもある。2.2～2.4ｍの等間隔で，東西方向に並びが復元できるものが多い。耕作にともなう柵列であろう。

⑵ 近世の遺物（図版28，図77～79）

各種遺構および近世耕作土である第２層から，土器・陶磁器をはじめ，人形・箱庭道具・泥面子・玩具などの土製品，硯・碁石といった石製品，銭貨などが整理箱28箱出土した。遺構出土遺物を図示して，簡単な解説を加えておく。

ＳＦ１出土遺物（Ⅰ1225～Ⅰ1228）　Ⅰ1225は回転台成形の土師器小皿。Ⅰ1226～Ⅰ1228は染付椀。Ⅰ1226は体部下半を氷裂文，上半を矢羽根文で飾り，見込みに手描き五弁花を配する。

ＳＤ１出土遺物（Ⅰ1229～Ⅰ1231）　Ⅰ1229は京･信楽系の陶器灯明受皿。Ⅰ1230は染付椀。見込みを蛇の目釉剝ぎとし体部に草花文を施す。Ⅰ1231は青磁椀。

ＳＥ11出土遺物（Ⅰ1232～Ⅰ1236）　Ⅰ1232は，てづくねの土師器小皿。Ⅰ1233は回転台成形の土師器小椀。Ⅰ1234は陶器天目椀。Ⅰ1235は肥前京焼風陶器の椀。見込みに山水楼閣を描く。底裏に「（木）下弥」ないしは「（山）下弥」の刻印銘をもつ〔角谷1992〕。Ⅰ1236は幅3.5㎝，長さ7.6㎝をはかる小型の長方硯。使用により，墨堂が磨滅している。裏面に「八十」という刻書がある。

ＳＦ１・ＳＤ１・ＳＥ11出土遺物は，18世紀前半代を中心とするものであろう。

ＳＥ８出土遺物（Ⅰ1237～Ⅰ1245）　Ⅰ1237～Ⅰ1243は陶器。Ⅰ1237～Ⅰ1240は京･信楽系で，Ⅰ1237・Ⅰ1238は灯明皿，Ⅰ1239・Ⅰ1240は灯明受皿。Ⅰ1241も京・信楽系の平

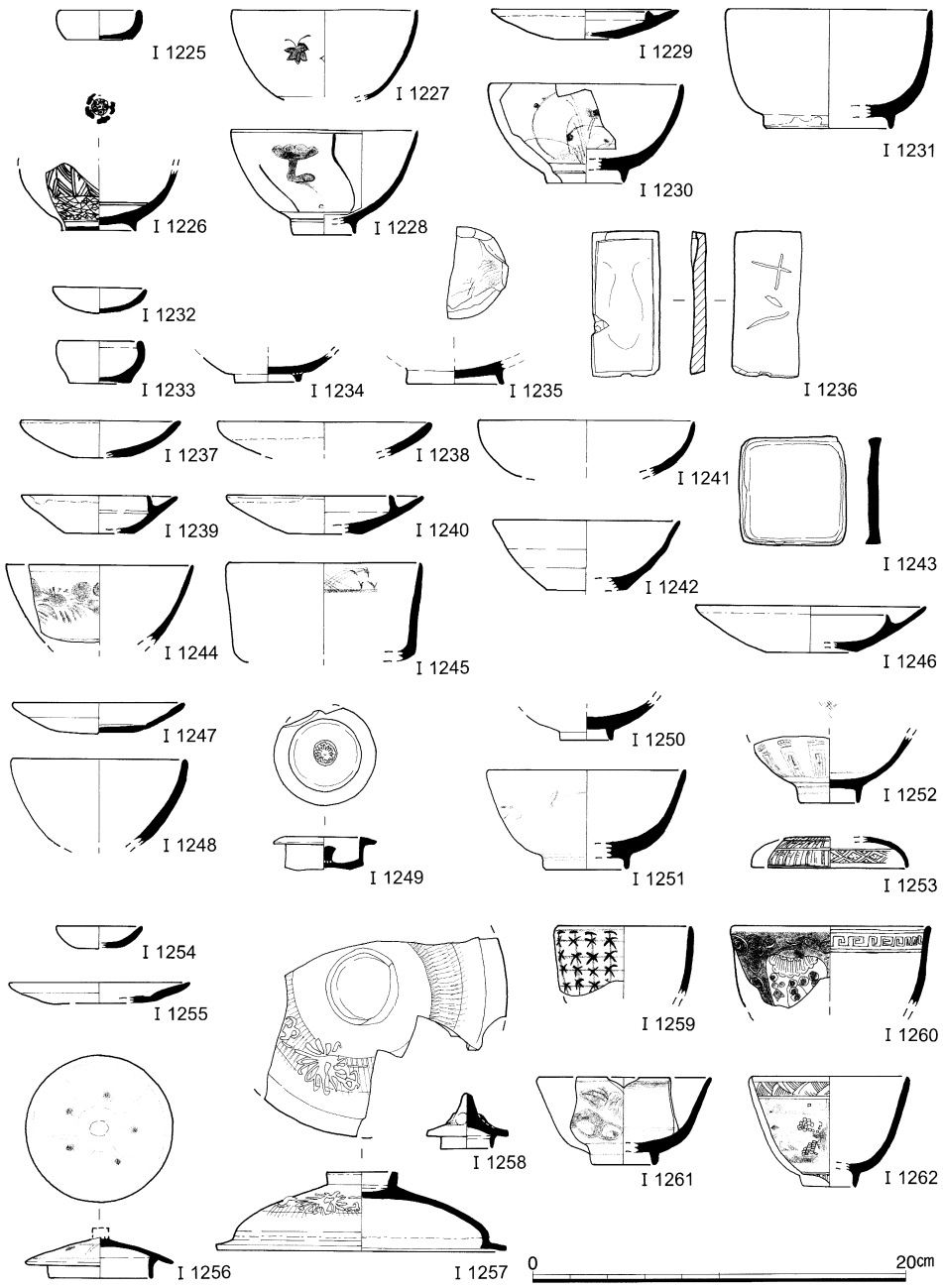


図77　ＳＦ１出土遺物（Ⅰ1225土師器，Ⅰ1226～Ⅰ1228染付），ＳＤ１出土遺物（Ⅰ1229陶器，Ⅰ1230染付，Ⅰ1231青磁），ＳＥ11出土遺物（Ⅰ1232・Ⅰ1233土師器，Ⅰ1234・Ⅰ1235陶器，Ⅰ1236硯），ＳＥ８出土遺物（Ⅰ1237～Ⅰ1243陶器，Ⅰ1244・Ⅰ1245染付），ＳＥ３出土遺物（Ⅰ1246陶器），ＳＥ10出土遺物（Ⅰ1247土師器，Ⅰ1248～Ⅰ1250陶器，Ⅰ1251～Ⅰ1253染付），ＳＥ６出土遺物（Ⅰ1254・Ⅰ1255土師器，Ⅰ1256～Ⅰ1258陶器，Ⅰ1259～Ⅰ1262染付）

椀。Ⅰ1242は唐津系の椀。内面は鉄釉に藁灰釉の流し掛け，外面は藁灰釉を施す。Ⅰ1243は軟質施釉陶器の方形小皿。底面を除いて，あめ色の釉を施す。Ⅰ1244は染付椀。Ⅰ1245は青磁染付椀。

ＳＥ３出土遺物（Ⅰ1246）　Ⅰ1246は陶器灯明受皿。京・信楽系。

ＳＥ８・ＳＥ３は，18世紀後半代のものであろう。

ＳＥ10出土遺物（Ⅰ1247～Ⅰ1253）　Ⅰ1247は土師器皿。見込みに圏線がめぐる。Ⅰ1248は陶器椀で，透明感のある黄緑色の釉が全面にかかる。Ⅰ1249は陶器蓋。外面に鉄釉を施す。Ⅰ1250は京・信楽系の陶器椀。Ⅰ1251～Ⅰ1253は染付。Ⅰ1252は見込みに，簡略化した「壽」字文をもつ。19世紀初頭前後。

ＳＥ６出土遺物（Ⅰ1254～Ⅰ1262）　Ⅰ1254は土師器小皿。Ⅰ1255は見込みに圏線のめぐる土師器皿。Ⅰ1256～Ⅰ1258は陶器の蓋。Ⅰ1256は土瓶，Ⅰ1257は行平鍋，Ⅰ1258は神祭具水玉の蓋。Ⅰ1259～Ⅰ1262は染付椀。Ⅰ1260には焼継がみられる。これらは，19紀前半代のものであろう。

ＳＸ６出土遺物（Ⅰ1263～Ⅰ1327）　Ⅰ1263～Ⅰ1273は土師器皿。Ⅰ1263･Ⅰ1264は内外面に離れ砂が付着し，Ⅰ1268は内面に布目痕，外面に指頭圧痕をもつ。ともに型作りであろう。これら以外は，手づくね成形で，Ⅰ1271～Ⅰ1273は見込みに圏線がめぐる。Ⅰ1274は口縁部を内側に折り曲げた偏平な焼塩壺。Ⅰ1275は土師器焙烙。

Ⅰ1276～Ⅰ1297は陶器。陶器類のうち，Ⅰ1278・Ⅰ1297を除いて，残りは京・信楽系であろう。Ⅰ1276・Ⅰ1277は端反椀。Ⅰ1278は腰折れ形の椀。体部上半から内面にかけて，天目釉を施す。高台脇と見込みに，目跡を残す。Ⅰ1279は蓋物の身。見込みに目跡を残す。Ⅰ1280・Ⅰ1281は蓋物の蓋。Ⅰ1282は水注の蓋。Ⅰ1283～Ⅰ1296は灯火具。Ⅰ1283・Ⅰ1284は秉燭。Ⅰ1285～Ⅰ1289は灯明皿。口縁端部を中心に煤が付着する。Ⅰ1290～Ⅰ1294は灯明受皿。灯明皿･受皿ともに法量的にみて，口径10～12㎝の大と6.5～７㎝前後をはかる小の２種類あり，それぞれを組み合わせて使用したものと思われる。Ⅰ1297は堺・明石系のすり鉢。

Ⅰ1298～Ⅰ1312は磁器。Ⅰ1298は白磁端反の椀。Ⅰ1299は外面にのみ，青磁釉を施した椀。Ⅰ1300・Ⅰ1301は染付小杯。Ⅰ1302～Ⅰ1307は染付椀。Ⅰ1303～Ⅰ1306は，口縁端反となる。Ⅰ1307は広東椀である。Ⅰ1308は赤上絵付けをした仏飯。Ⅰ1309は白磁紅皿。型作りで，内面のみ施釉する。Ⅰ1310～Ⅰ1312は染付蓋。

Ⅰ1313は器高1.7㎝，胴径３㎝前後をはかる土師器小壺。灰白色。茶の湯の懐石膳に添

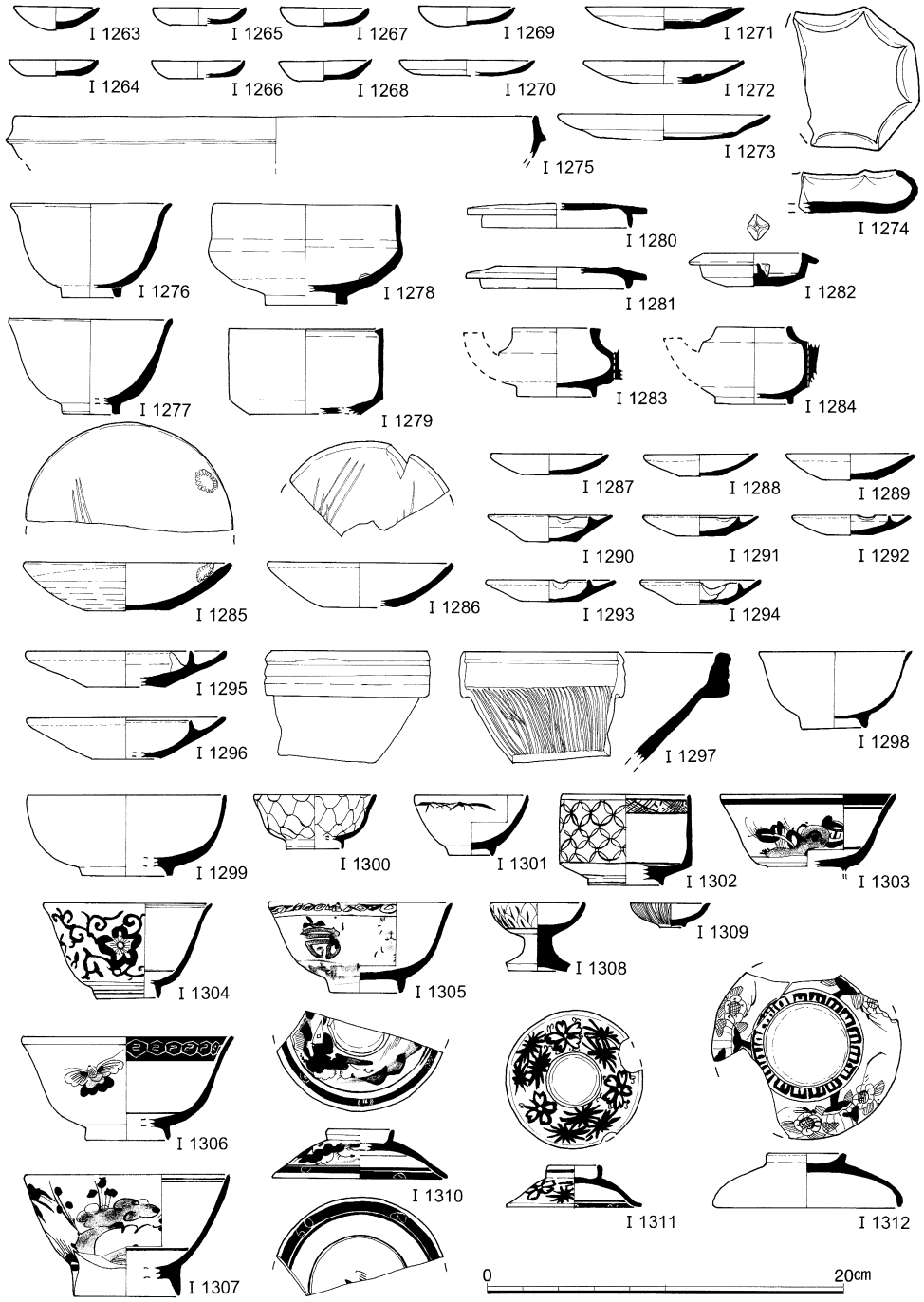


図78　ＳＸ６出土遺物(1)（Ⅰ1263～Ⅰ1275土師器，Ⅰ1276～Ⅰ1297陶器，Ⅰ1298白磁，Ⅰ1299青磁，Ⅰ1300～1312染付）

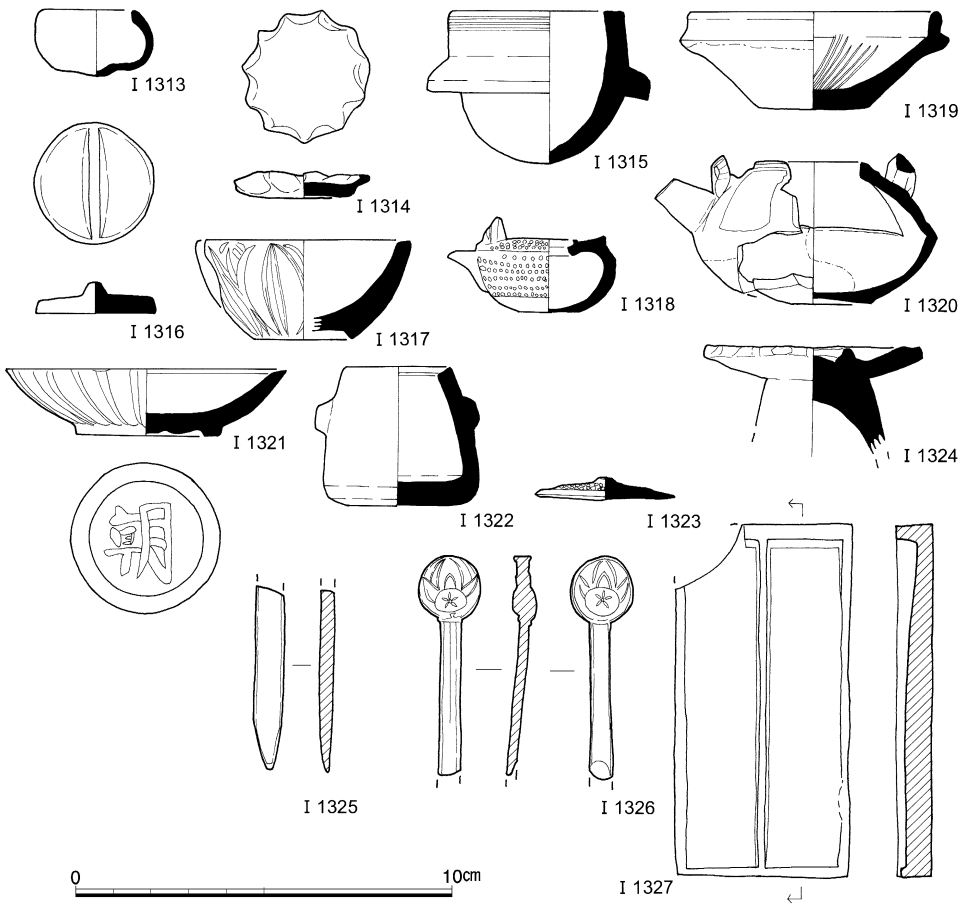


図79　ＳＸ６出土遺物⑵（Ⅰ1313・Ⅰ314土師器，Ⅰ1315～Ⅰ1324玩具，Ⅰ1325・Ⅰ1326ガラス笄，Ⅰ1327硯）　縮尺1/2

えられる「つぼつぼ」であろう。Ⅰ1314は口径3.5㎝前後で，口縁部を花びら形につまんだ土師器小皿。淡橙色。

Ⅰ1315～Ⅰ1324は玩具。Ⅰ1319を除いて型作りとみられる。Ⅰ1315・Ⅰ1316は土師質，Ⅰ1317～Ⅰ1324は軟質施釉陶器。Ⅰ1315・Ⅰ1316は釜の蓋と身。胎土は砂粒を含み，橙褐色を呈する。Ⅰ1317は鉢。外面を花弁状の沈刻で飾る。施釉は内面のみで，透明釉をかけたあと，見込みの一部に緑釉を施す。胎土は砂粒を含み，赤褐色を呈する。Ⅰ1318は注ぎ口と把手をもつ。体部上半を魚子状の小突起で表現しており，鉄瓶などを模したものであろう。灰白色。Ⅰ1319はすり鉢。口縁部外面から内面に，飴釉を施す。底部に回転糸切り痕を残す。見込みの中央に，使用によると見られる磨滅が観察される。Ⅰ1320は土瓶。体部の屈曲部で分割成形し，接合している。体部上半に，飴釉を施す。橙褐色の胎土および

釉調がⅠ1319と同一であり，組道具であろう。Ⅰ1321は皿。外面を型押しで成形し，内面に透明釉を施す。底裏に「朝」の沈刻銘をもつ。胎土は砂粒を含み，淡橙色。Ⅰ1322は釜。底面を除いて，外面に施釉する。胎土は赤褐色。Ⅰ1323は蓋。外面に施釉。魚子状の表現からみて，鉄製品を模した蓋であろう。胎土は灰白色。Ⅰ1324は托あるいは杯台であろう。杯部と脚台部を別々に型作りし，接合する。外面には透明釉を施し，花弁状を呈する縁部には緑釉をかける。灰白色。

Ⅰ1325・Ⅰ1326はガラス製の笄。Ⅰ1325は先端部，Ⅰ1326は頭部。Ⅰ1327は硯。幅4.5㎝，長さ9.2㎝。墨用・朱用の硯面を２つもつ。

ＳＸ６からは，図示した以外に，泥面子，土人形，箱庭道具なども出土している。これらの遺物は，19世紀前半に編年される。

⑶ 近代の遺構と遺物（図版28，図76・80・81）

表土を除去した段階で，煉瓦を立てて弧状に並べた跡を調査区東半で検出した。フィールドとトラックを隔てる縁石とおもわれる。フィールドにあたる地区からは，砂場や野球のホームベースを設置したと思われる浅い五角形の土坑なども検出した。先述したように，調査区の北を東西にはしる道路から南，近衛通りまでは1896年（明治29），京都帝国医科大学の敷地となった。のちに北に隣接する第三高等学校が南へ拡大するに及んで，調査区付近は三高のグラウンドとなった。1940年ごろの建物配置図（京都大学施設部蔵）と今回の調査区を重ね合わせると，縁石を検出した地点はトラックのコーナー部分にほぼ一致している(図80)。また調査区東端の大規模な攪乱土坑からは，観客席に用いられたと想定する花崗岩製の長方形切石も出土した。

近代の遺物は，攪乱坑から第三高等学校に関係する遺物が出土している。そのうち，特徴的なもの３点を図示する。

Ⅰ1328は，軟質施釉陶器の皿。淡褐色を呈し，砂粒を多く含む粗放な胎土で，全面に透明釉を施す。高台は削り出しで，切り高台。体部外面は削り，口縁部から内面は撫でて仕上げる。見込み

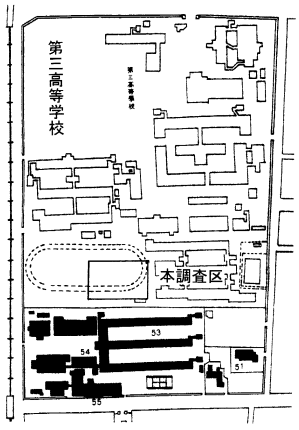


図80　1940年ごろの吉田南構内
縮尺1/5000

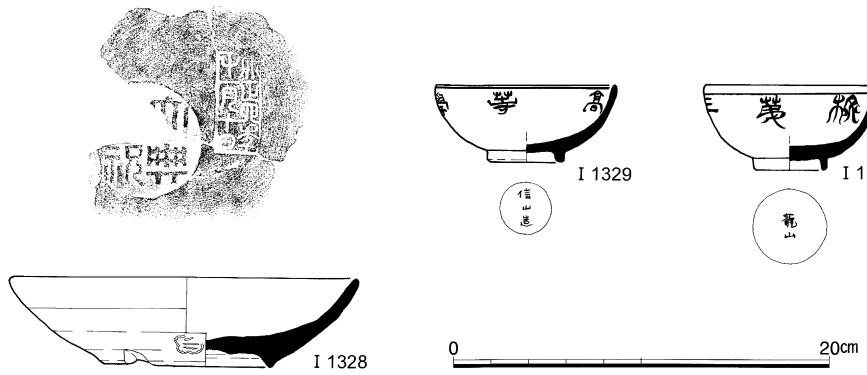


図81　近代土坑出土遺物（Ⅰ1328陶器，Ⅰ1329・Ⅰ1330染付）

に，長方形枠囲みで「大正四年十一月十日」，円形枠囲みで「大典（奉）祝」，高台脇には漢数字の「三」を中に入れた桜の刻印をもつ。「三」に「桜」は，旧制第三高等学校の校章であり，大正４（1915）年11月10日は，大正天皇の即位礼の挙行された日。即位の奉祝記念として，第三高等学校が注文製作した記念品と考える。

Ⅰ1329･Ⅰ1330は，染付椀。Ⅰ1329は口径9.6㎝，器高4.1㎝，Ⅰ1330は口径９㎝，器高4.6㎝。ともに口縁直下に圏線を巡らし，「第三高等学校」と呉須で手描きする。Ⅰ1329は「信山造」，Ⅰ1330は「龍山」の底裏銘をもつ。これらも，第三高等学校による注文品である。

10　小　　結

以上報告したように，今回の調査では中世を主体としつつも縄文時代から近代に至る，多種多様の遺構・遺物が出土し，この地における人間の営みと土地利用の変遷に関する重要な情報を得ることができた。得られた成果を簡潔にまとめるとともに，そこから派生する課題のいくつかを指摘して小結にかえたい。

⑴ 縄文～弥生前期の遺跡について

地形環境と土地利用　縄文時代には，Ｙ＝2160ライン付近に崖面が形成され，東側に微高地，西側に低地が広がる地形であったことが判明した。東側の微高地はほぼ水平な堆積をしており，砂・シルトといった水成堆積の間に黒色腐植土の堆積を２枚確認した。微高地を形成している堆積物からは遺物はまったく出土せず，形成年代などの手がかりを得ることができなかった。一方，西側に広がる低地部も水成堆積物で基本的に埋積してゆき，最終的に弥生前期末ごろ発生した洪水砂（第５層）で覆われた。この結果，調査区一帯がほぼ平坦化し，現在に至る地形の基盤が形作られた。南北にのびるこの崖面は，堆積

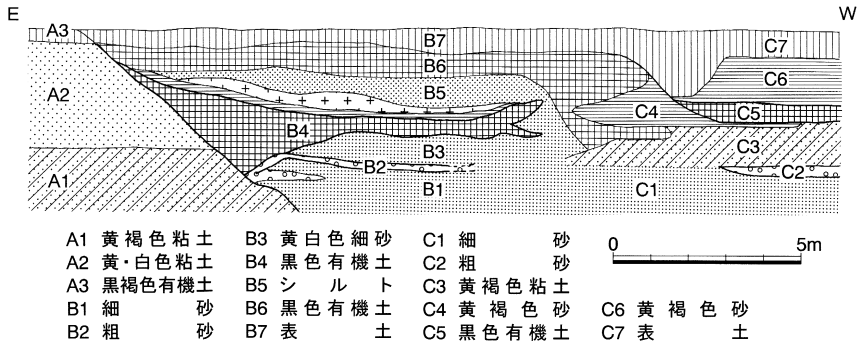


図82　7地点における東西断面層位（藤岡1973，第2図より作図，一部改変）　縮尺1/200

状況の検討から，地下深部へと続く断層のようなものではなく高野川系流路の攻撃によって形成された可能性が高いと考える。この崖面の形成時期は明らかにできなかったが，埋積は縄文後期以降に進行したことが出土遺物から明らかになった。遺物は，微高地から低地へ下る崖面に形成された黒色腐植土から多く出土した。この時代の遺跡は本来，低地を臨む微高地上に展開し，遺物はそこから流入したと理解できよう。

この崖面は，北に隣接する220地点でははっきりしないが，本調査区の北東約70mに位置する7地点の立合調査〔藤岡1973〕で確認された段差がこれに相当するものと考える（図版1－7，図82）。東から西へ下る崖面が形成され，西側は基本的に水成堆積物で埋積し，崖面に堆積した黒色有機土（B4層）から縄文土器，弥生土器が出土しているなど，弥生前期末の黄色砂がはっきりしないなど異なる点も指摘できるものの，堆積物の基本的な構成は同じと判断でき，一連の地形と理解できる。

このような崖面は，本部構内の218地点〔千葉・吉井ほか1997〕でもみられ，さらに北方，北部構内の6・56・135地点〔伊藤1999b，京大埋文研1985，清水ほか1987〕でも，縄文晩期の埋没林などを伴いながら認められる。本調査区から，北部構内にいたる南北1㎞以上におよぶ範囲で確認されている崖面が一連のものかどうかは，なお慎重な検討を必要とするが，いずれの地点でも縄文時代～弥生前期の遺物が出土していることは重要である。低地を臨む扇状地末端で，活動が広範に展開されていたことを物語るからである。今後，関連地点の調査が進めば，遺跡の性格や活動内容も明らかになるであろう。

なお，北に隣接する220地点では，第5層直下で弥生前期水田を検出しているが，本調査区では水田遺構は認められず，調査区北西隅で人工か自然か判断しがたい小溝を数条検出したのにとどまった。遺物もわずかな出土にとどまり，弥生前期の遺跡としては本調査区

は縁辺部に位置すると理解しうる。

出土遺物　出土遺物は，縄文早期・中期・後期・晩期・弥生前期にわたる。型式別にみれば，断絶する型式も多く，また出土量にも多寡はあるものの，長期にわたってこの地付近における営みがあったことが想定される。このなかで特筆すべきものは，縄文早期の土器である。早期の土器は，崖面に堆積した黒色土３（第22層）およびその下位の黒色土を中心に調査区南辺でまとまって出土した。これより下位の堆積物から縄文後期以降の土器が出土しているので，これらの包含層は二次堆積と考えざるを得ないが，早期土器が集中的に出土した地点からは，他時期の遺物は出土していないので，堆積土そのものがほとんど攪乱をうけずに斜面部へ流出した可能性もある。

早期の土器は，押型文土器と無文土器からなる。押型文土器は，山形文をもつ黄島式直前段階と，楕円文からなる黄島式のうちでも縦位密接施文が多くなる新しい段階とがあり，後者が主体を占める。無文土器は後者に伴なうと考えられる。比叡山西南麓では押型文土器の出土する遺跡が複数みられる。北から，修学院離宮遺跡〔京文博1991，p.17〕，一乗寺向畑町遺跡〔京文博1991，p.18〕，北白川廃寺下層遺跡〔網1994，pp.76-79〕，北白川上終町遺跡〔京文博1991，pp.22-23〕，北白川追分町遺跡〔千葉1998，pp.8-10〕である。このうち，押型文前半期（大川式～神宮寺式）は北白川追分町遺跡でみとめられ，他の遺跡は後半期（黄島式直前以降）に比定できる。北白川廃寺下層遺跡では，黄島式直前段階の住居跡も検出されている。

本調査区出土土器のうち，黄島式直前段階の山形押型文は北白川廃寺下層出土と共通する。主体を占める黄島式の新しい段階は，修学院離宮遺跡の主体と共通し，かつ量的には修学院離宮遺跡を凌駕しており，この時期の様相をみるうえで重要な資料となろう。押型文段階に伴なう可能性が高い有茎尖頭器も吉田本町遺跡〔千葉ほか1997，図９・千葉2003，図49〕で，2点確認されており，比叡山西南麓一帯における調査のさいには，この時期の遺跡の存在について十分に注意を払う必要があろう。

⑵ 弥生中期の遺跡と遺物

方形周溝墓　中世以降の開発により上部を削平されており，封土や主体部はみつからなかったが，方形周溝墓を構成したと理解しうる溝が複数認められた。残存状況は良好とは言えないものの，溝の平面形から，少なくとも４基，蓋然性は低いがさらに２基，最大６基の方形周溝墓が２列で並存する状況を復元した。いずれも１辺８ｍ前後であり，規模に格差はみられない。年代は，溝中より出土した供献土器から中期後葉，第Ⅲ様式の新し

い段階から第Ⅳ様式の古い段階におさまるとみられる。

比叡山西南麓地域における方形周溝墓の検出例は，本調査地点から北へ１㎞前後の本学北部構内の54地点〔岡田・吉野1979〕で４基（第Ⅱ様式），229地点〔千葉ほか1998〕で２基（第Ⅱ様式），南へ１㎞前後の岡崎遺跡〔辻・鈴木1985，会下1994〕で14基（第Ⅱ様式２基，第Ⅳ様式２基，第Ⅴ様式～庄内式10基）がみつかっている。資料的にはなお充分とはいえず，今回の調査例は，この地域における方形周溝墓の展開を考える重要な材料となろう。

また本調査区に隣接する220地点でも，直角に曲がるコーナーをもつ第Ⅲ様式後半の溝が検出されている〔伊藤1999a，pp.9-10〕。報告では，方形周溝墓の可能性を指摘しつつ結論は慎重に保留されたが，今回同種の遺構が確認されたことで，調査区周辺に墓域が展開していたと結論してよかろう。本調査区周辺では220地点以外に111地点でも，第Ⅳ様式の溝がみつかっている〔五十川・飛野1984〕。弥生中期後葉の集落構成を把握できる状況には至っていないが，構内東半の微高地上に居住域が展開し，微高地から低地への傾斜変換点付近を墓域，構内西半から医学部構内にかけての低地部を水田などの生業域としたと想定し，その実証を今後の課題としておきたい。

弥生土器　　方形周溝墓を構成する溝を中心に，中期後葉の弥生土器がまとまって出土した。これらは，比叡山西南麓では類例が少なかった資料であり，複数の溝や土坑から一括で出土していることから，京都盆地東北部の当該期の編年と地域性を考えるうえで重要な資料となるだろう。器種別に，既存の編年でどのように理解できるかを山城地域の編年を総括的に扱った森岡秀人の編年〔森岡1990〕との対比でみておこう。

壺は，その形態から細頸壺・直口壺・短頸壺・広口壺に細分した。

細頸壺は３点出土（Ⅰ226～Ⅰ228）。櫛描の直線文･波状文で加飾する。櫛描文の原体は，いずれも割り板である。Ⅰ228は縦分割された器面に櫛描流水文が垂下する文様構成をとる。山城町涌出宮遺跡に類例がある〔京都府埋文センター1989〕。Ⅳ－１様式。

直口壺（Ⅰ229）は１点のみ。高さ45㎝をはかる大型品で，櫛描による直線文・波状文・斜格子文，円形および棒状の浮文，断面三角形の突帯で飾り立てている。Ⅲ－２様式～Ⅳ－１様式に比定しておく。

短頸壺（Ⅰ230～Ⅰ239）は，胴部の張りが弱く細長い形態を呈する壺。壺の中では出土量がもっとも多い。口縁部の凹線文，刻み目文を除くと目立った装飾を施さない。口縁部に凹線文を施すもの，口縁端部に刻みを施すもの，口縁部に加飾しないものに細分できる。

類例は近江に多く，Ⅲ様式からⅣ様式にかけて系統的に変遷する。凹線文は出現期の特徴を示し，Ⅳ－１様式に比定できる。

広口壺（Ｉ240～Ｉ243）は，口縁部が外へ開き，刷毛目調整のみで，文様で飾らない。口縁部に強い横撫でを施し，口縁端部が上方へわずかに拡張する。Ⅳ－１様式。

水差（Ｉ244）は１点出土したのみ。底面が剝落しており，脚台付きであろう。櫛描直線文・流水文と簾状文で飾り，口縁部に凹線文を１条施す。Ⅳ－１様式。水差は，本学構内では，北へ80ｍの地点にあたる111地点で出土している〔五十川・飛野1984，図６〕。口縁部を６条の凹線文で加飾するもので，型式学的に本例よりは新しい。

甕は口縁端部の刻みの有無で，大きく２種類に分けられる。刻みをもつタイプ（Ｉ245～Ｉ251）は，口頸部が「く」字形に折れ，やや細身になる。森岡編年では，山城独自の甕とされ，Ⅳ－１様式に比定される。一方，良好な資料の出土した久御山町市田斉当坊遺跡の甕Ｄに相当し，「大和瀬戸内折衷形」と理解され，「多く出土している遺構の大半が方形周溝墓でありその特殊性がうかがえる」と指摘がある〔松野2004，pp.137－138〕。

刻みをもたないタイプ（Ｉ252～Ｉ257）は，短い口頸部が「く」字形に屈曲し胴部の張る瀬戸内系の甕である。口縁部に強い横撫でを施して上下に拡張させたものは大型品（Ｉ252～Ｉ254）で，小型品（Ｉ256～Ｉ258）は口縁端部をつまみあげるように横撫でするという違いがある。Ⅳ－１様式に比定できる。

高杯は２点出土（Ｉ275・Ｉ276）。１点は全形が復元でき，北に隣接する220地点ＳＤ19出土のそれ〔伊藤1999a，図13〕と，技法・形態ともに酷似する。口縁端部が拡張しつつも，垂直に折れていないことから，Ⅲ－２様式に対比できる。

鉢は１点出土（Ｉ277）。口縁部に，凹線文を１条めぐらしており，凹線文出現期，Ⅳ－１様式に比定できよう。

以上，器種別に既存の編年と対比した結果では，高杯がⅢ－２様式の古い形態をとどめるものの，のこりはおおむね，Ⅳ－１様式として理解してよさそうである。図83は複数の土器が出土した溝出土資料を，溝別に配列しなおしたものである。型式学的に若干古く理解しうる高杯（Ｉ276）が出土したＳＤ31で共伴した甕のうち，Ｉ250はＳＤ23のＩ251あるいはＳＤ26のＩ247と同一の特徴をもち，大きな年代差を想定する必要はないと考える。それ以外の資料は，既存の編年観で，ほぼ同時期と比定される内容から構成されている。また溝間どおしの比較でも，様式内容が近似しており，これら溝群出土の土器は近接した時間内で供献されたものと理解しておきたい。

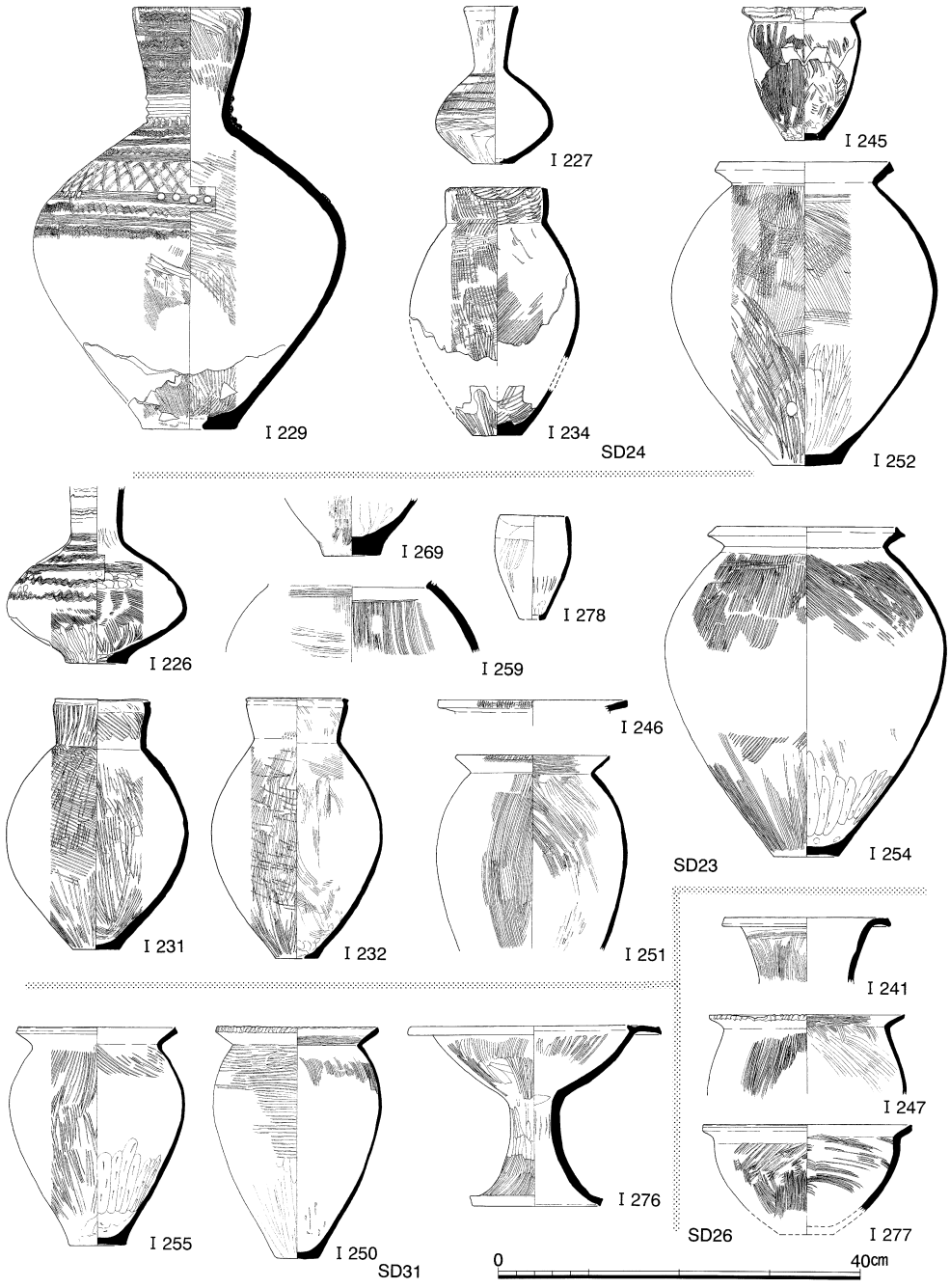


図83　遺構出土別弥生土器　縮尺1/8

以上述べてきたように，本調査区出土の弥生中期土器は，森岡編年のⅣ－１様式を中心とした比較的短期間に限定できる資料である。この時期については，周知のように，様式の境界について，凹線文の発達と器台の出現を重視するか，あるいは凹線文の出現を重視するかによって，意見の違いが生じている〔長友2004，p.181〕。この問題に深入りはしないが，凹線文の出現を様式境界と考える人が最近では多いようである。問題が単純にどこで線を引くかということであって，様式内容や年代序列が異ならないのであれば，区分が簡明でかつ多くの人が支持する意見に従うのがよいであろう。いずれにしても，本調査区出土土器は凹線文の出現期，すなわち研究史的理解にしたがえば，第Ⅲ様式新段階〔佐原1968〕，最近の区分法では第Ⅳ様式の古段階と呼ぶべき資料が主体を占める。

最後に，地域性の問題について簡単にふれておきたい。今回の出土資料には，近江系と呼ばれる受口状になる甕は出土していない。しかし，北に隣接する220地点の方形周溝墓を構成するとみられる溝からは，さきに言及した高杯とともに受口口縁の甕が出土しているので〔伊藤1999a，図13〕，近江系甕の不在はあまり強調すべきではないだろう。むしろ，さきに記したように，壺の中で主体を占める短頸壺が近江に類例の多いタイプであることに注目したおきたい。従来から指摘があるように，近江との関係が深いとされる京都盆地東北部の状況は，今回の資料群にも反映されているのであろう。

⑶ 家形埴輪について

本調査では，本学構内の調査ではきわめてまれな出土遺物である家形埴輪片が出土した。ここでは，その出土状況を確認した上で，全体形の復元と年代的位置について検討し，最後にそこから派生する問題に言及する。

出土状況　第５節でも述べたように，家形埴輪片は調査区内のさまざまな層位および地点から出土しているが，つくりや胎土が非常に類似していることから，同一個体であると考えられる。加えて，かつて吉田南構内ＡＯ22・23区で出土した「形象埴輪片」〔伊藤1999，p.9〕（図84，表６）や，ＡＲ25区〔伊藤2000，p.18，図13，Ⅰ121・Ⅰ122〕で出土した家形埴輪片についても，線刻や胎土から判断する限り，本調査で出土した家形埴輪片と同一個体である可能性が高い。いずれの破片

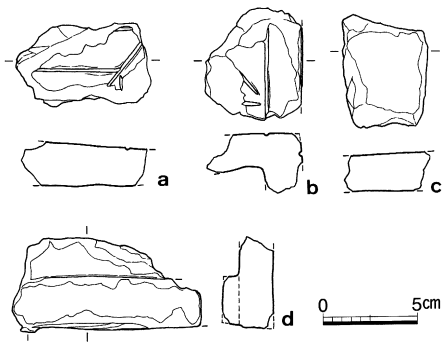


図84　ＡＯ22・23区出土家形埴輪

表6　AO22・23区出土家形埴輪

記号	品　目	部　位	赤彩	線刻	備　考	出土地区	出土層位·遺構
a	家形埴輪	柱	○	○	鍵手文	AO22d3·d4·e3·e4	SD6
b	家形埴輪	隅柱	○	○	鍵手文	AO23d3	攪乱
c	家形埴輪	不明				AO22d3	SD6
d	家形埴輪	壁体部	○		突　帯	AO22e4	SD6

も遺構にともなわずに出土しており，本来の樹立位置は不明といわざるを得ない。また，このように非常に広範囲に破片が散在することとなった原因についても手がかりはない。

全体形の復元　本例は，破片数が少ないために全体形を復元することは困難であるが，幸いにも特徴的な部位が遺存しているため，おおよその形態を推定することができる。すなわち，大棟に鰭飾りを載せ，屋根部に網代と梯子状の文様，軸部の柱には鍵手文状の文様を施し，入口には庇をもち，外面の全面に赤色顔料を塗布するという，きわめて装飾性の高い入母屋造の家形埴輪を復元できる。ただし，平屋建物であったか高床建物であったかは確定できない。軸部の柱と考えられるⅠ285とⅠ286の存在から，軸部にスカシが設けられたことは確実であるが，それは平屋建物の窓である可能性も，高床建物下層の柱間の空隙である可能性も考えられる。平屋建物であった場合，先に挙げた特徴は，京都府城陽市丸塚古墳出土の家形埴輪〔近藤1989〕の特徴にきわめて類似する（図85）。丸塚古墳例の復元案を参考にすれば，本例も本来は桁行70㎝前後，梁行60㎝前後，高さ100㎝前後を

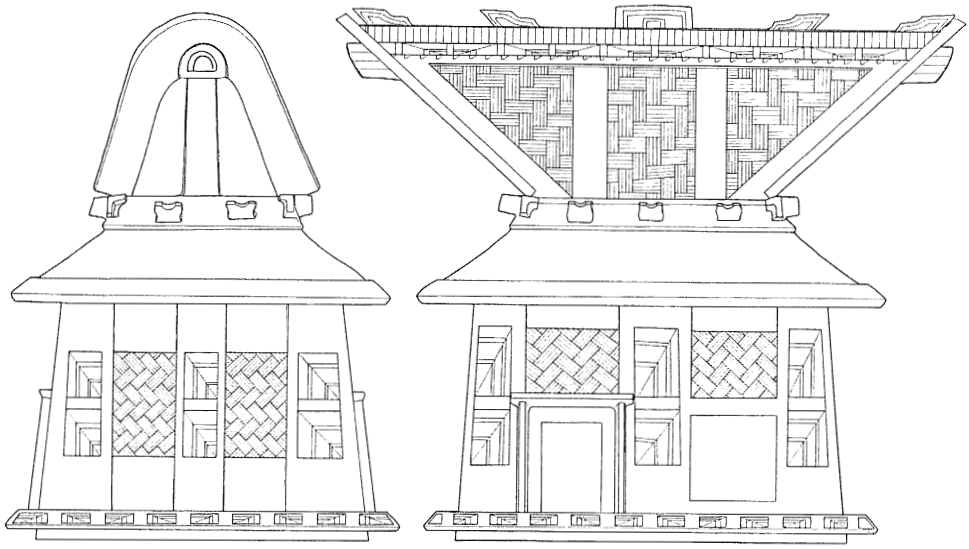


図85　丸塚古墳出土家形埴輪復元図〔近藤1989〕

はかる大型品であった可能性が高い。高床建物であった場合には，100㎝を優に超える高さであったと想定される。これほど装飾性の高い大型品は，家形埴輪の全国の出土例をみわたしても非常に稀少である。

年代的位置　丸塚古墳例は「（黒斑をとどめる）焼成から５世紀後半まで下らない」〔近藤1989，p.38〕と評価されている。破片が少量であるためか本例には黒斑を確認できないが，文様上の諸特徴が非常に類似していることから，やはり５世紀前半の所産とみるのが穏当であろう。ただし，梯子状文様が室宮山古墳例〔千賀編1995〕などにみられるような立体的な段差表現ではなく線刻で表現されていることに加え，鰭飾の両面や下屋根部隅棟で線刻が食い違いを生じているなど，つくりに粗雑さが看取されることから，5世紀前半のうちでも中葉に近い時期と考えておきたい。

派生する問題　ここまでの検討で，吉田南構内のさまざまな地点から出土した家形埴輪片は同一個体である可能性が高いこと，また５世紀前半でも中葉に近い時期に位置づけられることが明らかとなった。こうした結果から派生する，二つの問題について触れておきたい。

まず第一に，該期における古墳の存否である。これまで京都大学構内では，5世紀後半以降に位置づけられる吉田二本松古墳群〔五十川・飛野1984，伊藤1999a〕が知られるのみで，５世紀前半に位置づけられる古墳は確認されていない。これまでの家形埴輪片の出土は，その存在を示唆するものと考えられよう。しかしながら，いずれも古墳時代の遺構にともなわず，総合人間学部構内の広範囲から破片が出土していることから，かつて存在していたとしてもすでに徹底的に削平されてしまっている可能性が高い。

第二に，該期の古墳がかつては存在していたとして，家形埴輪片のほかには同時期の所産と考えられる埴輪片が確認されていないことである。家形埴輪が装飾性に富んだ大型品であることからすれば，円筒埴輪や器財埴輪をともなわずにそれのみが単独で樹立されていたとは考えにくい。今後の発掘調査によって出土する可能性も残されてはいるが，これまでの傾向からみて，それほど高くみつもることはできない。現状では，ほかの埴輪をともなわずに家形埴輪のみが樹立される，特殊な事例であると考えざるをえない。

以上，本調査での破片出土によりその概要が明らかとなってきた家形埴輪は，それ自身として全国的にみても貴重な資料であるだけでなく，この地の履歴をうかがう上でもきわめて重要な資料である。しかしながら，いまだ不明な点が多く残されており，今後の調査によってさらに多くの手がかりが得られることに期待したい。

⑷ 古代の土地利用

本調査区でみつかった古代の遺構は，時期・性格とも不明の大型溝ＳＤ30を除くと，調査区北辺を東西方向にのびる小規模な溝群のみであり，遺物の出土量も少なかった。北に隣接する220地点では，奈良時代の建物跡・井戸，平安中期の梵鐘鋳造土坑・井戸・瓦溜など多種多様な遺構や多量の遺物がみつかっているのとは対照的なあり方を示し，調査区北辺の東西溝群を境に，古代の遺跡は北に展開していると理解しうる。

東西溝群の掘削時期は，出土遺物から10世紀以前に遡ると考えられるが，ほぼ同様の位置に中世以降近世に至るまで連綿と東西溝が設けられていることは重要である。これらの溝は，道路に付属する側溝であった可能性が高く，土地境界の機能を担っていたと想定できるが，それが古代に遡って形成されたことを示唆するからである。

⑸ 中世の土地利用

今回の調査で，遺構・遺物の質・量ともにもっとも主体を占める時期であり，3期にわけて解説を試みた。まず遺構の変遷をまとめておく。１期は12世紀後葉～13世紀で，溝・井戸・配石・廃棄土坑・集石土坑・埋甕など，２期は14世紀で，溝・石室・石敷・廃棄土坑・集石・集石土坑など，３期は15世紀を中心に新段階は16世紀前葉に下る時期で，溝・石室・廃棄土坑・集石・集石土坑などからなる。時期や並びを充分に特定できなかったが，建物や柵列を構成したと思われる無数の柱穴もみつかっている。

細別時期を通じて，調査区北辺を東西にはしる溝群が形成されること，調査区中央やや西よりに，東西溝よりも規模の大きい南北溝が掘削されていることが最初に注目しうる。ほぼ同じ位置に，時期を違えて何度も溝が掘り直されている状況から，これら東西溝，南北溝ともに土地境界の重要な区画であったことが想定できる。とくに東西溝は調査区北側の立合調査でもみつかっており〔伊藤1999a，p.4〕，近世には同じ位置を道路がはしっていることから判断して，中世においても路面に伴なう側溝とみることができよう。すなわち，本調査区でみつかった中世遺構は，東西および南は遺構の広がりは確定できないが，北側は東西道路で画されており北へは展開せず，また調査区中央西寄りでみつかった南北溝によって東西２つの空間に分けて理解することが可能となる。また，時期を特定することができなかったが，両空間内で無数の柱穴を検出したことは，本調査地が邸宅の一画を占めていたことを示している。

個々の遺構で注目しうるのは，５基検出した石室である（表７）。石室は地面を掘りくぼめ，四周に礫を壁状に配置した遺構で，石積み土坑などと呼称されることもある。本学構

表７　石室一覧

遺構名	時　期	掘方平面形	掘方規模(m)	石室平面形	石室規模(内法･m)	備　考
SX35	中世2期	隅丸長方形	3.6×2.4×1	長　方　形	2.4×1×1	底面に,土坑2基
SX26	中世2期	不整円形	直径3m超	方　　形	0.8×0.8×0.4	掘方2段掘り,破壊顕著
SX60	中世2期	隅丸長方形	1.9×1.2×0.4	長　方　形	1.4×0.6×0.4	底面に黒色有機質土
SX17	中世3期	不　整　形	4.3×4×0.8	長　方　形	2.3×2×0.8	東壁･南壁の崩落顕著
SX29	中世3期	不　整　形	3×2.8×0.6	長　方　形	1.6×1×0.6	南北壁の崩落顕著

内では今まで明確な出土例はなく初出となる。１期に属するものはなく，2期から３期に構築されており，すべて南北溝の東側に分布している。

石室状遺構は，中世から近世にかけて多くの検出例があり，その用途については，地下収蔵庫，水溜，便槽などが想定されている〔豊田1992〕。いずれも宅地の一画に設けられるものが多い。平安京の地下式土坑を検討した堀内明博は，地下式土坑は11世紀末12世紀初頭には成立し，14世紀以降，内部に石組をもつ施設が顕著になって江戸時代以降に引き継がれるとし，収蔵庫としての性格を想定しつつ規模の小さなものは便槽の可能性も考慮している〔堀内1992〕。本調査区では２期（14世紀）に出現しており，京内のあり方に通じているといえる。規模の小さなＳＸ60は，底部に黒色有機質泥土が堆積していたため，松井章氏に土壌分析をおこなっていただいたが，遺構の性格を明らかにするような手がかりを得ることはできなかった。これら石室は，地下収蔵庫としての用途が第一に想定しうるが，規模に大小があるので，一律に考えることも難しい。周辺地区の類例の増加を待って再考したい。

出土遺物は，３時期を通じて土師器椀・皿類が主体を占め，瓦器，国産陶器，輸入陶磁器が伴なう点では隣接地の調査成果の傾向とかわりがない。ただし，神饌の容器オオヤツカサ土器〔五十川1986〕と酷似した大型の土師器皿が２期～３期の遺構でみつかっていること，我が国ではほとんど類例の知られていない青白磁置物（３期）や包含層出土ではあるけれど石帯が出土したことなどは，遺跡の性格を考える上で手がかりとなろう。

吉田南構内に残された中世遺跡の造営者については，今までの発掘調査成果と文献から，二つの集団の存在が指摘されている。一つは，藤原北家勧修寺家であり，もう一つは吉田社である〔浜崎1983〕。藤原経房が吉田の地に別業を設け，菩提寺となる浄蓮華院を正治元（1199）年建立し，ここを根拠地とするにおよんで，吉田殿と称せられるようになる。「勧修寺経房処分状」（正治２年）には，「吉田南亭」,「吉田園領」,「吉田角家地」といった屋敷地がみえる。その後，氏長者吉田定房が南朝にしたがい吉野に移った建武４（1337）

年頃を境に，浄蓮華院や邸宅は衰退に向かったようである。これらの屋敷地は，本部構内から吉田南構内および医学部構内にかけて広がっていたと考えられており，そのうち浄蓮華院は医学部構内から吉田南構内西半に比定されている。

もう一つの吉田社は，応仁の乱による焼亡後に，現存地神楽岡山上に遷座するが，その旧地については，吉田南構内南半に比定する説があり〔福山1977〕，また本調査区から西100ｍの医学部構内134地点では，遷座前の春日若宮にかかわる可能性のある井戸がみつかっている〔五十川1986〕。

この二つの集団は，吉田定房の吉野退転を契機に，吉田社の勢力が拡大し，応仁の乱を経て伸長著しい吉田社が吉田殿の領地を蚕食し，16世紀前葉には吉田社の領地となって，吉田構を形成し，のちの景観の基盤を形成するという変遷をたどっている。

調査区はさきに述べたように，東西２つの空間に分離できる。西側の空間が１～２期にかけて活動の主体があり，３期にはその活動が衰えたようにみえるのに対して，東側の空間は１期から３期まで継続的な活動がおこなわれており，とくに２期から３期にかけては石室の造営にみられるように，活発な活動がなされている。オオヤツカサと呼称された特殊な土師器皿が，2期から３期の東側の空間に位置する遺構からのみ出土していることも，東西の空間に占地した人たちが異なる集団であったことを想定することもできよう。

このような想定が正しければ，さきに掲げた二つの集団と重ね合わせて，西側の空間に残された遺構・遺物が吉田殿とおもにかかわり，東側の空間に残された遺構・遺物はおもに吉田社にかかわると解釈することも可能となろう。

また３期に属する南北方向の大溝ＳＤ11が廃絶した契機についても注目しておきたい。ＳＤ11の廃絶時期は埋土中の遺物から，15世紀中～後葉ごろと判断するが，本調査区から北東250ｍに位置する238地点の大溝もＳＤ11とほぼ同じころ，15世紀の末葉には完全に廃絶している。すでに指摘がなされているように〔伊藤2000，p.78〕，これらが吉田社の神楽岡遷座と関連する出来事である可能性は高いと想定している。この遷座に伴なって，邸宅地も，より東の吉田上大路町･中大路町へと移動し，近世社家町へと発展したのに対して，吉田南構内の地は，無住の地となって江戸時代の耕作地へと変転してゆく下地が形成されたのであろう。

⑹ 近世・近代の土地利用

上に示したように，16世紀なかごろ以降，この地での活動の痕跡はきわめて希薄になった。ふたたび遺構・遺物で人間の営みがはっきりと認められるようになるのは，18世紀に

はいってからである。道路，道路脇の野壺群，耕作にともなう無数の柱穴群であり，大学構内のほかの多くの調査地点同様，この地点が都市近郊農村の耕作地へと変転したことを示している。

このなかで，中世溝群とほぼ同様の位置に道路と側溝が検出され，これが現在に至る字境界とほぼ重なることは，中世後半から近世前期にいったん荒廃しつつも，この場所が土地境界としての重要性を失わなかったことを考えさせる。明治30年に京都大学の敷地となったさいにも，この道路の北側は第三高等中学校，南側は京都医科大学の敷地としたように，この土地境界は生きていた。のちに三高の敷地が南へ拡大するに及んで，この境界は失われたように見えるが，その後の構内整備ではふたたび，ほぼ同じ位置に東西道路が敷設されて現在に至っているのである。土地利用の形態は幾多の変遷を重ねつつも，重要な土地区画は，長期にわたって存続し続けることを示しているといえよう。

以上，述べてきたように，縄文時代から近代に至る長期にわたる土地利用の変遷と人間の営みのありようを考古資料を通して，かいま見ることができた。

なお，発掘調査から整理調査を通じて，以下の諸氏より貴重なご教示をいただいた。押型文土器について矢野健一氏（立命館大学），家形埴輪について高橋克壽氏（奈良文化財研究所）・東方仁史氏（鳥取県立博物館），中世の石室について，山本雅和氏（京都市埋蔵文化財研究所），古瀬戸について藤澤良祐氏（愛知学院大学），古代および中世の瓦について上原真人氏（京都大学文学研究科），青白磁置物について弓場紀知氏（京都橘女子大学），中世土坑出土貝類の同定について，加藤真氏（京都大学人間･環境学研究科），土壌分析について，松井章氏（奈良文化財研究所）。末尾ながら，記してお礼申し上げます。

〔注〕

（1） オオタニシは，殻内に幼貝の入っているものが多かった。成貝は殻高35～59㎜，殻径23～37㎜，幼貝は殻高７㎜前後，殻径６㎜前後である。一つの殻内に最大30個の幼貝の入っていたものもある。タニシは卵胎生で，6～７月ごろ40個前後産卵し，6～８月ごろ20～30個前後の幼貝を産む。幼貝を殻内にとどめている個体が多いことから判断して，7月前後の初夏のころ採集した可能性が想定できよう。なお，オオタニシ，マルタニシは，加藤真氏に同定していただき，ご教示をいただいた。

第３章　京都大学北部構内ＢＣ28区の発掘調査

伊藤淳史　冨井　眞　外山秀一*　上中央子**

１　調査の概要

今回の調査地点は，京都大学北部構内の南西部に位置し，北白川追分町遺跡の範囲内にある（図86，図版１－276）。ここに理学部校舎６号館の新営が計画されたため，予定地全面の2158㎡を，2000年５月29日～11月21日にかけて発掘調査した。周辺では，南側の208・217地点で，縄文晩期～弥生前期の遺物包含層，平安中期の埋納遺構，幕末期土佐藩邸の堀，北方100ｍの54地点で，弥生中期の方形周溝墓や平安末期の火葬塚が見つかっており，今回も関連する遺跡の存在が予想された。また，花折断層が東方400ｍにあり，208地点では砂脈（噴砂）が多数確認されていることより，古地震の痕跡も予想された。

調査の結果，弥生前期末の土石流にともなう厚い黄色砂をはさんで，上層で弥生中期以降各期の遺物包含層，中・近世の耕作にかかわる小溝やピット群，幕末期の井戸を，下層で縄文晩期～弥生前期の遺物包含層と，その上面に築かれた小区画畦畔の水田遺構や流路を良好に検出した。遺物の総出土量は整理箱51箱。下層の弥生前期水田遺構は，先史時代の土地利用や地形環境の変遷を知らせる貴重な事例であり，10月20日に現地説明会を開催し，2001年５月には概略を速報した〔伊藤ほか2001〕。また調査では，耕作の状況をより詳しく検討するため，水田構成層を中心にプラント・オパール分析を実施した（第４節）。

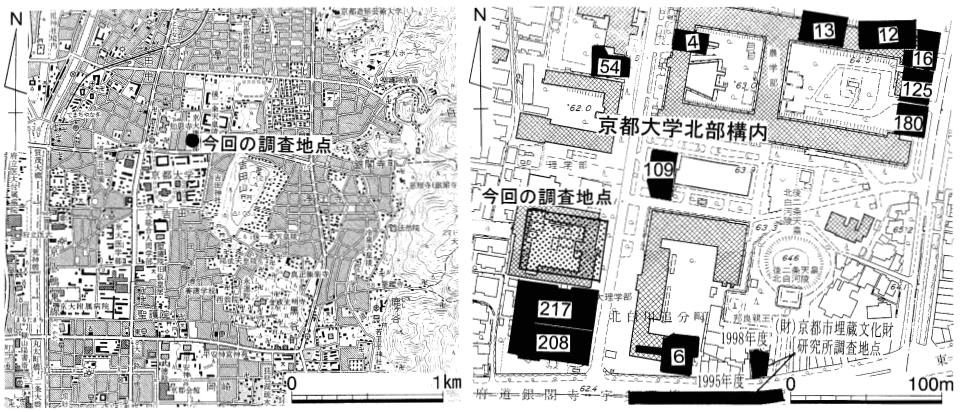


図86　調査区の位置（左：縮尺１／５万，右：縮尺1/5000）

*皇學館大学　**京都造形芸術大学大学院博士後期課程

以上のほか，水田構成層を突き破り黄色砂中に吹き上がる砂脈（噴砂）が随所で確認された。これらは，地震時の地盤の変化や強度を検討する素材として試料を提供し，地質学・土質工学的な解析の結果が報告されている〔関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編2002　pp.183-185，竹村・三村2002〕。また，黄色砂をもたらした土石流についても，調査地の所見をもとに地質学の立場から構造が分析され，本書第Ⅱ部紀要に収録している。

そして，上層の堆積や遺構群は，黄色砂堆積後の開析で生じた段差や谷状低地が，弥生中期以降近代の大学設置に至る長期の埋積で平坦地となった様子と，中世以降の著しい耕地化の状況を示している。中世都市京都近郊における開発と植生変遷の動向をより具体的に追究するために，堆積物を連続的に採取して花粉分析をおこなった（第７節）。

なお，発掘調査と整理作業は伊藤淳史と冨井眞が担当し，梶原義実・北尾敬子・下坂澄子・菅野類・長尾玲・永井雄一郎・上杉和央・杉本真理子・松尾奈緒子・鈴木敬寛・小野多佳子・小西恵美の助力を得た。本章は，縄文・弥生時代の石器と第６節を冨井，第４節を外山，第７節を上中，それ以外を伊藤が執筆し，全体を調整した。

２　層　　位

調査前の地表面はほぼ平坦であったが，近・現代の堆積層である表土層を除去すると，調査区の東方が高く西方に低い状況が判明した。表土直下の第２層の上面は，東壁の灰褐色土が62.2m，西壁の赤褐色土が61.7mをはかる。そして，Ｙ＝2430付近を境として西へと下る段差があり，調査区の西半ではここに多数の層が埋積しているため，東半とは層序が異なっている。したがって，東壁，東西畔・西壁とでは互いに層位番号は共通していない。なお，東壁の第８層および西壁・東西畔の第13層については，上面に弥生時代前期の水田が確認されている層序であり，次節であらためて詳細を報告している。

東壁の層位（図87）　第２層灰褐色土は，近世の遺物包含層。第３層の黄灰色土，第４層の茶褐色土は中世の遺物包含層で，それぞれ15世紀代以降と，13・14世紀代を中心とする。Ｘ＝2000付近より南においては，下層に東西方向にはしる流路ＳＲ１が埋積しており，その影響をうけて第３・４層は層厚が増すとともに，中世前半期の遺物包含層である第５層灰茶褐色土がさらに加わる。この流路ＳＲ１は，第７層の黄色砂を切って西流するもので，南側の立ち上がりは東壁ではあらわれていない。流路内の堆積ａ～ｈ層のうち，下半部を占めるｅ層は，人頭大程度までの礫を多数まじえた砂礫層で，洪水により短期間に埋積したものとみられ，流水による堆積であることを示すラミナが顕著に認められる部

層　　位

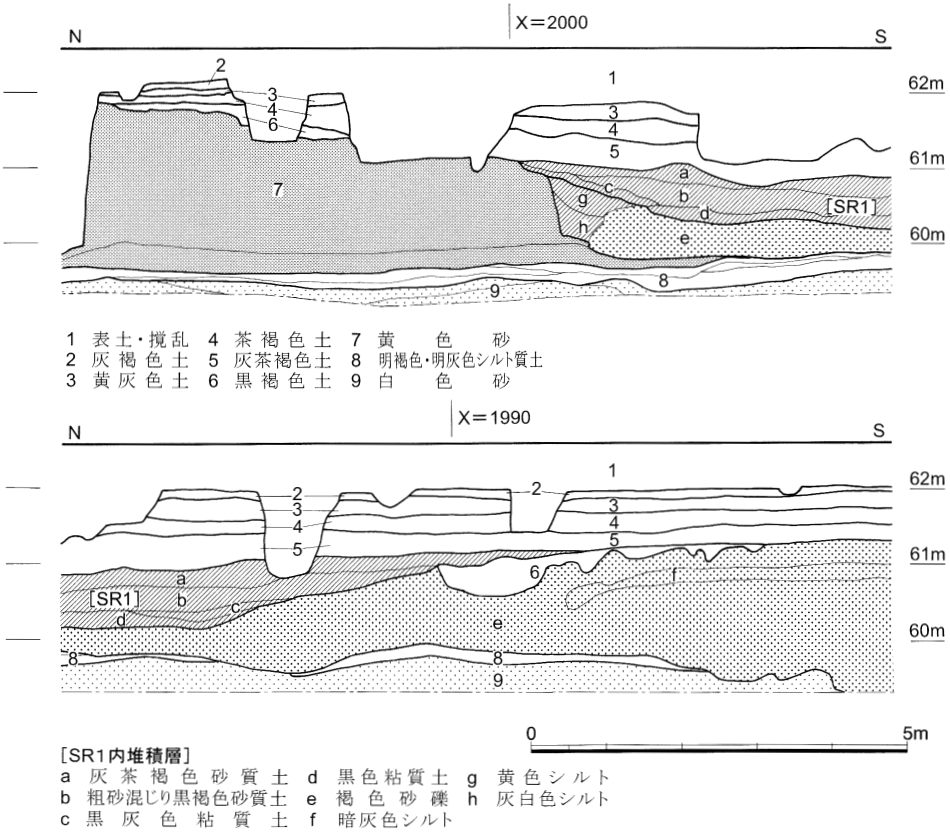
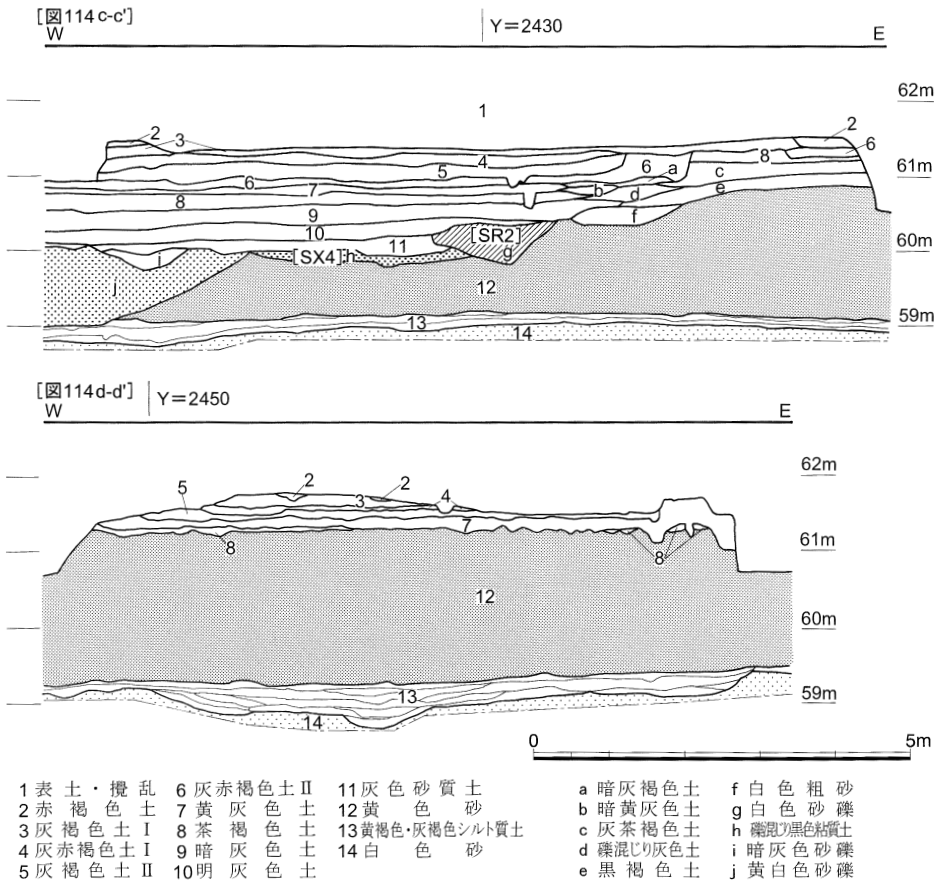


図87　調査区東壁南半（図114ａ－ａ’）の層位　縮尺1/100

分があるとともに，Ｘ＝1985以南では，縄文晩期・弥生前期の遺物包含層第８層やその下の第９層白色砂も抉りながら深く埋積する。上半のａ～ｄ層は，砂礫埋積後に生じた幅10ｍほどの浅い窪地を埋めているもので，それぞれ白色粗砂を薄く介在させながら堆積する。図87においてはこの範囲をＳＲ１として扱っている（狭義のＳＲ１，以下ＳＲ１はこちらを指す）。上半のａ層：灰茶褐色砂質土・ｂ層：黒褐色砂質土は，10世紀代の遺物を含み，下半のｃ層：黒灰色粘質土・ｄ層：黒色粘質土の包含遺物は少ないが，弥生中期～古墳時代のものが認められる。また，ｇ・ｈ層は，流路の北肩を早い段階で埋めていたとみられる砂層で，ｇ層上面～上部にかけてで弥生中期後葉の土器の一括出土（ＳＸ５・６）や石庖丁の出土をみている。

以上の状況と，第７層の黄色砂が弥生前期末～中期初頭の一時期に想定される土石流堆積層であることを考慮すると，以下のように埋積過程を復元できる。すなわち，第７層を



1 表土・攪乱　6 灰赤褐色土Ⅱ　11 灰色砂質土
2 赤褐色土　7 黄灰色土　12 黄色砂
3 灰褐色土Ⅰ　8 茶褐色土　13 黄褐色・灰褐色シルト質土
4 灰赤褐色土Ⅰ　9 暗灰色土　14 白色砂
5 灰褐色土Ⅱ　10 明灰色土

a 暗灰褐色土　f 白色粗砂
b 暗黄灰色土　g 白色砂礫
c 灰茶褐色土　h 礫混り黒色粘質土
d 礫混じり灰色土　i 暗灰色砂礫
e 黒褐色土　j 黄白色砂礫

図88　東西畔南壁（図114ｃ－ｃ’，ｄ－ｄ’）の層位　縮尺1/100

もたらした大規模な土石流の後，弥生中期後葉までの間に大規模な洪水によりＳＲ１の最大輪郭が形成される。その後残された東西方向の浅い川状の窪地は，平安時代にかけて徐々に埋積し，幾分か影響をとどめながらも中世にいたって平坦地化している。なお第６層黒褐色土は，遺構などの埋土を中心にみられ，10世紀代の遺物を中心に包含する。ＳＲ１内のａ・ｂ層とは上下の関係にあるが，遺物内容に差はみられない。ＳＲ１の上部が埋積していく過程で小規模な流れの存在がうかがわれることから，10世紀代においても開析と埋積が周辺部で繰り返し生じていたことの反映とみられる。

東西畔の層位（図88）　Ｘ＝2010ラインに沿って設けた東西畔のうち，包含層の残っていた西半（図114ｃ－ｃ’）と東半（同ｄ－ｄ’）の南壁の状況を示す。西半は，Ｙ＝2430以東に西へ下る段差付近のみにみられる堆積ａ～ｇ層がある。第２層～第６層は，それら

より上部の堆積である。第２層赤褐色土は，多くが表土に削平されているが，第４層灰赤褐色土Ⅰ・第６層灰赤褐色土Ⅱと同質の，固くしまった酸化鉄斑文の集積層である。特徴からみて水田耕作にともなう堆積だろう。いずれも近世遺物を包含しており，第３層灰褐色土Ⅰ以上の層では幕末期のものが含まれる。したがって，第２層・第３層は19世紀代後半，第４層以下がそれ以前，おおむね18世紀代に比定される。

灰赤褐色土Ⅱは，Ｙ＝2433付近で中世後半期の遺物包含層である第８層茶褐色土を50㎝程度直線的に切り込んで段差を形成し，その西方１ｍ程度でこの灰赤褐色土Ⅱが灰褐色土Ⅱに30㎝ほど切り込まれる。埋積の過程で徐々に段差が低くなりながら，その位置も西へ移動している状況をみることができる。人為的な段差の形成は，段差内に堆積している中世後半期の第７層黄灰色土，第８層茶褐色土，斜面に堆積するａ・ｂ層との関係から，中世末期まではさかのぼる可能性が高い。これより下層には，中世後半期の第９層暗灰色土，中世前半期の第10層明灰色土，10世紀代の第11層灰色砂質土が水平に堆積し，斜面でレンズ状に堆積している砂層や礫混じり層と互層を成していることから，古代・中世を通じて徐々に埋積していった様子がうかがわれる。最下層にはｈ：礫混じり黒色粘質土やｉ：暗灰色砂礫がみられる。これらの包含遺物はきわめて少ないが，弥生中期以降のものが含まれ，段差の形成もその時期までさかのぼるとみられる。第12層黄色砂以下は，東壁の第７層以下と同じだが，ここでもｊ：黄白色砂礫の埋積する流路が黄色砂を切って流れる状況が観察される。この砂礫は，後述するように，南流するＳＲ３にともなうもので，黄色砂埋積後にほどなく生じた大規模な流れとみられる。ここでの段差の形成要因であろう。

東半については，層序として全域で安定して検出されるのは，灰褐色土Ⅱ，黄灰色土の２層で，茶褐色土は部分的にしかみられない。中世前半期以前の土層の多くは削平されたのであろう。東端Ｙ＝2457付近では，灰褐色土Ⅱが西へ向かって段差状に落ち込む状況が確認された。水田が段差をもって連なっていた近世の耕地景観を反映するとみられる。

西壁の層位（図89）　表土以下第11層までは，上述の東西畔の層位と共通し，Ｘ＝1993付近から北側にほぼ水平に堆積している。それ以南の土層（ａ～ｅ層）は乱れており，古代ないし中世の何らかの遺構の埋土である可能性が高いが，壁面での確認にとどまる。攪乱のため，第９層までとの相互の切り合い関係も不明であるが，平面的には，中世の段階には南から北へと下る明瞭な段差が区画となっていることが確認されている（図113）。この段差は，黄色砂の第12層を切るように東方からＳＲ１の流れが及んだことにより形成されたとみられる。ただし，東壁においてはＳＲ１の南肩の立ち上がりが確認されていない

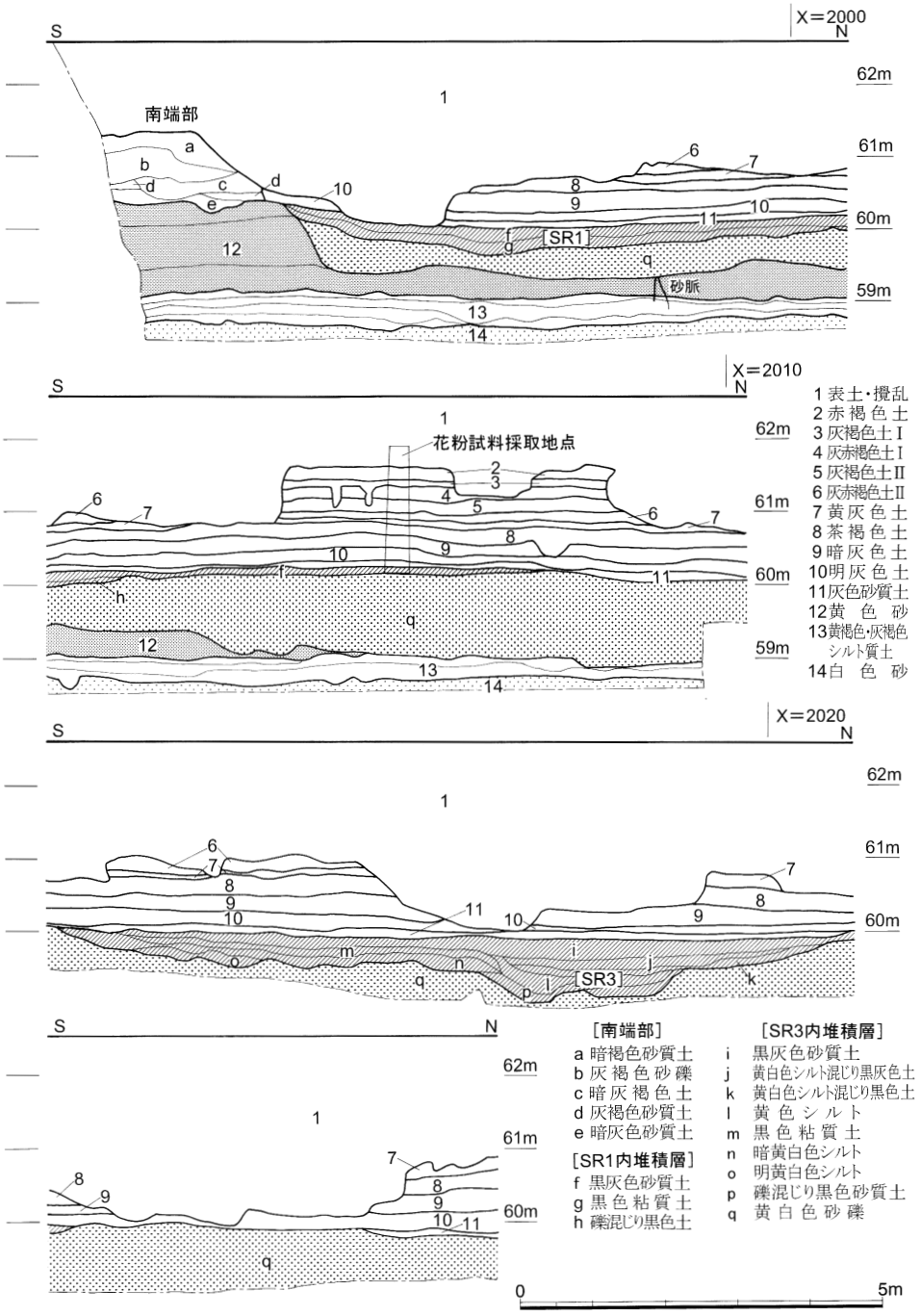


図89　調査区西壁（図114ｂ－ｂ’）の層位　縮尺1/100

ので，ＳＲ１の流れは枝状に支流として分岐し，そのひとつが及んだものと理解される。

ｆ～ｈ層は，東壁のａ～ｄ層に対応するもので，ＳＲ１上部を埋積させている黒色の砂質土や粘質土である。また，ｉ～ｐ層は，Ｘ＝2010～2020付近にかけて堆積している砂やシルト，一部に砂礫をまじえた黒色の砂質土や粘質土である。これらは，調査区の西北部を南流していたＳＲ３を埋積させているもので，弥生中期以降の遺物が微量出土した。ｑ層は，その下層にひろく堆積する黄白色砂礫で，第12層の黄色砂を切り，Ｘ＝2005付近より北では層厚を増していき，第13層上面を削平して弥生前期末の小区画水田の一部を流失させるとともに，第14層白色砂にもおよぶようで，調査区西北隅では深さを確認できていない。南方では，ＳＲ１にともなう砂礫層と一体化しており，峻別できない。ＳＲ３は，ＳＲ１と同様に黄色砂を切って流れたもので，今回の調査区西端付近で合流するように生じた洪水層とみられる。上部を埋積させている土層の特徴や出土遺物からみて，発生時期はＳＲ１とほぼ同じで，それ以後徐々に埋積していったものとみられる。

なお，黄色砂は，上半が比較的粒径が大きく下半が小さい傾向を示しており，層中には，周辺の既調査地点での所見と同様に１ｍを越える大きさの花崗岩が多数含まれていた。

３　弥生前期以前の遺跡

⑴ 弥生前期の水田遺構（巻首図版，図版33・34，図90～97，表８）

水田の検出状況（図90・95，表８）　縄文晩期・弥生前期の遺物包含層（東壁の第８層･西壁の第13層）の上面で，小区画水田および周辺の微地形を良好な状態で検出した。黄色砂が，弥生前期末～中期初頭の一時期の土石流堆積層であり，今回も含めてこれより下層で弥生中期に下る遺物はまったく出土していないことから，弥生前期末段階の地表面がほぼそのまま遺存しているとみてよい。ただし，この土石流や，ＳＲ１・ＳＲ３などその後に生じた洪水により，表面が損傷したり土壌が流出したと想定される部分があり，図90には範囲を示した。水田は東と西の２箇所にあり，それぞれ東水田・西水田と呼ぶ。水田区画の番号・田面の平均標高・面積は図95と表８に示す。なお調査では，排土の都合から水田のある調査区北半と南西部を先行して完掘し，その後に残る南東部分を発掘した。

層位と土地条件（図91～94）　２つの水田域にまたがる東西方向（Ｘ＝2010），東水田の南北方向（Ｙ＝2450），西水田の畦畔に直交する北東－南西方向（図90Ａ－Ａ’），西水田南壁際の土堤部分（図90Ｂ－Ｂ’）の層位を示す。黄色砂より下層で基本となる土層は，暗灰褐色砂質土（第２層）と黄褐色砂質土（第３層）で，水田畦畔や土堤部分を中心に黄

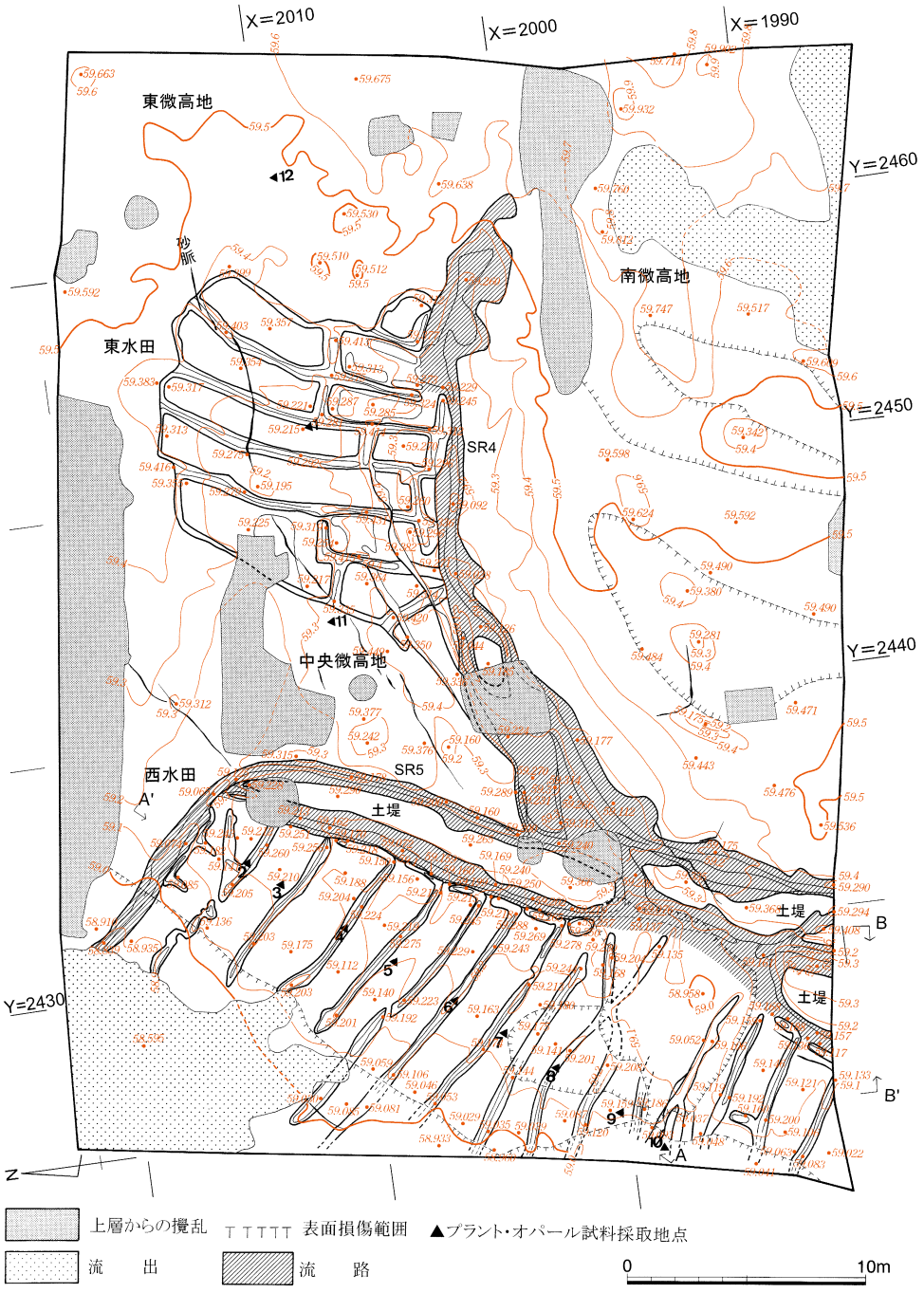


図90　黄色砂除去後の地形と遺構　縮尺1/300

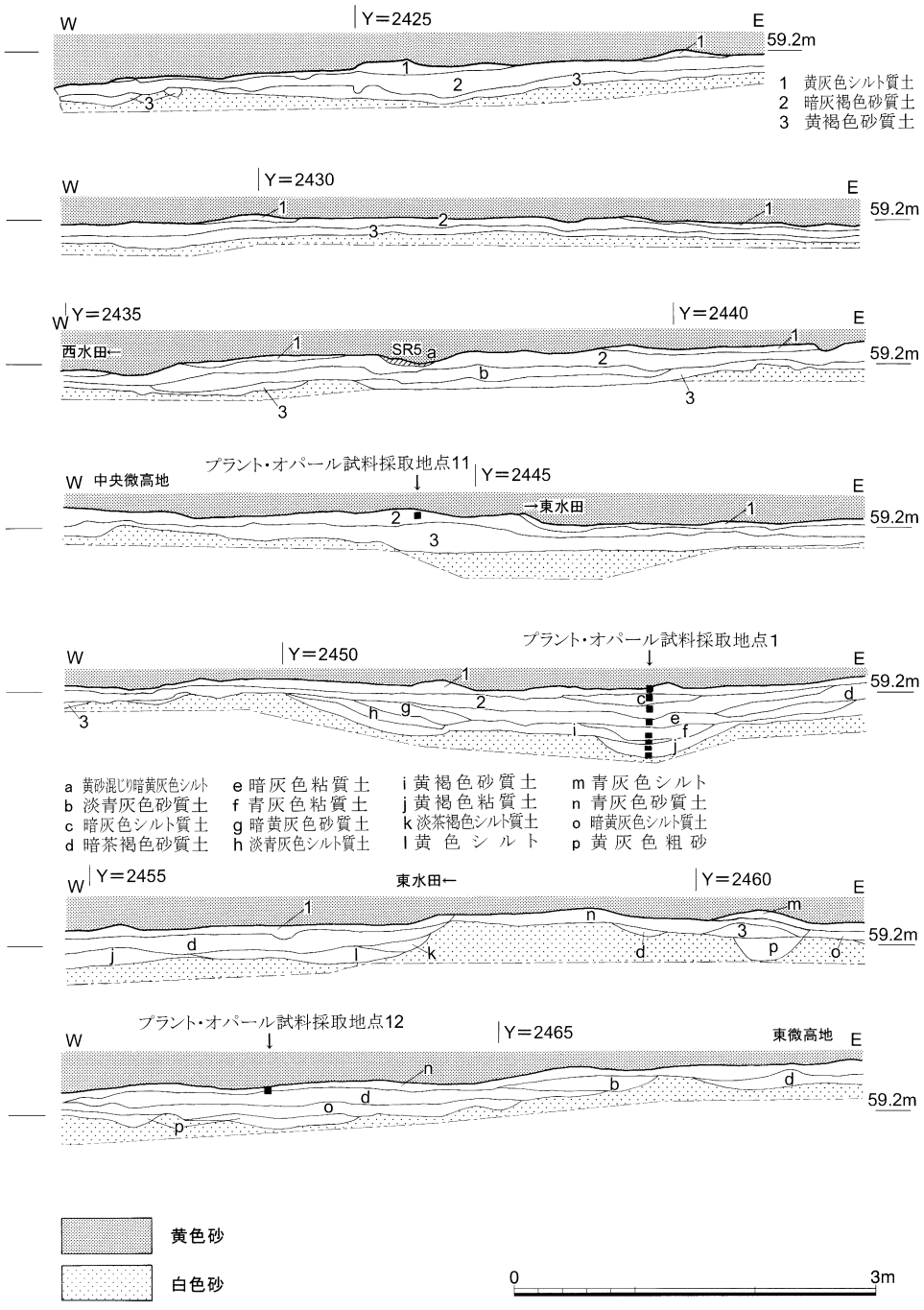


図91　東西畔（X=2010）南壁黄色砂以下の層位　縮尺1/60

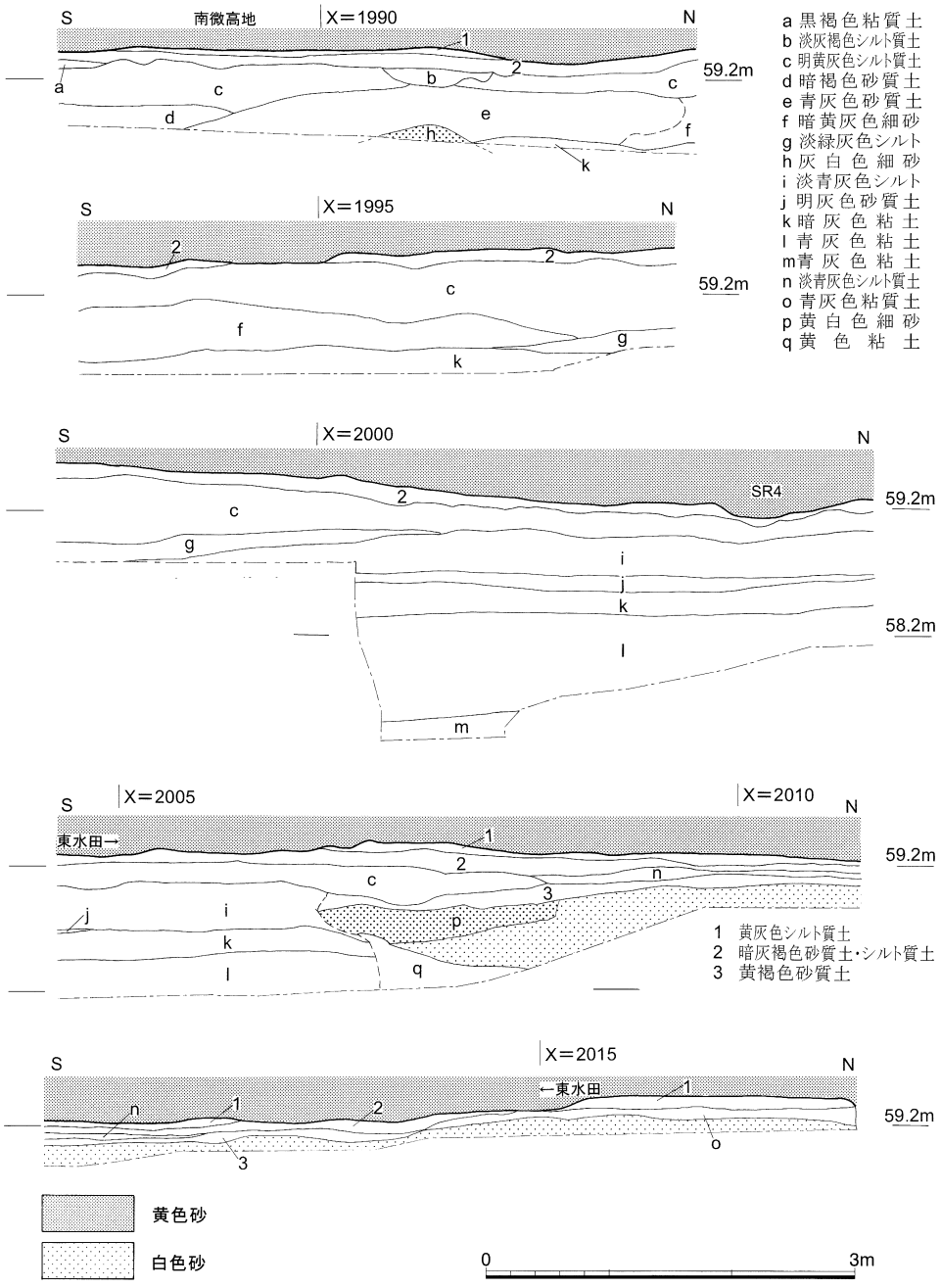


図92　南北畔（Ｙ＝2450）東壁黄色砂以下の層位　縮尺1/60

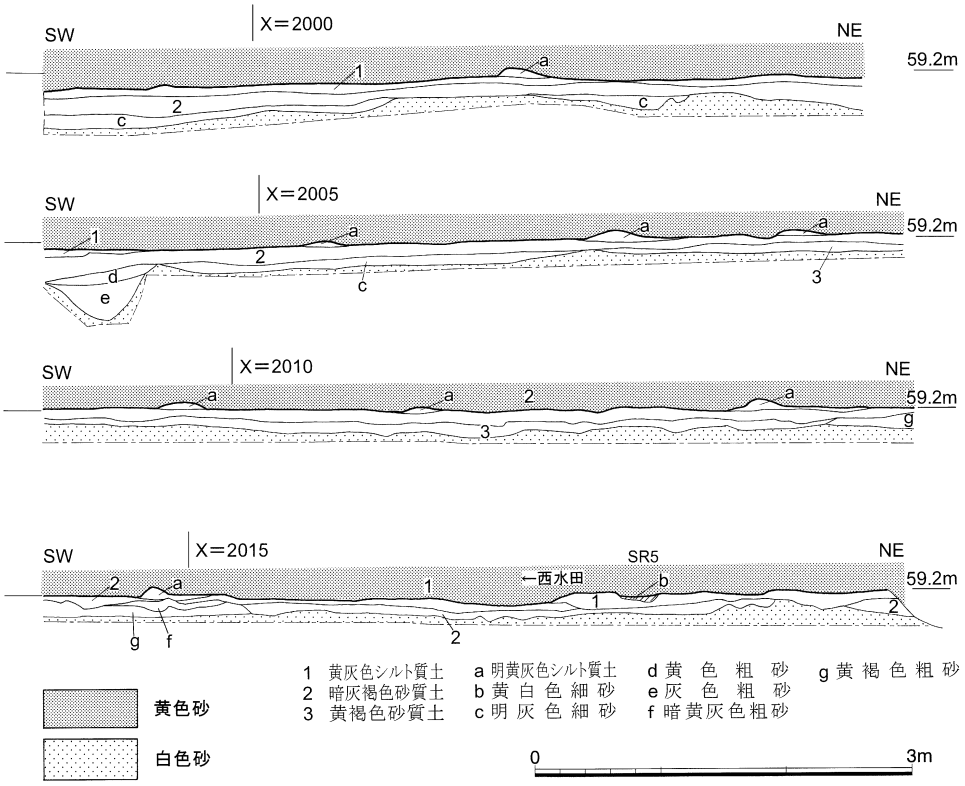


図93　西水田北東－南西方向（図90Ａ－Ａ’）黄色砂以下の層位　縮尺1/60

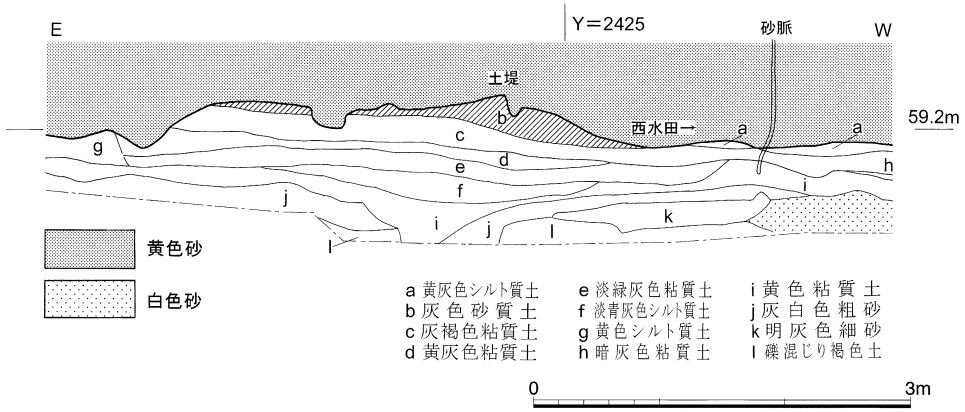


図94　調査区南壁西半（図90Ｂ－Ｂ’）黄色砂以下の層位　縮尺1/60

灰色のシルト質土（第１層）が，それらの上面にのる。

東水田では，Ｙ＝2450以東において，第２層以下に窪地が存在し，複数層の粘質土や砂質土の堆積をみる。この窪地は，水田造営時までにはほぼ埋没していたとみられ，耕作に適当な場所として選択されたものとみられる。また，水田よりさらに東方一帯では，グライ化した青灰色の土壌が中心となっていく。そして，南北方向の層位でみると，Ｘ＝2007付近で基盤の白色砂層がたちあがり，それより南方では強くグライ化した厚い粘土層やシルト層の複数の堆積が深さ1.5m以上はつづいていることを確認した（図92ｃ～ｍ層）。ｃ層からは，時期不明の土器片を採集しているが，それ以下については断面確認のための機械力掘削にとどまり，遺物を確認していない。これらは，白色砂層もふくめて，晩期にいたって埋積し安定化する以前の谷の堆積で，起伏に富んだ複雑な地形環境を示すといえ，南微高地や流路ＳＲ４は，その影響を強く受けている。一方，西水田では，下層の基盤は白色砂であり，層序も比較的安定している。したがって西水田は，基盤が白色砂の範囲を中心に選択して，排水不良の粘質土の部分をできるだけ避けて設けた可能性がある。

地　　形（図90・95）　東水田と西水田の間には，水田面との比高差20㎝あまりでゆるやかに高まる空閑地が５ｍほどある（中央微高地）。また，東水田の南方一帯は，東方から張り出してきた比高差60㎝あまりに達する尾根状の高まりがあり（南微高地），その東方一帯は，比高差20㎝前後の平坦地がひろがる（東微高地）。調査区全体の地形を俯瞰すると，南方にある尾根状の張り出しが地形の大勢を決定づけており，水田は，その縁部に形成された窪地や平坦地を巧みに利用するように設けていると言える。なお，東水田の南端は，西方の中央微高地に連なるような東西方向の高まりとなっており，そこに階段状に下る複数の段差がみられる（図版33－２参照）。これらは畦畔を分断しており，また地震にともなう砂脈の方向におおむね一致していることから，人工の造作ではなく，地震時の隆起と沈降など地盤変動により生じたものと判断する。したがって東水田は，現状では区画８が深く凹む地形となっているが，本来はもう少し平坦であった可能性が高い。

畦畔と流路（図90）　畦畔は，いずれも幅30㎝高さ10㎝程度の断面蒲鉾形を呈し，東水田は南北，西水田は北西－南東方向に配される。東水田には，内部区画のための東西方向の短畦畔があるが，西水田では流路と接する東端のみを水口を設けながら区切る形態が基本で，細長い区画が整然と並ぶ。また，東水田では，周囲からの導水や防水のための施設をとくには認めない。南側に，幅１ｍ深さ30㎝程度でおおむね西方へ向かって下る流路ＳＲ４があり，ここに排水されたと推察されるが，自然地形をそのまま活かしたものとみら

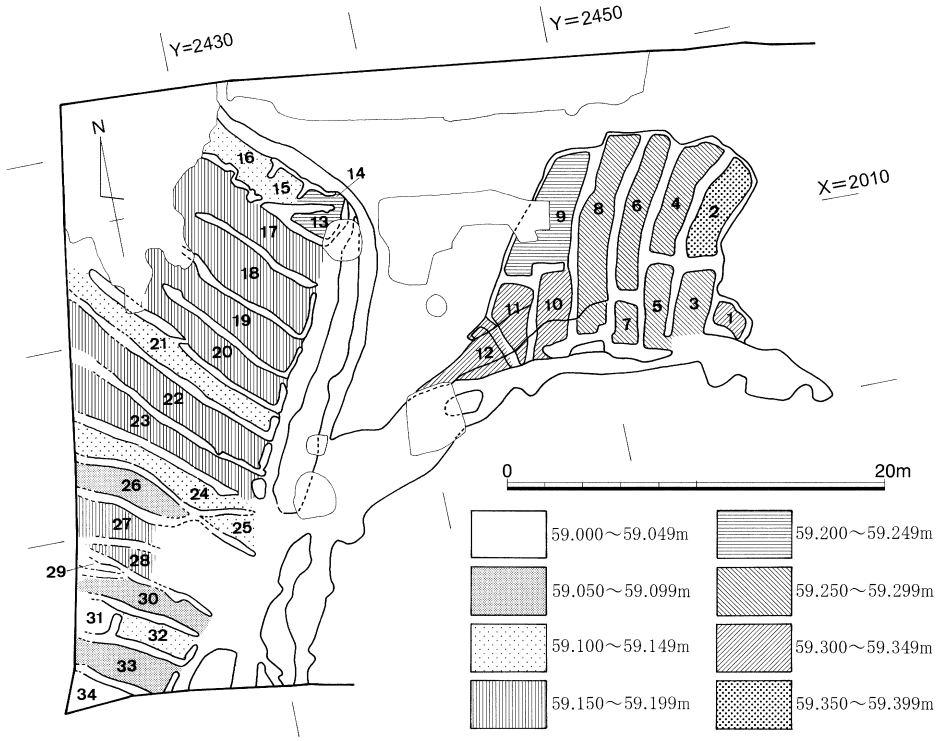


図95　水田面の平均標高　縮尺1/400

表 8　各水田区画の田面平均標高と面積

地区	番号	平均標高(m)	面積(㎡)
東水田	1	59.332	1.994
東水田	2	59.357	8.761
東水田	3	59.293	5.809
東水田	4	59.288	9.385
東水田	5	59.286	5.379
東水田	6	59.266	10.079
東水田	7	59.270	2.665
東水田	8	59.256	16.069
東水田	9	59.221	15.088
東水田	10	59.311	6.342
東水田	11	59.339	5.711
東水田	12	59.343	3.938
東全域		59.297	137.620

地区	番号	平均標高(m)	面積(㎡)
西水田	13	59.228	2.662
西水田	14	59.228	1.455
西水田	15	59.141	3.214
西水田	16	59.141	5.880
西水田	17	59.199	17.976
西水田	18	59.189	16.762
西水田	19	59.162	13.647
西水田	20	59.178	14.562
西水田	21	59.129	14.221
西水田	22	59.157	15.057
西水田	23	59.180	12.648
西水田	24	59.104	11.508
西水田	25	59.104	3.785
西水田	26	59.087	7.318
西水田	27	59.159	8.464
西水田	28	59.159	7.802
西水田	29	59.037	0.733
西水田	30	59.084	7.040
西水田	31	59.048	1.153
西水田	32	59.146	5.366
西水田	33	59.097	7.799
西水田	34	59.022	3.812
西全域		59.135	281.746

備　考
＊面積は畦畔の内法で算出した
＊攪乱によるあきらかな欠落は想定復元した
＊西水田は残存する範囲の面積を表示した

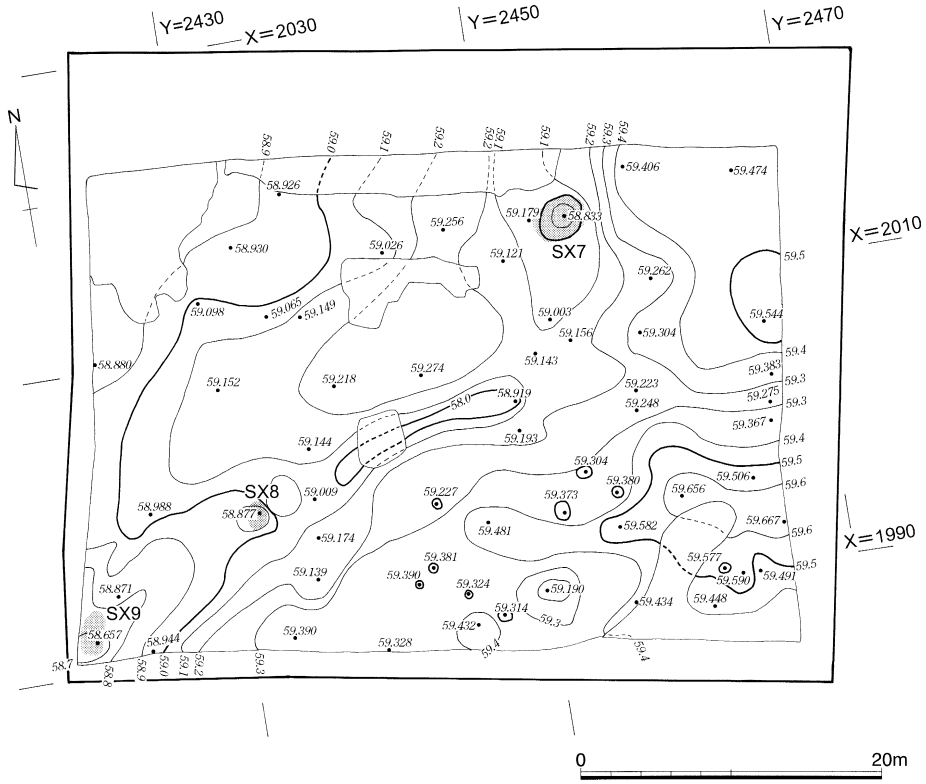


図96　遺物包含層完掘後（白色砂・青灰色砂質土上面）の地形　縮尺1/500

れ，改変の痕跡は確認されなかった。一方西水田では，東側に幅１ｍ比高差10㎝あまりの土堤を設けるとともに，幅60㎝程度の浅い流路ＳＲ５を東～北方にめぐらし，明らかに西側からの流水の管理調節をはかっている（図版33－３）。ＳＲ５は，一定方向に流れるものではなく，中央付近から南北の双方へ下るようになっており，東水田より平坦さの度合いの強い西水田に，広範に水をまくばるための配慮を読みとることができる。こうした東・西両水田の異なるありようは，それぞれの立地する微地形への対応といえる。両水田が一連のものとして同時に機能していた可能性を十分に示す状況といえる。

遺物出土状況（図96・97）　黄色砂より下層の，黄灰色シルト質土（第１層），暗灰褐色砂質土（第２層），黄褐色砂質土（第３層）等からは総計4996点の遺物をとりあげた。水田範囲の内外を問わず層中に万遍なく遺物片が包含される状況が，全域に及んでおり，水田と関連づけられる出土状況にはない。また，細別した層位は，全域で面的に安定したものではなく，特定層に遺物が集中する状況もない。層位間での接合は多数みられる。これ

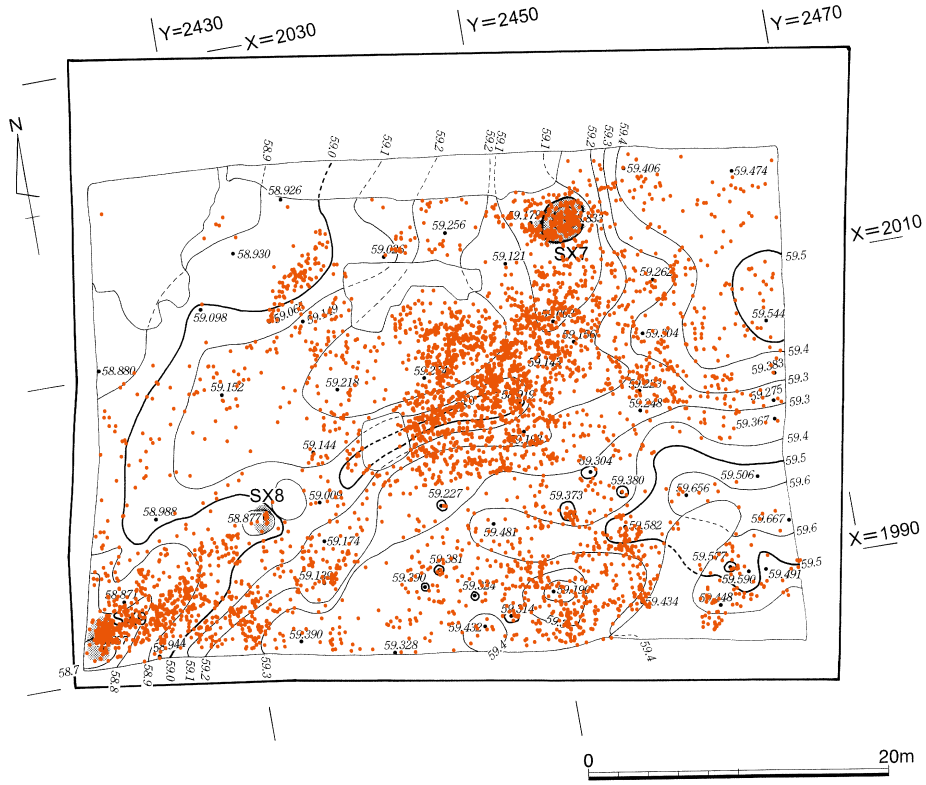


図97　遺物の出土傾向（赤色のドット１つが遺物１点を表す）　縮尺1/500

ら遺物包含層掘り下げ後の白色砂（調査区南半では青灰色砂質土）上面の地形を図96に，また遺物の出土傾向をそれに重ねて図97に示した。出土密度の高い範囲が，調査区を東北東－西南西方向にはしる。これは，ＳＲ４およびそれに先行して存在する谷状の地形部分におおむね相当しており，地層の堆積時に，自然の営為によってある程度は低い部分に集められた可能性が高い。ただし，密度の高い範囲は，そのなかでも谷状部の北側に一定程度偏っている。土器の磨耗もほとんどみられないことにも考慮するならば，廃棄はごく近傍で為されたもので，谷状部の北側一帯でとくに多く為されたもの，と判断される。

なお，互いに接合する大きな土器片を含む遺物集中地点が３カ所あり，それぞれＳＸ７～ＳＸ９とした（図版34－４・５）。ＳＸ７は，東水田の北縁部一帯で，大型の２条突帯深鉢（Ⅱ38）や特殊な沈線文土器（Ⅱ37）をはじめ，Ⅱ31・Ⅱ57・Ⅱ81・Ⅱ131・Ⅱ217・Ⅱ233などがまとまって出土した。ＳＸ８は，突帯のめぐらない粗製深鉢の胴部破片がまとまっていた。ＳＸ９は，頸部に沈線文をもつ大型壺Ⅱ39の胴部破片がまとまっていた。

⑵ 土器・土製品（図版35～41，図98～106，表９）

既述のように，細別した層位は，遺物の整理に有効な指標とはしがたいので，黄色砂より下層出土の土器・土製品としてまとめて，おおむね時代順に示す。便宜的に突帯文土器はすべて縄文晩期，遠賀川式土器を弥生前期として扱う。口縁部や有文の胴部破片はできるだけ呈示したが，すべてではない。種類別の内訳は表９を参照されたい。なお，いわゆる生駒西麓産とされる角閃石を多量に含む異質な胎土の土器は，断面表示を梨地とした。これらにも，暗茶褐色と暗赤褐色の２種の色調が認められる。

縄文後期の土器（Ⅱ１～Ⅱ９）　晩期末の遺物に混じって，ごく少量の出土がある。おもに後期初頭～前葉に属する中津式から北白川上層式１期ごろまでの諸型式に比定される。例外はⅡ９で，後期末宮滝式，ないし晩期前葉に下る可能性もある。横走する凹線が施された胴部片で，暗茶褐色を呈する。南方50ｍの208地点でも微量出土している。

縄文晩期の土器（Ⅱ10～Ⅱ164）　晩期末の突帯文土器が大多数を占めるなかに，晩期中葉にさかのぼるものが少量ある。まず底部以外をとりあげる。

Ⅱ10～Ⅱ16・Ⅱ20～Ⅱ23は，素縁の口縁部。口唇部は，Ⅱ11が篦刻み，Ⅱ21が面取りする以外は，丸く収める。Ⅱ10～Ⅱ12・Ⅱ20・Ⅱ22は，外面を撫でや篦削りで仕上げ，外に開き気味の口縁部で，晩期中葉篠原式の粗製深鉢だろう。口縁を短く外折させるⅡ23も，その可能性が高い。一方，砲弾形の器形で下から上に軽く削り上げるⅡ21は，晩期末の長原式に下るものだろう。Ⅱ13～Ⅱ15は内彎気味の，Ⅱ16は短く外反気味の，それぞれ浅鉢口縁部とみられる。Ⅱ17～Ⅱ19は，浅鉢の屈曲する胴部とみられ，Ⅱ16のような口縁部に対応するものだろう。Ⅱ16～Ⅱ19は比較的精良な胎土で器表面を平滑に仕上げている。

Ⅱ24～Ⅱ35・Ⅱ38・Ⅱ40～Ⅱ112は突帯文で飾る口縁部。多くは深鉢だが，Ⅱ26・Ⅱ33

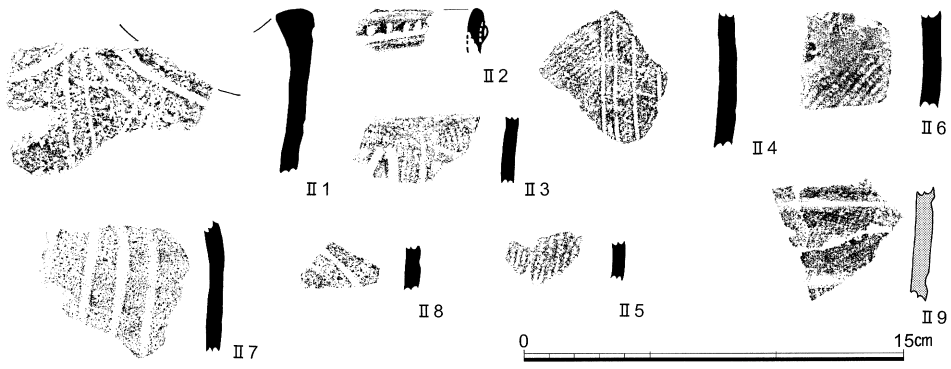


図98　縄文後期の土器　縮尺1/3

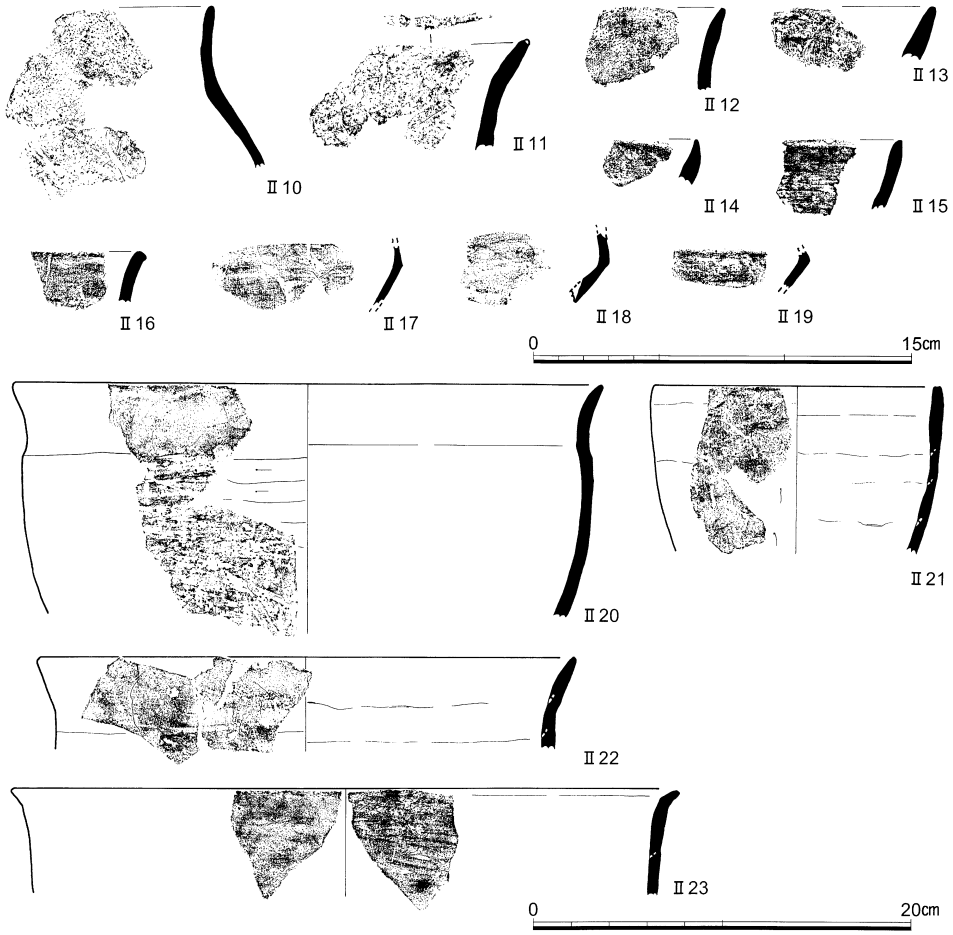


図99　縄文晩期の土器(1)　縮尺1/3

は，口径と傾きからみて頸部のすぼまる壺状の器形となる可能性がある。口唇部に刻みを施すものはみられず，ほとんどが丸く収めて仕上げ，面取りするものはわずかである。また突帯貼り付け位置は，ほぼ8割が端部に接している（表9参照）。突帯上の装飾は，無刻（Ⅱ24・Ⅱ40～Ⅱ52），V字状刻み（Ⅱ25・Ⅱ38・Ⅱ53～Ⅱ74），D字状刻み（Ⅱ26～Ⅱ30・Ⅱ75～Ⅱ103），O字状押捺（Ⅱ31～Ⅱ35・Ⅱ104～Ⅱ112）の大別4通りがあり，O字状押捺が他の3種に比べ若干少ない。胴部まで遺存して確実に1条突帯文深鉢と認定できるのはⅡ31，2条突帯文深鉢はⅡ29･Ⅱ38のみにとどまる。突帯のありようで特異なものとして，刻目突帯を2帯並行してめぐらせるⅡ32･Ⅱ38がある。同種の例は北部構内の234地点（ＢＦ34区）で出土している〔千葉1998　Ⅰ43〕。Ⅱ38は口径30㎝を越える大型品で，

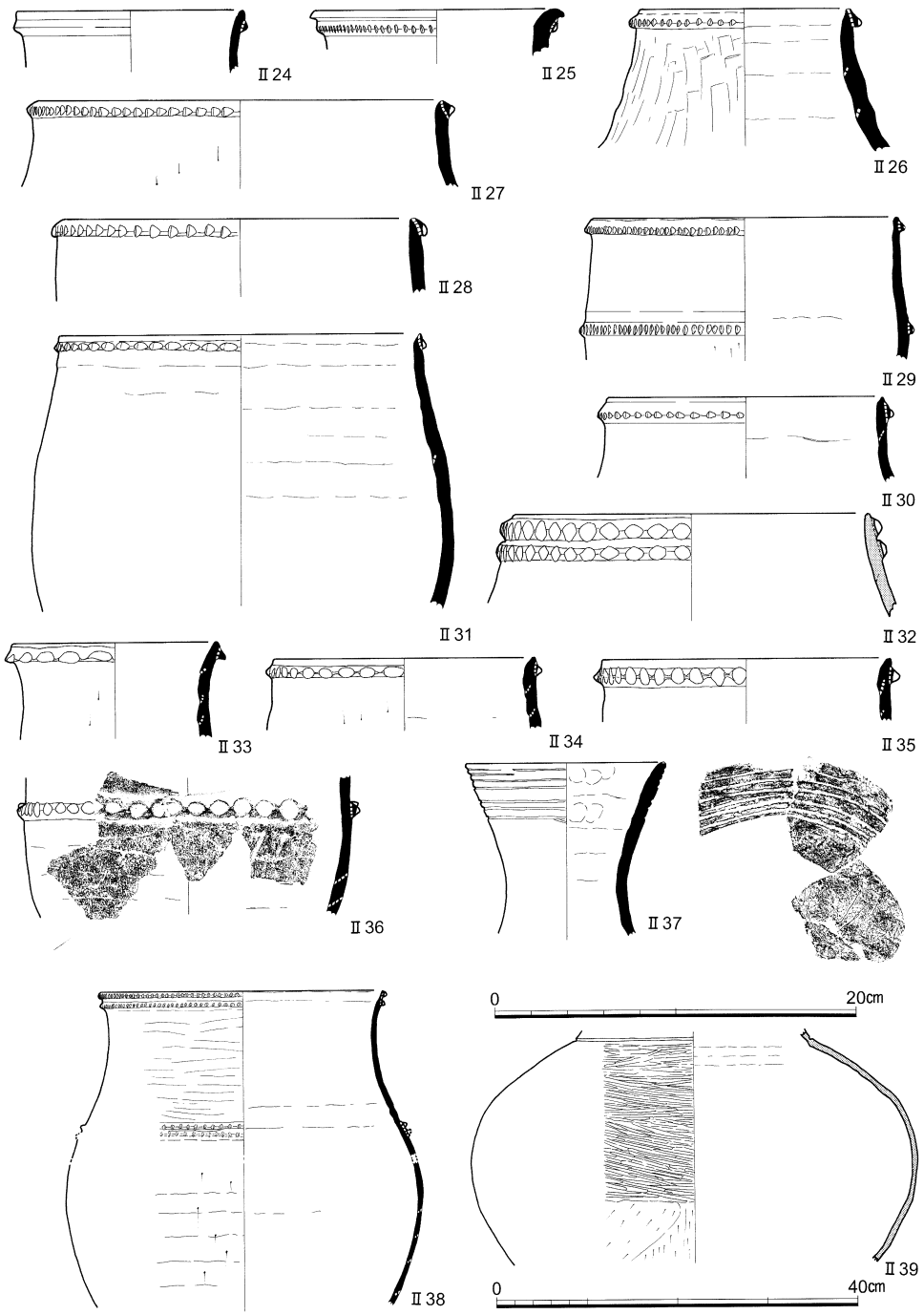


図100　縄文晩期の土器⑵　Ⅱ24～Ⅱ37縮尺1/4，Ⅱ38・Ⅱ39縮尺1/8

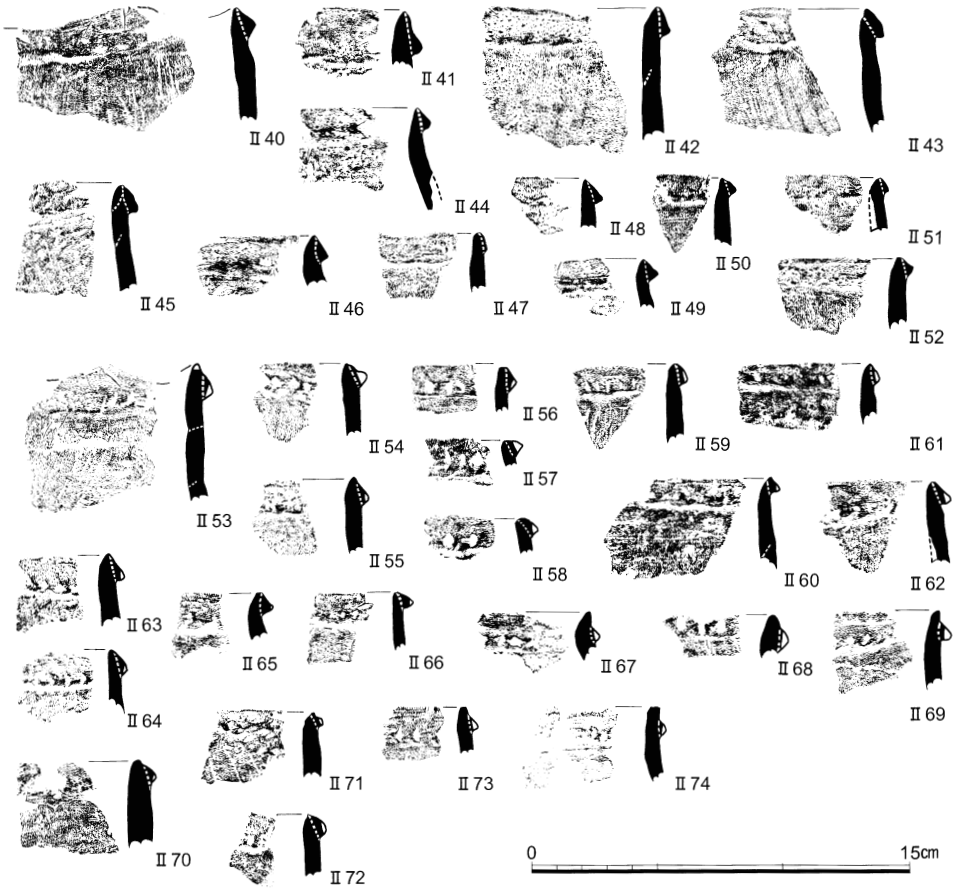


図101　縄文晩期の土器⑶　縮尺1/3

胴部突帯は剝離しているが，幅広い剝離痕と脱落した突帯の破片から，口縁部と同種の突帯がめぐっていることがわかる。このほか，口縁端部からの垂れ下がりようの著しい突帯があり，仮に垂下三角（Ⅱ41・Ⅱ62・Ⅱ63・Ⅱ78・Ⅱ79・Ⅱ81・Ⅱ83・Ⅱ85），垂下偏平（Ⅱ75～Ⅱ77・Ⅱ80・Ⅱ84）としておく。いずれも，突帯上に貼付時の指頭圧痕がよく観察されるが，後者の一群は幅広い突帯が造出され，細かなD字状刻みであることが共通する。器形では，Ⅱ40・Ⅱ53に波状口縁の特徴がみとめられ，Ⅱ53は，波頂部にも上面から刻みを施している。

Ⅱ37は，特殊土器。径７㎝程度の細くくびれた部分から直線的に外方に立ち上がる器形で，全形は不詳。あるいは細頸壺状の器形か。端部は丸く収め，篦描沈線６条（一部７条）が施される。内面は，外面の施文に対応する部位を中心に指頭圧痕の凹凸が著しい。大粒

図102　縄文晩期の土器⑷　縮尺1/3

の石英砂粒を多量に含む胎土で，内外面は赤褐色，断面は黒色を呈する。遠賀川式土器とは特徴・質感ともに異なる。土器集中部ＳＸ７からⅡ38などとともに出土しており，同時期の所産とみられるが，類例を知らない。

Ⅱ39は，ＳＸ９で一括出土した胴部の最大径が50㎝程度に達する大型壺の胴部。破片は多数あり，接合後の胴部上半はほぼ完存するが，下半はごく一部のみしか復元できない。頸部との境の屈曲部に，先の丸い棒状具により真横から施したと想定される幅３㎜ほどの太い沈線が１条めぐる。下半を下から上へ削り，上半を横位に粗く篦磨きして仕上げる。角閃石を多量に含む胎土で，暗茶褐色を呈し，いわゆる「生駒西麓産」と呼ばれる特徴を示す。縄文晩期末の大型壺の類例は北部構内の180地点（ＢＤ33区）にあり，胎土は共通しているが，沈線を施さず，外面の調整も細部が異なる〔浜崎・千葉1990　Ⅲ61〕。

図103　縄文晩期の土器(5)　縮尺1/3

Ⅱ36・Ⅱ113～Ⅱ164は突帯文で飾る胴部。突帯上の装飾は，口縁部と同様に，無刻（Ⅱ113～Ⅱ120），Ｖ字状刻み（Ⅱ121～Ⅱ132），Ｄ字状刻み（Ⅱ133～Ⅱ154），Ｏ字状押捺（Ⅱ155～Ⅱ164）の大別４通りがある。ここでは無刻のものが他の３種に比べて若干少ない。突帯の形状は，口縁部と同様に垂れ下がる特徴をもつものが垂下三角（Ⅱ121～Ⅱ126・Ⅱ135～Ⅱ140）および垂下偏平（Ⅱ134）として区別されるが，後者のように偏平化したものは１点にとどまっている。外面の調整は，Ⅱ38のように，胴部の突帯以下を縦位方向の削り，それより上部は横位や縦位に板状工具で撫でて平滑にするのが基本となっている。

なお，突帯を有する胴部の破片は，基本的に２条突帯文深鉢の胴部とみなしてよい。これら胴部突帯の出土点数は，口縁部突帯の出土点数とほぼ等しいので，１条突帯文深鉢と２条突帯文深鉢の比率は，それほど違わなかったものと推察される。ただし，無刻の突帯や垂下偏平の形態的特徴を示すものは，明らかに胴部破片での比率が低く，１条突帯文深鉢に偏る属性といえる（表９）。

弥生前期の土器（Ⅱ165～Ⅱ194）　いわゆる遠賀川式土器あるいはそれと強い関連を有する土器をまとめて示す。無文の小破片で帰属の曖昧なものを極力含めても，出土総量の２％あまり，文様などから限定できるものはさらにその半数の１％程度しかない。

Ⅱ165～Ⅱ185は壺形土器の口縁部～胴部。装飾は５条までの箆描沈線文を中心とするが，Ⅱ182・Ⅱ183には貼付突帯の剝離痕と下書の沈線がある。Ⅱ169は頸部とみられるが，横位の多条沈線の下を斜方向の沈線で埋める特異なもの。Ⅱ170～Ⅱ172･Ⅱ175は胴部上半で，沈線で施文しない側を箆磨きでわずかに低めて段差を造り出す。Ⅱ177は斜方向の弧線が浅い沈線で描かれており，斜軸木葉文のモチーフの一部分と思われる。Ⅱ178の小破片もその種のモチーフの可能性がある。Ⅱ181は，横位の沈線文の上に，2条の連弧文風のモチーフを組み合わせている。Ⅱ184は，無頸壺の口縁部かとみられ，端部に沿って箆描沈線と刻目突帯を並行させる。Ⅱ185はまっすぐ立ち上がる口縁部片。甕の可能性もある。端面を刻み，斜方向の沈線文と端部に沿う１条の箆描沈線文という特異な構成である。

Ⅱ186は笠形を呈する壺用の蓋。全面を丁寧に磨いている。

Ⅱ187～Ⅱ194は甕。Ⅱ187は，口縁端部が玉縁状に肥厚し，その上端部に上から細かなＤ字状刻みを施す。頸部はちょうど施文部で破損しており，沈線文の存在は確実だが詳細は不明。胎土中には細かな雲母片を含み，暗赤褐色を呈する。これは，明らかにⅡ188以下と特徴を違えており，伊勢湾地方西岸部から尾張地域北部にかけて分布して「亜流遠賀川式土器」と呼ばれる土器群の特徴といえる〔鈴木1990〕。本例も，当該地域からの搬入品で

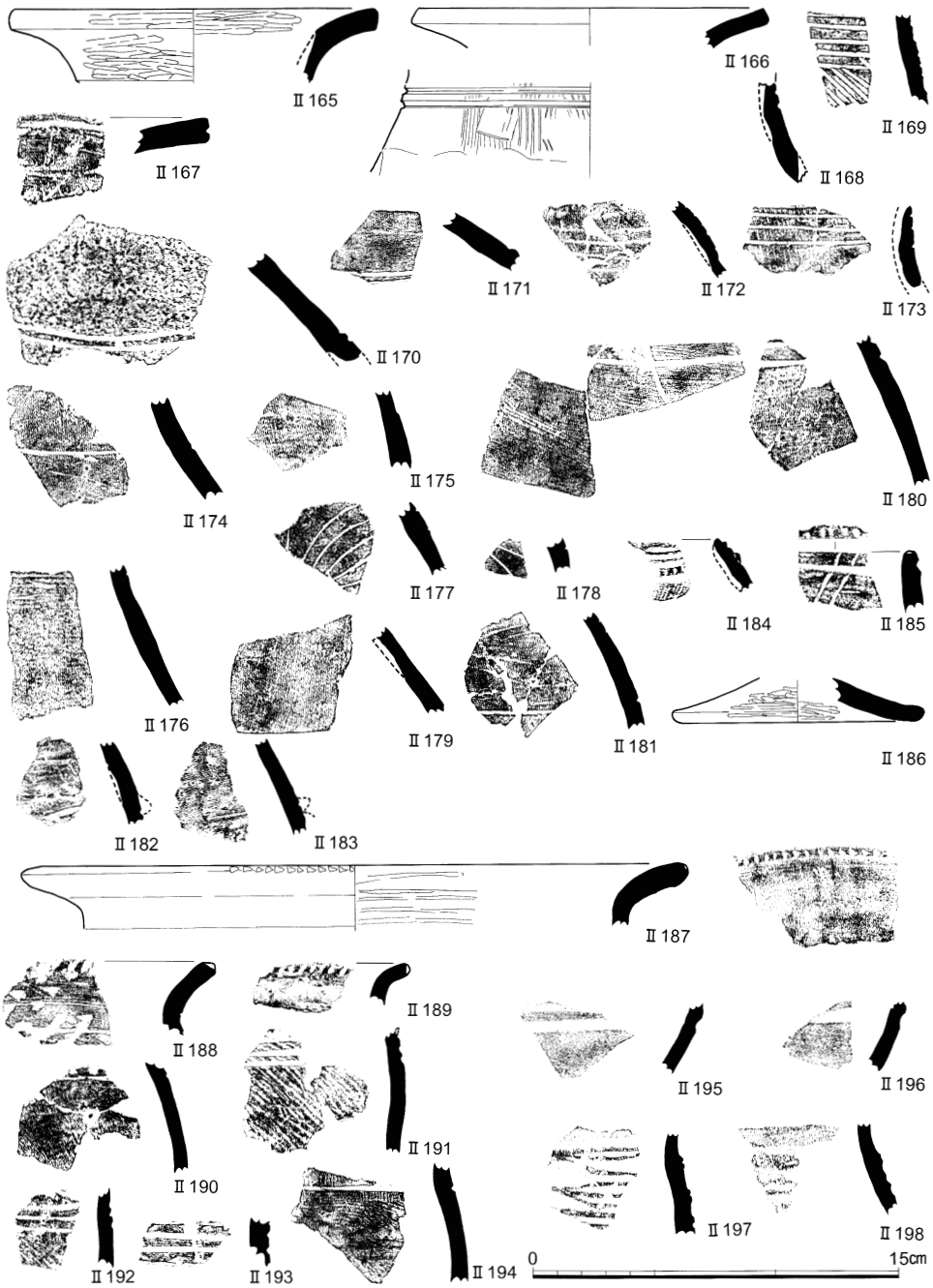


図104　弥生前期の土器（Ⅱ165～Ⅱ194），浮線文土器（Ⅱ195～Ⅱ198）　縮尺1/3

あろう。Ⅱ188・Ⅱ189の口縁部は，端面を正面から大きくＶ字状に刻んでおり，大粒の石英砂流を含む胎土で淡黄褐色を呈する。Ⅱ190～Ⅱ194は，頸部～胴部の破片で，頸部には１～４条の沈線文がめぐる。外面は刷毛目調整する。

浮線文土器（Ⅱ195～Ⅱ198）　中部高地地方をおもな分布範囲とし，浮き彫り風に造り出した線により装飾して浮線文（系）土器と呼ばれる特徴をもつものが４点確認された。趣の異なる２種に分けられる。Ⅱ195・Ⅱ196は，ともに鉢状の器形の胴部片とみられ，幅５㎜ほどの横位の凹線部と隆線部がのこる。内外面とも横位の篦磨きを基調として器表面を平滑に整える。微小な石英砂粒や雲母片を含むが精良な胎土で，内面は黒褐色，外面は淡褐色を呈する。一方，Ⅱ197・Ⅱ198は，精良さがやや劣るもので，壺状の器形の肩部付近かとみられる。Ⅱ198は器表面が荒れており判然としないが，残りのよいⅡ197によると，破片上端に無文部，その下に，篦磨きにより造り出された細い隆線によって横長のレンズ状や三叉状のモチーフを施している。内面はやや粗雑な撫で仕上げで，凹凸がある。微少な石英砂粒を多く含む胎土で，暗灰褐色を呈する。文様モチーフは石川日出志氏の分類のａ２類に相当するとみられ〔石川1985〕，氏の第２群土器，浮線文第２期の離山式に並行する時期の資料と位置づけられる。なお，4点は互いに離れて出土しているが，類似するⅡ195・Ⅱ196とⅡ197・Ⅱ198はそれぞれ同一個体である可能性もある。

底　　部（Ⅱ199～Ⅱ233）　縄文晩期か弥生前期か判別できない小片も多い。おおむね底径の小さな順に，各時期の底部をまとめて示した。Ⅱ199～Ⅱ201のように，径４㎝程度の突出気味の例は，確実に縄文晩期後葉といえる。Ⅱ202は，厚みを持たない底部で，晩期中葉にさかのぼる可能性がある。このほか呈示したなかでは，形態的特徴と外面の磨きや撫で調整の丁寧さから，Ⅱ206・Ⅱ210・Ⅱ217・Ⅱ231・Ⅱ232は弥生前期の遠賀川式土器の可能性が高いと判断している。それ以外はほとんど縄文晩期後葉の所産とおもわれ，とくに径の小さなものを中心に，内面側が円盤状に剝離している事例が多くみられる点が注意される。遠賀川式土器にはみられない現象であり，製作技法の違いを反映しているのだろう。Ⅱ233は，縦位の粗い条痕調整がみられる底部付近の破片である。

環状土製品（Ⅱ234～Ⅱ238）　径1.0～1.5㎝程度の丸い棒状製品の断片が５点出土している。いずれも弧を描くような形状とみられるので，仮に環状土製品としておく。Ⅱ234はいわゆる生駒西麓産の胎土による製品で，暗茶褐色を呈する。Ⅱ236は赤褐色，Ⅱ235・Ⅱ237・Ⅱ238は外表面が灰白色で内側が黒色を呈する。Ⅱ237とⅡ238は特徴が類似しており同一個体の可能性もある。類似する土製品は，約１㎞南方の吉田近衛町における

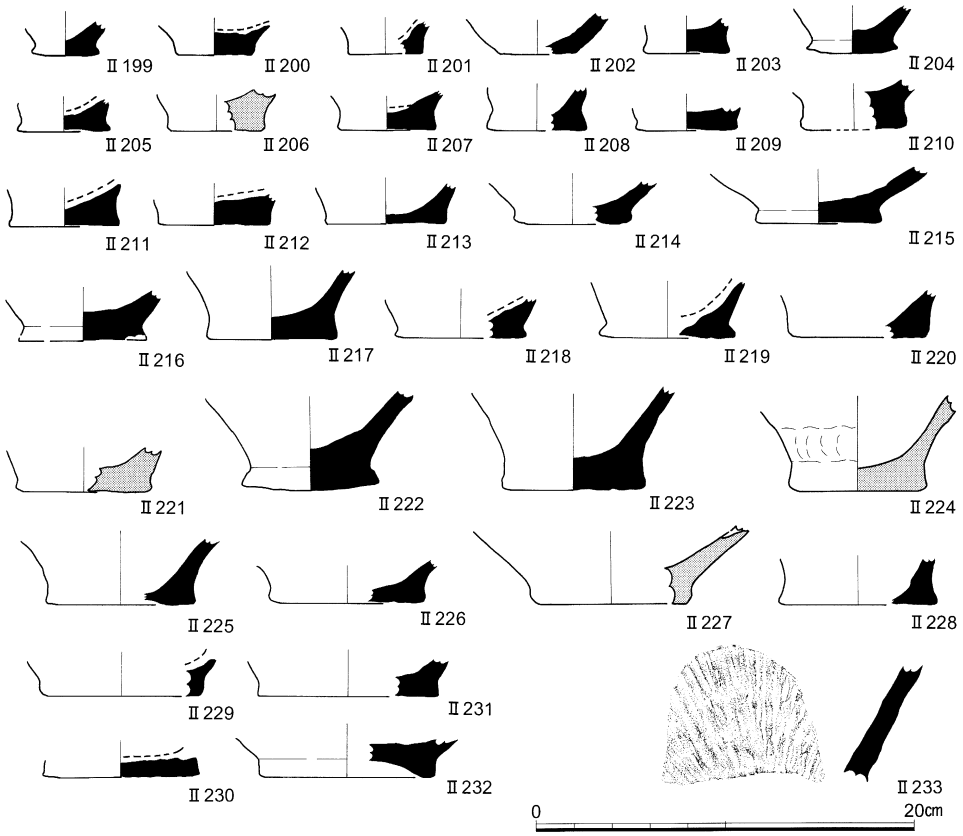


図105　縄文晩期・弥生前期土器の底部　縮尺1/4

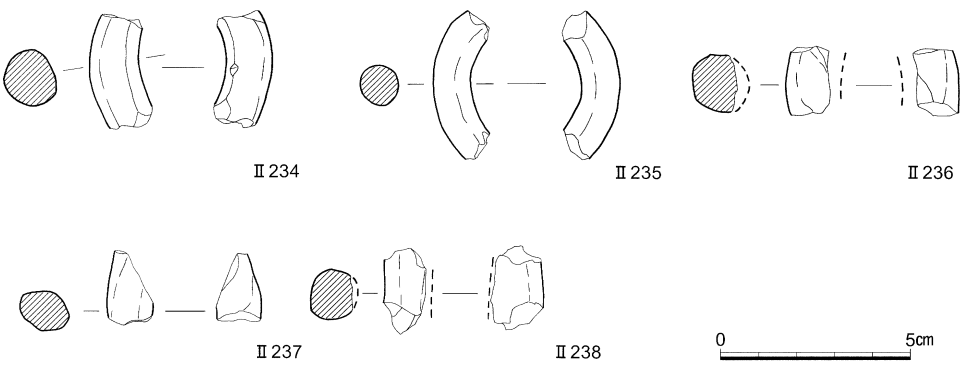


図106　環状土製品　縮尺1/2

調査で出土している〔南編1989　第93図〕。

出土土器の編年的位置（表９）　以上の土器は，微量の後期以前の資料を除くと，縄文晩期～弥生前期の複数土器型式を含み，単一時期の所産ではない。うち，少量の素縁の深鉢と浅鉢の一部は，おおむね晩期中葉の篠原式に比定される。主体を占める突帯文深鉢は，口唇部を刻むものがまったくないこと，また面取りするものもわずかであること，突帯は口縁端部に接して貼り付けられるものが主体となること，２条突帯文深鉢が多数と想定されること，などから，滋賀里Ⅳ式に比定されるものを欠き，船橋式と長原式の双方で構成されるといえる。そのなかで，著しく垂下した突帯に細かな刻目を施す一群は，より新相に位置づけられよう。一方で，おおぶりのＤ字状刻みやＯ字状押捺をしっかりと施す事例は，どちらかと言えば古相の特徴を示すといえよう。これらのいずれかに偏る構成ではないので，船橋式・長原式の時間幅での継続的な活動の反映ととらえるべきであろう。

少量みられた遠賀川式土器には，中段階と新段階の双方が含まれる。そして，沈線文の多条化の度合いが乏しく，貼付突帯も多条化したものが見られないことから，新段階でも前半期までにとどまるものと評価する。

表９　型式別出土点数

突帯文土器口縁部

端部／突帯位置	端部接	端部離	計
面取有	2	4	6
面取無	119	27	146
計	121	31	152

無突帯（素縁）口縁部

端部／装飾	有刻	無刻	計
面取有	1	1	2
面取無	0	16	16
計	1	17	18

口縁部突帯の特徴

形状／刻み	D字	V字	O字	無刻	不明	計
三　角	37	30	18	33	21	139
垂下扁平	5	0	0	0	0	5
垂下三角	5	2	0	1	0	8
計	47	32	18	34	21	152

胴部突帯の特徴

形状／刻み	D字	V字	O字	無刻	不明	計
三　角	30	39	26	12	27	134
垂下扁平	1	0	0	0	0	1
垂下三角	8	6	0	0	0	14
計	39	45	26	12	27	149

弥生土器の内訳

種　類	点数
壺口縁部片	6
壺有文胴部片	22
無頸壺	2
甕口縁	6
甕有文頸部片	8
計	44

その他の土器等

種　類	点数
浮線文	4
縄文後期以前	12
各期底部	58

⑶ 石　　器（図版42・43，図107～110，表10～13）

層厚が平均して20㎝程度の縄文晩期中葉から弥生前期末までの遺物包含層（黄灰色・暗灰褐色シルト質土）から出土した。現地調査は，約20名の作業員（発掘経験者）による手ガリや手スコを用いた人力発掘であり，土壌洗浄などは一切していないので，回収できた石器は現地で肉眼で石器と認識されたもののみで，微細剥片は回収し損ねていると思われる。出土石器については，そのほとんどが出土地点を記録されている（表10）。しかし出土層は，シルト質土であるとはいえ，あまり土壌化の進んでいないことと，水田に供するほどに水の影響を無視できない環境であることから，礫石器は容易には原位置を損なわないと考えられるものの，剥片石器は原位置を保っていないものが多いと思われる。また，遺物の原位置取り上げ時には人工的に４層に区分して層位を記録したが，東西両方の水田域でも微高地でも，土器型式・石器製作技法という点では層位的な差異はうかがえない。そこで，この層から出土した石器全体を，時間的にひとまとまりの石器群とみなして検討する。なお，出土石器の多くに対し，器面観察に効果的な，超音波洗浄を行った。

出土した石器は，剥片剥離による石器68点（剥片を含む），礫石器７点であり，それぞれ１点ずつを除いて原位置が記録されている。剥片剥離による石器の石材は，チャート２点と粘板岩３点の他はすべてサヌカイトであるが，肉眼で見る限りサヌカイトにも何種類かあり，白味がかったものや，１㎜ほどの白い斑点を多く含むものなどがある。細部調整の施された剥片石器では，未製品や破損品を含め石鏃が８点（チャート製１点）のほかに，刃器５点（粘板岩製２点）と錐２点がある。また，いわゆる楔形石核が８点はある。刃器と錐については，高倍率顕微鏡によって使用痕観察を試みたが，錐１点に磨滅痕が認められた他は，線状痕や光沢などの明瞭な使用痕を確認できなかった。68点の剥片石器のうち，叩き潰したような線状打面で主剥離面の縦断面形が直線的になったり，打点が残っていなくても打点付近に階段状の細かい剥離が多数認められたり，縦長の先行剥離面がヒンジを生じていたりするような，挟み撃ちがおこなわれたと思われるものは38点はある（56％）。しかし，チャートや粘板岩の剥片石器には，そうした挟み撃ちの痕跡を積極的には見出しがたいので，63点あるサヌカイトだけで見るとその割合は60％（38/63）を超える。

剥片石器の特徴を，製作技術的観点から把握しようとする場合，製品は一点からでも多くの情報を引き出せることは無論であるけれども，いろいろな形状の素材から製品の形態を獲得するまでの一連の製作工程においては，一点の製品製作のために多数の剥片が生じている。つまり，剥片は一点ではあまり多くの情報をもちえないけれども，剥片のまとま

表10　原位置取り上げ石器等一覧

取上番号	報告番号	X座標	Y座標	標　高	地点名	層位名	分　類	挟み撃ち
422	Ⅱ251	2009.095	2451.605	59.116	東水田	下 層	楔形石核	○
504	－	2009.015	2457.525	59.195	東水田	最下層	自然石か	×
554	－	2009.046	2452.203	59.126	東水田	最下層	自然石か	×
559	－	2009.241	2459.924	59.261	東微高地	砂 礫	楔　か	○
575	Ⅱ244	2011.697	2449.426	59.173	東水田	上 層	挟み撃ち剝片	○
820	－	2007.203	2447.698	59.343	東水田	上 層	挟み撃ち剝片	○
848	－	2004.109	2451.280	59.213	ＳＲ４	上 層	楔　か	○
903	－	2002.271	2461.284	59.438	東微高地	中 層	挟み撃ち剝片	○
939	－	2015.116	2452.563	59.353	東水田	上 面	楔　か	○
941	－	2013.762	2452.854	59.262	東水田	上 面	挟み撃ち剝片	○
1088	－	2001.488	2451.068	59.228	南微高地	中 層	自然石か	×
1102	Ⅱ267	2004.047	2452.097	59.161	ＳＲ４底面	中 層	チャート石鏃	－
1150	－	2008.679	2446.094	59.270	中央微高地	上 層	挟み撃ち剝片か	○
1177	Ⅱ272	2011.225	2452.135	59.203	東水田	中 層	敲　石	×
1193	Ⅱ258	2008.735	2457.299	59.309	東水田	中 層	刃　器	×
1230	－	2000.143	2444.328	59.348	南微高地	上 層	剝　片	－
1231	－	1999.856	2444.602	59.392	南微高地	上 層	挟み撃ち剝片	○
1335	Ⅱ249	2003.764	2455.062	59.170	ＳＲ４底面	中 層	楔形石核	○
1354	Ⅱ248	2000.027	2442.949	59.302	南微高地	上 層	楔形石核	○
1384	Ⅱ256	2004.040	2455.348	59.219	東水田	中 層	錐	－
1551	Ⅱ260	2012.195	2457.761	59.264	東水田	中 層	石　鏃	－
1552	－	2011.340	2458.267	59.289	東水田	中 層	楔　か	○
1573	Ⅱ250	2008.571	2452.084	59.151	東水田	中 層	楔形石核	○
1657	－	2011.409	2456.773	59.279	東水田	中 層	チャート剝片	×
1688	Ⅱ274	2008.448	2449.369	59.252	東水田	中 層	磨　石	×
1724	－	2002.776	2446.592	59.141	ＳＲ４	中 層	楔　か	○
1864	－	2014.899	2436.014	59.163	西水田	上 層	剝　片	－
1940	－	2005.028	2456.312	59.236	東水田	下 層	自然石か	×
2025	－	2003.429	2443.792	59.075	ＳＲ４	中 層	剝　片	－
2037	－	2004.597	2448.572	59.124	ＳＲ４	中 層	楔　か	○
2042	－	2005.028	2448.606	59.183	東水田	中 層	挟み撃ち剝片	○
2110	－	2003.976	2457.692	59.273	東微高地	下 層	挟み撃ち剝片	○
2134	－	2008.131	2431.257	59.196	西水田	上 層	楔　か	○
2177	Ⅱ265	2004.925	2443.028	59.106	中央微高地	下 層	石　鏃	－
2210	Ⅱ252	2016.211	2455.330	59.210	北微高地	下 層	楔形石核	○
2314	Ⅱ269	2002.160	2430.471	59.193	西水田	上 層	粘板岩刃器	－
2439	Ⅱ255	1992.941	2423.742	59.083	西水田	上 層	錐	○
2445	－	2002.775	2443.686	58.971	ＳＲ４	最下層	剝　片	－
2456	－	2003.622	2430.674	59.191	西水田	中 層	自然石か	×
2605	－	1996.655	2422.727	58.990	西水田	中 層	挟み撃ち剝片か	○
2610	Ⅱ262	1991.219	2427.318	59.216	西南土手	中 層	石　鏃	－
2614	Ⅱ240	1992.369	2428.606	59.038	ＳＲ８	中 層	フリー剝片	×
2624	－	1999.299	2428.976	59.038	西水田	中 層	自然石か	×
2651	Ⅱ263	2015.379	2437.570	59.055	西水田	中 層	石　鏃	－

表10　つづき

取上番号	報告番号	X座標	Y座標	標　高	地点名	層位名	分　類	挟み撃ち
2704	Ⅱ241	1991.739	2425.939	59.092	西南土手	下 層	フリー剝片	×
2708	－	1990.597	2429.232	59.276	土　手	上 層	剝　片	－
2836	－	1991.979	2425.374	59.117	西南土手	下 層	挟み撃ち剝片	○
2837	－	1992.131	2425.869	59.160	西南土手	下 層	挟み撃ち剝片	○
2903	－	1993.007	2427.325	59.118	西南土手	下 層	剝　片	－
3056	Ⅱ253	1993.318	2428.707	59.088	西水田	中 層	楔形石核	○
3057	－	1994.155	2429.437	59.068	西水田	中 層	粘板岩剝片	×
3129	－	2016.796	2449.734	59.345	北微高地	上 層	自然石か	×
3152	－	2009.669	2452.581	59.118	東水田	中 層	剝　片	－
3209	－	1991.527	2423.563	58.966	西水田	下 層	剝　片	－
3214	－	1992.568	2424.141	59.012	西水田	下 層	剝　片	－
3223	Ⅱ247	1994.649	2425.731	58.942	西水田	下 層	楔形石核	○
3247	－	1991.191	2428.941	59.255	土手	中 層	剝　片	－
3311	－	2003.044	2441.207	59.140	ＳＲ４	最下層	挟み撃ち剝片	○
3416	Ⅱ254	1994.476	2422.711	58.898	西水田	最下層	楔形石核	○
3456	－	1997.397	2427.003	58.933	西水田	下 層	楔　か	○
3459	Ⅱ242	1997.825	2427.088	58.913	西水田	下 層	挟み撃ち剝片	○
3496	－	2010.101	2460.742	59.367	東微高地	中 層	挟み撃ち剝片	○
3582	－	1997.161	2437.711	59.260	南微高地	上 層	自然石か	×
3583	－	2010.282	2459.526	59.318	東微高地	中 層	挟み撃ち剝片	○
3617	－	1997.518	2439.099	59.331	南微高地	上 面	刃器か	○
3858	Ⅱ266	1991.494	2446.307	59.602	南微高地	上 層	石　鏃	－
3861	Ⅱ239	1993.374	2446.811	59.513	南微高地	上 層	フリー剝片	×
3884	Ⅱ275	1992.110	2419.331	58.859	ＳＸ９南	最下層	台　石	×
3906	Ⅱ264	1994.696	2447.863	59.538	南微高地	上 層	石　鏃	－
3910	Ⅱ259	1993.568	2447.919	59.488	南微高地	上 層	刃　器	○
3926	Ⅱ268	1992.027	2448.334	59.486	南微高地	中 層	粘板岩刃器	－
3977	－	1999.436	2435.737	59.005	ＳＲ４	最下層	楔　か	○
4013	Ⅱ276	1995.823	2451.715	59.654	南微高地	上 層	台　石	×
4014	Ⅱ273	1995.347	2452.486	59.670	南微高地	上 層	磨　石	×
4084	Ⅱ243	1988.646	2449.342	59.400	南微高地	中 層	挟み撃ち剝片	○
4112	－	1996.087	2451.152	59.468	南微高地	上 層	自然石か	×
4113	Ⅱ271	1995.965	2451.691	59.566	南微高地	上 層	敲　石	×
4117	Ⅱ246	1989.743	2459.685	59.628	南微高地	上 層	石　核	×
4122	Ⅱ257	1988.064	2460.033	59.633	南微高地	上 層	刃　器	○
4180	－	1988.857	2452.080	59.447	南微高地	中 層	自然石か	×
4209	－	1997.020	2453.500	59.499	南微高地	上 層	自然石か	×
4211	－	1997.260	2454.615	59.532	南微高地	上 層	剝　片	－
4259	－	1990.561	2465.851	59.831	南微高地	上 層	剝　片	－
4476	Ⅱ245	1992.957	2455.036	59.469	南微高地	下 層	挟み撃ち剝片	○

取上番号は図110参照。X，Y座標は構内座標。「フリー剝片」はフリーフレイキングによる剝片。挟み撃ち欄の「－」は判断保留のもの。

りを分析すれば，そこで用いられている製作技術について，ある程度の情報を得ることができるし，場合によっては，製品からは見えてこない情報も引き出せるかも知れない。そこで，まず，剥片の種類を把握することにする。剥片石器製作においては，石材の選択が重要であるから，ここではまず，近畿地方中部の剥片石器に主体的な石材であるサヌカイトから記述する。

サヌカイト剥片　32点あり，そのうちで主剥離面がフリーフレイキングによって形成されていると思われるのは３点，挟み撃ちによって形成されていると思われるものは17点，打撃法を推定できないものが14点ある。打撃法を推定できる剥片のうち，代表的なものを図示した。Ⅱ239～Ⅱ241はフリーフレイキングによる剥片。Ⅱ239は表面の50％以上に原面を残し，先行剥離の剥離方向は主剥離のそれと並行する。主剥離の打点は飛んでいるが，バルブの発達が顕著である。基端部に敲打痕が多く認められるが，そうした先行する打撃によって生じたひびなどが，主剥離面のやや歪んだ形状を導いたのだろう。Ⅱ240は，剥片の左縁端部。先行剥離の方向は主剥離のそれに対してやや斜行しているものや直交するものがあり，たびたび打面の転移があったことがわかる。Ⅱ241は，打面も残る完形の剥片で，表面は偏平で，先行剥離は主剥離と直交する剥離方向である。Ⅱ242～Ⅱ245は挟み撃ちによると思われる剥片。Ⅱ242は，先行剥離は３方向からで，うち１方向は主剥離と直交する。最も古い先行剥離面を構成する縁部を線状打面にしている。Ⅱ243は，表面の50％近くに原面をもつ。先行剥離は主剥離と直交する剥離方向でヒンジを生じている。線状打面の打点付近の表面側には先行する階段状剥離が多数みられる。主剥離面のあり方から，この剥片が一度の打撃で剥がれたのではなく，数度の加撃の末に剥がされたことがわかる。Ⅱ244は剥片の基端部で，左右の側縁は垂直割れによって残っていない。原面が20％ほど残る表面の先行剥離の方向は，主剥離と並行する。バルブが明瞭だが線状打面である点と縦断面形から，挟み撃ちによると判断した。そしてそのバルブの存在から，この剥片が生じるときの石核は，例えば，Ⅱ243の剥片が生じるときの石核と同様の大きさだったものと思われる。Ⅱ245は，完形の剥片で，バルブは顕著ではない。表面の階段状剥離に切られる先行剥離の剥離方向は主剥離のそれとおよそ並行している。

サヌカイト石核　Ⅱ246は，もともとはⅡ240のようにフリーフレイキングによる剥片の左縁端部であったものに，剥片剥離が加えられている。刃部を生み出すような角度の緩く深い剥離ではないので石核とみなした。打面調整の途中で利用を断念したのかもしれない。Ⅱ247～Ⅱ254はいわゆる楔形石核（表11）。Ⅱ247は，先行する剥離の方向はいずれも

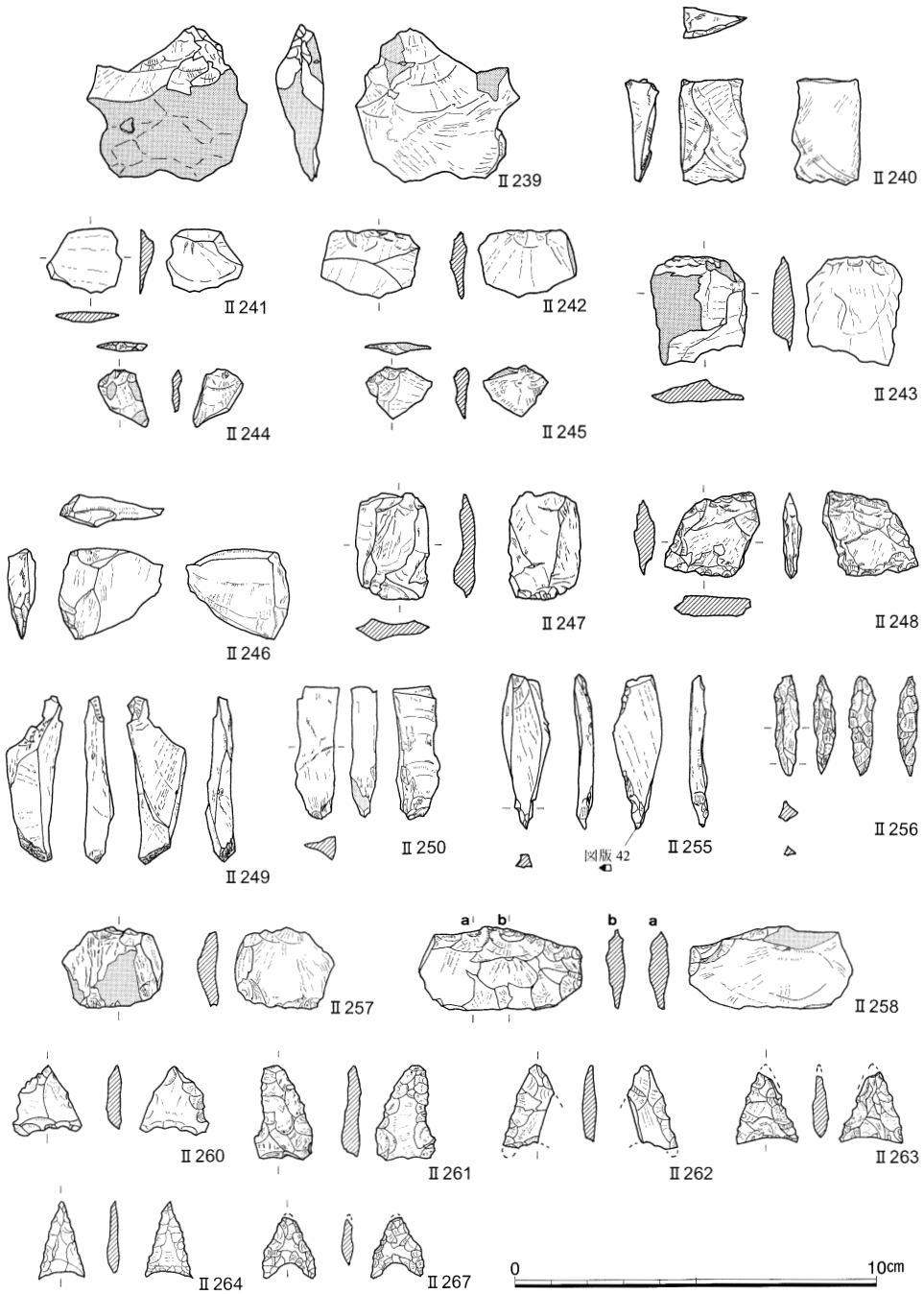


図107　剝片石器（Ⅱ239～Ⅱ243剝片，Ⅱ246～Ⅱ250石核，Ⅱ255・Ⅱ256錐，Ⅱ257・Ⅱ258刃器，Ⅱ260～Ⅱ264・Ⅱ267鏃）　縮尺1/2

表11　楔形石器一覧

番号	長	幅	厚	打面数・部位	打点欠損	垂直割れ	原面	備考	取上番号
Ⅱ247	29	20	6	2（両端）	なし	なし	なし		3223
Ⅱ248	23	27	5	3（両端＋1側縁）	なし	あり	なし		1354
Ⅱ249	45	15	8	1（縁端）	あり	あり	なし		1335
Ⅱ250	37	12	8	1（縁端）	あり	あり	あり	垂直割れ面に原面	1573
Ⅱ251	37	18	7	2（両端）	なし	あり	なし		422
Ⅱ252	27	22	7	2（両端）	なし	なし	なし		2210
Ⅱ253	30	27	9	2（両端）	なし	あり	なし		3056
Ⅱ254	23	19	6	2（両端）	なし	あり	あり	古い垂直割れ面を打面	3416

長、幅、厚の数値は㎜。下線は欠損による残存を示す。 取上番号は図110参照。

表12　石鏃一覧

番号	長	幅	厚	基部形	基部調整	中央断面形	折損	原面	備考	取上番号
Ⅱ260								なし	未製品	1551
Ⅱ261								なし	未製品	なし
Ⅱ262	23	14	3	極凹？	片面	両凸か	片縁･脚端	なし		2610
Ⅱ263	19	17	4	凹	両面	両凸	先端	なし		2651
Ⅱ264	21	13	3	凹	両面	両凸	なし	なし		3906
Ⅱ265	16	15	3	極凹	両面	平凸	脚端	なし		2177
Ⅱ266	19	14	3	凹	両面	菱形	なし	なし		3858
Ⅱ267	16	15	3	極凹	両面	両凸	先端	なし	チャート	1102

長、幅、厚の数値は㎜。下線は欠損による残存を示す。 取上番号欄の「なし」は原位置取り上げをしていないもの。

表13　礫石器一覧

番号	長	幅	厚	重	機能部特徴	機能部位数	破損	備考	取上番号
Ⅱ270	47	52	9	27	剝離と擦切痕	1側辺	なし		なし
Ⅱ271	123	87	55	772	敲打痕	2面＋2側面	なし		4113
Ⅱ272	68	55	47	219	敲打痕	2面＋1端面	面あり	破損後も使用	1177
Ⅱ273	84	102	58	710	研磨痕	2面＋全側面	面あり		4014
Ⅱ274	98	96	42	446	研磨痕	3面	剝離あり		1688
Ⅱ275	196	128	116	2910	敲打痕	1面	面あり		3884
Ⅱ276	182	124	134	4030	敲打痕	1面	なしか		4013

長、幅、厚の数値は㎜。重の数値はｇ。下線は欠損による残存を示す。 取上番号欄の「なし」は原位置取り上げをしていないもの。

平行で，側縁には階段状剥離は認められない。Ⅱ248は垂直割れした楔形石核。側縁にも階段状剥離があるので，垂直割れで失われた対向する側縁との挟み撃ちもおこなわれていたことがわかる。この部位に垂直割れを起こすような打撃があったことから，楔として用いられたのではなくて，意図的に垂直割れになるように割った可能性もあろう。なお，器体の中央付近には夾雑物がある。Ⅱ249･Ⅱ250も垂直割れしている楔形石核。Ⅱ249は，打点は飛んでしまっている。先行剥離の方向は主剥離のそれと平行するが，どちらも器体の長軸におよそ直交している。板状の素材の側縁からあまり遠くないところでの挟み撃ちによって垂直割れを起こしているが，この垂直割れに対向する側縁は切断されている。素材の中心付近でなく側縁端に近い部分を叩いていることと，側縁端そのものは切断されていることから，この楔形石核の形状は意図的に生み出されたものと思われる。すなわち，事故的な垂直割れではなく，意図的に，剥片獲得とは90°異なる方向から加撃して垂直に割った可能性が高い。Ⅱ250は，垂直割れの割れ面に原面があることから，Ⅱ249と同様の意図を読みとることができるが，対向する側縁は欠損していない。打点がないのは飛んでしまったからかも知れないが，器体上面は折断されたようにも思われる。先行剥離の方向は主剥離のそれとおよそ並行し，器体の長軸に並行する。この他，図示していない楔形石核も含めて，線状打面で階段状剥離が認められる石核は８点は出土している。

サヌカイト製品　細部調整が施されて製品とみなせるものは，錐２点，石鏃７点，刃器３点である。Ⅱ255は錐。板状の素材を挟み撃ちで垂直に割ってその垂直割れの対向辺を切断した楔形石核の，先端に細部調整を施して機能部を作出している。細部調整は，四角形の断面の一組の対角部分しか行わない。先行剥離の方向は主剥離のそれとおよそ並行し，器体の長軸とも並行する。使用痕は，高倍率の検鏡で，尖端部に磨滅による平坦面が確認でき（図版43－２），また尖端部付近はその他の部位よりも磨滅による光沢が進んでいるようにも思われた。Ⅱ256は断面三角形の錐で，器体のほぼ全面に細部調整が施されているが，わずかに原面も残っている。使用痕は確認できなかったが，形状から錐と判断した。主剥離と先行剥離とは剥離方向がおよそ並行している。尖頭でありながらやや湾曲している形状が，主剥離の面影を残しているとすれば，Ⅱ239のような表皮剝ぎ取りのフリーフレイキングによる剥片を素材にしていた可能性がある。細部調整の剥離面を見てみると，陰瘤痕のようなネガ部やフィッシャーが明瞭な剥離だけでなく，打点が点としては確認できずにリングが発達している剥離もあるので，押圧剥離も併用されていると思われる。Ⅱ257は細部調整がわずかに認められる剥片石器。表面側に表面積の30％程度の原面

をもつ，挟み撃ちによると思われる剝片を素材にしている。表面と主剝離面の両面に縁端側から角度の緩い細部調整を数箇所施しているので，Ⅱ243のような剝片とは区別し製品と判断した。刃器の刃部再調整の可能性もあるが，使用痕は確認できず，また，大きな原面を残していることから，石鏃などの未製品の可能性もある。Ⅱ258は，口唇状打面を加撃したと思われる横長剝片を素材にした刃器。主剝離に先行する剝離は，主剝離と並行する剝離方向である。基端部と左側縁に刃潰し状の階段状剝離が施されている。表面中央部には，明瞭な打点をもつ剝離面が認められることから，パンチによる間接打撃が行われたと考えられる。また，その剝離によって刃部側からの剝離が切られているものがあるので，もともとは障害でなかった基端付近の凸部が刃部再生によって器体中央部付近の凸部として障害になり，それが取り除かれたのかもしれない。ただし，刃部だけでなく器体中央付近にも，線状痕も磨滅痕跡も認められなかった。Ⅱ259は，垂直割れした楔形石核のその対向する側縁に，角度が緩く浅い連続する細部調整が認められるので，刃器と判断したが，使用痕は認められなかった。Ⅱ260～Ⅱ266は石鏃で（表12），打点や剝離面の形状から推察すると，押圧剝離と間接打撃とを組み合わせて用いているようである。Ⅱ260は石鏃の未製品。主剝離面側には細部調整が少なく，主剝離面を広く残す側縁部があることから未製品と判断した。主剝離面が非常に平坦なので，挟み撃ちによる剝片を素材にした可能性もある。先行剝離は主剝離と直交する剝離方向である。Ⅱ261も石鏃の未製品。表面に残る凸状の隆起部があることと非対称形の形状から，未製品と判断した。先行剝離の方向は主剝離のそれと直交する。基部には表面側の中央部にのみ，細部調整の剝離がある。表面中央の凸部を取り除けずに製作を断念したものと思われる。Ⅱ262は，先行剝離は主剝離と並行する剝離方向である。基部の細部調整は表面側のみであるが，形状から製品と判断した。しかし，これ以外の石鏃の製品は，基部の細部調整剝離は両面から行われている。Ⅱ263とⅡ264は凹基の石鏃。剝離面の磨滅が進んでいるⅡ264は，幅狭である。この他，図示していない石鏃もふくめて，基部はすべて凹基ないし極凹基である。

その他の剝片石器　サヌカイト以外の石器では，チャートの石鏃と剝片各１点，粘板岩の刃器２点と剝片１点が回収されている。Ⅱ267はチャート製の極凹基の石鏃。細部調整はサヌカイトの石鏃よりもやや浅く急角度にみえる。Ⅱ268･269は粘板岩製の刃器だが，どちらも明瞭な使用痕は確認できない。Ⅱ268は横長剝片を素材にしているが，主剝離面のフィッシャーが複数箇所に収斂しており，一度の打撃では剝がれなかったことがわかる。先行剝離の方向は主剝離と直交する。側縁と刃部対向辺に刃潰し状の細部調整が施さ

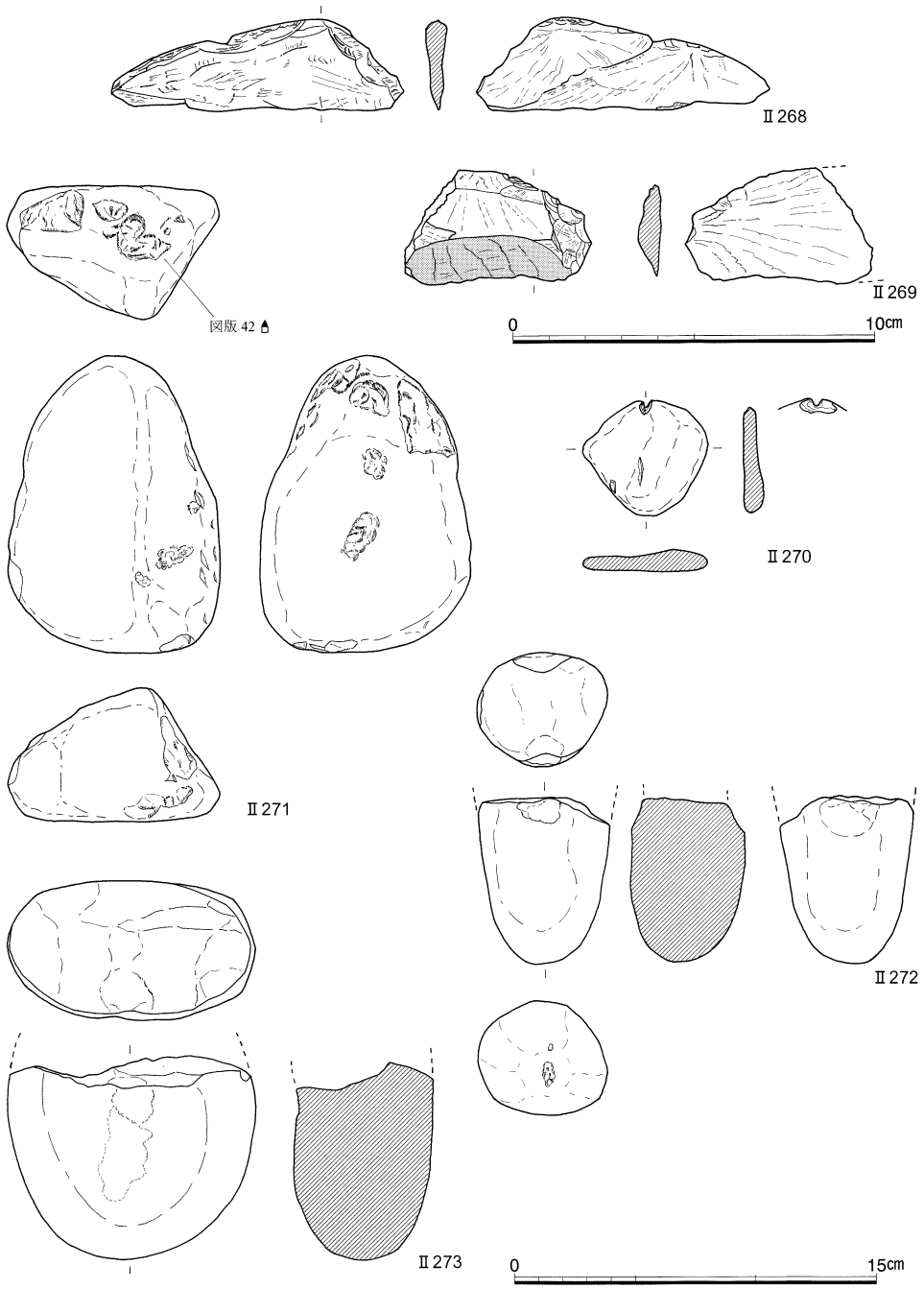


図108　剝片石器と礫石器（Ⅱ268・Ⅱ269刃器，Ⅱ270石錘，Ⅱ271・Ⅱ272敲石，Ⅱ273礫石器）
Ⅱ268・Ⅱ269縮尺1/2，Ⅱ270～Ⅱ273縮尺1/3

れる。Ⅱ269は，縦長剥片の一側縁である原面を刃部にしている。表面の側縁および刃部対向辺に刃潰し状の細部調整が施される。先行剥離は主剥離と直交する剥離方向である。

剥片石器の特徴　剥片剥離による石器について，サヌカイトを中心に考えてみる。まず，もともとの素材については，フリーフレイキングによる大型の剥片が少ないこと，挟み撃ちによる剥片が圧倒的に多いこと，原面をとどめている剥片が一定量あることから，せいぜい拳大くらいの大きさのものが多かったと思われる。ただ，その程度の大きさにもかかわらず，製品で原面をもつのはⅡ256の錐と石鏃未製品の可能性もあるⅡ257の２点だけである点や，Ⅱ239のように原面の占める割合の高い大型の剥片がある点から，原面を意図的に排除する傾向があったことはうかがえる。また，剥片と製品とを問わず，そしてフリーフレイキングと挟み撃ちとを問わず，打面の転移が頻繁におこなわれているようである。こぶりの刃器や錐や石鏃のような製品の場合は，志向する機能部ないし機能形態を生み出すまでに，定型的な剥片剥離技術ないし技法がなくても充分に対応できるからであろう。すなわち，こぶりの刃器ではフリーフレイキングで鋭い縁端をもつ剥片を獲得できればよく，錐や石鏃では細部調整までにある程度の薄さの板状素材を挟み撃ちなどで獲得できればよいのである。さて，フリーフレイキングの痕跡を明瞭にとどめる剥片は，法量が大きくない上，数量も少ないので，その打撃法のみの技術形態が存在したとは考えにくい。Ⅱ258のような製品も，口唇状打面であることから，剥片のあり方に一致せず，従って体系的な技法の所産とはいえまい。むしろ，事故で割れても石核となったⅡ246のように，原面がなく法量が許容範囲内ならば，そのまま剥片石器製作の流れにとどまっていたと思われる。実際にⅡ246は，法量的には楔形石核と同程度であり，楔形石核の中にはこうした由来のものもあった可能性はある。

挟み撃ちが多用されていることは先に指摘した通りであるが，これは，同じ京都盆地に位置する同時期の雲宮遺跡のあり方と矛盾しない〔中川1997〕。そのような打撃の典型的な産物である楔形石核を見てみると，Ⅱ249・Ⅱ250のように剥片剥離をおこなわずに長軸方向に垂直に割ったものと，Ⅱ247・Ⅱ248のように剥片剥離をおこなったものとがある。法量で見てみると，前者は長軸は35㎜を優に超え，後者は長軸30㎜程度である。後者にもⅡ248・Ⅱ254のような意図的と思われる垂直割れはあるが，それらは短軸での垂直割れであり，むしろ法量調整と思われる。こうした２種の楔形石核では，前者は錐の製作と，後者は石鏃の製作と，それぞれ関わる可能性がある。すなわち，Ⅱ249のような細長い形状を得てⅡ255のような錐を生み出す流れと，Ⅱ248のような平たい矩形に近い四辺形の形状を得

て（Ⅱ257のような段階を経て）Ⅱ260のような石鏃を生み出す流れである。ただし，個々の剝片の出土位置という点では，こうした推測を指示する状況はうかがえなかった。

錐は２点あるが，それらは互いに，細部調整を施す位置も機能部の断面形状も異なり，おそらく素材の生成要因も異なる。石鏃は，基部に片面調整のものと両面調整のものとがある点は，技術形態の差を示すのかも知れない。また，石鏃では，石材の質的な差異に起因するかもしれないが，チャートとサヌカイトとで細部調整の角度に違いがある。このほか，石材による必然的傾向ではあるけれども，粘板岩製の刃器は板状の剝片を素材にしている点で，サヌカイトの挟み撃ちによる板状素材の獲得と志向の同調性がうかがわれる。

この地点の剝片剝離石器群の特徴を整理する。①サヌカイトでも粘板岩でも，素材は縦断面形が平たくなるような板状である。②サヌカイトでは挟み撃ちが顕著である。③楔形石核には少なくとも２種あり，一つは錐製作と，もう一つは石鏃製作と，それぞれ連関していると思われる。④錐には未製品と思われる楔形石核と製品がある。⑤石鏃には未製品と製品がある。⑥錐にも石鏃にも２種の技術形態がある。

礫石器　Ⅱ270～Ⅱ276は礫石器(表13)。Ⅱ270は,27ｇをはかる抉りのある石器である。平たい頁岩の一側縁を片面だけ打ち欠いてそこに切目を入れているが，対向する側縁は加工していない。打ち欠き面とは反対の面の中央部には側縁の切目の延長線上にわずかに切目が確認できる。打ち欠き面は平坦だが反対の面には瘤状のふくらみが軸線に斜行するかたちであるために，最終的に製品化を断念したのかもしれず，それならば切目石錘の未製品といえる。Ⅱ271は鰹節形をした粗粒砂岩製の完形の敲石で，772ｇをはかる。あばた状の敲打痕が，2箇所ある面と１箇所ある面とがあり，側面には，雁行状に連続する箇所もある爪形の敲打痕の集合部などの剝落部が確認できる。Ⅱ272は，破損面が１つある砂岩製の敲石で，残存重量219ｇ。敲打痕は，先端部に長軸10㎜弱のあばた状の広がりが確認できる。また，やや平坦な面とそれに対向する部分の，共に破損面際に，凹部がある。破損面を見ると，前者の凹部は破損面と同時ないし後続して形成された可能性があるが，後者の凹部は破損面に切られており，また，そこに打瘤のような微突部が確認できる。従って，破損は，この残存部ではなく欠損部分を掌で保持して，凹部で対象物に加撃した結果と思われるが，その後も，掌になかった方のこの残存部が使用された可能性があり，その場合は，敲打痕をもつ先端部が最終的機能部だったと考えるのが妥当であろう。Ⅱ273は破損面を１つもつ石英斑岩の磨石で，残存重量は710ｇ。二つの平坦面と側面全面に研磨痕がある。一方の平坦面の破損面際には，直径２㎝程度の広がりをもつあばた状の敲打痕

がある。破損面を見ると，この敲打部から陰瘤痕状の扇形の窪みを確認できるので，そこを基点の一つにして破損面が形成されていることがわかる。この残存部を掌に保持して敲打した際に破損したと思われる。Ⅱ274は,機能面が３面ある花崗斑岩製のほぼ完形の磨石で,446ｇをはかる。Ⅱ275は，破損面が１面ある砂岩製の台石。残存重量2910ｇ。機能面には，中央部分と思われる辺りに４㎝四方程度の広がりをもって，線状の敲打痕と，雁行状に連続する爪形の敲打痕が多数みられる。破損面には，その敲打痕を基点にした陰瘤痕状の窪みが確認できるが，対向する辺には基点となるような部分が認められないので,この台石自体は,堅いところに据え置かれて挟み撃ちされるような状況では用いられなかったのかもしれない。Ⅱ276は断面逆台形の砂岩製の台石で，4030ｇをはかる。Ⅱ271の敲石と隣接して出土している(図110)。機能面には，５㎝×３㎝ほどの広がりに，Ⅱ275と同様に，線状の敲打痕と，雁行状に連続する爪形の敲打痕が多数みられる。

礫石器については，雁行状に連なることもある爪形の敲打痕をもつものについて考えてみる。礫石器の使

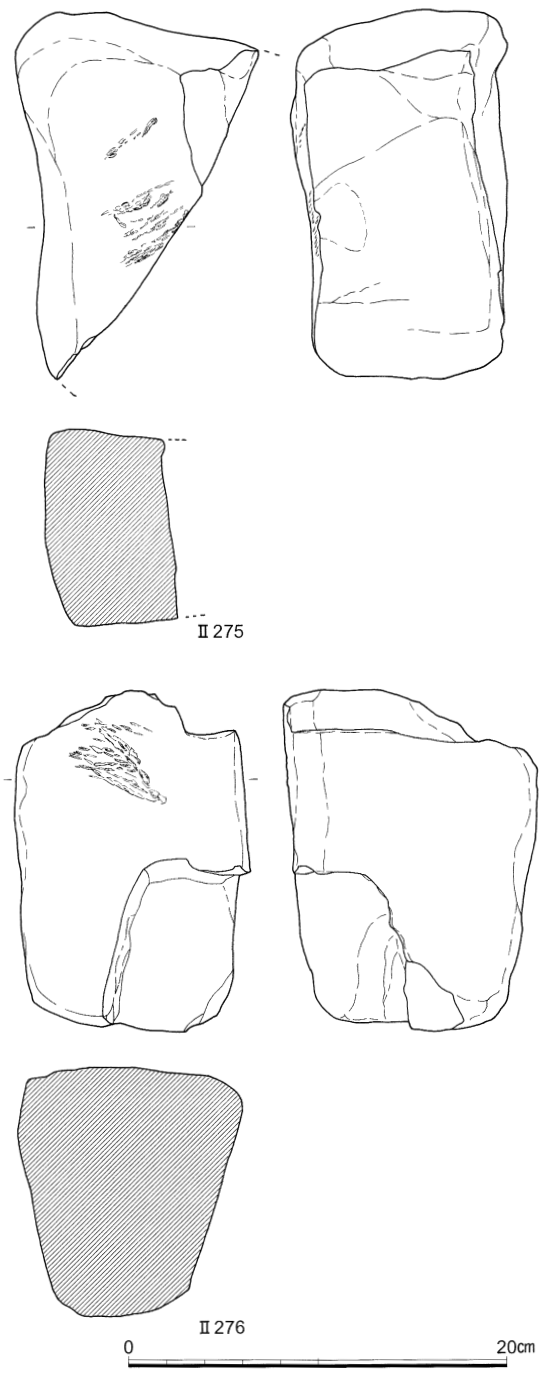


図109　礫石器（Ⅱ275・Ⅱ276台石）

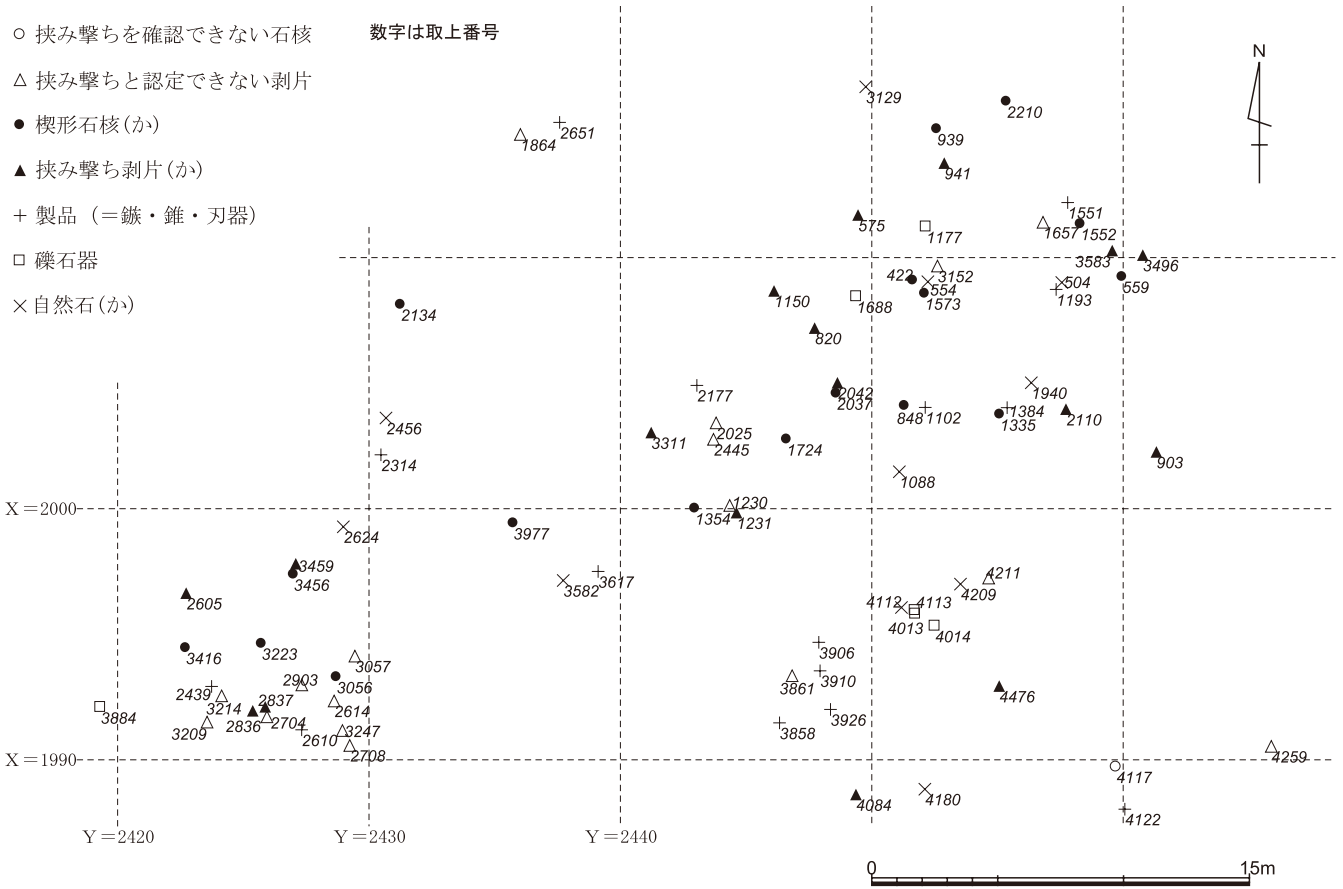


図110　黄色砂下層の出土石器等の分布　縮尺1/300

用痕研究はあまり進んでいないけれども，砂岩の台石の上でサヌカイトの板状の素材剥片に挟み撃ちをおこなった実験では，機能面にこのような敲打痕が確認されることがある〔松田1999〕。そこで，Ⅱ271・Ⅱ275・Ⅱ276の敲打痕をそうした作業にも大きく関わった痕跡と判断することも許容されよう（図版43－２）。こうした使用痕からの想定は，挟み撃ちによる剥片や楔形石器が多くみられる剥片石器の全体的様相と整合的である。ハンマーの可能性があるのはⅡ271で，その側面が機能部となっていたと考えたい。台石についてみてみると，Ⅱ276を両方の太股に長軸が脚と並行するように挟み込むと収まりがよいが，その保持状態は，Ⅱ275の破損面の特徴に整合的である。さて，右利きの行為者がⅡ276をそのように固定したとすると，左上がりになる敲打痕は，右手のハンマーを振り下ろすときのハンマーの軌跡とおよそ並行することになる。爪形の敲打痕が板状のサヌカイト剥片との接触で生じたとみなせば，この台石に据えて挟み撃ちをしたのであれば，垂直割れを生じさせようとしていたといえるかもしれない。そしてⅡ275についても同様に考えることが許容されるならば，その右上がりになる敲打痕は，右手のハンマーを振り下ろすときのハンマーの軌跡と直交することになり，その台石を用いて板状のサヌカイト剥片からさらに剥片を取る剥離をおこなっていたといえるかもしれない。このように，２点ある台石の敲打痕の方向がそれぞれで異なる点は，サヌカイトの板状素材に対して２種の加撃方法の推測された楔形石核（とそこから派生する錐と石鏃）のあり方と一致しており，非常に興味深い。敲石や台石の出土した地点と，挟み撃ちを用いた痕跡のある剥片石器の出土地点とでは，後者が原位置を保っていない可能性が高いこともあって，特筆できるような相関関係は見られないが，前者においては，ハンマーと思われるⅡ271と台石であるⅡ276とが隣接して出土している。

石器の分布（図110）　水田の造営に時期的に近い遺物包含層上部（表10の「上層」）から出土した石器の分布傾向について触れておく。後の東水田になる辺りや中央微高地では，上層出土の石器が６点あるが，そのいずれもが，挟み撃ちの痕跡をもち，また製品ではない。これに対して，南微高地では石鏃や刃器や研磨痕・敲打痕をもつ礫石器など製品が比較的高率に出土しており（上層出土の14点のうちの６点），後の西水田になる一帯でも，上層出土は製品２点のみ（錐と粘板岩製の刃器）である。点数が少なく，また剥片などの出土石器は原位置を維持していない可能性が高いとはいえ，剥片と製品の分布における差異は指摘できる。土器片の出土傾向が異なることに照らしても（図97），南微高地は場の機能が異なっていたと思われる。

4　弥生前期水田のプラント・オパール分析

⑴ 試料の概要（図90・91）

東水田の地点１（図90－▲１）で，地層断面から垂直方向に８サンプル（図91），西水田の地点２～10（図90－▲２～▲10），東水田に近接する地点11（図90－▲11・図91）と水田域外の地点12（同▲12・図91）の各最上層で11サンプル，計19サンプルを採取した。なお，今回は検出状況を中心に略述し，詳細な考察は後日機会を改めておこなう。

⑵ 分析結果（図版44，図111）

東水田の地点１では，上部の１ａ層と２ａ層からイネの機動細胞プラント・オパールがわずかに検出された。全般的に検出数と量がきわめて少なく，１ａ層～７ｂ層（図111中の各層に対応）の全層が洪水堆積物と考えられる。１ａ層中には炭化物がみられ土壌化していることから，地点１で水田が営まれたのは同層準のみであろう。なお，下層の２ａ層はレンズ状に挟在しており，同層準で稲が栽培されていた可能性は低く，同層から検出されるイネは上層からの落ち込みとみられる。

また，その他のプラント・オパールの検出状況をみると，ウシクサ族やタケ亜科などがわずかながら検出され，やや高燥な土地条件が考えられる。ただし，火山ガラスも同様にみられることから，洪水による地層堆積時のプラント・オパールも含有されていると考えられる。

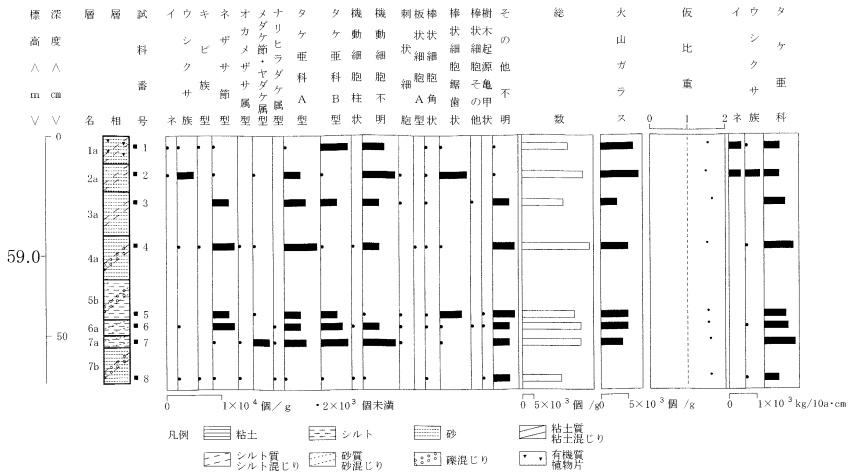
西水田の地点２～10では全試料からイネが検出された。しかし，その数や量は東水田と同様に少なく，両者の水田の造営期間は長くなかったとみられる。なお，西水田では畦畔と水田面で試料を採取したが，両者に出現傾向の顕著な違いはみられなかった。

また，その他のプラント・オパールの出現傾向は地点１と同様で，やや高燥な土地条件を示す植物に代表される。こうした地層を利用した水田の造営であったとみられる。

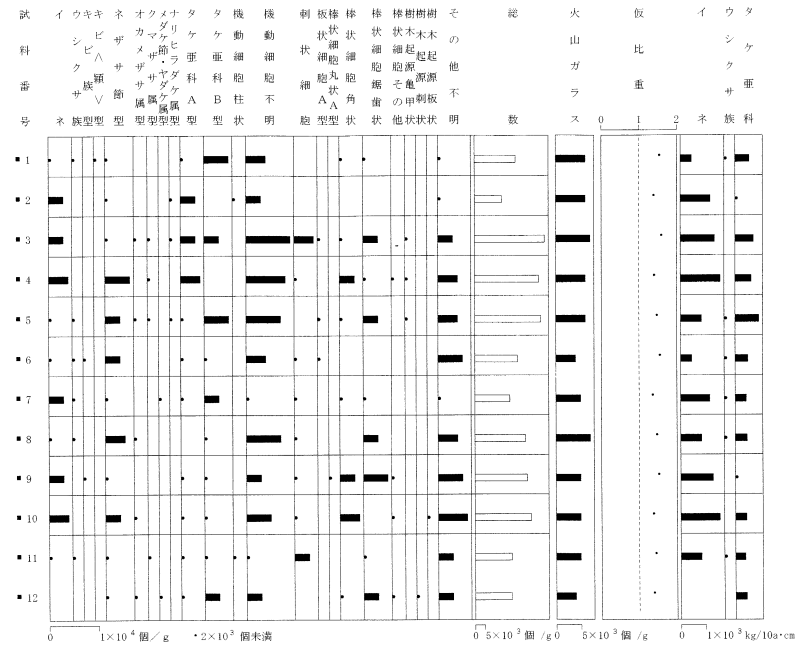
さらに，地点11は東水田に隣接するが，ここからもわずかながらイネが検出されている。水田域を離れた地点12からは未検出であった。

⑶ ま と め

このように，今回の分析結果は，約700ｍあまり西南方に位置する220地点（ＡＯ22区）の弥生前期水田の場合〔外山2002〕とは異なり，全般的にプラント・オパールの検出数と量が少なく，また低湿な土地条件を示す植物はみられない。洪水堆積物を一時的に利用した稲作のあり方が考えられる。



A：地点1断面サンプル1～8



B：地点1～12各最上層

図111　プラント・オパール検出状況（試料採取地点は図90・91参照）

5　弥生中期～近世の遺跡

⑴ 遺　　構（図版29～32，図112～114）

黄色砂より上層は，校舎基礎による攪乱範囲が広く，包含層は調査区中央一帯を中心に島状にのこるにすぎない。以下おおむね時代順に説明する。

弥生中期～古代の遺構（図112）　黄色砂上面の地形とあわせて表示する。ただし北東部は，中世の段階で表面の削平が著しいと判断されるので，等高線を省略する。

ＳＲ１・ＳＲ３は，層位の項で述べたように，弥生中期に生じて以降平安時代にかけて埋積していった自然流路の痕跡（図版31－４～6，図版32－１）。図中で梨地で表示したのは，黒褐色の粘質土が埋積していた流路状の窪みの範囲で，おおむね平安時代直前の様相。ＳＲ２は，Ｙ＝2430付近の東から西へ下る斜面裾に沿ってはしる幅1.5m深さ50㎝程度の浅い自然流路。白色の砂礫層が埋積する。出土遺物はないが，層位的にみて平安時代のう

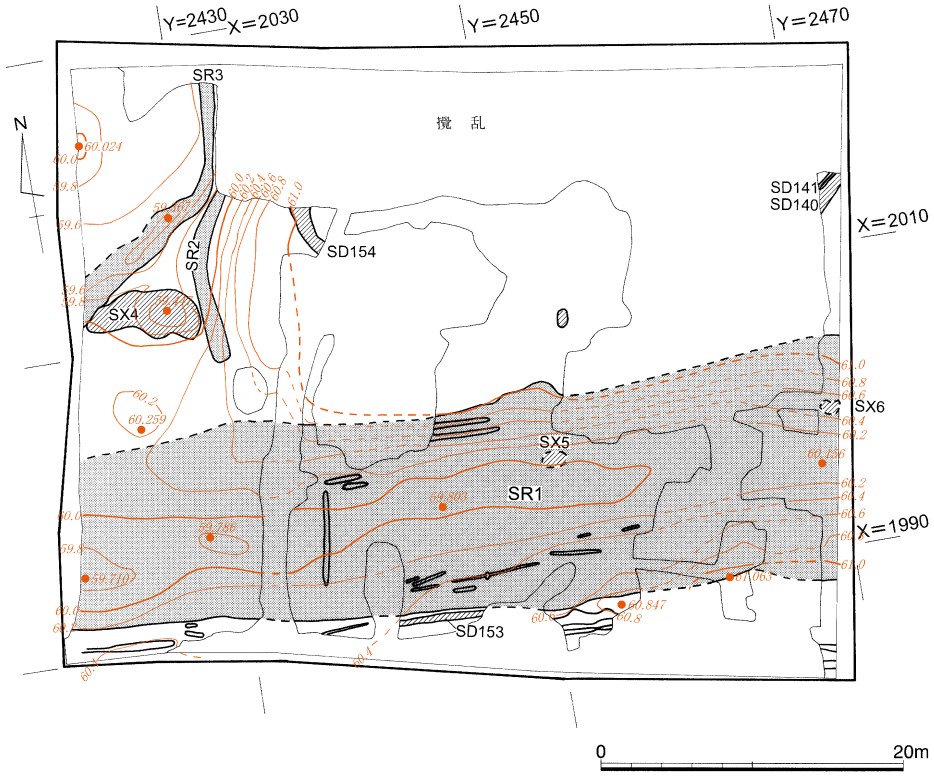


図112　黄色砂上面の地形と弥生中期～古代の遺構　縮尺1/500

ちに形成され埋積したものといえる。この斜面そのものは，弥生中期段階にＳＲ３により黄色砂が削られることで形成された地形に由来すると想定される。したがってＳＲ２は，斜面西側が埋積していく過程で裾部に一時的に生じた流れといえよう。

ＳＸ４は，東西６ｍ南北２ｍ程度の範囲で，窪みに堆積した黒色粘土層中に礫がまとまっていた（図版32－１・２）。礫の大きさは径10㎝を頂点に，6㎝から14㎝までで80％以上を占める。人工遺物はともなわない。平安時代以前の段階で，近辺からの転石が自然の営為により集まったものである可能性と，平安時代中期の土地利用に際して，地業として人為的に石を集めたものである可能性の双方が想定され，いずれとも決めがたい。

ＳＸ５・ＳＸ６は，ＳＲ１北肩の黄色シルト層上面～上部にかけて，弥生中期後葉（畿内Ⅳ期）の土器Ⅱ286・Ⅱ287の破片がまとまっていたもの（図版32－４・５）。ＳＸ５については次節で詳述する。東壁際のＳＸ６は，大型の甕の破片が散在し，ＳＸ５よりも密集度は粗い。口縁から底部まで器形をうかがうことは可能だが，全体の４分の１程度の破片しかなく，調査区外に続いている可能性がある。なお，近接して石庖丁Ⅱ281も出土している（同６）。これらは，流路ＳＲ１が形成されて後の比較的早い段階の遺構とみられるので，流路を形成する洪水の発生は，弥生中期後葉までの間であったことがわかる。

ＳＤ140・ＳＤ141・ＳＤ153・ＳＤ154は黒褐色土を埋土とする溝。ＳＤ154は遺物が出土しておらず，明確な時期は不明だが，埋土から平安時代以前であることは確実。そのほかはいずれも平安時代中期の10世紀代の遺構。また，遺物は出土しないものの，ＳＤ153と同様な幅30㎝前後の浅い小溝が多数検出されている。ＳＲ１に沿うような方向性がうかがわれることから，平安時代においてはＳＲ１が埋積しきらず，土地利用や土地区画を規制していた可能性が高いといえる。

中世の遺構（図113）　中世を通じて，調査区西半Ｙ＝2430付近を南北に，Ｘ＝1990付近を東西にはしるＬ字状の段差が形成されている。中世の遺構は，この段差より東方では，黒褐色土ないし黄色砂の上面ですべてが検出される。段差以西の低くなっている範囲では，灰色砂質土から茶褐色土の上面にかけてで検出される。ほとんどが中世後半期に帰属するとみられる。ここでは各時期をまとめて示した。

遺構の大半は幅20㎝深さ５㎝程度の小溝で，全域でみつかる。若干方位を東に振った南北方向が主で，少数それに直交する東西方向がある。耕作にともなう鋤溝に類するものだろう。段差の内部では明灰色土の上面まで顕著に検出され，それ以下はみられなくなる。

ＳＥ２～ＳＥ10は，径１ｍ～1.5ｍ程度深さ最大で50㎝前後の円筒形の土坑。特徴から

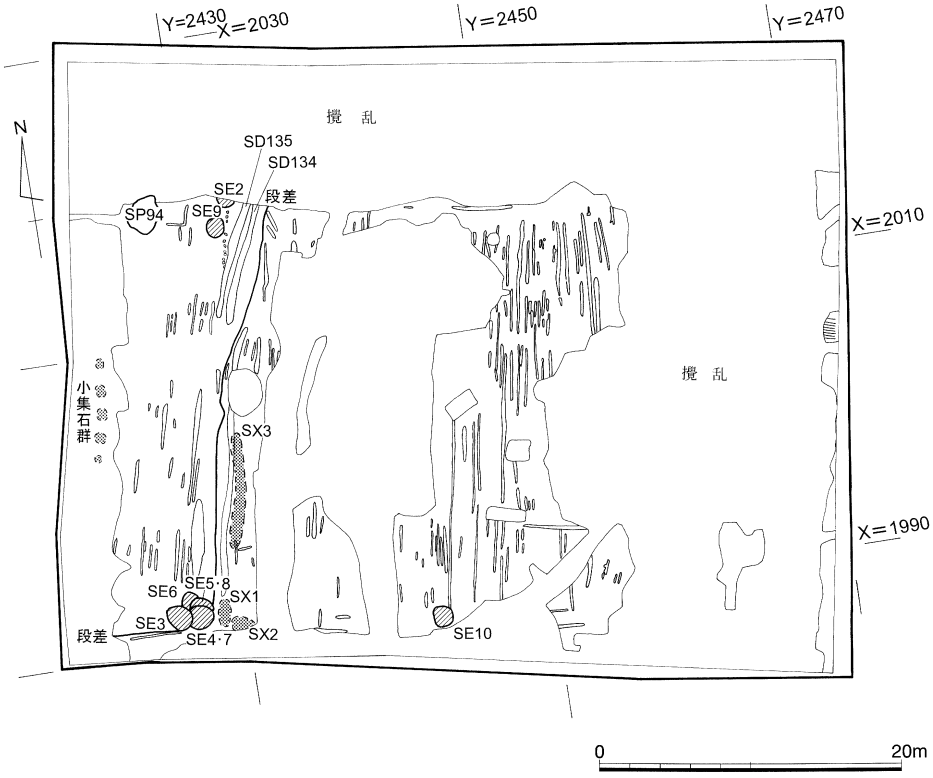


図113　中世の遺構　縮尺1/500

野壺とみられ，段差東南隅のコーナー付近では多数が切り合って存在する。ＳＥ２から灰釉系陶器（天目）が出土しているほかに遺物はほとんど出土しないが，近世遺物包含層を除去したのちに検出されることから，中世後半期には機能していたものとみられる。

ＳＸ１～ＳＸ３は集石遺構。ＳＸ１･ＳＸ２は，拳大程度の礫がまとまっていたもので，耕作時に障害となるものを寄せ集めたものとみることもできる。これに対してＳＸ３は，人頭大程度までの比較的大きな礫を含み，南北方向に10ｍほどの細長い列状を呈している（図版31－３）。区画施設であった可能性もあるが，礫の大きさは不揃いであり，密度も粗い。茶褐色土中で検出されるものであるから，中世後半期の所産とみられる。このほか，灰色砂質土の上面で，径50㎝程度に小礫が集まる５箇所を検出し，小集石群としている。南北に並ぶことから，なんらかの建物の基礎である可能性も考えられる。遺物をともなわないが，検出層位からみて中世前半期の遺構とみられる。

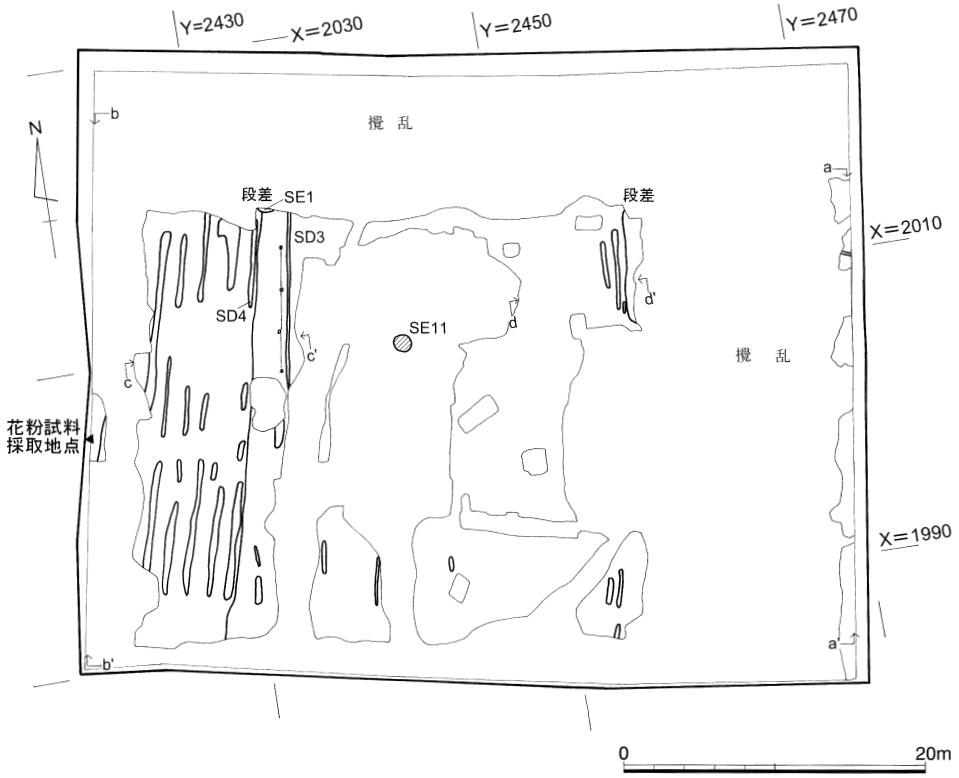


図114　近世の遺構　縮尺1/500

ＳＤ134・ＳＤ135は，南北方向の段差の裾に沿って，2条が並行してはしる中世後半期の溝。他の溝群と比べてひとまわり大きく深く，北に向かって下るようにしっかりと掘られている。斜面からの水や砂の流入を防ぐ役目を果たしていたものであろうか。

近世の遺構（図114）　　Ｙ＝2430およびＹ＝2460付近に，東から西へと下る段差の存在が確認される。前者については中世以前から存在していたものが継承されているが，かなり直線的に整えられたものとなっている。段差の内部においては，土壌の状況から，この時期は水田であったものと想定され，段差方向に沿った幅50㎝程度のごく浅い溝列が，灰褐色土Ⅱ上面で確認されている（図版31－１）。耕作時の痕跡である可能性が高い。段差の上面においては，すべてを図示していないが，農耕用の柵のものとみられる15㎝四方程度の正方形のピットが全域で多数あるほかに，顕著な遺構はみられない。

ＳＥ１は，漆喰を枠とする野壺。大半を破壊されていた。段差を切って構築されているので，近代以降に下る可能性もある。ＳＥ11は幕末期の井戸。遺構面から２ｍ以上攪乱で

破壊され，底部30㎝ほどを検出し得た。底面の標高は58.702m。径１mほどの正円形で，刻印をもつ桟瓦片や木製品の残骸が出土した(図版31－２)。遺物の内容から,慶応２(1866)年に設置されたとされる土佐藩邸に附属する遺構とみられ，調査地点が藩邸敷地内に含まれていたことが確認された。南側の208地点においても，刻印桟瓦を出土する同期の井戸を確認しているが〔浜崎ほか1995　図59〕，井戸底の標高は今回よりおよそ2.5m低い。

⑵ 遺　　物（図版45～48，図115～122）

弥生・古墳時代の遺物（図115）　ＳＸ５・ＳＸ６出土の２個体，ＳＲ１・ＳＲ３の埋土および上層への混入品として土器が少量出土している。石庖丁は後に詳述する。

Ⅱ277～Ⅱ280は受け口状を呈する口縁部片。Ⅱ277は，外反気味に立ち上がる口縁端部が細く尖るように横撫でされ，細いＶ字状刻みを施す。Ⅱ278・Ⅱ279は，まっすぐ上に立ち上がり，口縁端部も面をもつ。Ⅱ280はやや薄手で外方に向かって立ち上がる口縁部で，端部は丸く収める。いずれも小片で確実さに欠けるが，Ⅱ277は弥生中期後葉のⅣ期，Ⅱ278・Ⅱ279は弥生後期前半，Ⅱ280は同後期後半の範疇かと想定しておく。

Ⅱ282は円筒埴輪。外面に断面長方形の突帯が貼り付けられ横位に刷毛調整される。黄白色の胎土をもつ。Ⅱ283～Ⅱ285は須恵器で，それぞれ２段の透かし窓の部分が残る高杯脚部片，短い立ち上がりを有する杯身片，波状文が施される高杯杯部片。これらは５～６世紀代のもので，周辺に集落や墳墓が存在した可能性を示唆している。

Ⅱ286はＳＸ６出土の甕。復元口径31.2㎝，器高40.5㎝。口縁部は短く外折し，横撫でにより端部がわずかに上方へ肥厚する。端面は浅く凹み，下端に薄い板状工具の木口による斜位方向の繊細な刺突がめぐる。胴部外面は，上半が縦位の刷毛，下半は粗く削りあげており，砂粒の移動・脱落痕が著しい。底部付近には一部再び刷毛調整が重ねられる。内面は，上半は平滑に整えられ，下半を軽く削り上げる。底部付近は撫で上げられ，底面は指頭圧痕の凹凸が著しい。削りと撫での境界は器壁の厚さや傾きの変換点となっており，製作上の単位を反映するものとみられる。暗茶褐色を呈し，大粒の石英砂粒を多量に含む。弥生中期後葉のⅣ期，瀬戸内系甕の系譜をひいた在地色の濃い製品といえる。

Ⅱ287はＳＸ５出土の壺。復元口径25.8㎝，器高36.0㎝。頸部より上は強く横撫でされ，屈曲して立ち上がる口縁部の側面と端面に凹線を１条もつ。胴部外面は全面刷毛調整で，下半は縦位に，上半は向かって左上がりの斜位に，それぞれ底部側から上へ流れるように浅く施される。底部周辺のみ縦位の粗い篦磨きがされる。底部は凹み底で，反時計回りにひと撫でされ，外縁に小さな篦刻みがめぐる。内面は，底部付近が撫で，それより上は縦

位の刷毛調整で，底部側から上へ向かって浅く長くおこなう。Ⅱ286と同様，底部付近の撫でと刷毛調整の境界が器壁の厚さや傾きの変換点となっており，製作上の単位を反映する。一見するとⅤ期の近江系受け口状口縁甕を想起させるプロポーションだが，技法的特徴から中期後葉のⅣ期に位置づけられ，底部の別作りと尖底化の指向を重視するならば，よりⅤ期に近いⅣ期末葉の製品と評価する。

石 庖 丁（Ⅱ281）　濃紺色を呈する粘板岩製の片刃の石庖丁で，長さ137㎜，幅38㎜，厚さ６㎜，重さ44ｇをはかる。ＳＸ６に近接して黄色シルトから出土したので，弥生中期後半に帰属すると判断する。素材獲得ないし整形の痕跡と思われる背部の多数の階段状剝離は，稜がかなり磨滅しているが，Ｂ面の刃部右辺の階段状剝離も同様の剝離の痕跡であるとすれば，器体全体は，刃央部がわずかに研ぎ減りしていると考えられるものの，未使用時の法量を比較的よくとどめていると思われる。上面に水田が営まれていた黄灰色・暗灰褐色シルト質土出土のⅡ268と，石材・厚さ・刃部角・背部加工方法という点で特徴を共有するが，Ⅱ281は法量がそれよりも一回り大きく，また器面を研磨している点で異なる。Ａ面は器面が平滑で研磨痕を明瞭に残すが，Ｂ面は器面が粗く研磨痕も確認できない。使用痕は（図版45右上），Ａ面にはほとんどまったく確認できない。Ｂ面には，植物質を対象としたときの光沢とは一致しないけれども，わずかに光沢が確認できる部分がある。刃部には，中央付近に刃縁に直交して，研磨による線状痕とは異なる線状痕がある。

孔は３つある。側縁寄りの孔（断面ａ）とその隣の孔（断面ｂ）は，最小径もＡ面側の最大径も孔断面形もほぼ同様であるのに対し，器体中央の孔（断面ｃ）は他の二孔とそれらがわずかずつ異なる。孔の上場については，Ａ面側で磨滅を認められるのは，器体中央の孔では真ん中の孔側，両者に挟まれた真ん中の孔では両側の孔側と背部側であり，側縁寄りの孔にも真ん中の孔側にわずかに認められる。Ｂ面側で磨滅を認められるのは，器体中央の孔では背部側と真ん中の孔側，真ん中の孔では背部側と器体中央の孔側である。側縁寄りの孔のＢ面側には上場の磨滅は認められない。こうした孔の上場の磨滅を紐掛け用の角減らしないし紐擦れによる磨滅と考えるならば，３つの孔が同時に機能しえたかは不明であるが，側縁寄りの孔は紐穴としてはほとんど機能していないものと思われる。その原因として，この孔付近の背部からの素材獲得ないし整形時の加撃によって潜在的に生じていたひびと，その後のこの孔の穿孔時のさらなる衝撃によるひびとが，この孔のＡ面側の上場にわずかに磨滅痕跡を残す程度の使用段階に貫通して，孔のＢ面背部側の器面が剝落したことが指摘できる。

古代の遺物（図116）　Ⅱ288～Ⅱ293は黒灰色砂質土出土遺物。Ⅱ288は土師器皿。「て」字状口縁手法Ｂ$_{1}$類。Ⅱ289は土師器甕。頸部内面に篦状工具先端の刺突による斜線がめぐっている。Ⅱ290は黒色土器Ａ類の椀。Ⅱ291は灰釉陶器底部。貼付高台で，外面は回転篦削り。内面は，見込みに重ね焼きの痕跡が円形に残り，その内側が露胎，外側に透明の灰釉が薄くのる。Ⅱ292は緑釉陶器底部。黄白色の胎土をもつ軟質焼成で，全面に淡緑色の施釉。底部は削り出しの偏平な円盤高台。Ⅱ293は須恵器杯蓋。宝珠形のつまみをもち，外面は全面回転篦削りする。

Ⅱ294～Ⅱ315は灰色砂質土出土遺物。Ⅱ294～Ⅱ297は土師器皿。Ⅱ294はＢ$_{1}$類，Ⅱ295はＢ$_{2}$類，Ⅱ296はＢ$_{3}$類，Ⅱ297は二段撫で手法Ｃ$_{2}$類。Ⅱ298は土師器甕。Ⅱ299は黒色土器Ａ類の椀。Ⅱ300～Ⅱ305は緑釉陶器底部。Ⅱ300は灰白色胎土の軟質焼成で，底部外面以外に淡緑色施釉。削り出しの輪高台。Ⅱ301は白色胎土の軟質焼成で，釉は剝落して不明。底部は削り出しの輪高台。Ⅱ302は硬質焼成で，全面に緑色施釉。丈の高い貼付高台を有する。Ⅱ303は硬質焼成で，底部外面以外を淡緑色施釉。削り出しの蛇ノ目高台だが，底面中央は削りが及ばず回転糸切痕がのこる。内面は全面篦磨き。Ⅱ304は硬質焼成で，底部外面以外を淡緑色施釉。削り出しの輪高台で，高台周辺以外は篦磨き調整。Ⅱ305は灰白色胎土の軟質焼製。釉は不明だが，当初より施釉されていない素地である可能性もある。わずかに外へ踏ん張る形態の貼付高台で，底面には回転糸切痕がのこる。Ⅱ306～Ⅱ312は灰釉陶器。いずれも貼付高台だが，Ⅱ309～Ⅱ311は丈高で内彎気味の「三日月高台」とよばれる形状を示す。Ⅱ306～Ⅱ308の高台も，丈は低いが類似した特徴を示す。これら６点はいずれも底部外面は回転篦削りと撫で調整。釉は体部に刷毛塗りで白濁気味の透明釉。なおⅡ308は底に「大」の墨書があり，Ⅱ311は見込みに１㎝幅の墨書き線が残されている。Ⅱ312は特徴が異なり，底部外面に回転糸切り痕が残る。釉も体部に浸け掛けする。Ⅱ313は越州窯系青磁で，斜め上方にまっすぐ立ち上がる口縁部。Ⅱ314･Ⅱ315は須恵器。Ⅱ314は口縁端部が玉縁状に肥厚する鉢，Ⅱ315は胴部が強く張る短頸の壺。

Ⅱ316～Ⅱ322は灰茶褐色砂質土出土遺物。Ⅱ316は土師器皿でＢ$_{1}$類。Ⅱ317～Ⅱ320は緑釉陶器底部。いずれも全面施釉。Ⅱ317～Ⅱ319は，黄白色の軟質焼製で，削り出しの円盤状高台をもつ。釉調はそれぞれ淡黄緑色，淡緑色，黄緑色を呈する。Ⅱ320は硬質焼製で，削り出しの輪高台をもち，濃緑色を呈する。Ⅱ321は灰釉陶器底部。三日月高台を有し，底部外面は回転篦削り調整。Ⅱ322は須恵器鉢の口縁部。Ⅱ314と同種だが，口縁端部の玉縁状肥厚に鋭さが失われている。

Ⅱ323～Ⅱ326はＳＤ140出土遺物。Ⅱ323は土師器皿でＢ$_{1}$類。Ⅱ324は灰釉陶器底部。断面三角形の貼付高台を有する小片である。Ⅱ325は灰釉陶器段皿の口縁部。残存する全面に施釉されている。Ⅱ326は管状土錘。黄白色の土師質焼成で，一端に黒斑がある。

Ⅱ327はＳＤ153出土遺物で，土師器皿Ｂ$_{1}$類。Ⅱ328はＳＤ141出土遺物で，須恵器杯蓋。口縁部のみの小片である。Ⅱ329は緑釉陶器耳皿。明灰色土より中世の遺物に混じって出土。硬質焼成で，まだらに濃緑色の釉が全面にみられる。こぶりの貼付高台をもち，見込みに一条の圏線がめぐる。Ⅱ330は表土掘削時採集の須恵器小壺。胴部に「君」と読める刻書がある。底部は回転糸切痕がのこる。

以上は，平安時代中期，9世紀後葉～10世紀前葉を中心に，少量11世紀代に下るものを含む内容である。とくに黒灰色砂質土については前者に限定され，灰色砂質土や灰茶褐色砂質土に，新しい時期が微量含まれるといえる。総量が多くはないが，土師器よりも緑釉陶器や灰釉陶器の優品が目立ち，遺存度もよい。残念ながら遺構にともなうまとまった出土ではないが，南側の208地点などの成果からも指摘されていたように，調査地一帯が平安中期に重要度の高い空間であったことをあらためて裏付ける内容といえる。

中世の遺物（図117～120）　Ⅱ331～Ⅱ355は灰茶褐色土出土遺物。Ⅱ331～Ⅱ336は赤褐色を呈する土師器小皿。Ⅱ331は二段撫で手法Ｃ$_{3}$類。Ⅱ332は一段撫で手法Ｄ$_{3}$類，Ⅱ333はＤ$_{5}$類，Ⅱ334はＤ$_{6}$類，Ⅱ335はＥ$_{1}$類。Ⅱ336は口縁端部を上方に軽くつまみ上げただけのような浅い器形で，系統を異にすると思われる。Ⅱ337・Ⅱ338は土師器大皿で，それぞれＥ$_{1}$類とＥ$_{4}$類。Ⅱ339は口径23㎝をはかる特大の皿で，口縁部形態はＤ$_{5}$類。オオヤツカサと呼ばれる種類のものだろう。Ⅱ340は灰白色の小椀。底部は凹む形態とみられる。Ⅱ341は同種の胎土の小形の受皿。Ⅱ342は土師器羽釜。黄白色の胎土で，小形品である。Ⅱ343は瓦器椀。口縁端部内側に細い沈線が一条はしり，内面は密に篦磨きされている。Ⅱ344は瓦器羽釜ミニチュア。Ⅱ345は瓦器鍋。炭素吸着が不十分で，全体に灰色を呈する。Ⅱ346～Ⅱ348はいずれも龍泉窯系の青磁とみられる皿や椀。Ⅱ349は青白磁皿。薄い器壁で，内面に段をもつ。Ⅱ350～Ⅱ352は白磁で，口禿の皿口縁部と椀の底部。高台周辺の外面は露胎である。Ⅱ353は須恵器すり鉢の口縁部。端部は上方に大きく肥厚する。Ⅱ354は灰釉系陶器のミニチュア皿。Ⅱ355は鬼瓦。左側の脚端部で，斜方向の刻線と大部分が剝落している珠文帯がある。

Ⅱ356～Ⅱ360は暗茶褐色土出土遺物。Ⅱ356は灰色を呈する土師器皿で，Ｆ$_{4}$類。口唇部に煤が付着する。Ⅱ357は赤褐色を呈する土師器皿で，Ｅ$_{4}$類。Ⅱ358は灰白色の凹み底小

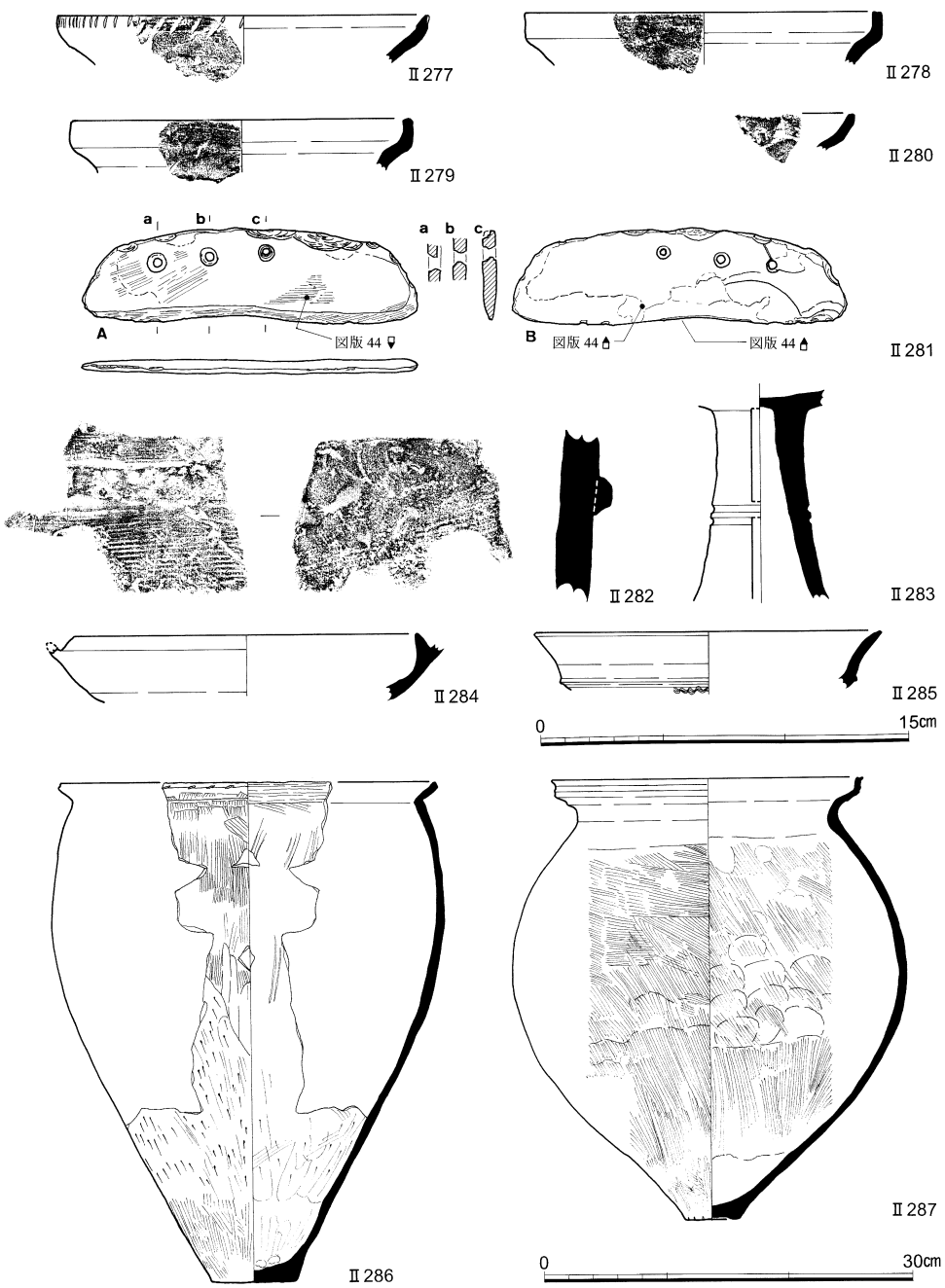


図115　ＳＲ１北肩黄色シルト出土遺物（Ⅱ277弥生土器，Ⅱ281石庖丁），ＳＲ１砂礫出土遺物（Ⅱ283須恵器），ＳＸ５出土遺物（Ⅱ287弥生土器），ＳＸ６出土遺物（Ⅱ286弥生土器），ＳＲ２出土遺物（Ⅱ285須恵器），ＳＲ３出土遺物（Ⅱ278～Ⅱ280弥生土器，Ⅱ284須恵器），灰色砂質土出土遺物⑴（Ⅱ282埴輪）　Ⅱ277～Ⅱ285縮尺１/3，Ⅱ286・Ⅱ287　縮尺1/6

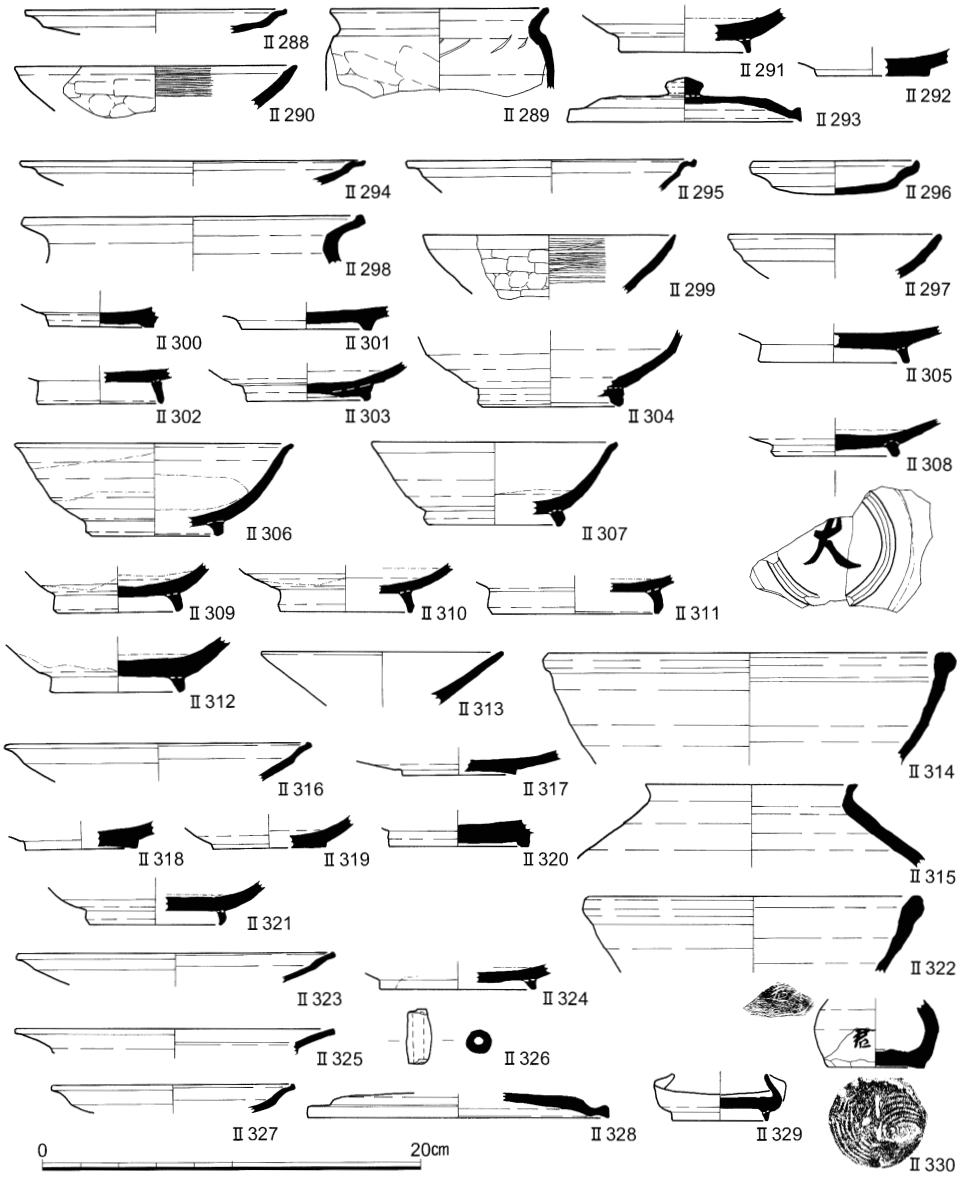


図116　ＳＲ１黒灰色砂質土出土遺物（Ⅱ288・Ⅱ289土師器，Ⅱ290黒色土器，Ⅱ291灰釉陶器，Ⅱ292緑釉陶器，Ⅱ293須恵器），灰色砂質土出土遺物⑵（Ⅱ294～Ⅱ298土師器，Ⅱ299黒色土器，Ⅱ300～Ⅱ305緑釉陶器，Ⅱ306～Ⅱ312灰釉陶器，Ⅱ313青磁，Ⅱ314・Ⅱ315須恵器），ＳＲ１灰茶褐色砂質土出土遺物（Ⅱ316土師器，Ⅱ317～Ⅱ320緑釉陶器，Ⅱ321灰釉陶器，Ⅱ322須恵器），ＳＤ140出土遺物（Ⅱ323土師器，Ⅱ324・Ⅱ325灰釉陶器，Ⅱ326土錘），ＳＤ153出土遺物（Ⅱ327土師器），ＳＤ141出土遺物（Ⅱ328須恵器），明灰色土出土遺物⑴（Ⅱ329緑釉陶器），表土出土遺物（Ⅱ330須恵器）

椀。Ⅱ359は青磁合子の蓋。Ⅱ360は青磁椀の底部で，見込みに花文が線で描かれる。高台の内側は露胎。

Ⅱ361～Ⅱ368は明灰色土出土遺物。Ⅱ361～Ⅱ364は赤褐色を呈する土師器皿で，それぞれC$_{3}$類・D$_{6}$類・D$_{3}$類・E$_{4}$類。Ⅱ365・Ⅱ366は灰白色を呈する土師器椀，Ⅱ367は同種の胎土の受皿。Ⅱ368は青磁梅瓶の蓋。内側は露胎で回転糸切痕が残る。

Ⅱ369～Ⅱ378は暗灰色土出土遺物。Ⅱ369～Ⅱ372は赤褐色を呈する土師器皿で，それぞれE$_{4}$類・E$_{4}$類・F$_{2}$類・F$_{3}$類。Ⅱ373は白磁合子のミニチュア。Ⅱ374は灰釉系陶器の椀底部。いわゆる古瀬戸で，底部は削り出しによる低い高台で露胎。内面に黄緑色の施釉。Ⅱ375は灰釉系陶器皿。これも古瀬戸で，わずかに残る見込みに卸し目が確認される。Ⅱ376は須恵器すり鉢の口縁。端部は強く外反したのち上方へ肥厚する。Ⅱ377は陶器壺の，細い頸部から強く張る胴部にかけての部分。外面には1条の沈線がめぐる。内面には縦位の刻線が口縁部に向かってのびる。常滑窯の三筋壺の系譜に連なる製品であろう。Ⅱ378は陶器すり鉢の口縁で，8条の卸し目がある。備前とみられる。

Ⅱ379～Ⅱ402は茶褐色土出土遺物。Ⅱ379～Ⅱ386は褐色を呈する土師器皿。Ⅱ379・Ⅱ383はE$_{4}$類，Ⅱ380～Ⅱ382はF$_{1}$類，Ⅱ384・Ⅱ385はF$_{2}$類，Ⅱ386はF$_{3}$類。Ⅱ387・Ⅱ388は灰白色を呈する土師器凹み底小椀。Ⅱ389は同種の胎土の受皿。Ⅱ390は土師器ミニチュア羽釜で，黄白色を呈する。Ⅱ391は瓦器火鉢の口縁。側面に重四角文のスタンプがめぐる。Ⅱ392は青磁洗の口縁。厚手の器壁で外面に鎬連弁文がめぐる。Ⅱ393・Ⅱ394は白磁で，底部と輪花の皿。いずれも釉調がくすんだ白色で，胎土もやや粗放である。Ⅱ395・Ⅱ396は灰釉系陶器の皿。いわゆる古瀬戸で，Ⅱ395の底面をのぞき，淡黄緑色に施釉されている。Ⅱ397はこの種の古瀬戸の鉢。短く外反する口縁部をもつ。Ⅱ399は陶器皿。高台内側を除き白色の長石釉がかかる志野。Ⅱ400は陶器すり鉢口縁。短く外反する口縁部で，内面に6条の卸し目がある。長石粒を含む赤褐色の胎土で，信楽とみられる。Ⅱ402は陶器の底部。暗赤色の胎土で，内面に暗褐色施釉を地とした黒色の筆書き文様がみられる。特徴から唐津の可能性が高い。

Ⅱ403・Ⅱ404は段差際の暗黄灰色土（図88－b層）出土遺物。Ⅱ403は青磁椀。高台内側以外を全面に黄褐色施釉。見込み中央にくずれた花文風の文様がある。Ⅱ404は陶器輪花皿。白色の長石釉が厚くかかる志野。

Ⅱ405～Ⅱ411は黄灰色土出土遺物。Ⅱ405～Ⅱ408は土師器皿で，Ⅱ405はE$_{4}$類，Ⅱ406はF$_{3}$類，Ⅱ407はF$_{2}$類，Ⅱ408は見込みに浅い圏線状のものがが1条めぐり，F類よりも後

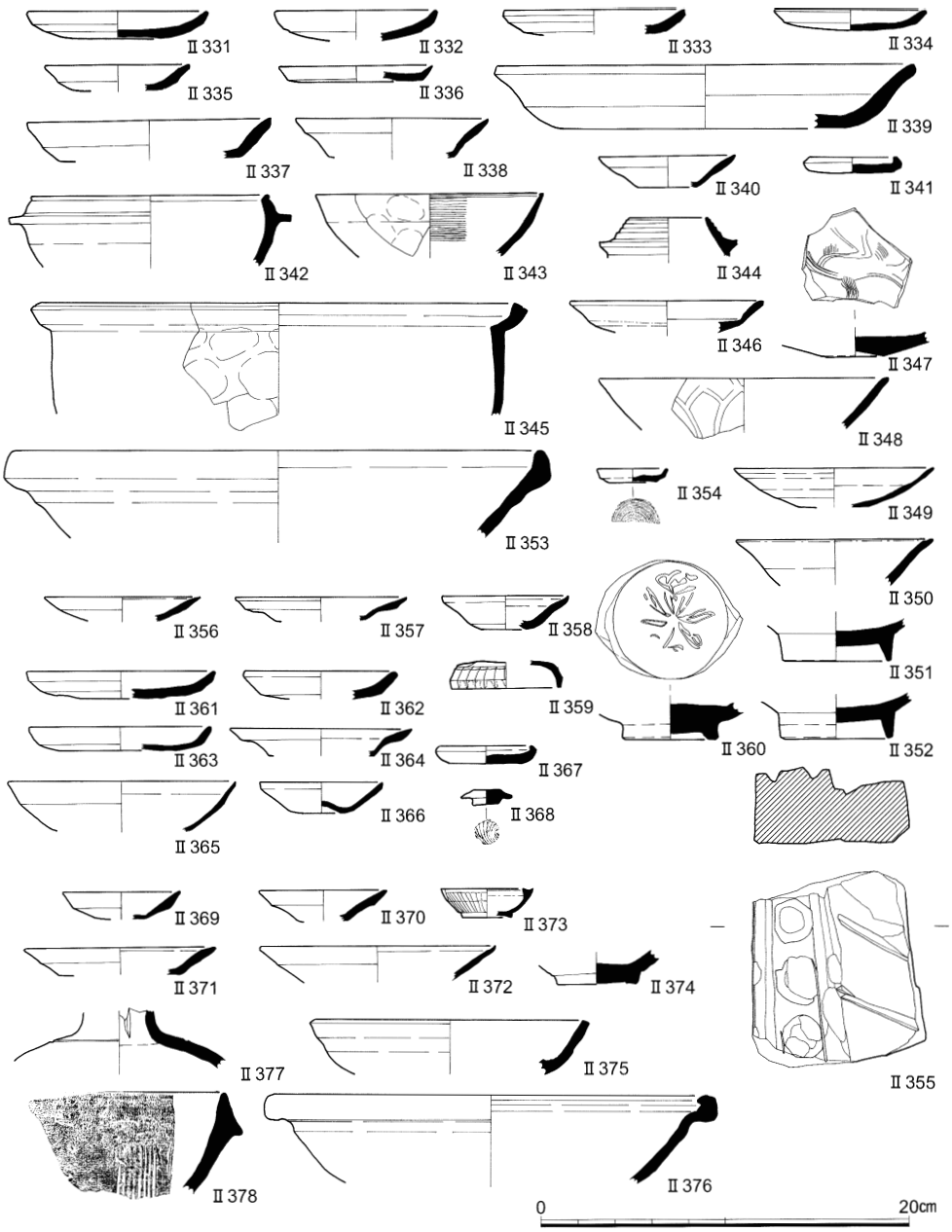


図117　灰茶褐色土出土遺物（Ⅱ331～Ⅱ342土師器，Ⅱ343～Ⅱ345瓦器，Ⅱ346～Ⅱ348青磁，Ⅱ349青白磁，Ⅱ350～Ⅱ352白磁，Ⅱ353須恵器，Ⅱ354灰釉系陶器，Ⅱ355鬼瓦），暗茶褐色土出土遺物（Ⅱ356～Ⅱ358土師器，Ⅱ359・Ⅱ360青磁），明灰色土出土遺物⑵（Ⅱ361～Ⅱ367土師器，Ⅱ368青磁），暗灰色土出土遺物（Ⅱ369～Ⅱ372土師器，Ⅱ373白磁，Ⅱ374・Ⅱ375灰釉系陶器，Ⅱ376須恵器，Ⅱ377・Ⅱ378陶器）

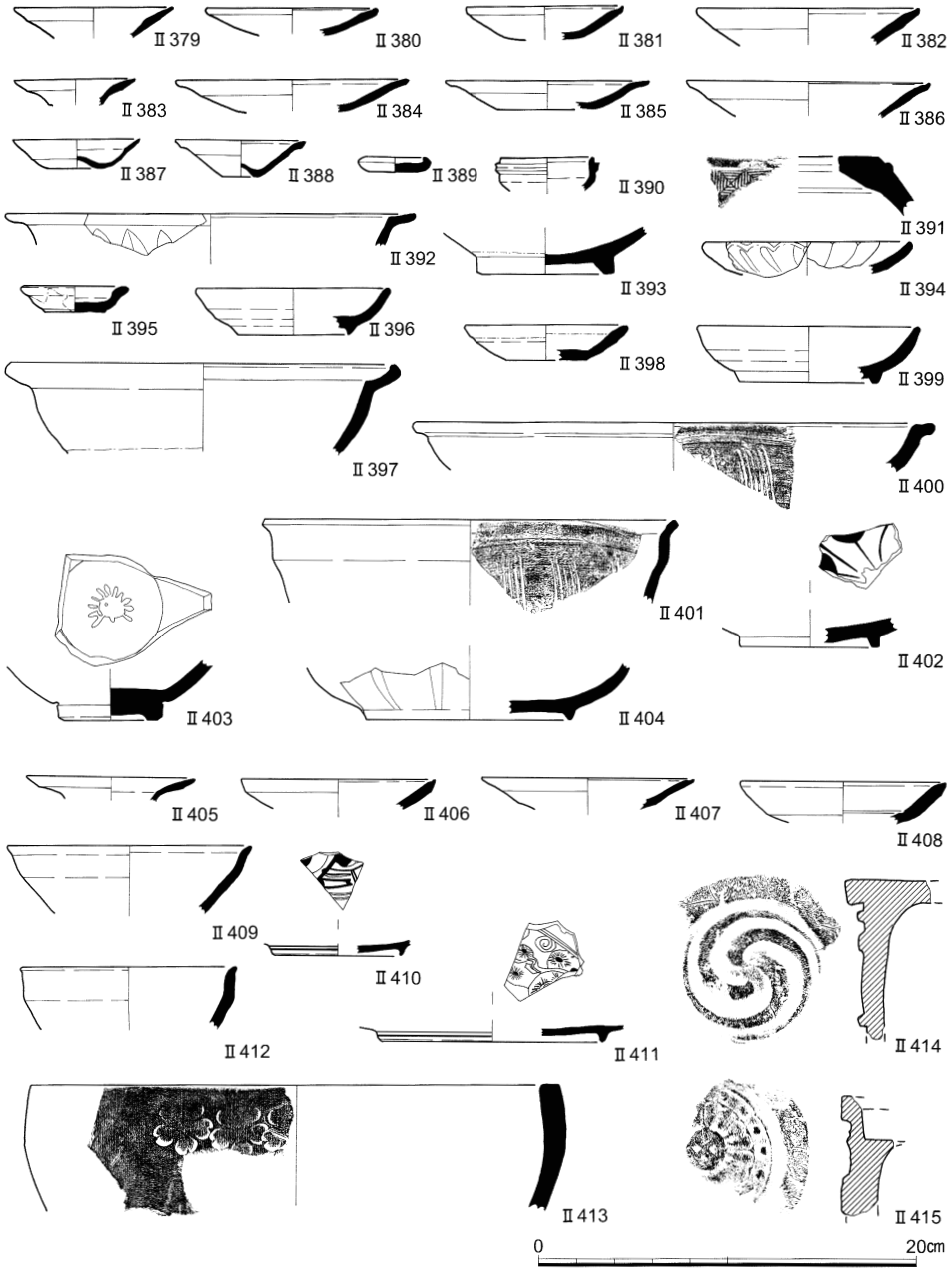


図118　茶褐色土出土遺物（Ⅱ379～Ⅱ390土師器，Ⅱ391瓦器，Ⅱ392青磁，Ⅱ393・Ⅱ394白磁，Ⅱ395～Ⅱ398灰釉系陶器，Ⅱ399～Ⅱ402陶器），暗黄灰色土出土遺物（Ⅱ403青磁，Ⅱ404陶器），黄灰色土出土遺物（Ⅱ405～Ⅱ408土師器，Ⅱ409灰釉系陶器，Ⅱ410・Ⅱ411青花），ＳＥ２出土遺物（Ⅱ412灰釉系陶器），ＳＤ134出土遺物（Ⅱ413瓦器，Ⅱ414・Ⅱ415軒丸瓦）

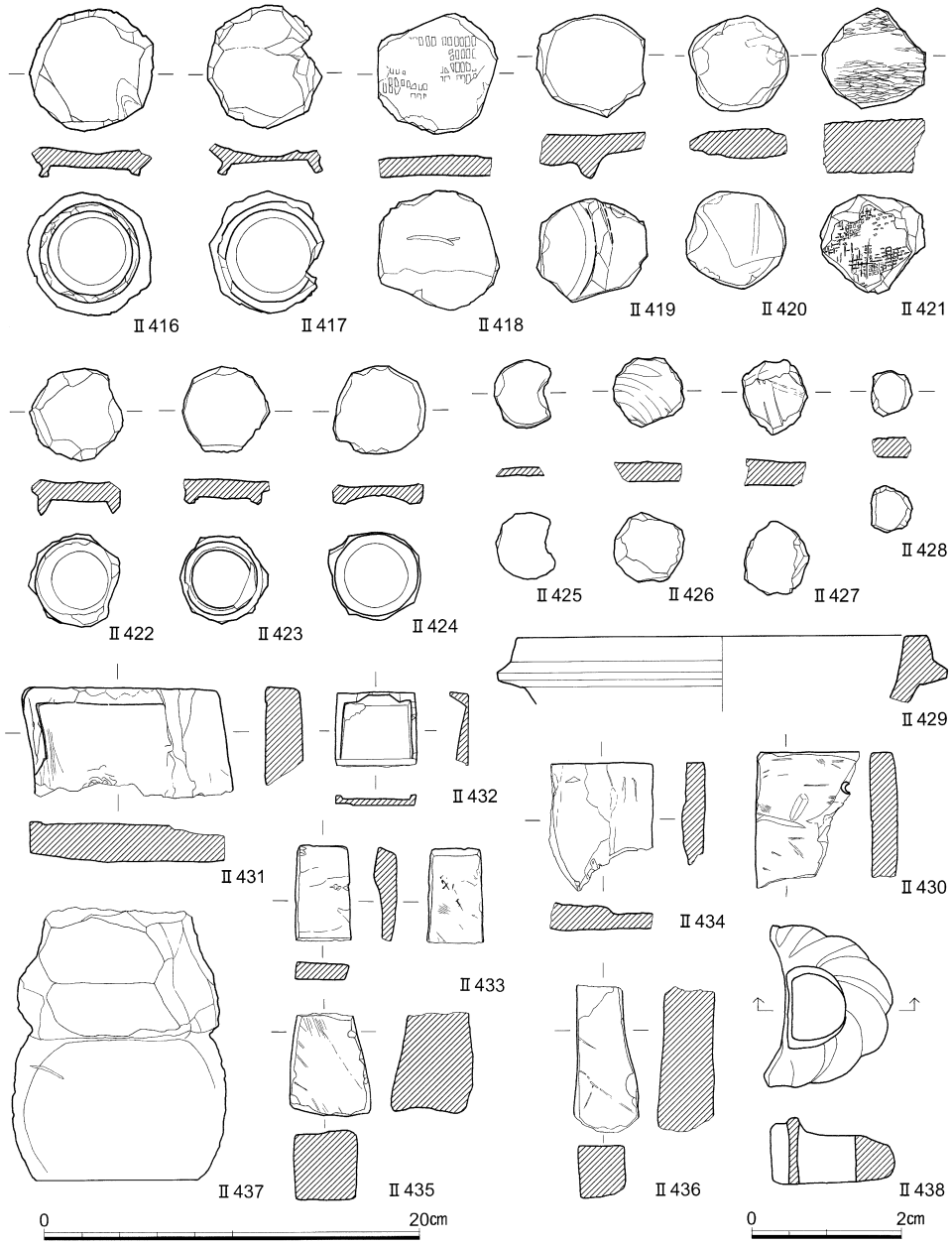


図119　加工円盤（Ⅱ416・Ⅱ417・Ⅱ419・Ⅱ422・Ⅱ423・Ⅱ425・Ⅱ428灰茶褐色土，Ⅱ418暗灰色土，Ⅱ420・Ⅱ421ＳＸ2，Ⅱ424黄灰色土，Ⅱ426・Ⅱ427茶褐色土），石鍋（Ⅱ429ＳＲ1灰茶褐色砂質土），滑石製温石（Ⅱ430灰茶褐色土），硯（Ⅱ431明灰色土，Ⅱ432暗灰色土），砥石（Ⅱ433・Ⅱ434茶褐色土，Ⅱ435灰茶褐色土，Ⅱ436灰色砂質土），一石五輪塔（Ⅱ437茶褐色土），青銅製刀栗形（Ⅱ438暗茶褐色土）　Ⅱ438縮尺1/1，ほか縮尺1/4

出の製品。Ⅱ409は灰釉系陶器天目の椀。Ⅱ410･Ⅱ411は磁器青花の皿底部。ともに器壁は薄く，高台の畳付は露胎。

Ⅱ412はＳＥ２出土遺物。灰釉系陶器天目の椀。

Ⅱ413～Ⅱ415はＳＤ134出土遺物。Ⅱ413は瓦器火鉢で，側面に桜花文のスタンプがある。Ⅱ414・Ⅱ415は軒丸瓦で，それぞれ左巴文と，中房に卍をもつ複弁蓮華文。

以上の中世遺物は，12世紀末葉～17世紀前半の長期にわたる。このうち，灰茶褐色土はおおむね14世紀前半代，暗茶褐色土･明灰色土は14世紀後半代，暗灰色土は15世紀前半代，茶褐色土は16世紀代，段差際の暗黄灰色土や黄灰色土などは17世紀前半代までのものを含む。遺物はいずれも小片で，長期にわたる耕地利用の過程で流入し堆積したのであろう。

加工円盤（Ⅱ416～Ⅱ428）　土器や瓦の破片を打ち欠き円盤状に加工したものが各層から総計25点出土した。素材は多様で，Ⅱ416・Ⅱ417は須恵器底部，Ⅱ418は常滑窯産陶器甕胴部，Ⅱ419は灰釉系陶器すり鉢底部，Ⅱ420は瓦器盤，Ⅱ421・Ⅱ427・Ⅱ428は硬質焼成の瓦，Ⅱ422は白磁椀，Ⅱ423は青磁椀，Ⅱ424は灰釉系陶器天目椀のそれぞれ底部，Ⅱ425は土師器皿底部，Ⅱ426は須恵器甕胴部。基本は側面を打ち欠いて形を整えるものだが，軟質のものでは明らかに研磨を加え仕上げている（Ⅱ420・Ⅱ425など）。破損の少ない20例の法量は，径で40㎜と50㎜前後，重さで20ｇと40ｇ前後に，ある程度まとまりがみられた（図120）。同種の遺物は「円盤状土製品」とも呼ばれ，草戸千軒町遺跡など各地の中世集落遺跡で多数出土が報告されるが，用途に関する定説はない。今回，中世に耕作地と想定され，土器出土量が多くはない中で多数を抽出できたことが注意される。

石 製 品（Ⅱ429～Ⅱ437）　Ⅱ429は滑石製石鍋。破損面を再加工した痕跡はない。Ⅱ430は滑石製板状製品。穿孔跡があり，両面とも擦過痕が著しい。類例からみて温石であろうが，片面がわずかにくぼむことから，ある時期硯として使用された可能性もある。

Ⅱ431･Ⅱ432は硯。Ⅱ431はおおぶりで厚手の製品で，黒灰色の粘板岩系の石材を用いている。側面は磨いて仕上げるが，裏面は素材の凹凸がそのまま残る。Ⅱ432は赤褐色の比較的軟質の石材を用いた小形品で，手前側の側面には擦り切りによる切断痕がそのまま残る。Ⅱ433～Ⅱ436は砥石。ただし，このうちⅡ433・Ⅱ434は，Ⅱ432の硯とまったく同じ石材であり，側面を整えているほかに顕著な使用痕跡も見られないことから，硯の素材ないし未製品である可能性も考えられる。Ⅱ435は黄褐色の，Ⅱ436は明灰色の，それぞれ目の細かい石材を用いた方柱状の製品。四面とも使用の痕跡が著しい。

Ⅱ437は凝灰岩製の一石五輪塔頂部付近。破損が著しい。このほか，図示していないが，

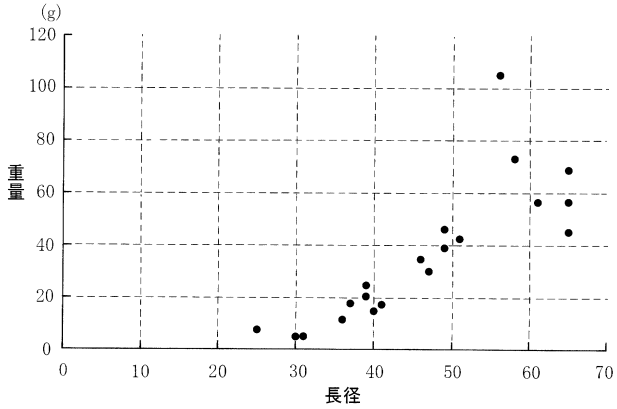


図120
土製円盤の大きさと重さ

花崗岩製の径30㎝に達する五輪塔水輪１点が，茶褐色土中より単独出土している。

青銅製品（Ⅱ438）　鋳造の青銅製品で，刀装具のひとつで紐掛けとして鞘に取り付ける「栗形」が出土している。螺旋状に装飾されるの紐掛け部には，黒漆の付着をわずかに認める。ほぼ同種のものが草戸千軒町遺跡ＳＫ4326より出土している〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1995　Fig.4－55〕。

近世の遺物（図121･122）　桟瓦については後述する。Ⅱ439～Ⅱ443は灰赤褐色土Ⅱ出土遺物。Ⅱ439～Ⅱ441は土師器皿。Ⅱ439は直線的に立ち上がり口縁端部がわずかに外反する器形で，Ｆ$_4$類に近い特徴を有する。Ⅱ440は薄手の小皿で，口縁は内彎気味に立ち上がる。これらはともに底部との変換点で破損しており，見込みの圏線の有無は不明。Ⅱ441は丸底の小皿。Ⅱ442・Ⅱ443は磁器染付の椀。

Ⅱ444～Ⅱ451は灰赤褐色土Ⅰ出土遺物。Ⅱ444･Ⅱ445は土師器皿。Ⅱ444は，器高の低い偏平な形態で，内面に墨書をもつ。Ⅱ445は手づくねで作った丸底の皿。Ⅱ446は陶器灯明皿。口縁部に帯状に煤が付着する。Ⅱ447は陶器椀の底部。削り出しの輪高台で，内側に「吉」の朱書がある。あるいは中世にさかのぼる遺物かもしれない。Ⅱ448・Ⅱ449は陶器椀。白色の胎土に淡黄色の釉が，高台周辺をのぞいて施される。京都・信楽系の製品であろう。Ⅱ450は磁器染付皿。Ⅱ451は磁器染付のくらわんか椀。

Ⅱ452～Ⅱ470は灰褐色土Ⅰ出土遺物。Ⅱ452～Ⅱ455は土師器皿，いずれも偏平な器形で，見込みに圏線がめぐる。Ⅱ456～Ⅱ459は陶器灯明受皿。Ⅱ457～Ⅱ459は，受部がまっすぐ立ち上がる形態で，黄白色の胎土に，内面に淡黄灰色の釉。京都・信楽系の製品とみられる。一方Ⅱ456は，受部が内傾する形態で，淡赤褐色の胎土に，内面に厚い白色釉がかかるなど特徴がまったく異なる。別産地のものであろう。Ⅱ460･Ⅱ461は灯明皿。Ⅱ461は

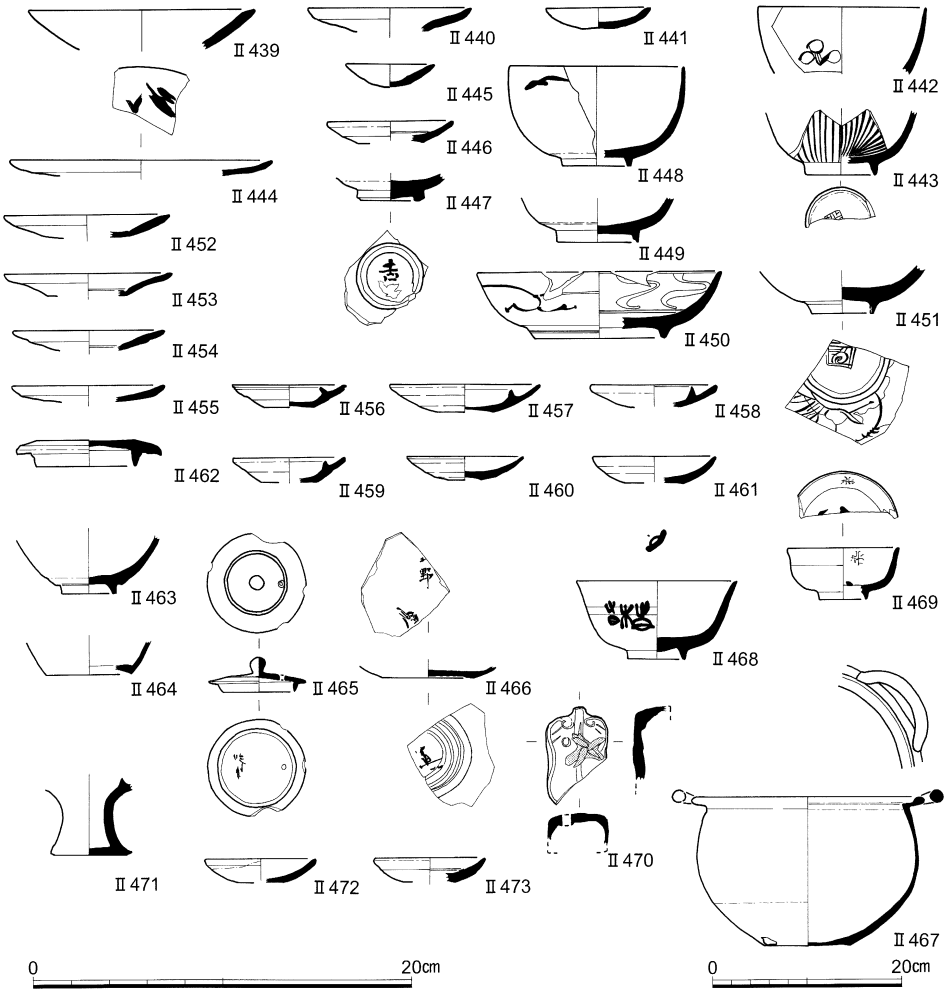


図121　灰赤褐色土Ⅱ出土遺物（Ⅱ439～Ⅱ441土師器），Ⅱ442・Ⅱ443磁器），灰赤褐色土Ⅰ出土遺物（Ⅱ444・Ⅱ445土師器，Ⅱ446～Ⅱ449陶器，Ⅱ450・Ⅱ451磁器），灰褐色土Ⅰ出土遺物（Ⅱ452～Ⅱ455土師器，Ⅱ456～Ⅱ467陶器，Ⅱ468～Ⅱ470磁器），赤褐色土出土遺物（Ⅱ471磁器，Ⅱ472・Ⅱ473陶器）　Ⅱ467縮尺1/8，ほか縮尺1/4

口縁外面に煤の付着を認める。いずれも内面のみ施釉。Ⅱ462は陶器蓋。完形品で，外面のみ黄灰色の釉。Ⅱ463は陶器椀底部。底面外縁を水平にしっかりと削り，高台の存在を際立たせている。Ⅱ464は陶器底部。薄手の器壁で，急須などの底部か。内外面とも錆釉が施され，茶褐色を呈する。底面には布目があり，側面に「温吉」のスタンプが押されている。Ⅱ465は陶器蓋。白色の胎土に透明釉がかかる。外面に茶色の二重線，内面には黒

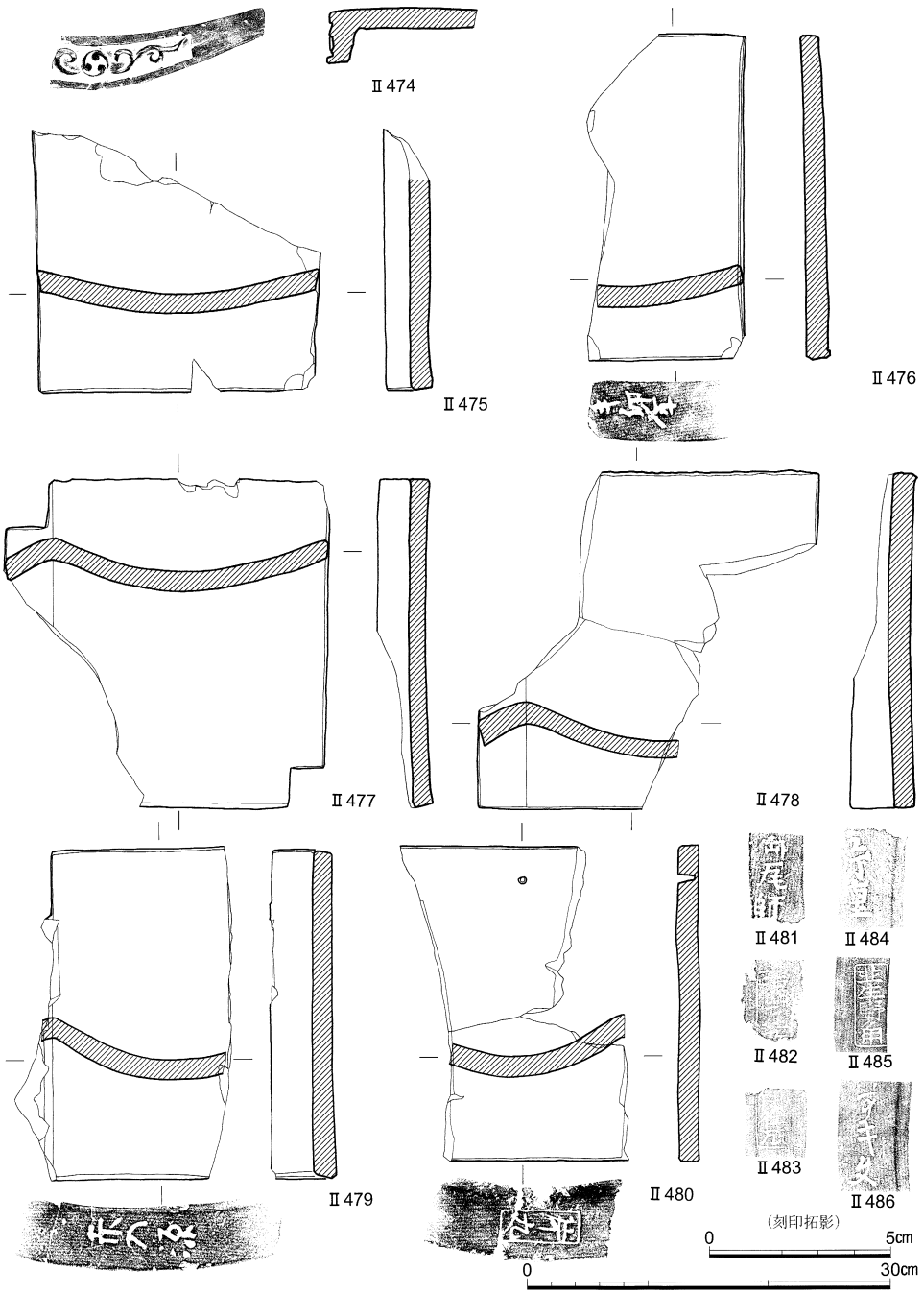


図122　近世桟瓦（Ⅱ474・Ⅱ486表土，Ⅱ475・Ⅱ479・Ⅱ484～Ⅱ485赤褐色土，Ⅱ476～Ⅱ478ＳＥ11，Ⅱ480・Ⅱ483灰褐色土Ⅰ，Ⅱ481・Ⅱ482灰赤褐色土Ⅰ）　縮尺1/6（刻印拓影1/2）

色の線描きで銘があるが判読できない。Ⅱ466は陶器の底部。器壁は非常に薄い。焼成の甘い灰色の素地に，底面を除き黄色に施釉されている。内面に暗茶褐色の線描きで「北野」と鳥の絵，底面に同色で銘とみられる崩れた「道八」の文字がある。Ⅱ467は陶器鍋で，灰褐色土Ⅰ層中で多数の破片が一括出土した。口径25㎝器高16㎝。環状の把手が２方向に付くと想定されるが，片側は破損して失われている。それ以外は良く遺存するので，把手が破損したことにより不要品として廃棄されたのであろう。底部には瘤状の三足が貼り付けられているが，底面より浮いた位置にあり，脚としては機能しない。灰白色の胎土で釉は淡黄色，底部周辺と頸部内面の屈曲部付近が露胎。京都・信楽系の製品だろう。外面は胴部下端付近のみ帯状に煤が付着し，内面は底部が黒変している。Ⅱ468は磁器染付の椀。口縁先端部のみ銹釉で茶褐色を呈する。同種の製品は構内各所で出土している。Ⅱ469は磁器染付小椀。内面に「染」字が釉描きされているのがわかる。Ⅱ470は磁器染付の中空の製品で，１孔をもつ。特徴から水滴の底部が欠損したものとみられ，相撲の軍配をかたどったものかと推測される。

Ⅱ471～Ⅱ473は赤褐色土出土遺物。Ⅱ471は陶器脚付灯明受皿。灰白色の胎土で，釉は黄灰色。底面は回転糸切り痕があり露胎，それ以外は全面施釉。Ⅱ472・Ⅱ473は陶器灯明皿。ともに黄白色の胎土で口縁端部周辺から内面全体に淡黄緑色の釉。見込みに粒状の目痕。京都・信楽系の製品だろう。

近世桟瓦（Ⅱ474～Ⅱ486）　灰赤褐色土Ⅰから表土にかけてと井戸ＳＥ11から，若干量が出土した。南側の208地点出土品と同銘の刻印をもつものがあり，この地に設営された幕末期土佐藩邸の所用瓦である。Ⅱ474は軒右桟瓦。中心飾りを三巴文，左右に唐草を配する。Ⅱ475･Ⅱ476は平瓦。Ⅱ476端面に刻印「キ卯平」。208地点では26点出土しており，本来「アキ卯平」とされる。Ⅱ477～Ⅱ479は右桟瓦。Ⅱ479は端面に刻印「赤の源」。Ⅱ480は左桟瓦とみられ，端面に枠囲み刻印「片九」。ほか，小片だが刻印が確認されたものは，その拓影のみ示す。Ⅱ481は「御瓦師」，Ⅱ482は枠囲み「福カ瓦作カ」，Ⅱ483は枠囲み「赤傳仕成」，Ⅱ484は「片重」，Ⅱ485は枠囲み「並生野角」，Ⅱ486は「アキ文」。このうちⅡ482「福カ瓦作カ」は，208地点では出土していない。

以上の近世遺物は，おおむね18・19世紀代のものである。このうち灰赤褐色土Ⅰ，灰褐色土Ⅰや赤褐色土には，例えばⅡ468などのように，瀬戸窯産とみられる磁器が存在するほか，桟瓦など明らかに幕末期以降の遺物が含まれる。一方灰赤褐色土Ⅱには，そうしたものはみられないので，おおむね18世紀代までを中心とする堆積層と判断される。

6　ＳＸ５の原位置論的検討

ＳＸ５は，ＳＲ１北肩のｇ層の上部で検出されたが（図87・112），ｇ層上面からの掘り込みはなかった。土器片の集中は掘削中に確認されたので，掘り込みがないか注意したが輪郭は見つからなかった。掘り込みは当初から存在しなかったのだろう。一個体分の土器（Ⅱ287）が単独で残存率も比較的高い状態で掘り込みもなく出土したこの遺構の，形成の要因を解釈するためには，堆積環境，出土状況，破片の特徴，といった情報を総合的に捉える必要があるが，この解釈には，土器の製作から取り上げまでの履歴についての解釈も必然的にともなうことになる。ここでは，紙幅の都合もあるので，基礎的な情報の提示と概要の説明にとどめ，詳細な検討と踏み込んだ解釈は場を改めて提示することにする。

集中部から回収された土器片は150点弱であるが，遺物の存在に留意しながらの掘削をおこないかつ破片の存在を確認してからは丁寧に掘り下げているので，回収し損なった破片はごくわずかといえる。このうちの約130点の破片については，発掘調査時に三次元的な出土位置を記録している。また，整理作業時には，出土位置の記録のある破片それぞれについて，器面や破面の磨滅程度や接合面の密着度合いなども観察・記録したほか，遺構写真をもとにして出土時点での向きや口縁方位などの把握に努めた（図版32－5，図版49）。

土器片を包含していたｇ層は，黄色みの強いシルト質土で，層中には径５㎜に満たない花崗岩風化砂粒が散在する。この地層は，東方から多量の礫をともなって黄色砂を削りながら進んできた白川系の水流が，南側にその礫を厚く堆積させて北側の黄色砂との間に東西方向の窪みをつくり，その窪みに緩やかに水を流しながらシルト分を運んできたことによって，形成されたと思われる。しかし，ラミナが確認されていないことと花崗岩粒が散在することから，水流のみによる堆積ではなく，水際のような環境だったと考えられる。

出土破片全体の標高は，南北方向では北側が高く東西方向では東側がいくぶん高いので，自然地形の特徴と同様である（図123・表14）。部位別分布は，東から西へと進むにつれて口縁部から胴部を経て底部へと移っていくが，出土時の口縁方位は，むしろ西を基調とする破片が多い。内面を上に向けて出土した破片は外面上向けの倍以上あり，器面の遺存状態も内面がやや磨滅している破片が最も多い。個々の破片の対応関係は単純ではないが，これらの傾向は，破片が水の影響で微動したことを示すかもしれない。破損後の移動がかすかだとすれば，内面上向けの出土破片が多い点は，破損時に内容物が存在していたことを示すかもしれないが，この解釈にも個々の破片についての詳細な分析を必要とする。

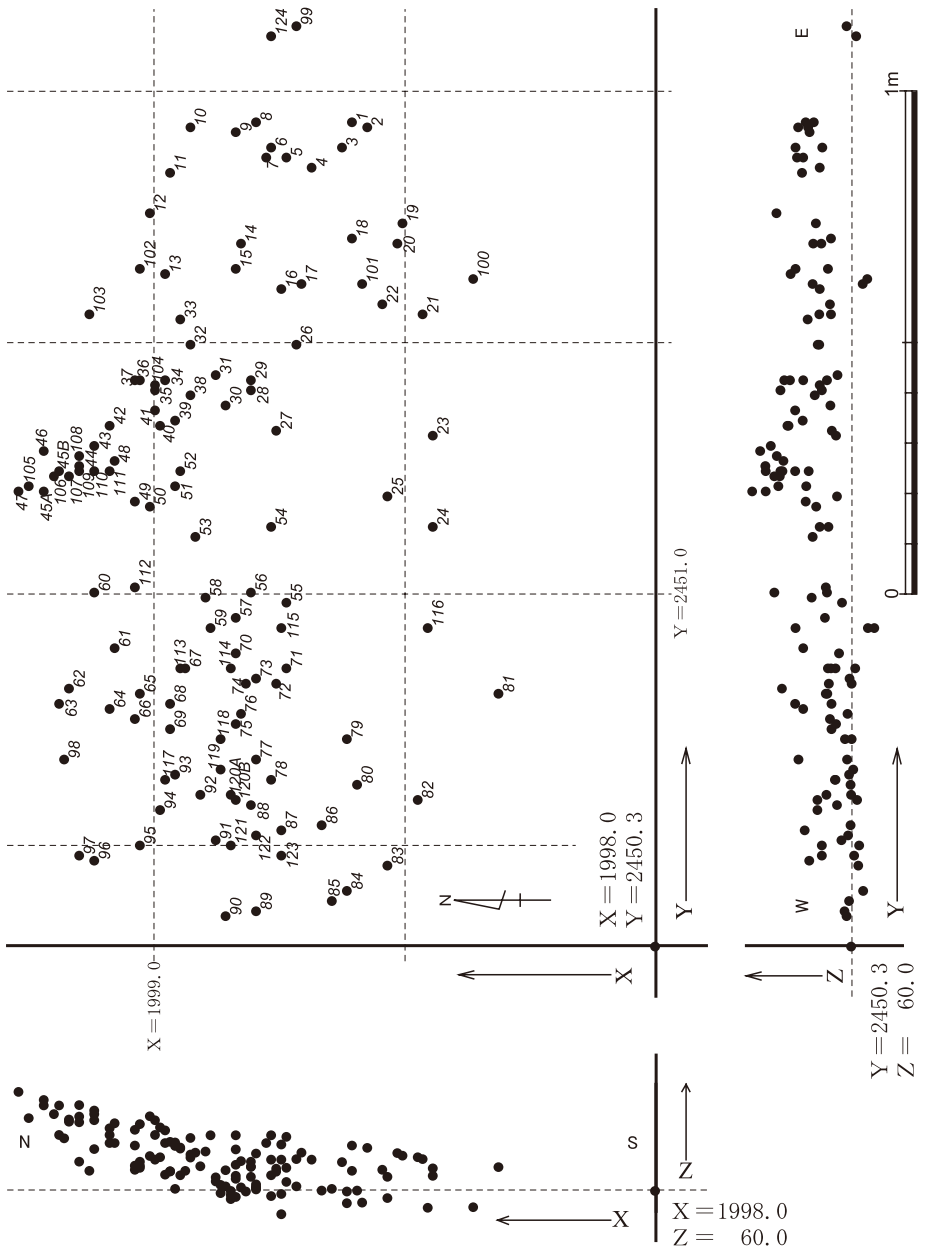


図123　ＳＸ５出土土器片の分布　縮尺1/15

表14　ＳＸ５出土土器片観察表

番号	部位	長軸	口縁方位	表裏(外)	X(南北)	Y(東西)	Z(標高)	外/内摩滅	破面摩滅
1	胴	39	南	外	1998.600	2451.930	60.090	Ｂ／Ｂ	Ｂ2Ｃ3
2	胴	36	西	外	1998.570	2451.920	60.085	Ｂ／Ｂ	Ｃ3
3	口縁	81	西	内	1998.620	2451.880	60.057	Ｂ／Ｂ	Ｂ1Ｃ3
4	頸	64	東	内	1998.680	2451.840	60.062	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
5	胴	32	南西	外	1998.730	2451.860	60.107	Ｂ／Ｂ	Ｂ2Ｃ1
6	胴	34	南東	内	1998.760	2451.880	60.110	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
7	胴	44	北	内	1998.770	2451.860	60.095	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
8	胴	50	地	立(北)	1998.790	2451.930	60.074	Ａ／Ｂ	Ｂ4Ｃ1
9	胴上	74	西	外	1998.830	2451.910	60.082	Ｂ／Ａ	Ｂ3Ｃ1
10	口縁	63	北	外	1998.920	2451.920	60.105	Ｂ／Ｂ	Ｂ4
11	胴	37	－	－	1998.960	2451.830	60.097	Ａ／Ａ	Ａ1Ｂ3
12	胴	60	天	立(西)	1999.000	2451.750	60.148	Ｂ／Ａ	Ｃ3
13	胴	74	南西	内	1998.970	2451.630	60.120	Ａ／Ｂ	Ｂ1Ｃ3
14	胴	54	－	立(西か)	1998.820	2451.690	60.059	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
15	胴	78	東	内	1998.830	2451.640	60.110	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ2
16	胴	46	天南	立(東)	1998.740	2451.600	60.062	Ａ／Ｂ	Ｂ4
17	口縁	80	東	内	1998.700	2451.610	60.076	Ａ／Ｂ	Ｂ2
18	胴	48	東	内	1998.600	2451.700	60.040	Ａ／Ｂ	Ｂ4Ｃ1
19	胴	28	北	外	1998.500	2451.730	60.070	Ａ／Ａ	Ｂ4
20	胴	35	西	内	1998.510	2451.690	60.075	Ａ／Ａ	Ｂ4
21	胴下	25	－	立(西)	1998.460	2451.550	60.063	Ａ／Ａ	Ｂ5
22	胴	67	北東	外	1998.540	2451.570	60.042	Ｂ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
23	胴	33	地南東	立(北東)	1998.440	2451.310	60.030	Ｂ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
24	頸	35	天	立(北)	1998.440	2451.130	60.045	Ａ／Ｂ	Ｂ4
25	胴上	30	北西	外	1998.530	2451.190	60.028	Ｂ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1Ｄ1
26	胴	47	北	外	1998.710	2451.490	60.063	Ｂ／Ａ	Ｂ3
27	胴	85	南	内	1998.750	2451.320	60.038	Ａ／Ｂ	Ａ3Ｂ1
28	胴	21	北東	外	1998.800	2451.400	60.058	Ａ／Ａ	Ａ2Ｂ1
29	胴	43	西	内	1998.800	2451.420	60.048	Ａ／Ｂ	Ｂ3
30	胴	93	南東	内	1998.850	2451.370	60.041	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ2
31	胴	73	天西	立(南)	1998.870	2451.430	60.027	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ2
32	胴	66	南西	内	1998.920	2451.490	60.066	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
33	胴	67	天南東	立(北東)	1998.940	2451.540	60.086	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
34	胴	88	西	内	1998.970	2451.420	60.095	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ2
35	胴上	46	天西	立(北)	1998.990	2451.400	60.140	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ2
36	胴	63	－	立(－)	1999.020	2451.420	60.132	Ａ／Ｂ	Ａ1Ｂ4
37	胴	81	天南東	立(北東)	1999.030	2451.420	60.121	Ａ／Ａ	Ａ1Ｂ3Ｃ3
38	胴	74	南	内	1998.920	2451.390	60.072	Ｂ／Ｂ	Ｂ3Ｃ3
39	口縁	105	西	内	1998.950	2451.340	60.096	Ａ／Ｂ	Ｂ5
40	口縁	79	西	内	1998.980	2451.330	60.126	Ａ／Ｂ	Ｂ5
41	口縁	75	北西	内	1998.990	2451.360	60.111	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
42	口縁	100	西	内	1999.080	2451.330	60.124	Ａ／Ｂ	Ｂ1Ｃ2
43	胴	33	西	内	1999.110	2451.290	60.159	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ1
44	胴	91	西	内	1999.140	2451.250	60.170	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ3

表14　つづき

番号	剝離	付着物	接合関係(接合状態)
1	内全		86(B),100(B)
2			32(B),33(C),51(B)
3	内外		4(C),10(C),99(B),124(B)
4			3(C),15(C),124(C),包(C),包4(B)
5			8(B),36(B),包(B),包(C)
6		内･断	なし
7			14(B),31(C),103(A),包1(B)
8			5(B),9(B),19(B),包(B),包(B)
9			8(B),19(C),99(C),包(B),包(B)
10	内		3(C),54(C),99(B)
11	内外	断	なし
12			13(B),53(C),55(C),103(C),包(C)
13			12(B),38(B),61(B),107(B),包(B)
14			7(B),31(B),32(B),33(B),103(×)
15			4(C),包4(B),包(C)
16			27(B),28(B),37(C),112(B)
17			94(C),124(B)
18			77(B),83(B),100(A),101(B)
19			8(B),9(C),20(B)
20			8(B),19(B),111(B),包(B)
21	外	内･外･断	なし
22	外		包(C)
23			29(B),36(B),包(C)
24	外		25(B),39(×),54(C),包(B)
25	内		24(B),36(C),包(B)
26			101(B),包1(C)
27			16(B),28(A),41(C),45A(B),47(C)
28			16(B),27(A),39(B),41(B),112(C)
29	外		23(B),30(A),110(A)
30	内外		29(A),36(C),37(B),110(B)
31	内外		7(C),14(B),32(B),包1(C)
32	内外		2(B),14(B),31(B),51(B),包8(C)
33			2(C),14(B),包(B)
34	外		35(A),38(C),45B(B),46(B),59(A),81(B),104(C),105(B),107(C)
35			34(A),40(B),42(C),59(B),81(B)
36	内		5(B),23(B),25(C),包(B),包(B)
37	内外		16(C),30(B),48(C),113(B),包(B),包(C)
38	外		13(B),34(C),81(C),107(A)
39	内外		24(×),28(B),41(A),54(B),112(B),包(C)
40			35(B),42(B),59(B),包(A),包(B)
41	内外		27(C),28(B),39(A)
42	外		35(C),40(B),50(B)
43			44(A),48(A),62(A)
44	内		43(A),45A(B),48(B),49(C),62(C)

表14　つづき

番号	部位	長軸	口縁方位	表裏(外)	X(南北)	Y(東西)	Z(標高)	外/内摩滅	破面摩滅
45A	胴	35	北	内	1999.210	2451.200	60.169	A／B	B2C1
45B	胴	98	西	内	1999.180	2451.240	60.169	A／B	A1B5C1
46	胴	50	北	内	1999.210	2451.280	60.180	A／B	B4
47	胴	56	西	内	1999.260	2451.200	60.196	A／B	B3?1
48	胴央	87	西	内	1999.070	2451.260	60.134	A／B	C4
49	胴央	85	南	内	1999.030	2451.180	60.090	B／B	B1C4
50	口縁	76	天	立(南)	1999.000	2451.170	60.069	A／A	B5
51	胴	38	北西	内	1998.950	2451.210	60.089	A／B	B5
52	胴下	55	天北西	立(南西)	1998.940	2451.240	60.084	A／A	C3
53	胴	49	南	内	1998.910	2451.110	60.076	A／B	B1C3
54	口縁	79	東	内	1998.760	2451.130	60.062	A／B	B4
55	胴央	68	東	外	1998.730	2450.980	60.018	B／B	B1C3
56	胴下	51	南	外	1998.800	2451.000	60.048	B／B	C4
57	胴下	43	南	内	1998.830	2450.950	60.052	B／B	B2C2
58	胴下	35	北東	外	1998.890	2450.990	60.078	A／B	B4
59	胴上	40	南東	外	1998.880	2450.930	60.110	B／B	B4
60	胴	50	南東	内	1999.110	2451.000	60.152	B／B	B4C1
61	胴央	81	北西	内	1999.070	2450.890	60.095	A／B	B3C2
62	胴央	62	南	内	1999.160	2450.810	60.137	B／B	B1C3
63	胴下	35	南西	内	1999.180	2450.780	60.111	A／B	B3
64	胴下	46	北西	内	1999.080	2450.770	60.095	A／B	B4
65	胴下	57	南	内	1999.020	2450.800	60.050	A／B	B5
66	胴下	22	－	－	1999.030	2450.750	60.042	B／B	B4
67	胴央	53	天	立(東)	1998.930	2450.850	60.040	A／B	B1C3
68	胴下	52	北	外	1998.960	2450.780	60.039	A／A	B4
69	胴下	41	西	内	1998.960	2450.730	60.039	A／B	B3C1
70	胴	33	－	内	1998.830	2450.880	60.024	B／A	A1B3
71	胴下	30	北東	外	1998.730	2450.850	60.046	A／A	B3
72	胴下	54	南東	内	1998.750	2450.820	60.044	A／B	B2C2
73	胴下	41	－	立(－)	1998.790	2450.830	60.003	A／B	B1C3
74	胴央	65	地西	立(北)	1998.810	2450.820	59.999	A／A	B2C2
75	胴下	34	北	外	1998.830	2450.740	60.030	A／B	B3C1
76	胴央	78	南西	内	1998.820	2450.760	60.007	A／B	B2C3
77	胴	42	西	内	1998.790	2450.670	60.008	A／A	B3C1
78	胴下	48	西	内	1998.760	2450.630	60.031	A／B	B3C1
79	胴央	43	西	内	1998.610	2450.710	59.999	B／B	B4C1
80	底	70	南	内	1998.590	2450.620	60.001	A／B	B5C1
81	胴	33	北東	外	1998.310	2450.800	60.047	B／B	B2C1
82	底近	29	南	内	1998.470	2450.590	60.067	A／B	B3
83	胴央	96	東	内	1998.530	2450.460	59.986	B／B	B3C3
84	底近	70	西	内	1998.610	2450.410	59.976	A／B	B3C3
85	胴下	33	西	内	1998.640	2450.390	60.004	B／B	B3
86	胴	82	南	内	1998.660	2450.540	60.001	B／B	B1C3
87	胴下	42	北東	外	1998.740	2450.530	60.092	B／B	B3C1

表14　つづき

番号	剝離	付着物	接合関係(接合状態)
45A	外		34(B),47(B),105(B)
45B	内外		27(B),44(B),47(B),49(C),106(C)
46			34(B),105(A),106(B),107(A)
47	外		27(C),45A(B),45B(B),104(C)
48	内		37(C),43(A),44(B),62(B),113(B),包(B)
49	内		44(C),45A(C),62(B),71(B),74(A),包5(B)
50	内外		42(B),94(B)
51			2(B),32(B),包8(C)
52	内		72(C),包(B),包(B)
53			12(C),55(C),103(B),包7(B),包1(C)
54			10(C),24(C),39(B),包(C)
55			12(C),53(C),包6(B),包(C)
56			包6(C),包(B),包(C)
57			73(C),包(B)
58			68(B),97(B)
59			34(A),35(B),40(B)
60	外		包(B),包(B)
61	内外		13(B),72(C),74(×),107(B)
62	内		43(A),44(C),48(B),49(B),包5(B),包(C)
63			98(A),122(B)
64			なし
65			76(C),78(A),包(B),包(C)
66		内･断	なし
67			113(A)
68			58(B),83(B),97(B)
69			115(B),121(B)
70	外全		なし
71	内		49(B),72(C),74(C)
72	内		52(C),61(C),71(C),74(C),包(×)
73			57(C),89(×),包5(C)
74	内外		49(A),61(×),71(C),72(C),107(B)
75			78(B),包(×)
76			65(C),83(B),101(×),包7(B),包(C)
77			18(B),83(B),86(B),100(B)
78			65(A),75(B)
79	内		包3(C)
80	外	剝離部	82(B),84(B),119(×)
81			34(B),35(B),38(C)
82			80(B),119(×),120B(C)
83			18(B),68(B),76(B),77(B),97(B),101(B),包(C)
84	内		80(B),119(C),包(B)
85			87(B),95(×),包(B)
86			1(B),77(B),包(A)
87			85(B),包(B),包(B)

表14　つづき

番号	部位	長軸	口縁方位	表裏(外)	X(南北)	Y(東西)	Z(標高)	外/内摩滅	破面摩滅
88	胴下	30	－	内	1998.800	2450.580	60.028	Ａ／Ｂ	Ｂ4Ｃ1
89	胴下	42	南西	内	1998.790	2450.370	60.013	Ｂ／Ａ	Ｂ3Ｃ1
90	胴	68	西	立(北)	1998.850	2450.360	60.009	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ3
91	底近	57	天北	立(東)	1998.870	2450.510	60.019	Ａ／Ｂ	Ｂ4Ｃ1
92	胴下	43	南	立(東)	1998.900	2450.600	60.049	Ａ／Ｂ	Ｂ5
93	底近	56	地東	立(南)	1998.950	2450.640	60.004	Ａ／Ａ	Ｂ3Ｃ3
94	口縁	59	北東	外	1998.980	2450.570	60.067	Ｂ／Ａ	Ｂ2Ｃ3
95	底近	116	西	内	1999.020	2450.500	60.058	Ａ／Ｂ	Ｂ7Ｃ1
96	胴下	48	－	内	1999.110	2450.470	60.083	Ａ／Ｂ	Ｂ5
97	胴下	117	天	立(北)	1999.140	2450.480	60.058	Ａ／Ａ	Ｂ4Ｃ2
98	胴下	58	地東	立(北)	1999.170	2450.670	60.104	Ｂ／Ａ	Ｂ5
99	頸	72	北	内	1998.710	2452.120	60.009	Ａ／Ｂ	Ｂ4
100	胴	68	天	立(東)	1998.360	2451.620	59.968	Ｂ／Ａ	Ｂ2Ｃ2
101	胴	70	南東	内	1998.580	2451.610	59.977	Ａ／Ｂ	Ｂ1Ｃ4
102	胴下	24	－	外	1999.020	2451.640	60.046	Ａ／Ａ	Ｂ4Ｃ1
103	胴	57	西	外	1999.120	2451.550	60.040	Ｂ／Ｂ	Ｂ3Ｃ2
104	胴		北西	内	1998.990	2451.410	60.062	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ1
105	胴	31	北西	内	1999.240	2451.210	60.144	Ａ／Ｂ	Ａ2Ｂ2
106	胴	43	西	内	1999.190	2451.230	60.152	Ａ／Ｂ	Ａ1Ｂ2Ｃ1
107	胴	76	北	外	1999.160	2451.230	60.141	Ａ／Ａ	Ｂ4Ｃ2
108	胴	39	東	外	1999.140	2451.270	60.147	Ｂ／Ａ	Ｂ2Ｃ2
109	胴	31	－	－	1999.140	2451.240	60.136	Ａ／Ａ	Ａ4
110	胴	56	北西	外	1999.110	2451.240	60.140	Ａ／Ａ	Ｂ3Ｃ2
111	胴	41	北東	内	1999.080	2451.240	60.111	Ａ／Ｂ	Ａ1Ｂ4
112	胴	45	－	立(－)	1999.030	2451.010	60.050	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ2
113	胴央	63	地南	立(東)	1998.940	2450.850	60.031	Ａ／Ｂ	Ｂ1Ｃ3
114	胴下	53	北	内	1998.840	2450.850	59.992	Ａ／Ｂ	Ｂ3Ｃ1
115	胴下	26	西	外	1998.740	2450.930	59.954	Ａ／Ｂ	Ｂ4
116	底近	32	南西	外	1998.450	2450.930	59.967	Ｂ／Ｂ	Ｂ4
117	胴下	41	－	内	1998.970	2450.630	60.032	Ａ／Ｂ	Ｂ5
118	胴下	96	南	内	1998.860	2450.710	60.012	Ａ／Ｂ	Ｂ2Ｃ2
119	底近	57	地東	立(北)	1998.860	2450.650	59.996	Ａ／Ａ	Ｂ4
120Ａ	胴下	20	北西	内	1998.840	2450.600	60.000	Ｂ／Ｂ	Ｂ4
120Ｂ	底近	65	西	内	1998.830	2450.590	59.988	Ａ／Ａ	Ｂ3Ｃ2
121	胴下	40	地北	立(東)	1998.840	2450.500	59.984	Ｂ／Ｂ	Ｂ2Ｃ1
122	胴下	48	東	内	1998.790	2450.520	60.006	Ｂ／Ａ	Ｂ5
123	胴下	28	－	内	1998.740	2450.480	59.994	Ｂ／Ｂ	Ｂ4
124	口縁	45	西	内	1998.760	2452.100	59.990	Ａ／Ｂ	Ｂ3

口縁方位：出土時に破片の口縁側が示していた方位を八分表記。立位出土破片は天地を加味した八分表記。「－」は不明。
表裏（外）：出土時に天を向いていた破片の表裏。立位出土は外面の向いていた方位。「－」は不明。
外／内磨滅：内外面の調整が、よくわかる（Ａ）、わかりにくい部分が多い（Ｂ）。
破面磨滅：破面が、ほとんど磨滅していない（Ａ）、ほとんど磨滅していないが縁部がやや磨耗（Ｂ）、やや磨滅し縁部も磨耗（Ｃ）。
数字は破面の合計数（「Ｂ２Ｃ２」ならば、破面の合計は４面で、状態Ｂの破面が２つと状態Ｃの破面が２つある。）

表14　つづき

番号	剝離	付着物	接合関係(接合状態)
88			なし
89			73(×),包(B)
90	内	断(底方)	なし
91			93(B),95(B),114(B),包2(B),包(B)
92	外		93(C),114(C),包(C)
93	内外		91(B),92(C),114(C),116(C)
94	内外		17(C),50(B)
95	内		85(×),91(B),98(B),120B(B),包(B),包(C),包(C),包(B)
96	内	外･断	なし
97			58(B),68(B),83(B),118(B),包(B)
98			63(A),95(B),包(B)
99	内		3(B),9(C),10(B),包(C)
100			1(B),18(A),77(B)
101			18(B),26(B),76(×),83(B)
102	外	内･断	なし
103			7(A),12(C),14(×),53(B),包1(B)
104	内外		34(C),47(C)
105			34(B),45B(B),46(A),106(B)
106			45A(C),46(B),105(B)
107			13(B),34(C),38(A),46(A),61(B),74(B)
108			110(A),包3(C)
109	外		110(A),111(A)
110	内外		29(A),30(B),108(A),109(A),包3(C)
111			20(B),109(A)
112			16(B),28(C),39(B)
113	内		37(B),48(B),67(A)
114	内		91(B),92(C),93(C),包(B),包(B)
115			69(B)
116			93(C)
117	内	剝離部	なし
118	内		97(B),119(A),120B(A),122(C),包(C)
119			80(×),82(×),84(C),118(A),120B(B)
120A			122(C),包(C)
120B	内		82(C),95(B),118(A),119(B)
121			包(C),69(B)
122			63(B),118(C),120A(C),包(B)
123			なし
124			3(B),4(C),17(B)

剝離：器面の内面や外面に剝離部があるもの（「全」はその全面が剝離）。空欄は剝離部なし。
付着物：黒色の付着物が器面ないし破面にあるもの（内：内面、外：外面、断：破面）。空欄は付着物なし。
接合関係：破面での接合が、ぴったりあう（A）、縁部に隙間がありやや不安定（B）、縁部に隙間があり不安定（C）。
　　数字は接合する破片の番号。「包」は出土位置を記録していない包含層出土の破片。
なお、土器片の器表面や破面の磨滅状態については図版49に具体例を示している。

部位によって破片の形状にある程度の傾向がある（図124）。これには，製作技術と相関する要素と，破損理由と相関する要素とがあると思われる。こうした相関は，個々の破片の形状という側面に加え，接合によって明らかになる破損線の走向や切り合いからうかがえる破損の単位，接合破片の分布特性，などの側面にも反映されている。なお，器面の色調や状態などから，口縁や底部の付近には，何らかの使用痕跡と思われる特徴をもつ破片もある。現段階では，ＳＸ５について，内容物のある壺が落下した状況を想定している。

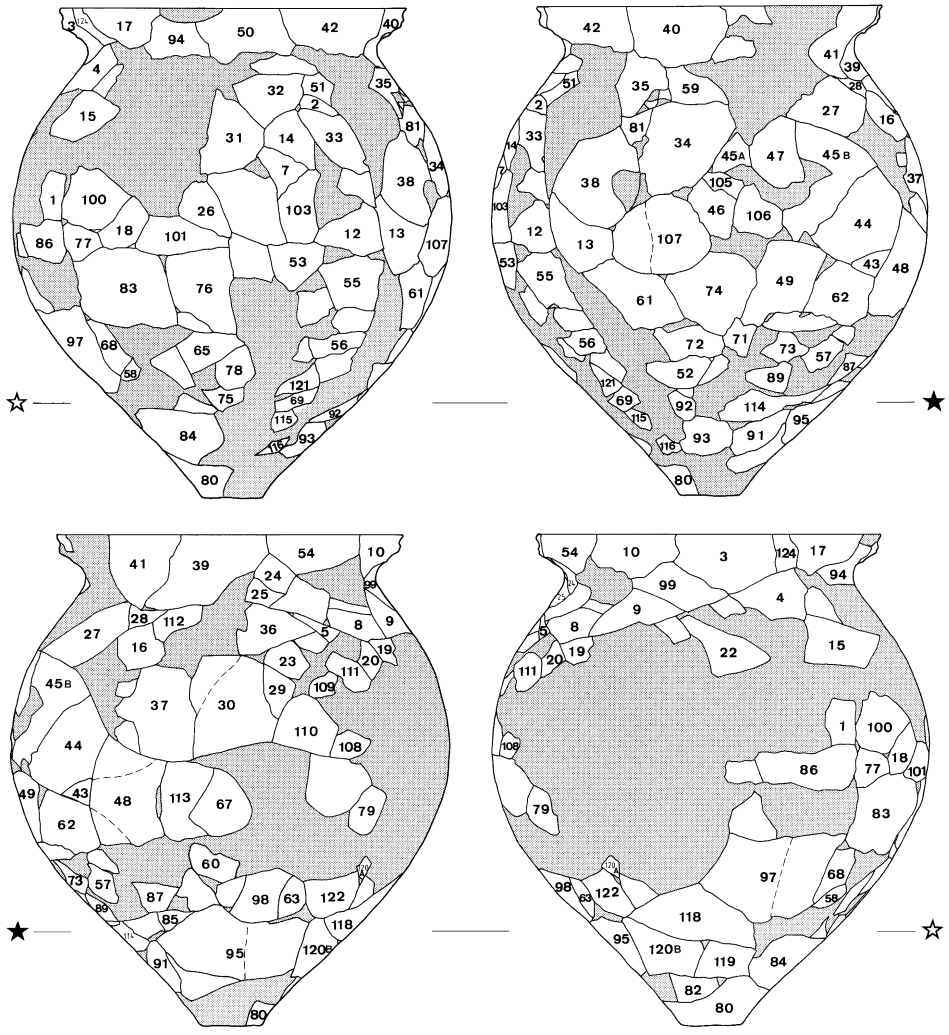


図124　ＳＸ５出土土器片の接合のしかた　縮尺約1/6

7　中近世層の花粉分析

経緯と経過　今回の調査区では，中世以降のものとみられる細い溝群が全域で多数検出され，耕作地としての土地利用が想定されている。このうち，とくに西半部の段差内ではこうした状況が複数層にわたってみられることから，これらの堆積層から連続的に試料を採取し花粉分析を実施することは，調査地での耕作や周辺植生の具体相の復元と，その長期にわたる連続的な変遷過程を把握するうえできわめて有効と考えられた。また，花粉分析を用いた歴史時代以降の植生や農耕史の検討事例がきわめて乏しい現状にあって，中世から近世にかけて都市近郊農村となっていくことが知られる調査地での分析は，貴重な比較事例を提供するものといえる。よって，今回，調査区西壁の表土以下の堆積層を採取して分析を実施することとした。

試料と層序　試料の採取地点は図114，層序は図89も参照。地層ごとに約３㎝の厚さで連続的に採取した試料番号１～48（以下，№１～48と表記）のうち計32試料を対象とする（図125柱状図）。なお，暗灰色土層より下位の試料も採取し検鏡しているが，花粉粒数がきわめて少なかったため，ここではとりあげていない。

分析方法　1)試料の湿潤重量（100～150ｇ）を秤量。2)10％水酸化カリウム水溶液処理。3)植物遺体を篩別除去。4)傾瀉法と蒸発皿処理による砕屑物の除去。5)塩化亜鉛飽和水溶液による比重分離。６)フッ化水素酸処理。７)アセトリシス処理。８)グリセリンジェリーで封入。９)カバーガラスの周囲をネイルエナメルで密封。

分析結果（図版50，図125）　№48から22までの層準は木本花粉粒数が非常に少なく，統計的に把握することができなかった。しかし，このうち，№40から№22は草本花粉粒数が統計上必要な250を越えることから，草本花粉粒数を基数に割合を出し草本花粉の出現傾向を表した。№48から№41は，草本花粉粒数も非常に少ない。№19から№１は木本花粉粒数が250を越えることから，木本花粉粒数を基数として，草本花粉，シダ植物・コケ植物胞子の出現率を表した（以上図125)。計数の過程では劣化・溶触によって同定不能の花粉も多かった。以下，特徴的花粉の出現傾向を略述する。

①草本花粉粒数が250を越える№40－22では，アブラナ科とイネ属花粉が相対的に多く出現する。そのうち，№35－22ではアブラナ科花粉の出現が顕著で，とくに№35－28では草本花粉を基数にした割合でイネ属花粉が１％前後しかあらわれないのに対し，アブラナ科花粉は90％前後あらわれている。一方，より上位の№24－22では，アブラナ科花粉が減

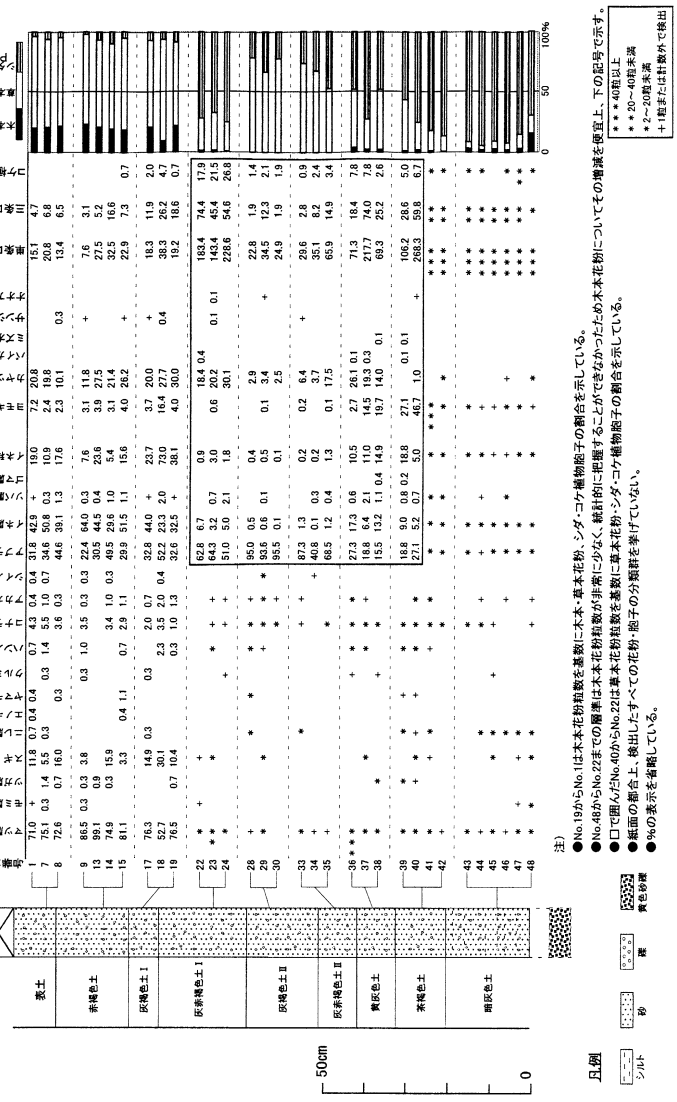


図125　花粉ダイアグラム

少し，イネ属花粉が増加する。さらに，№19－１ではイネ属の方がやや優勢となる。また，アブラナ科とイネ属以外の草本花粉とシダ植物の出現率が低下している。

②№40と39は，他の層準で検出していない栽培植物のゴマ属花粉を含み，ソバ属や畑の雑草と考えられるヨモギ属，アカザ科やナデシコ科などの草本花粉をともなう。

③木本花粉粒数が250を越える№19－１はマツ属花粉が圧倒的に多く出現する。

ま と め　調査地周辺の植生と農耕に関して，以上の分析結果に簡単な考察を加え，まとめとする。

№40－22の草本花粉の主体がアブラナ科とイネ属花粉であることは，おおよそ中世後半期以降の栽培対象物が，これらを中心としていたということが考えられる。そして，ゴマ属やソバ属の栽培も含む多様なありようが，近世以降にアブラナ科の栽培へと集約していったことを反映している可能性がある。アブラナ科花粉の高比率の出現については，かつて他地域でも指摘されているが，品種の同定の問題も含めた課題が多く残されている〔藤田ほか1986〕。今後も検討を継続する必要がある。

木本花粉粒数が大幅に増加する№19－１は，幕末期以降に比定される層準である。この時期の周辺山域にアカマツの二次林が成立していたことを示すと考えられる。絵図と古地図の表記から，京都近郊の山域は，近世の禿げ山的景観から近代における松林へと変遷したと指摘されている〔小椋1992〕。今回は，これを示唆する結果となった。この段階の草本花粉の出現傾向は，イネ属を主体として裏作にアブラナ科植物を栽培，雑草除去などの管理強化，という形態をうかがわせるものであった。これは，調査地が幕末の一時期に土佐藩邸敷地内となったことを契機とする変化であるのか，ひろく幕末期以降の一般的傾向ととらえるべきか，現状では判断できない。周辺での分析例の増加を待ちたい。

8　小　　結

今回の発掘調査成果について，周辺での成果を参照しつつ，まとめておきたい。

弥生前期の水田遺構　縄文晩期の突帯文土器と弥生前期の遠賀川式土器の包含層の上面において，小区画の水田遺構が確認できた。土石流にともなう堆積である厚い黄色砂に覆われており，一部を除き遺存状態は良好であった。包含層の遠賀川式土器は前期新段階のものまで含まれ，また，今回も含めて黄色砂より下層では弥生中期以降の土器は出土していないことから，水田の造営時期は弥生前期後葉～末に限定できる。

京都盆地における当該期の水田遺構としては，西南方700ｍにある220地点に次いで２例

目となる〔伊藤1999ａ〕。比叡山西南麓の扇状地上には，適地を選択して随所に開田されていた可能性がいっそう高まったと言えよう。とりわけ今回の事例は，東水田と西水田という２つのまとまりが示すように，平坦地を広面積に確保できない土地条件のなかで，微起伏を巧みに取り込んで小規模な水田単位が複数設定されていた状況が明らかとなった。保険として複数の小規模水田を開き，そのいくつかからでも必要最低限の収穫を確保したのか，あるいはシーズン単位で輪作したものとみられる。ただし，プラント・オパール分析では，検出はされたものの量が少なく，長期の耕作は想定できない，という結果であった。これは，220地点の場合とは対照的な結果であり，地形環境に対応した，短期移動型か安定した継続型かというような耕作形態の違いを反映するものか，たんに，短期間で埋没しただけのことであるのか，今後検討を深める必要がある。

なお，水田に対応する居住域は，東南約100ｍの６地点周辺の可能性が高いと考えられる〔伊藤1999ｂ〕。一帯は，東方より張り出す尾根上の微高地で，今回の水田面標高との比高差は３～４ｍ程度をはかる。ほぼ弥生前期新段階にまとまる土器が一定量出土しているほか，（財）京都市埋蔵文化財研究所の調査では，土器棺墓とみられる遺構が複数確認されており〔長戸ほか1997･竜子1999〕，居住区が近接して存在すると考えても不自然ではない。今後調査の機会が生じる場合には，慎重な配慮が必要になろう。

縄文晩期・弥生前期の遺物　包含層中から5000点前後をとりあげた遺物は，縄文晩期末の船橋式・長原式段階の突帯文土器を主体として，ほかに少量の晩期中葉の篠原式，弥生前期遠賀川式土器，および若干の石器類であった。これらは，残念ながら層位的に明瞭に弁別される調査状況にはなかったが，小区画水田が造営されるに至るまでの，調査地一帯での活発な活動の存在を示している。このうち石器類の検討からは，挟み撃ちによる剝片剝離技術が多用されながら錐や石鏃が製作されていく過程が，剝片石器と礫石器との関係から推測され，調査地における石器製作を示唆する興味深い評価がえられた。一方，土器型式においては，晩期中葉の滋賀里Ⅳ式･口酒井式期の資料を欠いており，その段階は，北東方のより標高の高い一帯に活動の中心を移していたものとみられる。

なお，特異な資料として，浮線文土器と亜流遠賀川式土器の出土がある。前者については，西日本の複数の遺跡で出土が確認されつつあるので，晩期段階の広域交流網のなかに当遺跡も属していたことを裏付ける資料が，あらたに追加されたと評価できる。後者については，奈良県唐古・鍵遺跡で出土が紹介されているほかは〔橋本2003〕，近畿地方での類例を知らない。遺跡の地理的位置を反映したものであろうが，珍しい事例といえよう。

小　　結

弥生中期以降の地形と遺跡形成　弥生前期末～中期初頭の鍵層として評価されてきた黄色砂を切って流れる大規模な洪水による流路ＳＲ１・ＳＲ３の存在と，その後の長期にわたる地形環境の変遷を明瞭に把握できたことも，今回の大きな調査成果である。これまで周辺では，調査地の北方100ｍに位置する54地点〔岡田・吉野1979〕および北東200ｍの229地点〔千葉ほか1998〕で中期前葉～中葉の方形周溝墓が確認されていたが，今回は中期後葉の土器が一括出土したほか，石庖丁の出土をみている。土石流により黄色砂が２ｍあまり埋積して前期の水田が廃絶し，それほど時を経ずに洪水による谷地形の形成があった後，中期のうちにすみやかに低地を利用した水稲耕作が再開されていたことが十分に予想される。今後は，このような弥生中期以降の遺跡についても，生産領域などの認定を視野に入れた調査にのぞみ，活動空間の変遷を具体的に復元することが課題となろう。

また今回，弥生中期後葉の壺１個体の破片がまとまって出土したＳＸ５において，個々の破片の出土位置や遺存状態を詳細に検証する原位置論的な検討をとおして，当時の人の行動や身ぶりなどを推測する試みをおこなった。遺跡形成の担い手としてのひとびとのありようを実証的に復元するために，必要な検討作業を呈示した，意義深い事例となろう。

平安時代の遺跡の性格　古代以降には，上述の流路や谷地形の埋積が進行し，窪地や段差として地形に影響をとどめながらも，土地条件は安定したとみられる。今回まとまって出土した遺物は，土師器は薄手の「て」字状口縁手法，灰釉陶器はＫ90号窯式，緑釉陶器は畿内産がおおむね主体となっており，9世紀後葉～10世紀前葉に盛期をもつ遺跡の存在が示唆される。そして，灰釉陶器や緑釉陶器の比率が高く，なかに墨書をもつものが含まれる点は，遺跡の特殊性を反映したものといえよう。

南側の208地点においては，墨書甕に銭貨を納めた埋納遺構が複数見つかるなど，祭祀空間としての性格が想定されている〔浜崎ほか1995〕。今回は顕著な遺構が検出されていないが，遺跡の北へのひろがりとみて大過ない。その際問題となるのは，同じ北部構内において平安期の良好な資料が出土する東北部一帯との関連である。北東350ｍの221地点では，平安前期にさかのぼる瓦類がまとまって出土しているほか，土器類も９世紀前半～10世紀前葉と時間幅の長い資料が出土し，藤原基経の別業「山庄」とそれから発展した円覚寺との関係が推測されている〔千葉1998〕。今回の調査区をはじめとした西南部一帯では，瓦塼類の出土がなく，盛期が限定される状況にあることから，そのような別業や寺院といった施設に直接関係する空間と理解することは難しい。ただし，こうした開発が，扇状地上部の東北部から次第に西南部へとおよんだ可能性はあり，同一遺跡の拡大の結果か，性格の

異なる別遺跡の成立とみるかは，周辺の調査成果を待って結論を下す必要がある。

中世の耕地開発　中世の遺構で顕著であったのは，幅20㎝程度で南北方向を中心に無数にはしる浅い溝群である。これらは，いわゆる鋤溝に類する耕作の痕跡といえる。包含層の薄い調査区東半においては，黄色砂の上面まで掘り下げないと輪郭が明瞭に確認できないが，複数層が埋積する調査区西半の段差内においては，14世紀代までの遺物包含層である明灰色土の上面から顕在化しはじめる。よって，調査区一帯が面的にひろく耕地化された時期は，中世後半期，それもおおむね15世紀代以降とみてよい。中世から近世にかけて，都市近郊の農村地帯となっていった様相をうかがわせる遺構といえる。以上の状況を考慮しておこなった花粉分析の結果では，アブラナ科の卓越などが示唆されており，栽培された作物を想定するうえで興味深い。今後，周辺地点での分析事例を増加させて比較材料とし，ひろく具体的な土地利用の変遷過程を明らかにすることが，課題となるだろう。

近世の土地利用　近世に関しても，土地利用は中世と同様であったとみられるが，段差内の堆積層は，固く締まった灰褐色土と酸化鉄の集積層である灰赤褐色土の互層となっており，低地で保水力のある部分を中心に水田となったことが想定される。

その後幕末期にこの地が土佐藩屋敷の敷地内となったことは，絵図の表記だけでなく，南側の208地点での南限を画する堀と内部の井戸，およびそれらからの刻印桟瓦の発見により具体的に裏付けられている。しかし，それ以外の範囲や屋敷内の様相については，北東側の109地点で瓦溜が見つかっているのみであった〔浜崎1983〕。今回，近世の井戸ＳＥ11から同種の刻印瓦が出土したことから，調査地が藩邸敷地内にあることが示された。しかし，建物遺構はまったく検出できなかった。調査区西半の段差は，当該時期においても緩やかに残されている状態であったと想定され，埋積する水田耕作土にも断絶の様相はうかがえない。藩邸設置にあたり，敷地内が大がかりに整地された可能性は薄いと言える。

今回の報告に際し，以下の方々にご教示をいただきました。縄文晩期の浮線文土器に関して石川日出志氏（明治大学），剝片石器製作技術に関して山中一郎氏（京都大学総合博物館），石庖丁・礫石器石材に関して竹村恵二氏（京都大学理学研究科），土石流に関して増田富士雄氏（京都大学理学研究科），花粉試料の分析・同定に関して（故）那須孝悌氏（大阪市立自然史博物館），坂本清子氏（大阪産業大学），松江実千代氏（高槻市立第六中学校），本郷美佐緒氏（新潟大学積雪地域災害研究センター），花粉試料採取に関して石井陽子氏（大阪市立自然史博物館）。末尾ながら厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

青柳泰介　1995年　「家形埴輪の製作技法について」『家形はにわ』日本の美術　№348　至文堂

網　伸也　1994年　「北白川廃寺２」『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』

石川日出志　1985年　「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37－４

石田志朗・中村徹也・中村友博　1972年　『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』

泉　拓良　1977年　「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号

1980年　「北白川上層式土器の細分――京都大学教養部構内ＡＯ24区出土の縄文土器を中心に――」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

1985年　「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』

泉択良・浜崎一志　1981年　「京都大学構内の試掘・立会調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

五十川伸矢　1981年　「京都大学本部構内ＡＴ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　「京都大学本部構内ＡＸ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1986年　「京都大学医学部構内ＡＮ20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

五十川伸矢・伊藤淳史・伊東隆夫　1995年　「京都大学医学部構内ＡＭ17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』

五十川伸矢・千葉豊・伊東隆夫　1992年　「京都大学本部構内ＡＷ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』

五十川伸矢・飛野博文　1984年　「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

五十川伸矢・宮本一夫　1988年　「京都大学医学部構内ＡＮ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

伊藤淳史　1999年ａ「京都大学総合人間学部構内ＡＯ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』

1999年ｂ「北白川追分町弥生時代遺跡の展開――北部構内ＢＡ30区（追分地蔵地点）出土資料の紹介――」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』

2000年　「京都大学総合人間学部構内ＡＲ25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1996年度』

2003年　「比叡山西南麓における縄文から弥生――京都大学構内遺跡出土資料の紹介と検討を通じて――」『立命館大学考古学論集Ⅲ』

伊藤淳史・外山秀一・冨井眞　2001年「比叡山西南麓先史遺跡群における弥生前期水田調査の意義」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』

上田秀夫　1982年　「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』№２

上原真人　1978年　「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14

1995年　「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所

参 考 文 献

1997年　「2．瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告』

内田好昭　1998年　「19　京都大学構内遺跡」『平成８年度京都市埋蔵文化財調査概要』

宇野隆夫・岡田保良　1979年　「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

梅原末治　1923年　「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告　第５冊』

1935年　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第16冊』

1936年　「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第７輯』

会下和宏　1994年　「岡崎遺跡の方形周溝墓について」『研究紀要』第１号（京都市埋蔵文化財研究所）

岡田保良・吉野治雄　1979年　「京大理学部遺跡ＢＥ29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　「京都大学医学部構内ＡＷ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

岡村勝行　1990年　「長原古墳群の家形埴輪」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』

小椋純一　1992年　『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣

小野山節・都出比呂志　1973年　『高槻市安満遺跡の条里遺構』

小野山節・中村徹也　1976年　『京都大学教養部Ａ号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』

梶原義実　2003年　「13世紀における「中央官衙系」瓦工の編成と展開」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1999年度』

関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編　2002年　『新関西地盤－京都盆地－』

木戸雅寿　1995年　「信楽」『概説　中世の土器・陶磁器』

京嶋覚・積山洋編　1990年　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』　(財)大阪市文化財協会

京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）

1977年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）

1978年ａ『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

1978年ｂ『京都大学埋蔵文化財調査報告第１冊――京大農学部遺跡ＢＧ36区――』

1979年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

1981年ａ『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ――白川北殿北辺の調査――』

1981年ｂ『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1984年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

1985年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ――北白川追分町縄文遺跡の調査――』

1986年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

1987年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』

1988年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

1989年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』

1990年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』

1991年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

参 考 文 献

1992年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』
1993年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』
1995年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』
1997年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』
1998年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度』
1999年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』
2000年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1996年度』
2002年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1997・1998年度』
2003年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1999年度』

京都市文観局（京都市文化観光局）　1993年　『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　平成４年度』

京都市文観局（京都市文化観光局）・京都市埋文研（京都市埋蔵文化財研究所）
1987年　『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』

京都市埋文研（京都市埋蔵文化財研究所）
1986年　『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　昭和60年度』

京都府埋文センター（京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989年　『京都府弥生土器集成』

京文博（京都大学文学部博物館）　1991年　『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第４冊

久保田正寿　2003年　「縄文時代の石器製作」『考古学ジャーナル』№499

古賀秀策　1999年　「京都大学本部構内ＡＸ25・ＡＸ26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』

小森俊寛・上村憲章　1996年　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号（京都市埋蔵文化財研究所）

近藤義行　1989年　「丸塚古墳出土の家形埴輪」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第19集

佐藤雅彦　1981年　「元の白磁と青花」『世界陶磁全集13』　小学館

佐原　眞　1968年　「畿内地方」『弥生式土器集成』本編２　東京堂出版

清水芳裕　1991年　「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

清水芳裕・吉野治雄　1981年「京都大学医学部構内ＡＰ19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

清水芳裕ほか（京都大学北部構内ＢＦ31区調査班）　1987年　「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内調査研究年報　昭和59年度』

島田貞彦　1924年　「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第５号

島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦　1929年　「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第７号

鈴木克彦　1990年　「亜流遠賀川式土器再考」『Mie history』vol. 2

角谷江津子　1992年　「肥前京焼風陶器と京焼－新島会館出土資料を中心として－」『関西近世考古学研究』Ⅲ

清野孝之　1996年　「鰭飾りの変遷とその背景」『雪野山古墳の研究』考察篇

竹村恵二・三村衛　2002年　『京都盆地の地震活動に関連した液状化堆積物の地質学的・土質工学的研究』

立石堅志　1995年　「奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器』

千賀久編　1995年　『平成７年度秋季特別展　古代葛城の王－王を支えた技術者集団－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第46冊

参 考 文 献

千葉　豊　　1991年　「病院構内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

1998年　「京都大学北部構内ＢＦ34区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1994年度』

2003年　「京都大学本部構内ＡＷ26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』

千葉豊・伊藤淳史・古賀秀策　1997年　「京都大学本部構内ＡＵ30区・ＡＶ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』

千葉豊・古賀秀策・冨井眞・伊藤隆夫・宮武頼夫・初宿成彦　1998年　「京都大学北部構内ＢＦ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1999年度』

千葉豊・吉井秀夫・小崎隆・矢内純太・藁科哲男　1997年　「京都大学本部構内ＡＷ25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』

辻裕司・鈴木廣司　1985年　「19　尊勝寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』

寺島孝一・片岡肇編　1984年　『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告　第13輯

冨井　眞　　1998年　「北白川追分町遺跡出土の縄文土器－北白川Ｃ式の成立を考える－」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度』

2003年　「京都大学本部構内ＡＸ22区の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』

外山秀一　　2002年　「京都大学構内遺跡におけるプラント・オパール分析Ⅰ－ＡＯ22区発掘調査－」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1997・1998年度』

豊田裕章　　1992年　「関西における石積み土壙の諸問題」『関西近世考古学研究』Ⅱ

中川和哉　　1997年　「考察　石器」『雲宮遺跡』京都府遺跡調査報告書第22冊

長戸満男・竜子正彦・尾藤徳行　1997年　「京都大学構内遺跡」『平成７年度京都市埋蔵文化財調査概報』

長友朋子　　2004年　「近畿における編年研究の経緯と現状」『弥生中期の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

中野晴久　　1995年　「常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

中村徹也　　1973年　『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』

1974年ａ『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』

1974年ｂ「京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

1975年　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』

奈文研（奈良国立文化財研究所）

1961年　『平城宮跡・伝飛鳥板葺宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第10冊

1991年　『平城宮跡発掘調査報告ＸⅢ』奈良国立文化財研究所学報第50冊

橋本裕行　　2003年　「奈良県以東地域の搬入土器」『奈良県の弥生土器集成』本文編

浜崎一志　　1983年　「浄蓮華院と吉田構――応仁の乱後の吉田の復原的考察――」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1991年　「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ――京都大学病院構内遺跡の調査――』

浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊藤隆夫　1995年　「京都大学北部構内ＢＡ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』

参 考 文 献

浜崎一志・千葉豊　1990年　「京都大学北部構内ＢＤ33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』

樋口隆康・亀井節夫　1979年　「昭和53年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

尾藤徳行・竜子正彦・本弥八郎・吉村正親　1996年　「京都大学構内遺跡」『平成５年度京都市埋蔵文化財調査概報』

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編　1995年　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』

福山敏男　1977年　『日本の美術』№129　至文堂

藤岡謙二郎　1973年　「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）

1978年　「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

藤澤良祐　1991年　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ｘ

1993年　『瀬戸市史陶磁史篇』」四

1995年ａ「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯

1995年ｂ「古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

1996年　「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－』

藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳　1986年　「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」『日本文化財科学会財科学会発表要旨集　第８回』

堀内明博　1992年　「穴蔵に関する遺構群をめぐって」『関西近世考古学研究』Ⅲ

間壁忠彦　1991年　『備前焼』（考古学ライブラリー60）　ニュー・サイエンス社

松田順一郎　1999年　「楔形両極石核の分割に関する実験　－縄文時代晩期サヌカイト製打製石鏃製作技術の復元に向けて－」『光陰矢如　－荻田昭次先生古稀記念論集－』

松野元宏　2004年　「市田斉当坊遺跡出土弥生土器の検討」『市田斉当坊遺跡』京都府遺跡調査報告書　第36冊

御堂島正　2003年　「石器製作の使用痕－トラセオロジーの視点から－」『考古学ジャーナル』№499

南博史編　1989年　『吉田近衛町遺跡』京都文化博物館調査研究報告　第４集

宮本長二郎　1996年　「古墳時代の家形埴輪」『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版

三輪嘉六・宮本長二郎　1995年　『家形はにわ』日本の美術　№348　至文堂

森岡秀人　1990年　「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社

森田　勉　1982年　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２

森田　稔　1995年　「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

山中一郎　1978年ａ「森の宮遺跡出土の石器について」『森の宮遺跡　第３・４次発掘調査報告書』

1978年ｂ「長原遺跡出土の石器について」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』

1982年　「石器遺物」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』大阪市文化財協会

山本信夫　2000年　『大宰府条坊跡ＸＶ』太宰府市の文化財　第49集

横山浩一・佐原眞　1960年　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』　第１部日本先史時代

吉野治雄　1977年　「教養部ＡＳ23遺跡試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

竜子正彦　1999年　「７　京都大学北部構内遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報平成10年度』

京都大学構内遺跡調査要項　2000年度

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

第１条　京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という。）を置く。
第２条　センターは，京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
第３条　センターにセンター長を置く。
　２　センター長は，京都大学の専任の教授をもって充てる。
　３　センター長の任期は，2年とし，再任を妨げない。
　４　センター長は，センターの所務を掌理する。
第４条　センターに，必要に応じて，助教授，助手その他の職員を置く。
第５条　センターに，調査研究及び保存に関する業務を処理するため，研究部を置く。
　２　研究部に主任を置き，前条の教官をもって充てる。
　３　主任は，研究部の業務をつかさどる。
第６条　センターにセンターの事業に関する基本的計画，人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため，運営協議会を置く。
　２　運営協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。
　⑴　センター長
　⑵　センターの研究部の主任
　⑶　前２号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者　若干名
　⑷　事務局長及び施設部長
　３　センター長は，運営協議会を招集し，議長となる。
　４　前各項に規定するもののほか，運営協議会の運営に関し必要な事項は，運営協議会が定める。
第７条　この要項に定めるもののほか，センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長
　山中　一郎（総合博物館教授）
運営協議会委員
　鎌田　元一（文学研究科教授）
　上原　真人（文学研究科教授）
　金田　章裕（文学研究科教授）
　石田　英實（理学研究科教授）
　瀬戸口烈司（理学研究科教授）
　高橋　康夫（工学研究科教授）
　小崎　　隆（農学研究科教授）
　伊東　隆夫（木質科学研究所教授）
　清水　芳裕（文学研究科助教授）
　大澤　幸夫（事務局長　～2001．1．5）
　本間　政雄（事務局長　2001．1．6～）
　松井道太郎（施設部長　～2000.12.31）
　細田　重好（施設部長　2001．1．6～）
研究部主任
　清水　芳裕（文学研究科助教授）
同研究員
　千葉　　豊（文学研究科助手）
　伊藤　淳史（文学研究科助手）
　冨井　　眞（文学研究科助手）
　阪口　英毅（文学研究科助手）
　磯谷　敦子（施設部教務補佐員）
　中田　敬子（施設部教務補佐員）
　柴垣理恵子（施設部教務補佐員）
事　務　室
　松本　一代（施設部事務補佐員）

表15　京都大学構内遺跡のおもな調査

（地点は図版１を参照，文献中「埋」は京大埋文研，「調」は京大調査会をさす。）

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1･2	濱田　耕作	表採・試掘			縄文土器，石器	梅原23，島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府安満		島田　貞彦 水野　清一ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原　末治	発掘			乾漆棺・玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原　末治				縄文土器，石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館　易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田　志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
1972	大阪府安満		小野山　節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田　志朗 中村　徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72，伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村　徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器，瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村　徹也	事前発掘	600		縄文土器，土師器	中村73	
1973	植物園	11	中村　徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b，泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
1974	農学部	13	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山　節 中村　徹也	事前発掘	750		土師器，瓦，陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部BE33区	16	泉　拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器，土師器，瓦	調77	
1976	病院AE15区	19	岡田　保良	事前発掘	2200	古代・中世溝，池，土器溜	土師器，瓦，陶磁器	調77，埋81a	
1976	植物園BD35区	29	吉野　治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院AH17区	34	泉　拓良	事前発掘	200	近世溝，井戸，集石	土師器，瓦	埋78a	
1976	教養部AS23区	35	吉野　治雄	試掘	10	溝	縄文土器，須恵器	埋77	

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1976	北部 BJ33区	36	宇野　隆夫	試掘	10		縄文土器	埋77	
1976	和歌山県 瀬戸		丹羽　佑一	事前発掘	300	縄文時代 土壙墓	縄文土器， 人骨	埋78a	
1977	病院 AF14区	39	岡田　保良 宇野　隆夫	事前発掘	800	古代護岸， 溝，井戸	土師器， 瓦，陶磁器	埋78a，埋 81a	
1977	医学部 AO18区	41	泉　拓良 吉野　治雄	事前発掘	1200	中世溝，土 器溜，井戸	土師器， 瓦，陶磁器	埋79，梶原 03	
1977	北部 電気管	43	吉野　治雄 宇野　隆夫	立合		溝，土坑	須恵器，土 師器	埋78	
1977	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野　隆夫	試掘	80	溝	弥生土器， 土師器，瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田　保良	試掘	40	溝	土師器， 瓦，陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田　保良 宇野　隆夫 吉野　治雄	事前発掘	500	弥生中期 方形周溝墓， 中世火葬塚	弥生土器， 土師器，瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
1978	農学部 BG32区	55	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	100	縄文土坑， 古代溝，土 坑	縄文土器， 土師器	埋79	
1978	北部 BG31区	56	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	650	縄文晩期 埋没林	縄文土器	埋80，埋85	
1978	本部 AW28区	57	岡田　保良 吉野　治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器，土 師器，銭貨	埋80	
1978	本部 AY22区	60	泉　拓良	立合		高野川 旧河道		埋79	
1978	医学部 AN19区	64	吉野　治雄	立合		井戸，溝	弥生土器	埋79，埋80	
1979	北部 BH37区	66	吉野　治雄	試掘	46	土坑	土師器，須 恵器	埋80	
1979	教養部 AM24区	69	岡田　保良 清水　芳裕	試掘	8		弥生土器， 土師器	埋80	
1979	本部 AZ30区	71	西川　幸治 浜崎　一志	試掘	30	中世溝	土師器， 瓦，瓦器	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水　芳裕 五十川伸矢 吉野　治雄	事前発掘	2776	中世溝，井 戸，土器溜	土師器， 瓦,陶磁器， 旧石器	埋81b	
1979	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期 竪穴住居， 中世土壙墓， 近世道路	土師器，須 恵器，白磁	埋81b	竪穴住居跡 を現地保存
1979	北部 BD32区	79	泉　拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本部 AT27区	89	泉　拓良	事前発掘	115	近世道路， 堀	土師器，近 世陶磁器	埋81b	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1980	本部 AX28区	90	泉拓良 五十川伸矢 浜崎一志	事前発掘	1120	近世白川道，中世土器溜，井戸，建物	土師器，瓦，陶磁器，銅鏃(弥生)，磨製石鏃	埋83	
1980	京都府 美月		泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志 吉野治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路，土坑，中世土器溜	弥生土器，打製石斧，瓦器，陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見，工事を中断し発掘調査
1980	教養部 AO21区	91	吉野治雄	事前発掘	112	中世井戸，土壙墓	土師器，瓦器，陶磁器	埋83	
1980	教養部 AM22区	93	吉野治雄	立合		火葬墓，石列	瓦器，陶器	埋83	
1980	本部実験排水	98	清水芳裕	立合		流路，中世土器溜	土師器，丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉拓良 浜崎一志	事前発掘	272	古代建物，近世瓦溜	土師器，瓦，陶磁器	埋83	
1981	和歌山県 瀬戸		泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	事前発掘	1500	弥生土坑，弥生配石，古墳時代土坑	縄文土器，硬玉管玉，弥生土器，製塩土器	埋84	
1981	本部 AX28区	110	浜崎一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器，瓦，陶磁器，硯	埋83	
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸也 飛野博文	事前発掘	1716	古墳，古代梵鐘鋳造遺構，中世門，溝，墓	縄文土器，弥生土器，須恵器，土師器，鋳型，溶解炉	埋84	梵鐘鋳造遺構を現地保存
1981	京都市 本山			分布調査			縄文土器，緑釉陶器，灰釉陶器	埋83	
1982	京都府 中海道		泉拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器，土師器	埋84	
1982	病院 AF15区	122	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	1028		中世井戸，溝，白磁	埋84	
1982	農学部 BF33区	123	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	787	縄文住居跡，中世土坑	縄文土器，土師器	埋84	
1982	和歌山県 瀬戸		泉拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器，弥生土器，製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本部 AT29区	124	泉拓良 飛野博文	事前発掘	890	中世濠，建物	土師器，瓦器，陶磁器	埋86	
1982	農学部 BE33区	125	泉拓良 飛野博文	事前発掘	803	中世・近世水田，溝	土師器，瓦器，陶磁器	埋86	

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1983	医学部 AN20区	134	泉　拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸，土取り穴	須恵器，瓦器，土師器	埋86	
1983	北部 BF31区	135	清水　芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林，古代・中世溝	縄文土器，土師器，緑釉陶器	埋87，冨井98	
1983	医学部 AM19区	139	泉　拓良 浜崎　一志	立合		中世土取り穴	土師器，瓦器，石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	浜崎　一志 宮本　一夫	事前発掘	863	近世池，井戸，野壺	縄文土器，蓮月焼	埋87	
1984	病院 AJ19区	142	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	260	中世土坑，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋87	
1984	医学部 AN18区	143	五十川伸也 宮本　一夫	事前発掘	1920	中世井戸，土取り穴，中世梵鐘鋳造遺構	土師器，瓦器，鋳型	埋88	
1985	北部 B J 区	153	清水　芳裕 宮本　一夫	事前発掘	624	古代溝，建物跡，土坑，近世溝	弥生土器，土師器，須恵器	埋88	
1985	病院 AJ18区	154	清水　芳裕 浜崎　一志 菱田　哲郎	事前発掘	4295	中世井戸，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋89	
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	3000	中世井戸，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器，鋳型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水　芳裕 宮本　一夫 難波　洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器，近世陶磁器	埋89	
1986	本部 AX30区	168	清水　芳裕 難波　洋三	事前発掘	330	古代土坑，中世道	土師器，陶磁器	埋89	
1986	医学部 AL20区	169	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	331	近世土取り穴	土師器，陶磁器	埋90	
1986	教養部 AL23区	170	清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	試掘	24	中世溝	土師器，瓦器，陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎　一志 千葉　豊	事前発掘	618	土坑，河川	縄文土器，土師器，須恵器	埋90	
1987	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉　豊	事前発掘	1604	中世土坑，近世道路	縄文土器，土師器，陶磁器	埋92	
1987	北部 BH35区	182	清水　芳裕	試掘	16	包含層	土師器，須恵器	埋90	
1987	北部 BD28区	183	清水　芳裕	試掘	12	包含層	土師器，須恵器	埋92	
1987	本部 AT25区	188	清水　芳裕	立合		近世尾張藩邸堀		埋90	

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水　芳裕 森下　章司	事前発掘	216	中世土坑，近世道路	土師器，瓦，陶磁器	埋92	
1988	病院 AH19区	191	浜崎　一志 千葉　豊 森下　章司	事前発掘	2495	中世土坑，溝	土師器，瓦，陶磁器	埋93	
1988	病院 AE12区	192	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	598.5	近世道路，溝，野壺，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸，野壺，柵列	土師器，陶磁器，瓦	埋93	
1992	病院 AG14区	200	千葉　豊 森下　章司	事前発掘	393.5	近世井戸，道路	土師器，陶磁器	埋95	
1992	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎　一志 森下　章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下　章司	事前発掘	1950	中世井戸，土器溜	土師器，陶磁器	埋95	
1992	北部 BA28区	208	浜崎　一志 千葉　豊	事前発掘	1242	噴砂，古代埋納遺構，近世堀	縄文土器，土師器，陶磁器，桟瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎　一志 伊藤　淳史	立合		縄文包含層	縄文土器，石器	埋95	
1992	本部 AV30区	214	千葉　豊 伊藤　淳史	事前発掘	1480	中世砂取り穴，近世野壺	土師器，陶磁器	埋97	
1993	北部 BB28区	217	清水　芳裕 古賀　秀策	事前発掘	1323	古代溝，中世土坑	土師器，陶磁器	埋97	
1993	本部 AW25区	218	千葉　豊 吉井　秀夫	事前発掘	929	中世井戸，濠，溝，土坑	縄文土器，石器，土師器，陶磁器	埋97	
1993	本部 AU30区	219	伊藤　淳史 古賀　秀策	事前発掘	1074	弥生流路，古代溝，中世土器溜	弥生土器，土師器，陶磁器	埋97	
1993	総合人間学部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤　淳史	事前発掘	4080	弥生水田，古代梵鐘鋳造遺構，中世井戸，溝	縄文土器，弥生土器，土師器，陶磁器	埋99，外山02，伊藤03	梵鐘鋳造遺構を現地保存
1993	北部 BF34区	221	千葉　豊 吉田　広	事前発掘	1228	古代土器溜，土坑，中世・近世道路	土師器，陶磁器	埋98	
1993	病院 AF12区	222	伊藤　淳史	試掘	112.5	近世道路	土師器，陶磁器	埋97	

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1994	北部 BF30区	229	千葉 豊 古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴，弥生方形周溝墓，平安土壙墓	縄文土器，弥生土器，土師器	埋98	
1994	本部 AX25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝，土器溜	土師器，陶磁器	埋99	
1995	総合人間学部 AR25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓，古代溝，土坑，中世溝	弥生土器，土師器，陶磁器，瓦	埋00	
1995	病院 AG20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路，弥生流路，中世井戸，近世大溝	縄文土器，弥生土器，土師器，蓮月焼	埋00	
1995	病院 AF20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池，土坑	土師器，陶磁器	埋00	
1995	本部 AX26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝，近世柵列	土師器，陶磁器	埋99	
1996	医学部 AN20区	248	五十川伸矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路，中世土取り穴，近世井戸	縄文土器，弥生土器，土師器，陶磁器	埋00	
1996	総合人間学部 AR24区	249	伊藤 淳史 冨井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物，土坑，溝	弥生土器，土師器，陶磁器，銭貨	埋02	
1997	総合人間学部 AR23区	254	伊藤 淳史	立合		中世瓦溜	弥生土器，土師器，陶磁器，瓦	埋02	弥生～中世包含層
1997	総合人間学部 AQ25区	255	伊藤 淳史	立合				埋02	古代中世包含層
1997	総合人間学部 AR24区	257	伊藤 淳史	立合		中世瓦溜	土師器，陶磁器，瓦	埋02	中世包含層
1998	総合人間学部 AN22区	261	千葉 豊 古賀 秀策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路，弥生方形周溝墓，中世溝，土坑，土器溜，石室	縄文土器，弥生土器，土師器，陶磁器，瓦	第2章	
1998	本部 AU28区	262	伊藤 淳史 冨井 眞	事前発掘	543	中世土坑，近世ピット	土師器，陶磁器，瓦	埋02	
1998	総合人間学部 AL24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立合			弥生土器，土師器，陶磁器	埋02	弥生～近世包含層

年度	追跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1999	病院 AF20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸，土坑	縄文土器，土師器，陶磁器	埋03	
1999	医学部 AO17区	270	伊藤 淳史 冨井 眞	事前発掘	2028	中世井戸，集石，土器溜	土師器，瓦，陶磁器	埋03	
1999	本部 AW26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝，中世井戸，瓦溜，溝，近世溝		埋03	
1999	本部 AX22区	272	冨井 眞	立合		時期不明溝，高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北部 BC28区	276	伊藤 淳史 冨井 眞	事前発掘	2158	弥生水田，中世溝，近世井戸	縄文土器，弥生土器，石器，陶磁器	第3章	
2000	本部 AT21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	中近世白川道，尾張藩邸水路	縄文土器，土師器，陶磁器，鉄鍋		整理中
2000	病院 AE19区	278	千葉 豊 冨井 眞	事前発掘	8000				発掘中
2000	病院 AE18区	279	阪口 英毅	試掘	320	近世土坑	土師器，陶磁器	第1章	
2000	病院 AF13区	280	清水 芳裕	試掘	12			第1章	
2000	病院 AJ15区	281	清水 芳裕	試掘	12			第1章	遺跡なし
2000	医学部 AQ18区	282	冨井 眞 阪口 英毅	立合		中世井戸	土師器，陶磁器	第1章	中近世包含層
2000	本部 AU27区	283	清水 芳裕 千葉 豊	立合				第1章	先史包含層？
2000	本部 AY25区	284	清水 芳裕	立合				第1章	中近世包含層
2000	吉田南 AN24区	285	清水 芳裕	立合				第1章	古代包含層
2000	北部 BI33区	286	清水 芳裕	立合				第1章	中世包含層
2000	病院 AF15区	287	清水 芳裕	立合				第1章	遺跡なし

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう2000ねんど
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度
編著者名	鎌田元一，清水芳裕，千葉豊，伊藤淳史，冨井眞，阪口英毅，吉江崇，外山秀一，上中央子
編集機関	京都大学埋蔵文化財研究センター
所在地	〒606－8501 京都府京都市左京区吉田本町　TEL 075-753-7691
発行年月日	西暦　2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯*	東経*	調査期間	調査面積㎡	調査原因
よしだみなみこうない 吉田南構内 AN22区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 よしだ にほんまつちょう 吉田二本松町	26100	－	35° 1′ 11″	135° 46′ 57″	1998 1216 ～ 1999 0531	1800	総合情報メディアセンター新営
ほくぶこうない 北部構内 BC28区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 きたしらかわおいわけちょう 北白川追分町	26100	－	35° 1′ 34″	135° 47′ 8″	2000 0521 ～ 2000 1121	2158	理学部校舎６号館新営

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
吉田南構内 AN22区	散布地	縄文～弥生前期		縄文土器，弥生土器	押型文土器の出土
	墓地	弥生中期	方形周溝墓	弥生中期土器	供献された弥生中期土器の多数出土
	散布地	古墳時代		家形埴輪	
	邸宅跡	鎌倉～室町時代	井戸　1 石室　5 集石・土坑・溝・柱穴　多数	土師器，陶磁器，瓦器，瓦磚，石製品，鉄製品，銭貨	家形埴輪の出土 吉田殿および吉田社関連の遺構・遺物
	田畑	江戸時代	道路　1 野壺　25	土師器，陶磁器，泥めんこ，玩具	
北部構内 BC28区	散布地	縄文時代		突帯文土器，石器	突帯文土器多数出土
	生産趾	弥生前期	水田	弥生土器，石器	弥生前期の水田遺構と石器製作
	散布地	弥生中期～古代	自然流路　2 溝　4	弥生土器,石庖丁,土師器,陶磁器	
	田畑	室町～江戸時代	溝　多数 野壺　9 土坑　多数	土師器，陶磁器，加工円盤，石製品，青銅製品	石庖丁の出土 幕末期土佐藩邸関連の井戸と刻印桟瓦
	大名屋敷	幕末	井戸　1	陶磁器，桟瓦	

＊　日本測地系にもとづく

第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要ⅩⅥ

京都白川の弥生前期末の土石流

冨井　眞

砂質土石流堆積物の粒度特性

―京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）―

増田富士雄　田村亨　冨井眞

京都白川の弥生時代前期末の土石流

冨井　眞

1　はじめに

京都盆地東北部の白川扇状地に位置する京都大学の吉田キャンパスには（図126），先史時代に堆積した黄褐色を呈する厚い砂層が広く確認されている。便宜的に「黄色砂」と呼ばれている，花崗岩の風化砂礫から成るこの地層においては，これまでのところ明瞭な不整合面も確認できていないので，短い時間の堆積とみなされており，その基質や含有物・層厚から，白川系の土石流堆積ないしは洪水性堆積として扱われてきている。そして，黄色砂の直下から弥生時代前期末の水田が検出されたことにより，この土砂堆積を自然災害

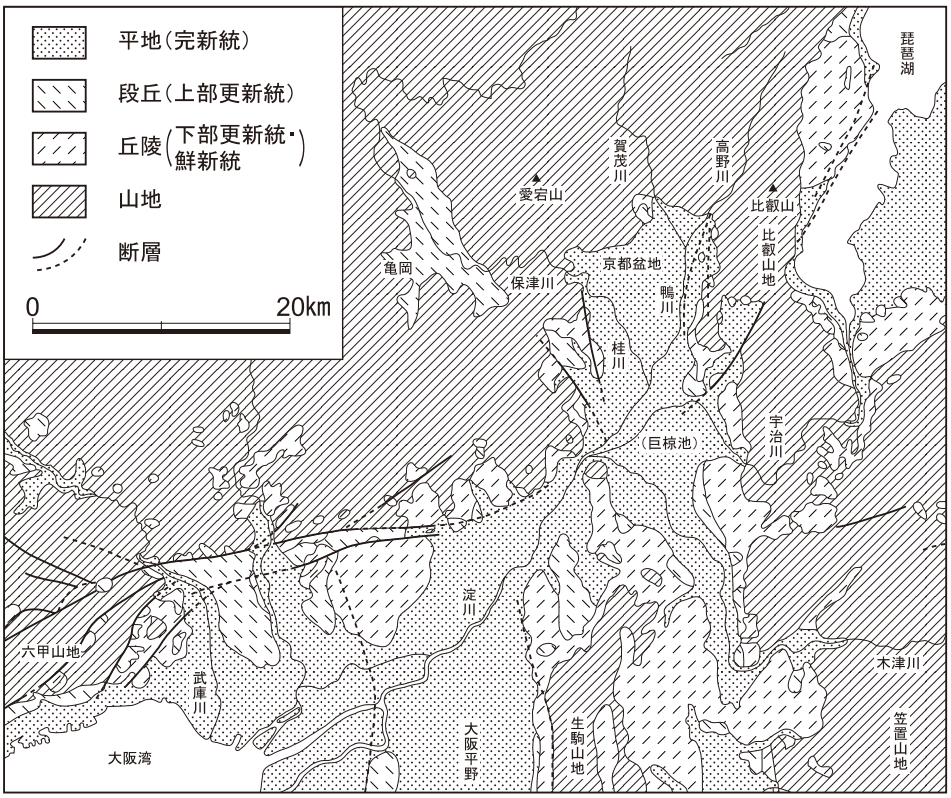


図126　京都盆地の位置と周辺の地形　縮尺1/60万　（文献*30*を一部改変）

という視点からもとらえるべき状況を迎えている。

本論では，まず最初に，黄色砂が土石流堆積層であることを確認する。次いで，この弥生前期末に白川から流れ下った土石流の，現状で把握できる規模について検討する。その後，土砂供給地の様相の推察と，現代の花崗岩地盤地域の土砂災害との比較などから，白川土石流の原因を推測する。最後に，予察的に，白川周辺の水系の遺跡（＝同時代別空間）での余波等を指摘するとともに，白川扇状地のその後（＝同空間別時代）についても言及する。面的な情報収集の可能な埋蔵文化財発掘調査の蓄積によってのみ可能となる，先史時代を対象としたこの作業が，土砂災害史のみならず，先史時代の集落動態や扇状地の形成過程などの研究にも，わずかながらでも貢献できれば幸いである。

2　土石流堆積の特徴

比叡山地南部から流れ下る白川の扇状地に位置する京都大学構内遺跡には（図127），主に黄褐色を呈する先史時代の厚い砂層が堆積していることが，30年以上前から確認されている(1)。遺跡の発掘調査で鍵層として認識されているこの「黄色砂」にあっては(2)，その下部に幾つもの巨礫がまとまって確認された地点があることから，土石流もあったと判断されている(3)。黄色砂は，肉眼では，葉理（＝ラミナ）を認められず直径５㎜程度までの花崗岩風化礫で構成されているように見える，という特徴をおよそ吉田キャンパス一帯で共有しており，同時期に堆積したものとみなされてきている(4)。この他に，黄色砂についての特徴として，粒度分析によって，0.25～1.0㎜の粒径を主体として砂分の淘汰がよい一方で粒径が0.0625㎜より小さいシルト・粘土分も10％含まれていることが確認されている(5)。さらには，北部構内でも本部構内でも吉田南構内でも，黄色砂の堆積相の上方粗粒化（＝逆級化）が確認されている（図128－１）(6)。

さて，土石流堆積物と洪水などの掃流堆積物とを明瞭に区分する特徴は二つあるという。一つは，後者にラミナがよく発達しているのに対して前者にラミナが見られないことであり，もう一つは，粒径19㎜以下の試料を比較したときに0.074㎜以下の岩屑物の含有率が，後者は２～３％なのに対して前者は10％程度になることである(7)。また，土石流では，流動時にも粒径の小さいものが粒径の大きいものどうしの隙間を落下したりするなどの理由から，下部から上部にかけて粒径が小→大となる逆級化を示し，堆積時にも逆級化しているのがしばしば認められるという(8)。吉田キャンパスの黄色砂は，ラミナの認められない点，シルト・粘土の含有率が10％程である点，逆級化が確認されている点，この３つの

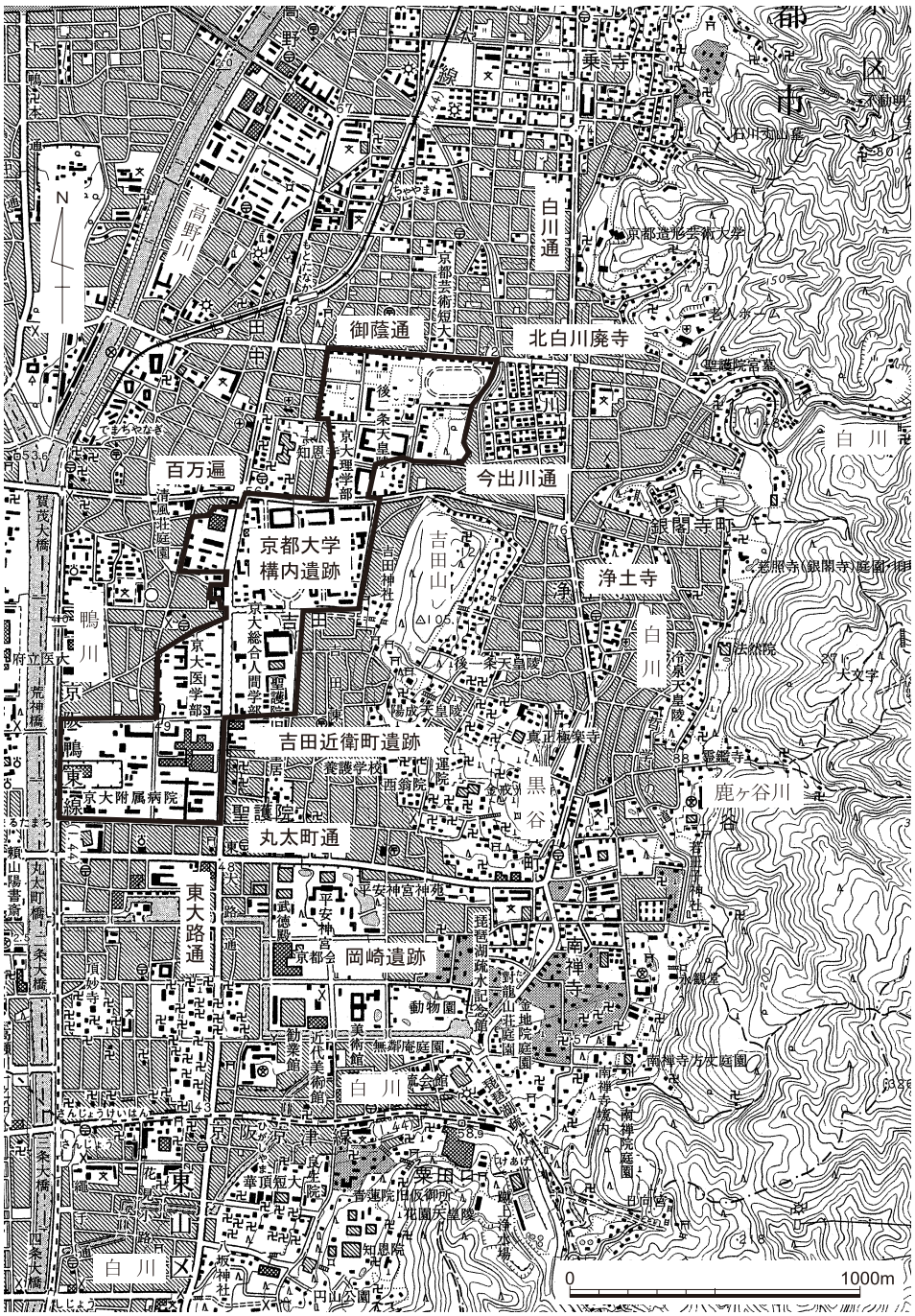
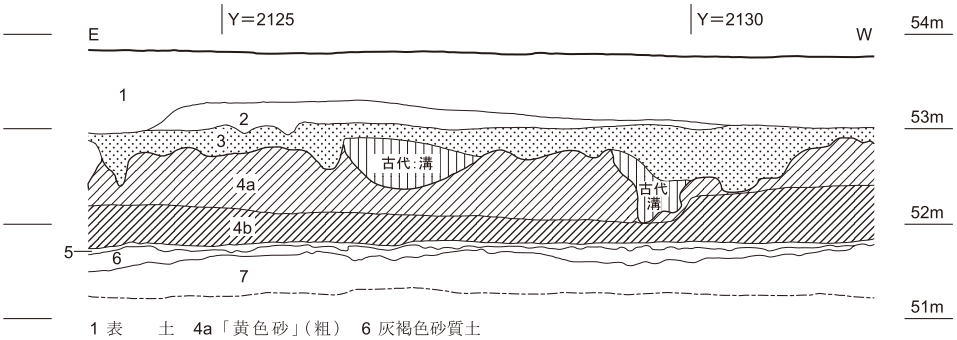


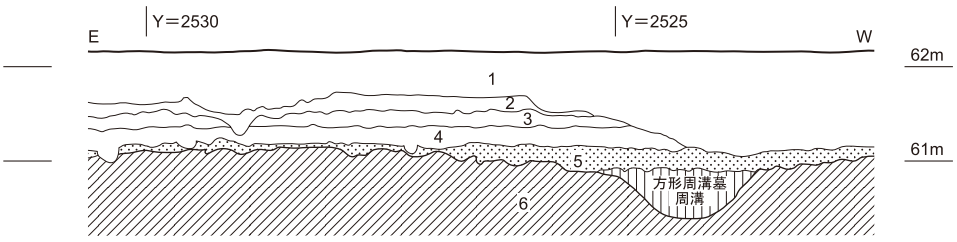
図127　京都大学構内遺跡の位置とその周辺　縮尺１／２万５千

1. 220地点（吉田南構内）（文献*19*を一部改変）



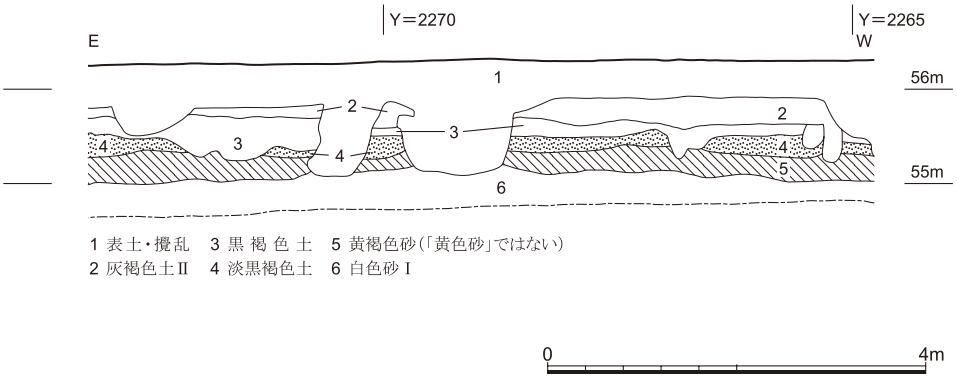
1 表　　土　4a「黄色砂」（粗）　6 灰褐色砂質土
2 灰褐色土　4b「黄色砂」（細）　7 黄 褐 色 土
3 茶褐色土　5 黄灰色シルト質土

2. 229地点（北部構内）（文献*70*を一部改変）



1 表　　土　3 灰茶褐色土　5 黒褐色土
2 灰褐色土　4 暗茶褐色土　6「黄色砂」

3. 238地点（吉田南構内）（文献*21*を一部改変）



1 表土・攪乱　3 黒 褐 色 土　5 黄褐色砂（「黄色砂」ではない）
2 灰褐色土Ⅱ　4 淡黒褐色土　6 白色砂Ⅰ

図128　京都大学構内遺跡の土層堆積例　縮尺1/80

特徴からみて，洪水などの掃流堆積物ではなく土石流堆積物であることは明らかであり，その土石流は石礫型土石流[9]に分類できるかもしれない。

ただし，正確に言えば,「黄色砂」のすべてが土石流堆積物というわけではない。例えば北部構内276地点では，黄色砂として一括りでとらえられた厚さ200㎝程の砂層のうち，上部８～９割程度については，白川砂のような白味の強い砂とは異なって黄色味がかっているので渓床堆積物とはみなしがたい上，黄色砂の詳細な粒度分析でも全体のうちの上部は土石流の堆積物という結果が得られたけれども，下部30㎝程度（全体の２割弱）は，白川砂と呼ばれるに相応しい白みがかった色調を呈するだけでなく，粒度分析でも土石流と洪水との中間的な性格の堆積物であることが確認された[10]。従って，土石流に先行する，洪水および洪水と土石流の中間形態的な流れがあって，その段階では，上中流の渓床堆積物のみが下流域にまで流れ来て堆積していることは間違いなかろう[11]。このように，黄色砂のすべてを「土石流」の一言で済ますのは，本来的には適切ではない。しかし，明瞭な不整合面によって分離されることのなかった黄色砂にあって[12]，土石流に先行する洪水などを土石流とまったく別の現象ととらえるよりは，それが露払いのような性格をもっていたと判断して，以下では，黄色砂を土石流堆積層として扱う[13]。

土石流堆積物については，垂直層位の微細的な観察以外に，いわば巨視的に見た，広がり全体についての傾向もわかってきている。谷の出口を出た土石流は，障害物がない状態では，谷の出口と堆積前線とを直径とする円の内部に分布することが実験的に確かめられているが[14]，実際には既存の扇状地地形の制約を受けるので，通常の土石流は，機能している流路や凹地などの形状に大きく左右されて分布・堆積することになる。石礫型土石流の堆積物観察によれば（図129）[15]，土石流は流れの先端に粒径の大きいものが集まり堆積も厚くなるので，土石流全体の縦断面はオタマジャクシのような頭が大きくて尻すぼみの形状になる。また，先端に粒径の大きい礫が集まることは横断面にも当てはまり，大きい礫は，土石流の外端に分布し流れから取り残されていく[16]。特に，蛇行する谷を土石流が通過するときには，ボブスレーで身体が振られるのと同じように，大きい礫が側方の斜面の上の方にまでもたらされてそこに残されたりもする。つまり，巨礫の分布は，土石流の広がりや直前の旧地形を示唆してくれるのである。構内遺跡でも，黄色砂中に１ｍ以上の巨礫が含まれる地点が点在しており，それらは白川土石流の主体部分の最終的な道筋や白川扇状地の旧地形を推定復元するのに供する。

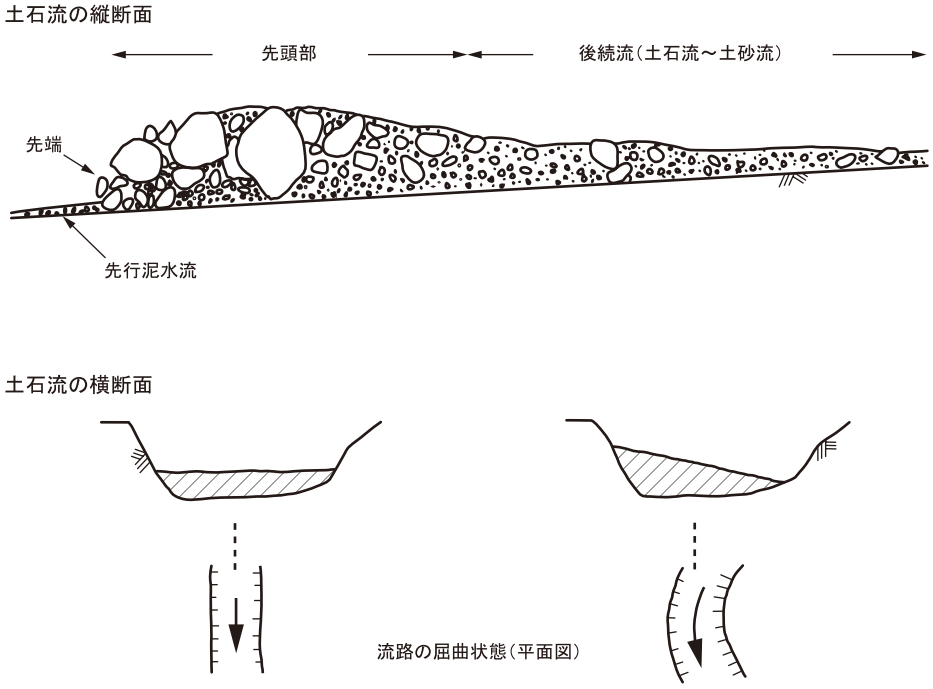


図129　石礫型土石流の断面模式図　（文献55を一部改変）

3　白川土石流の時期と規模

前章で黄色砂が土石流堆積物であることを確認したので，本章では，その土石流の時期について説明し，規模について検討する。黄色砂の堆積時期は，これまでの調査成果から，弥生時代前期末から中期初頭（約2500年前）であることが知られている。すなわち，黄色砂の直下層から遺物が出土する場合には，構内遺跡のどの地点でも，弥生時代前期までの遺物や遺構しか確認されず[17]，最新の土器編年でいう弥生前期の最末段階まで含まれるものの[18]，弥生中期前葉に帰属する資料は確認できない。その一方で，この土石流堆積の直上で確認される最も古い遺構は，弥生中期前葉までであり[19]，弥生時代前期には遡らない。この状況から，この土石流の堆積時期は弥生時代前期末中期初頭に特定される。本論では，下層に中期の資料が皆無であることをもって，この土石流の年代を弥生前期末とする。

土石流の規模については，まず，堆積の分布と層厚を考えてみる。構内遺跡及び隣接遺跡で黄色砂が確認されている地点の層厚を示したのが図130～132である[20]。大きくとらえ

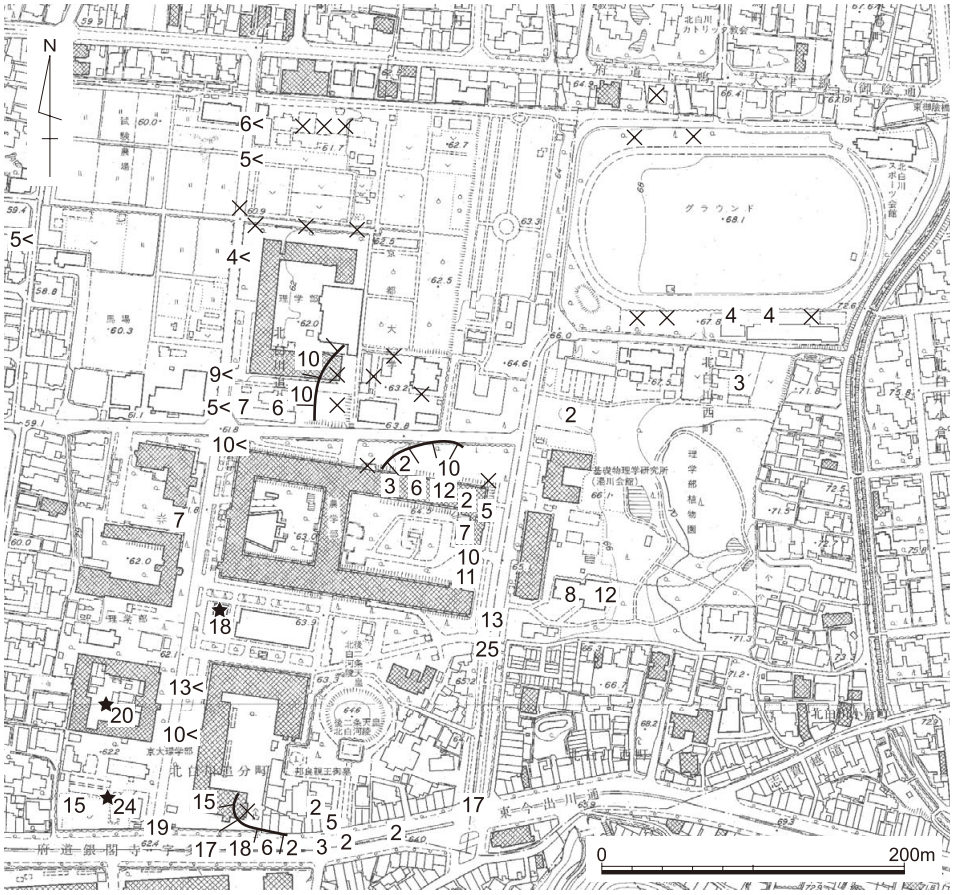


図130　京都大学北部構内の黄色砂の層厚と巨礫の分布（層厚は×10㎝，巨礫は★）縮尺1/5000

れば，北部構内南辺から本部構内北辺を経て本部構内西辺から吉田南構内西辺に至るところでは堆積が１ｍを越えるほどに厚い。それに対し，北部構内の東北部や本部構内の中央部，本部構内東部から吉田南構内東半には堆積が見られない（図130～132の×印）。これらの図を基に，分布を等厚線とともに示したのが図133である。分布については，発掘等の調査によって情報を得ている地点やその周辺は図示したが，有効な情報のない部分については空白にしてある。また，百万遍以南の東大路通から西側では，高野川の氾濫によって黄色砂が広く削り取られているが[21]，流失量を推察する術はない。百万遍以北では，北部構内北西の住宅地では黄色砂の堆積が確認できているが[22]，北部構内276地点の西縁はおよそ南北方向に黄色砂が削り去られているので[23]，高野川系流路による黄色砂の浸食が，北

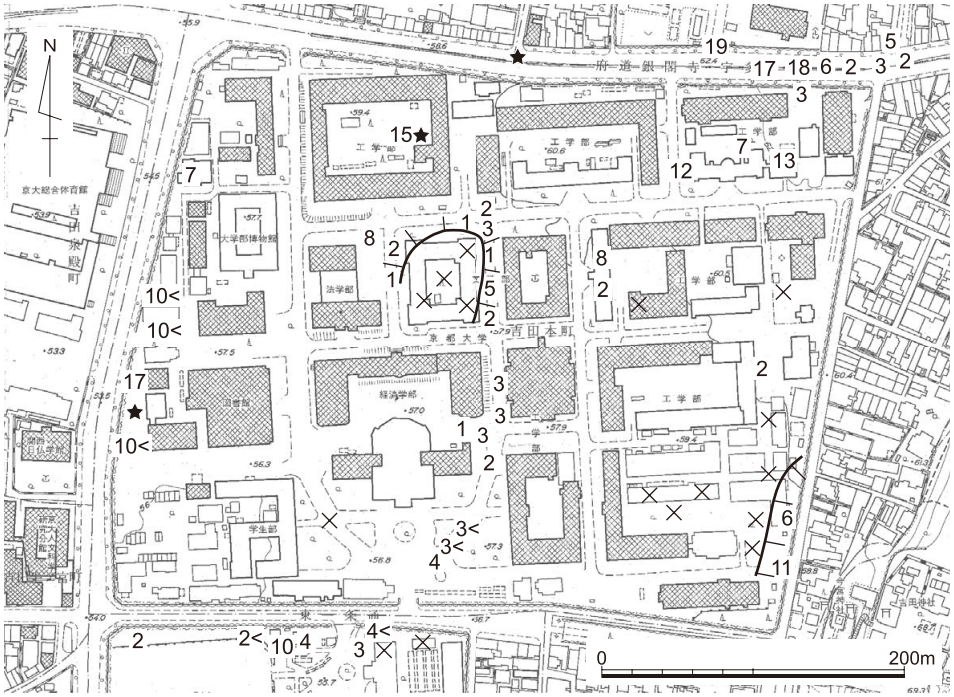


図131　京都大学本部構内の黄色砂の層厚と巨礫の分布（層厚は×10㎝，巨礫は★）縮尺1/5000

部構内の西端にまで及ぶところもあったことがわかる。

分布の確認できた地点の層厚について留意すべきは後世の削平である。黄色砂の堆積以後現代に至るまでに土地の削平が度々おこなわれたことは既往の調査からも充分にうかがえ，黄色砂直上の地層は，通常は，平安時代を主体とする層厚20㎝程度の古代の遺物包含層（主として黒褐色土），ないしは中世の遺物包含層（主として茶褐色土）である。弥生中期前葉の遺構が確認された北部構内の54・229地点でも，その方形周溝墓は，9～10世紀の遺物包含層である黒褐色土を掘削除去して黄色砂の上面を露出したときに検出されたが[24]，確認されたのは周溝のみで，その内側にあるべき埋葬主体部は確認されなかった（図128－2）。つまり，弥生中期前葉の旧地表面（および黄色砂上部）が平安時代までには削平を受けて，墓の埋葬部を区画する深い溝の下部のみが残存していたのである。この他の地点でも，黄色砂の上位に弥生時代に限定できる遺物包含層が面的広がりをもって確認されることはまったくない。このことから，平安時代までには，弥生中期前葉の旧地表面より下位の黄色砂の上部が削平されていたことがわかる。近畿地方に大古墳や宮都を築いた

時代およびそれ以後の土地改良能力を思えば，黄色砂の上位のある程度の部分は，削平量は算出できないものの，広く削平されている可能性がきわめて高いのである。

このことは，黄色砂が認められていない地点でも土石流が通過・堆積した可能性があることを予測させる。しかし例えば，黄色砂の確認されていない地点で弥生前期の土器棺が検出されている吉田南構内東北辺238地点では，弥生前期の土器数百点が奈良時代の遺物と共に出土し，奈良時代に一帯が削平を受けたことを物語るけれども[25]，両時期の遺物を包含する淡黒褐色土層中には，黄色砂が攪拌されたことを示すような黄色砂のブロックなどは認められないようである(図128－３)。つまり，土石流が堆積しなかったと考えられるのである。

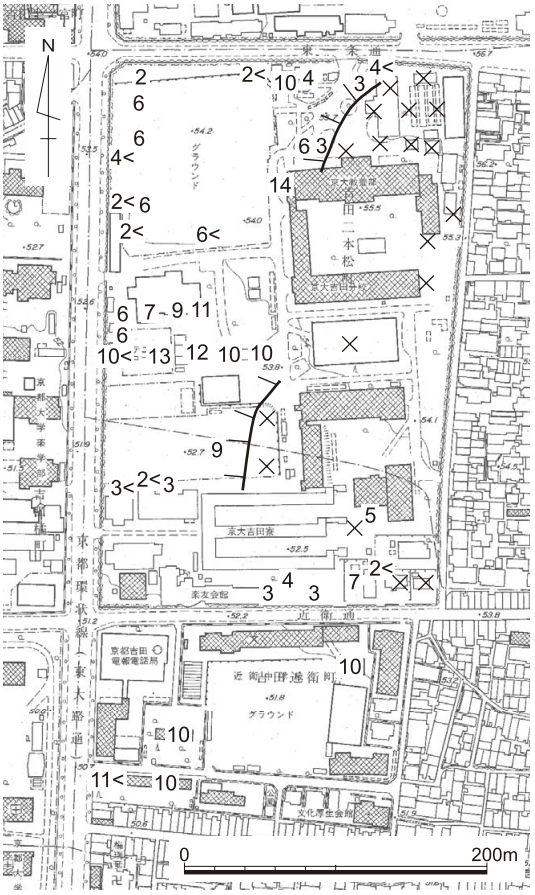


図132　京都大学吉田南構内の黄色砂の層厚（×10㎝）縮尺1/5000

このように，これまでに黄色砂が確認されていない地点にも土石流が到達・堆積していた可能性は充分にあるとしても，その可能性を構内すべての地点に普遍できるわけではない。以上の資料的制約を考慮しつつ，黄色砂を確認できない地点はそれが基本的に分布しないものとして図133を作成した。

さて，黄色砂は白川からの土石流であるから，白川扇状地に位置する構内遺跡以外の遺跡についても検討する必要がある（図127)。そこで，弥生白川土石流に関わる可能性のあるこれまでの調査報告をまとめてみよう。まず，吉田南構内の南に接する吉田近衛町遺跡では，1mほどの厚さで，下部が白みがかることもある黄色っぽい砂層があり，その下位にやや磨滅した縄文土器や弥生前期の遺物を包含する粘質土層が広がる地点がある[26]。北で

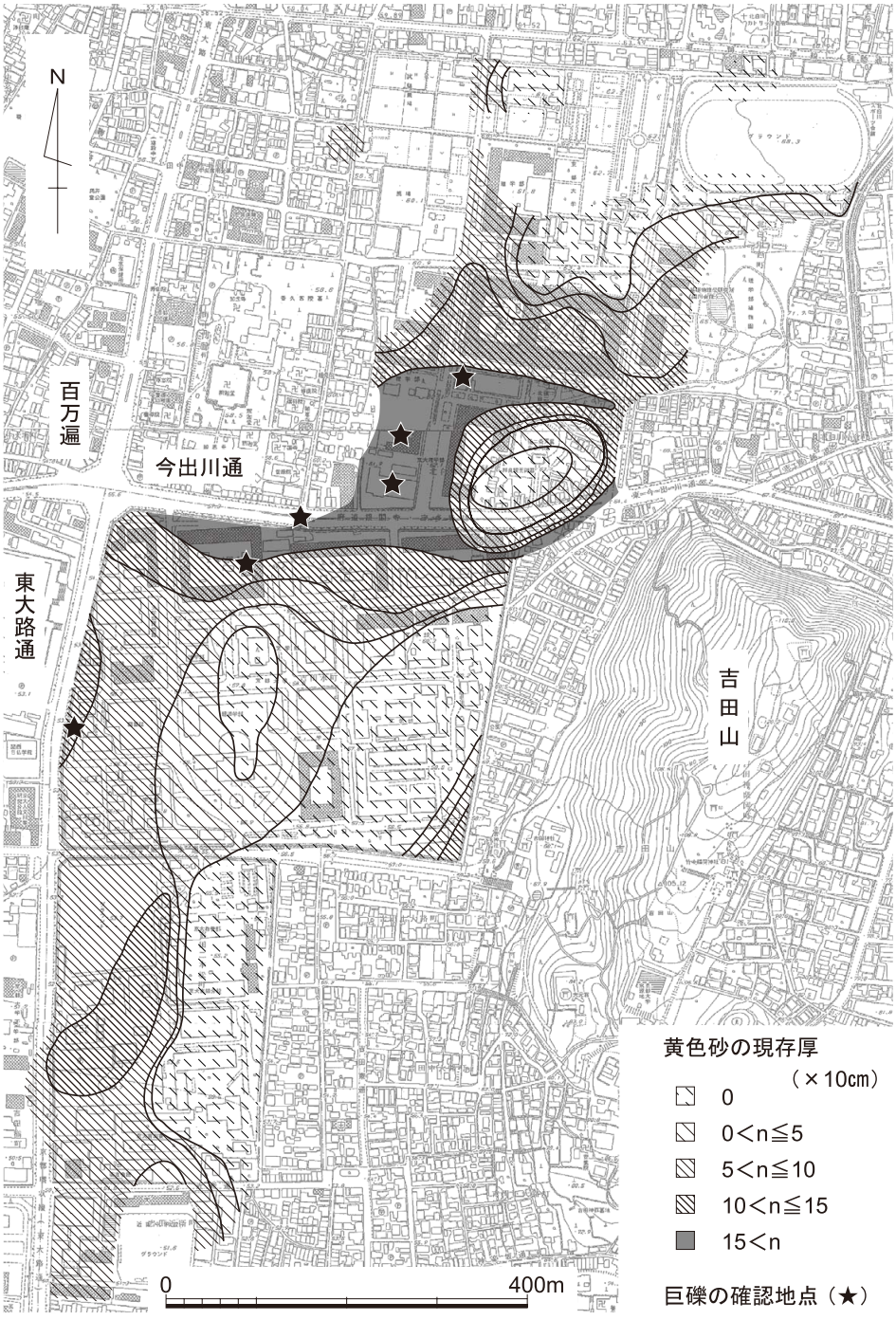


図133　黄色砂の分布と等層線　縮尺1/8000

接する構内遺跡の状況から，この砂層は，弥生白川土石流の堆積層とみなしえる。次に，構内遺跡の南方約１㎞に位置する岡崎遺跡は，構内遺跡の下流に位置するが，弥生前期の遺物がほとんどまったく出土していないようである(27)。弥生中期前葉からは東大路通に近い遺跡西部に方形周溝墓が幾つか確認されているが，それらはいずれも，遺物を含まない黄色の砂層の上に築かれている(28)。この砂層については，弥生中期前葉より古いことはわかるがそれ以上のことは不明であり，白川土石流にともなうものとは断定できない(29)。その一方で，同じ岡崎遺跡でも東部で検出された大きな自然流路は，最下部こそ流速の早い水成堆積の礫層がありそこから縄文晩期の土器が出土しているが，古墳時代まで湿地の様相を呈しており，弥生前期末に一挙に埋まった形跡はなさそうである(30)。以上のことから，弥生前期末の岡崎遺跡については，西部に関しては，土石流一般に見られる下流域での土砂流や洪水流の堆積が残存している可能性は捨てきれないが，東部にはそうした一挙性の土砂移動現象は及ばなかったと考えられる。

京都大学構内遺跡の東北東約１㎞の北白川廃寺は，白川の谷出口付近に位置しており，弥生白川土石流が流下したことは間違いないので，少し細かく見てみよう。構内遺跡北限を東西に走る御蔭通より北では，御蔭通と白川通の交差点の北北東約100ｍの地点で，縄文晩期末の包含層を覆う厚さ0.7～0.8ｍの無遺物層があり，その上面に７世紀の寺院遺構が築かれている。ただしこの無遺物層は，粒度の大小や色調の明暗という点で複数の自然堆積層と思われる層が互層になっているので，一挙性の堆積とは言いがたい(31)。そこに西接する地点の調査でも，縄文晩期末の包含層を覆う，上部を削平されて堆積年代の不明な黄褐色の砂層が0.2ｍ堆積している(32)。あるいは，白川通をまたいでその西約100ｍに位置し構内遺跡により近くなる塔跡付近では，7世紀の寺院の基壇の基盤となっている，堆積年代の不明な厚さ0.4ｍ以上の砂礫層に，50㎝角以上の花崗岩の巨礫２点が含まれている(33)。同じく白川通以西では，塔跡の北約150ｍの，瓜生山の裾野に近い地点で，縄文から弥生にかけての包含層の上位に，8世紀の遺構面の基盤となる黄褐色の砂層が0.3ｍ堆積している(34)。このように，御蔭通以北では，弥生白川土石流に該当する可能性のある砂層・砂礫層が各所で確認されている。一方，御蔭通より南では，白川通以東についていくらかの情報がある。御蔭通と白川通の交差点の南東約100ｍでは，縄文後晩期の遺物包含層の上位で６～７世紀の遺構面の基盤となる，厚さ0.4ｍほどの暗黄灰色の砂層が確認されている(35)。しかし，白川通沿いでは，御蔭通の南150ｍ辺りから，黒みがかった縄文時代の遺物包含層の上に無遺物の砂層を介在させずに６～７世紀の遺構が構築される層序が南方へ

100ｍほど広がる。さらにその南では状況がまた変わって，中世の遺物包含層の直下に無遺物の砂層・砂礫層が堆積する層序が，少なくとも今出川通辺りまでは続く(36)。

北白川廃寺は谷の出口近くに位置する分だけ後の浸食を受けやすいとはいえ，弥生前期末の土石流堆積層を残している可能性は高い。北白川廃寺の寺域は,「やや北へ下がりぎみの，等高線もゆるやかな場所」(37)であるが，そのなだらかな地形に築かれた寺院の基盤は，基本的に第四紀の堆積物であり，おそらく縄文時代以後で古墳時代以前の白川堆積物である。その堆積層中の砂層のどれかは，弥生土石流に相当すると考えても無理はなく，そして，寺域北辺の瓜生山の裾野に近い地点の砂層がそれに該当するならば，白川扇状地の少なくとも北半は弥生白川土石流の分布域となる。しかし，確たる時期比定は未だ不可能な状況にあるので，ここでは弥生白川土石流堆積物の可能性の指摘にとどめておこう。

以上のように，京都大学構内遺跡やその周辺の遺跡の調査にもとづいて黄色砂の堆積について作成した図133の三次元的情報は，およそその最小値にすぎず，実際の土石流の規模はこれを凌駕することは間違いない。しかし，最小値ということを承知した上で，その黄色砂の広がりや体積について試算すると，面積は23万㎡を超え，堆積土砂量も20万㎥を超える(38)。ただし，上述のように，黄色砂の下部に土石流ではない堆積物を含む地点が複数存在するので，そうした堆積物の広がりこそわからないけれども，堆積土砂量の２割程度は，先行する洪水がもたらした中上流の渓床堆積物だと想定しておこう。すなわち，崩壊土砂量のうちで扇状地に流出した土砂の量を，最小値で16万㎥と見積もる(39)。いずれにしても，20万㎥を超える堆積土砂量は，大規模土石流と呼ぶに相応しい(40)。

続いて黄色砂の内容物を見てみると，長軸１ｍ以上の巨礫を包含している地点が堆積の厚いところに少なからずあり（図133の★印），中には２ｍを優に超える場合もあるので，層厚のみならず運搬物の大きさからも，流下した土石流の規模が尋常ではないことが想像できる。黄色砂直下の土層の標高と黄色砂中の巨礫の分布を基にして復元した土石流直前の地形を，土石流堆積後の地形と比べてみると，等高線のはしり方も大きく異なり，地形の変化も甚だしいことがわかる（図134）。しかし，これまでのところ，黄色砂の中からは，人間活動の痕跡を示す人工遺物は，吉田南構内南辺で土器片がわずかに出土しているにすぎない(41)。このことは，その上流で人間の活動域が土砂に巻き込まれた可能性を示唆するとはいえ，災害という観点からは大規模とはおよそ言えない。黄色砂には，岩屑物や人工遺物以外には何も含有されておらず，これまでに流木や枝も炭化物も回収されていない。これは，土砂供給地の様相を推察する際に留意すべき点である。

図134　黄色砂堆積前後の等高線　縮尺1/8000

4　供給地の様相

前章では，弥生白川土石流の最小規模を数値化した。本章からは，その土砂を運んだ土石流の原因を考えてみよう。土石流発生の原因については，地形・地質・植生の自然条件に土地利用状態も含めた素因と，降雨・融雪のような気象条件の変動や地震・火山噴火のような地殻内部に起因する変動などの誘因とが，互いに作用しあった結果として土砂移動が生じている(42)，ということを踏まえて推測する必要がある。本章では，素因を確認するべく，20万㎥の土砂を供給した白川の上中流域の様相を整理していこう。

図135に見るように，比叡山の南半は，大文字山・如意ヶ岳に至るまで花崗岩質の地盤である(43)。時には地下数十ｍの深さまで風化しボロボロになることがあるという花崗岩は，この一帯では，古生代・中生代の堆積岩からなる比叡山と大文字山・如意ヶ岳との間に白亜紀に割って入ってきたのだが，その花崗岩が風化して，山並は両者の間で低まり，風化礫は粉々になって白川の語源ともいわれる白い砂となって流下し扇状地やその下流へともたらされている(44)。地質横断面に照らせば，この花崗岩地帯は，花崗岩自身が迸入したときに接触部の堆積岩が熱変成して堅くなった南北のホルンフェルスに挟まれており，風化に耐えるホルンフェルスが比叡山と如意ヶ岳としてそびえ，風化で“マサ”になって浸食された両山の中間が一段と低くなっている。そして，「比叡山・大文字山の間には，ほとんど砂山に近い状態にまで風化が進んだ箇所を見出すことも稀でない」ようである(45)。

この花崗岩地域は，起伏量は小さいけれども谷密度が大きいことが指摘されている（図136・137）(46)。花崗岩の風化と地形については，他地域の事例から，起伏量の大きさと風化に相関があるとされており，強風化域は，起伏量が小さくて谷密度が大きく丘陵性の山地の様相を呈して丸味を帯びた山容を示す(47)。無論，弥生前期の白川水系の花崗岩の風化度合いについては，直接的な資料はない。花崗岩類の地盤が土砂崩壊を起こすサイクルの研究事例から見れば(48)，弥生前期末の土石流に匹敵する大規模土石流が過去数百年以上にわたって発生していない白川では，2000年前の表層の方が風化していたとさえ考えられるかもしれないが，ここでは，とりあえず現状の風化程度をそのまま適用することにしよう。

比叡山から大文字・如意ヶ岳の間の水系は（図137），不規則なかたちを呈して分水界にも偏りが見られる。現在は標高400ｍ前後のこの低まりの，およそ半分の面積の土砂は，白川に流れ込んでいる。こうしたことの原因として，琵琶湖側に細く南北に分布する石英斑岩の浸食抵抗が花崗岩よりも相対的に強いことと，琵琶湖よりも京都盆地の方が標高が低

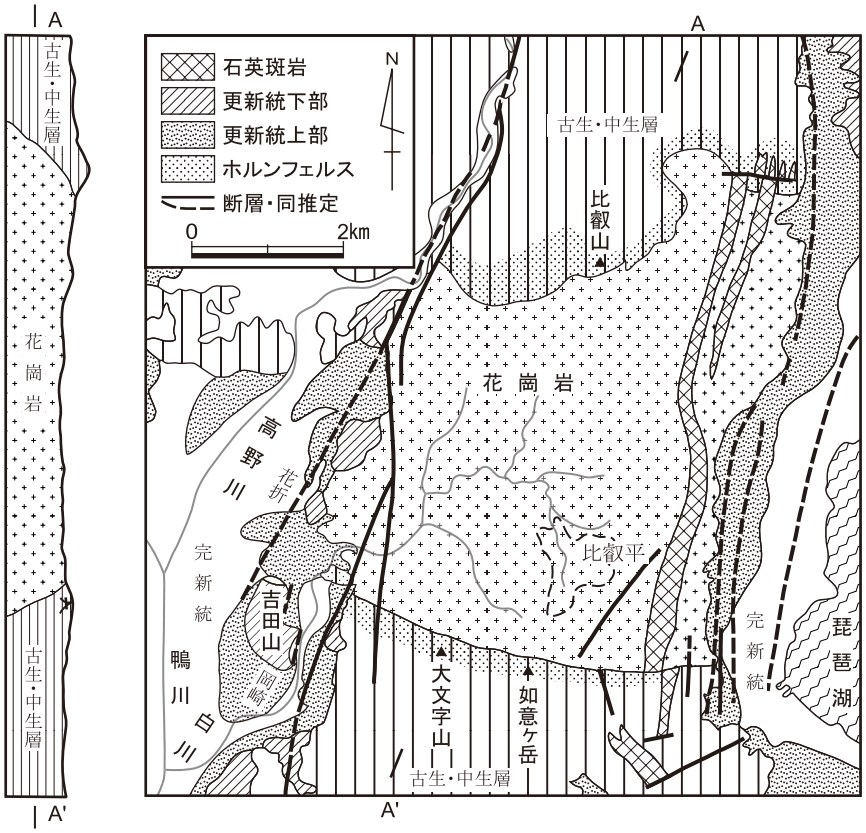


図135　比叡山地南部の地質と地形　縮尺1/10万　（文献 *1* を一部改変）

いために京都側での谷の発達が促進されたことが，指摘されている[49]。実際に，白川の集水面積はおよそ15㎢に及び，一つ北の谷を京都盆地へと流れる音羽川の集水面積の約６倍であるばかりか，滋賀県側の全集水面積の総計をおそらくは凌いでいる。そして，この白川流域の土砂は，袋状に一気にすぼまりながら集積されて細い谷を蛇行して抜けて京都盆地へともたらされる。

弥生時代前期末の白川の上中流域の古植生については，該当するデータは管見に触れなかったので，京都大学北部構内の北白川追分町遺跡[50]や京都盆地北部の深泥池[51]や比叡山東麓の滋賀里遺跡[52]といった山麓やその付近の（図138），先史時代の地層から発見される植物・昆虫遺存体分析に依拠せざるをえない。弥生前期に時期限定できるデータはないが縄文時代晩期ごろでは，京都盆地側ではコナラ亜属が１割弱程度あるのに対して琵琶湖側

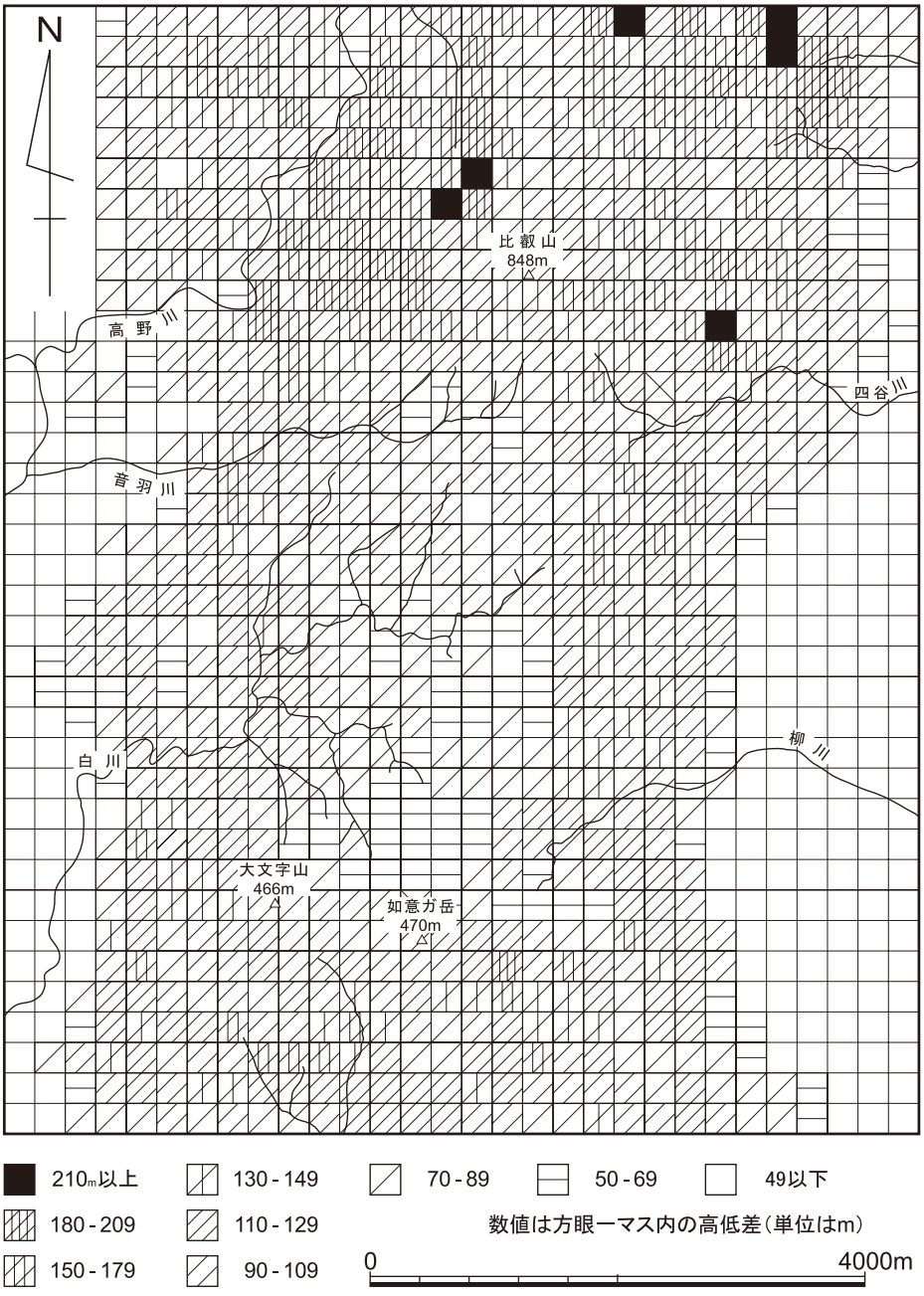


図136　比叡山地南部の起伏量　縮尺約1/6万　（文献 5 を一部改変）

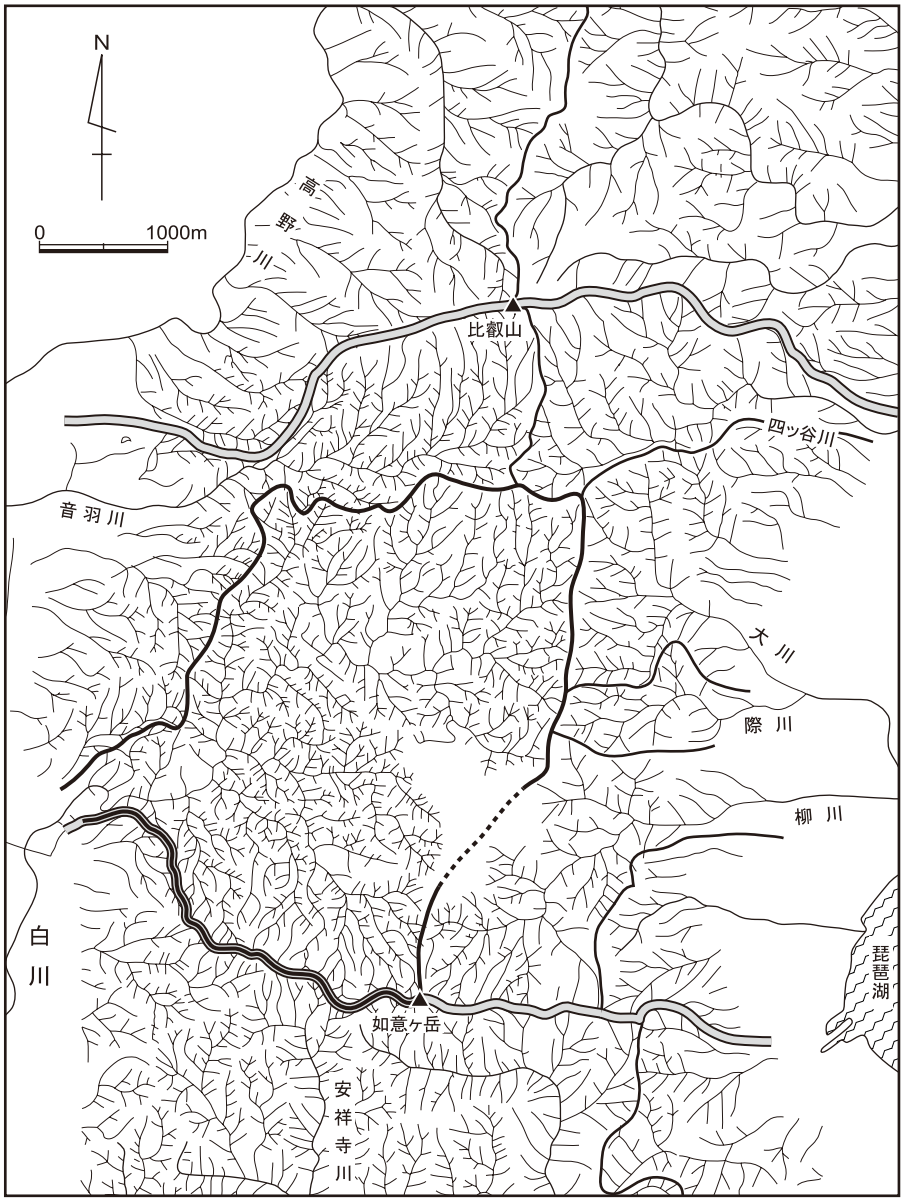


図137　比叡山地南部の谷密度　縮尺約1/6万　（文献 *1* を一部改変）

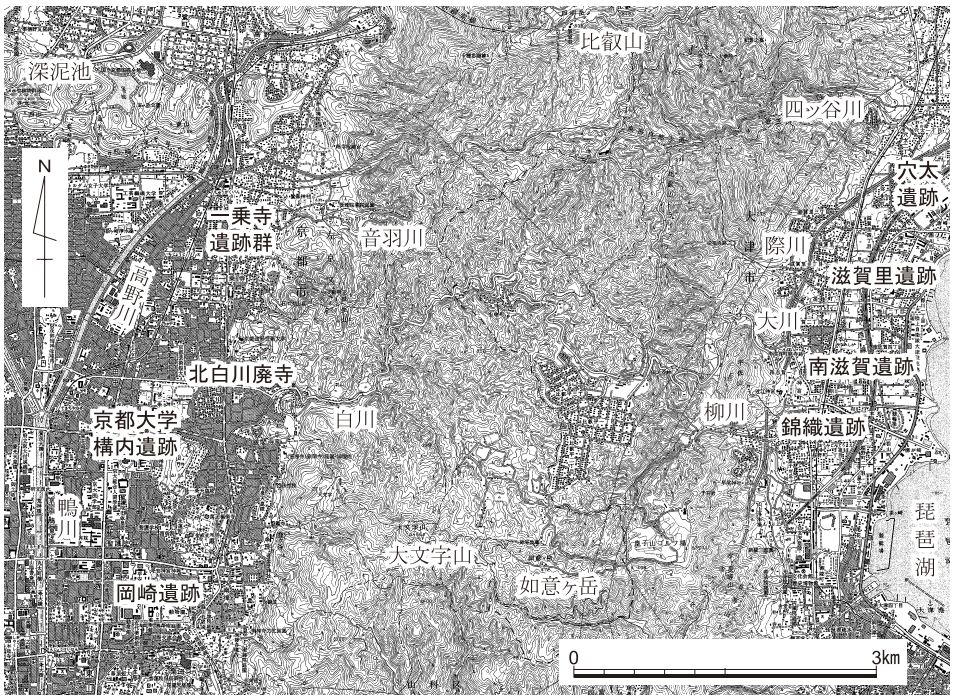


図138　比叡山南麓の弥生時代前中期の遺跡ほか　縮尺1/７万５千

ではきわめて少ないなどの差異はあるものの，大筋として，アカガシ亜属などが優先しスギやヒノキ科などの針葉樹もやや優勢であるような，いくぶん冷涼な照葉樹林が想定できるようである。比叡山の北方20㎞ほどに位置し標高が比叡山程度の京都市左京区八丁平湿原では[53]，縄文後期から古墳時代くらいにかけての時間幅ではあるが，ミズナラなどを中心にしてブナなどをともなう冷温帯落葉広葉樹林だったようである。また，比叡山の西方40㎞ほどに位置し，標高が白川中流域の山林に近く190ｍをはかる大阪府能勢町柏原では[54]，弥生前期に近い2300年前ごろでは，カシ類やシイ類を中心とする常緑広葉樹林でスギも優勢だったので，およそ比叡山南麓扇状地の遺跡群と同様といえる。以上から，土石流が発生したころの白川の上中流域の植生を推測すれば，アカガシ亜属などの照葉樹が主体でスギなどの針葉樹も優勢だったと思われる。さらには，当時の林野開発の動機や能力を時代像に照らして考えるならば，原生林だったと考えることも許容されよう。

この推測の一方で，京都盆地東辺の弥生前期末から中期初頭に該当する時期の流路などの自然堆積層で，流木がどの程度出土しているかは不明である。京都大学構内遺跡の黄色

砂にまったく包含されていないのは，もともと存在していても腐朽してしまった可能性はあるにしても，より下流の低湿性遺跡での流木についての具体的な資料のない現状では，土石流に流木をともなっていない状況，例えば禿げ山の土砂流出という想定も，完全には排除しきれない。植生のない裸地では斜面崩壊頻度が高く流出土砂量が多くなることはよく知られている通りだが，弥生前期に15㎢に及ぶ山地に樹木が存在しない理由を考えるならば，人為的伐開と考えるよりは山火事を想定すべきであろう。しかし，前述のように，構内遺跡の黄色砂中には炭化物すら確認できず，下流の京都盆地東辺の遺跡でもそうした炭化物含有のデータは管見に触れていない。そこで，山火事直後ではなくそれを契機として長期にわたって白川の集水域一帯が禿げ山になっている状況を想定することになるが，花崗岩類の地盤の斜面崩壊のサイクルと植生回復の様相とに照らせば(55)，それは考えにくい。以上より，下流域で流木が確認されていないことについては，(裸地がある程度存在していた可能性は否定できないものの）集水域一帯が禿げ山だったと考えるよりはむしろ，崩壊斜面の樹木が谷の出口に至るまでの蛇行した川筋にとどまって扇状地にはあまり流れてこなかったか，流下してきても，腐朽してしまったか，と考えておこう。

土砂崩壊の防止力において広葉樹と針葉樹との違いは明確ではないようだが(56)，針葉樹のうちのスギやヒノキに対しては，広葉樹の方が，通常は土壌浸食を防止する効果があるようである(57)。斜面安定には垂直根よりも水平根の方が寄与しているからという見解があり(58)，実際に根茎の横への広がりは，スギやヒノキよりもコナラなどの広葉樹は顕著になるようであるが(59)，しかし，例えば記録的集中豪雨などのような特異な状況では，針葉樹よりも広葉樹の斜面の方が崩壊土砂量が多くなることがある(60)。比叡山南半の弥生前期の植生が，アカガシ亜属などを主体にした照葉樹林だとしても，気象条件などが特異な状況になれば，山地斜面で大量の土砂が崩壊しても不思議ないのである。また，近現代の植林による針葉樹林よりも密度も総樹木数も低かろう弥生時代の白川上中流域の照葉樹林では，斜面崩壊においても単位面積あたりの倒木数も少なかろうし，原生林を想定するならば樹径は現在の森林樹木のそれよりもはるかに大きい可能性もあり，そうした樹木の少なさや径の太さのゆえに流木が扇状地まであまり流下しなかったと考えられないだろうか。

ここで，弥生白川土石流の素因を整理する。白川上中流域は，針葉樹を混在する照葉樹主体の原生林だったと思われるが，①地盤は弱く花崗岩風化層である。②起伏に乏しくて谷密度が高く，風化の度合いが高いと思われる。③集水域は広いが谷出口は狭い。

5　類似の土砂移動現象

前章では，弥生白川土石流の土砂供給地の地質と地形と植生から，土石流の素因を整理した。続いて，誘因を推測するが，素因と比べて誘因ははるかに短い時間の流れの中で考えるべきことである。先史時代が対象となる場合には特定は不可能に近いが，弥生白川土石流の誘因を探る手がかりを得るために，白川と同様の花崗岩類を水系の地盤とするほかの河川において，最近に生じた土石流や山腹土砂崩壊を数例概観しよう（表16）[61]。

白川水系から谷一つ北に位置して西流する音羽川では，昭和47（1972）年９月豪雨で土石流が発生している[62]。流域の地質は白川と同源の花崗岩だが，流域北縁はホルンフェルス地帯であり，北側の支流の上流域では花崗岩よりもホルンフェルスの方がはるかに多いこともある[63]。土砂災害当時の植生は，上流部ではアカマツ林・ヒノキ林が分布し，中流域には20年生以上の落葉広葉樹が主体的であったが，崩壊が多かったのは，20年生未満の針葉樹林植生のところだった。流域の単位面積当たりでは，崩壊面積率が約2.4％で，崩壊数密度は約73箇所／㎢，崩壊土砂量は約17000㎥／㎢，堆積土砂量は約22000㎥／㎢である。崩壊土砂量を崩壊面積で割った単位面積崩壊深度は１㎡当たり0.7ｍ未満となり，表層崩壊が多いことを物語るけれども，最上流域と中下流域の最大崩壊地では，深層風化をしていて崩壊後にも新鮮な岩盤が現れていない。堆積の規模としては，扇状地上の市街地では厚いところで1.5ｍの土砂堆積があったが，狭い街路に集中して流れ込んだ可能性がある。また，中流域の砂防ダムの表面には直径１ｍの岩塊が幾つも確認されたが，下流域の扇状地にはこうした巨礫は到来しなかったようである。この土砂災害の誘因は，台風による強

表16　花崗岩類地盤の大規模土砂移動例

河川・地域	白　川	音羽川	山城谷川	（木津川）	千洗川	六甲山系
主たる植生	広葉樹林	広葉樹林	針葉樹林	－	広葉樹林	針葉樹林
地　盤	花崗岩	花崗岩	花崗岩	（花崗岩）	花崗閃緑岩	花崗岩類
流域面積(㎢)	≒15	2.3	4.1	45.5	11	≒150
時　期	弥生前期末	1972.9	1953.8･9	1953.8	1972.7	1995.1
雨　量	－	200㎜/12h	580㎜／12h	－	284㎜／6h	－
崩壊箇所	－	171	205	4760	－	747
崩壊面積(㎡)	－	56600	304765	2702244	687500	≒250000
崩壊土砂量(㎥)	160000	39286	368195	2765368	446250	≒325000
最大礫径(ｍ)	＞2	－	＞2	－	1	≒10
堆積土砂量(㎥)	＞207000	≒50000	240000＊	－	267800	－
最大堆積深(ｍ)	＞2.4	＜1.5	－	－	3	－

「－」は不明。「＊」は流出土砂量。

い西風をともなった短時間の豪雨である。京都地方気象台の資料では，半日で200㎜，そのうちの連続５時間では150㎜近くに及ぶ時があり，さらにその中には１時間に40㎜に達したこともあった。

京都府下での花崗岩地帯の大水害で資料がそろっているものには，昭和28（1953）年の南山城水害がある(64)。木津川に注ぎ込む和束川を中心にした木津川右岸一帯では，土砂崩壊が数千箇所で発生している。８月の寒冷前線通過による集中豪雨に加えて翌９月の台風による風雨によって被害が拡大した。一帯の地質は基本的には花崗岩と変成岩からなり，花崗岩地帯の植生はマツの天然更新にまかされていることの多い針葉樹林地域で，スギやヒノキなど植林もあまり進んでいなかった。数ある支流の中から，流域が花崗岩のみからなる山城谷川を抽出してみる。流下勾配は白川よりややきつく，植生は針葉樹主体で広葉樹はわずかである。流域の単位面積当たりでは，崩壊面積率が7.4％で，崩壊数密度は50箇所／㎢，崩壊土砂量は約90000㎥／㎢，堆積土砂量は不明だが流出土砂量は約59000㎥／㎢である。崩壊部の単位面積崩壊深度は1.2m／㎡を超える。この谷では，8月の集中豪雨時には半日で600㎜近い降雨を記録している。なお，他の河川も含めてこの南山城水害のうちの花崗岩地帯の崩壊状況を見てみると，流域の単位面積当たりでは，崩壊面積率は5.9％，崩壊密度は約105箇所／㎢，崩壊土砂量は約61000㎥／㎢になる。崩壊部の単位面積崩壊深度は約１m／㎡である。

広葉樹が分布する花崗岩地帯での大規模土砂崩壊で資料がそろっている事例は，中国地方や中部地方などにあるが，ここでは，昭和47（1972）年７月豪雨の西三河災害を見てみよう(65)。そのうち，白川よりも流下勾配がやや緩いけれども本川延長と流域面積が近似する千洗川をとりあげると，流域の単位面積当たりでは，崩壊面積率が約6.3％で，崩壊土砂量は41000㎥／㎢，堆積土砂量は24000㎥／㎢を超える。崩壊部の単位面積崩壊深度は0.7m／㎡未満となり，表層崩壊が多いと言える。

こうした事例が示すように，花崗岩地域の土砂崩壊は，単位面積当たりの崩壊土砂量は多くはなくても，多くの地点での表層崩壊が樹枝状に発生してそれらが渓床堆積物を巻き込んで土石流になることが多いようである(66)。

次に，花崗岩地域の降雨以外の誘因による土砂崩壊事例として，平成７（1995）年の兵庫県南部地震をとりあげる(67)。１月中旬の乾燥期に生じたマグニチュード7.2の直下型地震である。六甲山系全体で見れば，流域面積の１％にもはるかに及ばない面積でしか崩壊が生じていないが，崩壊部の単位面積崩壊深度は１m／㎡を優に超える。河川別に見る

と，崩壊土砂量，崩壊面積，崩壊個数のいずれも最大は住吉川で（流域面積約10㎢），それぞれ５万㎥，7万㎥，170箇所である。しかし，流域の単位面積当たりでみれば，崩壊面積率が約1.8％，崩壊数密度が約50箇所／㎢，崩壊土砂量が約19000㎥／㎢という最大値を記録するのは，いずれにおいても東部の宝塚市を流れる流域面積が１㎢未満の観音谷川である。実際，この地震で生じた山腹土砂崩壊は，神戸市灘区から東灘区・芦屋・西宮・宝塚にかけての東六甲山地に多く，中でも六甲山地東縁の宝塚市域は観音谷川のような崩壊の特徴をもつ河川が他にもあり，東六甲山地でも特にこの辺りが山腹崩壊が著しかったと言える。ただし，六甲山地東縁の崩壊土砂量はせいぜい数万㎥にしか達しない。こうした東六甲の植生は，アカマツとモチツツジが主体である。

ここで，これら現代の土砂災害の例を参考に，白川の弥生土石流の規模を試算してみよう。弥生前期の白川と地盤・植生が同様と思われる千洗川の崩壊面積率（6.3％）を白川に当てはめると，白川の崩壊面積は推定約95万㎡となる。白川の風化度を考慮して，これに，山城谷川の単位面積崩壊深度1.2m／㎡を乗して崩壊土砂量を求めると，推定約113万㎥である。崩壊土砂が下流に及ぶときに河川の流下勾配が作用するであろうから，白川よりややきつい山城谷川とやや緩い千洗川の，崩壊土砂量と堆積土砂量（ないし流出土砂量）の比0.6をこれに乗してみると，弥生白川土石流の堆積土砂量推定値は約70万㎥となる。この値は，第３章で算出した実際の堆積土砂量の最小値（20万㎥）の3.5倍であり，妥当な数値かもしれない。

6　白川土石流の直接的原因

前章に示した類似の土砂移動現象などを基にして，本章では弥生白川土石流の誘因について推測する。

花崗岩地盤で乾燥期に震源の浅い直下型の巨大地震に見舞われた六甲山地の地震直後の崩壊では，表16の豪雨による事例やその他のいろいろな地域の集中豪雨による大規模土石流のような土量には達していない。それゆえ，仮に弥生時代前期末に比叡山麓を震源とする直下型の巨大地震が起こったとしても，六甲山地東縁と同程度の面積の白川流域から（図126），地震のみで16万㎥前後の土砂が崩壊したとは考えにくい。もちろん，比叡山麓には花折断層や比叡断層が南北に走っているので，そうした断層の活動などの影響を受けて花崗岩質の地盤が全体的にゆるんでいた可能性は当然低くない(68)。しかし，白川土石流の誘因が地震のみであったとは到底考えられない。

土砂災害の多くは降雨が誘因であるように，弥生白川土石流にも大量の降水を想定するのが妥当であろう。例えば，地盤を共有する音羽川の1972年の土石流災害の時の雨量は，10年に一度くらいの反復率で見られる程度であり，音羽川の土砂災害の反復率も30～40年に一度ほどである[69]。当時の音羽川の崩壊地の植生と弥生時代前期末の白川上中流域の推定植生との違いから，弥生白川土石流は，この程度の頻度で生じるものとは考えがたいが，記録破りの集中豪雨によって生じた可能性は充分高い。記録的な集中豪雨による，西三河での水害は，過去にそうした災害の記録がはっきりとしていないようだが，南山城水害の場合は，流出土砂の規模としては200年に一度くらいの反復率かもしれない[70]。

ただし，降雨状況について考えるならば，花崗岩類地盤の広島県呉や兵庫県六甲の降雨による土砂災害のデータを参照すれば，数時間の雨量がある程度多くても，それまでの数日間の総雨量が低ければ土砂流出量はあまり大きくなっていない[71]。従って，弥生白川土石流が発生する直前は，乾燥状態ではなく，地盤の含水量がかなり多く飽和水量に近い状態であったと考えられよう。いわゆる「弥生の小海退」[72]に示される冷涼化は，近畿地方では，花粉分析や珪藻分析などからも支持されているが[73]，冷涼化とはいっても標高400m程度の白川の集水域に豊富な積雪があったとは思えないので，含水分の高さは融雪によるとも考えにい。むしろ，弥生時代の近畿地方について，花粉分析の成果から，冷涼化と同様に多雨化も指摘されている点は興味深い[74]。

そこで，弥生白川土石流は，前線や台風によって多雨になる春から秋に発生したと推測できるかもしれない。特に，雨季の最中ないしはそれからあまり月日をおかない時に寒冷前線や雨台風が通過して記録的な集中豪雨をもたらすような時季だった，という見当がつくが，季節推定については，考古学的成果からも接近できる。吉田南構内の220地点では，冒頭でも触れたように，この土石流に襲われて放棄された水田が畦畔や水口を明瞭にとどめた状態で検出されている。この小区画水田の区画内地表面には，ときに比高差が10㎝を超える多数の凹凸が確認されている[75]。さて，日本各地出土の弥生時代の大型刃器の使用痕分析から，このころにはイネの根株刈りが積極的におこなわれていたと考えられており[76]，一度収穫を終えた水田を再利用するならば田起こしが必要になると思われる。220地点の水田は，自然地形の湿地帯をそのまま利用したと考えられる自然条件に左右されやすい立地ではあるけれども，イネ珪酸体の分析によれば，水田面より下位からも多くのイネ珪酸体が検出されている上，水田の下位に相当する遺物包含層から出土した縄文晩期末の土器の胎土にもイネ珪酸体が含有されていることから，この地点が継続的に稲作に供し

ていたことが指摘されており[77]，従って，イネ株などを掘り起こす行為も繰り返しおこなわれたと考えるべきであろう[78]。また，この地点では，逆級化して堆積する黄色砂の最下部が粒子の細かいシルト質の薄層から成ることが確認されているが[79]，このことは大雨によって水田が水溜まりと化していたことを示しているかもしれない。田起こし後に大雨が降った場合，水口や畦畔は本来的機能からみて形状の耐水性は高いと思われるけれども，それらに囲まれた耕作域は土壌も軟らかく明確な田起こし痕跡の原形をとどめない程度の凹凸しか残さないだろうから，上記の地表面の特徴に整合する。なお，田起こしの時季を現代の農事暦に当てはめて冬に限定する必要はなく，つまり土石流の発生時季を必ずしも冬に限定する必要はない[80]。こうしてこの水田は，イネの播種[81]や移植の前ないし収穫の後の，田起こし後に大雨に襲われた状況を想定したい。

ここで，弥生白川土石流の誘因について整理してみよう。直接的な誘因としては，地震のみということは考えがたく，地盤に水分を大量に含みしかも稲の生育していない，6月ごろないし10月ごろの記録的集中豪雨と推測できる。しかし，数千年に一度という反復率で生じたと考えられる大規模土石流なので，数十年ないし数百年の反復率の豪雨のみとも考えがたい。断層地帯であることも加味すれば，地震による地盤の不安定化もいわば間接的な誘因として考慮し，地震と豪雨との複合が誘因であると考えるのが妥当であろう[82]。

7　隣接水系や下流の状況：予察

前章までで，弥生白川土石流の原因がおよそ推測できた。本章では，その規模の大きさをあらためて念頭に置いて，近接地やさらに下流への影響について指摘する。例を見ないほどの集中豪雨と地震が誘因とすれば，その影響の及ぶ空間的広がりは，白川水系に限って考えるべきではなく，音羽川水系や滋賀県側にも土砂流出があったと考えるべきであろう（図138）。白川扇状地の北に隣接する音羽川の扇状地に位置する一乗寺遺跡群では，弥生時代の遺跡がほとんど未発見と言えるが，黄色を呈する厚い砂層の上に古墳が築かれている地点がある[83]。ただし，厚い黄色の砂層の上位に縄文時代後期の遺物包含層が認められる地点もある[84]。

滋賀県側については，北から順に追ってみてみよう。四ッ谷川扇状地に位置する穴太遺跡では，縄文晩期末の埋設土器を破損させさらには弥生前期の窪みないし自然流路を埋積した，巨礫を含む一挙性の土石流堆積層が認められており，その厚い土石流堆積層の直上には弥生中期前葉の終わりごろの遺構が築かれている[85]。これは，京都大学構内遺跡と時

期的にもおよそ符合する土砂災害である。しかも，その破損した埋設土器が確認された遺構面には，地震による地割れが認められている。際川扇状地の滋賀里遺跡では，弥生中期前葉の方形周溝墓が黄色の砂層の直上に築かれている地点はあるものの，弥生前期については，土器は出土している地点はあるがいずれも再堆積なので当時の状況は不明瞭である。その他に幾筋もの小谷が確認されているけれども，遅くとも縄文時代晩期までにあらかた埋積してしまい，弥生前期に一挙性の堆積があったことはうかがえない。また，縄文晩期後半の遺構や遺物が多数確認されている旧微高地があり，その地点でも，弥生前期の一挙性の土砂堆積はなかったと考えられる(86)。

大川扇状地の南滋賀遺跡では(87)，黄褐色の砂質土の上に堆積する黒褐色土を埋土とする弥生前期の住居が検出されている地点があり(88)，そこでは継続的に中期前葉でも生活が営まれている。しかし，その地点の南北両側では弥生中期の遺構に掘り込まれる黄色の砂層や黄褐色の砂質土層が堆積していてそれらの地層の下位は不明である。これらの土層が前期の住居の下位の砂質土と同時堆積か否かは，扇状地上の堆積でもあるから容易に判断できないけれども，この遺跡の他の地点ではほとんどまったく前期の遺物が出土していない中で住居だけが微高地上に存在するという集落景観はやや不自然なので(89)，これら弥生中期の遺構の基盤となる砂層の下位に弥生前期の地層が埋没している可能性も否定しきれない。柳川扇状地に位置する錦織遺跡では，弥生前期の資料がほとんどまったくない一方で，黄褐色の砂層ないしはそのやや土壌化した砂質土層に掘り込む中期前葉の遺構が方形周溝墓をはじめとして多数確認されているが，その砂層の下位の状態が不明である(90)。

これらの状況をまとめると，比叡山南半は，京都盆地側では，白川の弥生前期末の大規模土石流については述べてきた通りだが，音羽川では古墳時代以前に少なくとも１回は土砂移動があった。ただし弥生前期に限定はできない。滋賀県側では，四ッ谷川扇状地ではおそらく弥生前期に土石流があったことは確実であるが，大川・際川・柳川のそれぞれの扇状地については，ほとんどまったく不明である。なお，比叡山地南部の花崗岩地帯の南限となる如意ヶ岳を南に越えて，山科盆地側の様相について触れるなら，如意ヶ岳南麓を流れる旧安祥寺川と山科川の二つの河川に挟まれた，弥生時代の拠点的集落である中臣遺跡においては，その川合いという立地にもかかわらず，前期末を境にしたような目立った地層の変化や土地利用の変化は認められず，継続的に集落の営みが続いたようである(91)。二つの河川とも流域地盤が花崗岩質でないことと無縁ではなかろう。

さて，白川扇状地で生じたこれほどの土石流は，その流域や合流する鴨川流域にも影響

を与えた可能性がある（図127）。ところで，現在の白川流域に当たる吉田山の東の浄土寺盆地については，考古学的データがまったくない。ただ，東山から流下して浄土寺盆地に流れ込む河川は，最大の鹿ヶ谷川でさえ白川よりもはるかに小さい規模であるが，それらの河川の流域地盤はチャートや黒色頁岩なので，下流での堆積物は白川水系の花崗岩質の堆積物と異なるはずである。しかるに，岡崎遺跡東部の京都市動物園内では，ＡＴ降灰層順の上位に白川砂が堆積しているので[92]，白川が現在のように吉田山の東側を流れていた可能性は充分にある。また，岡崎遺跡で縄文晩期の土器片を包含していた前述の砂礫層が，黒谷よりも東側からの掃流性堆積とすれば，吉田山・黒谷の東側に遺跡があり，その包含層が縄文晩期以後で古墳時代以前に白川によって浸食された可能性もある。

このほか，詳細な言及はしないが鴨川右岸では，内膳町遺跡では弥生前期末で遺跡が途絶えるほか，高倉宮下層遺跡でも前期末に途絶えるがそこから数百ｍ離れた地点で中期前葉からの活動が再開される[93]。これは，同じ集団が活動域を移動したと考えるにしても，土器型式が時期的に共有されていない集落移動は不可能でむしろそこに断絶があるという「集落移動の可能性」説が示す通り[94]，移住するまでの間に時間的断絶があるとみなすべきである。このような鴨川流域の弥生時代の遺跡の，前期と中期との活動の断絶は，京都盆地南部の鴨川下流域でも見られる[95]。鴨川が桂川と合流するあたりの下鳥羽遺跡では，前期から中期前葉にかけて地点移動が見られ，中期になると前期の活動域に方形周溝墓が構築されて墓域に変わるようである[96]。これは，京都大学北部構内の北白川追分町遺跡の様相ときわめてよく似ている。

繰り返しになるが，弥生白川土石流の誘因が異例の集中豪雨だとすると，豪雨域は比叡山南麓だけとは到底思えない（図126）。京都盆地の西半部の桂川流域でも，弥生時代前期から中期にかけて遺跡の機能的断絶がないか，丹念な検討が今後の課題となろう。より下流では，鴨川と合流した桂川が宇治川・木津川と合流する地点の，巨椋池の存在を考慮しなくてはならない。京都盆地から集まる雨水の流下を抑制できるダム湖的な緩衝機能を巨椋池が果たしていたか，それならば集中豪雨で流れ込んできた雨水を貯水しきれずに淀川水系へ一挙放出して二次災害をもたらしていないか，こうしたことを見極めるためには，巨椋池外縁や淀川流域の遺跡の動態を詳細に確認する必要もあろう。さらには，弥生時代前期から中期にかけては，視野を広げれば，大阪平野や岡山平野でも洪水などの土砂移動痕跡が多い[97]。現代でも豪雨による災害は，例えば表16に２例ある1972年や，2004年のように，列島規模で同一年次に多発することもあるので，弥生前期末にも，各地できわめて

近接した期間に豪雨による土砂移動が多発した可能性を意識しておくべきである。

また,遺跡動態の議論だけでなく初期農耕集団の土地改良技術について推理するならば,大阪平野も岡山平野もどちらも花崗岩地盤の山地を上流に控えており，堆積砂質が比叡山南麓と同様であることは注意すべきである。標高の低い臨海平野であれば，土砂移動の頻度が高く従って水田の埋没頻度が高いにしても，移動した河川が後背湿地を地点を変えながらすぐに形成するので，農耕集団にとって水稲耕作の再開は比較的容易であろう。しかし，北白川遺跡群のように，標高の高い扇状地の微凹凸地形がいわば一瞬にして起伏のない厚い砂原に変貌してしまうと，そこは，生業空間としては機能しなくなってしまう。北白川遺跡群では，高野川がこの土石流堆積層を側方浸食して再び後背湿地を生み出すまでは，稲作を再開できなかったのではないだろうか。

8　土石流以後の白川：予察

弥生白川土石流によって白川扇状地は，扇面全域に河川の乱流とそれにともなう土砂堆積が生じる形状から，流路が固定するとともに流路と扇面との段差が明確になっていく形状へと瞬時に変化したと思われる。つまり，それまでは網状流路やその痕跡地形が残っていて起伏に富んでいたが，土石流による堆砂で凹地が埋まった後は，白川の流路が南に追いやられ(98)，全体としてなだらかに西に傾斜する安定的な扇状地となったのである。本部構内北東隅辺りから北西隅辺りにかけての略東西方向の傾斜は12/1000から10/1000へと緩くなったと考えられる（図134）。このような厚い砂の堆積は当然の事ながら，一帯の植生を激変させた。縄文晩期には照葉樹を主体にした渓畔林だった北白川追分町遺跡では，弥生中期前葉には草本花粉が全花粉の８割を占め，しかもそのうちでも最も多いのが裸地などによく見られるアカザ科であり，木本花粉ではアカガシ亜属やスギ属などよりもブナ属が多いようである(99)。ブナ属が目立つことは，一方で冷涼化を示すと思われるが，また一方では，比叡山南麓の比較的標高の低いところの樹木の大半が喪失し標高の高いところの樹木花粉の比率が急増した状況も想定しえる。こうした植生変化の影響は当然土地利用にも反映している。谷状凹地や後背湿地がなくなって水稲耕作が継続できなくなった白川扇状地においては，流路の固定によって土砂災害の危険度は一気に減少したと思われるものの(100)，砂地の裸地は墓域にしかならず，生活痕跡はまったくうかがえなくなる。

さて，弥生白川土石流が起伏に富んだ地形を一瞬になだらかな緩斜面に塗り替え，そして白川が東山の山裾を南流するようになったにしても，黄色砂は花崗岩の風化礫であるか

ら，谷を出る水流に勢いがあれば，白川は，直進していずれその堆積砂層を押し流し，再び谷の出口から西流してもよい。ところが，実際には，文献が残る歴史時代には，鉄砲水のように今出川の辺りをしばらく流れた時期はあるものの，基本的には吉田山の東を南流しているようである。この原因の一つに，断層の動きがあるかもしれない[101]。

現在の白川が吉田山の東側を南流する浄土寺地域については（図127・135），「西縁部は岡崎断層に限られる。また，吉田山と黒谷の丘は花折断層の右ずれ活動に関連する変動地形で，新期の断層運動による低断層崖が白川の扇状地面を切って連続する」[102]，という見解がある。つまり，現在の白川の右岸に，並行して東へ落下する二つの断層地形があり，その地形は花折断層の活動に関連する新しい時期の所産である可能性が高いのである[103]。花折断層がいつ活動したのかは明確でないが，縄文時代後期あるいは約2500年前よりは新しく，平安時代初期ごろよりは古い時代に，西落ちの地形を生じさせる運動をした時期があることはわかっている[104]。そして，花折断層の活動に因る可能性の高い，現在でも３ｍ程の段差で西側へ落ちる地形が，京都大学北部構内の東北辺に残されていることは，京都大学構内遺跡の多くの部分を覆った弥生白川土石流がその段差を埋積によって解消しなかったことを示すが，土石流の規模からみて，それは考えがたく，つまり，弥生時代前期末の土石流の時点ではその段差はまだ存在しなかった，と考えられる。

また，北部構内276地点では，白川の流れが黄色砂を貫いて西流した痕跡（＝砂礫層）があり，弥生中期後葉には埋没し始めそれ以後は土壌化した粘質土が最下層に堆積する窪地になって谷が涸れる，という状況が確認された[105]。この砂礫層は，これまでに弥生前期末ごろの白川系流路[106]ないし土石流の本流[107]と想定されていた砂礫層に対応する可能性が高く，つまり土石流堆積以後に比較的強い流れが西流していた可能性が高まったわけであるが，276地点の砂礫層は，さらに黄色砂の中を走る噴砂を切っている。この状況から，この噴砂を生じさせるほどの大地震の発生した年代は，弥生時代前期から中期後葉の間に限定できる。

ここで，以下のような仮説を提起する。弥生前期末の大規模土石流によって，谷から西へと容易には直進できなくなって白川扇状地の東縁を南流していた白川は，弥生中期に，噴砂や西落ち地形を生じさせた花折断層の活動による大地震後に，谷から直進して鉄砲水を西へ送り出しもした，しかし，その花折断層帯の断層運動は，その後に吉田山の東側では東落ちの地形をも生んだため，白川の恒常的な水流は，西の黄色砂を浸食せずにその東落ちの地形に沿って吉田山の東を南流するようになった。

9　おわりに

議論が多岐にわたったので，最後に，本論での成果や推論などを列記してまとめる。

1）弥生時代前期末の白川土石流の堆積規模は，京都大学吉田構内付近に残存する砂層だけに依拠して算出しても，堆積面積23万㎡以上，堆積土量20万㎥以上である。

2）弥生白川土石流では，堆積物の最大層厚・最大礫径とも２ｍを優に超えるが，内容物には,人工遺物はほとんどなく木片や炭化物などの有機質もまったく確認されていない。

3）白川では，その後にこれほどの土石流は生じていないので，この規模の土石流の反復率は数千年に一度である。

4）弥生白川土石流の原因として，集水域が広いことに加えて地盤が著しく風化した花崗岩であったところに，地震による地盤不安定化と記録的集中豪雨とが複合的に作用した可能性が考えられる。

5）弥生白川土石流と直接的に関連する可能性のある土砂移動は，少なくとも比叡山の東南側の山麓には指摘できる。

6）白川扇状地では，弥生白川土石流によって景観が激変し，それにともなって弥生中期に土地利用も改変を余儀なくされた。

7）鴨川流域での弥生前期末を境にした遺跡移動や土地利用変化も，白川土石流の影響が及んだためと考えられる。

8）白川が，弥生前期末の土石流後に流路を東山山麓沿いにおよそ固定した原因として，花折断層に関連した断層活動によって吉田山東部に東落ちの地形が生じた可能性を挙げられる。

謝　辞

京都大学防災研究所の諏訪浩氏，同理学研究科の増田富士雄氏には，黄色砂のもつ分野横断的な重要性を認識させていただくとともに，非常に有益な御教示を度々賜りました。心より御礼申し上げます。また，本論を作成するに当たっては，以下の方々からは，示唆的な御助言をいただきました。佐々木尚子氏，瀬口眞司氏，野崎貴博氏。さらに，以下の機関からは，有益な資料を頂戴いたしました。京都府京都土木事務所河川砂防課，京都府土木建築部砂防課，国土交通省近畿地方整備局六甲砂防工事事務所。記して御礼申し上げます。

〔注〕

（1） 1972年の発掘調査時には（本年報図版１の北部構内６地点。以下，本論では京都大学構内遺跡について，各構内の名称と調査地点番号は，図版１のそれに対応させる），「淡黄褐色の花崗岩質粗粒砂（旧白川砂）」として起源について既に言及されており，また，直下から弥生時代前期の土器も多数出土していた（文献14の１～３頁）。

（2） 文献*15*。

（3） 構内遺跡の発掘調査がおこなわれ始めたころには，巨礫を含む土石流堆積層の存在は指摘されていたが，当初は歴史時代の土石流として認識されていたようである（文献８の151頁）。その後，北部構内109地点では，直径２ｍを超える巨礫を含む土石流堆積層が，黄色砂の下層として分離してとらえられている（文献*94*の25～26頁）。そして，この時には，その巨礫の分布が調査区の南半には認められないことから，この109地点が土石流の南端との認識が既に示されている（同上文献）。

（4） 吉田キャンパスでの調査・観察にもとづいて言えば，各地点で黄色砂は必ずしもまったく一様というわけではない。例えば，最下部に黄白色の泥層が薄く堆積している地点が，北部構内や本部構内や吉田南構内にある（北部構内208地点：文献95の68頁。本部構内272地点：文献*76*の114頁。吉田南構内220地点：文献*19*の５頁）。あるいは，北部構内109地点では，上方の細かめの砂から下部の礫混じりの粗い砂まで６層に細分されている（文献*94*の25頁）。なお，粒度については，考古学者が慣用的に用いる表現と地質学者の粒径数値にもとづいた表現とでは概して異なり，この黄色砂は，地質学者の視点で「粗粒砂」（文献*14*の２頁）や，「ミドル・サンド」（文献*87*の３頁），として報告されたことがある（粗粒砂は粒径0.5～１㎜，ミドル・サンドは粒径0.25～0.5㎜）。

（5） 文献*63*の86～87頁。黄色砂については，「より多くの試料の分析が必要である」（同文献）ことは指摘されていたが，この他の地点で粒度分析がおこなわれたのは，276地点（文献*105*）のみのようである。

（6） 北部構内では12地点で（文献*15*の44頁），本部構内では221地点で（文献*69*の54頁），吉田南構内では220地点で（文献*18*の１頁および文献*19*の５頁），それぞれ確認されている。なお，多数の巨礫の確認された北部構内109地点では，注（４）で指摘したように，反対に上方細粒化が認められているようである。

（7） 文献*55*の234～235頁。

（8） 文献*55*の220・232～233頁。文献*55*によると，堆積層に見られる逆級化は，流動時の構造が残存したものとは言い切れないようである。石礫の間を埋めている小粒のものが堆積過程で前方や側方に分離･離脱して，結果的に表層の流度が増大することも想定されるからである（232～233頁）。その想定に従うならば，北部構内109地点の巨礫に接したところで上方細粒化している可能性のある堆積は，その分離・離脱の産物という可能性もある。

（9） 文献*55*の215～216頁

（10） 文献*105*。

（11） この他にも，吉田南構内の261地点では，従来の「黄色砂」の範疇でとらえられる砂層が，上部の黄色砂と下部の灰白色の砂層とに分層されている（文献*71*の４～６頁）。

（12） 文献*49*の186頁。

（13） 弥生時代の北白川の住人が災害に直面する状況をイメージしようとするならば，黄色砂と一括りにしている堆積層について，様々な地点で詳細に粒度分析するなど，分析数を増やすことが欠かせない（文献*63*の86頁）。後述するように，土石流が及ばなかった可能性の高い地点があることから，彼らには，露払い的な洪水の前後に，土石流の直撃というさらなる事態を予測して高台に逃げる余裕があったかもしれないのである。そして生存者がいたと推測させるならば，後で触れる構内遺跡の消長に照らして，これまで以上に先史時代の移住について実感しやすくなるだろう。

(14)　文献*57*。
(15)　文献*55*の216～223頁，文献*108*の90～91頁。
(16)　文献*108*の91頁。
(17)　例えば，北部構内12地点（文献*88*），本部構内219地点（文献*68*），吉田南構内261地点（文献*71*）などでも遺物が出土している。また，黄色砂に覆われた弥生前期の遺構は，水田が地点を離れて北部構内276地点（文献*24*）と吉田南構内220地点（文献*19*）の２箇所で検出され，後者の水田と隣接して人工水路も同構内111地点で確認されているけれども（文献*16*），それ以外に特徴的な遺構は認められていない。
(18)　文献*22*。
(19)　北部構内の，54地点と（文献*31*），229地点で確認されている（文献*70*）。これら弥生中期前葉の遺構は，水田が営まれた276地点の近くに方形周溝墓が６基認められているにすぎない。黄色砂の堆積前とは，遺構の性格が対照的である。
(20)　各地点の情報について，出典をここで一々挙げないが，図版１に掲載されていない地点についても，過去の立合調査記録などを基にして黄色砂の層厚を確認できた箇所は少なくない。
(21)　文献*97*の６～７頁，文献*50*の21～22頁
(22)　著者が，2002年秋に建築工事中の現地を通行中に，黄色砂が50㎝以上堆積していたのを観察した。
(23)　文献*24*の134～139頁。
(24)　文献*31*，文献70。
(25)　文献*21*の７頁。
(26)　文献*26*，文献110。
(27)　岡崎遺跡については，調査次数が非常に大きく，相当な数の調査が概要報告として公表されている。1990年代半ばまでの調査成果にもとづく遺跡の概要については，文献17の156頁に端的にまとめられている。
(28)　文献*73*，文献74。
(29)　東大路通と丸太町通の交差点南東では，弥生中期前葉の遺構の下位に，黄灰色の砂層がありその砂層の直下には腐植土が堆積している（文献*73*）。この腐食土層に弥生前期の遺物があれば，岡崎遺跡の西部で基盤層とされている黄色がかった砂層が京都大学構内遺跡の「黄色砂」に対応しえるけれども，実際には遺物は含まれないので時期を確定できない。
(30)　文献*28*。
(31)　文献*3*。ここは谷出口に近いので，土石流の堆積は下流部のような一挙性の厚い堆積ではなくて比較的薄いであろうし（文献*107*のFig.３，文献*46*の図２－12），またその後の出水を被りやすいゆえに無遺物層が互層となっているのかもしれない。従って，この無遺物層の上部は弥生前期末ではなく７世紀までの間に生じた出水だとしても，少なくとも下部には弥生前期末の土石流の堆積が残存している可能性も捨て去ることはできない。しかし，いずれにしてもこの無遺物層を弥生前期末に特定することはできない。
(32)　文献*4*。
(33)　文献*37*。こうした花崗岩の巨礫は，京都大学構内遺跡のこれまでの調査の場合には，黄色砂以外の砂礫層からは確認されていない。従って，花崗岩の巨礫をともなう砂礫層が白川弥生土石流の堆積層に対応する可能性も低くない。
(34)　文献*72*。
(35)　文献*101*。
(36)　文献*64*。ただし，南辺の無遺物砂層については，白川通の西に位置する地点の戦前の調査でも同様の砂層が認められ，その時には層中からは６世紀前後の遺物が出土したようなので（文献*29*の31～32頁），両者が同一層ならば，堆積は弥生時代よりもはるかに新しい。
(37)　文献*37*の６頁。

(38)　京都大学構内遺跡より上流での堆積や，高野川による浸食や，後世の削平などを勘案すれば，実際はこれらの値よりも，面積で4倍以上，体積で3倍以上には達すると想像している。
(39)　広島県呉市浜田川の昭和42（1967）年7月の土石流では，山腹崩壊地から生産された土砂の6倍に及ぶ量の渓床堆積物が下流域にもたらされており，同様な結果は同じ花崗岩地域の六甲の同時期の水害でも得られているという（文献*99*）。確かに，土石流は渓床堆積物をも巻き込むはずである。しかし，弥生白川土石流の場合は，渓床堆積物の二次的移動が主体的だとすれば，堆積砂層は黄褐色ではなくいわゆる白川砂のような白っぽい色調を呈すると思われるので，やはり，黄色砂の中でも黄褐色の部分は崩壊土砂がそのまま下流で堆積したものと考えたい。
(40)　文献*108*の84～86頁。
(41)　文献*113*。
(42)　文献*62*の10頁。
(43)　比叡山一帯の地質図にはいろいろなものがあるが，それらの基礎は，松下進氏の作成したもののようである（文献*106*）。ここでは，文献*1*の13･14頁の図を用いた。また，この一帯の地史についても，その一々を挙げられないほど古くからよく研究されている。
(44)　文献*1*の13～16頁。
(45)　文献*1*の14頁。白川流域での，タガネの打ち込みによる簡易的な風化程度の測定によると，上流に進むほどタガネの貫入率が上昇して風化程度が高くなり，山麓ほど新鮮な状態であることが確かめられている（文献*6*の15頁）。
(46)　文献*5*の59～61頁。
(47)　文献*47*。
(48)　文献*53*。
(49)　文献*5*の60～66頁。
(50)　文献*86*，文献*96*。
(51)　文献*90*，文献*109*。
(52)　文献*89*。
(53)　文献*60*。
(54)　文献*58*。
(55)　文献*52*。
(56)　文献*2*。
(57)　文献*78*。
(58)　文献*41*。
(59)　文献*9*。
(60)　文献*78*。
(61)　同じ花崗岩類地盤でも，例えば六甲山地では，六甲花崗岩と布引花崗閃緑岩の2種の花崗岩類が分布し，それぞれで風化の程度や特性に違いがあることから，土砂移動の主たる形態も異なるという（文献*39*）。しかし，本論ではおよその比較ということで，花崗岩類の地盤を同様に扱った。
(62)　文献*7*，文献*36*の67～68頁，文献*43*，文献*54*。
(63)　2004年夏に京都府京都土木事務所の霜田勤氏・土橋貞夫氏から御教示いただいた。記して，御礼申し上げます。
(64)　文献*44*，文献*45*，文献*66*の35～39頁，文献*75*。
(65)　文献*10*，文献*25*，文献*40*。
(66)　文献*82*。
(67)　文献*33*，文献*34*，文献*35*，文献*98*。崩壊に関する諸数値については，主として文献*33*のグラフ数値に依拠したが，国土交通省六甲砂防工事事務所の作成した地震発生から4ヶ月ほど経過したあとの資料では，いずれの値もかなり大きくなっている（同事務所の久内忠氏より資料

と御教示をいただいた。記して，御礼申し上げます）。後述するように，降雨で崩壊が増大したからである。

(68)　実際に，後述するように，比叡山東南麓の滋賀県穴太遺跡では，縄文晩期末から弥生中期前葉の最末期までの間に発生した地震による地割れが確認されている（文献*79*の31～41頁）。ただし，京都大学構内遺跡では黄色砂堆積後で，おそらくは地盤があまり安定していない弥生中期前葉から中葉にかけての時期の，地震による噴砂が確認されており（文献*95*の106～113頁），穴太遺跡の地割れもこの地震によるものだとすれば，黄色砂の堆積後の地震ということになる（これについては第８章にて略述する）。

(69)　文献*54*の17～18頁。

(70)　西三河については，過去100年では大規模崩壊はないが，現在の田地の真ん中に３ｍ程の巨礫が多数あり，記録に残らないころの大規模災害が指摘されている（文献*40*の53～54頁）。南山城については，宝暦元（1751）年の大水害の様子が地図として記録されている（文献*45*の10頁）。

(71)　文献*12*。

(72)　文献*102*の54頁。

(73)　花粉分析については文献59を，珪藻分析については文献92を，それぞれ参考にした。

(74)　文献*91*の122頁。

(75)　文献*19*の13～16頁。

(76)　文献*56*。

(77)　文献*23*。

(78)　この水田面の凹凸について，「凸部と凹部の比高差は10㎝を超える部分もあり，形状も不定で，足跡や工具痕あるいは根株痕とは認めがたい」と調査者が判断していることから（文献*18*の５頁），田面の凹凸を田起こしを痕跡的にとどめたものと考えた場合，幾分水気を含んだ地面で根株を人力で引っこ抜いた状況が想定できよう。

(79)　文献*18*の１頁，文献*19*の５頁。

(80)　現代でも収穫後に秋耕をする農法さえある。

(81)　初源的な水稲農耕では直播きの可能性もある（文献*77*の325頁）。

(82)　関連する大地震を挙げるならば，京都盆地西部の長岡京市や比叡山東南麓の大津市では，縄文晩期末から弥生中期の間に生じた噴砂や地割れが確認されている（文献*83*，文献*79*の31～41頁）。しかし，歴史時代の鴨川氾濫について集成された資料（文献*32*）などを基にして，地震の後に降雨状況が記述されていないのに氾濫の記述が見られる事例を探しても，（それらの洪水が比叡山西南麓の土石流をともなったものであるかは不明ではあるとはいえ，）地震の数日から数ヶ月後の大雨や長雨による氾濫の記述に比べると，ほとんど見当たらない。相当な乾燥状態が続いていたなかで「地震」の24日後に氾濫した承和元（834）年の例でも，氾濫当日は「雨水氾溢」と記され，またその４日前にはしっかりとした降水があった（『続日本後紀』）。地震でゆるんだ地盤がその後の降雨などで崩壊することは，現代の事例からも指摘されており（文献111），本論でとりあげた兵庫県南部地震においても確認されているが（文献*35*の20～21頁），地震だけで崩壊土砂が扇状地に広域かつ大量にもたらされたとは考えがたい。

(83)　文献*100*。

(84)　文献*48*。

(85)　文献*79*の24～41・83～108頁，文献*80*の15・68～85・332～334頁。なお，調査者は，弥生前期以来の比叡山の人為的開発によって土石流が発生した可能性も紹介している（文献*81*の333～334頁）。

(86)　文献*65*。この他にも，大津市教育委員会が数次にわたって調査をおこない報告書を刊行しているが，弥生前期の土砂移動に関する情報は管見に触れていない。

(87)　南滋賀遺跡は，滋賀県文化財保護協会や大津市教育委員会が継続的に多次にわたる調査をおこなっており，多数の成果報告がある。

(88)　文献*103*。
(89)　仮に，この遺跡の地盤とみなされている黄色がかった風化花崗岩質の砂層の上面の地形を復原すると，この住居址の確認された地点は舌状に突き出した微高地上に位置する。
(90)　錦織遺跡は，滋賀県文化財保護協会や大津市教育委員会が継続的に多次にわたる調査をおこなっており，多数の成果報告がある。
(91)　中臣遺跡は，京都市埋蔵文化財研究所などが継続的に多次にわたって調査をおこなっており，成果報告が多数ある。1990年代半ばまでの調査成果にもとづく遺跡の概要については，文献*17*の157頁に端的にまとめられている。
(92)　文献*67*の117～124頁。
(93)　文献*17*の表12，文献20の表１。
(94)　文献*61*の83～84頁。
(95)　文献*17*の表12，文献*20*の表１。
(96)　文献*104*。
(97)　大阪平野については文献*84*を，岡山平野については文献*93*を，それぞれ参照されたい。
(98)　文献*94*の30頁。
(99)　文献*85*。
(100)　扇状地の形状と土砂災害の危険度との関係は，文献11を参考にした。
(101)　2004年夏に京都府京都土木事務所の霜田勤氏に御教示いただいた。記して，御礼申し上げます。
(102)　文献*27*の31頁。
(103)　岡崎断層については，それを挟んでＡＴ火山灰の高度に西上がり約５㎝の変異が生じている（文献*42*の54頁）。岡崎断層の西の断層は，「神楽岡断層」と呼ばれているが，詳細は不明（同上文献）。
(104)　文献*13*，文献*112*。
(105)　文献*24*の134～136頁。
(106)　文献*15*。
(107)　文献*51*。

〔文　献〕

1　足利健亮　1985「自然と景観」『史料京都の歴史８　左京区』（京都市），8～18頁
2　阿部和時　1998「樹木根系の斜面崩壊防止機能」『森林科学』№22，23～29頁
3　網　伸也・村上　隆　1991「北白川廃寺　第６次調査」『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報　平成２年度』（京都市埋蔵文化財研究所），4～26頁
4　家崎孝治　1984「北白川廃寺（ＫＳ12）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度』，３～６頁
5　池田　碩　1964「花崗岩地域の地形学的研究　－比叡山・如意ヶ岳山地を事例として－」『京都府私学研究論集』第２号，57～74頁
6　池田　碩　学1969「比叡山・如意ヶ岳・東山山系の地形学的研究　－その１：山地の地形－」『東山学園研究紀要』第14集，7～24頁
池田　碩　1973「1972年９月・20号台風による比叡山系音羽川流域の災害」『京都府私学研究論集』第11号，63～87頁
8　池田　碩・石田志朗　1973「比叡平小起伏面２地点の黒土の年代　－日本の第四紀層の14Ｃ年代（85）－」『地球科學』第27巻第４号，150～151頁
9　池本　済・兵藤和弘・竹下敬司　1986「山腹斜面における樹木根系の分布調査」『第97回日本林学会大会発表論文集』，587～589頁

文　献

10　池谷　浩　1973「全国土砂災害実態調査の結果」『土木施工』第14巻第11号，2～19頁
11　池谷　浩　1976「常願寺川扇状地における危険度調査について－地形，古文書等を中心として－」『新砂防』第29巻第１号（通巻100号），31～41頁
12　池谷　浩　1980「災害予測から見た誘因（特に降雨について）」『地すべり・崩壊・土石流　－予測と対策－』（鹿島出版会），65～77頁
13　石田志朗　1967「京都市北白川上終町の衝上断層でずれている腐食の絶対年代　－日本の第四紀層の14Ｃ年代ＸＸＸⅥ－」『地球科學』第21巻第６号，39～40頁
14　石田志朗・中村徹也・中村友博　1972『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
15　泉　拓良　1978「京都大学北部構内の地形復原　－縄文時代から弥生時代－」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』，43～48頁
16　五十川伸矢・飛野博文　1984「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』，7～30頁
17　伊藤淳史　1995「京都盆地の弥生時代遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』，137～183頁
18　伊藤淳史　1995「京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第58号，1～８頁
19　伊藤淳史　1999「京都大学総合人間学部構内ＡＯ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』，3～40頁
20　伊藤淳史　2000「山城地域における弥生集落の動態」『みずほ』第32号，58～73頁
21　伊藤淳史　2000「京都大学総合人間学部構内ＡＲ25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1996年度』，3～80頁
22　伊藤淳史　2003「比叡山西南麓における縄文から弥生　－京都大学構内遺跡出土資料の紹介と検討を通じて－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』，193～206頁
23　伊藤淳史・外山秀一・冨井　眞　2001「比叡山西南麓先史遺跡群における弥生前期水田調査の意義」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』，53～56頁
24　伊藤淳史・冨井　眞・外山秀一・上中央子　2005「京都大学北部構内ＢＣ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度』，133～208頁（本年報第３章）
25　植下　協・桑山　忠　1973「47・７豪雨による西三河地方の山地崩壊」『土と基礎』第21巻第７号（通巻185号），29～32頁
26　上村和直　1983「福勝院跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』，52～53頁
27　植村善博　2000『京都の地震環境』（ナカニシヤ出版）
28　内田好昭・丸川義広・平方幸雄　1995「白河街区跡　最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成３年度京都市埋蔵文化財調査概要』，41～47頁
29　梅原末治　1935「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊，1～80頁
30　大場秀章・藤田和夫・鎮西清高編　1995『日本の自然　地域編５　近畿』（岩波書店）
31　岡田保良・吉野治雄　1979「京大理学部遺跡ＢＥ29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，17～38頁
32　小鹿島果編　1894『日本災異志』
33　沖村　孝　1996「六甲山地における山腹斜面の崩壊」『兵庫県南部地震と地形災害』（古今書院），110～126頁
34　沖村　孝編　1998「山腹崩壊」『阪神・淡路大震災調査報告　共通編２』（土木学会）、565～577頁
35　沖村　孝・鳥居宣之　1997『六甲山系山腹斜面崩壊の分布と特徴』（神戸大学工学部土木系教室兵庫県南部地震学術調査団『被災メカニズム解析と復興に関する論文シリーズ』第２巻第１号，通巻第７号）
36　奥田節夫　1973「土石流の現地調査について」『京都大学防災研究所年報』第16号Ａ，53～69頁

37 梶川敏夫　1975「北白川廃寺緊急発掘調査概要」『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』（京都市文化観光局），6～15頁
38 梶川敏夫　1975「北白川廃寺塔跡第２次発掘調査概要」『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』（京都市文化観光局），35～69頁
39 神尾重雄　1999「地質分類の問題点」『土木技術資料』第41巻第６号，18～19頁
40 神谷忠良・加藤宣機・冨増栄三　1973「47・７豪雨による愛知県西三河地方の災害について」『新砂防』第25巻第３号（通巻86号），44～57頁
41 北原　曜・阿部和時・大倉陽一・川浪亜紀子・安部哲人　2001「斜面安定に及ぼす森林の水平根の効果」『第112回日本林学会大会学術講演集』，352頁
42 京　都　市　2001『京都の活断層』（京都市消防局防災対策室）
43 京都府京都土木事務所・国際航業株式会社　1986『昭和60年度音羽川砂防企画調査報告書』
44 京都府土木部砂防課　1957『昭和31年度砂防調査報告書』
45 近畿地区各大学連合水害科学調査団　1954『南山城の水害』
46 小橋澄治・中山政一・今村遼平　1980「土砂移動現象の実態」『地すべり・崩壊・土石流　－予測と対策－』（鹿島出版会），28～64頁
47 佐藤敏明・北澤秋司　1984「生田花崗岩の風化と崩壊予測に関する研究（Ⅱ）」『第32回日本林学会中部支部大会講演集』，299～302頁
48 佐原　真　1961「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第７巻第２号，58頁
49 清水芳裕　1985「自然地形の変化と遺跡の形成過程」『第四紀研究』第24巻第３号，183～188頁
50 清水芳裕　1991「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ　－京都大学病院構内遺跡の調査－』（京都大学埋蔵文化財研究センター），19～27頁
51 清水芳裕・古賀秀策　1997「京都大学北部構内ＢＢ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』，41～52頁
52 下川悦郎　1983「崩壊地の植生回復過程」『林業技術』第496号，23～26頁
53 下川悦郎・地頭薗隆・堀与志郎　1984「花崗岩地帯における山くずれの履歴」『日本林学会九州支部研究論文集』第37号，299～300頁
54 修学院災害科学調査団　1974『1972年９月音羽川流域－修学院地区の災害』
55 諏訪　浩　1991「土石流の現地観測」『砂防学講座第４巻　渓流の土砂移動現象』（山海堂），204～236頁
56 石器使用痕研究会　2002『弥生文化と石器使用痕研究　－農耕に関わる石器の使用痕－』（第７回石器使用痕研究会発表要旨集）
57 高橋　保　1980「土石流の停止・堆積機構に関する研究（２）　－土石流扇状地の形成過程－」『京都大学防災研究所年報』第23号Ｂ－２，１～14頁
58 高原　光　1985「大阪府能勢町周辺における森林変遷」『日本林学会関西支部第36回大会講演集』，141～144頁
59 高原　光　1994「近畿地方および中国地方東部における最終氷期以降の植生変遷」『京都府立大学農学部演習林報告』第38号，89～112頁
60 高原　光・竹岡政治　1986「京都市八丁平湿原周辺における最終氷期最盛期以降の植生変遷」『日本生態学会誌』第36巻，105～116頁
61 高松龍暉・矢野健一　1997「縄文集落の定住性と定着性　－兵庫県養父郡八木川上・中流域における事例研究－」『考古学研究』第44巻第３号，82～101頁
62 武居有恒・小橋澄治　1980「土砂災害」『地すべり・崩壊・土石流　－予測と対策－』（鹿島出版会），７～27頁
63 竹村恵二・飯田義正・石田志朗　1985「北白川追分町遺跡の堆積物」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ　－北白川追分町縄文遺跡の調査－』（京都大学埋蔵文化財研究センター），79～93頁

文　献

64　竜子正彦・尾藤徳行　1996「北白川廃寺」『平成６年度京都市埋蔵文化財調査概要』，98～100頁
65　田辺昭三・加藤　修編　1973『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会）
66　谷　　勲　1975「山地の崩壊と土砂の生産，流出　－有田川流域，南山城地域の災害－」『新砂防』第28巻第１号（通巻96号），30～39頁
67　地学団体研究会京都支部　1990『新京都五億年の旅』（法律文化社）
68　千葉　豊・伊藤淳史・古賀秀策　1997「京都大学本部構内ＡＵ30区・ＡＶ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』，３～40頁
69　千葉　豊・吉井秀夫・小崎　隆・矢内純太・藁科哲男　1997「京都大学本部構内ＡＷ25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』，53～92頁
70　千葉　豊・古賀秀策・冨井　眞・伊東隆夫・宮武頼夫・初宿成彦　1998「京都大学北部構内ＢＦ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度』，39～83頁
71　千葉　豊・阪口英毅　2005　「京都大学吉田南構内ＡＮ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度』，３～132頁（本年報第２章）
72　辻　純一　1982『北白川廃寺跡発掘調査概要　昭和56年度』（京都市埋蔵文化財研究所）
73　辻　裕司・丸川義広　1984「尊勝寺跡」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，47～49頁
74　辻　裕司・鈴木廣司　1985「尊勝寺跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，50～51頁
75　栃木省二　1954「京都府下，南山城災害調査報告」『新砂防』第13号，10～18頁
76　冨井　眞　2003「京都大学本部構内ＡＸ22区の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1999年度』，113～122頁
77　外山秀一　1994「プラント・オパールから見た稲作農耕の開始と土地条件の変化」『第四紀研究』第33巻第５号，317～329頁
78　中井裕一郎・原　敏男・陶山正憲　1987「林地の地表流下量と流出土砂量に関する一考察（Ⅱ）」『日本林学会関東支部大会発表論文集　第39回』，209～210頁
79　仲川　靖編　1994『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（滋賀県教育委員会）
80　仲川　靖編　1997『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（滋賀県教育委員会）
81　仲川　靖　1997「穴太遺跡縄文時代集落の発見・経緯・問題点」『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（滋賀県教育委員会），332～340頁
82　中筋章人　2000「土石流」『山地の地形工学』（古今書院），194～198頁
83　中塚　良　1997「長岡京跡の地震痕跡と古地震履歴」『古代学研究』第139号，41～55頁
84　中西靖人　1992「農耕文化の定着」『新版古代の日本５　近畿Ⅰ』（角川書店），93～118頁
85　中堀謙二　1979「京都大学構内遺跡の花粉分析」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，55～60頁
86　中堀謙二　1985「北白川追分町遺跡の古植生の復原」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ　－北白川追分町縄文遺跡の調査－』（京都大学埋蔵文化財研究センター），193～200頁
87　中村徹也　1973『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
88　中村徹也　1974『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
89　那須孝悌　1973「付篇３　滋賀里遺跡の花粉および植物遺体」『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会），237～240頁
90　那須孝悌　1981「深泥池の地史」『深泥池の自然と人』（京都市文化観光局），11～34頁
91　那須孝悌　1989「活動の舞台：概論」『弥生文化の研究１　弥生人とその環境』（雄山閣），119～130頁
92　野口寧世　1987「珪藻遺体群による古環境の考察」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』（大阪府教育委員会），278～289頁
93　野崎貴博　2003「岡山平野における弥生時代前期～中期の洪水と集落の動態」『津島岡大遺跡12　－第19・21次調査－』（『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第17冊），126～141頁
94　浜崎一志　1983「京都大学北部構内ＢＤ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和

56年度』，25～30頁
95 浜崎一志・千葉　豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫　1995「京都大学北部構内ＢＡ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』，65～125頁
96 日浦　勇・宮武頼夫　1985「北白川追分町遺跡出土の昆虫遺体」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』（京都大学埋蔵文化財研究センター），145～153頁
97 樋口隆康・泉　拓良　1981「京都大学構内遺跡の概略」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』，5～12頁
98 兵庫県立人と自然の博物館　1996『兵庫県南部地震における人と自然の博物館の活動』
99 平尾公一・大久保駿　1970「昭和42年７月豪雨災害について　－呉市浜田川の土砂流出－」『新砂防』第22巻第３号（通巻第75号），17～24頁
100 平尾政幸　1987『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報　昭和61年度』（京都市埋蔵文化財研究所）
101 平方幸雄・吉崎　伸　1983「小倉町別当町遺跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』，79～80頁
102 古川博恭　1972「濃尾平野の沖積層－濃尾平野の研究その１－」『地質学論集』第７号，39～59頁
103 細川修平　1991「Ⅰ－５地点（南滋賀遺跡）」『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅴ』（滋賀県教育委員会），33～41頁
104 前田義明・磯部　勝　1991「下鳥羽遺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，76～79頁
105 増田富士雄・田村　亨・冨井　眞　2005　「砂質土石流堆積物の粘度特性　－京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）－」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度』，263～276頁（本年報紀要ⅩⅥ）
106 松下　進　1951「比叡山付近地質図」『比叡山　－その自然と人文－』（京都新聞社），巻末付図
107 水原邦夫　1993「風化花崗岩類山地における土石流扇状地の堆積構造について」『京都府立大学農学部演習林報告』第37号，33～42頁
108 水原邦夫・武居有恒　1982「扇状地における土砂災害の実態に関する研究」『京都府立大学学術報告　農学』第34号，83～92頁
109 深泥池団体研究グループ　1976「深泥池の研究（２）」『地球科学』第30巻第２号（通巻143号），62～80頁
110 南　博史編　1989『吉田近衛町遺跡』（『京都文化博物館調査研究報告』第４集）
111 山口伊佐夫・川邊　洋　1982「地震による山地災害の特性」『新砂防』第35巻第２号（通巻125号）３～15頁
112 吉岡敏和・苅谷愛彦・七山　太・岡田篤正・竹村恵二　1998「トレンチ発掘調査に基づく花折断層の最新活動と1662年寛文地震」『地震　第２輯』第51巻第１号，83～97頁
113 吉野治雄　1977「教養部遺跡ＡＬ24の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』，76～77頁

砂質土石流堆積物の粒度特性
－京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）－

増田富士雄*　田村　亨**　冨井　眞

1　はじめに

京都市左京区の北白川追分町遺跡に位置する，京都大学理学部６号館建設予定地の発掘調査で（図139），弥生時代の「砂質土石流堆積物」の断面を2000年10月に観察した。そして，その断面における粒度組成変化を解析した結果，この堆積物が異なる種類の流れから堆積したと考えられる三層構造をもつことと，そのうちの二層については陸上土石流堆積物では初めての報告となる「多重逆級化構造」をもつことがわかった。

本文は第２節を冨井が，その他を増田・田村が執筆し，編集は冨井が担当した。

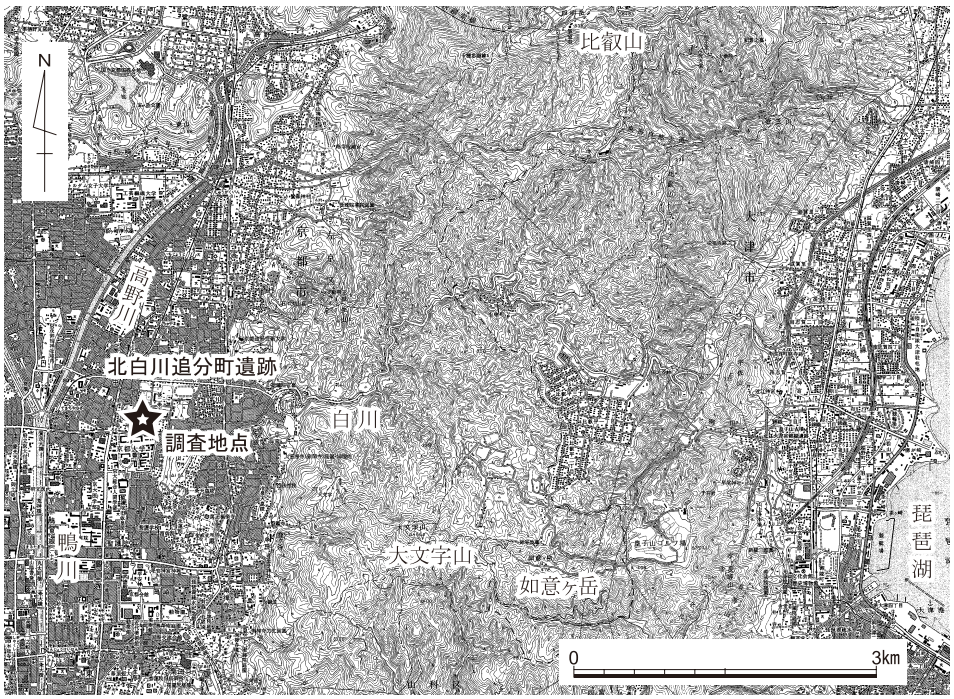


図139　調査地点の位置　縮尺1/7万5千

*京都大学大学院理学研究科　**産業技術総合研究所

2　既往調査の概略

京都東山の比叡山と如意ヶ岳の間の西麓に広がる白川扇状地の扇端に位置する，北白川追分町遺跡を含めた京都大学構内遺跡には，主に黄褐色を呈する砂層が広く分布することが知られている（清水1985，冨井2003）。残存する層厚が２ｍを超える地点もあるこの砂層は，下位に弥生時代前期までの遺物を包含する地層が確認されることから，構内遺跡の発掘調査においてはいわゆる鍵層とみなされ（泉1978），「黄砂」ないし「黄色砂」と呼ばれている。今回の発掘調査でも，水稲耕作の開始期である弥生時代前期末葉の水田を覆って，層厚２ｍに近い黄色砂が堆積しているのが確認されている(1)。黄色砂の堆積年代は，黄色砂の上に弥生中期前葉の墓が認められる地点があるので（岡田・吉野1979），弥生時代前期末～中期初頭（約2500年前）に限定できる。

黄色砂は，各地点でまったく同様の堆積相を呈するというわけではない。最下部の粘土ないしシルトから上方にむかって粗粒化していく地点や（泉1978；伊藤1995），あるいは上方で細粒化している地点（浜崎1983）もある。また，構内遺跡の北半では，下部に主に花崗岩の亜円礫からなる巨礫が散見できる(2)。浜崎（1983）は，理学部６号館の北東に隣接する地点の調査で，こうした巨礫を黄色砂の下部に確認した(3)。そして，その調査地点の北半に巨礫の分布が限られることから，そこが西へ流れた土石流の南端であろう，と推定している。以来，黄色砂は，土石流に後続した洪水性の堆積物とみなされたり（例えば清水・古賀1997），「土石流堆積物」（例えば浜崎ほか1995）とみなされたりしている。しかし，巨礫と黄色砂を分離して考えるにしても，両者の間には，人間の活動の痕跡は無論，地表面が安定していた痕跡も見出すことはできない（清水1985）。

3　砂質土石流堆積物

今回の調査地点で観察できた「土石流堆積物」（図140）は，花崗岩が風化して「まさ」化したものが再移動して堆積したと考えられる粗砂から中砂を主体とし，まれに直径１ｍ程までの花崗岩亜円礫を含む。そのうちで精査した部分は厚さ75～90㎝で，上部は人工的に撹乱され欠けている。野外での色調と粒度の観察から，この砂層は細～中粒で灰白色の下部ユニット（厚さ25～30㎝）と，中～粗粒で黄褐色の上部ユニット（厚さ50～60㎝）に区分できる。砂層は塊状で，明瞭な堆積構造はみられないが，粒度や構成物質の違いに由来すると思われるほぼ水平の境界によって，層状構造が不明瞭ながら認められる。こうし

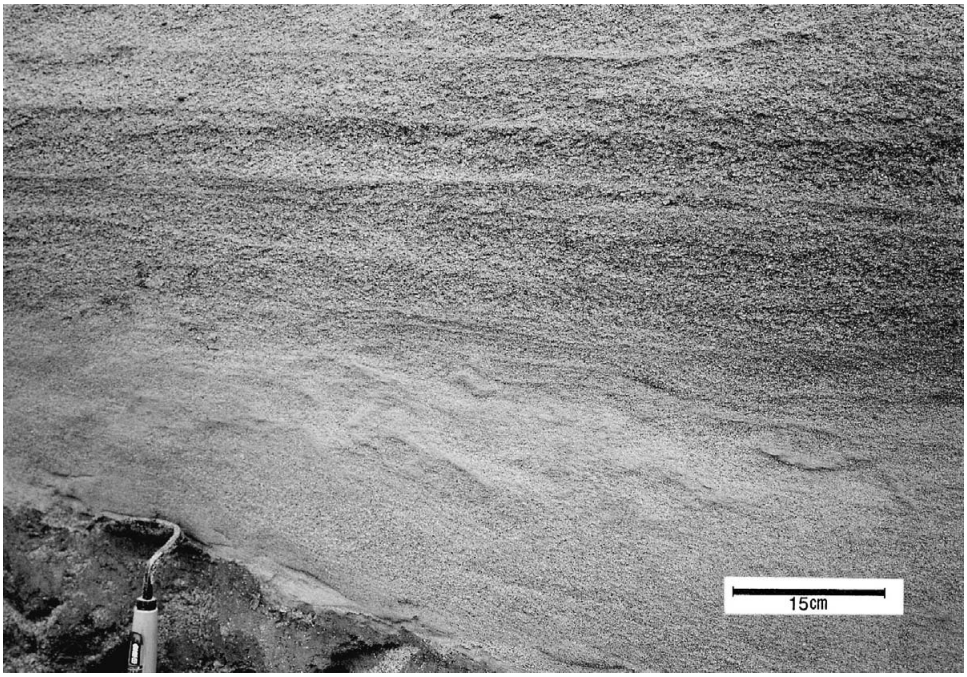


図140　調査地点東壁面の「黄色砂」

た境界で，下部ユニットは４帯に，上部ユニットは７～８帯に，区分できる。ここでは，この層状構造をなす層をバンドとよんでおく。下部ユニットと上部ユニットの境界は漸移する。基底は原地形の小さな凹凸を埋積しており，最下部のバンドは下位の白肌色の粘土層（厚さ１～４㎝）から逆級化して連続的に移化する。したがって，この基底の粘土から砂へ逆級化する泥層部分から下部ユニットさらに上部ユニットは一連の過程で堆積したものであり，層内に「長い時間間隙」を示すと考えられるような境界面は認められない。

「黄色砂」については，これまで地質学的な分析はほとんどなく，竹村ほか（1985）が，理学部構内の黄色砂の粒度組成を１例報告しているのみで，その後も粒度分析は試みられていない。そこで今回は，黄色砂から多数の試料を採取して（図141），詳細な粒度分析をおこなった。我が国でみられる土石流堆積物は，さまざまな大きさの礫が泥質の基質に混在するのが普通である（増田1999）が，ここで報告するものは，花崗岩地域を発生域とした土石流であり，砂を主体とする，いわゆる「砂質土石流堆積物」であることが特徴である。こうした砂質土石流の粒度特性が詳しく調べられた例はこれまでにないといってよい。

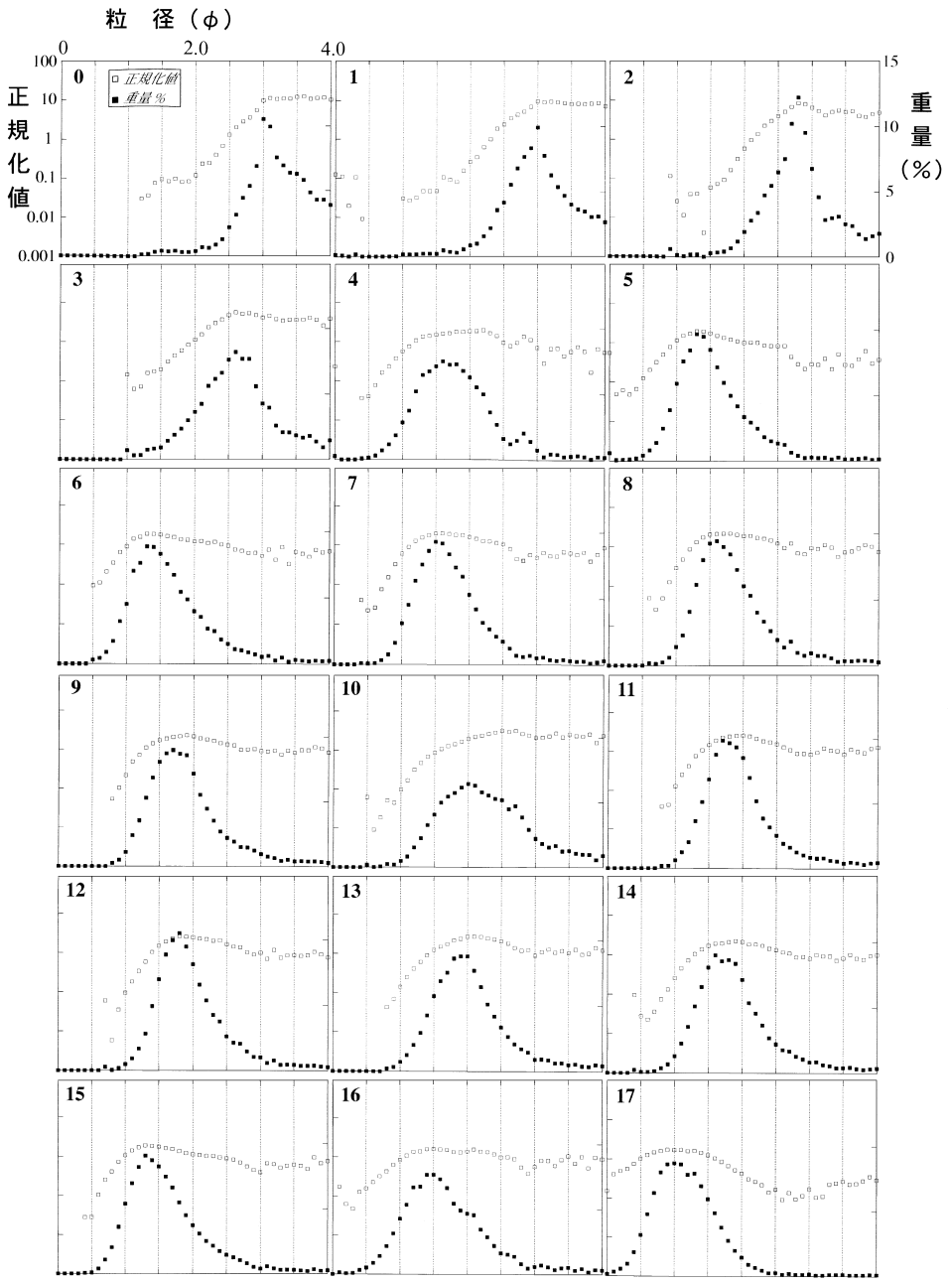


図141　各試料の粒度分布曲線（黒四角）と正規化曲線（白ぬき四角）

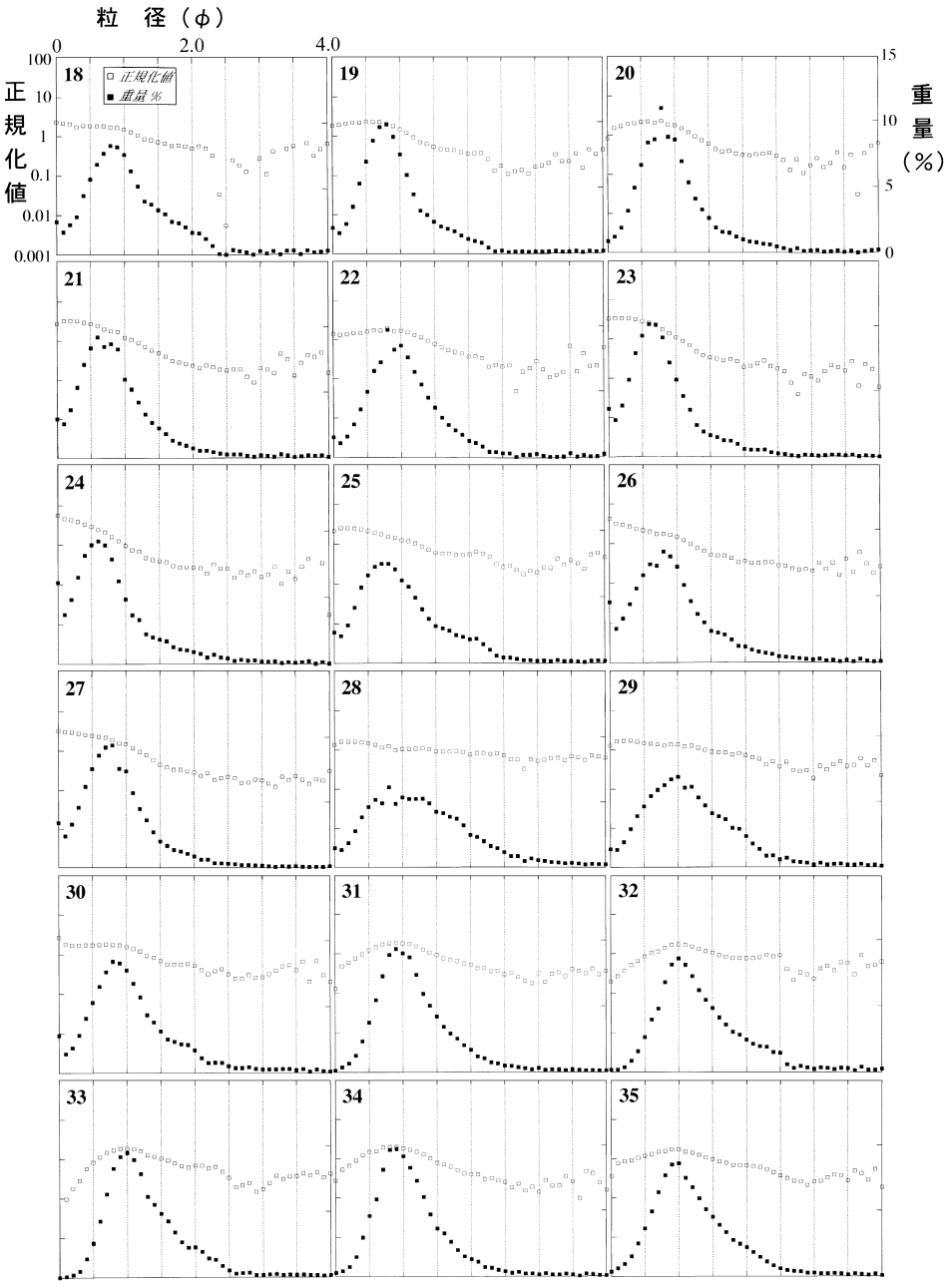

粒　径（φ）
0
2.0
4.0
正規化値
重量（%）
100
10
1
0.1
0.01
0.001
15
10
5
0
18
正規化値
重量 %
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

図141　つづき

4　試料採取と粒度解析法

粒度分析の試料は，発掘調査区の東壁に露出した黄色砂の厚さ約60㎝の部分から，堆積構造と対応させながら，36個採取した（図141・142）。試料の粒度分布は自動沈降粒度分析器で求めた。

各試料の粒度特性は，通常おこなわれる古典的な方法（Folk and Ward 1957）と，新しい方法（正規化法：Endo and Masuda 1996；Endo et al. 1996；増田1997）をもちいて解析した。

Folk and Ward（1957）の方法は，求めた粒度分布形から，分布の5，16，25，50，75，84，95パーセントの粒径値を用いて分布形を表現する方法である。これに対し，新しい正規化法は，採取した垂直断面全体に対する各部分の粒度分布の割合を求める方法で，そのパターンで粒度分布の特性を識別する方法である。すなわち，採取した36個の分析結果を基にしてすべての粒径において重量の総和を求め，それを全体で100％になるようにしたものが，「全体の粒度分布」となる。この「全体の粒度分布」で，各試料の粒度分布を割った値（正規化値）をプロットしたものが，正規化した曲線となる。「全体の粒度分布」と比べて，各試料のどの粒径が濃集しているか，欠如しているか，あるいは同じ組成か，などを知ることができ，その特徴から試料を分類することもできる。また，「全体の粒度分布」を構成する複数の正規分布集団を，井口（1975）の方法で分離した。つまり，今回の場合で言えば，「黄色砂」として一括りにされてきた堆積物に対して，約60㎝の層厚の下部から順次36点の試料を採取することによって，堆積物のミクロな構造を観察し，その堆積の成因を詳細に推理することが可能になるのである。例えば，洪水と土石流の堆積物が分離できるのか，洪水ならばその水流はどのように変化したのか，土石流ならばその粘性は変化していないのか，といったことを解明するためには有効な解析方法と期待される。

5　粒度解析の結果と解釈

分析で求めた結果は，粒度分布図に示した（図141）。粒度分布からFolk and Ward（1957）の方法によって，中央粒径，分級度（淘汰度），歪度を計算した。その結果を黄色砂の垂直変動として示した（図142）。なお，粒径はファイ（ϕ）スケールで表示するので，値が大くなるほど粒径が小さくなる(4)。

これらによると，中央粒径は土石流堆積物の最下部（約50㎝）で最も小さく（3.2ϕ），そこから逆級化して下部ユニットでは1.4～2.1ϕ，上部ユニットでは0.6～1.1ϕで，わず

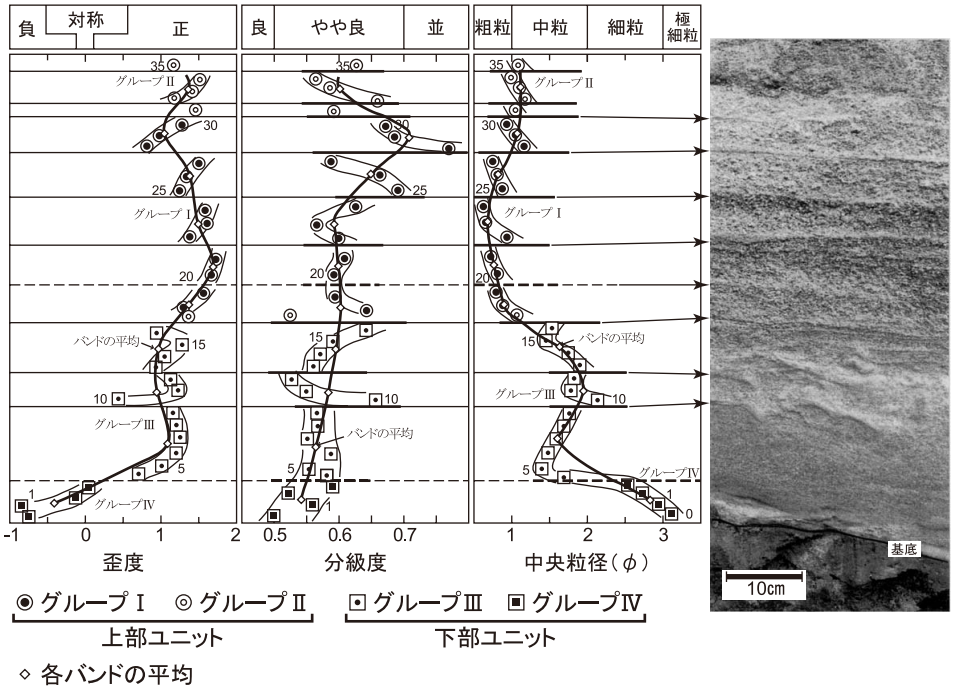


図142　「黄色砂」の粒度特性の垂直変動（図中の数字は試料番号）

かながら正級化する。淘汰は下部ほどよい。歪度は，最下部では最頻粒径が平均粒径と同じか小さい対称～負の歪みで，それ以外の部分では最頻値が平均値を上回る正の歪みの分布を示す。

36個の各試料の粒度分布を基に全試料の総和として作成した「全体の粒度分布」は，中央粒径が1.4ϕとなる（図143の曲線Ａ）。この粒度分布は，2つの変曲点（ｐ1，ｐ２）をもつので，粒径に応じて３つの正規分布をする集団（正規分布集団）に分離できる。その３つの集団とは，全体の35％を占める粗粒な正規分布集団（同図の直線Ｂ），全体の50％を占める中粒な正規分布集団（同図の直線Ｃ），15％の細粒な正規分布集団（同図の直線Ｄ）である(5)。言い換えると，「全体の粒度分布」は，35％の粗粒集団と50％の中粒集団と15％の細粒集団から構成される。

「全体の粒度分布」で各試料の粒度分布を正規化した曲線（図141の□）は，粒径の正規化値が１より大きい値の時にはその粒径が全体のそれに対してより取り込まれ易く，１より小さいときにはその粒径がより欠乏していることを示している。その正規化した曲線

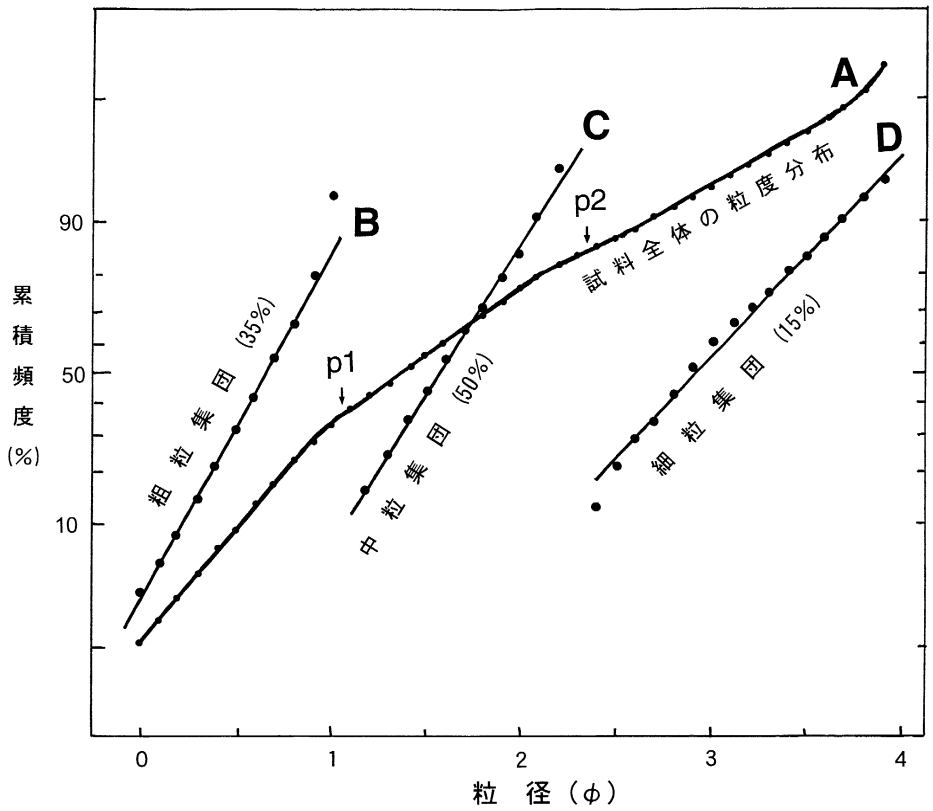


図143　正規確率紙上に表した粒度分布

の形状から4グループに分類できる（図144）。グループⅠ（試料番号18～30）は，1.5φより粗粒になるに連れて正規化値が左上がりになり，1.5φより細粒な部分は1より小さな値でほぼ水平のパターンをとる。これは，グループⅠの堆積時には，1.1φより大きな粒子ほど大きい割合で取り込まれ（正規化値が粒径の大きいものほど大きい），1.5φより小さな粒子は全体の組成と同じ割合で欠如していることを示す。グループⅡ（試料番号17，31～36）は，1.0φ付近にピークをもつ上に凸の曲線で，2φ以下はほぼ水平のパターンを示す。これはグループⅡの堆積時に，1φ付近（0.5～1.5φ）のやや大きな粒子が濃集し，それ以外の粒径の粒子は欠乏していることを意味する。グループⅢ（試料番号4～16）は，1.0～1.5φより粗粒な部分は左下がりで，2.5φより細粒な部分は1の値でほぼ水平のパターンをとる。これは，1.0～1.5φの粒子がわずかに濃集し，それより大きな粒

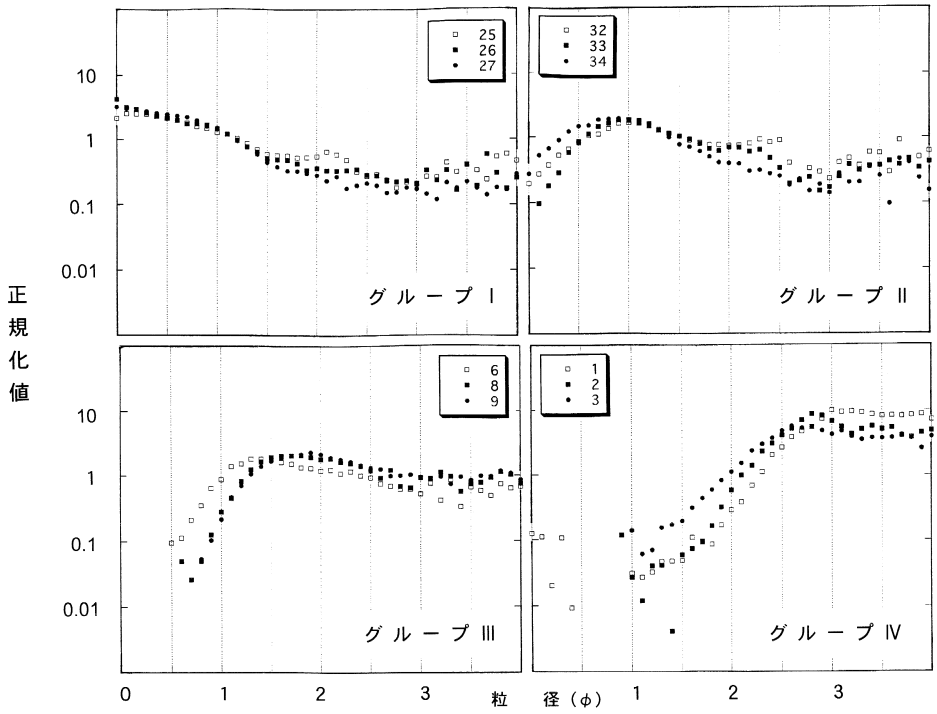


図144　正規化法によって分類した４グループの主な試料の曲線パターン（凡例は試料番号）

子ほど取り込まれにくく，2.5φ以下の小さな粒子は全体の粒度組成と同じ割合で含まれている（正規化値が１）ことを示す。グループⅣ（試料番号０～４）は，2.75φより細粒な部分は左下がりで，それ以上はほぼ水平なパターンをとる。これは，2.75φよりも小さな粒子が一定の割合で，しかも全体の組成より多く取り込まれ，それ以上の大きな粒子は大きいものほど取り込まれにくいことを示す。

上下のユニットとこれらのグループとの関係をみてみると（図142），上部ユニットはグループⅠとグループⅡのパターンを，下部ユニットはグループⅢとグループⅣのパターンを，それぞれ示す粒子群からなる。グループⅠとグループⅡでは，グループⅠの方がグループⅡよりもより大きな粒子を多く取り込むと考えると，両者は連続したグループと考えることができる。一方，グループⅢとグループⅣでは，ある粒径よりも大きな粒子が選択的に排除され，それより小さい粒子はほぼ一定の割合で含まれるという共通の変化パターンを示す。これは「流れの中で浮遊する粒子が，流れの強さに応じて，流れで支持で

きなくなったより大きい粒子から順に選択的に除かれるときのパターン」(Endo and Masuda 1996；Endo et al. 1996）で説明できる。つまり，流れが比較的弱い状態で堆積したことを示している。しかし，グループⅣはグループⅢよりもはるかに細粒物質を多く含み，中央粒径なども違い，2つのグループ間にはギャップがある。

「全体の粒度分布」を構成する３つの正規分布集団を全体の粒度組成で正規化すると，粗粒集団は1.1φよりも大きい粒子がより多く取り込まれているグループⅠに，中粒集団は1.0～2.5φの粒子が取り込まれやすいグループⅢに，細粒集団は2.75φよりも小さい粒子がより多く取り込まれているグループⅣに，それぞれ一致する。このことは，黄色砂は，粒度特性からすると，上部ユニットのグループⅠと下部ユニットのグループⅢに大きく２分され，グループⅡはグループⅠに共通していてグループⅠとグループⅢの中間に位置づけられる一方で，グループⅣのパターンはグループⅢに近いが，先に述べたように，両者間にギャップがある，ということを示している。

6　級化構造と堆積過程

粒度特性の垂直変動（図142）を細かくみると，まず，グループⅢ・Ⅳからなる下部ユニットは，それぞれが逆級化から正級化を示す３つのバンドで構成されている。また，グループⅠ・Ⅱからなる上部ユニットは，少なくとも８つの逆級化したバンドから構成されている。すなわち，どちらも「多重逆級化層」で構成されていることがわかる。

黄色砂の最下部（図145），つまり粘土層とグループⅣからなる部分は，河川の洪水氾濫堆積物で観察される粘土から砂への逆級化構造（増田・伊勢屋1985；鈴木2000）に似る。この構造は，氾濫初期に洪水流に多量に含まれる風化物質の粘土がまず堆積し，その後，流速の増加にともなって浮遊物質の粒径が大きくなり，それが堆積してできる。一方で，土石流堆積物の基底部にも逆級化構造が認められることは知られている（Nielsen 1982；増田2004）。この両者を区別する基準は確立していないが，氾濫堆積物の基底は純粋な粘土層で，土石流の基底のものは砂質泥層であることが多いように思える。従って現状では，黄色砂の最下部（図145）は，河川の洪水氾濫堆積物であろうと考えている。これは，すでに述べたグループⅣの粒度分布を正規化したパターンが，他のグループと区別されることからも支持される。

上部ユニットにみられる多重逆級化層はトラクションカーペット（traction carpet）と呼ばれ，多量の粒子を含んだ高濃度の流れから堆積した水中高密度混濁流堆積物（高密度

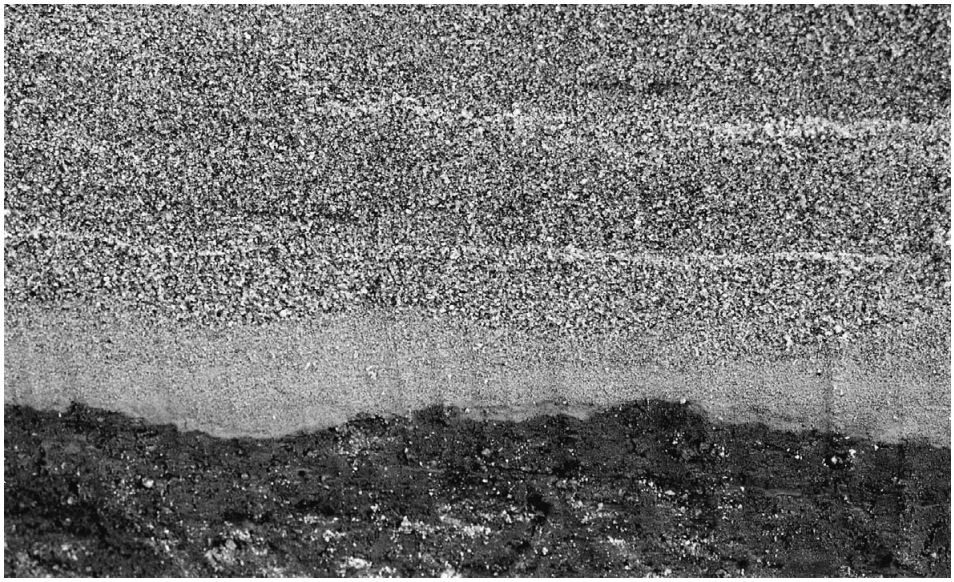


図145　「黄色砂」の下部ユニットの逆級化構造（写真の高さが約15㎝）

タービダイト）や水中土石流堆積物に特徴的な堆積構造とされた（Lowe 1982；Hiscott 1994；Sohn 1997）。その成因については，高密度の流れの中で，小さな粒子が大きい粒子のすき間に落ち込んだ（Middleton 1970），細粒なものが選択的にかつ連続的に堆積した（Sohn 1997），などの考えがある（成瀬ほか2001；成瀬2004）。こうした過程では，粒度組成と流れの中を通過する粒子の量とともに，粒子のつくりだす連鎖構造が重要な役割を果たしているという指摘（高川2004；高川・増田2004）もある。また，速い流れの中で形成される高領域のベッドフォームであるアンティデューン（反砂堆）が多重級化構造をつくりだすことも知られている（宮田・田中2004）。

これまで水中で形成された高密度の重力流堆積物から報告されてきた多重逆級化層が，今回の例のように陸上での堆積物，とくに風化花崗岩起源の砂質土石流堆積物から見いだされたことは，成因を考える上でひとつの参考となろう。陸上の堆積物ではこれまで，火山砕屑物にこの種の逆級化層や級化層が見いだされ，それを堆積した流れは，土石流と河川流の中間的な濃度の流れ，つまり砂粒含有率の比較的高い流れである「ハイパーコンセントレイティッド流」と名づけられている（Smith and Lowe 1991；片岡2004）。ハイパーコンセントレイティッド流堆積物についてもその詳細な垂直粒度変動が解析されていない

ので，これ以上は言及できないが，今回の黄色砂全体をみてみると，粒径の小さい下部ユニットのうちでも最下部を除いた部分は，ハイパーコンセントレイティッド流堆積物ではないかと考えている。そして，本当の意味での砂質土石流堆積物は，上部ユニットだといえよう。

以上を総合すると，黄色砂は，基底部が洪水氾濫堆積物，下部ユニットの残りがハイパーコンセントレイティッド流堆積物，上部ユニットが砂質土石流堆積物，の３種の層から構成されており，つまり堆積させた流れの変化に対応した三層構造をしている。大雨による洪水の氾濫で最下部が堆積し，その後，上中流域の多くの地点で土砂崩れが発生して，それが集まって大規模な「土石流」となって，白川扇状地を流れ，調査地点でその一部が堆積したと思われる。「土石流」の性質は流下方向やその側方で多様に変化する。この黄色砂の場合，連続した下部ユニットと上部ユニットの累積は次のような流れから形成されたと考えられる。それは，①流れの前方がハイパーコンセントレイティッド流で，そのあとが土石流本体として流れたか，②土石流からハイパーコンセントレイティッド流が分化した（Sohn 2000）ものであるかである。しかし，陸上であることを考えると，②である可能性は少ない。したがって，ハイパーコンセントレイティッド流から下部ユニットが，続く土石流本体の堆積時に明瞭な多重逆級化層をもった上部ユニットが，それぞれ堆積したと考える。

7　おわりに

ここでは，「砂質土石流堆積物」の粒度分布の垂直変化を明らかにした初めての事例を提示し，さらにそこに多重逆級化構造を発見した。通常おこなわれる古典的な方法と新しい方法（正規化法）とを用いて粒度分布を解析し，さらに粒度特性の垂直変動を解析することで，堆積させた流れの情報を得ることをめざした。この研究方法では，さまざまな地域や堆積物における数多くの事例研究を比較・検討して体系化することが必要である。ここで示した研究例は，そのような体系化への第一歩である。中でも正規化法は，砂層の「部分」の粒度分布について，砂層の「全体」の粒度分布を考慮に入れて評価するという，自然の堆積物の粒度解析法としては，まったく新しい考えによるもので，今後，事例研究が広がることを期待している。

注

〔注〕

（1） 伊藤淳史・冨井 眞・外山秀一・上中央子 2005年 「京都大学北部構内ＢＣ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』，pp.133-208.（本年報第３章）

（2） 冨井 眞 2005年 「京都白川の弥生時代前期末の土石流」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』，pp.225-262.（本年報紀要ＸⅥ）

（3） 京都大学構内遺跡の東北部分にあたる北白川追分町遺跡に巨礫が存在することは，体系的な発掘調査がはじまるころから指摘されていたが，当初は歴史時代の土石流とも考えられていた（池田・石田1973）。

（4） ファイ（ϕ）スケールは，地質学で用いられる粒径を表示する単位で，2㎜を基準として負の指数関数（次式）で示したものである。$\phi = -\log_2 (d/d_0)$，$d_0 = 1$ ㎜.

（5） 例えば，図５の直線Ｃは，累積頻度では50％分を占めているｐ１からｐ２までの間を一つのまとまりとみなし，それを100％として再び分布をみてみたものである。

〔参考文献〕

浜崎一志・千葉 豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年 「京都大学北部構内ＢＡ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』，pp.65-125.

浜崎一志 1983年 「京都大学北部構内ＢＤ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』，pp.25-30.

井口正男 1975年 『漂砂と流砂の水理学』古今書院，290ｐ.

池田 碩・石田志朗 1973年 「比叡平小起伏面２地点の黒土の年代 －日本の第四紀層の14Ｃ年（85）－」『地球科學』27巻４号，pp.150-151.

伊藤淳史 1995年 「京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第58号，pp.1-8.

泉 拓良 1978年 「京都大学北部構内の地形復原 －縄文時代から弥生時代－」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』，pp.43-48.

片岡香子 2004年 「ハイパーコンセントレイティッド流と堆積物」『堆積システムと堆積物』日本堆積学会，pp.457-477.

増田富士雄 1997年 「地層の粒度組成から水理条件を推定するための実験的研究」『平成７・８年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書』98ｐ.

増田富士雄 1999年 「透水層・滞水層のトレース：ダイナミック地層学からのアプローチ」『地下水技術』41巻10号，pp.1-15.

増田富士雄編 2004年 『堆積システムと堆積物』日本堆積学会，512ｐ.

増田富士雄・伊勢屋ふじこ 1999年 「“逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」『堆積学研究会報』22/23号，pp.108-116.

宮田雄一郎・田中凡子 2004年 「水路実験から見たアンチデューンの安定性と多重逆級化層の形成」『日本地質学会第111回学術大会講演要旨』Ｏ-112， pp.86.

成瀬 元 2004年 「重力流堆積物の堆積構造」『堆積システムと堆積物』日本堆積学会， pp.421-456.

成瀬 元・田村 亨・久保雄介・増田富士雄 2001年 「重力流堆積物とその構造」『堆積構造入門シリーズ』２号，堆積学研究会，147ｐ.

岡田保良・吉野治雄 1979年 「京大理学部遺跡ＢＥ29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』，pp.17-38.

清水芳裕 1985年 「自然地形の変化と遺跡の形成過程」『第四紀研究』24巻３号，pp.183-188.

清水芳裕・古賀秀策 1997年 「京都大学北部構内ＢＢ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』，pp.41-52.

鈴木一久　2000年　「洪水氾濫の堆積学」『地団研専報』48号，69ｐ．
竹村恵二・飯田義正・石田志朗　1985年　「北白川追分町遺跡の堆積物」『京都大学埋蔵文化財調査報告　－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター，pp.79-93.
高川智博　2004年　「逆級化のメカニズム」『堆積システムと堆積物』日本堆積学会，pp.496－512.
高川智博・増田富士雄　2004年　「“Filtering mechanism”による逆級化～無級化層の堆積」『日本地質学会第111回学術大会講演要旨』O-123，pp.87.
冨井　眞　2003年　「京都大学本部構内ＡＸ22区の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』，pp.113-122.
Endo, N. and Masuda, F., 1996：Grain size distributions of single transport：microdelta experiment and the diffusion model. *Jour. Geological Society Japan,* 102 (2), pp.105-115.
Endo, N., Masuda, F. and Yokokawa, M., 1996：Grain size distribution of sediment carried by single transportation modes in an experimental microdelta system. *Sedimentary Geology,* 102(3/4), pp.297-304.
Folk, R. L. and Ward, W. C., 1957：Brazos River bar：a study in the significance of grain size parameters. *Jour. Sedimentary Petrology,* 27,pp. 3-26.
Hiscott, R. N., 1994：Traction-carpet stratification in turbidites - fact or fiction ? *Jour. Sedimentary Research,* A64,pp.204-208.
Lowe, D. R., 1982：Sedimentary gravity flows：II. Depsotional models with special reference to the deposits of high-density turbidity currents. *Jour. Sedimentary Petrology,* 5,pp.279-297.
Middleton, G. V., 1970：Experimental studies related to the problems of flysch sedimentation. Special Paper, *Geological Association Canada,* 7, pp.253-272.
Nielsen, 1982：Alluvial fan deposits. In；Scholle, A. and Spearing, D. (eds.)：*Sandstone Depositional Environments.* Memoir of AAPG (American Association of Petrolem Geologists),31,pp.49-86.
Smith, G. A. and Lowe, D. R., 1991：Lahars：volcano-hydrologic events and seposition in the debris flow-hyperconcentrated flow continum. In；Fisher, R. V. and Smith, G. A. (eds.)：*Sedimentation in Volcanic Settings.* Special publication of SEPM (Soc. Econ. Paleontol. Miner.；Society for Sedimentary Geology),45,pp.59-70.
Sohn, Y. K., 1997：On traction-carpet sedimentation. *Jour. Sedimentary Research,* 67,pp.502-509.
Sohn, Y. K., 2000：Depositional processes of submarine debris flow in the miocene fan deltas, Pohang Basin, SE Korea with special reference to flow transformation. *Jour. Sedimentary Research,* 70.pp.491-503.

京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度

図　　版

1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
2～28　京都大学吉田南構内AN22区の発掘調査
29～50　京都大学北部構内BC28区の発掘調査

京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点　｜ 図版

国土座標は日本測地系第Ⅵ座標系を用いる

N

1999年度以前の主な調査地点
2000年度の調査地点（表15参照）
0　400m

病院構内
医学部構内
西部構内
東部構内
北部構内
吉田南構内（旧総合人間学部構内）

X＝500　x＝−109500
X＝1000　x＝−109000
X＝1500　x＝−108500
X＝2000　x＝−108000
X＝2500　x＝−107500　（構内座標）（国土座標）

Y＝1500　y＝−20500　（構内座標）（国土座標）
Y＝2000　y＝−20000
Y＝2500　y＝−19500
Y＝3000　y＝−19000

1　表土除去後の調査区全景（北西から）

2　中世遺構完掘後の調査区全景（北西から）

1　扇状地末端の崖面（南から）

2　８層上面の溝状遺構（西から）

3　溝ＳＤ24土器出土状況（西から）

4　溝ＳＤ24土器出土状況（東から）

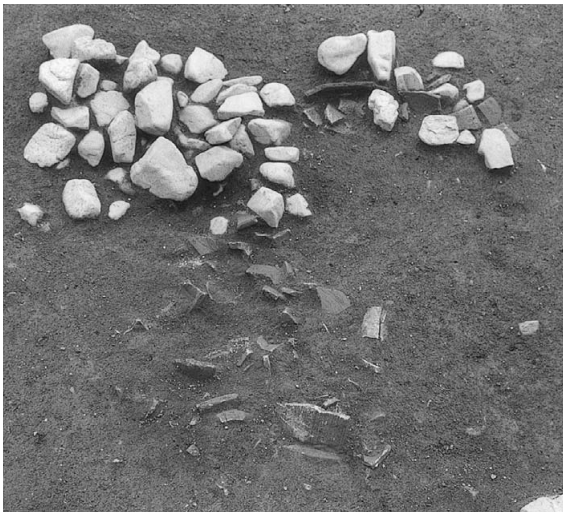
5　溝ＳＤ23土器出土状況（北から）

6　溝ＳＤ31土器出土状況（南から）

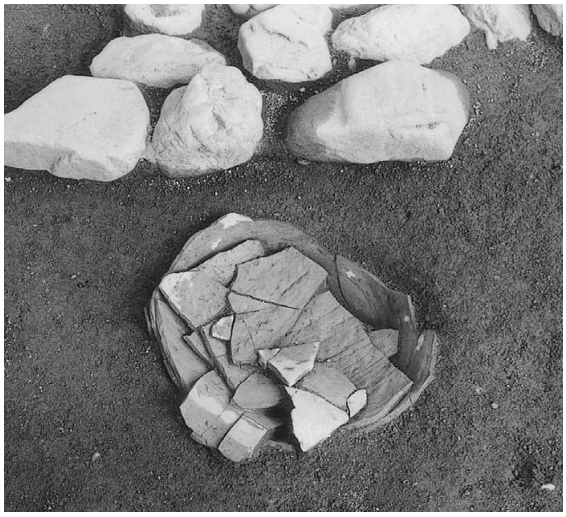
1　調査区西半中世遺構（南から）

2　中世東西溝群（西から）

3　石敷ＳＸ101（北から）



4　瓦溜ＳＸ24（北から）

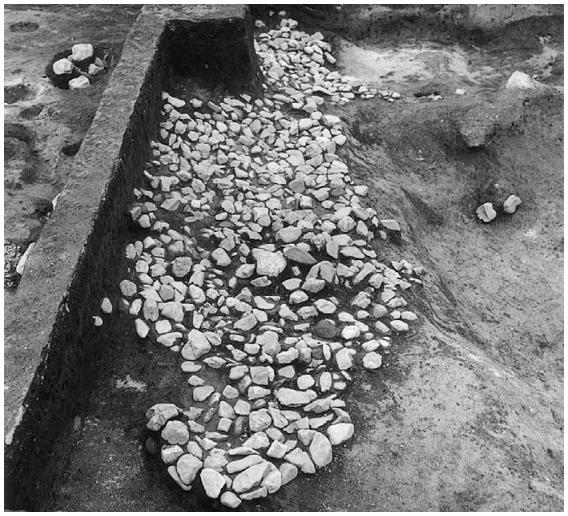


5　埋甕ＳＸ38（西から）

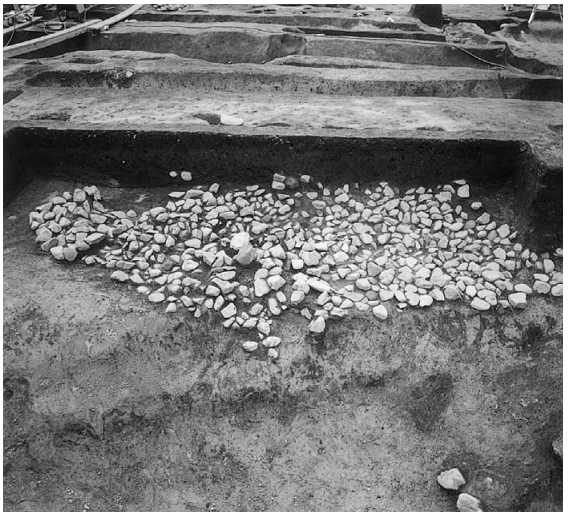
6　井戸ＳＥ24（西から）

1　廃棄土坑ＳＸ28（東から）

2　廃棄土坑ＳＸ25（北から）

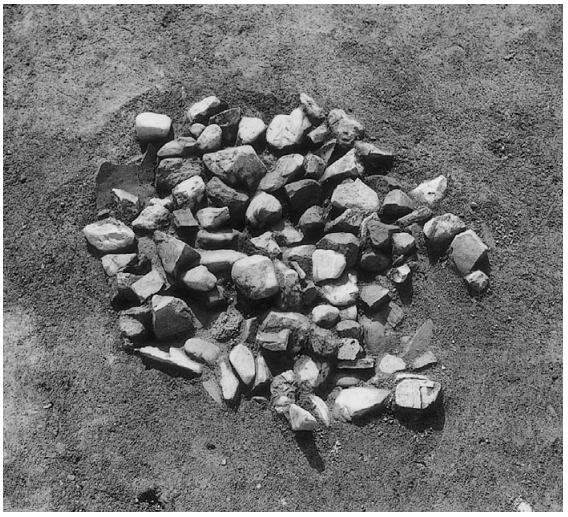


3　配石ＳＸ61（南から）



4　配石ＳＸ61（東から）

5　集石土坑ＳＸ33（北から）

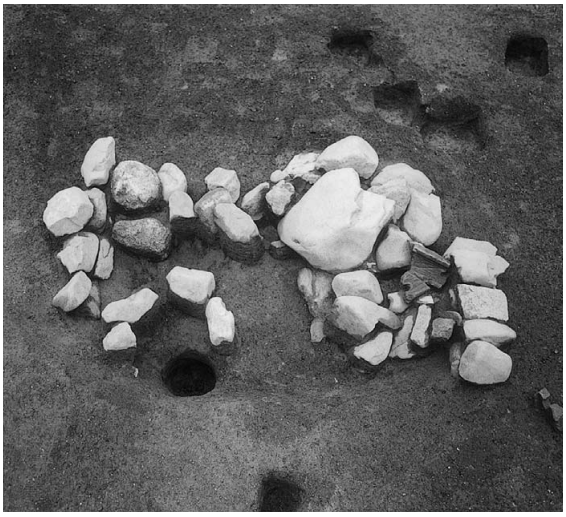


6　集石ＳＸ14（北から）

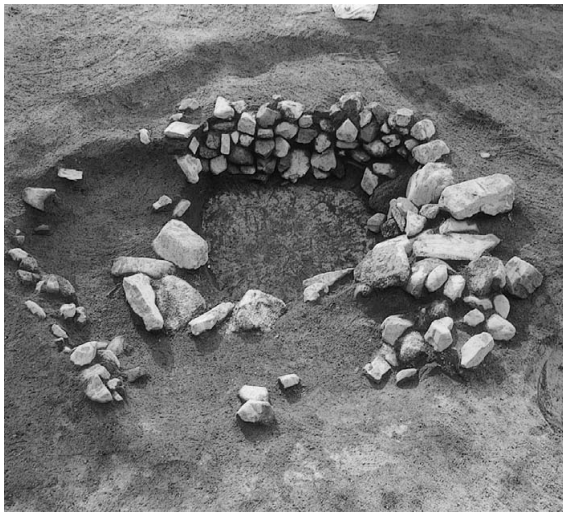
1　石室ＳＸ26上面（南から）

2　石室ＳＸ26（東から）

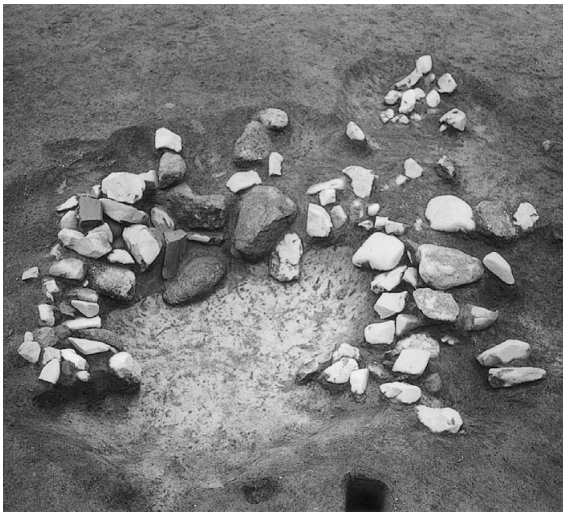
3　石室ＳＸ60（北から）



4　石室ＳＸ60（東から）



5　石室ＳＸ17（東から）



6　石室ＳＸ29（南から）

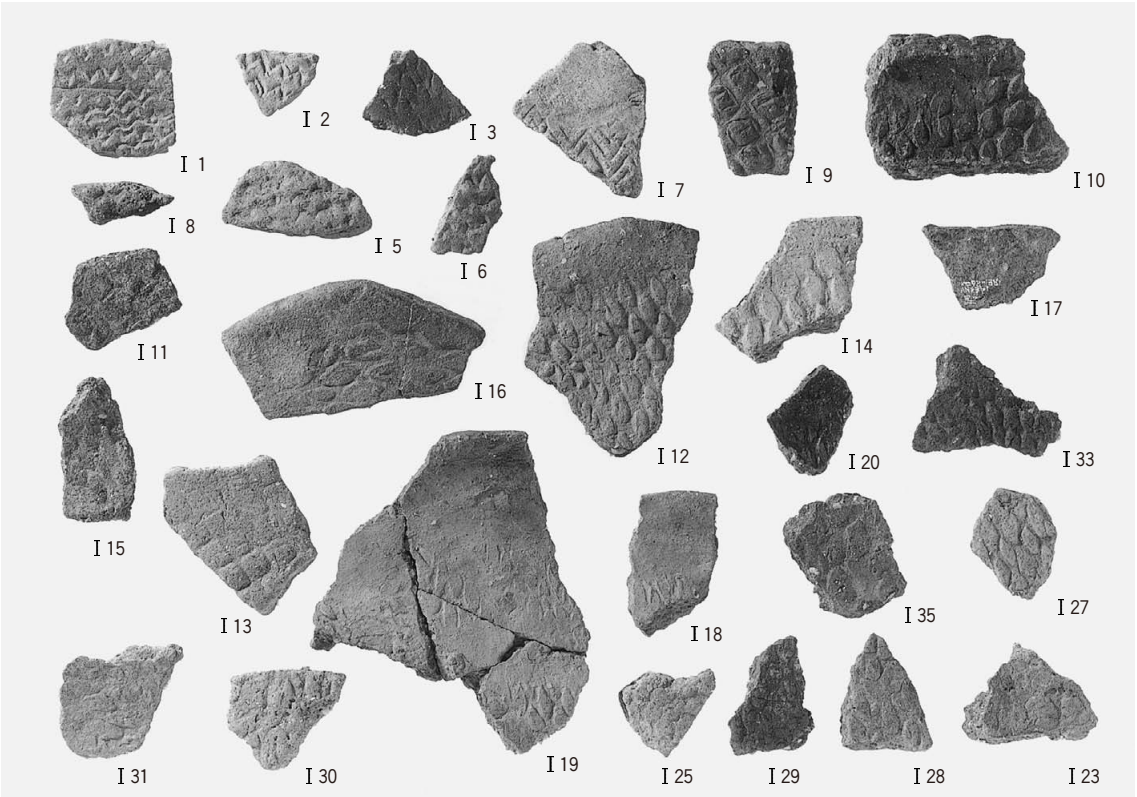
図版七　京都大学吉田南構内ＡＮ22区

1　石室ＳＸ35（北から）

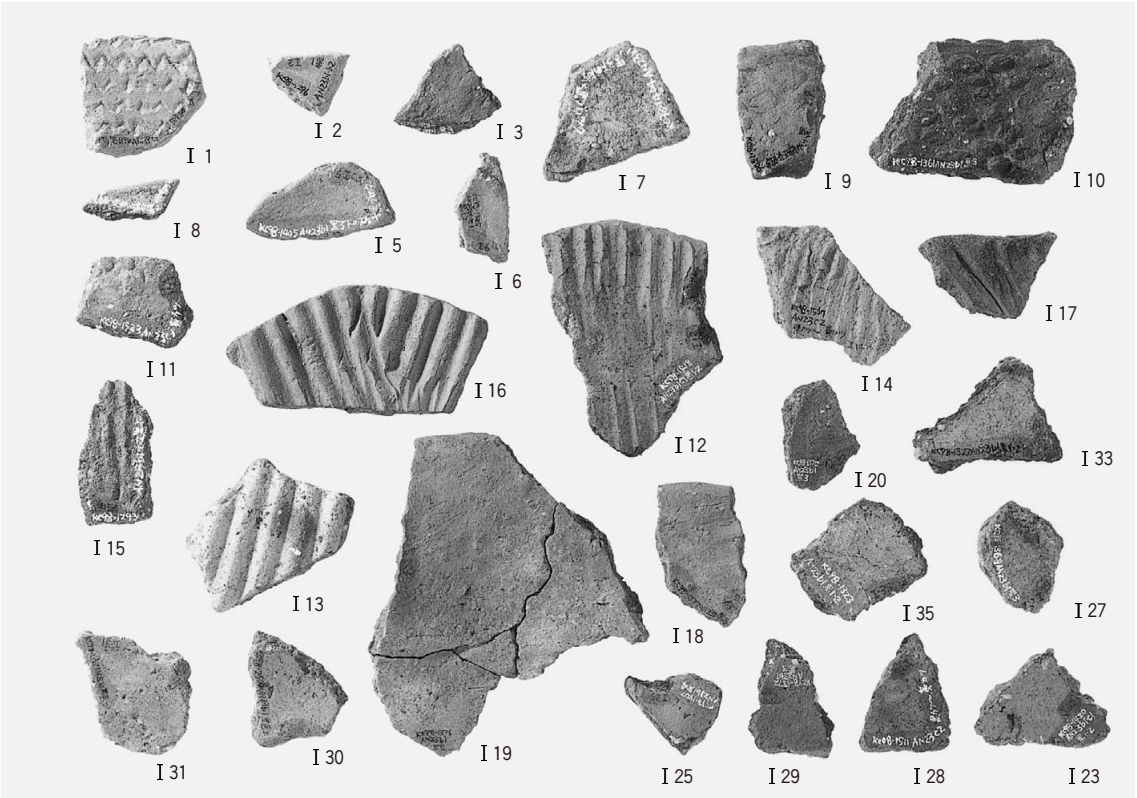
2　石室ＳＸ35細部（北から）

3　石室ＳＸ35細部（北東から）

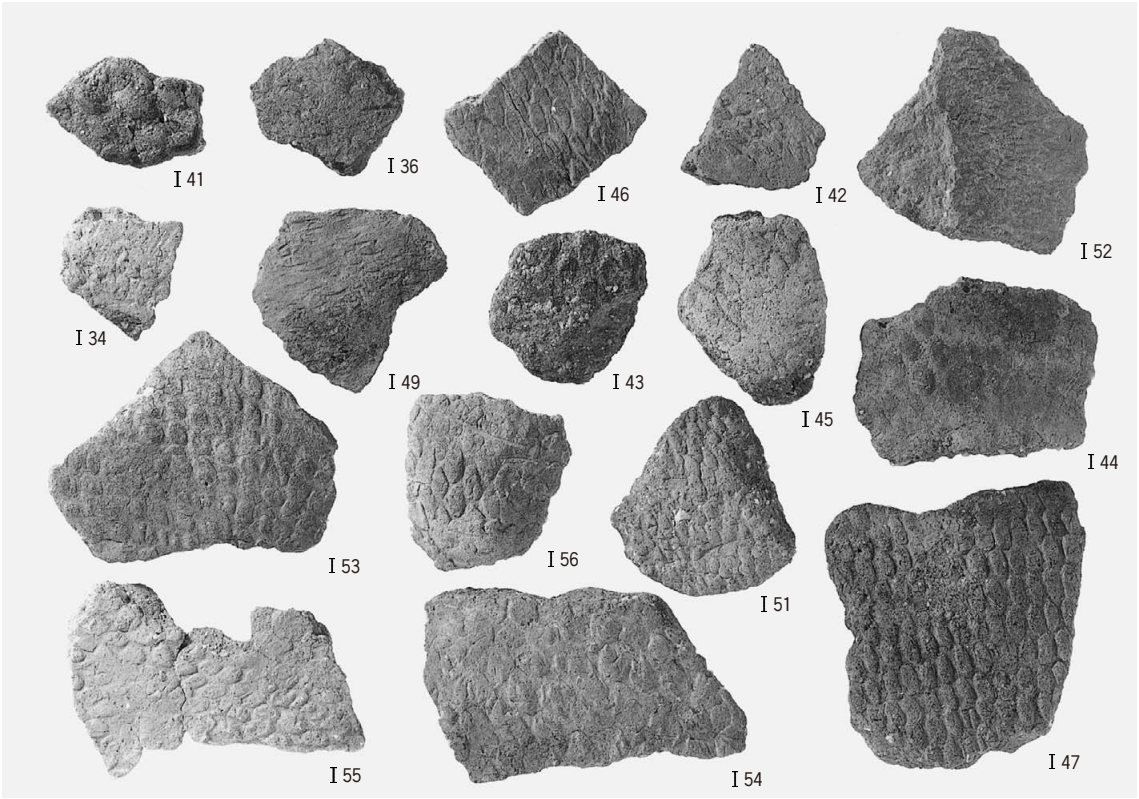
4　道路ＳＦ１（東から）



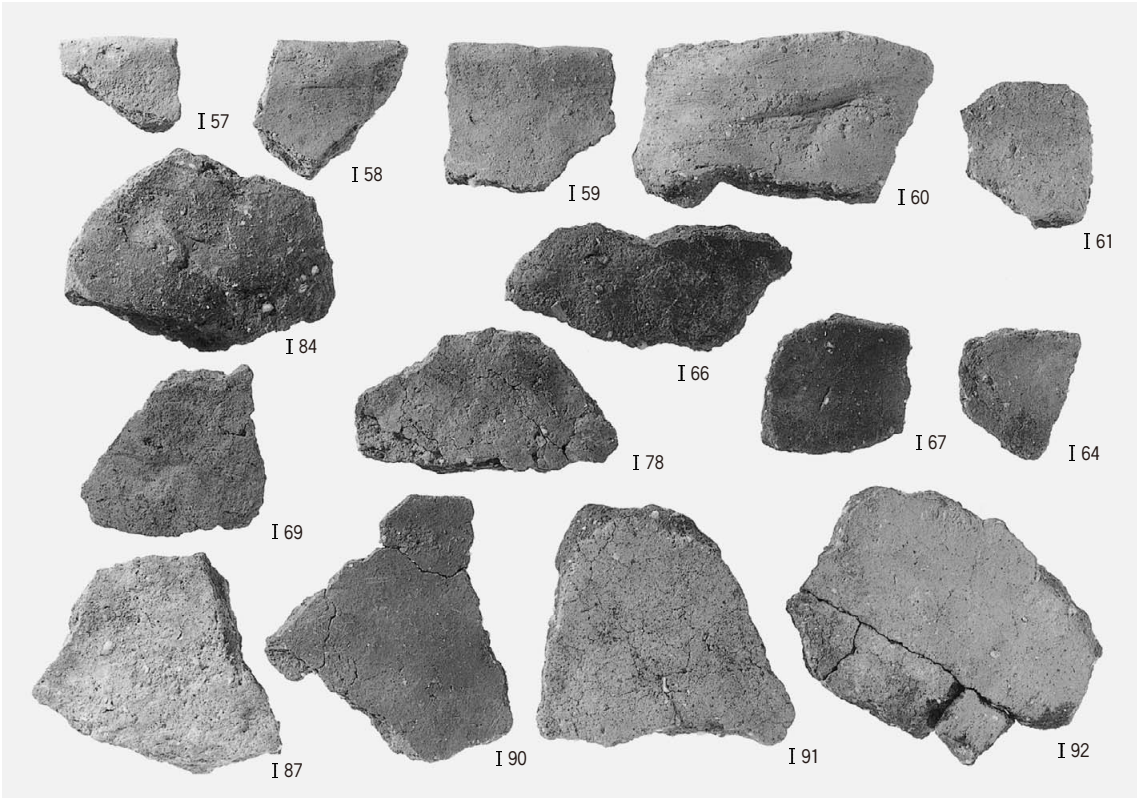
1　縄文早期の土器（Ⅰ1～Ⅰ3・Ⅰ5～Ⅰ20・Ⅰ23・Ⅰ25・Ⅰ27～Ⅰ31・Ⅰ33押型文土器）



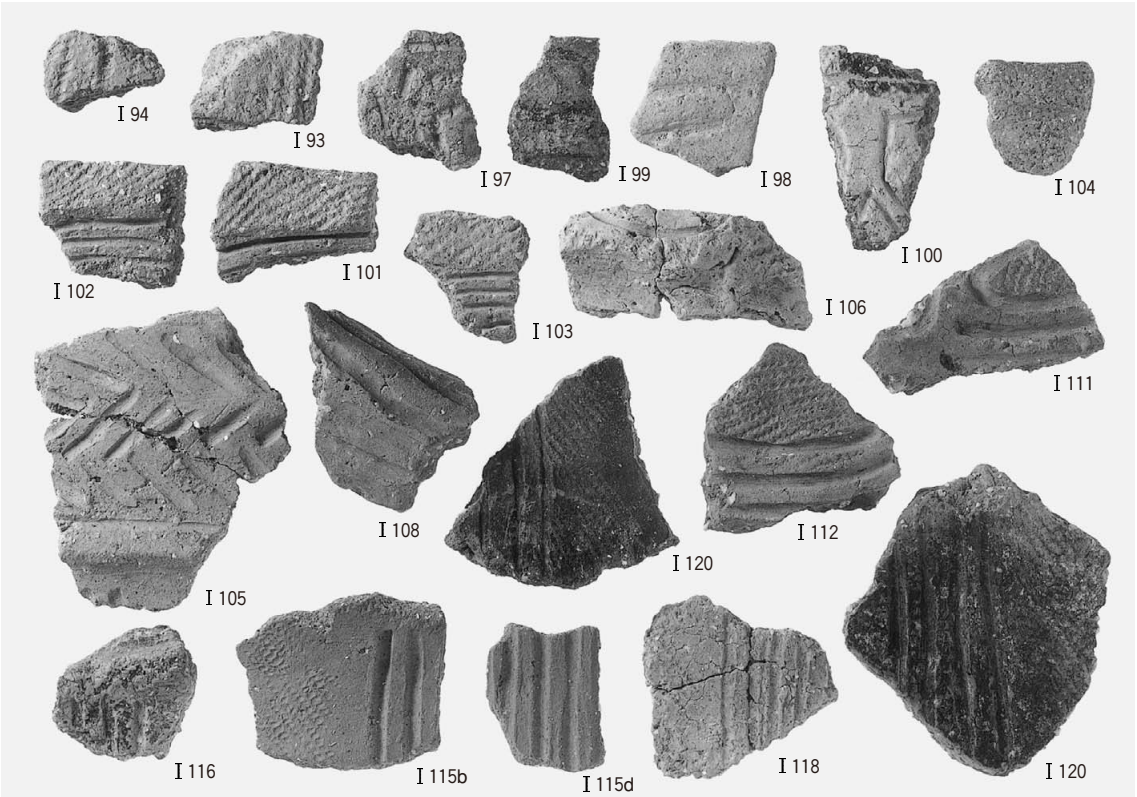
2　縄文早期の土器（同上・内面）



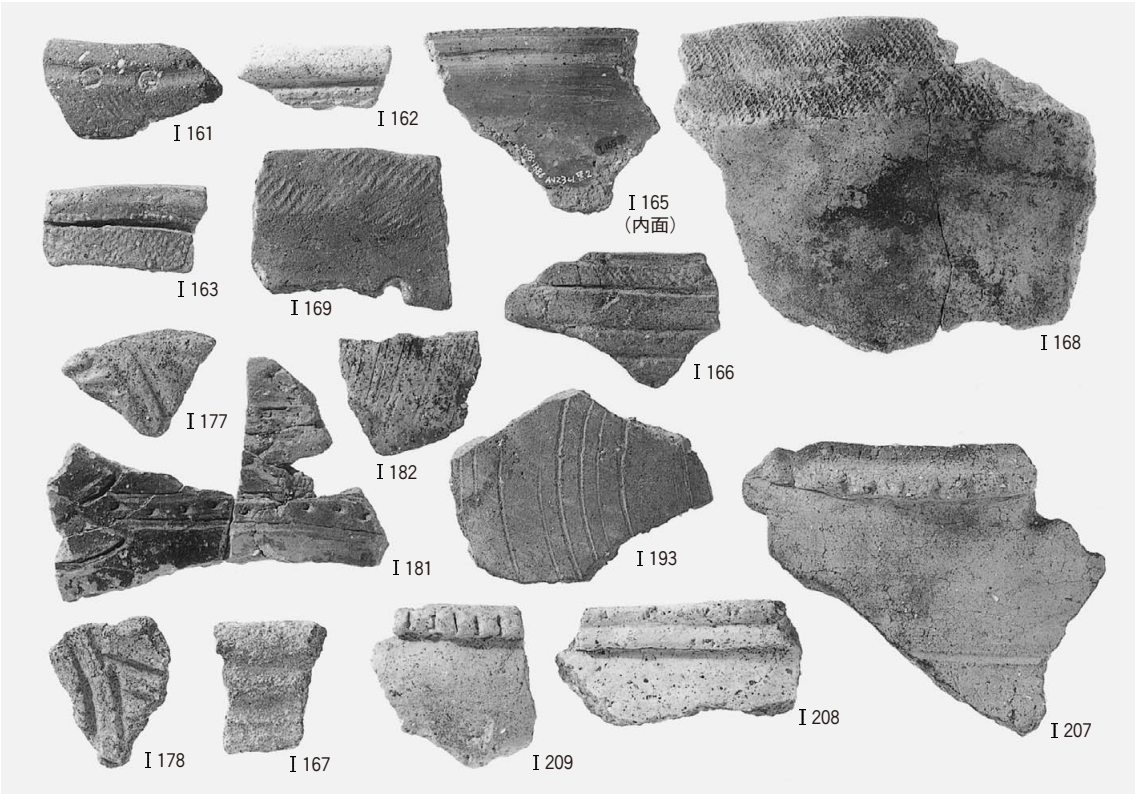
1　縄文早期の土器（Ⅰ34・Ⅰ36・Ⅰ41～Ⅰ47・Ⅰ49・Ⅰ51～Ⅰ56押型文土器）



2　縄文早期の土器（Ⅰ57～Ⅰ61・Ⅰ64・Ⅰ66・Ⅰ67・Ⅰ69・Ⅰ84・Ⅰ87・Ⅰ90～Ⅰ92無文土器）



1　縄文中期の土器（Ⅰ93船元Ⅲ式，Ⅰ94船元Ⅳ式，Ⅰ97～Ⅰ106・Ⅰ111・Ⅰ112・Ⅰ115・Ⅰ116・Ⅰ118・Ⅰ120北白川Ｃ式）



2　縄文後期の土器（Ⅰ161中津式，Ⅰ162・Ⅰ163福田Ｋ２式，Ⅰ165・Ⅰ166・Ⅰ168・Ⅰ169・Ⅰ177・Ⅰ178・Ⅰ181・Ⅰ182・Ⅰ193北白川上層式，Ⅰ167元住吉山Ⅱ式）
縄文晩期の土器（Ⅰ207～Ⅰ209突帯文土器）

Ⅰ227

Ⅰ278

Ⅰ244

弥生中期の土器（Ⅰ227細頸壺，Ⅰ244水差，Ⅰ278コップ形）

1/4　Ⅰ229

Ⅰ228

Ⅰ236

Ⅰ238

Ⅰ240

1/4　Ⅰ252

1/4　Ⅰ253

弥生中期の土器（Ⅰ228細頸壺，Ⅰ229直口壺，Ⅰ236・Ⅰ238短頸壺，Ⅰ240広口壺，Ⅰ252・Ⅰ253甕）

Ⅰ226

Ⅰ277

Ⅰ245

Ⅰ248

Ⅰ276

弥生中期の土器（Ⅰ226細頸壺，Ⅰ245・Ⅰ248甕，Ⅰ276高杯，Ⅰ277鉢）

Ⅰ231

Ⅰ232

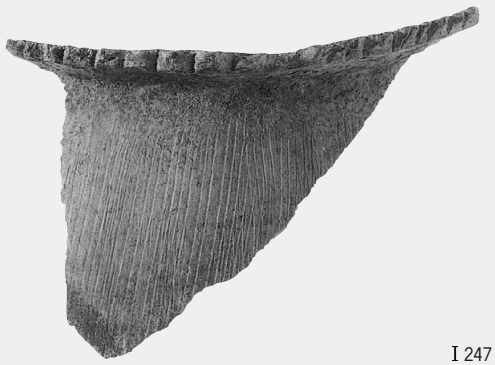
Ⅰ233

Ⅰ234

弥生中期の土器（Ⅰ231～Ⅰ234短頸壺）

1/3　Ⅰ242

1/3　Ⅰ250

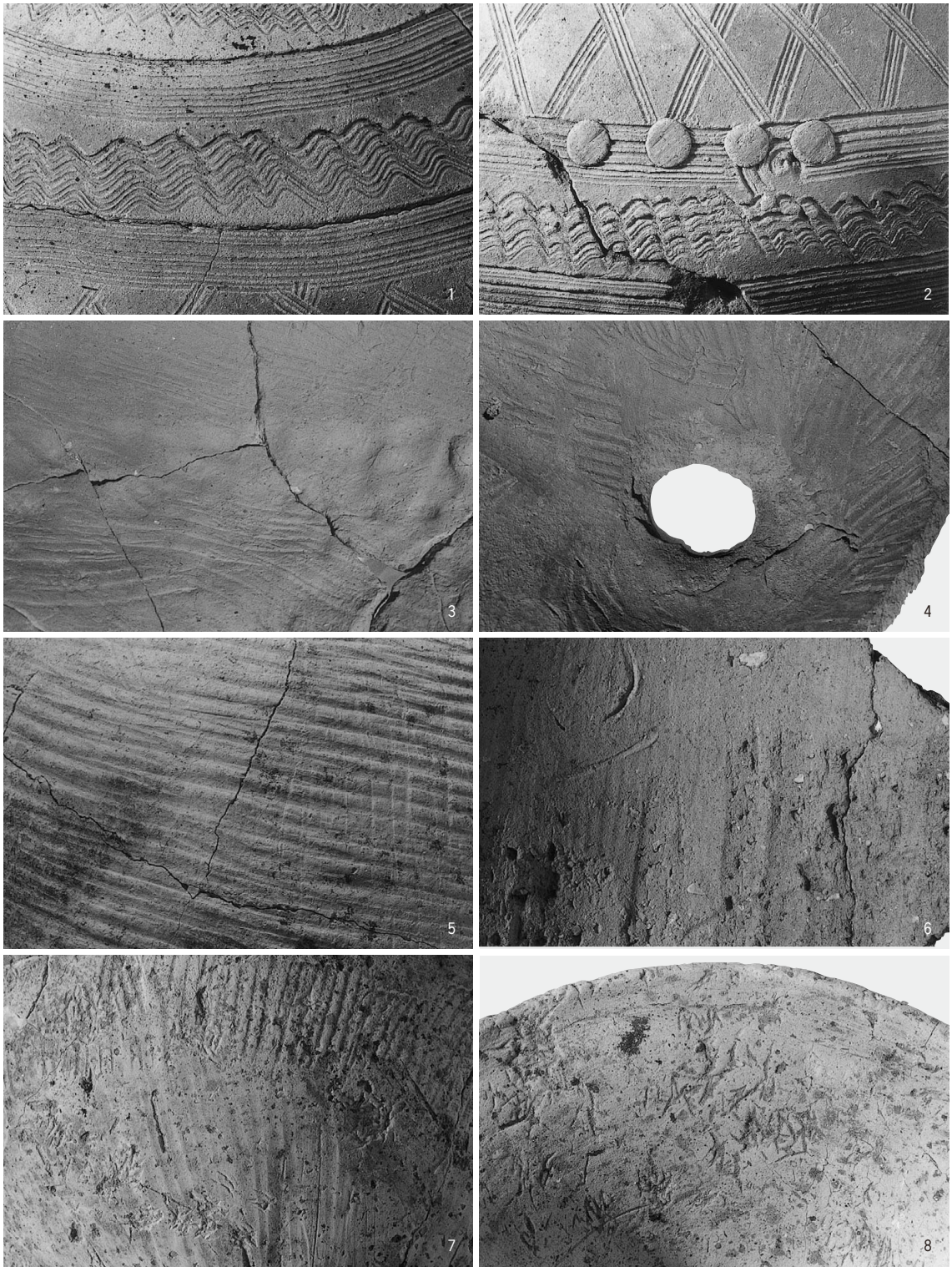


Ⅰ247

1/3　Ⅰ255

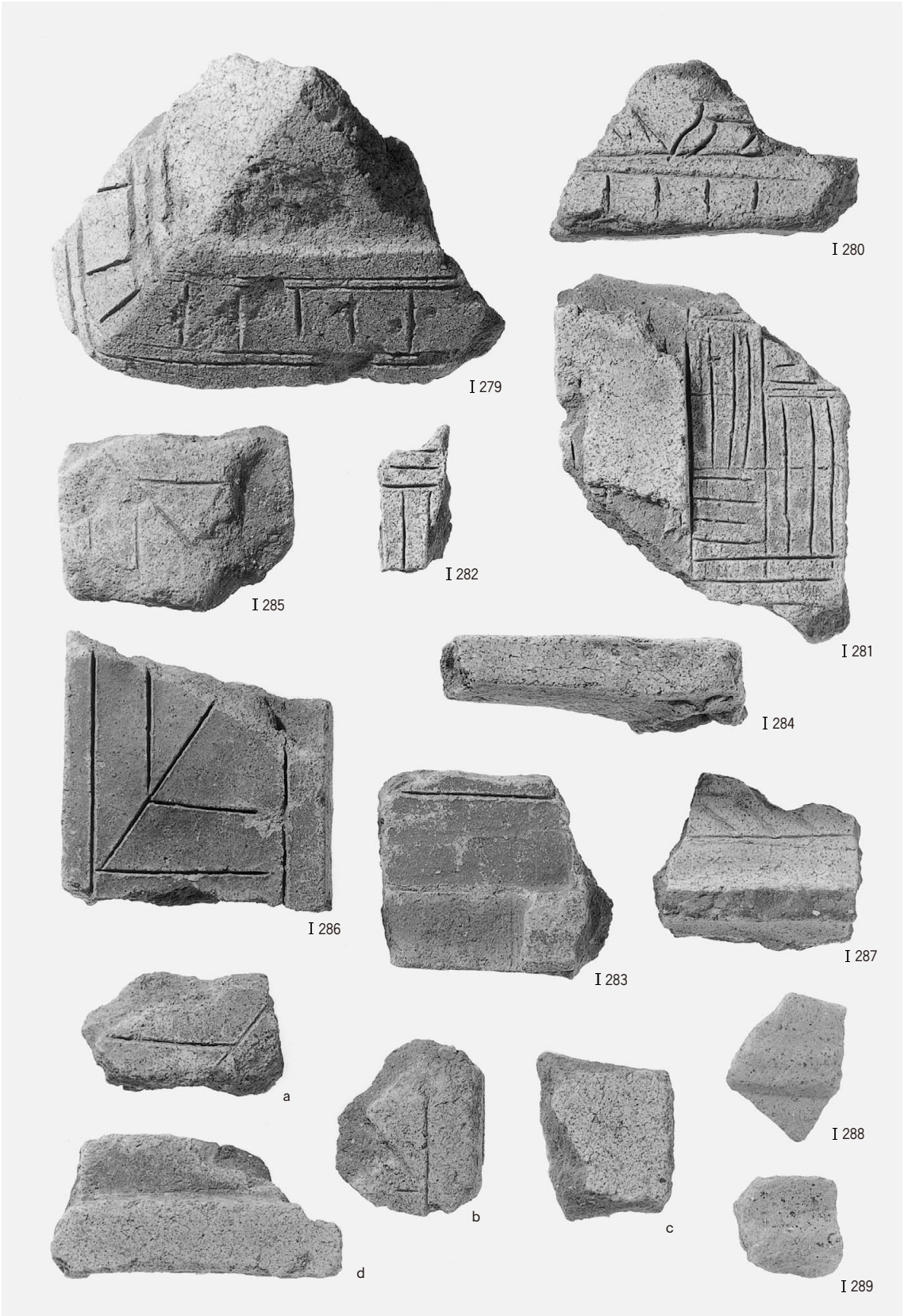
Ⅰ258

弥生中期の土器（Ⅰ242広口壺，Ⅰ247・Ⅰ250・Ⅰ255・Ⅰ258甕）

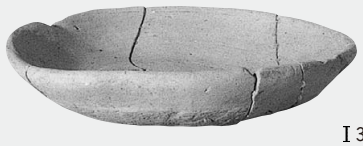


弥生土器細部　　縮尺3/4

1：Ⅰ229の櫛描文　2：Ⅰ229の貼付文と櫛描文　3：Ⅰ226の内面指頭圧痕
4：Ⅰ226の底部穿孔　5：Ⅰ231の外面叩き　6：Ⅰ249の内面削り
7：Ⅰ276の刷毛目と磨き　8：Ⅰ276の齧歯類，噛み痕？



家形埴輪（Ⅰ279～Ⅰ287），円筒埴輪（Ⅰ288・Ⅰ289），ＡＯ22・23区出土の家形埴輪（ａ～ｄ）


Ⅰ301

Ⅰ311

Ⅰ316

Ⅰ318

Ⅰ326

Ⅰ325

Ⅰ331

Ⅰ441

Ⅰ417

2/3
Ⅰ445

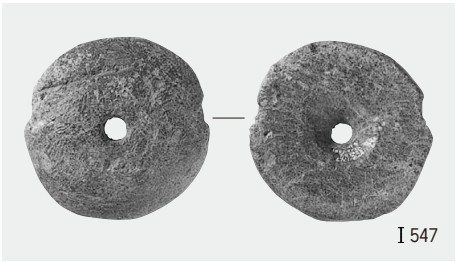
ＳＤ12出土遺物（Ⅰ301・Ⅰ311・Ⅰ316・Ⅰ318・Ⅰ325土師器，Ⅰ326・Ⅰ331陶器）
ＳＤ５出土遺物（Ⅰ417瓦器），ＳＤ６出土遺物（Ⅰ441瓦器，Ⅰ445石製品）

Ⅰ488

Ⅰ512

Ⅰ520

Ⅰ519


Ⅰ547

Ⅰ535

Ⅰ545

Ⅰ518

ＳＤ９出土遺物（Ⅰ488・Ⅰ512土師器，Ⅰ518須恵器，Ⅰ519白磁，Ⅰ520瓦器）
ＳＸ27出土遺物（Ⅰ535陶器），ＳＸ102出土遺物（Ⅰ545瓦器，Ⅰ547紡錘車）

Ⅰ573

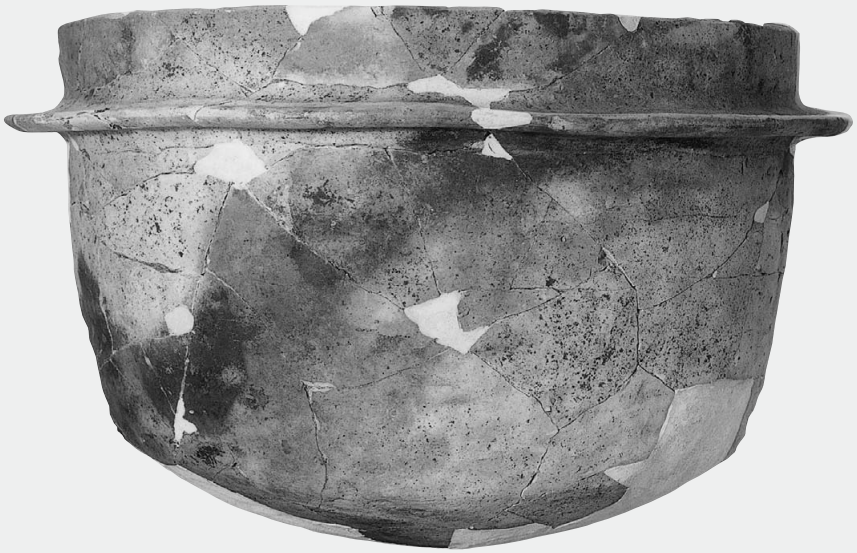
Ⅰ571

Ⅰ913

Ⅰ760

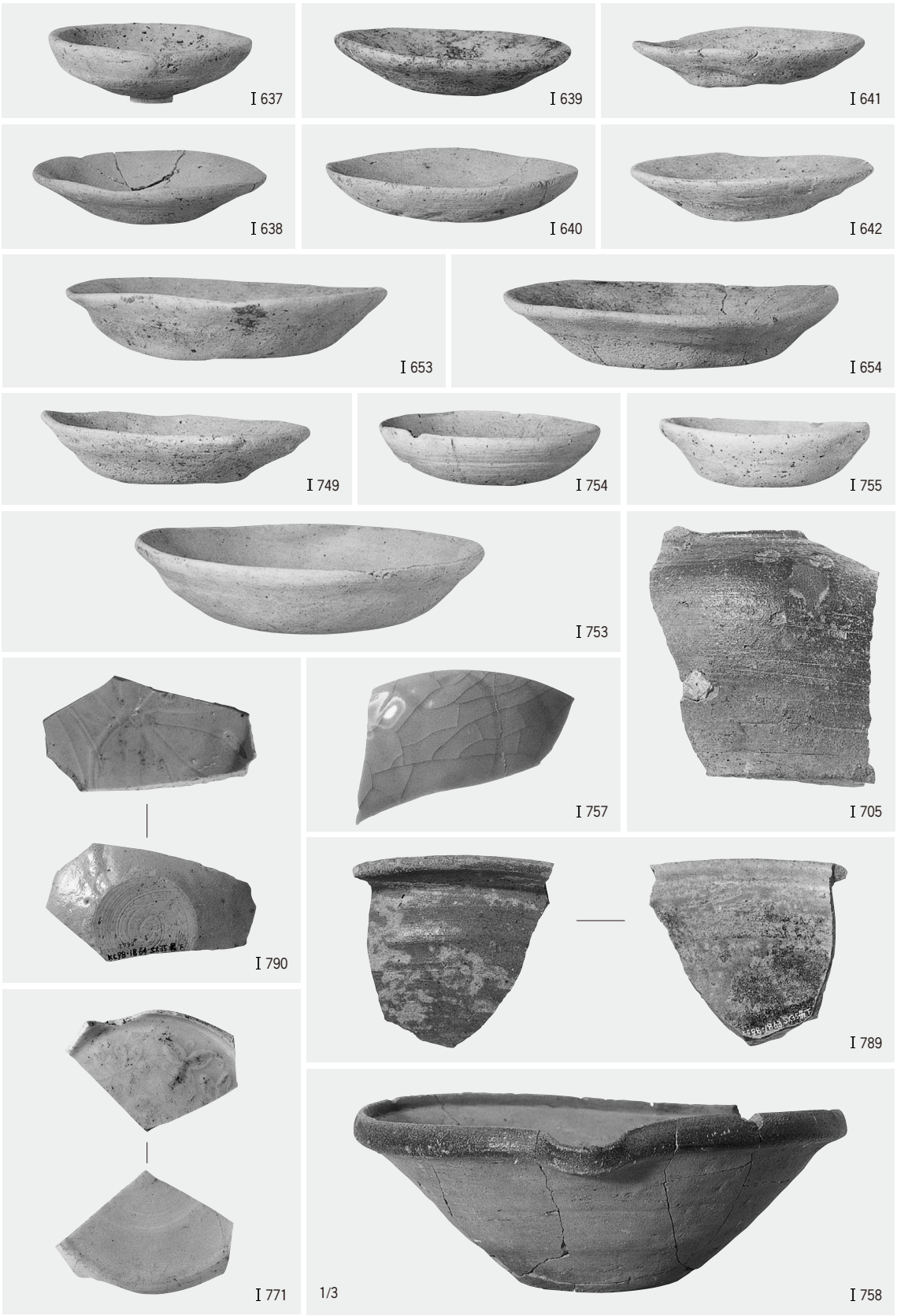
Ⅰ1022

Ⅰ909


Ⅰ1067

ＳＤ14出土遺物（Ⅰ571・Ⅰ573瓦器），ＳＸ32出土遺物（Ⅰ760瓦器）
ＳＤ11出土遺物（Ⅰ909・Ⅰ913瓦器），ＳＸ17出土遺物（Ⅰ1022瓦器）
ＳＸ63出土遺物（Ⅰ1067瓦器）　縮尺1/4

図版二一　京都大学吉田南構内ＡＮ22区



ＳＸ25出土遺物（Ⅰ637～Ⅰ642・Ⅰ653・Ⅰ654土師器），ＳＸ66出土遺物（Ⅰ705備前）
ＳＸ32出土遺物（Ⅰ749・Ⅰ753～Ⅰ755土師器，Ⅰ757青磁，Ⅰ758須恵器）
ＳＸ34出土遺物（Ⅰ771白磁），ＳＸ35出土遺物（Ⅰ789古瀬戸，Ⅰ790白磁）

Ⅰ826

Ⅰ827

Ⅰ836

Ⅰ889

Ⅰ882

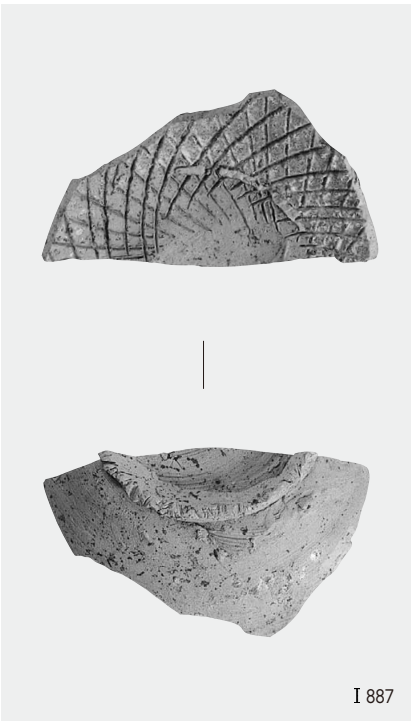
Ⅰ890

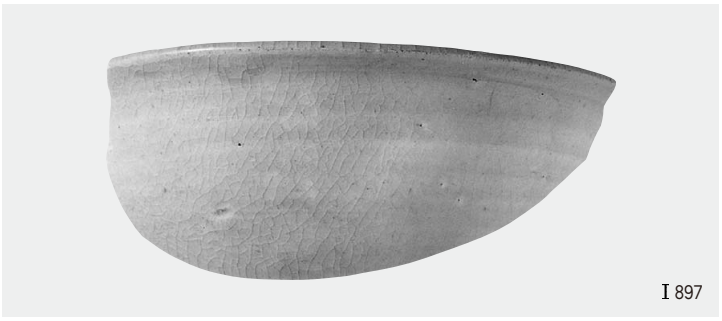
Ⅰ884

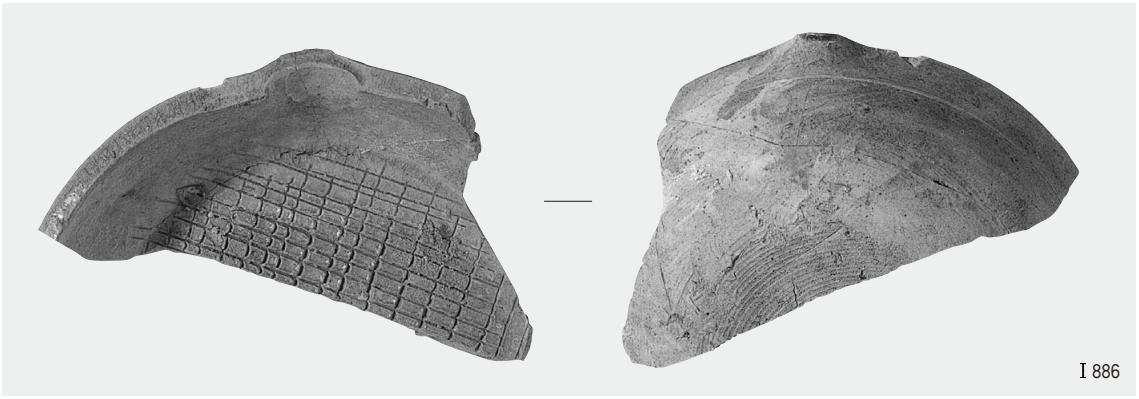
Ⅰ891

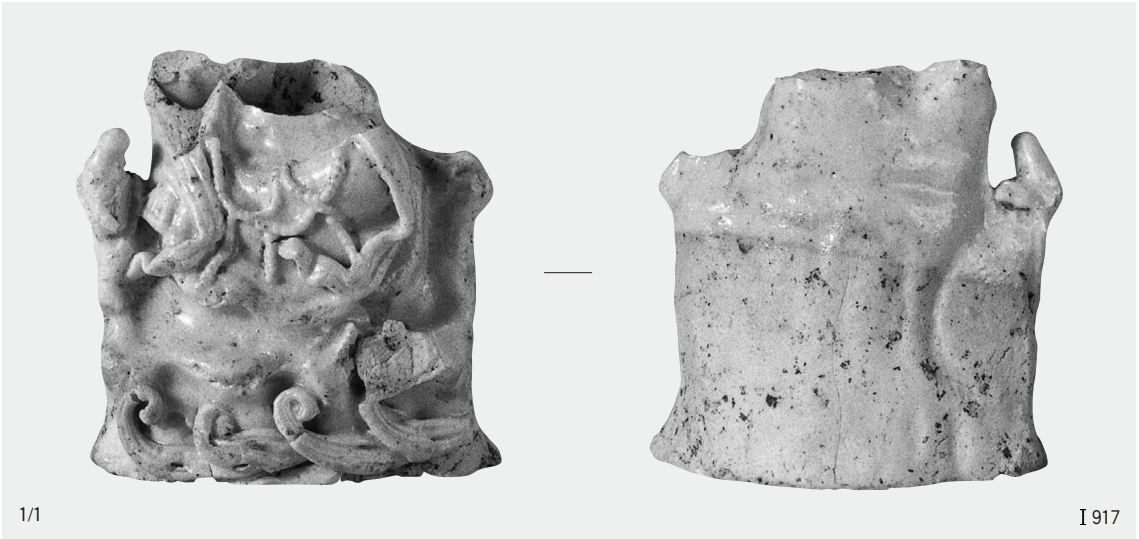
Ⅰ904

ＳＤ11出土遺物（Ⅰ826・Ⅰ827・Ⅰ836土師器，Ⅰ882・Ⅰ884・Ⅰ889・Ⅰ890古瀬戸，Ⅰ891貿易陶器，Ⅰ904瓦器）









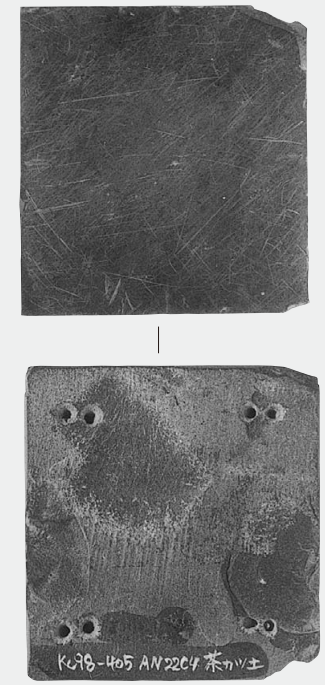
ＳＤ11出土遺物（Ⅰ886・Ⅰ887古瀬戸，Ⅰ897白磁，Ⅰ898青磁，Ⅰ917青白磁）

Ⅰ952

Ⅰ961

Ⅰ1100

Ⅰ1096

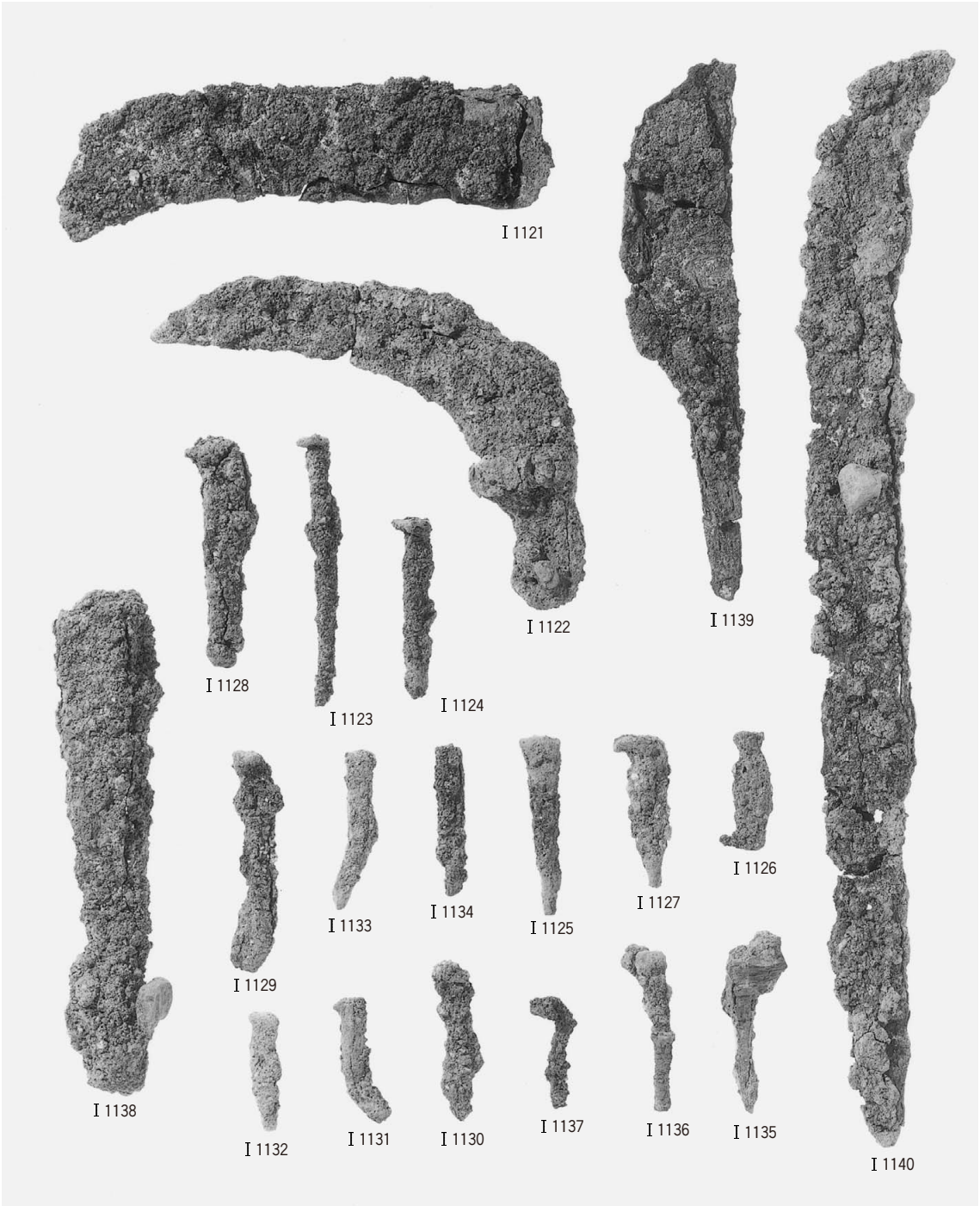


1/1　Ⅰ1116

Ⅰ1101

Ⅰ1118

ＳＸ100出土遺物（Ⅰ952土師器，Ⅰ961砥石），ＳＸ63出土遺物（Ⅰ1096古瀬戸）
ＳＤ６上面出土遺物（Ⅰ1100古瀬戸），ＳＸ15出土遺物（Ⅰ1101古瀬戸）
茶褐色土出土遺物（Ⅰ1116石帯，Ⅰ1118硯）



鉄製品（Ⅰ1121・Ⅰ1122鎌，Ⅰ1123～Ⅰ1137釘，Ⅰ1138楔，Ⅰ1139庖丁，Ⅰ1140薙刀）

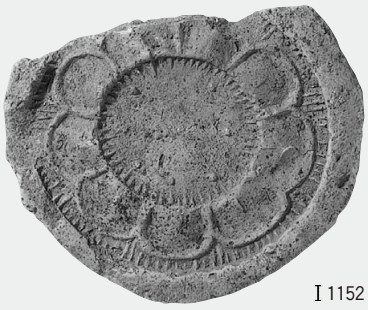
Ⅰ1141

Ⅰ1142

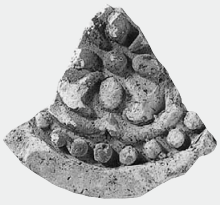
Ⅰ1143

Ⅰ1144

Ⅰ1148


Ⅰ1152

Ⅰ1155


Ⅰ1158

Ⅰ1160

Ⅰ1174

Ⅰ1172

Ⅰ1175

Ⅰ1183

Ⅰ1184

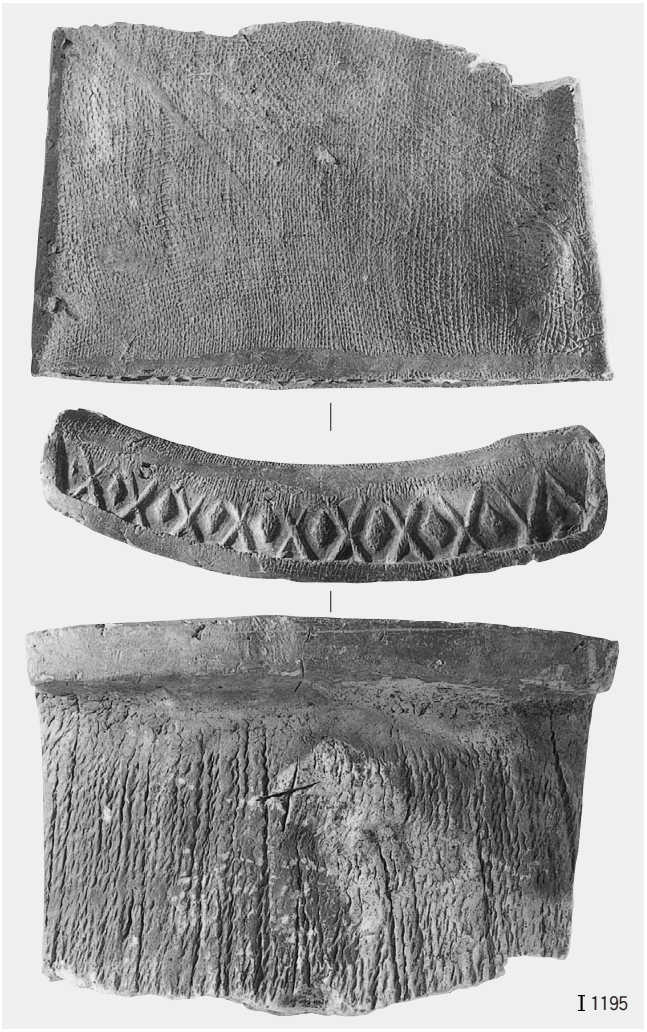
Ⅰ1186

Ⅰ1178

Ⅰ1188

軒丸瓦（Ⅰ1141～Ⅰ1144・Ⅰ1148・Ⅰ1152・Ⅰ1155・Ⅰ1158・Ⅰ1160）
軒平瓦（Ⅰ1172・Ⅰ1174・Ⅰ1175・Ⅰ1178・Ⅰ1183・Ⅰ1184・Ⅰ1186・Ⅰ1188）　縮尺1/3

図版二七　京都大学吉田南構内ＡＮ22区


Ⅰ1195

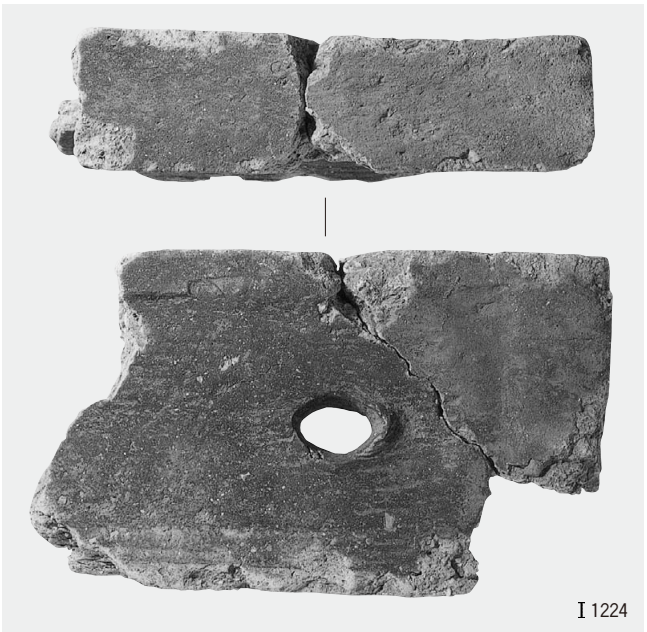
Ⅰ1199

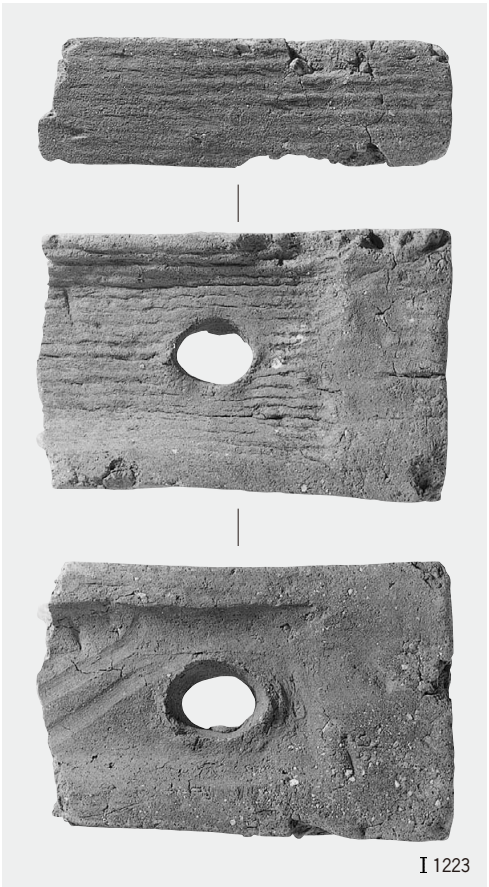
Ⅰ1207

Ⅰ1208

Ⅰ1182

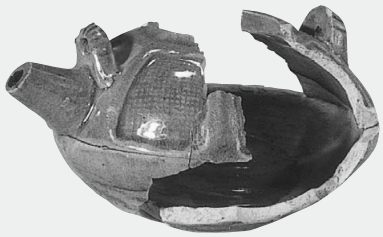
Ⅰ1181


Ⅰ1224


Ⅰ1223

軒平瓦（Ⅰ1181・Ⅰ1182・Ⅰ1195・Ⅰ1199・Ⅰ1207・Ⅰ1208）
塼（Ⅰ1223・Ⅰ1224）　縮尺1/3

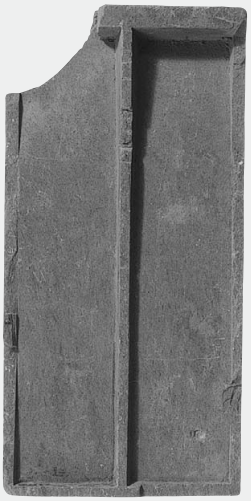
2/3　Ⅰ1324



2/3　Ⅰ1320

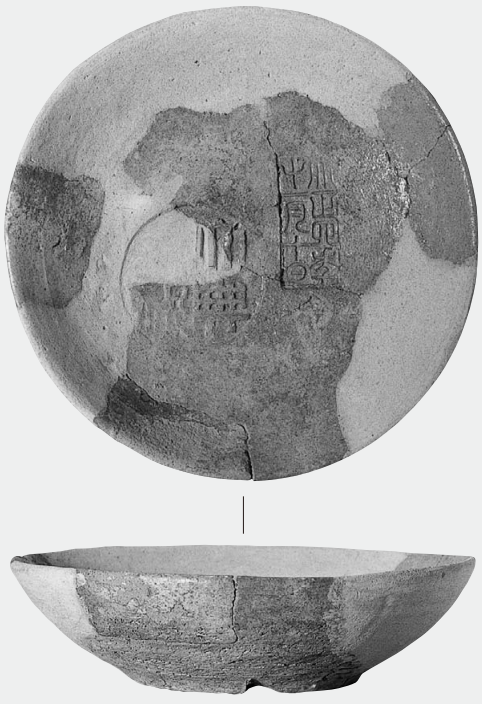
2/3　Ⅰ1322

1/1　Ⅰ1326



Ⅰ1327

2/3　Ⅰ1321



1/3　Ⅰ1328

Ⅰ1330

Ⅰ1329

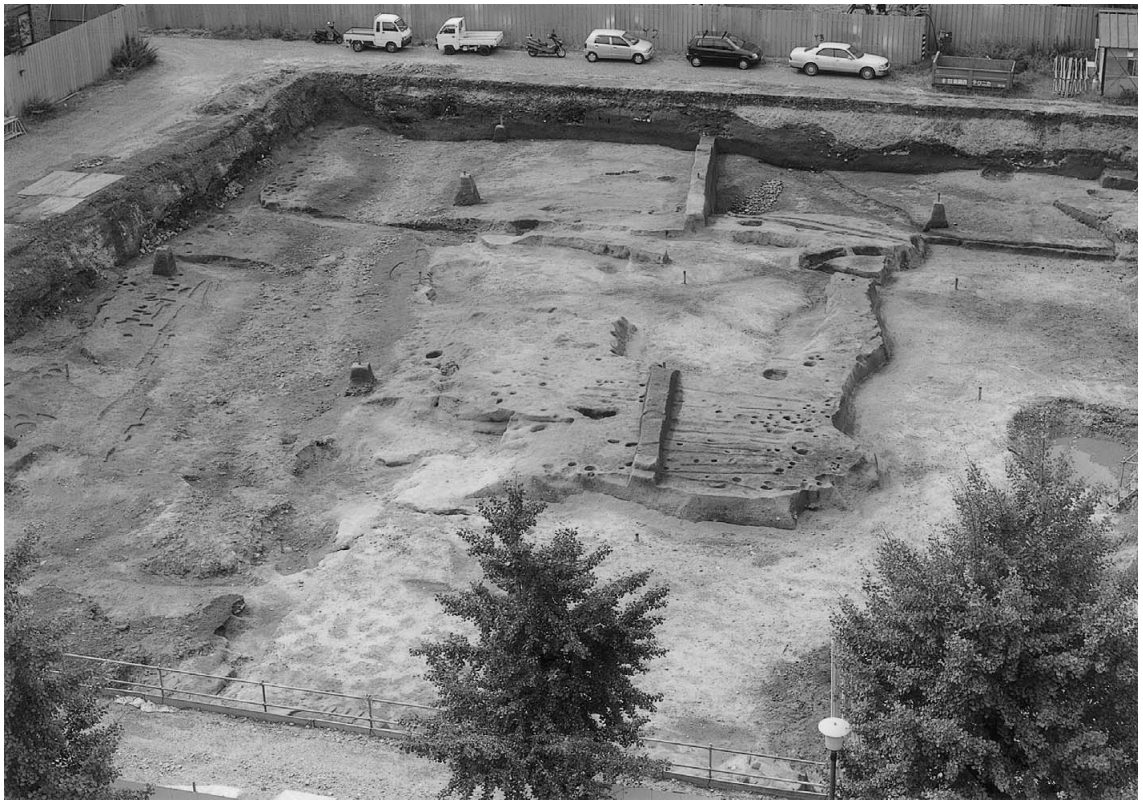
ＳＸ６出土遺物（Ⅰ1320～Ⅰ1322・Ⅰ1324玩具，Ⅰ1326笄，Ⅰ1327硯）
近代土坑出土遺物（Ⅰ1328陶器，Ⅰ1329・Ⅰ1330染付）

図版二九　京都大学北部構内ＢＣ28区

1　表土・攪乱除去後全景（東から）

2　中世の遺構全景（東から）

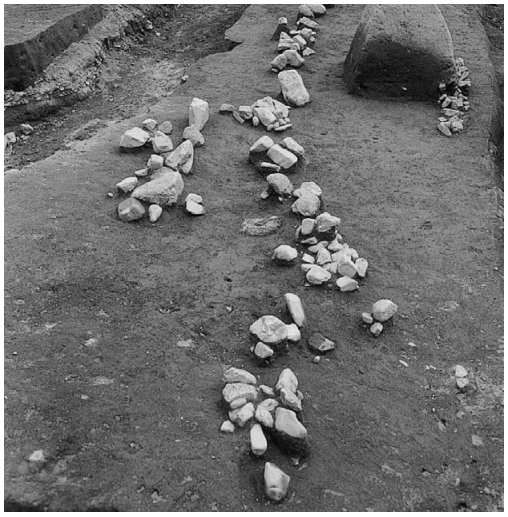
1　古代の遺構全景（東から）



2　黄色砂上面完掘全景（東から）

1　調査区西半近世遺構（南から）

2　井戸ＳＥ11底面遺物出土状況（東から）



3　集石ＳＸ３（南から）

4　流路ＳＲ１断面（西から）

5　流路ＳＲ１検出状況（西から）

6　流路ＳＲ１完掘状況（西から）

1　調査区西半黄色砂上面完掘状況（北から）

2　集石ＳＸ４（北西から）

3　東西畔段差付近の層位（南から）

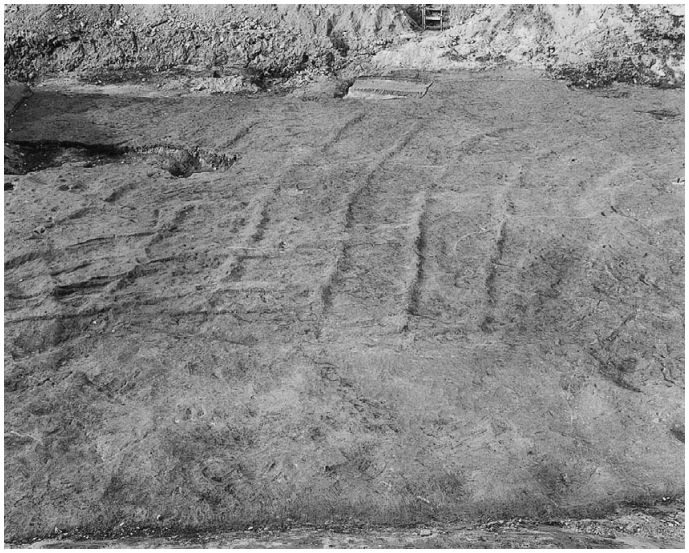
4　土器溜ＳＸ６（西から）

5　土器溜ＳＸ５（南から）

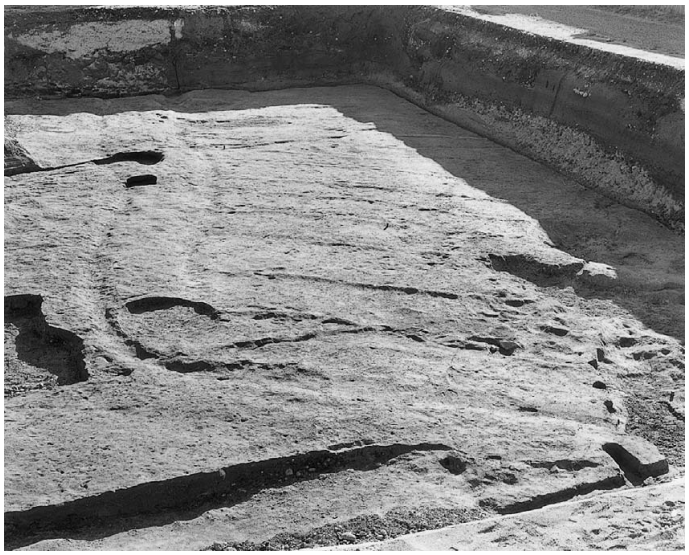
6　石庖丁出土状況（西から）

図版三三　京都大学北部構内ＢＣ28区

1　水田全景（東から）

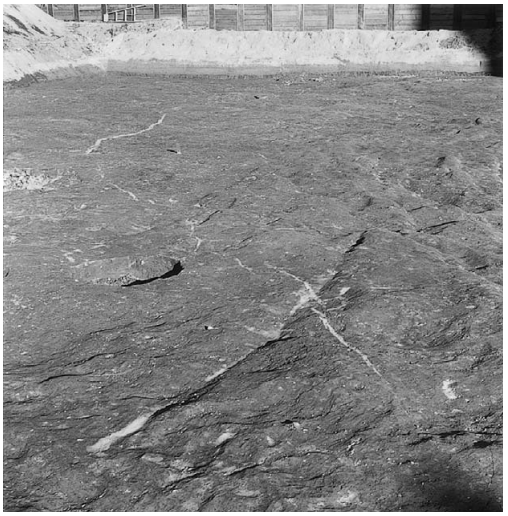


2　東水田全景（南から）

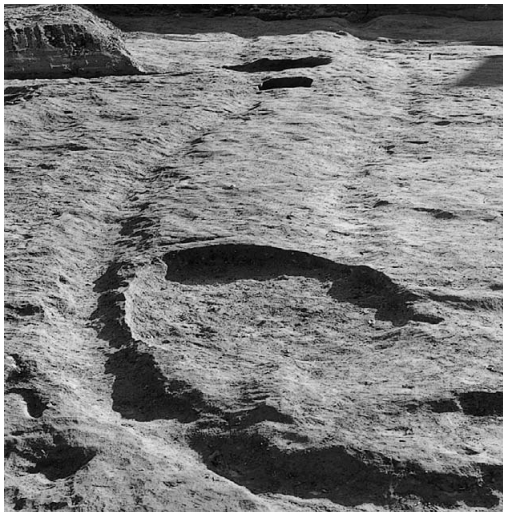


3　西水田全景（北から）

1　水田遺構検出作業（北から）



2　砂脈検出状況（西から）



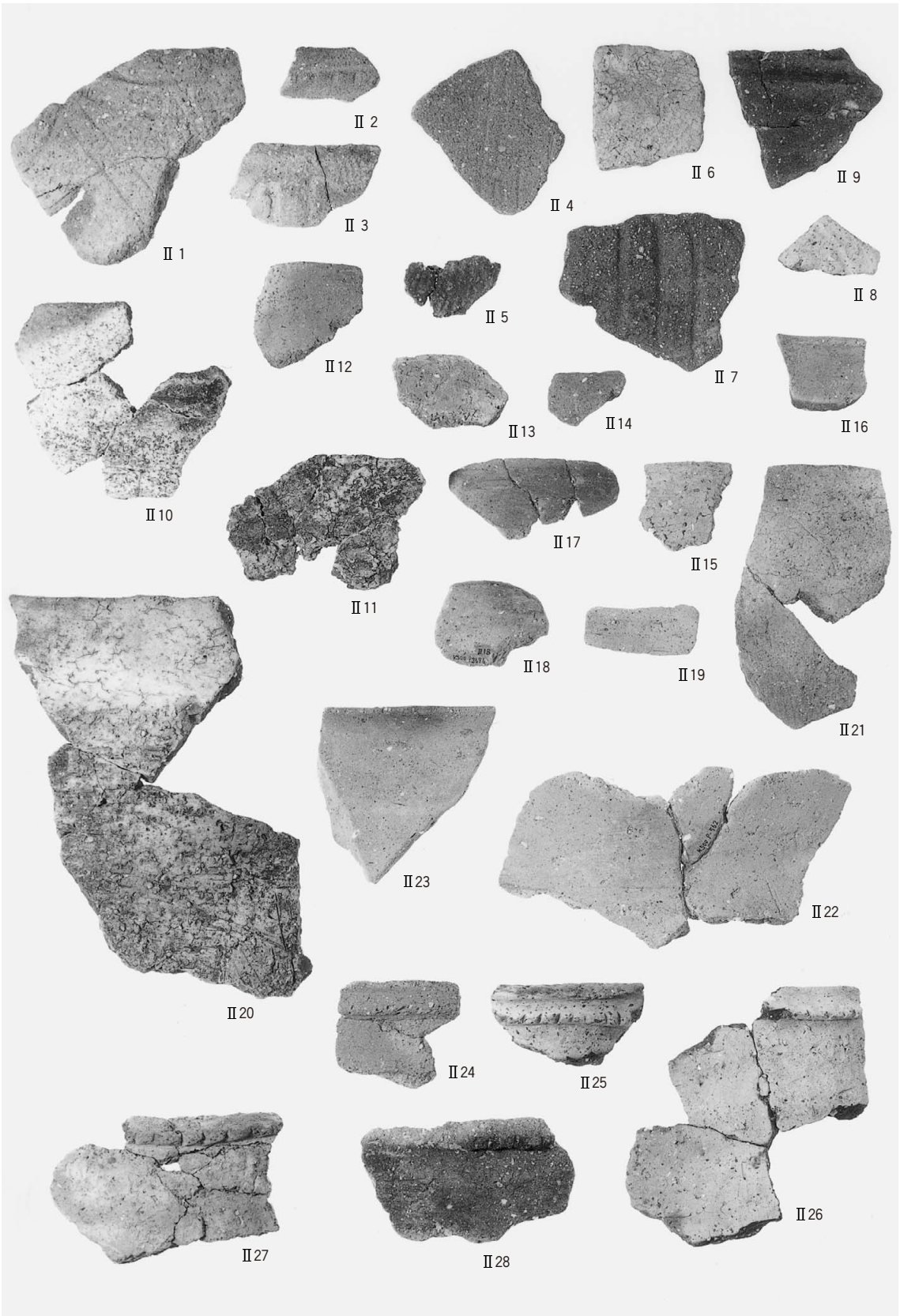
3　西水田土堤（北から）

4　土器溜ＳＸ７（東から）

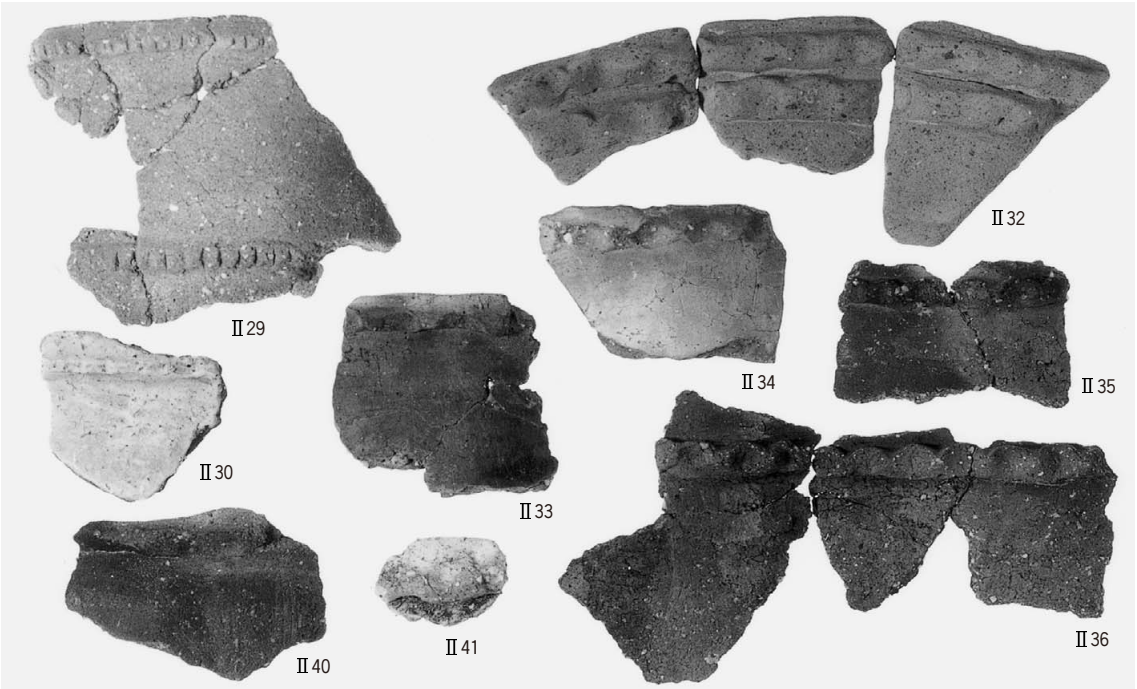
5　土器溜ＳＸ９（南から）

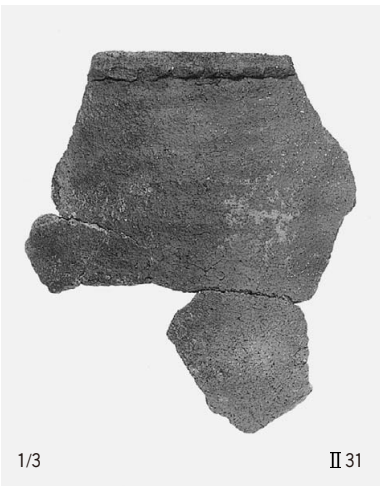
6　調査区西壁水田畦畔断面（東から）

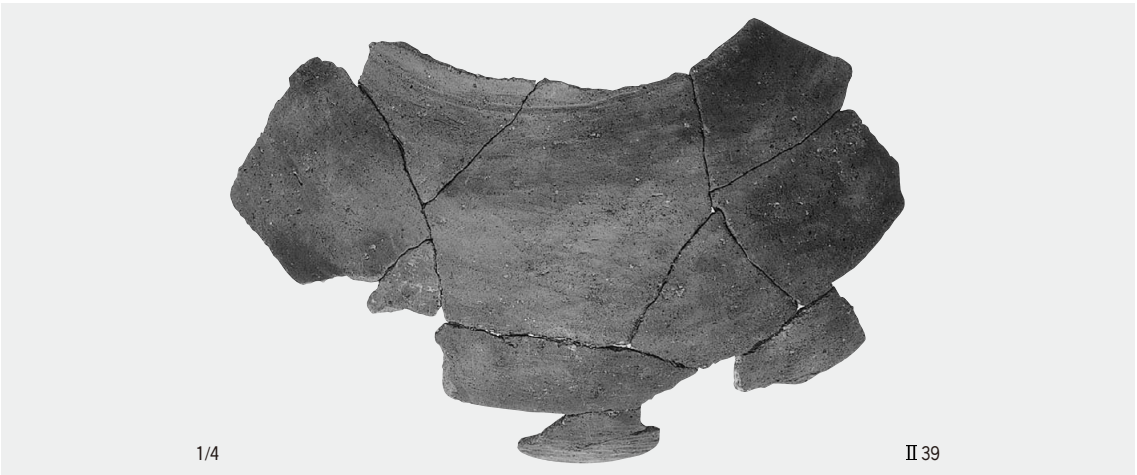
図版三五　京都大学北部構内ＢＣ28区



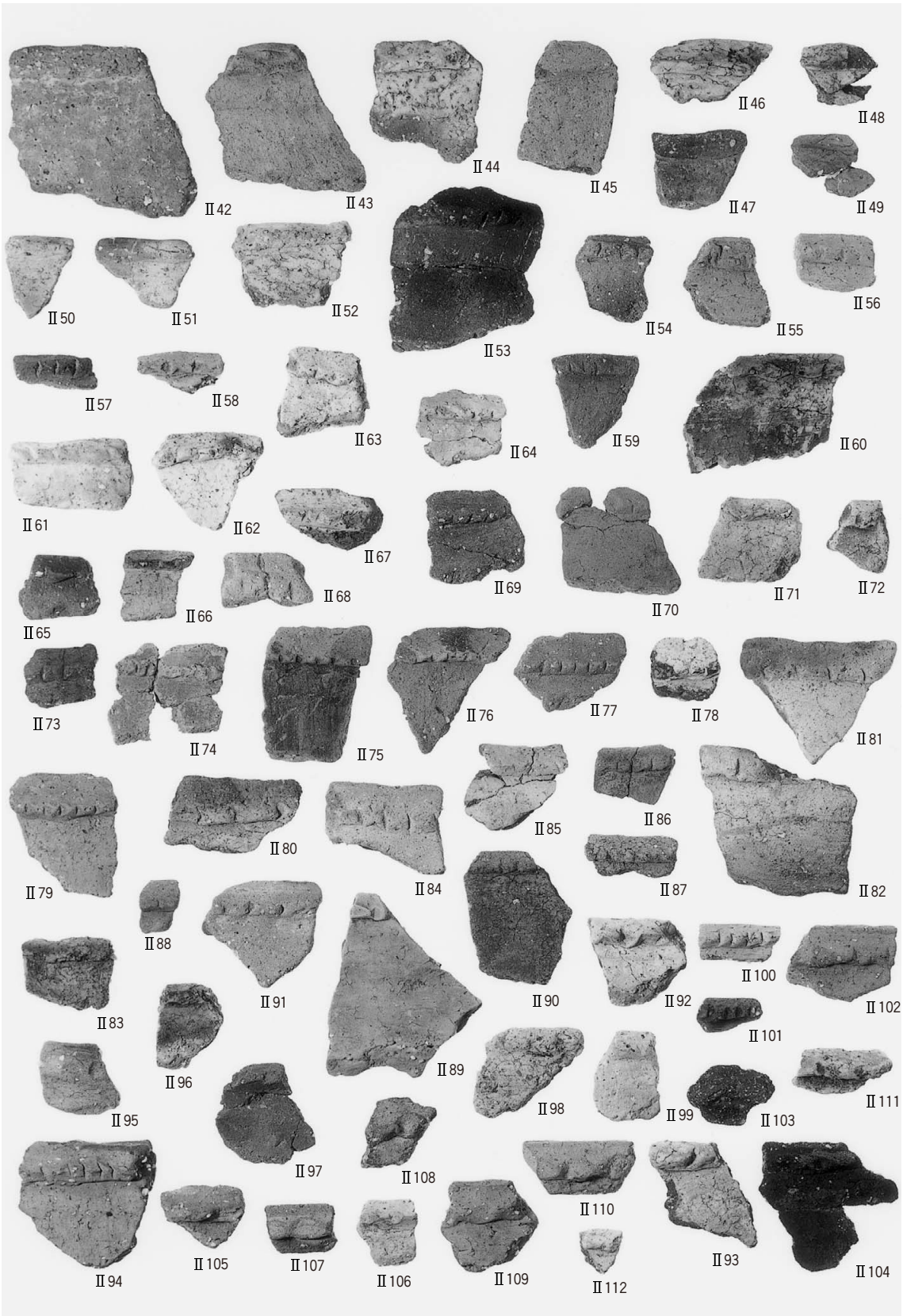
縄文後期の土器（Ⅱ１～Ⅱ９）
縄文晩期の土器(1)（Ⅱ10～Ⅱ12・Ⅱ20～Ⅱ23素縁深鉢口縁，Ⅱ13～Ⅱ16素縁浅鉢口縁，Ⅱ17～Ⅱ19浅鉢胴部，Ⅱ24～Ⅱ28突帯文深鉢口縁）



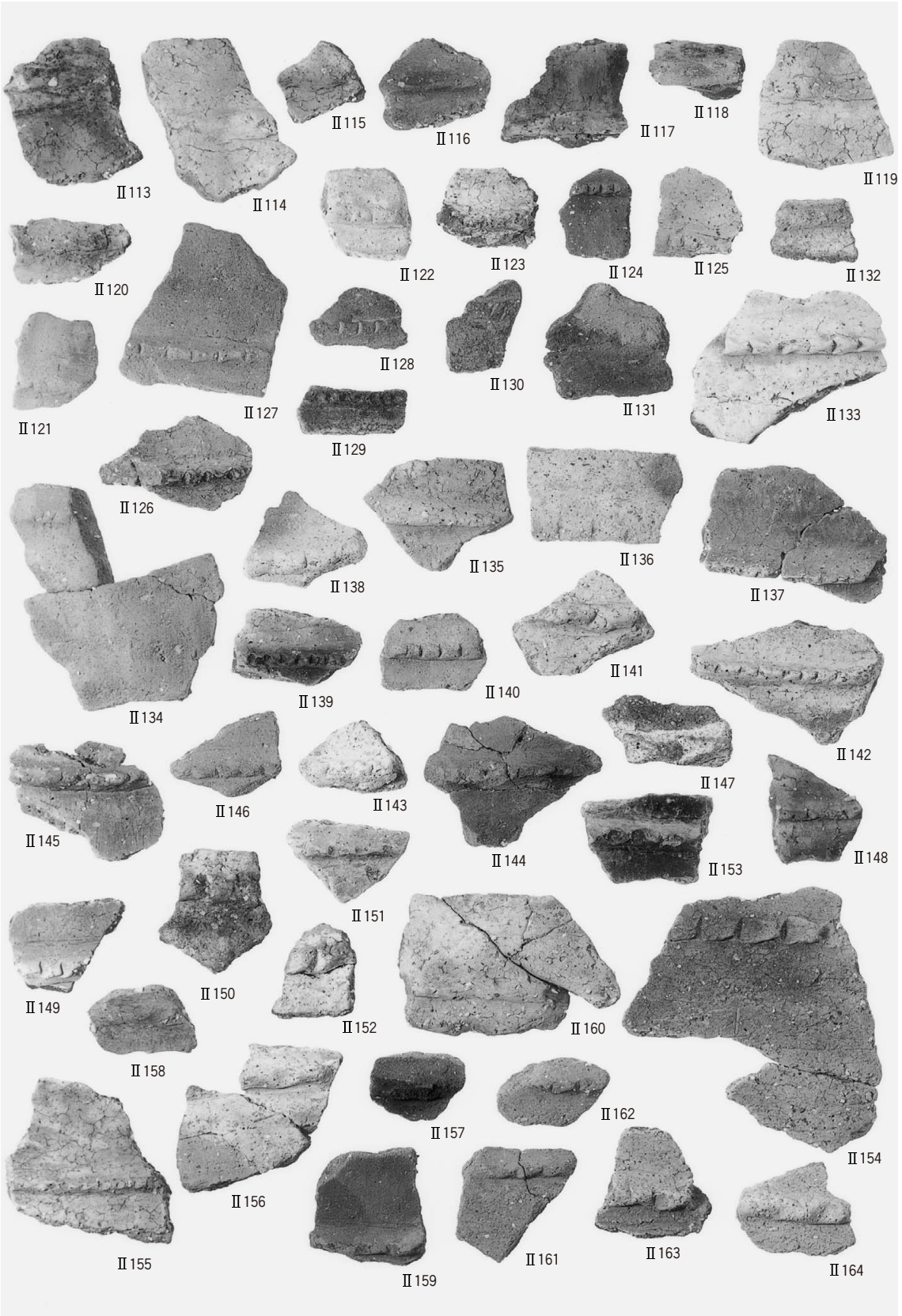




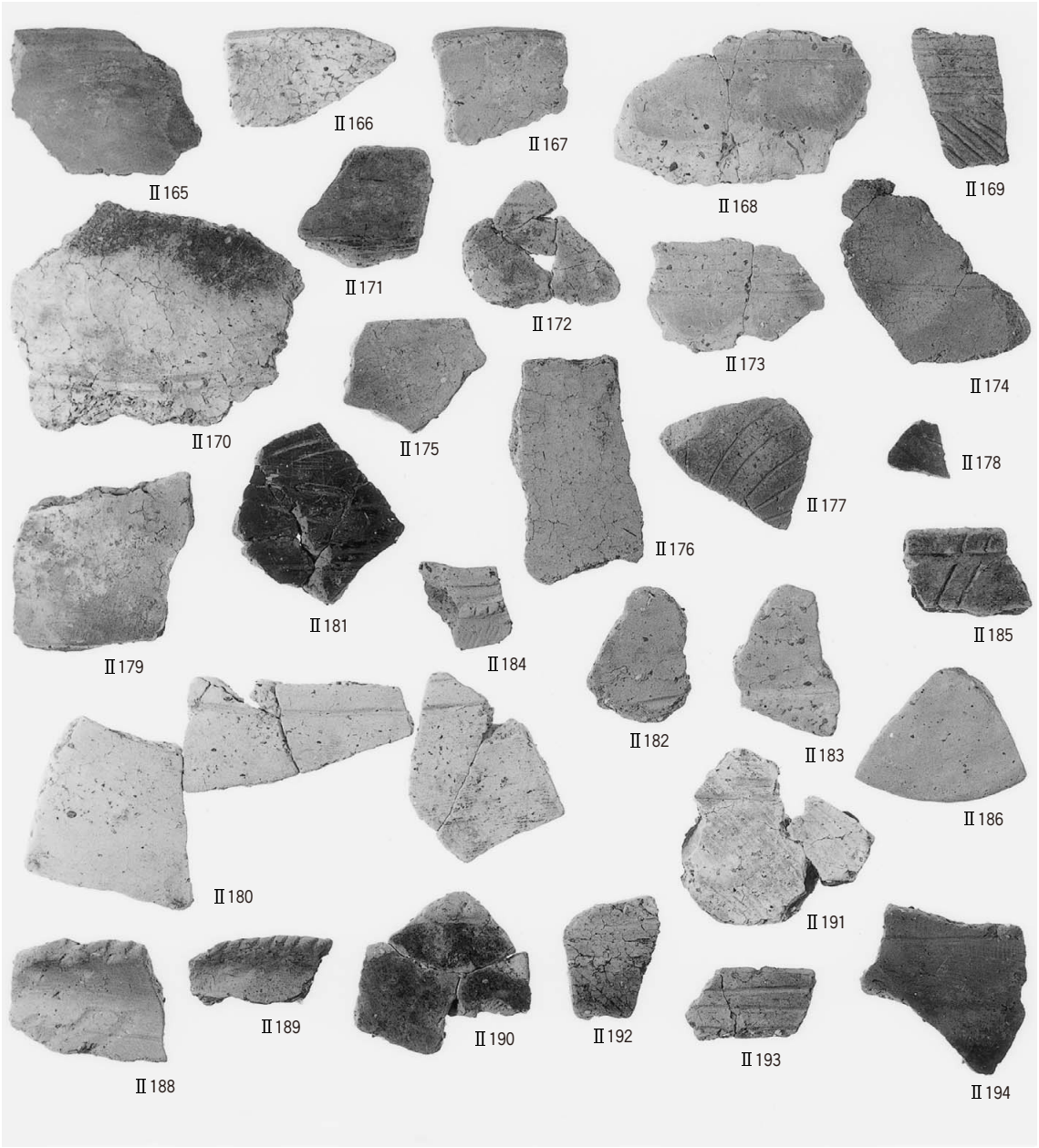
縄文晩期の土器⑵（Ⅱ29～Ⅱ35・Ⅱ38・Ⅱ40・Ⅱ41突帯文深鉢口縁，Ⅱ35突帯文深鉢胴部，Ⅱ37特殊土器，Ⅱ39壺胴部）



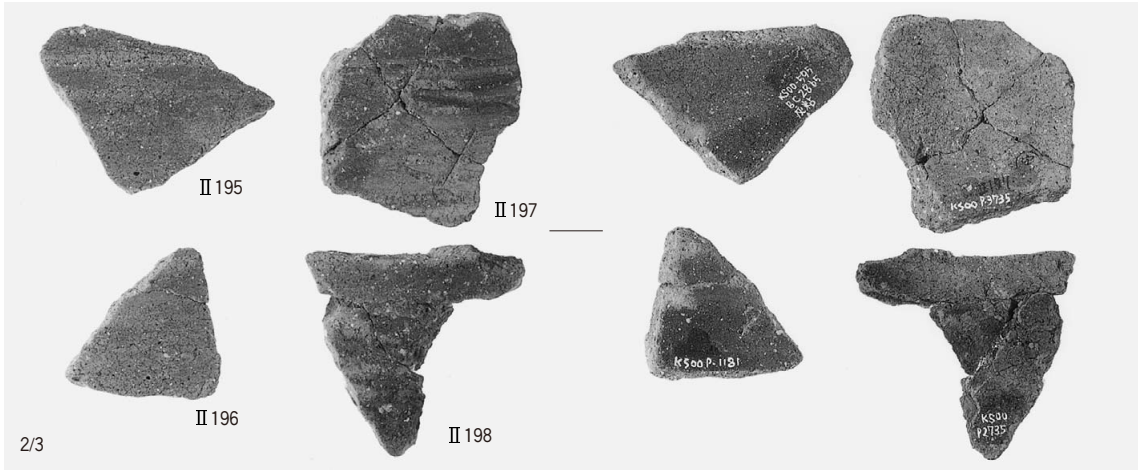
縄文晩期の土器⑶（Ⅱ42～Ⅱ112突帯文深鉢口縁部）

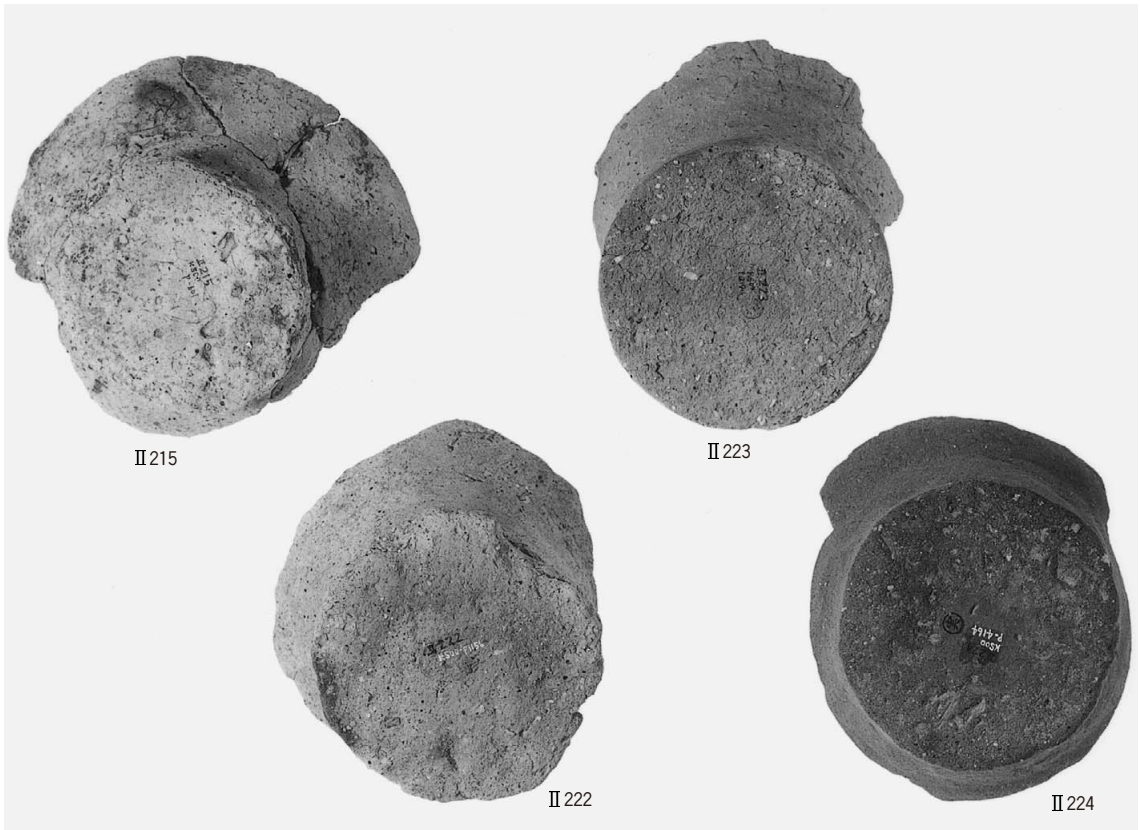


縄文晩期の土器(4)（Ⅱ113～Ⅱ164突帯文深鉢胴部）

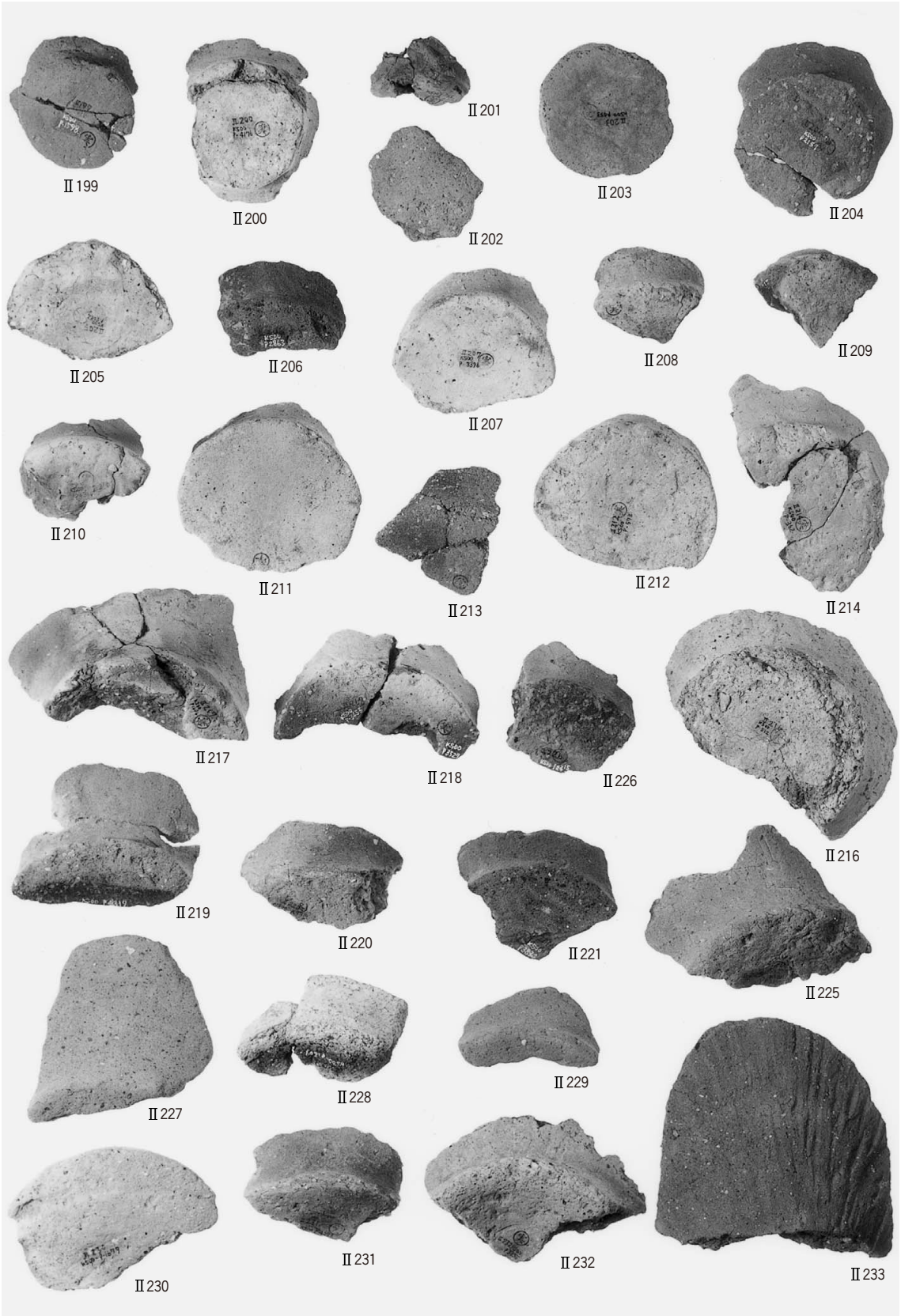


弥生前期の土器（Ⅱ165～Ⅱ185壺，Ⅱ186蓋，Ⅱ187～Ⅱ194甕）

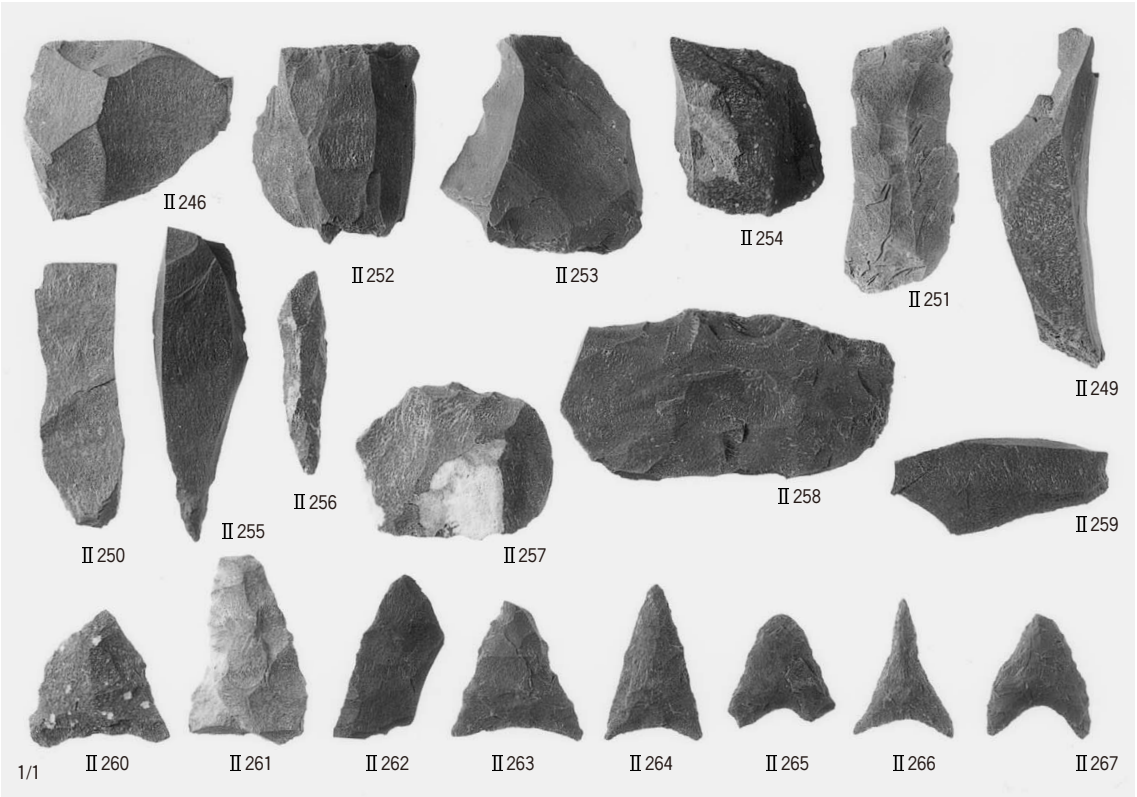




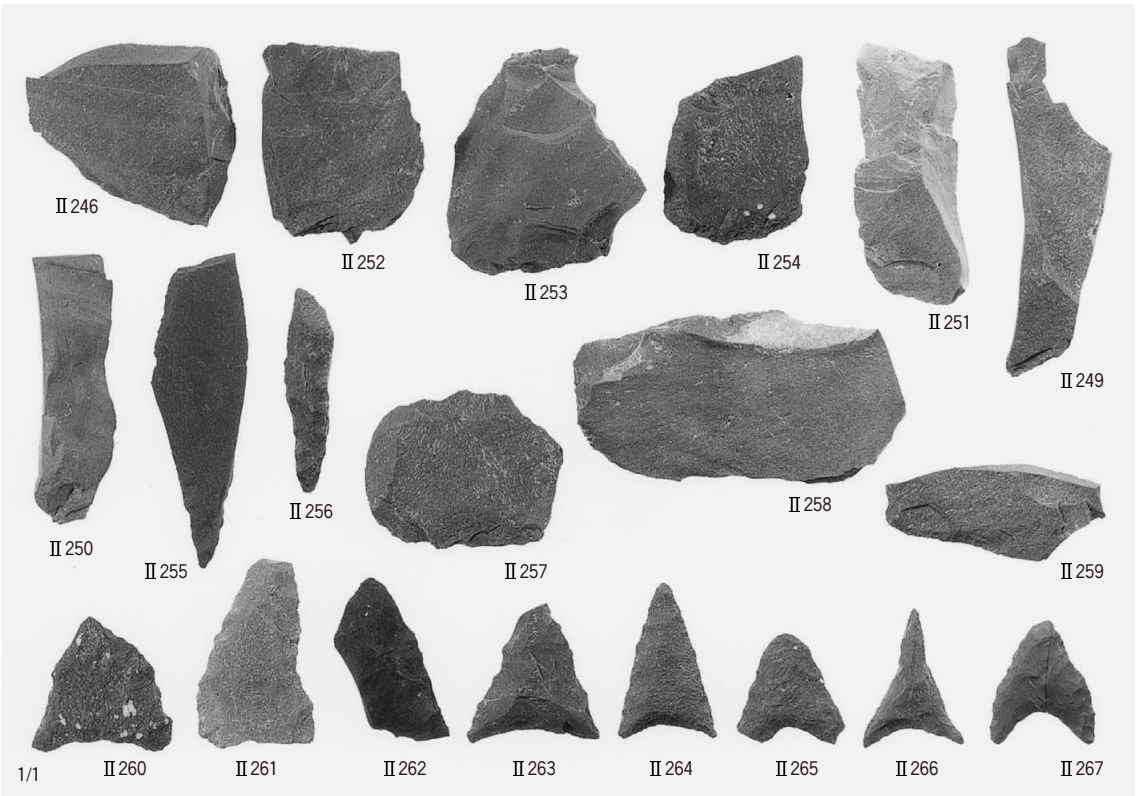
浮線文土器（Ⅱ195～Ⅱ198）
環状土製品（Ⅱ234～Ⅱ238）
縄文晩期・弥生前期土器の底部(1)（Ⅱ215・Ⅱ222～Ⅱ224）



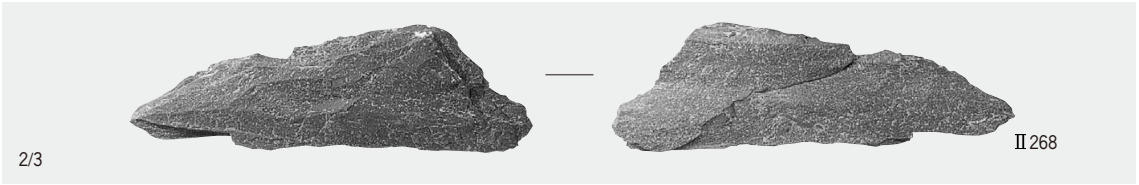
縄文晩期・弥生前期土器の底部⑵（Ⅱ199～Ⅱ214・Ⅱ216～Ⅱ221・Ⅱ225～Ⅱ233）

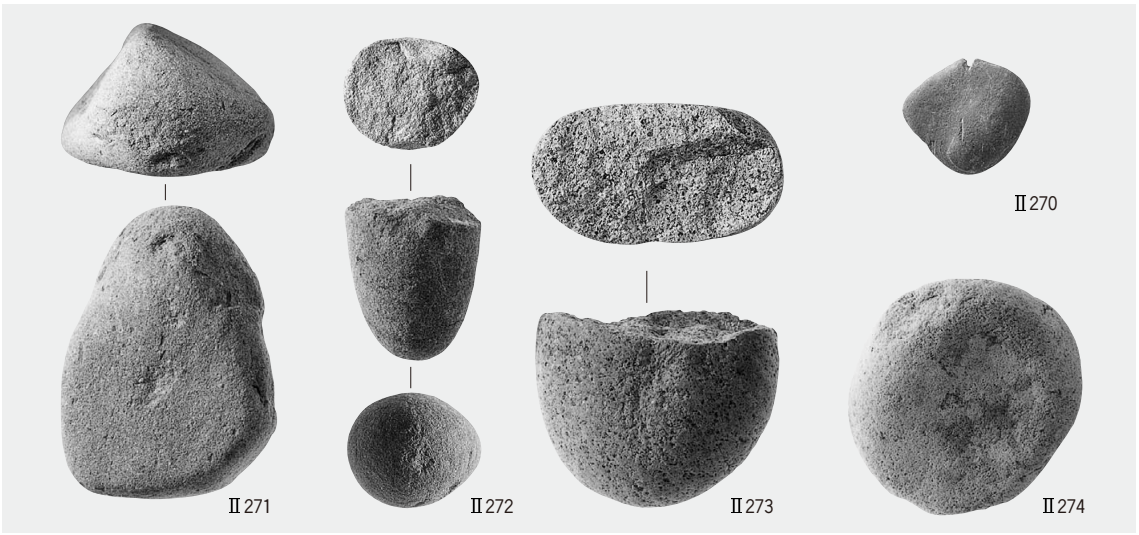


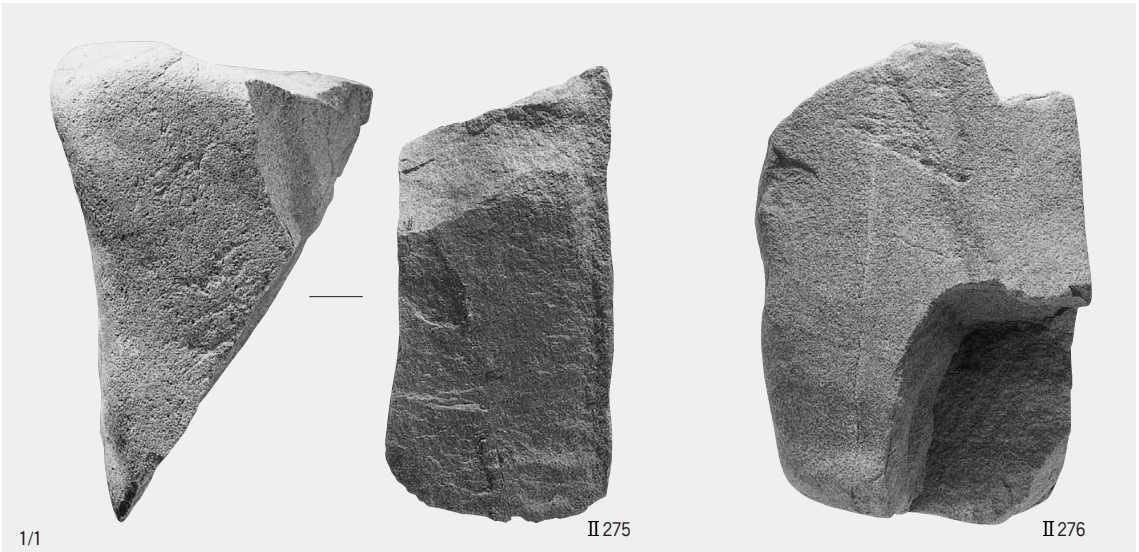
1　剝片石器（Ⅱ246・Ⅱ249～Ⅱ254石核，Ⅱ255・Ⅱ256錐，Ⅱ257～Ⅱ259刃器，Ⅱ260～Ⅱ267石鏃）



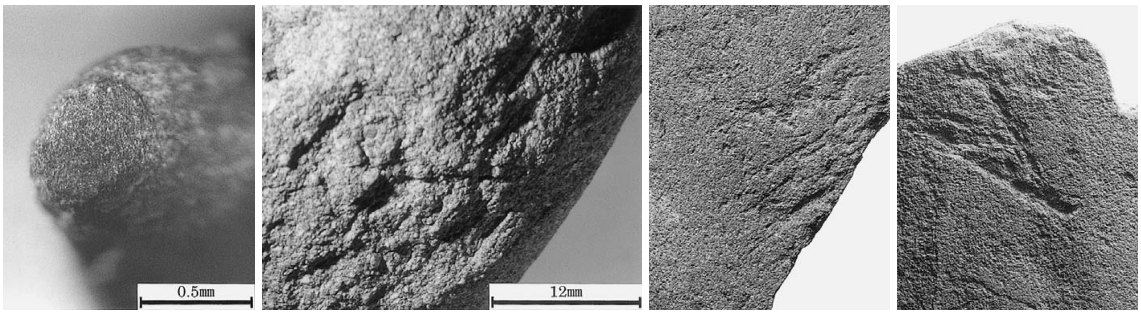
2　剝片石器（同上裏面）



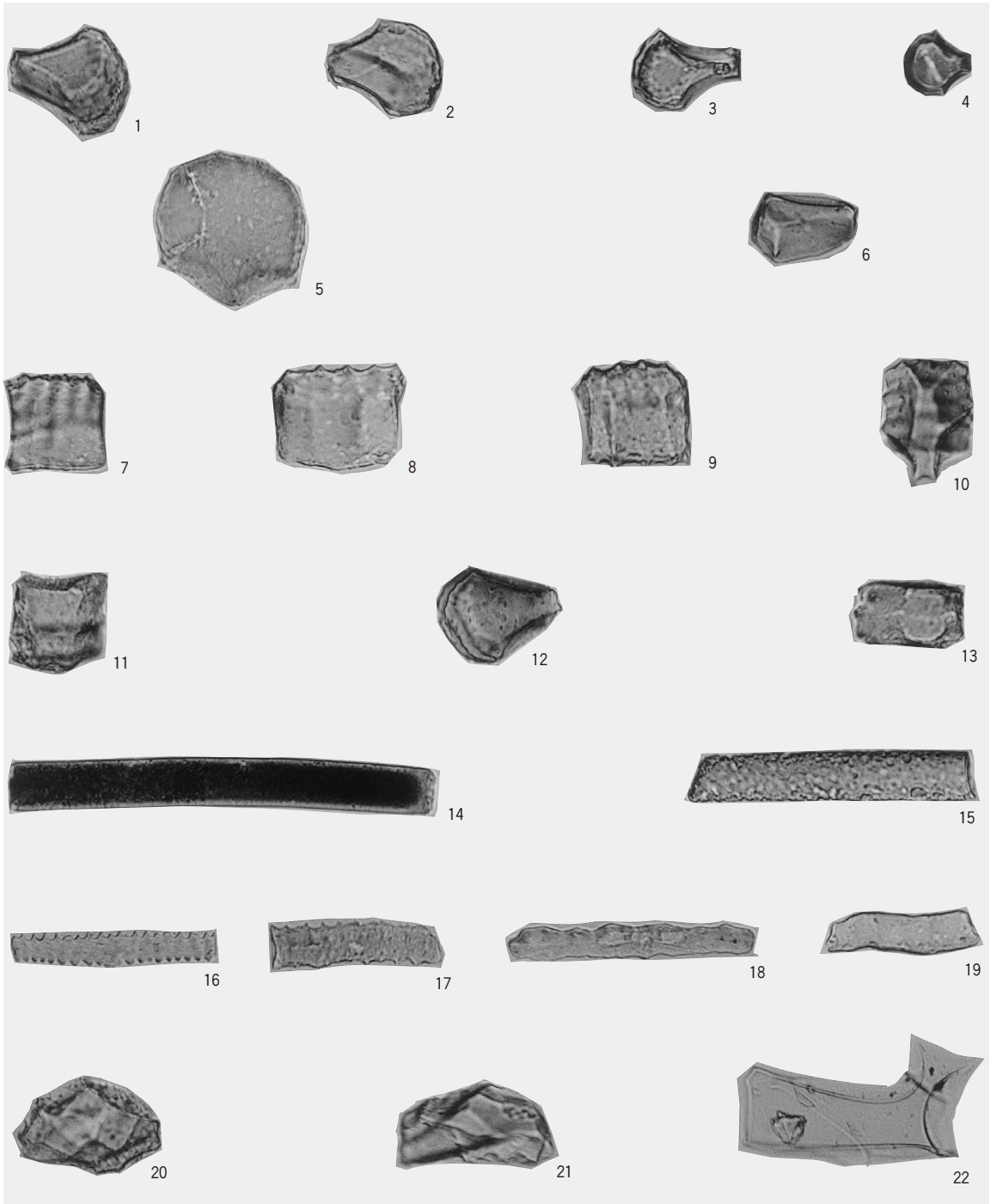




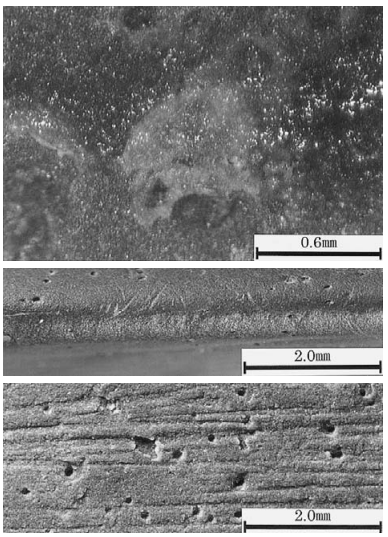
1　剝片石器と礫石器（Ⅱ268刃器，Ⅱ270石錘，Ⅱ271・Ⅱ272敲石，Ⅱ273・Ⅱ274磨石，Ⅱ275・Ⅱ276台石）



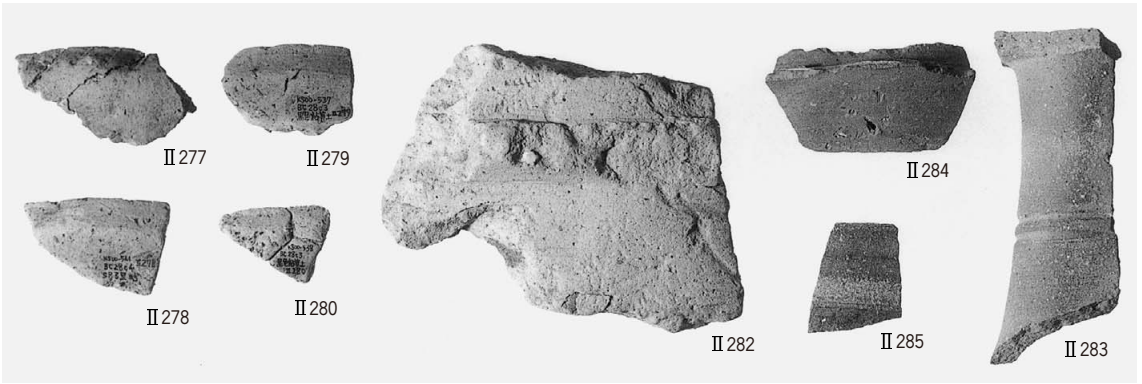
2　石器細部（左から，Ⅱ255尖端部，Ⅱ271敲打痕，Ⅱ275敲打痕，Ⅱ276敲打痕）



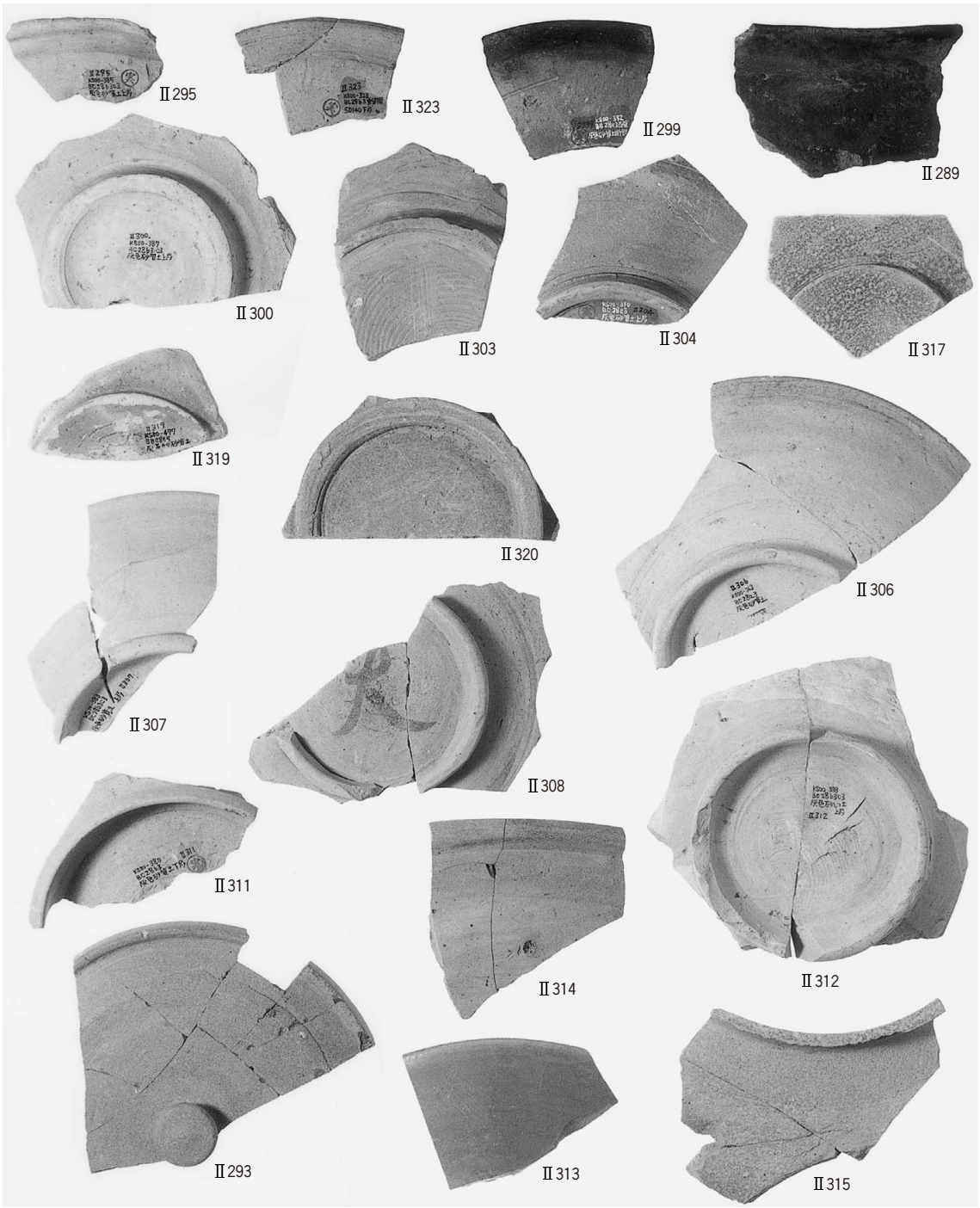
１～４イネ　５ヨシ属　６ウシクサ族　７～10ネザサ節型　　11タケ亜科Ａ型
12・13タケ亜科Ｂ型　14・15棒状細胞丸状Ａ型　16～18棒状細胞鋸歯状　19棒状細胞その他
20・21樹木起源亀甲状　22火山ガラス　（22：50倍，その他100倍）



石庖丁とその細部（右：上から，Ｂ面の磨滅光沢，刃部の線状痕，Ａ面の研磨痕）

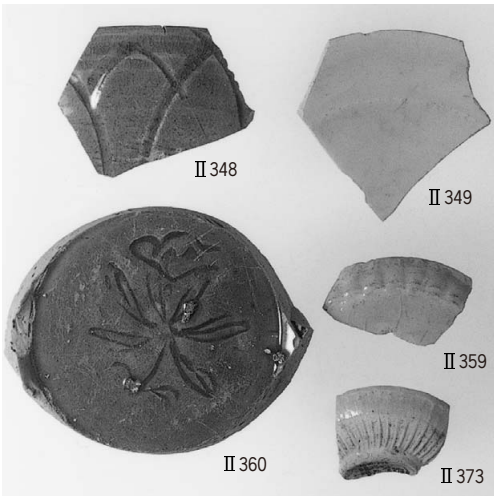


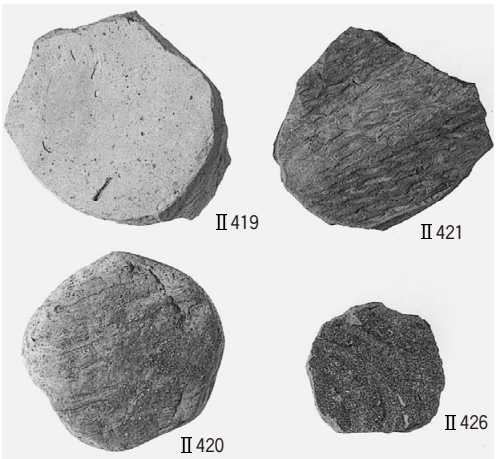
弥生中期～古墳時代の遺物（Ⅱ277弥生中期土器，Ⅱ278～Ⅱ280弥生後期土器，Ⅱ281石庖丁，Ⅱ282埴輪，Ⅱ283～Ⅱ285須恵器，Ⅱ286ＳＸ６出土弥生中期甕，Ⅱ287ＳＸ５出土弥生中期壺）

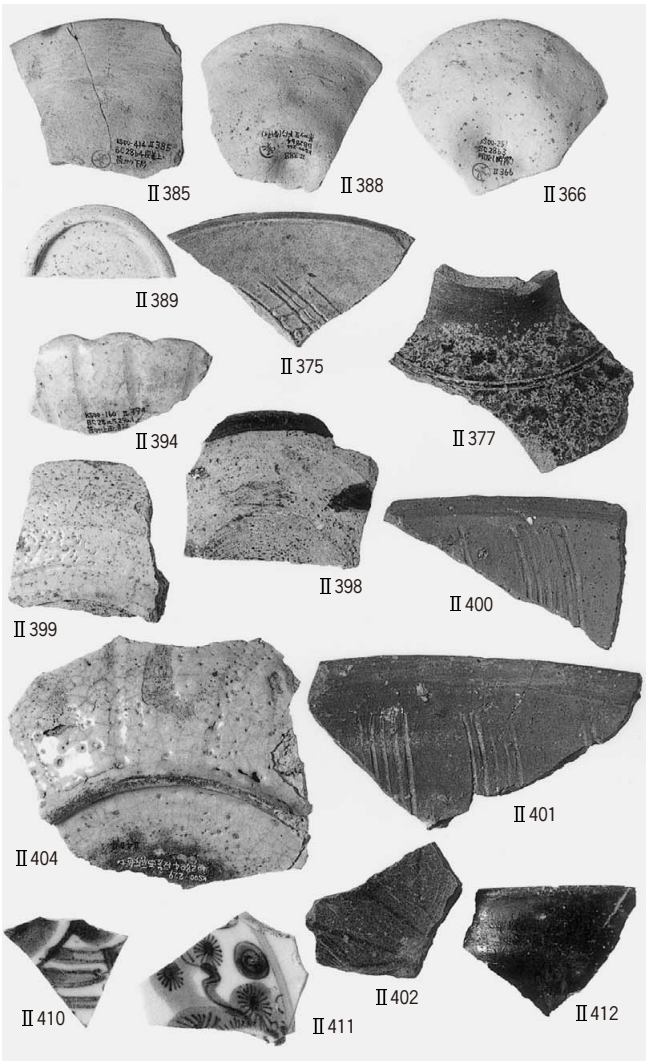


古代の遺物（Ⅱ289・Ⅱ295・Ⅱ323土師器，Ⅱ299黒色土器，Ⅱ300・Ⅱ303・Ⅱ304・Ⅱ317・Ⅱ319・Ⅱ320・Ⅱ329緑釉陶器，Ⅱ306～Ⅱ308・Ⅱ311・Ⅱ312灰釉陶器，Ⅱ293・Ⅱ314・Ⅱ315・Ⅱ330須恵器，Ⅱ313越州窯系青磁，Ⅱ326土錘）

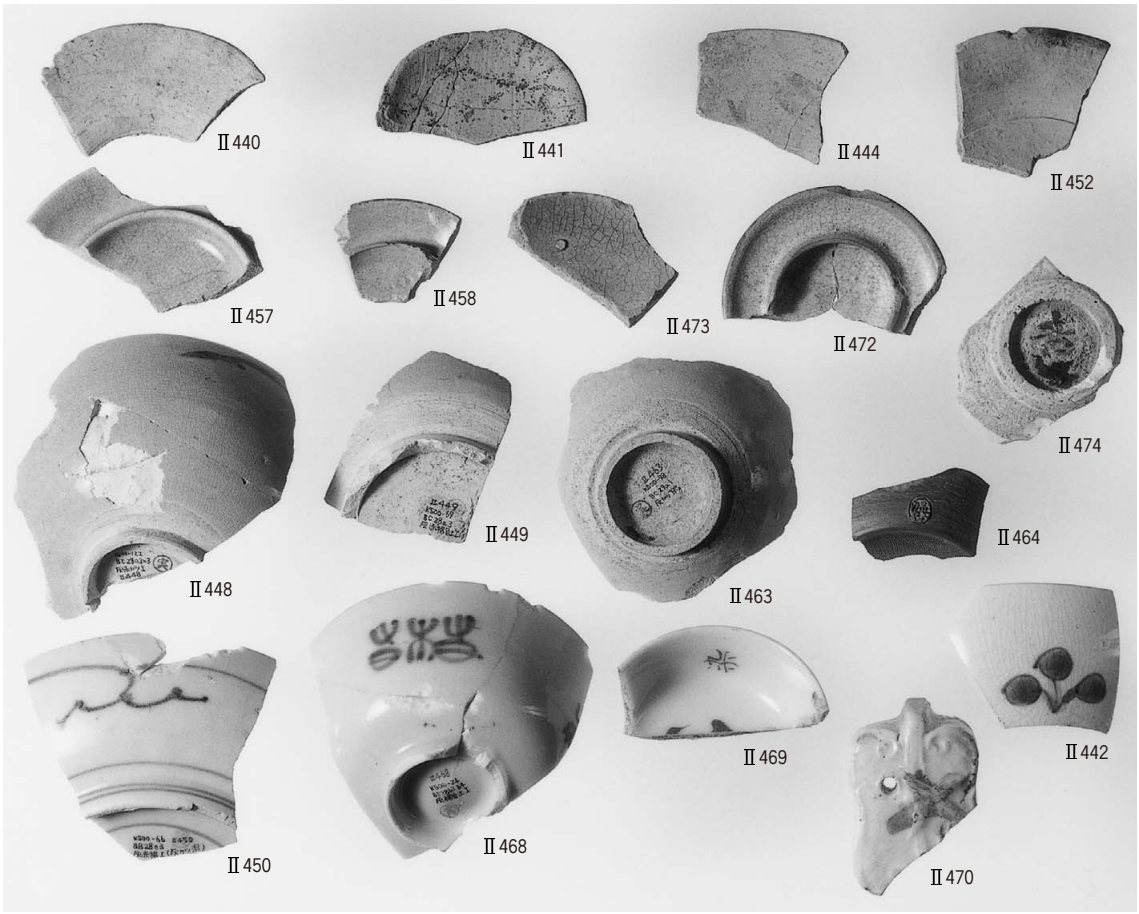
図版四七　京都大学北部構内ＢＣ28区

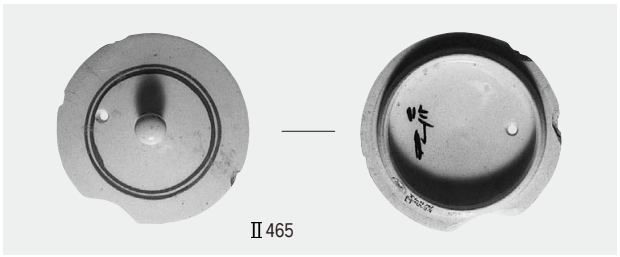


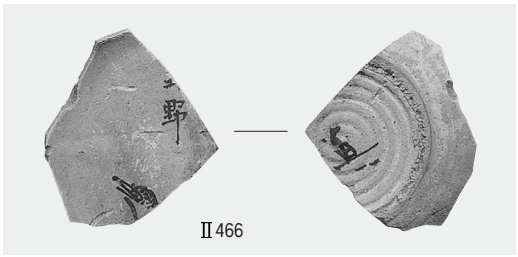




中世の遺物（Ⅱ366・Ⅱ385・Ⅱ388・Ⅱ389土師器，Ⅱ348・Ⅱ360青磁，Ⅱ349青白磁，Ⅱ359・Ⅱ373・Ⅱ394白磁，Ⅱ375・Ⅱ398・Ⅱ412灰釉系陶器，Ⅱ375・Ⅱ399～Ⅱ402・Ⅱ404陶器，Ⅱ410・Ⅱ411青花，Ⅱ355鬼瓦，Ⅱ419～Ⅱ421・Ⅱ426加工円盤，Ⅱ430滑石製温石，Ⅱ431～Ⅱ434石硯，Ⅱ435・Ⅱ436砥石，

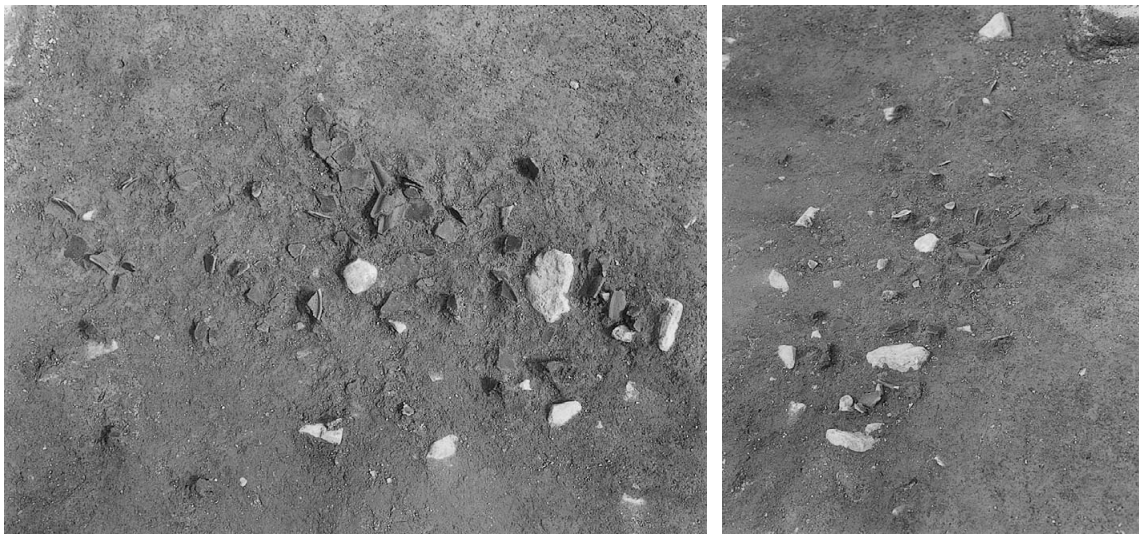




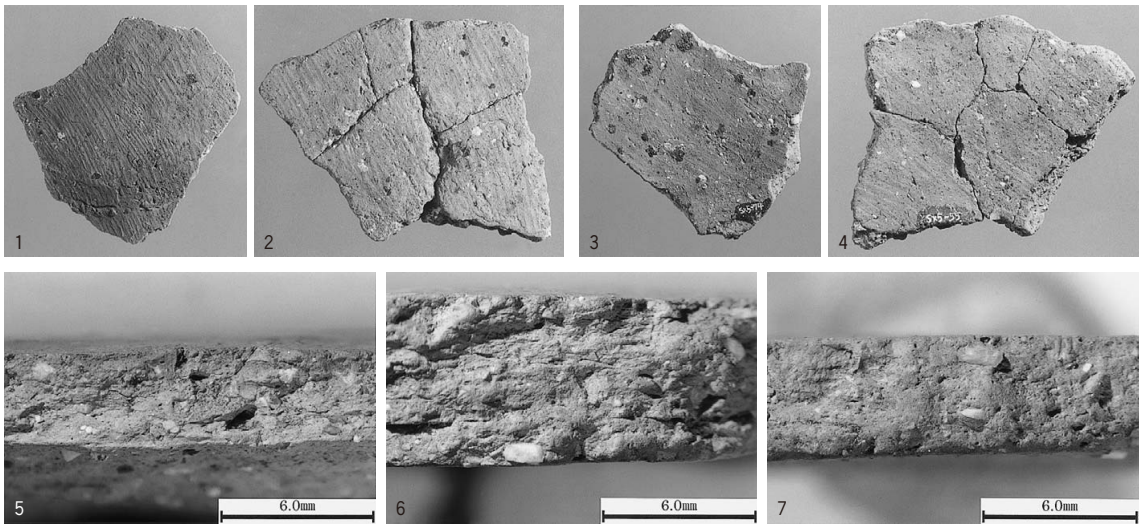


近世の遺物（Ⅱ440・Ⅱ441・Ⅱ444・Ⅱ452土師器，Ⅱ447～Ⅱ449・Ⅱ457・Ⅱ458・Ⅱ463～Ⅱ467・Ⅱ472・Ⅱ473陶器，Ⅱ442・Ⅱ450・Ⅱ468～Ⅱ470磁器，Ⅱ474軒桟瓦，Ⅱ476・Ⅱ479・Ⅱ480桟瓦刻印）

1　遠景（左：西から）・ＳＲ１断面（右：西から）

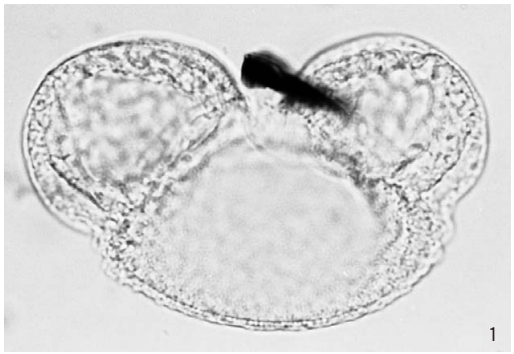


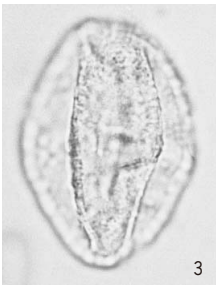
2　近景（左：南から，右：東から）

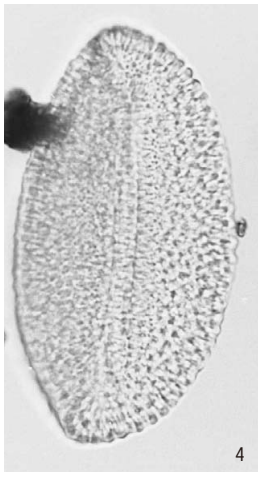


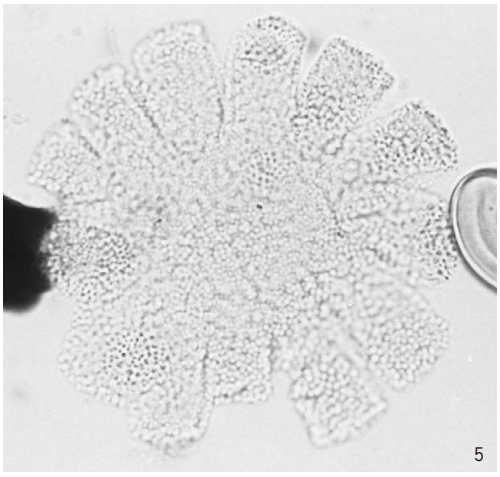
3　土器片遺存状態（１：状態Ａの外面，２：状態Ｂの外面，３：状態Ａの内面，４：状態Ｂの内面，
５：状態Ａの破断面，６：状態Ｂの破断面，７：状態Ｃの破断面）

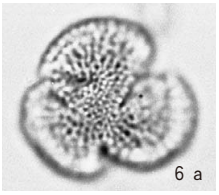
ＳＸ５の原位置論的検討

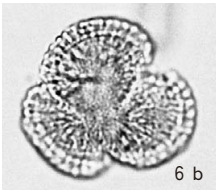


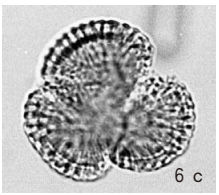


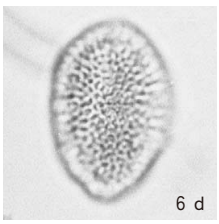


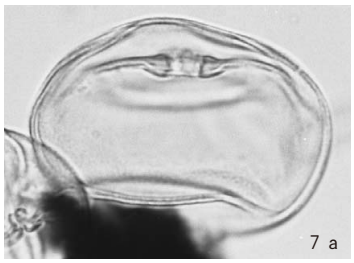


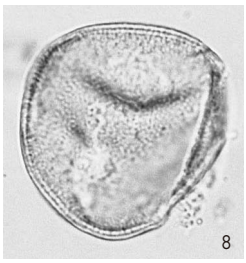


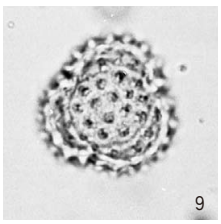


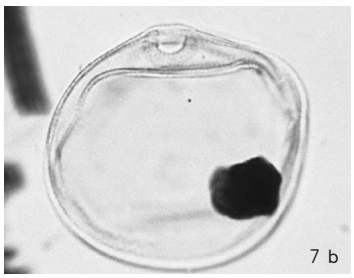


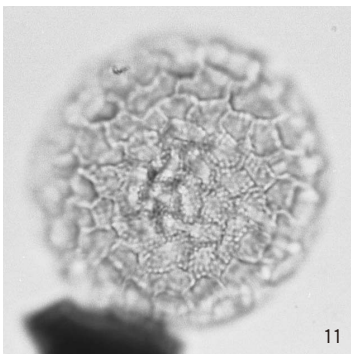












１マツ属（複維管束亜属，試料番号７）　２スギ（試料番号７）　３コナラ亜属（試料番号19）　４ソバ属（試料番号７）　５ゴマ属（試料番号38）　６ａ～６ｄアブラナ科（ａ～ｃ試料番号19，ｄ試料番号７）　７ａ・７ｂイネ属（ａ試料番号7，ｂ試料番号１）　８カヤツリグサ科（試料番号７）　９キク亜科（試料番号38）　10ナデシコ科（試料番号７）　11タデ属サナエタデ節- ウナギツカミ節（試料番号19）

中近世層検出の花粉

2005年３月31日　発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2000年度

編集
発行　京都大学埋蔵文化財研究センター
京都市左京区吉田本町

印刷
製本　三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300